

仮面ライダーディケイド
ド ～The Darkness
History～

萃夢想天

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『仮面ライダー』の歴史の闇に消えた一人の戦士 「仮面ライダー3号」

歴史を塗り替える程の彼の力は、全てのライダー世界に影響を与えていた。

世界の破壊者、再び！

全てを破壊し、全てを繋ぐ、終わらない旅が始まる……!!

目次

Ep, 00	『Missing Ray』	1
Ep, 01	『NEW TRAVEL』	13
新たな旅〜		
Ep, 02	『BLADE、s World』	25
〜バトルファイト〜		
Ep, 03	『FRONT or LIA』	33
〜表の世界の裏〜		
Ep, 04	『JOKER of JOK』	46
〜切札〜		
Ep, 05	『KING on the BOARD』	59
〜王の盤上〜		
Ep, 06	『ELEMENT』	76
〜心に剣〜		
Ep, 07	『WILDCARD』	90
〜逆襲の切札〜		
Ep, 08	『LASTCALL』	110
〜駆け引き〜		
Ep, 09	『REVOLUTION』	136
〜覚醒〜		
Ep, 10	『EXCALIBUR』	157
〜人類の希望〜		
Ep, 11	『LIGHTNING』	175
〜奇跡〜		
Ep, 12	『KABUTO、s WORLD』	

EP, #『THE OUT NUMBER』	386
EP, 17『LOAD OF』	351
EP, 16『ENDING REVERS』	327
EP, 15『WHITE NIGHT』	290
EP, 14『HUNTING TIME』	265
EP, 13『WIND RHAPSODY』	235
D 『カブトの世界』	197

EP, #『THE OUT NUMBER』	403
EP, 18『THE SPEED』	411
EP, 19『EVERYONE、s SU』	437
EP, 20『SUNRISE』	466
EP, 21『HELL BROTHER』	496
EP, 22『PERFECT HARMO』	510
EP, 23『NEXT LEVEL』	光
R 『番外2』	
EP, 18『THE SPEED』	最速
EP, 19『EVERYONE、s SU』	
EP, 20『SUNRISE』	俺が正義
EP, 21『HELL BROTHER』	
EP, 22『PERFECT HARMO』	
EP, 23『NEXT LEVEL』	光

差す道へく』	—	—	540
E P, 24 『Wの世界』	／	破壊者の来	
訪』	—	—	588
E P, 25 『Wの世界』	／	街を泣かせな	
い男』	—	—	613
E P, 26 『Aの消失』	／	不思議な依	
頼』	—	—	652
E P, 27 『Uを探せ』	／	一年半前の悪	
夢』	—	—	678
E P, 28 『Fの共闘』	／	過去の来襲』	
—	—	—	721
E P, 29 『Jは見た』	／	仕組まれた戦	
い』	—	—	758
E P, 30 『恐怖するC』	／	暴かれる	
謎』	—	—	789
E P, 31 『目覚めるL』	／	テロ事件再	
び』	—	—	826
E P, 32 『Rの覚悟』	／	風都防衛戦』	
—	—	—	868
E P, 33 『Nを継いだ者』	／	忍び寄	
る終焉』	—	—	901
E P, 34 『Sが守るもの』	／	風都が愛	
した男』	—	—	927
E P, 35 『Eの為に』	／	ただ独りの英	
雄』	—	—	950
E P, 36 『Tの狙撃』	／	カウントダウ	

ン・ナウ』

984

E P, 37 『戦慄のD / 最終局面』

1009

E P, 38 『集結するG / 風の都の

守り人』

1033

E p, 0 0 『M i s s i n g R a v e n 』

「仮面ライダー」

それはいつだって、子供達に夢を与える希望の象徴だった。
それはいつだって、悪に屈せず正義を貫く者の称号だった。
それはいつだって、強き力と心を備えた戦士の証明だった。

あの時まで

とある荒野を、2台のバイクが駆けてゆく。

その背に、人の形をした人ならざる戦士を乗せて。

風になびく赤いスカーフ。

四肢に伸びる緑のライン。

胸部を守る厚いアーマー。

そして、頭部を覆うヘルメット。

世に蔓延る悪を倒し、自らの内に燃える正義の為に戦う戦士達。

人々は彼らを、『仮面ライダー』と呼んだ。

しかし、彼らは元々、世に蔓延るべき悪となる為に

「ショッカー」という悪の秘密結社の科学者の手によって生み出された存在。

「仮面ライダー1号」こと「本郷 猛」と「仮面ライダー2号」こと「一文字 隼人」の二人は

本来ならば、「ショッカー」に誘拐され、『バッタ型の改造人間』となるはずだったのだ。

しかし、脳の改造手術の直前で脱走した本郷は、自らを改造人間に仕立て上げた「シヨツカー」の野望を知り、それを止める為に死闘へと身を投じた。

一文字もまた、本郷と同じ経緯で攫われたが、脳改造手術の寸前で現れた本郷に救われ、世界の平和を守ろうと奮闘する本郷と共に戦う道を選んだのだった。

そして、今

彼らは、遂に「シヨツカー」の最後のアジトを突き止め、潜入。

秘密結社のトップ、諸悪の根源である「大首領」の最期を見届けた後に、自爆プログラムが作動したアジトから脱出した直後だった。

背後から、地面を揺るがすほどの爆音が響く。

本当の本当に、長かった彼らの戦いが終わったことを告げるゴングのように思えた。

「とうとう……………やったんだな、本郷」

「ああ……………シヨツカーの最期だ。今度こそ、本当にな」

「そうだな……………勝ったんだよな、俺達」

「正義は必ず勝つ。……我々の中にある魂せいぎの勝利だ」

二人はバイクのエンジンを吹かしながら、今までの戦いの日々を思い返していた。

だから、気付くのが遅れた

いつの間にか、荒野の端の方まで来ていた二人の前方に車が一台。こちらにかなりのスピードで向かって来る。

車のボディに施されたカラーリングは、奇しくも二人の乗るバイクと非常に似ていた。

前部の白いフレームも、ボディからマフラーにかけて奔る赤いペイントも。

鈍く輝くメタリカルな『シヨツカーマーク』以外は

シヨツカーのシンボルマークを認識した直後に、地面が爆発した。

たのだ。

否、前方から来るマシンに装備された機関砲が、二人を狙って放たれ

「本郷!!」

「おう！ 行くぞ隼人！」

互いを呼び合い、即座に意思を疎通し、行動に移る。

バイクから同時に飛び降りた二人は、まず敵を確認しようとした。

すると、敵のマシンの速度が徐々に下がり、二人と少し距離を開けて止まった。

ドアが開き、運転手がマシンから降りる。

右足がゆつくりと大地を踏み締める。

足首に付けている鎖が、シャラン…と静かに鳴る。

二人の前に現れた謎の敵、それは予期せぬ相手だった。

「バカな……………!!」

「仮面…………ライダー、なのか？」

二人の声は、明らかに動揺していた。

これまでも、「シヨッカーライダー」という二人の偽物は現れていた。

姿かたちは瓜二つで、スカーフの色などの僅かな違いでしか見分けがつかないほど精巧な改造人間達だった。

だが、目の前にいる敵は、全く違う。

全身の色合いも、マスクの形状も、何もかもがだ。

それでも、辛うじて分かる事はあった。

強い

本郷と一文字は、今まで体験してきた者達とは

一線を画した凄まじい強さを、この距離で感じ取った。

二人が攻めあぐねていると、向こうから声をかけてきた。

「――僕は、『仮面ライダー3号』……。お前達を倒すために生まれてきた!!!」

そう言い終わった直後、既に1号と2号は『3号』を名乗るライダーに殴りかかっていた。

「とうツツ!!!」

空中でほぼ同時に繰り出された「ライダーパンチ」。

それを3号は右方向への素早いステップで躲し、即座に振り上げた左足で2号のガラ空きの脇腹を貫いた。

「ぐあアアツ!!!」

「隼人!! うぐツ!!」

当然、直線上にいた1号もろとも吹き飛ばす。

だが、空中ですぐさま体勢を立て直した1号は2号を抱えて着地した。

「スマン、本郷……」

「油断するな、来るぞ!!」

追い打ちをかける為に、既にかなり近づいてきた3号に対して

戦闘の構えを取り直し、迎え撃とうとする二人。

「フツ……そうやって気取っている。偽りの英雄共め!!」

駆けだした3号に、得意の接近戦へ持ち込もうとする2号。

構えた右拳を顔面狙いで前に向かって打ち出す。が、身体を左へ反らされて当たらない。
い。

お返しとばかりに3号が繰り出してきた右足の蹴りを、左足を曲げ、脛の部分でガー

ドする。

2号は振り返した右手で薙ぎ払うが、3号はしやがんで回避する。素早く立ち上がる勢いをのせた3号のアップアが、2号の顎を打ち抜いた。

「隼人!!」

「待っていろ1号、すぐにお前の番になる……」

崩れ落ちる2号を横目で見ながら、標的を1号へと変える3号。

先程までの「シヨツカー」との最終決戦で受けたダメージがまだ残っている1号と2号。

戦う為の気力も体力も、既に限界だった。

それでも、

「行くぞ、隼人!!!!」

「おうよ、本郷!!」

「何ッ!!?!!」

最後まで諦めないのが『仮面ライダー』なのだ

天高く飛び上がった1号と2号。

1号は脚に、2号は腕に、残された全ての力を注ぎ込んだ。

「ライダーキイック!!!!!!」

「ライダーパアアンチ!!!!!!」

再び同時に繰り出される、蹴りと拳。

3号は二方向からやって来る攻撃にたじろいだ。

が、それでも結果は変わらなかった。

「とうウツツ!!」

1号と2号よりも遙かに高く飛び上がり、二人が3号のいた場所へ全てを掛けた技を届かせた頃、3号は既に繰り出していたのだった。

「せええええいツツ!!!!!!」

ライダーキック
最後の止めを。

「ぐああああアアアツツ!!!!!!!!」

壮大な轟音と共に、散っていった二人の戦士。

そして、
歴史せかいがま変わった

E P, O 1 『NEW TRAVEL へ新たなる旅へ』

夢を、見ていた。

鳴り止まない爆発音。

幾度も飛び交う怒号。

戦士達の痛烈な悲鳴。

その中心には、いつも一人の『悪魔』が立っていた。

全身を染め上げる、色褪せた返り血の如きマゼンタカラー。

淡く、だが決して弱くは無い光を帯びたグリーンの両眼。

胸部から左肩を、斜めに貫いた十字架のような黒白のライン。

両腕と両足の内側に映える、ボディと対照的な白いカバー。

「……………ハ、の…………『悪魔』め……………」

爆音と共に吹き飛ばされた仮面の戦士の一人が、心の底から憎しみをぶつけるように吐き捨てて倒れた。

それつきり動かなくなってしまうたその戦士を、

『悪魔』はしばらく見つめていたが、

誰に言うでもなく、こう言った。

「……………か弱い者は、自らが及ばぬ存在をいつも、想像上にししか

存在しないものに例えたがる…。もう聞き飽きたな……………」

そう言っつて、目的も無くただ歩き出そうとした、その時

「待ちやがれ、そのこのピンクの!!」

「……………アレはピンクではなく、マゼンタだよ翔太郎」

「どっちでもいい!! おいアンタ、よくも俺の友達をこんなにしやがったな!!」

「……………アンタには一度救われたが、人の希望すら『破壊』するんなら、見過ごせないな」

「貴方の『破壊』は、『欲望』でもなんでもない…。ただのエゴなんだ……。」「どんな相手とだって分かり合えるのにただ壊すだけなんて、絶対間違ってる!!」

切り立った断崖の上に、五人の戦士が並び立っている。

一番手前が、頭から緑と黒の二色で分けられた戦士。

その左には、白がベースの尖った頭の若そうな戦士。

少し奥には、頭部から全身に宝石をちりばめた戦士。

更に右側に、上から赤、黄、緑の三色で揃えた戦士。

一番最後に、オレンジ色の武者鎧を被っている戦士。

「フン……さっさと降りてこい。粉々に『破壊』してやる……お前らの『世界』ごとな
!!」

そして五人の戦士の蹴りが、一人の『悪魔』に向かって放たれた。

「うああ！！！！……………ああ？」

と同時に、目が覚めた。

全身を汗でグッショリと湿らせたシャツに不快感を覚えたからか。

それとも……………今見た夢のせいなのか。

「しかし、誰だったんだ？最後のあの五人……………ライダー、だよな？」

目覚めたばかりの脳をフル回転させ記憶を引き出すも、やはり彼らと一致する『仮面ライダー』はいなかった。

「あ、^{つかさ}士。起きてたのか？」

「……………ついさつき、な」

「うわ、汗びっしょびっしょじゃんか！！……………寝ながら腕立てでもしてたのか？」

有り得ない方向に見当違いなことを言いだした彼は、

『仮面ライダーダークウガ』こと、『小野寺 ユウスケ』。

突然始まったディケイドの旅で、一番最初にであった仮面ライダーであり、今やこの『光 写真館』の居候第2号となっている。

では、記念すべき1号は一体誰なのか？

「いくら俺が器用に何でもこなす男でも、そんな残念な器用さは要らん」

茶髪がかつたヘアカラーに、汗で張り付いたストレートヘア。

キリツと凛々しく上がった眉に、張りのある血色のよい肌。

彼こそが、『仮面ライダーディケイド』である『門矢 士』その人だ。

何処からともなくフラツと現れて、何故か写真館に居着いてしまった男。

本人には、居候になる前の記憶が無く、唯一の手掛かりは愛用のカメラだった。

二人が朝の挨拶代わりに色々言い合っていると、

二階から階段を下りてくる足音が聞こえてきた。

「あ、土君。起きてたんですね」

「おはよう夏ミカン。悪いがシャワー貸してくれ、今日はやけに代謝が良くてな」
汗ばんで着心地の最悪なシャツを脱ぎ捨てつつ、土は朝一のシャワーを要求した。

「誰がミカンですか！ ってちよつと、此処で脱がないでください!!」

顔を覆い隠しながら悶えている『夏ミカン』と呼ばれた彼女は、

『光 夏美』。この二人の居候している『光 写真館』の館長の愛する孫だ。

ダイケイドの旅に巻き込まれ、様々な困難を乗り越えてきた彼女は
味方としてはもはや充分心強い存在だろう。

「コラ土君。ダメじゃないか、脱いだらちゃんと畳まなきゃ」

「信頼出来る主夫がいるから問題は無い。今日もイイ仕事期待してるぜ、爺さん」

「え？ そ、そう？ よおしくし、頑張っちゃおっかな」

「何でちよつと嬉しそうなんですか!! もう、おじいちゃんつてば!!」

その愛する孫に怒鳴られている初老の男性は、『光 栄次郎』。

デイケイドの旅の拠点である『光 写真館』の館長であり、写真撮影からこだわりのコーヒー、果てはスイーツ作りの名人でもある。

「そう言えば栄次郎さん、アレってどうなりました？」

「アレ？ ああ、背景^{バック}フィルムの事ね。それがさっぱり」

「んん、気分爽快。確かにさっぱりしたぜ」

「ううん、違うの土君。そっちじゃなくって、あっちの方だよ」

「ああ、アレまだ直らないのか」

「そうなんだよ。僕も早く次の世界でお茶菓子作りたいのに」

いつもデイケイドの旅は、この『光 写真館』1階中央の

撮影機材の置いてある部屋の背景フィルムを降ろすことで

ようやくその行き先が決まる仕組みになっていた。

何故そうなのかは誰にも分からないのだが。

つまり、それが降ろせない今、デイケイドの旅は

ほんの僅かな休息の時を意味しているのだ。

「でも、今度はどんな世界にいくんだろ？」

「仮面ライダーの世界はほとんど回りましたし……」

「またライダーのいない世界かもな」

「そんなの嫌です。行くならライダーのいる世界がいいです」

「夏美ちゃんの希望で行き先は変わらないと思うけど……」

「そんなのわかってます。言ってみただけです」

栄次郎の出す朝の一杯を楽しみに待ちながら、

三人は新たな世界への期待と想像を膨らませていた。

ゴ、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！！！！

突然、足元が大きな音を立てて揺れだした。

「うわ、地震だ!! 皆伏せろお!!」

「伏せてどうすんだバカ!! 机の下だ、夏ミカン早く入れ!!」

「こんな時までその呼びか——キヤア!!」

「お、お助けえ〜!!!!」

余りに突然の出来事に、誰もが慌てふためく。

だが数秒経つと、すぐに地震は収まった。

机の下から這い出る土と夏美。台所のテーブルに隠れていた

栄次郎もこちらへやって来た。

しかし、

「酷いじゃないか土!! 何で俺だけ机の下に入れてくんなかったんだよ!!」

そう、ユウスケだけは完璧に逃げ遅れていた。

いくら未確認生命体と闘い続けてきた彼でも、

自然災害には太刀打ち出来るはずもなかったのだ。

「悪いなユウスケ、この机は二人用だったんだ。諦めろ」

「だったら士が出て、俺と夏美ちゃんの二人で良かったじゃんか!!」

「終わった事でチマチマうるさい男は、離婚する確率が20%上がるらしいぞ?」

「嘘お!! ホントに!! ……………じゃなくて!!」

「まあまあお二人さん落ち着いて……………アレ?」

今にも掴み合いそうな二人の仲裁に入った栄次郎は、自分の目に移った光景に愕然とした。

「どうしたのおじいちゃん?」

「な、夏美……………アレ、アレを……………」

「栄次郎さん? どうしたんです……………か……………」

「……………コレは……………」

背景フィルムが、降りている。

そして背景フィルムはいつも、次なる世界の象徴となる絵が描かれて降りてくるのだ。

今回もまた、例外では無かった。

「何で、何でなんだ……………」

「嘘、ですよね…？何かの間違いですよね……………？」

フィルムいっぱい描かれた絵。

不規則に散らばった『トランプカード』。

カードの右上と中心に、小さな穴の開いた『ダイヤの1』^{エイス}。

カードの色が反転して、異様な程不気味な『クローバーの1』^{エイス}。

そして、色違いの『切り札』^{ジョーカー}に挟まれた『スペードの1』^{エイス}。

士が、眩く。

「
ブレイド
劍の、
世界……か？」

EP, 02 『BLADE、s
World
〜バトル
ファイト〜』

『剣^{ブレイド}の世界』

かつて士達が旅してきたライダー世界のひとつで、
人類に猛威を振るう不死身の怪物『不死^{アンデッド}なる命』と
日々闘い続けていた仮面ライダーのいる世界だった。

しかし、他の世界と圧倒的に違う点もあった。

この世界では、仮面ライダーは『職業』だったのだ。

アンデッドと日夜闘う仮面ライダーは、『商品』として
大手会社の『BOARD』に取り扱われている。

士達が次のライダー世界に到着する際には、必ず『士にだけ』その世界での『役割』が与えられる。

クウガの世界では警察官、キバの世界ではバイオリニスト、
龍騎の世界ではカメラマン

そしてかつて訪れたこのブレイドの世界では……社員食堂のチーフだった。
会社内での格付けラングが全てだった『BOARD』に、士は嫌悪感を
表していたが、結局は自分の思うように（良い方向に）替えてしまったのだ。

そして士は、その世界でのブレイド——『カズマ』という青年に、
失敗しても成功しても、共に『進化』を促しあう仲間の大切さを説き、
次なる世界へ旅立っていったのだった。

そして、今。

士達の目には、その世界でよく見た独特のトランプカードの絵柄が施されたカードの背景バックフィルムが移っている。

「士、これって……ブレイドの世界の、だよな？」

「……この『スペードの1』エース、間違いないな」

「でもどうしてですか?! ブレイドの世界はもう私達が……」

「……理由はどうであれ、着いちゃまったんならしょうがないだろ」

ぶつきらぼうに呟いた士は、座っていた椅子から立ち上がり

悠然とした足取りで外へと出て行ってしまった。

「士君! 何処に行くんですか?!」

「お前らも早く来いよ。俺の貴重な早着替えを見逃すぞ?」

「早着替えって……ああ! この世界の『役割』! 見たい見たい!」

「ユウスケも! ああもう、待っててくださいよ!」

結局三人揃って『光 写真館』から飛び出していった。

残された栄次郎が、紅茶を淹れながら明るく呟く。

「晩御飯までには帰って来るんだよ」

写真館から三人が飛び出した直後、士の真上から

灰色の水を掻き混ぜたように思える膜が降りてくる。

士達の知り合いに、コレを使って世界を移動する術を持つ者がいたが、今回は違う。

士の言う、「早着替え」——この世界が士に与える『役割』にふさわしい衣装に自動変換される為のものだった。

「お、おとお……………お？」

「コレは——スーツか？イマイチだな」

「なんで文句言うんですか？似合ってますよ、土君」

「んな事は分かってる。俺が言ってるのはスーツ自体の事だ」

士が着せられたのは、いたってシンプルな普通の礼服。フオーイマル スーツ
全体を黒を基調とした上着。

スラリと伸びる脚線を取めるズボン。

………何故かネクタイだけは、マゼンタカラーに白黒ナナメ十字架という
ピンポイントお洒落仕様だったが。

「……………ん？」

士は全身を探っていた手を止め、上着のポケットを
調べ始めて———何かを取り出した。

「士君……………何ですかソレ？」

「トランプか？……………うわ、なんじゃこりや^{キんケ}!!」

「……………1から……………13^{キんケ}まで全てが……………揃ってる…」

士が取り出した一枚のトランプカード。

しかし、そのカードの番号は、『存在しない』数だった。

カードには本来、どの方向から見ても左上にそのカードの数字がくるようになっていたのだ。

しかし、このカードのその部分は明らかに違った。

左上にはトランプ特有のマークは存在せず、

ただ1から順にK^{キング}までが並んでいる。

「印刷ミス………なわけないよな」

「これが土君がこの世界でするべき『役割』なんでしょうか？」

「だとしたら、この世界は俺を良く分かっているようだな」

「どういう事ですか？」

「このカードが俺の為すべき事なら、今回は俺が1からKまでの全てを

支配する存在………いわば『支配人』になれという訳だ。前回は高々チーフ程度だったが、今回のは実に俺好みだな。良い配役だ、素晴らしいな」

そう言って土は身体を独^こ楽^まのようにクルクル回り始めた。

心底愉快そうに回っていると、土のケータイに着信が入った。

「誰だ？士の番号を知ってこの場にいないのは……」

「……もしかして、海d「あのコソ泥じやない、誰だ？」ちよつと士君！」

夏美のセリフを遮った士は、謎の番号から掛かってきた電話に出る。

「もしもし？唐突だが、お前は誰だ？」

「……本日より門矢 士様の秘書を務めさせていただきます事になった者です」

「名前は？そもそも、秘書ってどういうことだ？」

「私の名は『ダイヤのQ』^{クイーン}。貴方様は、大手結社『BOARD』の

総支配人様でございますので、その秘書という事になります。」

『BOARD』の総支配人？俺が？」

「左様でございます。間もなく出社のお時間ですので、お車を向かわせませす」

「………そうか、ご苦労」

そう言って電話を切った直後に、夏美とユウスケが士に詰め寄る。

「今の何なんですか士君!!」

「『BOARD』の総支配人って、ホントなのか？」

「さあな……。直に迎えが来るらしい。話ならそこで聞くとするか」

そうして暫く写真館の前で待っていると、数分後に

マゼンタカラーに塗装されたリムジンがやって来た。

リムジンの後ろのドアが開き、スーツをバッチリ着こなした

女性が右手の指を眼鏡に添えて、言った。

「社長、お迎えに上がりました。本日も『BOARD』の繁栄の為、

お仕事に精をお出しされますようお願い致します」

女性は、続ける。

「本日最初の業務は

仮面ライダーレンゲルの『抹殺』です」

E p, 03 『FRONT or LIA』
　　〽表の世界

の裏』

今、何と言った!!

士達の前に現れた女性の口から放たれた言葉は、士達の耳から脳に達しながらも、その意味を理解出来ずにいた。

自分の聴覚が確かならば、

『仮面ライダーレンゲルの抹殺』をしろと言ったのか。

だが何故この女性はライダーを殺せと言うのだろうか。

余りにも唐突だった為遅れたが、夏美が疑問を口にした。

「抹殺って………何ですか?! 仮面ライダーを、士君に……」

「………貴女、『光 夏美』さんですね?」

「え？ハイ、そうですけど………」

「全く……。支配人たる士様のご友人であると言うから、今まで手出しを

されなかったというのに……。人間如きが、その生意気な態度を憤みなさい」

女性が夏美を罵った直後、ドス黒い殺気が滲み出る。

そして、女性の体表に不気味な『異形』が浮き出て、

やがてそれは全身を包み込んで形となる。

「夏美ちゃん、逃げて!!」

「なるほど……。名前からして変だとは思ってたが……。『アンデッド』とはな

士達の前に現れた不死身の怪物『アンデッド』。

彼女は電話で『ダイヤのQ』と名乗っていた。

このブレイドの世界では、アンデッド達はトランプカードの数字によって格付けされているのだ。

スペードの3よりもダイヤの4の方が上であり、

クローバーの5よりもハートの6の方が上なのだ。

そして、ジャック クイーン キング J、Q、Kなどの、

俗に言う『絵柄札』と呼ばれるカードは上級とされていて
例え仮面ライダーが数人で挑んでも、勝つことは難しいと言われる。

その内の、Qなのだ。目の前のアンデッドは。

「さあ……再教育の時間よ……」

ユウスケは焦っていた。

目の前の怪人がアンデッドだという事は過去の戦いで知っていたが、
隣にいる士が手を容易に出さない——否、出せない相手である為、

ユウスケも迂闊に手がだせないでいたのだ。
しかし、士は別の理由で動けなかったのだ。

(『ダイヤのQ』……そうか、『サーペントアンデッド』か)

士はそう心の中で独りごちる。

突然だが、『門矢 士』には記憶が無い。

正確には『自分に関する全ての記憶』が無いのだった。

しかし、何故か仮面ライダーや、それに関する知識は知っている。

それは、士自身にも分かっていない事なのだが、

世界を渡り歩き度度その記憶はハッキリと色濃く鮮明になる。

始めこそおぼろげだったものの、旅を重ねるごとに

ライダーや怪人の事を見る前に知ることが出来ていたのだった。

故に、今回もまた。

蒼白な顔面に、肩や首の隙間などから伸びている

ウミヘビのような生物の頭部をかたどった突起。

苔の生えたような緑色の体表と、その所々に蛇の蛇腹が

絡みついており、腕から伸びた尻尾のような部分は恐らく、

ムチのように振り回せるようになっているのであろう。

そしてその腰には、ベルトのようなものが巻かれている。

今にも夏美に襲い掛かろうとしているサーペントアンデッド。ユウスケが我慢できずに『変身』しようとしたその時。

「ヴエエエエエエエエエイ！！！！！！」

「ぐああッ！！！！」

突如、サーペントアンデッドの身体が道路へ吹き飛ぶ。

襲われる直前だった為、目をつぶって固まっていた夏美には

何が起こったのか分からなかったが、土とユウスケは理解出来た。

一先ず夏美の安全を確保するため、ユウスケは夏美に駆け寄り、

士はいつの間にかサーペントアンデッドを追っていった

『仮面の戦士』の後を追って駆け出した。

「グツ!! お、お前は、何故変身を……………」

「ああ、『睦月』のおかげだよ。アイツがこの『スペードの1』を

お前達から奪え返して、俺達の元に届けてくれたんだ……………覚悟しろ!!!!」

「フフフ……………良い気になるなよ、たった一人で……………」

「俺対お前……………充分だろう、が……………」

吹き飛ばされた道路には、彼女が乗って来たリムジンが駐車してあった。

それだけならば気にも留めないが、彼は目を見張った。

バタン、と車のドアを閉める音と共に姿を現す男。

全身を黒のスーツで決めた男は、此方へ歩み寄って来る。

「フフ……………さあ、『トータス』!! 私に力を貸せ!!」

「……………了解」

男がスーツの襟を締め直すと共に、『異形』が浮き出る。全身がスーツに代わって光沢を放つ黒い甲羅に覆われる。

ただし、左肩だけはミドリガメのような緑色で粹線の入った
デザインの異なる甲羅に覆われていた。

そこに、士がようやく追いつき状況を判断する。

（アレは『ダイヤの7』……『トータスアンデッド』だな）

正直、かなり分が悪いだろう。

上級のQと中級の7が一体ずつ。

対してこちらは一人……いや、二人か。

士は物陰から成り行きを見ていたが、そう結論付けると

ゆつくりと歩き出し、三人——一人と二体のいる場所へと向かう。

「いきなりメンドくさい事になったが、仕方ない。手を貸すぞ『ブレイド』」

鍛えられた鋼を上回る硬度を誇る白金の装甲。

内に秘めた正義の炎が反射したように赤い瞳。

下腹部の装甲は、彼の適合したスパーードの形。

彼こそがこの世界の柱、『仮面ライダー^{ブレイド}剣』である。

「……………突然何なんだ、お前は？」

「俺か？俺はな」

「総支配人^{オネーサ}!!!!」

アンデッド達に『総支配人』と呼ばれた男の出現に驚くブレイド。

慌てて訂正しようとする士だったが、二体のアンデッドが口々に喋る。

「総支配人!! 此処はQと私にお任せを!!」

「そうです、総支配人。貴方様は『レンゲルの抹殺』を!!」

士としては、抹殺するとしたらレンゲルに恨みは無いが、

この世界での自分の役割である以上は仕方ない犠牲だと先程までは思っていたのだが、仲間であるブレイドの前では、彼女らの言葉に

「おう、分かった」などとうなずけはしなかった。

「お前、『総支配人』って……。それに、睦月を抹殺だと……！！」

「……………あー、待て落ち着け、な？ コレには少し複雑な事情が」

「ふぎけるな！！！！ 睦月に、俺の仲間指一本！！ 触れさせるか！！！！」

「ううおツ！！！！ ……………チツ、どの世界でも『ごう』なるんだな……！」

ブレイドが真横に振るった『覚醒剣』ブレイクラウザーを後ろへ

身体をよろつかせながら避ける士。しかし、彼の追撃は終わらない。

振り払いが避けられたブレイドは、すかさず右足を半歩踏み込んで、

その勢いを乗せた右腕の剣を逆袈裟気味に振り下ろす。

士はそれを身体を半身にして躲す。

続けて繰り出される連撃も、素早い体裁きで尚も躲す。

痺れを切らしたブレイドが剣で突きを繰り出す。

それを上半身を左側へ逸らして躲し、その重心の移動を

流れとして利用して右足でブレイドの剣を大きく蹴り上げる。

生身で反撃されるとは思っていなかったブレイドは、男の予想外の

行動とそのためらいのなさに驚いていた。

その一瞬の隙を、『悪魔』は見逃さない

腰の後ろのポケットから、ソレを取り出す。

そして、自分を援護するためにやって来たアンデッド達にブレイドの相手を任せて、取り出したソレを自らの腰に宛がう。

ガシユイイン!!!!

腰に宛がったソレが起動し、スーツの上からベルトを装着する。ベルトを排出し、腰に巻き付けたソレのバックルの左右にある白い取っ手とも思える部分を両手で掴み、引っ張る。

するとバックルの中心が横から縦に向きを変えた。

装着者の土から見ると、僅かに『何か』を差し込むような隙間があるのがうかがえた。

ベルトが装着されると同時に、腰の左側へ同様に装着された折り畳み式の大きな『手帳のような物』を両手で開き、

中から一枚のカードを取り出す。

「やれやれ……………」発殴って、大人しくさせてから事情聴取するとするか」

そう言って取り出したカードの表面を相手に

見せつけるように自分の身体の前に突き出して、土は叫んだ。

「変身!!!」

カードを指で押し出しつつ裏返し、バックルの隙間に差し込む。

この僅かな隙間は、『カード読込口』だったのだ。

では、一体何のカードを読み込むのか。

その答えは、すぐに現れた。

差し込まれたカードを読み込んだバックルの部分——というよりは、

その中心に光る紅い宝玉の辺りから、電子調の音声が響く。

『KAMEN RIDE——』

両手で先程引つ張った白い取っ手部分を、

今度は逆に両手で中心へと軽やかに押し込んだ。

引つ張った時とは逆に、中心の部分は取っ手を押し込む

動きに合わせて縦から横へと向きを変えた。

そして、この工程でカードの読込が完了し、

現実へと『反映』を開始するのだった。

『
D E C A D E !!
』

Ep, 04 『JOKER of JOKER』
切札

読み込んだカードの内容が、現実に反映される。
たった一瞬で完了した変身は、『見る者』を驚愕させた。

身体を灰色の水が混ざったような膜が覆い、土の肉体を包むようにして色の抜け落ちたように見える仮面の戦士の鎧が装着される。

そして、様々な形や模様のエンブレムが空中に『九つ』浮かび上がる。そこからさらに、土の装着した鎧を半透明にしたような何かが現れ、磁石が引き寄せ合うかのように本体と一つになった。

その直後、血に染まったように真っ赤な長方形の物体が仮面の中から飛び出して、大小合わせて9枚の板状の物質に変化し、仮面に突き刺さる。仮面に突き刺さったその板から、赤色が全身に行き渡る。

全身のモノトーン調の部分が、鮮やかなマゼンタカラーに染まる。薄いモノクロ部分は、対照的な白い色に塗り替えられていく。最後に、頭頂部に付いているイエローのクリアパーツが瞬く。と同時に、その双眸にライトグリーンが光が灯った。

『仮面ライダーディケイド』

世界の破壊者の異名を持つ、史上最強に最も近い仮面の戦士。

彼は変身が完了すると同時に、腰の左側に装着されたカードホルダー
いわゆる、『ライドブッカー』を手に取ってその機構を動かし始める。

装着されていたライドブッカーの底面部の黒いレバーを45度ほど回転させる。
すると、ちょうどハンドガンのグリップのような形状になり、それを右手で掴む。
そのまま人差し指のかかる位置にある『トリガー』を引いた。

バキユウン!!!!

間隔の短い光線弾を放ち、銃口から硝煙を巻くライドブツカー。

その弾丸の射出された先には、一本の街路樹
の後ろに潜む者がいた。

「出てこいよ………いるのは気付いてたぜ、『仮面ライダーギヤレン』」

デイケイドに名を呼ばれた仮面の戦士が、その姿を現した。

今もアンデッドの足止めを食らっているブレイドと、同じ硬度の白金の装甲。

逆に、ブレイドとは違う全身を覆う装甲の下の小豆色のパワードスーツ。

胸部の分厚い装甲に刻まれた、彼と適合したダイヤのマーク。

デイケイドと比べ、丸い形状の両眼から上に伸びる『角』のようなクリアパーツ。

彼の右手には、彼の専用武器『覚醒銃』ギヤレンラウザーが握られている。

彼もまた、ブレイドの世界のライダーの一人である。

ギャレンは自分に気付いたデイクイドにこう問いかける。

「おい……お前も仮面ライダーなのか？だが、俺達とはまるで違う風貌……。何者だ？」

「…………お前、俺を知らないのか？『デイクイド』を、知らないのか？」

「デイクイド…………？いや、『所長』の作った『ライダーシステム』のデータの中にそんな名前は何処にも無かったはずだ…………答える、デイクイドとは何だ？」

「…………この世界は、知らないのか…………？」

かつて士の…………デイクイドの旅してきた世界ではほぼ必ずと言っていいほど、

その世界のライダー達にその名を知られていた。否、知らされていた。

それは、『鳴滝』という謎の男の仕業だった。

鳴滝は何故かデイクイドの事を『世界の破壊者』または『全てを滅ぼす悪魔』などと、様々なライダー達にその謂れの無い悪名を伝えてきたのだった。

その真意は不明だが、士の他にいるもう一人の『世界を渡る力』を持ったライダーと

怪しげな取引を交わしたり、またある時は夏美に対してどういう訳なのか、ある種の『警告』とも取れる言葉を残したりと、まさに謎の多い男だった。

しかし、ギャレンは自分を知らない。

仮面ライダーデイケイドを、全ての破壊者たる自分を知らない。

つまりこの世界には

(鳴滝は来ていない……? いや、アイツに限ってそれは無いはずだ……)

デイケイドは何処か引つ掛かりを覚える幾つかの疑問を、一先ず胸の奥に押し込み、目の前のギャレンに集中することにした。

「どうした、早く答えろ。でなければ……」

ギャレンの右手の人差し指が銃のトリガーにかかる。

しかしそれよりも速く、デイケイドは動いていた。

「撃つってか？それじゃあ遅いぜ」

バキユウン！！！！

ライドブツカーから放たれた光弾は、ギャレンの左足より僅かに手前の場所に撃ち込まれた。しかしこの距離で、普通なら外す事は余り無い。明らかに意図的に外した。いつでも撃てる、お前ギャレンよりも速く。そんな宣言のように思える一撃に、ギャレンは激昂した。

「ッ！！—— 貴様！！」

「質問には答えてやる。ただし、この俺に勝てたらな」

「……………良いだろう、すぐに聞きだしてやる！！」

「出来るといいな」

再びトリガーに指をかけ、今度はデイケイドより早く引き金を引いたギャレン。しかし、二発の銃弾はデイケイドが僅かに遅れて放った光弾によって相殺される。ならば、とギャレンは射撃を止めてデイケイドに向かって走り出す。

すぐに距離を縮められたデイケイドは、ライドブツカーでの射撃を断念し、
敢えてギャレンの仕掛けてきた接近戦に応じる。

走って来た勢いを乗せたギャレンラウザーでの殴打を、デイケイドは半歩下がって躲
す。

その反動を使つて繰り出されたギャレンの左足の突き出すような蹴りも、右手ではじ
く。

お返しとばかりに、今度はデイケイドが左足で同じく突き出すような蹴りをかます。
胴体がガラ空きだったギャレンは、見事に後方へ吹き飛んだ。

「ホントに出来るのか？ ハンデでもやろうか？」

「ぐ……ッ!! ふざけるな!!!! ここからが本番だ!!」
「そうか。なら、俺も『お遊び』はここまでにするか」

デイケイドは不敵な発言と共に、銃形態のライドブツカーを開いて
中から新たなカードを取り出そうとする。

それを見たギャレンも同様に、ギャレンラウザーのグリップの上にあたる部分に
仕込まれているカードホルダーから、カードを取り出す。

ギャレンはすぐさま『ダイヤの2』と、『ダイヤの4』を取り出してギャレンラウザーの砲身上部のカード読込を行う部分にインストールする。

説明が遅れたが、このブレイド世界のライダーは皆、カードで戦うのだ。

正確に言えば、『カードに封印したアンデッドの力を引き出して』戦うのだが。

以前、この世界の人類の脅威であるアンデッドについては軽く触れたが、

その名の通り、彼らは『死ぬことが無い』。いわゆる不老不死である。

故に、この世界のライダー達はこの敵を『倒す』のではなく『封印』する事にした。

『ラウズカード』と命名されたそのカードには、ダメージを与えて戦闘不能になり、肉体の防衛活動の弱まったアンデッドを封印出来る機能が備わっている。

そして封印したアンデッドの『カテゴリ』に合うライダーが、封印されたアンデッドの

持つ特殊な能力をカードを読み込むことで、引き出すことが出来るのだった。

『スペードのカテゴリ』ならばブレイドが、

そして『ダイヤのカテゴリ』ならばギャレンが。

ギャレンラウザーがラウズカードの情報を読み込み、青い膜を投影する。その青い膜には、先程読み込んだカードの絵柄が写っていた。読み込んだカードの能力を、ギャレンラウザーに内蔵されている音声ガイドが、かなり低めの音程で持ち主に宣告する。

『BULLET』

『RAPID』

『RAPID SHOOT』

特殊能力『バレット』と『ラピッド』

ラウズカードは（相性にもよるが）複数同時に発動させると、コンボとしてより強力な力を引き出すことが出来る。

射出する弾丸の威力を強くするバレットと、

弾丸の弾速を引き上げるラピッドがコンボとして合わさり、より強力な、『ラピッドシュート』が発動した。

対してデイケイドは、焦っていた。

(何!! カードが一枚も……)

使えない!!

ライドブツカードの中にファイルされているデイケイド専用のカードが、何故かその全てが色を失い、使用不能となっていたのだ。前にも似たような事はあった。

しかし、全ての世界を渡った今、こんな事が起きるはずが無い。

そう思っていた為、デイケイドは動揺してしまった。

そして、ソレが隙となった。

「喰らえ!!!!」

「!!しまっ」

ギャレンの放ったラピッドシユートが直撃して、崩れ落ちるデイケイド。その衝撃で、ライドブツカードの中のカードが何枚か外に舞っていく。

威力の底上げされた銃撃に苦しみながらも、何とか体勢を立て直すのが、カードが散らばったのを見てすぐに回収に向かおうとする。

しかし、ギャレンがそれを阻む。

銃弾を浴びせ、デイケイドの動きを封じようとしている。

だが、勝利の女神はデイケイドに微笑んだ。

ギャレンの銃による風圧でカードが舞い飛ぶ。

その中の一枚がデイケイドの手元にフワリと落ちてきた。

それを掴んだデイケイドは、安堵のため息をついた。

「……………つたく。まさかお前が俺を助けるとはな」

「どうした、案外大した事はないようだな」

「言ってる。どうせすぐに立場が逆転する」

「何?」

その手に掴んだカードは、色づいていた。

赤く分厚い上半身の装甲。それと同じ輝きを放つ光彩。

頭部には、天に逆巻く金色の『二本角』。

あの日からずっと隣で戦ってくれた最強の戦友。いつだって絶やさない笑顔が、その強さの根源。誰よりも優しく、誰よりも熱い、正反対の存在。

その手に、掴む。

この状況を裏返す、最高の『切札』ジョーカーを。

「頼むぜ、ユウスケ」

ベルトのバックルの取っ手を引き戻し、読み込み口を開く。

そして、手にしたカードをそこに差し込み、再び取っ手を逆に押し込む。新たに挿入されたカードの情報を読み取り、音声で認識する。

『
K
A
M
E
N

R
I
D
E

|

K
U
U
G
A
』

Ep, 05『KING on the BOARD』
の盤上〜』

士が手にしたカードは、仲間であるユウスケと紡いだ絆の証。
『仮面ライダークウガ』の名が刻まれたカードだった。

ディケイドのマゼンタカラーの体表を、クウガの赤が塗り替える。
頭部に生える二本の角、全身を包む黒いスーツ。

未確認生命体『グロンギ』と闘う仮面の戦士が、今ここに現れた。

同じライダーでありながら、全く異なる形で姿を変えた
目の前の男に、ギャレンは驚愕していた。

既にラピッドシュートのコンボも発動時間を過ぎて、その効力を失っていることにも気付かないほどに。

「何なんだ、今の変身は!! 姿がまるで違うぞ!!」

「違うのが姿だけだと思ふなよ?」

そう言つてクウガにカメンライドしたデイケイド（以後もデイケイドと呼称）はその特性を生かすために、躊躇無く間合いを詰めて行く。

未だに驚きの抜けないギャレンは、デイケイドの接近を許してしまう。

クウガの基本フォームである、『クウガ マイティフォーム』

その特徴は、武器を持たない『格闘特化型である』ということ。

右拳を打ち込み、ギャレンを牽制して隙を作る。

すかさず左足で相手の腰を狙った鋭い蹴りを放つデイケイド。

蹴りが直撃してギャレンの体勢が崩れると、さらなる追撃に移る。

一方的なパンチとキツクの応酬。

これこそが、クウガの肉弾戦での強さを証明するものだった。

しかし、状況は一変する。

『STAB』

『RUSH』

『BLIZZARD』

『BLIZZARD STING』

ギヤレンの背後から聞こえてきた電子調の音声。
三回のアナウンスに、最後に聞こえたコンボ名。

「うおおおおッ！！！！」

ジャンプしてこちらに跳んでくる仮面の戦士。

その右手には身の丈ほどの長い百杖を持ち、振りかざしている。
雄叫びと共に繰り出してきた突きを、デイケイドはもろに喰らう。

「ぐあぁッ!!」

デイケイドを一突きで吹き飛ばしたライダーは、先程まで彼がいた位置に着地して、百杖を振るう。

「お、お前……………どうして…」

「助けに来ました、『橘たちほなさん』。ここからは、俺も一緒に」

「……………助かる。だが、油断するな。コイツは強い」

そう言うって体勢の崩れたギャレンを立ち起こし、共に並んだこの戦士。

名は『仮面ライダーレンゲル』、普通の高校生『上城 睦月』が変身している。

他のライダーとは違う、縦に長いマスク。

その大部分は薄い黒色で染まっているが、顔の前部にはまるで脚を広げた蜘蛛のような金色の模様が描かれていた。

その両眼は、何もかもを捕食せんとするような毒々しい赤紫色の光を帯びている。

頭部とは逆に、胴部の装甲はほとんどが金色で染め上げられている。その中心部に引かれた一線から、クローバー状に模様が広がっている。

吹き飛ばされたデイケイドが立ち上がる。

同時に、レンゲルとギャレンは専用武器のホルダーからラウズカードを取り出して、読み込みを行っていた。

「橘さん!! コレで決めましょう!!」

そう叫んだレンゲルがギャレンに見せたカードは、

クローバーの 8 『POISON』と、同じくクローバーの 9 『SMOG』
ボイスマスモッグ
毒と煙。

この二枚のカードを選択した睦月の考えを、橘は即座に読み取った。

ギャレンもすぐさまラウズカードを取り出し、スキャンする。

ダイヤの 6 『FIRE』、燃え盛る炎。
ファイア

互いにカードの読み込みを終え、デイケイドに照準を合わせる。先にレンゲルが仕掛けた。

「喰らえ!!!!」

手にした専用武器、『レンゲルラウザー醒杖』の刃の部分から

紫色に染まった大量の毒煙がデイケイドに向けて放たれた。

間髪入れずに、ギャレンもギャレンラウザーから炎を纏った弾丸を射出する。その二つがちょうどデイケイドの手前でぶつかり合った。

唐突だが、一般的に言われている毒のほとんどは、『引火性』のものが多い。

つまり、煙という荒い粒子と混ぜり合った引火しやすい霧状の毒が

高速で放たれた炎の塊と衝突したのだ。

ドゴオオオオオオン!!!!!!!!!!

大爆発が起こるのは、当然と言えよう。

カードの能力が切れたレンゲルラウザーとギャレンラウザー。互いにディケイドに定めていた照準を戻した。

「やりましたね、橘さん」

「ああ……。今といい、俺と『剣崎』の『カテゴリー1』^{エース}を奴らから

取り戻してくれた事といい、本当に良くやってくれたな睦月」

「いえ……。あ、そうだ!! 剣崎さんがまだ」

「そうだったな、よし。すぐに向かうぞ睦月!!」

ギャレンとレンゲルは、未だに戦っている剣崎

加勢をしに行こうと、爆発のあった場所の残り火に背を向けた。

向けてしまった。

だから、一手遅れた。

ブレイドの元へ

『FOAM RIDE』
KUGA TITAN』

「!!!!」

背後で今も燃え続ける炎の中から聞こえた電子音。

そこに揺らめく一つの影が、形を変えていく。

スマートなフォルムの赤い装甲は、重厚な形状の銀の鎧に。

両腕に装着されていた赤い手甲は、中世の騎士風の籠手に。

その双眸は、胴部や肩部に施された装飾と同じ紫の輝きを。

そして何より、その右手には
――一振りの長剣。

「そ、そんな……………」

「バカな、あの爆発をモロに喰らわせたはずだ…!!」

動揺を隠せない二人に、炎を切り裂き近づくデイケイド。

しかしその姿は、先程のクウガとはかなり異なっている。

「当たり前だ。このタイタンの装甲に、そんな爆発ひのこが通るかよ」

不敵に語りながら、現れた『仮面ライダーダーククウガ タイタンフォーム』
一步一步大地を踏み鳴らしやって来る姿は、まさに『巨神タイカン』だった。

すぐさま動き出すギャレンとレンゲル。

レンゲルが先攻し、ギャレンが後方からそれを援護する。

だが、デイクイドは全く動じていない。

レンゲルが近づき、レンゲルラウザーによる連撃を繰り返そうと

まずは最も強力な一発目の攻撃を、タイタンの胴部に直撃させた。

だが、

「……言つたろ？並の攻撃が通るタイタンじゃないんだ————よっ！！」

「うわあッ！！！！」

「睦月イ！！」

レンゲルラウザーを左手で掴み、右手の大剣でレンゲルの胸を切り上げる。凄まじいパワーで反撃を受けたレンゲルは、いともたやすく吹き飛ばされる。その光景を後方から援護しようとして見ていたギャレンも、そのパワーに驚く。だがその時、デイケイドは既に次の行動に移っていた。自分のいる場所の少し前に落ちてきたレンゲルに駆け寄るギャレン。声を掛けようとした彼だが、違和感を感じた。

『FOAM RIDE
—————
KUGGA DRAGON』

その違和感の正体にギャレンが気付く前に、デイケイドの姿がまた変わった。今度はまたマイティフォームのようにスマートな青色の装甲。彼の双眸も、胴部の装甲と同じ青色の光へと変わっている。だが、彼が右手に持っていた剣が無くなっていて、レンゲルラウザーをその代わりと言わんばかりに持っていた。そう、持っていた。

何かのモーターが回転するような音と共に、その形が変わっていく。

レンゲルラウザー
百杖が、六尺棒に。

「貴様……。睦月のラウザーを!!」

「ブンブンと鬱陶しかつたからな。そういや、ソレもウザかつたな」

「何ッ?!」

「ソイツも借りてくぜ。ただし、返さねえけどな!!」

ドラゴンフォームの強化された跳躍力で一気に距離を詰める。

その素早さに反応が遅れたギャレンは、あつという間の連撃に追いつめられる。

とうとう体勢を崩したギャレン。ディケイドは、すかさずロッドでギャレンの手を打った。

迸る打撃による痛みで、ギャレンラウザーを落としてしまった。

「ウグツ!! し、しまった……」

「コイツが欲しかつたんだ、銃かな」

腰のライドブッカーから取り出した新たなカードを、バックルに挿入し読み取る。

再び流れる力強い電子調の音声。

『FOAM RIDE ————— KUGA PEGASUS』

またしても姿の変わったデイクイド。

今度は緑色になり、拾い上げたギャレンラウザーもクウガ専用の弩弓銃ペガサスボウガンに変化する。そしてその銃口は、自分に向けられている。

ギャレンもレンゲルもこの瞬間に悟った、『勝てない』と。

「さて、どうする？ 一回話し合うか？ 一発ずつコレ喰らうか？」

「……………橘さん」

「……………分かった、話を聞こう。だからソレを下ろせ」

二人はベルトからラウズカードを抜き取り、変身を解いた。

それを確認してから、デイクイドもまた同じように変身を解除した。

「やつと落ち着けそうだ……。さてお二人さん、色々聞かせてもらうぜ？」

「……いいだろう。だが、こちらの質問に答えてからにしておらおう」

「それはお前らが俺に勝つてからだといったはずだが？」

「それならば、こちら何も話す事は出来ないな」

「ハッ!! 負けた割に随分強気で来たな。……いいぜ、一つだけ答えてやる」

「……では、デイケイド、だったか。お前は一体何者だ？」

もはや聞き飽きてしまったその言葉に、士は律儀に答えた。

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ」

少し前、『BOARD』本社ビル

「それでは諸君、これより定例会議を始める」

口上を述べたのは、スペードの刻印が刻まれた椅子に座るアンデッド。
彼は『コーカサスビートルアンデッド』、スペードの『カテゴリーK』^{キング}である。

「しかし、この会議に出席する数も……減ってきたな」

ふてぶてしく椅子に腰を奥まで入れて腰掛けるのは、ハートの『カテゴリーK』
名を『パラドキシアンデッド』といった。後ろにいるのは『カテゴリーQ』の女秘書
だ。

円卓を囲むようにして座っているのは、全て上級と呼ばれるアンデッド達だった。

「今それはいい……。それよりも、タランチュラはどうした!!!」

苛立ちを隠せず、机に拳を打ち下ろさん勢いで憤慨しているのは、
『ギラファアンデッド』、ダイヤの『カテゴリーK』である。

「……恐らく、ヤツが手引きしたものと。故に、レンゲルと共に……」
「逃げた、か？ 俺には理解出来んな、ヤツの考えなど!!」

その後ろで耳打ちをした男は『ピーコックアンデッド』、カテゴリーは『J』だった。

「そういえば、タイガーも姿が見えんね。……まさか彼女まで？」
「どうだろうな。クローバーの連中は変な奴しか居らんようだしな」

クローバーの『カテゴリーQ』の行方を気にしたパラドキサと、応えたコーカサス。いつまでも会議が始まらないと思ったのか、ピーコックが仕切ろうとした。

その時

ガシヤアアアアン！！！！！！

「！！！！！！」

突然、会議室の大窓が音を立てて砕け散る。

余りに唐突な出来事で、何が起きたのか瞬時には理解出来なかった。

しかし、靄が晴れると共に見えてきた二つの影。

「む………？」

「き、貴様!! ブレイド!!!!」

「おい、しっかりしろ!! 無事か、サーペント!!!!」

窓を突き破って現れたのは、『仮面ライダーブレイド ジャックフォーム』

金色の六枚の翼をはためかせ、高らかに告げる。

「……………さあ、『ハジメ』を返してもらおうぞ!!!!!!」

Ep, 06 『ELEMENT ～心に剣～』

士と橘、それに睦月の三人は戦闘を止めて10分。

三人はある場所へと向かっていた。士達の旅の拠点、写真真館である。

最初はぶつくさ言っていた二人だったが、目的地に着いた途端に表情が一変した。

睦月が士に何か言おうとしたが、士はズカズカと歩いて先に入ってしまった。

そのまま一階の撮影ホールにいるであろう人物に向けて、扉を開けながら言い放つ。

「おーい店長^{マスター}、客の来店だ。いつものコーヒーを三ば……………い？」

「……………君、誰？　なんで此処の事知ってるの？」

撮影ホールだと思っていた部屋にいたのは、牛乳を飲んでいた青年だった。

慌ててこぼしそうになりながらも士を見て警戒したのか、少しだけ後ろに身を引かせた。

すると後から入つて来た橘と睦月がその青年を見て声をかけた。

「大丈夫か『虎太郎』?! おいデイケイド、何故お前がこの場所の事を知っているんだ!!」

「虎太郎さん、無事ですか!」

「橘さん、睦月君! これどういう事? この人誰?」

目の前で狼狽える青年に士が話しかけようとした時、不意に入り口で立ち止まっていた

三人の後ろから陽気な声と共に一人の老人が姿を現した。

「あら士君おかえり。夏海もユウスケ君も、もう戻つて来てたのに遅かったね」

「あ、士! 帰つてたのか、何処行つてたんだよ心配してたんだ……………その人達誰?」

「士君お帰りなさい、あの……………ごめんなさい! 私あの時は……………つて聞いてますか士君?!」

老人と共に青年と女性が部屋になだれ込むように入つて来た。

橘と睦月は驚いたが、士は少しだけ予想していたかのような振る舞いで二人に問いかける。

「つたく……おいじーさん、それとユウスケ。少し話がある、この世界のライダー達とな」

「え？ ライダーって、この二人が？」

「橘さん、なんでこの人がライダーだつて知ってるの？ どういう事なの？」

「ちよつと土君！ どういう事なのか説明してくださいよ！」

「夏ミカン、叫ぶと果汁が飛ぶからその牛乳と一緒に他の部屋行つてろ」

「土君、柑橘系の果物と牛乳と一緒に食べたらお腹壊すから、止めときなさい」

「おじいちゃんは黙つててください！」

何故か言い争いに発展した事に睦月が戸惑うが、橘は冷静に虎太郎と呼んだ青年にこの場は大人しく下がるように言い、士に促されるままにソファに腰かけた。

納得がいけない表情の夏海を見たユウスケが、一緒に居てもいいだろと士に抗議して仕方なく士が納得したため、七人で話を進める事にした。

「分かった、とにかく話を聞こうぜ。なあ、レンゲルにギャレン？」

「……………良いのか？ この人達は……………」

「気にするな、じーさんと夏ミカンはともかくこのアホは一応ライダーだ。他の世界のな」

「えっ！ この人もですか!!」

睦月が驚きながらユウスケの方を見ると、ユウスケは土の方を睨みながら抗議していた。

だが土と橘がなだめて落ち着かせ、改めて話を切り出した。

「睦月、それは後でいい。……………ディケイド、全てを話すが信じていいんだな？」

「勝手にしろ。だが、俺はこの世界でやらなきゃいけない事がある……………らしいから手短にな」

「……………分かった。お前の事は信用できないが、お前の強さは理解出来る」

そして橘の口から、この世界の現状がゆつくりと話された。

「お前はヤツらに支配人と呼ばれていた。それが何故かは今は置いておこう。
だがそれなら、アンデッドの説明は要らないよな？ ヤツらはある日、封印の祠か
ら発掘され

俺達BOARDの本社の研究機関に輸送された。だがそこで原因不明の事故が発生してしまった。

その結果、ほぼ全てのアンデッドが封印から解き放たれて、日本中に散らばっていった。

俺ともう一人の仲間の剣崎の二人で協力し、アンデッドを順調に封印していったん

だが……」

「ダイヤのJ、ジャックピーコックアンデッドが橘さんに接触して来て……橘さんに僕を、

仮面ライダーレンゲルを造り出す為に必要なクローバーの1エースの封印を依頼してきただんです」

「当時の俺は、その……色々あつて正常な判断が難しい状態だった。

そのせいで、ヤツに協力してしまった。だがそのせいで睦月を闇に巻き込んでしまった。

しかもクローバーの1は封印されてなお、睦月の心に巢を張り、洗脳していったんだ」

「あの時は橘さん達がいなかったら、僕はもうダメだったと思います。

でも、あのピーコックアンデッドは僕を操る計画が破綻した時、その報復で……橘さんの」

「睦月、いい。……………俺が話す。

ヤツらアンデッドの上級に位置するピーコックが、俺の大学時代から想いを寄せていた

無関係の女性を手にかけて。その時俺はようやく正気に戻れたんだ、まさしく皮肉なものだ

だが丁度その辺りから、連中が妙な動きをするようになったんだ。」

「妙な動き？」

ここでやつと口をはさんだ士だったが、その言葉に違和感を覚えた。

ユウスケはアンデッドについては余り詳しく知らなかったので聞こうとしたが、橘の悲しげな

表情と同時に呟いた「想いを寄せていた人」という言葉に、酷く共感できた為は何も言うことが出来なくなってしまう。夏海も全く同じ心境だった。

士の問いかけに、橘が相づちを打ちながらさらに話を続ける。

「上級のアンデッド達が何故か一致団結し、一度は廃墟と化したBOARDの本社を

乗っ取り、俺達に封印されていない残りのアンデッドをまとめ上げ始めたんだ。

つまり、人間以上の力を持った不死身の化物が組織を作り上げたんだ。しかも大規模な奴を。

そして無差別な攻撃は、効率的な虐殺に変わっていった。更に凄まじい速度で学習していた。

段々と俺達三人ではアンデッドの脅威の抑えられなくなっていたんだ……。

そしてとうとう俺と剣崎はヤツらに打ち倒されてしまったんだ、情けない話だがな

「えっ！ 負けちゃったんですか!!」

「ユウスケ！」

「いいんだ、事実だからね。話を戻すが、俺達は上級アンデッド達によって1のカードを奪われて変身出来なくなっていたんだが、睦月が一度俺達を裏切るふりをしてヤツ

らの

内部に潜入し、今日こうしてカードを取り戻してくれたという訳だ」

一気に話して疲れたのか、橘はふうと小さく息をついた。

逆に士達は戸惑いを隠す事が出来なかった。

自分達が旅してきたブレイドの世界とは、全く状況が違ったからだ。

今までの話をまとめようとしていた夏海よりも早く、士が先に答えた。

「なるほど、だいたい分かった。つまり俺は……………ん、来たか」

「士？」

士が何かを言おうとした直後、士のスーツの上ポケットに入っていたスマホに着信が入った。ユウスケが不思議そうな顔で見つめると、士がニヤリと笑って答えた。

「早速連絡だよ、そのBOARDのお偉いさんからみたいだぜ」

「お偉いさん……………？ まさか、^{キング}Kか!!」

「橘さん！ すぐに剣崎さんを!!」

「まあ慌てるな、今出て色々聞いてやるから……………おう、元気してるか」

士が明るい態度で通話に応じた途端、向こう側から声が聞こえてきた。

「やあ支配人、私は至って元気だよ。まあ今横に居る人間の方は違いかもだけど」
「横に居る人間？ 一体誰の事なんだ？」

「おや？ お聞きではない？ それは困ったことになりましたな」

「おい、誰なんだって聞いてんだ。答えろ『パラドキサ』!!!」

「ハハハ、そう熱くならず。ただの人間ですよ、名前は………剣崎 一真？」
「何!!!」

電話越しの言葉に驚く士と激昂する橘。

だが向こう側に居るハートのカテゴリーKの『パラドキサアンデッド』は

高音程の声で高らかに笑って、こちらの感情を更に揺さぶるような口調で話す。

「落ち着いてください支配人。さあ、共に人間種の滅びる断末魔を聞きましょう」

「………俺の趣味じゃないな、今すぐ迎えをよこせ。客人も連れて行く」

「おや、こんな時間にですか。まあ構いませんが、今はどちらに？」

「あー、いや、俺が近くまで行くから途中で拾ってくれ」

「了解しました、ですがお気を付けください。もしも支配人が今

仮面ライダー共のアジト付近にいるのなら、大変ですからね」

少し妙な話し方をするパラドキサに士は疑問を抱くが、それよりもさらに疑問を抱かせるような言葉を耳にして、そちらのほうへ注意が向いてしまった。

「何が大変なんだ？」

「いえ、会議中にブレイドが我々の元へ無謀にも飛び込んできたので

丁重におもてなしをしたところ、なんと我々を人間の本拠地へご招待頂けるとの事でしたので、早速『コーカサス』が向かったところなんですよ」

「スピードのKが、何処へ行ったのだと？」

士が再度パラドキサに問いかけようとした直後、睦月が写真館を飛び出した。

橘とユウスケが慌てて後を追ったが、写真館のすぐそばにいたソレが睦月を阻んでいた。

最後に士が出て来て、悔しそうに顔を歪ませながら呟く。

「クソ、そういう事かよ……。悪知恵だけは相変わらずかパラドキサア!!」

「これは支配人？　こんなところで出くわすとは奇妙な偶然があるものだ。

偶然ついでに、この場で今すぐ朽ち果てるがいい。我らが栄えんが為にな!!」

BOARD本社、研究機関

「さて、と……………お膳立てはこれくらいでいいかな。後は頼むぞコーカサス」

薄暗い研究室の中で、様々な薬品や書類に用途不明の装置などに囲まれた空間で一人本来の姿でスマホの通話を切ったパラドキサは、自分の目の前にある巨大な円柱状の水槽の中に浮かぶソレを見つめながら、再び笑い出した。

「全ては計画通りだ……………後は支配人殿の持つ鍵さえ手に入れば、フッフ。」

ブレイド、君の無謀さには感謝してもし切れんよ。君の力と鍵があればついに、ついに開くことが出来るんだよ、進化の扉をね……………」

目の前の水槽の中には薄い緑色の液体が溜まっていて、その内部が

少し見える程度だったが、彼にはそれで充分だった。水槽の表面を異形の指でなぞりながら、一人呟いた。

「もうすぐ君が、いや……君と私が統べる世界が出来上がる。

楽しみだよ、早く君の力が見てみたいよ『アルビノカリス』……………ハハハ!!!!」

パラドキサはただただ、高らかに笑っていた。

Ep, 07 『WILDCARD ～逆襲の切札～』

「ギラファには悪いが、ここで潰してくれるぞギャレン！」

突如士達の前に現れたスペードのK、^{キング}コーカサスアンデッドがその巨体から手にした大剣を目の前で硬直している四人に向けて振り下ろす。

四人は即座に回避行動をとってその攻撃を避けるが、ギラファは他の三人に目もくれず

たった一人に目標を絞って攻撃を続ける。

その標的は——門矢 士だった。

士は自分が狙われていると理解した直後、すぐに光 写真館から離れて走り出した。ユウスケは士の取った行動を理解出来ずに戸惑うが、橘はその行動の真意を把握して同じように士の後を追いかけて行った。

「ユウスケ君、追いかけるぞ！ 睦月行くぞ！」

「は、ハイ！ 夏海ちゃん、ここで待っててね!!」

士が先に走り出し、その後を橘とユウスケが追う。

その姿を見てコーカサスが怒りを露わにして雄叫びを上げながら追いかける。

三人と一体が写真館から遠ざかる姿を眺めながら、その男は低くうつつすらと呟く。

「……ハイ、すぐ行きますよ橘さん。」

サテ、ソロソロ動クカ」

そう言つてその男

スパイダーアンデッド
上城

睦月は写真館へ戻つていった。

写真館から近くのパートの立体駐車場まで走ってきた三人は、駐車場の中へと入って少し息を整えながら背後を確認するが、コーカサスの姿は見えなかった。

その光景に安堵した土達だったが、駐車場の二階が轟音が響き何かが落下してきた。灰煙を撒き散らしながら現れたのは一つの異形、巨漢のアンデッドだった。

三人はその姿を目視した直後、敵との遭遇とは別の緊張に襲われた。

「お、お前は……………『ギラファアンデッド』!!」

「コーカサスめ、ギャレンは私の獲物であるというのに……………だがまずは!!」

「え、え!! さっきのヤツと違う!」

「今度はギラファか、やれやれ面倒になってきたな」

橘は憎しみの籠った視線を浴びせ、ユウスケは自分の見たアンデッドとの違いに驚き
そして士はただ冷静に目の前の状況に愚痴をこぼした。

突如現れたダイヤのK、ギラファアンデッドは手にした双剣で士に切りかかった。

「クソ、また俺か! 人気者でいるのも考え物だ、なっ!!」

「支配人よ、そろそろ気付くんだな。なぜ自分が狙われているかを!」

右が振り下ろされ、左が薙ぎ払う。

上から袈裟斬りに、下から逆袈裟斬りに。

絶え間ない連続攻撃を、士は息を切らしつつも避け続ける。

「待ってる士！」

「変身!!」

「ギラファ……俺が相手だ、変身！」

ギラファが士に意識を向けている間に、橘とユウスケは既に変身するための手順を完了していて、二人は士を援護するために変身した。

ユウスケは体内から浮き出たベルトの左側にあるスイッチを起動し、橘はカードを挿入したバックルのレバーを引いてターンアップさせた。

徐々に身体に赤い鎧が装着され、頭部に金色の角が生えて変身を完了したクウガ。ダイヤのカテゴリリーの紋章が浮き上がり、それが身体を通過して変身したギャレン。

二人は同時に走り出して士の援護に向かった。

「おおおおりやああ!!」

「なんだこの赤いライダーは!! ええい鬱陶しい！」

「今だダイケイド、そこから離れる！」

「……………感謝するぜ、これで俺も

「変身！」

クウガがギラファに飛びかかって土から引き剥がし、ギャレンの銃撃で牽制しているその隙に、土は懐からデイケイドライバーを取り出して腰に装着した。以前と同じ手順でカードをバックルに挿入し、バックルを回転させる。

『KAMEN RIDE』
—————
『DECADE』

音声ガイドと共に九つの幻影が浮かび上がり、一つに集合する。

大小さまざまな長方形の板が顔面に突き刺さり、鎧に色を付けていく。最後に彼の双眸に翡翠色の輝きが灯り、変身を完了した。

「時間稼ぎご苦労さんつと、そこどけユウスケ」

『ATTACK RIDE』
—————
『BLAST』

「へっ？ うおおおツツ!!?!」

変身を終えたデイケイドは即座にガンモードのライドブツカーからカードを取り出し、ベルトのバックルに挿入して読み込み、射撃強化の効果を反映させて撃ち込む。

間一髪でデイケイドの銃撃を避けたクウガが、ギラファを蹴り飛ばしながら愚痴る。

「あつぶないだろ士！ 撃つなら撃つって「撃つぞー」早いよ!!」

「貴様ら……………グウオオ!!!!」

「忘れるなカテゴリーK、俺もいるぞ……………」

クウガの蹴りとデイケイドの銃撃を喰らって吹き飛ばされ、立ち上がったギラファに背後から鋭い角度でギャレンの射撃が襲い掛かった。

不意打ちに虚を突かれたギラファは再び体勢を崩してしまふ。

好機とばかりにクウガが飛びかかるが、今度は彼が背後からの奇襲でダメージを受けて倒れてしまった。

「うっ……………くっ」

「ユウスケ！ つたくもう追いついてきやがったのか」

「クソ、カテゴリーKが二体とは……………分が悪過ぎる」

クウガを背後から襲ったのは、一振りの大剣。

その柄を握っていたのは、先程写真館にやってきたコーカサスアンデッドだった。強襲に倒れたクウガを片手で掴んで駐車場の外へと放り投げる。

ゴロゴロと転がっていったクウガの先には、人影が二つ見えた。

ギャレンとデイケイドはギラファと戦いながらもその人影を視認していた。デイケイドは至って普通だったが、ギャレンは仮面越しにも絶望が見えた。

「おい……………睦月、何故……………何故ソイツと一緒にいる?!」

「ギャレン、よそ見してんなー。ぐっ……………クソー!」

ギャレンが睦月ともう一人の方向を向いて動かなくなった。

その為、たった一人でギラファと対峙することになったデイケイドは押され始めた。クウガはよろよろと立ち上がって後ろを振り返って安堵のため息を漏らす。

「なんだ睦月君か、君もライダーなんだろう？ 少し手を貸してくれ」

『……………邪魔ダ』

「え？ うわああああ!!」

眼前のコーカサスに向けて構えをとっていたクウガを、生身の睦月が殴り飛ばした。突然のことで受け身も取ることが出来ないクウガは、またアスファルトの地面に倒れ伏した。

彼を殴った睦月の背後から、黒い革のコートと黒いサングラスをつけた強面の男が現れた。

その男の姿は、両手を顔の前でクロスさせて一気に振り下ろすと異形へと変貌した。

「さてと……準備は整った、やれ『仮面ライダーレンゲル』」

『ハアアア………変身!!』

『OPEN UP』

猛毒の吐息でも吐き出すかの如くおどろおどろしい声を漏らしながら、ベルトを装着し

自らであるカテゴリーのカードを挿入して、ギャレンとは違う機構を起動する。自分の紋章をくぐり抜け、金と浅い黒色の鎧をまとった戦士が現れた。

その双眸は、いつにも増して毒々しい真紫色の輝きを宿しているように見える。

ギャレンはすぐに右手のギャレンラウザーの銃口をレンゲルの隣の異形に向けた。

怒りに肩と銃口を震わせながら、ギャレンはその異形に怒鳴った。

「貴様、睦月に何をした?! 答えろピーコック!!」

「……………ギャレン、橘……………お前にもう用はない」

そう言つてピーコックと呼ばれたダイヤのカテゴリーJは、腕から

手裏剣のように自らの羽根を飛ばして攻撃してきた。

その全てを『RAPID』のカードを使用した高速弾で撃ち落としていくギャレン。すると接近戦を挑もうとピーコックがギャレンに向かって走り出してきた。

ギャレンも同じように射撃を止めてピーコックへと突っ込んでいく。

そして両者共にぶつかる直前に互いの拳を突き出して打ち止める。

「貴様だけは、貴様だけはあああッ!!!!」

「復讐、か。いいぞ橘、もつともつと強さに溺れる、歪んだ力に飲まれる!!」

「何でなんだ睦月君！ どうして俺を!!」

『邪魔ダト言ツタダロウ!!』

睦月の変身したレンゲルの猛攻を受けて、状況を理解出来ずにただ一方的に彼の攻撃を受け続けて既にクウガの赤い装甲にはヒビが入っていた。それでもクウガはレンゲルに攻撃することが出来ないうでいた。

「止めろ！　なんでこんな事を!?!」

『エエイ邪魔ダ、失セロ!!』

『STAB』

『RUSH』

『BLIZZARD』

『BLIZZARD STING』

レンゲルの放ったコンボ攻撃が、クウガの腹部装甲を貫いた
見えた。

かに

「……………よっしー！」

『何ダト!?』

クウガはレンゲルの突き出したレンゲルラウザーを、両手で見事に受け止めていた。だが、その両手がみるみるうちに凍り、氷結していく。

それすらも構わずにクウガはレンゲルラウザーを握る力を上げていく。

ミシミシと音を立てて亀裂が奔っていく百杖を見て、レンゲルは焦りの表情を浮かべる。

「うおおおおおツツ!!!!」

雄叫びを上げながらさらに力を込めていった結果、やはりと言うべきだろうか

冷気を纏っていたレンゲルラウザーの先端は、クウガの握力に耐え切れずに砕けた。

バラバラになった先端を驚愕の眼差しで見つめるレンゲルに、クウガは再度語り掛ける。

「はあ……………はあ……………なあ、どうしちゃったんだよ睦月君！ 目を覚ましてくれよ!!」

『……一体何ナンダ貴様ハ、ブレイドデモギヤレンデモナイ、貴様ハ何者ダ!!』
 「え……………? そのセリフって俺に聞いて大丈夫なの? まあいいか」

そう言つてクウガは一旦構えを解いて、ただぶらりとしてただ立つ。

砕いたレンゲルラウザーの破片を踏み砕きつつ、クウガは堂々とした態度で言い放つ。

「俺は『仮面ライダークウガ』! あ、未確認4号の方が合つてるか?」

『訳ノ分カラン事ヲ!! 貴様ノヨウナライダーハ存在シナイ!』

「訳が分かんないのはそっちだろ! でも、俺でも分かることが一つだけあるぜ!!」
 『……………?』

「お前は睦月君じゃない、睦月君の身体を使った何かだな」

『ホウ……………ダガ、ソレガドウシタ』

「へっ、お前が睦月君じゃないなら手加減は要らないと思つてな!」

そう不敵に笑いながら駆け出したクウガは、右拳にクウガの紋章を発現させた。

その輝きに目が眩んだレンゲルは一瞬だがその身体を硬直させた、その隙をクウガは

捉えた。

ダッシュによって加わった速度と共に、クウガの紋印の刻まれた拳をレンゲルに叩き込む。

クウガの攻撃を左手でいなしたレンゲルだったが、直後その左手に激痛が走り悲鳴を上げた。

ドクンドクンと熱を帯び、心臓の鼓動が早まるような感覚に襲われ

キイイイインツ!!

浄化、爆発。

オレンジでも朱でもない、金色の炎を噴き上げて地面を転がるレンゲル。その爆発の威力を見たクウガは、少しの違和感と罪悪感を感じた。

「あ、アレ？ あの爆発ってあんな威力あったっけ？」

『グアアアアアアツツ！！！！！！』

激痛にのたうち回るレンゲルの姿に更なる違和感を感じた。

光に充てられたレンゲルの影が、人型から異形へと変異を繰り返しているのが見え
た。

その二つの影が入れ替わる間隔が段々と短くなるのを見て、彼は閃いた。

(少し、いやかなり痛むかもしれないけど……………許してくれ、睦月君！)

心の中で謝罪を述べた後で、クウガは少し距離を取った。

そしてそのまま右腕を身体の前に、左腕を折り曲げ、変身時と同じポーズをとった。

その直後、両腕をバツと開きながら上半身を折りたたみつつ腰を落とし

右足を僅かに左足より後ろへずらして、全身に流れるエネルギーをそこへ溜めた。

「はあああああ……………」

右足に十分にエネルギーを蓄えると、クウガは今ゆっくりと立ち上がっている敵に狙いを定めて、一直線に向かって最大全速で駆け出していった。

クウガの接近に気付いたレンゲルは再びレンゲルラウザーで攻撃を仕掛けようとするが

肝心のラウザーの先端が先程へし折られていたことを思い出し、回避に専念する。だが、突然レンゲルの意識が遠のいて貧血に陥ったような感覚にみまわれた。

『ナ……………ンダ、コレハ……………』

『……………させないぞ、クローバーのカテゴリー！ いや、スパイダー!!』

『何!? 貴様、上城 睦月カ！ 何故ダ、貴様ハ俺ノ精神世界ノ底デ眠ツテ……………』

『今のあの人の攻撃で、お前の支配が弱まったんだ。僕は、またお前に負けたんだな』

『フザケルナ!! 俺ハ今度こそ、俺ハ絶対的ナ勝者ニナルノダ!!』

『無駄だ、諦めろスパイダー。僕だって痛そうなの我慢してるんだ、道連れになれ』

『ウツ……………ガアアアアアアツツ!!!!』

「おおりやああああ!!!!」

クウガが走る事を止め、両足で大きく跳躍する。

そしてその勢いのまま、光り輝く右足を前へと突き出しダイブキックをかます。

その間レンゲルは俯いたまま何もせず、まるでこれから起こる事を受け入れている様だった。

やがてクウガの蹴りはレンゲルの目前まで届き、そして

『ギヤアアアアアアアアアアアッ!!!!!!』

「おいおい、こんなライダー……俺は知らんぞ」

一方、立体駐車場内部で二体の上級アンデッドを独りで相手取っていた士は目の前に広がっている光景に、ただただ呆然としていた。

さつきまで戦っていた二体のアンデッドは、影も形も無い。

目の前に現れたライダーによって、封印されたからだ

大きく浮き上がった白い両肩のアーマーに、胸部を覆う灰褐色の装甲。その全身のスーツには、所々に赤く鋭角的なラインが刻まれている。真ん中で二つに割れているようなベルトのバックルには、白濁色のハートの刻印。そして、最も特徴的なハート型で濁ったような濃白色のアイカバー。

デイケイドの前に立ち塞がったのは、彼が今まで目にしたこと無いな気味なままでにあるライダーによく似た謎のライダーだった。

Ep, 08 『LASTCALL ～駆け引き～』

日も高く昇り、雲も流れている陽気な昼下がりの中で交わる異形達。

空の青さも雲の白さも木々の緑も、觀賞する暇なく続いてはいる衝突音。

人口建築物と自然の織りなす風景すら、今この時に置いては何の価値も無い。

火花を散らしてぶつかり合う異形達の中に、真夏の太陽の如く燃えている男がいた。

頭部にはクワガタのような形状の角、胴部にはダイヤを模した構造の鎧を纏い

その明緑色の双眸に似つかわしくないほどの憎しみを滾らせ、今もなお吠え続けている。

男の名は、その戦士の名は、『仮面ライダーギャレン』。

右手に彼の専用武器であるギャレンラウザーを握りしめ、戦闘に身を投じている。

そんな彼は、目の前にいる異形に対して苛烈としか言えないような猛攻を繰り出す。

だが相手の異形もギャレンの猛攻を防ぎ、あるいは躲してダメージを軽減している。

ギャレンの左フックが異形――――ピーコックアンデッドの右肩に直撃す

るも、

ピーコックの繰り出した羽根の手裏剣がギャレンの腹部に突き刺さり猛攻を中断させた。

かなりの勢いで腹部に刺さった羽根を払いながらギャレンは体勢を立て直して敵を睨む。

憎悪という言葉の枠には収まりきれないほどの、強く、鋭く、尖りきった視線で。

「どうした橘。お前の私への『報復心』はその程度か？」

「黙れ……………俺は貴様を必ず倒す!! 貴様だけは生かしておけん!!」

再び走り出してその勢いのままに左拳を振るうギャレンを、ピーコックは嘲笑った。両腕の羽根の手裏剣を大量に放出させ、ギャレンに浴びせかける。

ギャレンは攻撃のモーシヨンの途中だった為に回避が出来ずに、全弾直撃してしま

う。
だが体勢を大きく崩しながらも、今度は右手のギャレンラウザーを乱射してピーコックに

決して小さくは無いダメージを与えることに成功した。

「どうしたピーコック。貴様の俺への『余裕』は、もうお終いか？」

「……………凶に乗るなよ橘。誰が貴様に死の恐怖を乗り越える力を与えたと思ってる！」

「ふざけるな！ 何が力だ！！ 貴様のせいで
『小夜子』は死んだんだ！！！！」

全身を、肩を、握りしめた拳を、怒りを超えた激情で震わせるギャレン。

彼の仮面の下にある素顔は、他人には理解出来ないほど複雑な感情が入り混じっていた。

ピーコックがフンと鼻を鳴らして肩をすくめつつ、ギャレンを挑発するように語る。

「それは責任転嫁というものだぞ橘。あの人間を殺したのは……………最終的にはお前なのだ」

「いい加減にしろ！！ もう貴様と話すことは、何も無い！！」

「それはこちらと同じだ。我らの理想とする世界のために、消える橘！！」

ピーコックとギャレンが共に咆哮を上げながら互いに距離を詰めていく。

ギャレンは右手の銃で射撃しつつ、ピーコックは羽根の手裏剣でそれを堅実にガードしている。

互いの距離が手を伸ばせば届くほどの距離になった瞬間に、ピーコックが両足で跳躍した。

ギャレンはその行動に驚いたが、背後は取らせんとばかりに自分も後ろを向きつつ片足で跳ねる。

振り向きざまにギャレンラウザーの照準を敵に定め、トリガーを引いて弾丸を発射する。

思惑通りに放たれた銃弾がピーコックの右脇腹に当たり、アンデッドの緑色の体液を撒き散らす。

思わぬ攻撃に体勢を崩してそのままコンクリートの地面に落下したピーコックをギャレンは睨む。

「……はあ、はあ………俺は彼女を巻き込みたくなかったんだ」

息を整えつつ立ちあがりながら、ギャレンは独り言のように呟きだした。

その言葉を聞いていたピーコックもまた、硝煙を噴き上げる身体をゆっくりと起こし

て言った。

「その結果があのだらまか。お前は弱いままだったな、所詮貴様に誰かを守ることなど出来るのだ」

「……………そうかもな。だがそれでも、彼女だけは弱いままの俺でもいいと言ってくれた」

ピーコックが腕を振るって羽根の手裏剣を弾き飛ばすと、ギャレンは一枚のカードをホルダーから

取り出して、ギャレンラウザーのカード読み込み口に挿入してラウズさせる。

『BULLET』

ダイヤの2のカード、『バレット』を読み込んで威力を底上げした銃弾を発射する。

その弾丸は先程とは比べ物にならない威力で羽根を弾き、そのままピーコックに向かっていた。

予想外の結果に驚愕したピーコックの全身に銃弾が直撃し、煙と緑の血を噴き上げ

た。

「グウウ！ ……………バカな、アレはカテゴリー2のはずだ。ここまでの力が何故
!!」

「俺は、俺は彼女の言葉に癒された。彼女の笑顔に、俺は安らぎを感じていた……………」
ギヤレンの銃弾で再び体勢を崩して膝をついたピーコックの方を向き、銃を構えなおす。

先程のような怒りによつての銃口のブレはもう無くなっていた。

ただ冷静に、確実に、敵を屠るために向けた殺意は研ぎ澄まされ、その時を待っている。

「この優しい光を、温もりを、決して消させたりしない。……………俺はそう誓ったんだ
!!」

仮面の明緑色の双眸が、彼の決意を表すように光を灯し始めた。

「ふっ……だがその決意も水泡に帰したな橘」

「いや、そんな事は無いさ。ここで貴様を倒せば……あの世で小夜子に顔向け出来る!!」

そう言い放ったギャレンはホルダーから、三枚のカードを素早く取り出した。

それを見たピーコックは焦りを見せた。

三枚のカードの意味を理解して

いたからだ。

組み合わせによつてはライダーシステム装着者の命を削つてしまうほどの力をもつて

上級アンデッドを一撃で打ち倒してしまうとも言われている、スリーカードのコンボ技。

今まさにそれを発動させようとしているギャレンを即座に排除しようとする行動を始める。

威力が高過ぎる為に自分に被害が及ぶ範囲内で使うことが躊躇われていた火炎球を両手に

生み出して、片方ずつギャレンに向けて投擲する。

「橘！ 俺と相打ちにでもなるつもりか!!」

「貴様を確実に封印出来れば、俺にもう未練は無い。……………地獄への道連れだ!!」

「バカな、俺は死ぬことの無い存在だ。地獄になど俺が向かう事は無い!!」

「……………確かにそうだな。なら、貴様は封印の牢獄でその永遠の生涯を過ごせ!!」

ピーコックの放った火炎球が迫り来る中で、ギャレンはカードを素早く読み込む。

三枚のカードを順番に読み込んでその力を自身に反映し、溢れる力を一気に開放する。

『DROP』

『FIRE』

『GEMINI』

『BURNING DIVIDE』

ダイヤの5、6、『ドロップ』、『ファイア』、『ジエミニ』を発動したギャレンはギャレンラウザーを右腰に戻し、そのまま右手をラウザーに添えながら左手を前に突

き出す。

そして左手をゆっくりと曲げながら力を込めて、仮面の双眸と角が光を放つ。

眼前にピーコックの放った火炎球が迫っているにも関わらず、彼の頭の中は全く別の事で

埋め尽くされていた。

かつての幸せで、かつての誓いで、か

つて愛した人で。

「消えろ橘ア!! 出来損ないの分際で、人間の分際でエッ!!」

ギャレンの攻撃の体勢を崩せないと悟ったピーコックは、さらに火炎球を投擲する。

最初に放った方の火炎球がギャレンに直撃するまさにその瞬間、ギャレンの身体が輝いた。

広げて構えていた両足をその場で揃えて大きく跳躍したギャレンに再び火炎球を放つ。

だがその火炎球がぶつかる直前、ギャレンの体から光が消えると共にその体が二つに裂けた。

「待っていてくれ、俺もすぐにそっちへ行くから………だがその前にコイツだけは!!」

「よせ、止めろ橘!! 早まるな!! 止めろおおおおおッ!!!!」

否、一人だったギャレンが二人に分裂しながら空中で半回転して身をよじる。

彼らの両足からは『ファイア』の効果で紅蓮の炎が周りを焼き尽くさんと放出され続けている。

そのままもう一度身をよじりながら回転して位置を調整した二人のギャレンは降下し始めた。

そして片方のギャレンが、ほんの僅かな差でもう一人より先にピーコックに辿り着いた。

だがピーコックはギャレンの『バーニングデイド』を両腕をクロスさせて受け止めた。

それでも威力を殺し切れずに、コンクリートの地面に亀裂を奔らせながら体勢を崩す。

「小夜子おお………ッッ!!!!!!」

力を振り絞ってギャレンの攻撃を凌ぎ切ろうとしているピーコックに対し、さらに追い打ちをかけるようにもう一人のギャレンが回転しつつオーバーヘッドの要領で

上段から蹴りを放ち、2乗の力でピーコックをねじ伏せる。

遂に耐え切れなくなったピーコックの不死の肉体に、炎でバツを描くように蹴りを互いに浴びせたギャレンは着地の瞬間に一人に戻り、少し粗めにコンクリートへ着地した。

そしてゆっくりと立ち上がりつつ振り返り、地に伏したピーコックを見つめる。

「……………終わったよ、小夜子。これで俺も、そっち……………に……………」

『ATTACK RIDE
SLASH』

せ
バックルにカードを装填し、その力を右手のライドブツカーのソードモードに反映さ

剣にマゼンタカラーの光を帯びさせ、多重に分身した刀剣部分で眼前の『未知』を
迷いなく攻撃しようと考えた士は、脚に力を込めて一目散に駆け出した。

（何なんだコイツは？ まるで色の反転したカリスみてえな………試してみるか）

そのまま士は右手の剣を白いライダーに向けて振り下ろした。

だがその白いライダーは士の攻撃を防ぐでも躲すでもなく、ただ直撃した。

違和感を感じた士だったが、好機だと手応えを感じたのかさらに追い打ちをかける。

身体を捻って左足で裏拳のようにして蹴りを放ち、流れるように右手を振るって斬る。

白いライダーは一連の動き全てに対して、全く動きを見せなかった。

「反撃しないってのは、余裕って事か？」

「いいや違うなあ支配人。彼はまだ『生まれて間もない』んだよ」

「その声………パラドキサカ」

「いやはや、ご名答」

士が疑問を口にした直後、白いライダーの背後から聞き慣れた声が響いて来た。

その声の主を士が特定すると、その相手
—— パラドキサアンデッドが士に
える。

パラドキサの言葉にさらに疑問を抱いた士は、ソードモードのライドブツカーの切先を下に向けて一旦戦闘行為を中断した。

「生まれて間もない、だと？ どういう事だパラドキサ」

「それは支配人が知らずともよい事だ。さあ『アルビノカリス』、奴を倒すのだ」

「はっ、さつきから手も足も出ないコイツが俺を倒せると思ってるのか？」

「勿論だとも。その為にわざわざあの2体を喰わせてやったのだからねえ」

「何だと？」

士がパラドキサの言葉に対してさらに口を紡ごうとした直後に、アルビノカリスと呼ばれた白いライダーは二枚のカードを体内から素手で取り出し、腰のバックルの溝に読み込ませてカードの効果を自身に反映させる。

『REVOLUTION KING』

『REVOLUTION KING』

アルビノカリスが使用したのは二枚のカテゴリキングのカードだった。

スペードのK、青みがかった黄金の剣の絵柄の『レボリユーシオンヘラクレス』。

ダイヤのK、緑がかった黄金色の双剣の絵柄の『レボリユーションギラファ』。

その二枚を読み込んだアルビノカリスの左腕には黄金の箆手と大剣が出現し、

右腕には黄金色の刺々しい箆手と薙刀状になった一対の双剣が出現し装備されていた。

「最上級アンデッド2体を喰わせた彼に、敵などいない。後は貴方だけだ支配人！」

「どうして俺を狙う? …………… いや待て、そうか。そういうことか」

「ようやく理解したかね? 我々の真の狙いは君の持っているその

「『ディケイドの世界を渡る力!!!!』」

士とパラドキサが同時に口にした言葉の意味を、士は改めて理解した。

何故自分がこの世界に来たのか。

この世界で自分がアンデッドの寄生した会社の支配人になったのか。そして何故自分だけがこうも狙われ続けるのか。

全ては自分の、デイケイドが持つ世界を渡る特異な能力を求めてのことだったのだ。

「その力があれば私達はこの世界だけでなく、全ての世界を支配出来るのだよ!!」

「俺にはどうでもいい力だが、お前らにはもったいなさ過ぎる力だ。誰がやるかよ」

「そう言うと思っていたさ。だからこうして二人で来たんだ……さあやれ!!」

パラドキサの号令と共に両手の武器を構えながら駆け出したアルビノカリス。

それに対して士は切先を下ろしていたライドブツカーを再び振り上げ対抗する。

士の前までやってきたアルビノカリスは、左手の大剣を大きく構えて振り下ろした。だが士は先程の彼のように黙って攻撃を受けるような愚は犯さず、ライドブツカーで受けきれない事を瞬時に見切って回避し、左手で薙ぎ払うように振るわれた相手の双剣をライドブツカーを斜めに構え、いなすように攻撃を防御した。

「どーした? やっぱりこんなモンかよ」

「おいおい、私が黙って見ていただけかと思ったかね?」

声のする方を見ると既にパラドキサが攻撃を仕掛けてきていた。腕を振るってそこから三日月状の衝撃波を発生させてデイケイドに向けて放つていった。

それを目視したデイケイドは剣を無理矢理振るって、眼前のアルビノカリスを自分とパラドキサの衝撃波との直線上に立たせて、自分は真横へと前転して回避した。回避行動を終えた土が起き上がって見た光景は、まさに予想通りのものだった。

「全く、酷い事をするねえ支配人。君もそう思うだろうアルビノカリス？」

『……………』

「ん？ おいどうした？ 君の敵はあっちだアルビノカリス！」

するとアルビノカリスはゆっくりと振り返り、衝撃波の発生源であったパラドキサをその白濁色のハート形をしたモノアイマスクで睨むようにしながら剣を構えた。パラドキサはその行動に危険を感じたのか、デイケイドを指さして攻撃を促す。しかしアルビノカリスは彼の言葉に耳を貸さずに、右手の双剣を投擲した。

「や、止めろアルビノカリス！ 敵は奴だ、私ではない!!」

『……………イタダキマス』

「よせえええツ!!!!」

投擲された薙刀状の双剣は弧を描いてパラドキサの胸部に突き刺さった。

直後、その剣が鈍く輝くと同時に、パラドキサの肉体が徐々に枯れ始めた。

先程士が2体の上級アンデッドが消えた時に目にした光景と全く同じ現象だった。

おそらくあの剣は、アンデッドの体液を啜って搾り取ろうとしているのだろう。

いくら不死身と言えど、肉体に酸素を送る血液がなければ生命活動を維持するのは至難の業だろう。アルビノカリスはその生命的な弱点を突いて2体を吸収したのだ。

「や……………や、め……………」

『……………オ、イシイ』

「くっそ、趣味の悪いモン作りやがって」

どんどん体から潤いを、生命独特のみずみずしさを失っていくパラドキサを見てさっすきの攻撃もマトモに受けていたら同じようになっていたと少し恐怖した士。

気づかれないようにしながらライドブツカーをガンモードへと切り替える。

それが終わった直後、ドサリと力無くパラドキサが地面に倒れた。

パラドキサの胸部の剣を引き抜いたアルビノカリスは、緑色の光を体から放ち

左手の剣を地面に突き刺してから、再び体内に手をつ込んで何かを取り出した。

その何かをベルトのバックルへと近付ける。

「させるかよ!!」

「ッ!!」

その何かはバックルの中央部の溝へ接する直前に、土の放った光弾がそれを弾く。

だがその何かを目視し、その正体が自分の予想通りのものだったと思った直後、

それは影も形も無くどこかへと消えてしまっていた。

辺りを見回すが、それらしいものがどこにも見当たらなかった。

「……………何だ？ カードが消えた？」

『……………ドコ？ パラド、キサ……………ドコオ？』

消えた何か

ハートのカテゴリーキングのカードを探して

アルビノカリスがフラフラと彷徨うが、やがてデイケイドの方を見て動かなくなる。そのまま両手の剣を構えて、宣戦布告のように告げた。

『……………パラ、ドキサ、ダセ……………ヨコセエ!!』

「やれやれ、育て親に似てきたなあおい!!」

デイケイドとアルビノカリス、ギャレンとピーコックが戦っている立体駐車場の近くに放棄されていた何かの工場の跡地に、その男は何の前触れも無く現れた。

軽快な電子音と共に、自身を覆っていた透明な被膜が三つに分散して散り散りになって消えて、本来の姿を誰にでもなく露わにした。

全身を包むデイケイドに酷似した構造のゼオンカラーのスーツ。

デイケイドと非常に似た形状の腹部の装甲は、彼とは違い混じり気の無いブラック。彼の腰にあるベルトのバックルも、デイケイドとは異なり簡素なものになっている。

そして何より、彼の仮面は巨大な板状のプレートで上半分が覆われていたのだった。

この工場跡に似つかわしくないほど鮮やかな姿のちんにゆうしゃ闖入者は、右手に収めた薄い赤色に染まったハートの刻印の刻まれたカードを満足げに眺めながら呟いた。

「……………やつと手に入れたよ、幻のカテゴリーK。君を探すのに随分苦勞したよ」

左手に握っている幾何学的な紋印の施された銃を肩に掲げて呟いた彼は、戦闘の音であろう轟音に耳を傾けて、再び先程の位置に視線を戻した。

「この辺りも物騒になりそうだ。さあ戻ろうか、僕のお宝君？」

カードを懐にしまってこの場を去ろうとしたゼオンカラーの男はそこで初めて自分の右手に収まっていたカードが無くなっていることに気付いた。慌てて地面を見回したが、ふと自分の視界の隅を何かが横切ったのを感じ左手の大口径の銃をその方向へと向けて、銃弾を発射してから尋ねた。

「誰だ？ 僕のお宝を奪ったのは、そこに隠れてる君かな？」

銃口を向けながらゆっくりと眼前の大きな目なドラム缶に近付く。しかし突然、自分の背後から甲高く耳障りな声が聞こえてきた。

『うるせえな、どうせコレもお前のじゃねえんだろ？』

とにかく、俺達から盗んでったアレをさっさと返しやがれこの盗人!!』

「(背後を取られた……この僕が?) ……………何の事か分からない———— なっ!!」

『うおおっ!!』

前方へと向けていた銃口を振り向きざま後ろへ向けて乱射する。

すると一瞬だが、自分の目線の少し上辺りに、白い布とオレンジの何かがうつすらと映り込んで消えたのが見えた。

『あつぶねえだろ！ お前殺す気かよ!! ……んまあもう死なないけど』

「……………興味深いね、君は一体何者なんだい？」

『はあ!! お前俺達の大事なアイコン盗んだくせに！』

よくもまあ抜け抜けと言ってくれやがってよお!! 舐めてんのかオイ!!」
「……………アイコン? ああ、コレの事か」

そう言つて銃を下ろした男は、懐から何やら眼球を模した物体を取り出し、銃の代わりに声の主のいるであろう方向へと突き出した。

「これが欲しいのかい? でもコレは僕が拾つた奇妙なお宝だ。

タダであげる訳には、当然行かないわけだ……………だからそれを返したまえ」
『返してもアンタが返してくれる保証は無いだろ?』

するとまたも別の方向から、不思議な格好の青年が現れた。

その青年の腰には、半透明のかぼちやのような形状のバツクルがあった。
青年が言つた言葉に対して、ゼオンカラーの男は心外そうに呟く。

「僕は僕の美学に反することは決してしない。だから信じたまえ」

『一度自分の物を盗んだ相手を、今更信じろつて?』

「……………頑固なヤツだね君は。そんなんだとロクな死に方しないよ?」

『ッ!!』

ぶつきらぼうに呟いた男の言葉に何か思うことがあったのか、青年は若干の怒りを込めた視線をゼオンカラーの男に向けながら右手に男の持っているソレとよく似た物を取り出し、バツクルに装填した。

「おや、君はまだソレを持っていたのか。コイツはいい、それもくれ」

『本性を現したな。残念だが、コレ以上俺のモノは奪わせない!!』

『やつちまええ!! 〔仮面ライダーゴースト〕に変身だ!!』

「……………仮面ライダー、ゴースト?」

青年は自分の傍らにいない見えない何かに声援を受けながら、バツクルの右側に付いている大きなレバーを引き、再びバツクルへと押し戻した。

『バツチリミナア!! バツチリミナア!!』

『カイガン! オレ!!』

「……………君は、仮面ライダーなのかい？」

ゼオンカラーの男が呟き、眼前の青年が首肯する。

『Let, go! 覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!』

青年を何やら黒い霧のようなものがすつぽりと覆い、青年の背後に唐突に現れたオレンジと黒のパーカーがフワフワと意思を持つように動き回って、青年の頭部から彼の身体を包み込み装甲と化した。

『こっちは命燃やしてんだ、返してもらおうからな!!』

「僕の知らないライダー、知らない力、知らないお宝!!」

思いがけない出会いだね、君と僕の出会いはずっと運命ってヤツさ!!
久々に収集家としての情熱が、蘇るようだ!!」

こうして人知れず、オレンジとゼオンがぶつかり合う。

正義の燃える亡霊と、標的を必ず奪う狩人が、己の為に。

E p, 09 『REVOLUTION ~覚醒~』

先程まで、この場所では二人の仮面の戦士が戦っていた。

だが今ではその場所にあるのは煌々と燃え盛る爆炎と戦闘の形跡だけだった。

そして、そのすぐ近くにいるのは髪を垂らした爽やかな印象の青年と、

青年とは全く逆と言ってもいいような雰囲気醸し出している少年の二人だけだ。

彼らの体は、顔も含めてだが見るからにボロボロで疲労困憊といった態だった。

それでも青年は倒れて意識の薄れかけている少年の元へ駆け寄り、安否を確かめた。

少年はゆっくりと目を開き、青年の顔を見た途端にうっすらと笑みを浮かべる。

「……………あな、たは。俺を、助けて、くれ、て」

「良いんだ、もう話さなくていいよ睦月君。もう大丈夫だ」

今なお燃え盛っている炎の灯りで顔を照らされている少年、レンゲルこと睦月は

自分の顔を心底心配そうに覗き込んでいる青年、クウガことユウスケに感謝を述べ

た。

その感謝の言葉を聞いたユウスケは睦月の状態を労わって、優しい返事を返した。

だが睦月は彼の言葉に耳を貸さず、激闘の末に動かすのも煩わしいほど疲弊しきった右腕をブルブルと震わせながら、ユウスケの肩を力強く掴んで望みを託すようにか細く呟く。

「お願い、します……………剣崎さんが、あの、ビルの中に」

「え？ 剣崎さんって、確か写真館で言ってた『もう一人のライダー』?!」

「ハイ……………囚われています、だから！ 早く行つて……………救い出して、くだ……………」

「睦月君？ オイしっかりしろ!!」

睦月がユウスケに剣崎の居所を伝えると共に瞳を閉じ、握っていた手をダランと落としました。

ユウスケは静かに彼をその場に横たわらせ、炎を背に浴びながらゆつくりと立ち上がる。

そして睦月の意思を無駄にしないと胸に刻み、一目散に彼の指さしたビルへと駆け出しました。

「アレ？ でも、なんで睦月君がそんな事知ってたんだ？」

睦月ことレンゲルと戦闘をした場所から、目的のビルへと走り出してから数分後。ユウスケはふとそんな事が頭の中に浮かび上がって、駆けていた足の動きを止めた。しばらく彼はその優秀とは言えない頭脳を回転させて、結論に至った。

「ああそっか、あの時彼は後ろにいたアンデッドに操られてたのかも！」

!!
だとしたら一緒に行動しててもおかしくない……その時の記憶が残ってたのか

睦月がレンゲルに変身した際に背後にいた、橘と因縁があるようだったアンデッドが彼を何らかの方法で操っていたのではという彼の出せる最も納得のいく回答に満足した

ユウスケは、止めていた足を再び稼働させようとしていた。

だがその時、真横にあったみすぼらしい廃工場から、派手な音を立てて何か飛び出した。

「うおおっ!! ビックリしたあ、何なんだよ!!」

「くっ! 思ったよりも手強いか、参ったね……………おや?」

ユウスケが音に驚いてそちらに視線を移すと、彼にとっては久々だが見慣れた姿があつた。

青よりも薄く、水色よりも濃い色合いのゼオンカラーのスーツを纏った旅先の厄介人。

デイケイドの旅先でほぼ必ずと言っていいほど事をややこしくする張本人。

その男の名は『海東^{かいとう} 大樹^{だいき}』、またの名を『仮面ライダー^{仮面ライダー}ディエンド』。

自称お宝マニアという彼は、土やユウスケ達の行く先々で泥棒を行っている。

ユウスケは知り合いと出会った懐かしさと共に、またこの人は、という虚脱感も味わっていた。

自分に向けられた視線に気付いたディエンドはユウスケを視認すると、背後を警戒しつつ

慌てるようにして彼のすぐ近くへと駆け寄っていった。

「やあユウスケ君、久しいね。こんな所で会うなんて、随分奇遇じゃないか」

「え？ あ、ハイ。久しぶりですね……………ってそうじゃなくって！」

「ん？ 何だい、馴れ合いならまた後にしてくれたまえ。今は忙しい」

「は？ い、忙しいって何の用で「ちっ、もう追ってきたのか！ ……え？ ちよつと？」

「デイエンドの方から話しかけてきたのに、こちらの話は完全に無視して振り向く。その態度に少し苛立ちを覚えたユウスケだったが、いつも彼が漂わせている余裕のあ

る 雰囲気は全く感じられない事に、ユウスケは危機感と違和感を同時に感じ取った。

「丁度いい、ユウスケ君。少し僕の仕事を手伝ってもらえないかな？」

「え？ 仕事？ それに手伝って、一体何の……………」

「なに、簡単さ。あの一風変わったライダーを足止めしてくれれば、それで良い」

「へ？ 一風変わった、ライダー？」

「デイエンドが後ろを向きながら軽く左手の銃を向けた先に、同じく視線を向けた

ユウスケだったが、彼の視線の先にはただの廃工場と道路しか見当たらなかった。その事に疑問を抱いたユウスケは、デイエンドに戸惑いの視線を彼に投げかける。

「あの……………そんなのどこにいるんですか？ どこにも、いませんけど？」

「……………今はそんな冗談に付き合っている暇は無いんだが」

「いやいや、いましてどこにも！ 海東さんこそ、何冗談言ってるんですか」

「何……………？ まさか、本当に見えないのか!？」

『正解。その人には俺の姿は見えてないよ。アイコンを持つてるアンタは別だけど』

デイエンドが有り得ないといった風にユウスケに視線を浴びせると、

いつの間にか自分の背後に忍び寄っていた「ゴースト」を名乗るライダーの

鮮明な姿と直接脳内に響いてくるような不透明な声を聞き、再び振り返る。

『さあ、早くそのアイコンを返せ。ソイツは普通のアイコンじゃないんだよ。』

俺の使うアイコンは、世界中の様々な偉業を成し遂げて天寿を全うした“偉人”の魂を形にして、俺に力を貸してくれる物なんだよ。でも、ソレは全く違うんだ』

「ほう、一体どう違うんだい？ 興味が湧いてきたね」

『チツ！ おいたケル、さっさと倒してアイコン取り戻そうぜ!!』

『分かってるって、大丈夫だよユルセン。さあ、早く返してくれ!!』

顔の近くに大きな一つ目の幽霊のような、やたら騒がしい物体を浮かせながらゴーストというライダーは左手をデイエンドに向けて突き出し、歩み寄ってくる。その手の求めているものを右手に握っているデイエンドは、少しずつ後退する。デイエンドの異様な動きを見たユウスケは、その超人的な直感で何かを感じた。

「海東さん、もしかして俺に見えないライダーがそこにいるの?！」

「ユウスケ君、君は士と違って頼りになる。クウガの力でどうにか頼むよ」

「い、いきなりそんな事言われても！ それに、仕事って海東さん言っていましたね。それってやつぱり、泥棒でしょ?！ だったら俺手伝うなんて嫌ですよ!!」

「なっ、君って奴は!!」

『よそ見してる場合かよ泥棒さん!!』

デイエンドが交渉の余地無くユウスケに見放されると、ゴーストがいつの間にか取り出していた分厚い漆黒の長剣をデイエンドに向けて躊躇無く振り下ろした。

当のデイエンドもそのまま受ける訳も無く、銃の砲塔を上手く剣先に押し付けて防ぎ切り、右足でゴーストの左脇腹を蹴り飛ばして一度距離を開けさせる。

そしてアイコンを持った手で器用に腰のホルダーから、自分専用のカードを取り出して

バツクルではなく、銃の砲塔の横部分のスリットに差し込み、銃口を引つ張る。

その奇怪な行動は、デイケイドが変身する時の鮮やかな流れを思い起こさせる。

カードを読み込んだのは、彼が愛用して手放さない『デイエンドライバー』という銃。彼の銃から、ユウスケは聞き慣れた電子音声を耳にした。

【K A M E N R I D E I X A】

「行つてこい、エクソシスト聖職者。あの亡霊ゴーストを悪魔祓いしてみたまえ」

『なんだコイツ！ 今どっから出てきたんだよ!!』

突如三人 否、四人の前に現れたのは、金と純白の仮面の戦士。

西洋の中世時代の騎士を連想させるようなフォルムのその戦士は静かに佇む。

いきなり目の前に現れたイクサに驚愕するゴーストを横目に、デイエンドは

好機とばかりにまた別の廃工場へと走って逃げ込んだ。

「何なんだよ、海東さん……………そうだ、俺急がないと!!」

『つたく、何なんだよコイツ。どこから出てきたんだ!!』

走って逃げるデイエンドの背を見つめながらユウスケは一人呟く。

そして自分は倒れた仲間から託された事があることを今更思い出し、駆け出す。残されたのは、道路の真ん中でただ寡黙に主君の命を果たそうとする人形とオレンジの光を灯した黒い外装のライダーの二人だけだった。

『早くあのアイコンを取り戻さないと……………邪魔するなら容赦しない!!』

「祀ろわぬ冥府の戦士よ、死の世界の者よ。その命、神に返しなさい」

『返す命があったら、自分の命を取り戻してよ!!』

ゴーストが自らを奮い立たせ、イクサが亡霊を否定する。

目の前の光の化身とでも言えそうな戦士を前に、ゴーストの足は前には出ない。だが彼の背後に、見慣れた一つ目の陽気な物体が姿を現した。

『おいタケル！ もうコイツらに用は無い!! さっさとやっちなまえ!!』

『え？ でも、あの泥棒の持つてるアイコン……………あ!!』

『へっへへ、コレだろ？ さっきのドタバタでな!』

『やるじゃん！ んじゃ、早速コレを使って終わらせるか!!』

『おうよ!』

ゴーストは自分の肩の辺りを漂っていた頼れる相棒が取り戻してくれたアイコンを手に取り、自分のベルトのバックルを開いて中にあつたアイコンを取り出して、最初に装填した物とは少し色合いや形状の異なるソレを装填する。そのまま流れるようにバックルの右側のレバーを引き、そして再び戻す。

【アーイー！ バッチリミニアア!! バッチリミニアア!!】

【カイガン！ ノブナガ!!】——— 我の生き様！ 桶狭間!!】

レバーを引いた瞬間に、どこからともなくフード付きのパーカーが現れゴーストの周囲を旋回した後に、頭部から覆いかぶさり強固な装甲と化す。

漆黒に毒々しい紫を混ぜたような形容し難い色合いをした鎧に、まるで地獄の

底から這い出たかのような紅蓮のラインの入ったフードがゴーストを包む。ゴーストの特徴的なマスクには、剣と炎であしらわれた「天」の文字が浮かぶ。彼は背後に、焼けながら崩れ落ちる寺院の中で舞いを奏でる男がいる気がした。

『さてと！ 文字通りに、命燃やすぜ!!』

紅蓮の炎と純黒の怨嗟を纏って、亡霊は剣を構えて駆け出した。

ゴーストとイクサが戦っているであろう道路から少し離れた廃工場。情けなく敗走したディエンドは、逃げた先であることに気付いた。

「——無い。どこだ、どこに行ったんだ僕のお宝!!」

そう、あのゴーストというライダーが取り戻そうとしていたアイコン。しっかりと右手に握っていたはずのソレが、今はどこを探しても見つからない。走る途中で落とした？ 自分はそんなヘマは犯さない。

では、奴に奪われた？ 有り得ない、自分は接触すら許してはいない。

一体何故、どうやって、どのタイミングで。

思考の海に潜ったが、どう考えても結果は出ない。

「非科学的現象………相手は亡霊ゴーストだから、か。笑い話にもならないね」

亡霊相手に吸血鬼バスターを喚よんだのは間違いだっただか。

いやアレでいい、何も問題は無い。

重要なのは、『自分の知らないお宝がこの世にある』という成果だ。

それが証明されただけで、また無数の世界を渡る理由が出来た。

中々の一品だったようだが、他のお宝を収集して満足しよう。

結論付けたディエンドは、小さくフウと息を吐く。

「やるべき事は決まった。待っていたまえ、まだ見ぬほくの世界おたからの力君」

元々人格的におかしかった海東が、さらに奇怪な行動を取っていると
思ったユウスケは、デイエンドがイクサを召喚した直後からその場を後にしていた。
睦月の言っていたビルを目指している途中だったことを思い出したからだった。

久々に出会った知り合いを見放すような罪悪感があったが、それよりも仲間が自分に託した使命を優先させようと考えるのは、彼自身の性格ゆえか。

「着いた……………ここ、ここか！」

息を切らしながらユウスケが辿り着いたのは、外装がボロボロになって隙間風が入りそうなほど倒壊しかけている『BOARD』のロゴの刻まれたビル。そこはかつてこの世界のライダーや人間達が、アンデッドという不死身の怪物から無力な人々を守る為に立てた人類最後の砦ともいべき拠点だった。だが、今やその輝かしき栄華の影も、見ることは叶わない。

「一体、どこにいらんだろう……………」

廃れてはいるが巨大な施設には変わりのない。

この広大な土地のどこかに、剣崎という人物がいるのだろう。そこまで考えて、ユウスケはあることに気付いた。

「あ！ 俺、剣崎って人がどんな人か知らないや……………」

お粗末極まりない。

そんな言葉が似合うほど、あまりにも残念なユウスケという人間。いかにライダーに変身出来るとて、本体がバカではどうしようもない。

「ん？ でも待てよ？ ……って今はアンデッドが占拠してるんだよね？」

だったら人なんていないはずだ、なら人がいればそれは剣崎さんだって事か!!!」

先程とは打って変わって明るい表情を浮かべたユウスケは、

その残念な思考回路の導き出したかなり残念な答えを元に動き出した。

「……………見つからない」

動き出してから既に十分を超えた今、ユウスケは一人愚痴をこぼした。

ピルのあちこちを探しては見えたものの、どこにも見当たらな

人っ子一人どころか、警戒していたアンデッドの姿すらも見かけなかった。

そこで再びユウスケは、その残念な頭をフル稼働させて考える。

「そうか！ 分かったぞ、地下だ！ 地下にいるんだ!!」

上にいなければ下にいる。

かなりどころか割と残念な彼の脳が導き出した答えがそれだった。だが、今回だけに限っては彼の思考が功を奏した。

「み、見つけた！ ホントにあったぞ地下への入り口!!」

さらに施設内を走り回った彼が見つけたのは、実験棟の第三研究室。

その鍵のかかった部屋で、地下へと続いている入り口を見つけた。

ユウスケは少し怖いな、と思いつつもその入り口から地下へと進んだ。

かなり長く感じる階段をゆっくりと降りたユウスケが見たのは、

重く冷たい、傷だらけで今にも壊れそうな鉄製の大きな扉があった。

一体何で付けられた傷なのかは考えない事にしたユウスケは、扉を開けた。

その先にあったのは、何の装飾も施されていない無骨な室内だった。

だが、一つだけ装飾といえるものがあるとしたら、それは鎖。まるで実験動物を繋ぎ留めておくような、そんな風に設置されている鎖だった。そして、その鎖には繋がれていた。そう、繋がっていたのだ。

まるで実験動物のように。

「ひ、人……………？ あ、まさか劍崎さん?!」

ユウスケはその姿を目視した途端に、それまでの恐怖を振り払って鎖に両腕を繋がれてうなだれている人の形をしたものを助けに向かった。

「大丈夫ですか劍崎さん!! 今、助けますからね!!」

「うっ……………うう……………」

ユウスケがその人に駆け寄って助けようとする、その人物がかすかに反応を返したことに喜びながらも、一刻を要することも判断した。

鎖を何とか解き、劍崎と思われる人物を解放することに成功した。

しばらく言葉にならない声で呻いていたその人を抱き起し、軽く揺する。

すると相手は目を覚ましたのか気がついたようで、薄く目を開いた。

「良かった、剣崎さん！ 見えますか、聞こえますか!!」

「う、うあ……………けんぎ、き……………う？」

やっと会話が成立するようになったことを純粹に喜び、

ユウスケは解放した人物の口から剣崎の名が出たことに少し疑問を抱く。

「あの、立てますか!! 早くここから出ましょう!!」

「剣、崎だと……………アイツはい、ま……………どこに……………う？」

「……………え？」

そして今、疑問は確信へと変貌した。

彼の口ぶりから、この人物が『剣崎』でないことが判明した。

では、この人物は一体誰なのだろう？

ユウスケが抱いた新たな疑問は、またもすぐに解消されたのだった。

「うっ!! ……………ううう、うああああ!!」

「あの、ちよつと!! 大丈夫ですか!!」

「があつ、あつ! あああああ!!」

急に胸の辺りを押さえて苦しみだした目の前の謎の人物を見て

何も出来ずにただ黙って見ているだけの自分の弱さを悔やんだが、その感情ですらたった一時のものだった。

「あ、ああ……………」

『ウツ……………ウオオオオアア……………』

「あ、アンデッド……………!! 何で!!」

目の前の男が押さえている胸が光りだした直後、全身が変貌した。

人間らしい肌の色は、みるみるうちに人からかけ離れた異形のものに。

人間らしい皮と肉は、昆虫を思わせる尖った堅殻でビツシリと覆われ。

人間らしい人の形は、もはや見る影も無くただの異形といか言えぬものに。

鮮やかな緑色の甲殻に、漆黒の体表、そして所々に露出した銀色の皮膜。

そしてアンデッド特有の、ベルトとバックルを出現させた。

赤く真つ二つに裂けたような、ハートの刻印。

『剣崎イ……………カリス、アンデッドオ……………ウオオオオオ!!』

「や、やばい……………何とかしないと!!」

ユウスケは、その超人的な直感から理解した。

自分は、とんでもないナニカを覚醒^{めざめ}させてしまったのではないか。

E P, 10 『EXCALIBUR 人類の希望』

「あ、ちよつと待て！」

ユウスケは目の前で何が起こっているのか分からなかった。

先ほどまで鎖に繋がれていた人間がいきなり化け物に変身したことも信じられなかったが、

何より彼が自分の探していた『剣崎』という人物でなかった事の方が信じられなかった。

そんな状態のユウスケに意にも介さず、アンデッドは膝を曲げて大きく跳躍した。

地下のこの部屋でそんな事をすれば無論天井にぶつかるが、まるで薄く広げた紙を破くかの

ようにコンクリートを粉々にして突き破り、青空の彼方へと消えていった。

しばらくポカンとしていたが、頭を何度か振った後で考えを切り替えた。

「と、とにかく後を追わないと!」

そう決心したユウスケは自分の中へと意識を集中させる。

腰を軽く落としてゆっくりと大きく息を吐きながら体の奥に眠る力を呼び起こした。

彼の腰の辺りが眩く輝きだしたかと思うと、見慣れない形のベルトが浮き出てきた。

それをしっかりと確かめたユウスケは右手の人差し指と中指を立てて左前方へ突き出した。

一度目をつぶって、全神経を腰にあるベルトとバックルに寄せ集めて、再び目を見開く。

体の左側へと突き出していた右手を指を立てたままゆっくりと右側に動かした。

そして右手をグルンと回して腰に巻き付いているベルトの左側のボタンの上に移動させ、

左手の握り拳を下にしてカチツと小気味良い音が鳴るように押し込んだ。

「超変身!!」

ボタンを押し込んだ直後にユウスケの全身を神々しい光が包み込んだ。光が段々と収まっていった後に立っていたのは、紅蓮の鎧を纏った仮面の戦士だった。

赤く分厚い上半身の装甲、それと同じ輝きを宿した双眸。

眉間の間から天に向かってそびえるクワガタのような形状の金色の角。

そこには、『仮面ライダークウガ』が立っていた。

「よっし、逃がさないぞ!!」

クウガに変身したユウスケは、先程逃げ出したアンデッドと同じように膝を折り曲げて力を込め、一気に伸ばして青空の中へと飛び出していった。

【ATTACK RIDE

ILLUSION】

デイケイドがライドブックから一枚のカードを取り出してバックルに装填した。バックルがカードの内容を読み取り、デイケイドの体へとその効果を反映させる。するとデイケイドの体が揺らぎ、その揺らぎが体から離れて二つに分離する。分離した揺らぎが形を成していくと、それは本体となら変わらないデイケイドの

分身となつて彼の横に並び立つた。

「さて、コイツで形勢逆転、だな」

「予想外にメンドくせえ相手だったが、これで一気に片付けるか」

「ああ、さてと……………行くぜカリス2号さんよ！」

三人がそれぞれカリスに対して毒づく、同時に攻撃を仕掛けた。

二人がライドブツカーをソードモードに変えて一気に肉薄し、残った一人が遅れてガンモードに変えて遠距離からの援護を開始した。

一人目が剣を走りながら上段に構えて目の前のアルビノカリスの濁った白い胴を

袈裟斬りにしようと振り下ろすが、それはアルビノカリスの左手の大剣を水平にして突き出してくる牽制によって阻まれ、右手の薙刀状の双剣を下手から振り上げて

ライドブツカーソードを弾き飛ばして無防備なデイケイドの腹部を回し蹴りで蹴り飛ばす。

転がつてきた一人目を尻目に二人目のデイケイドが剣を横から流すように斬り出したが、

アルビノカリスは自分が弾いた一人目の剣を足で空中に放り出し、左手の大剣で薙ぐ

ように

してその剣を二人目に向けて風を斬り裂きながら飛ばしていく。

接近しすぎてその攻撃を避けきれなかったデイケイドは上半身の装甲から火花を散らしながら

倒れ伏し、いつの間にか眼前まで迫っていたアルビノカリスの蹴りでさらに遠くへ吹き飛ばす。

最後の三人目が銃口をアルビノカリスに向けて光弾を放つが、右手の薙刀状の双剣を腕の回転を利用してグルンと一回転させて銃弾を一つ残らず払い落として歩み寄ってくる。

だがデイケイドは先程自分の前まで飛んできた一人目の剣を拾い上げてガンモードに変え、

両手持ちにして一気に全弾を向かってくる白濁色の仮面の戦士に発射した。

今度はアルビノカリスの方が接近しすぎたようで、剣を振るっても全ての弾丸を払いきる事が

出来ずに装甲から大量の火花を噴出させながら大きく後ろへと後ずさる。

「……………つたく、この2Pカラー野郎が」

る。

アンデッド特有の緑色の体液を辺りに撒き散らしながら、二体の異形が蠢き合う。

その様をただただ見ていたデイケイド達だったが、突如その姿が掻き消え一人に戻る。

アタックライド・イリユージョンの効果が切れたのかと、デイケイドが僅かに悔しがるが

それよりも目の前の光景から目が離せず、手に持ったライドブツカーガンを元の形状に戻す。

『ウガアアア!! ハ、放セエ!!』

『グルアアアアアアアアツ!!!!』

アルビノカリスが腹部を剣と腕で貫かれ、その激痛にもがき苦しむ

デイケイドがジョーカーと呼んだアンデッドが腕に滴る体液を見て歓喜に震えた。

やがてジョーカーの腕が何かを探すようにアルビノカリスの体をまさぐり始めたが直ぐに腰のバックルを掴むと、強引にそれを引き千切ろうとして力を込めた。

更なる苦痛に上げる悲鳴を絶叫に変えたアルビノカリスに構う事なく、

ジョーカーは右足を振り上げてアルビノカリスの腰に据えて思い切り蹴り飛ばした。その反動で大きく弾き飛ばされた白濁の体を余所に、ジョーカーはその手を見つめる。

黒い異形の右手に握られていたのは、二枚のカードだった。

一枚は、青色のカブトムシのようなものの中央にスペードが刻まれた『^{エース}スペードの1』。

もう一枚は、黒色のカマキリのようなものを中心にハートが刻まれた『ハートの1』。その二枚を大事そうに見つめたジョーカーはゆっくりと一枚のカードを自分のバックルへ

近付けて、その中央にあるハートを分断するカードの読み込み口に差し込んだ。

〔 CHANGE 〕

カードが溝を通過すると、ジョーカーの体を半透明の液体が覆い隠した。

直後液体が凝固して弾け飛び、先程とは違った姿を白日の下に晒した。

まるでアルビノカリスと色を反転させたような全身の仮面の戦士。

彼こそが『相川 始』、『仮面ライダーカリス』であり『ジョーカー』でもあった。

だがカリスの変身した直後、彼は膝を地面について倒れかけた。

ブルブルと震えながら、それでもカリスは倒れずに顔を上げてもう一人の自分を見つめた。

するとその視線の先にいた白濁の戦士の体のあちこちにヒビが入り始めた。

そのヒビがどんどん全身に広がると、遂に白濁の体が砕け散った。

先程までアルビノカリスが居た場所には、意識を失った男が倒れていた。

「ハア……ハア………実験台は『劍崎』、お前の方だったか」

「あん？ 劍崎だと？」

カリスがか細く呟いた声を、ディケイドが拾ったが、轟音に掻き消された。

音の発生源の方へと顔を向けると、一台の奇妙な形状のバイクと乗り手がいた。

そのバイクの乗り手はディケイドを見つけるとすぐに駆けよってくる。

「士！ 無事だったんだな!!」

「当然だ。お前こそ今まで何してたんだよ」

「色々な。それで………こちらの方は？」

「カリスってライダーだ。お前も名前くらい聞いたことあるだろ」
「うえ!! ……………あつた、かなあ?」

ジョーカーを追って来たクウガと合流したデイケイドは改めて前方を見る。
つられてクウガも同じ場所に視線を送ると、地面に倒れ伏した男がいた。

クウガの頭に疑問符が浮かんだと同時に、カリスが立ち上がって男の元へ歩み寄った。

そして意識の無い男を抱きかかえると、二階と一階が吹き抜けになってしまった
立体駐車場の入り口の方へと運んで、ダランと下がった手に一枚のカードを握らせ
ゆつくりとその場に降ろした。

「おい、何やってんだ?」

「……………お前達は?」

「ソイツらは大丈夫だジョーカー。いや、相川 始」

「あ、あなたは!」

「……………橘、か」

デイケイドとクウガがカリスの問いに答えようとした時、彼らの背後から別の男の声が聞こえて来た。それは紛れも無く橘の、ギャレンの声だった。負傷した右腕を押さえ、足を引き摺るようにして近付いてきた彼の姿にクウガは身を案じるような声をかけ、カリスは肩を貸すように歩み寄る。

「橘、コイツらを知っているのか」

「通りすがりの仮面ライダー、だそうだ」

「そう言う事だ」

「……………」

カリスは訝^{いぶか}しむように二人を睨むが、デイケイドは逆に胸を張った。

そんな彼らを見て呆れたのか納得したのか、カリスは敵意を消して橘に向き直る。そのまま橘の視線を促し、倒れている男の事について詳しく話させる。

「橘、俺のせいで『剣崎』が……………実験台に」

「分かっている。だがお前のせいじゃないのは確かだ」

「なあギャレン、さつきからその実験台ってのは何なんだ」

デイケイドが二人の会話に割り込み、先程の会話の内容で疑問に思った事を尋ねる。その言葉に橘は少し考え込むような表情を見せるが、何かを決心したように口を開く。

そこから語られたのは、デイケイド達にとって恐ろしとしか思えない話だった。

「お前達は他の世界から来たライダーだと言っていたな？」

ならこの世界の成り立ちについてから話した方が伝わりやすいかもな。

……………一万年前、この地球上には52種類の生命体しか存在していなかった。

その52種の生命体は、今この世界に生きる生物の始祖とも言える存在だったとい

う

「も、もしかしてそれがアンデッド？」

「そうだ」

話の途中でクウガが問いかけ、橘が返答しながら話を続けた。

「それらの生命体、アンデッドが自分の種族の存亡を賭けて戦ったのが生存競争^{バトルフアイト}。

本来ならば52種のアンデッドによって行われるはずだったその戦いに、予期せぬ乱入者が現れた。

それこそが存在しえない53番目の種族

『ジョーカーアン

デッド』だ」

「……………」

「そいつは瞬く間に51種のアンデッドを圧倒的な力で滅ぼしていった。

そして……………ジョーカーを除いてたつた一種族だけがこの地球に残された。

最後に残ったのは、『ヒューマンアンデッド』。そう、人間の始祖たるアンデッドだ」

「そ、そうやって人間が誕生したんですか」

「ああ、始祖とジョーカーはある密約を交わして勝者を決定し、敗者たるジョーカーは自分と共に全てのアンデッドと共に封印を施し、バトルファイトは集結した……………はずだった」

そこまで語ってから橘は一呼吸おいた。

カリスとデイケイドは無言で話を聞き、クウガは時折相槌を打つようにして聞いていた。

「だが封印されていたアンデッドを発掘した人間、BOARDの上層部の人間達はその不死身の

肉体と再生能力に目を付け、それをどうにか再現出来ないかと日夜研究をしていたらしい。

幾度もの実験の結果、とうとう奴らは最強のアンデッドたるジョーカーのクローンを

生み出す事に成功したようだが、それには重大な問題点が一つだけあった」

「……………単体での個体の維持が不可能、か」

「その通りだ。つまりクローンは培養液の外には出せない状態だったんだ。

ところがある日とてつもない地震が研究施設を襲い、クローンが脱走したと。

だが幾ら調べてみても、全国どこの震度計にも揺れは記録されていなかったらしい。

その日からなんだ、アンデッド達が徒党を組んでBOARDを占拠したのは「その地震が原因なんですか？」

クウガがまたも桶に疑問を投げかけるが、今度は返答に困っていた。

だがデイケイドは先程の桶の言葉の中に思い当たることがあった。

(地震……………? いや、まさかな……………)

「そしてBOARDを乗っ取ったヤツらが人工アンデッドの生成計画を引き継ぎ

歪めて完成させたのが、今あそこにいる『剣崎』に使われている技術だ」

「ぎ、技術?」

「一から人工でアンデッドを作ることが出来なかったと知ったヤツらは

人間をアンデッドに変えて、ソイツにジョーカーの因子を埋め込む事を思いついた。

元々ライダーシステムとの同調率が異様に高かった剣崎に目をつけるのは当然だったな。

そして剣崎を寄り代とすることで、54番目の種族を生み出す気だったんだろう」

自嘲気味に橘が鼻白んで、カリスが再び剣崎の方を向く。

クウガもディケイドも余計な口を出さずに話の続きを待っていた。

だが橘が口を開くよりも早く、耳をつんざく絶叫が木霊した。

四人が同時にそちらの方へ顔を向けると、先程消えた白濁の戦士が立ち上がって

た。

ただ、先程とは違うのはジョーカーの色違いのような体色をしていることだった。

『ツアアアアアアアアアアアツツ!!!!』

そう、彼らの前にいたのは『アルビノジョーカー』。

先程現れたジョーカーとは色合いが真逆のアンデッドだった。

アルビノジョーカーは叫びながらも両手を体の上へと持ち上げて掲げ、その手の上に巨大な黒色のオーラの弾を形成し、握りしめる。

四人が対応しきる前に、その漆黒のオーラで形成された弾幕を放った。

デイケイドとカリスはいち早く気付いて自分の身を守ったが、自分の目の前にいた生身の状態の桶を見たクウガは自分の身を考えずに体を盾にして彼を庇った。

[TURN UP]

だがクウガは何時まで経っても自分の背中に衝撃が奔らない事を疑問に思い

恐る恐る振り返ってみると、そこには鮮やか青色と銀色の仮面の戦士が立っていた。

鍛え上げられた鋼すらも上回る硬度を誇る美しき白金の装甲。体内で燃え上がる正義の炎をそのまま宿した紅蓮色の双眸。

装甲の下腹部には、彼が適合したスートであるスペードの印。

たった一本であるにもかかわらず、そこにあるだけで安心感を与えるような。まるで伝説に出てくるかのような輝きと清廉さを兼ね備えた剣の姿がそこにあつた。

「大丈夫か、始」

「……………遅かったな、劍崎」

剣を構えたままの姿勢で、エクスカリバー人類の希望が微笑んだ。

E p, 11 『LIGHTNING 』 奇跡 』

自分達の目の前で一振りの剣を構えたまま頭だけ振り返ったライダーに、満身創痍の風体で荒い呼吸を繰り返しているカリスが皮肉気に名を告げた。

そう、この世界において最も重大な存在。

この状況下において助っ人とも言えないような人物であるにも関わらず、デイクイド達の眼前でアルビノジョーカーの攻撃を斬り裂いた彼が何よりも頼もしく思える。

そんなブレイドの姿を見て、デイクイドが一步前に出て彼の肩に手を置いて語った。

「何にせよ、助かったぜブレイド」

「……………お前、確かアンデッド達に総支配人と呼ばれていた」

「あー、その話ならもう終わってる。だから気にするな、俺達の敵は……………奴だ」

「……………橘さん」

「大丈夫だ。ソイツは我々の協力者だ」

いちいち桶コブツに聞かなきや敵味方の判別すら出来ないのか、とデイケイドが悪態をつきそうになるがそれをグツとこらえ、代わりに横にいたクウガを引つ張り出す。

肩を掴まれて前に出されたクウガは、頭の中に嫌な予感を立ち込めさせる。

「な、なあ士？ 何する気だ？ ……………まさかアレをする気か？」

「違う。して欲しけりや、やってやるぞ？」

「じよ、冗談じゃない！ 頼まれたってやるもんか！」

デイケイドの態度に腹を立てたクウガは慌てて彼から視線を逸らした。

そんなクウガを見てデイケイドは逃げたな、と小さく呟いたがクウガはそれを無視した。

だが彼らの眼前にはまだ脅威は鎮座している、こんな事をしていない場合ではなかった。

それを証明するかのようにアルビノジョーカーは再度雄叫びを上げながら両手を天にかざす。

彼の両手から先程と同じように漆黒のオーラで出来た球体が幾つか空中に現れた。

球体はビリビリと激しく空気に悲鳴を上げさせているが、アルビノジョーカーには関係無い。

その球体の内の二つを再びデイケイド達に向けて投擲してきた。

「何度もやらせるか!!」

「ナメてもらっちゃ困るぜ」

【TACKLE】

【METAL】

【TIME】

【LANDING CRIMINAL】

【ATTACK RIDE
BARRIER】

二つの球体が迫る中、複数の電子音声が混ざり合って駐車場内に響く。

ブレイドがスピードの4、7、10、『タックル』『メタル』『タイム』を使用して

スリーカードのコンボを発動させ、デイケイドもまた「アタックライド・バリア」を瞬時に発動させ、アルビノジョーカーの攻撃を防いだのだった。だがブレイドのコンボは防御ではなく、攻撃が主体である。つまり、まだ彼のコンボは終わってなどいないのだ。

「
ヴエエイ!!」

『グアアアアッ!!』

いつの間にかアルビノジョーカーの背後に移動していたブレイドが後ろからぶつか
る。

突然の奇襲に驚く暇も無くアルビノジョーカーは前方へ身をよじりながら倒れこん
だ。

剣の切先を突き付けながら、ブレイドが低い声で怒鳴った。

「お前らのせいで、どれだけの人が死んだと思ってる!!」

「……………剣崎」

「アンデッドが……………アンデッドが」

手にした剣を震わせながら、アルビノジョーカーを睨むブレイド。

対してアルビノジョーカーは何故自分が背後を取られたのか理解出来ず唖っていた。それもそのはずだろう。今ブレイドは『時間を越えて移動した』のだから。

彼の持つラウズカードの内、時間を操る力を持つているのが『タイム』だ。

彼はその力を利用して一瞬前の時間まで遡り、背後を取っていたのだった。

そのまま『メタル』で硬質化した肉体を『タックル』の速度で叩きこんだという事だ。アルビノジョーカーは苦しみの声をかすれさせながらも立ち上がる。

ブレイドは更なる追い打ちをかけようとしたが、その行動は即座に封じられた。

瞬時にしやがみ込んだアルビノジョーカーが左足を伸ばしたままコマのようにグルンとその場で一回転し、背後にいるブレイドの足を引っかけて転ばせた。

その回転の力を利用して起き上がったアルビノジョーカーは、その勢いを右拳に乗せてアッパー気味に倒れ掛かっているブレイドの腹部に叩きこんで打ち上げた。

「剣崎！」

FLLOAT

その様子を少し離れた場で見ていたカリスは懐から一枚のカードを取り出して腰のバックルの溝に上から差し込んで内容を読み取り、能力を解放した。

彼が今使ったカードはハートの4、『フロート』のカードだ。

文字通りに空中を飛行できるようになるカードを使って、吹き飛ばされたブレイドを空中で抱き留め、自分が先程までいた位置に再び着地する。

「済まない、始」

「気にするな」

ゆっくりとブレイドを降ろしながら彼の感謝の言葉を流したカリス。

まるで互いの心が通じ合っているかのような会話に、クウガは少し感心した。

だがそれもつかの間、アルビノジョーカーは攻撃の姿勢を取り始める。

それを見た三人は身構えるが、ただ一人だけ悠々と歩き出す男がいた。

他でもない、デイケイドである。

「この世界に一人だけ、いるとしたら？」

『……………何？』

アルビノジョーカーからの攻撃に対して身構えた三人より前に出たデイケイドはそのまま敵を見据えたままゆっくりと右手を顔の前まで持ってきて指を立てた。デイケイドの行動の意図が読めないその場の全員を余所にデイケイドが続ける。

「もしもこの世界に、たった一人だけ信用できる者がいたとしたら誰だ?」

『……………何ヲ言ツテイル?』

「親か? 兄弟か? 友人か? 恋人か? それとも見知らぬ他人か?」

どれもこれも違う、この世で一番信じられる存在つてのは……………仲間だ」

『仲間、ダト?』

「同じ苦楽を共にし、同じ喜怒を感受し合う。それこそが本当の仲間だ。

たった一日で出来上がるモンでもなけりや、人工的になんて作れない。

そして本当の仲間というヤツは、簡単には砕けない繋がりで結ばれている。

例えそれが、『人間とアンデッド』という異種族同士であつてもな!」

ここまでデイケイドが語って、ようやく自分達の事だと気づいたブレイド達。

カリスが息をのむ音が聞こえ、アルビノジョーカーからは苛立ちの呻うめきが漏れる。

それすらも聞こえていないように、デイケイドは語る事を止めずに続ける。

「相手が人類の希望である仮面ライダーであろうとも、

自分以外の全てを滅ぼすジョーカーという化け物であっても！

話し合う事すら許されない、戦いの宿命の中にいたとしても！

戦うことでしか互いの事を解り合えないような存在だとしても！！

信じ合える仲間であれば、世界を敵に回すことだって厭いとわない……………」

『何ガ言イタイ！！！！』

「分からないか？ なら分からせてやるよ。」

お前が今相手にしようとしている二人は、誰にも理解されないような

関係を保ったまま世界を全て敵に回して守りたい者を守ろうとしている！」

「……………お前」

「つまり

仮面ライダーなんだよ！」

『煩イ！ 何ナンダ、オ前ハ！！』

デイケイドの話で遂に怒りが頂点に達したアルビノジョーカー。

そんなアンデッドの質問を、デイケイドは待ってましたとばかりにポーズを

決めながらゆつくりと向きを変えて、真剣な声色で言葉を紡いだ。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!!」

デイケイドが声を張り上げて語って直後、彼の腰に装着されていた

ライドブツカーが金色に輝きだし、バイクのエンジン音が響いたと同時に

三枚のカードがデイケイドの右手に向けて射出された。

慣れた手つきでカードを三枚ともしっかりと掴んで表に向け直す。

するとそのカードには、眼前のブレイドが全く同じ姿で写されていた。

残りの二枚のカードは金色で縁取られていて、絵柄もそれぞれ異なっている。

「コイツはちようどいい。早速使ってみるか」

デイケイドは三枚の内の一枚を右手に残したまま、残りを左手に持ち替える。

そして右手の一枚を腰のバックルに装填し、バックルの向きを変えて発動する。

装填したカードの内容をバックルが読み取り、音声が高らかに伝えた。

【FINAL・FOAM・RIDE

B、B、B、BLADE】

普段よりも一段高音程な電子音声がデイケイドの腰から発せられる。

それに驚いたブレイドとカリスは振り向くが、手を振って視線を戻させた。

そのままデイケイドはゆつくりとブレイドの背後まで歩いていき手を伸ばす。

何が何だか分からないブレイドは困惑するが、デイケイドがたしなめる。

「向こう向いてろ、ちよつとくすぐりたいぞ」

「え？ な、何だよ？」

「……………剣崎さん、頑張つて！」

「うえ!! だから何がだよ!!」

「ほらよ」

「うえい!!」

一喝してアルビノジョーカーへと視線を向けさせたデイケイドは伸ばした

両手をブレイドの背中の真ん中辺りに狙いを定めてズブズブと潜航させてく。

初めての感触に驚いて奇抜な声を上げたブレイドを気にする素振りを見せずに

もはや慣れてしまった一連の行動を続行させるデイケイド。何をしていると激昂したカリスをクウガが説得するように前に立ちはだかる。そんな中、ブレイドの体が宙に浮き、その姿を変貌させていった。

「け、劍崎……………何をした?!」

「別に。ただブレイドをブレードにしたただけだ、あんまり喚わめくな」

啞然とするカリスと言葉も出ない橘を余所に、ブレイドの姿が変わっていく。上半身が完全に真逆を向き、手にしていたブレイドラウザーを両足で掴む。

裏返った上半身の背中の真ん中から、ブレイドラウザーと同じカードホルダーが綺麗に円を描くように展開され、ブレイドの全身の変形が完了した。

まるで巨大な覚ブレイドラウザー醒アラウザー剣。

そう表現する他ない、と橘はまともに働かない頭で考える。

もはやカリスに至っては讒言つわのように劍崎の名を呟つぶやいているだけだ。

そんな状態の彼らをまたも無視して、デイケイドは次の行動に移った。

左手に持ち替えたカードの内一枚を腰のバックルに同じように装填する。

だが今度はブレイドの姿に変化は無かった。そう、ブレイドの姿には。

【KAMEN RIDE

BLADE】

電子音声が再び響き、今度はデイケイドの姿が揺らぎ始めた。

アルビノジョーカーは何が起こっているのか理解出来ず、行動を起こせなかった。その隙を突くかのように、デイケイドの新たな変身が終わりを告げた。

そこに立っていたのは、マゼンタカラーの破壊者などではなかった。

立っていたのは、青いスーツに白金の装甲を纏った戦士、ブレイドだった。

腰のデイケイドライバー以外は完全にブレイドの姿と同じになった彼は周囲のどよめきを全身に受けながら、最後の仕上げをするべくバックルを横にした。

左手に残った最後の一枚をバックルに装填し、バックルを元の位置に押し戻す。

【FINAL・ATTACK・RIDE

B、B、B、BL

ADE】

金色の円型のバーコードのような紋印がデイケイドのバックルから浮き出る。

その中心には彼がライドしているブレイドの紋章クレストであるスピードが刻まれていた。バツクルから浮き出た金色の光が消えると共に、デイケイドの手にしていた超巨大なブレイドラウザー、もといブレイドブレードから放電するような音が辺りに迸った。荒れ狂う青い雷を纏ったブレイドブレードを上段に構えて、デイケイドは息を吐く。あまりに圧倒的な力を感じたのか、アルビノジョーカーがたじろぐ。そのまま方向転換し、一気に走り出して逃走を図ろうとした。

「クソ、おいユウスケ。コイツを使え」

「え？ あ、おう！」

「……………逃がすものか！」

もちろんそれをデイケイド達が許すはずもなく、次の一手を打つ。

デイケイドがクウガに器用に投げ渡したのは、ライドブツカーガン。

それを受け取った時点で、彼は何に使えばいいのかすでに理解していた。

ライドブツカーガンを右手に握って、両手を腰より下へ向けて大きく広げる。

「超変身！」

クウガが力強く叫ぶと、ベルトから出た緑の光が彼の全身を包んだ。

光の渦が段々と消えていき、そこに現れたのは深緑色の鎧を纏ったクウガだった。

『仮面ライダークウガ ペガサスフォーム』

まるで手榴弾のような形状の鎧を纏った射撃特化のクウガは、その手にしていたライドブツカーガンを自分専用の武器、ペガサスボウガンへと変化させる。

弓なりに曲がった銃口を逃げるアルビノジョーカーに向けて、一気に解き放った。

矢とは思えない速度で標的に向かっていくと、見事に後背部に直撃した。

途端に矢に込められたクウガの紋印が光り輝き、大爆発を引き起こす。

突然背後で起こった爆発に巻き込まれアスファルトを転がるアルビノジョーカー。

だがすぐに起き上がると、今度は膝を曲げて一気に跳躍するかのような構えを見せた。

それを見たディケイドとクウガは焦るが、二人の背後から突然植物の蔦が伸びて

今にも跳び発とうとしていたアルビノジョーカーの胴体に絡みつき、完全に縛り上げる。

「早くソイツを片付けろ！」

「……………助かったぜ」

カリスの使ったハートの7、『バイオ』のカードによる捕縛攻撃。

見事なアシストを受けて、デイケイドの仮面の奥にうつすらと笑みが浮かんだようだった。

その手にしたブレイドブレードを、動けなくなつたアルビノジョーカーへと振り下ろす。

「はあああー……ッ!!」

『アアアアアアアアアアアアツツ!!!!!!』

雷光を纏つた究極の一閃が、存在しない存在を容易く斬り裂いた。

最強のクローン、アルビノジョーカーとの激戦から約40分ほど経った今、変身を解いた士とユウスケ達は本拠地である『光写真館』で微睡んでいた。その場には先程まで共に戦っていた剣崎、橘、始達の姿は見当たらない。

三人は戦いが終わるとすぐに気を失った睦月を病院へと搬送していったのだ。

一応士達も見舞いに行ったのだが、そこにはもう橘しかいなかった。
ユウスケがどこに行ったのかと聞くと、橘は止む無しといった表情で語った。

「アイツらは、もう二度と逢えないだろうな」

「えっ?! ど、どうしてですか!」

「……………検査の結果、やはりというべきか、剣崎はアンデッド化していた。

間違いなくライダーシステムとクロウンの因子をその身に受けた事が原因だろう。

剣崎は、奴は新たな54番目……………『アナザージョーカー』になろうとしていたんだ」

「……………」

「この地球上にアンデッドは数えるほどしか残っていない。

だが、ほぼ間違いなくアイツらが最後まで勝ち残ることになるはずだ。

つまり、彼らが決着を着けない限り、地球のリセットが起こる事は無い」

「だから、剣崎さんたちは行ってしまったんですか」

「ああ……………」

ユウスケと一緒に見舞いに来た夏美が橘に交互に質問し、同じようにうなだれる。

士だけは黙って橘の話の話を聞き、小さく帰るぞと呟いて病院を後にした。それに続くようにしてユウスケも夏美も病院から出て行った。

そして今は光写真館、三人はこの世界での役目を終えたと安堵していた。

「コレで本当に良かったのかな、士?」

「……………俺が知るか」

「士? なんかわだぞ?」

「……………」

だが何故か士一人だけが顔をしかめて、何かを考え込んでいた。

ユウスケは何度か声をかけるが、やがて相手にしてもらえないと分かると諦めた。

夏美はユウスケに代わって声をかけようとしたが、中々出来なかった。

(……………やはり、何かおかしい)

士は一人思い返していた。

この世界に来てからずっと感じていた、違和感のことを。

(この世界のライダーは俺を、ディケイドを知らないようだった)

剣崎や橘、睦月や始の言葉を思い返ししながら、やはりそうだと頷く。

(だが、パラドキサは確かに言った。俺の名と能力を)

『ディケイドの世界を渡る能力!!』

アルビノカリスと共に士の前に現れたパラドキサは、確かにそう言っていた。そこに矛盾を感じる、その部分から強烈な違和感を感じる。

だが士が何度考えても、その疑問への答えが出る事は無かった。

ふうと軽く息をつき、頭を振り払って現実に向き直る。

目の前ではユウスケと夏美がこの世界の出来事を話し合っていた。

ユウスケの言った「海東」と「見えないライダー」という単語に興味を持ったが自分の背後から漂ってくる館長自慢のコーヒーマーの香りに興味が雲散霧消した。

「はあくい皆、お待ちかねのコーヒーだよおん」

「ありがとう、おじいちゃん」

「ありがとうございませす！」

「ご苦労」

前の二人よりも慇懃無礼な態度でコーヒーを受け取るが、誰もそれを咎めない。咎めたところで屁理屈で言いくるめられて無駄になると分かっているからだ。受け取ったコーヒーを一口飲んだ後、ユウスケがふと呟いた。

「ん……………なあ土」

「なんだ」

「いや、もしこの世界でやるべき事が終わってるんだったらさ。」

もう次の世界へ行くための道が開けているんじゃないかな……………なんて」
「……………そうだな」

「だよな！ お前が分かかってないはずないもんな、ゴメン」

「あ、ああ。気にするな」

気まずそうにユウスケから視線を逸らして土は、そのままこの写真館の館長の栄次郎を呼び出して、ホールの背景フィルムを下ろすように命じた。

なんで僕が、とグズついた栄次郎を軽くおだててその気にさせた土は、ついでにとコーヒーのおかわりを要求してまた思考の海にダイブした。

(結局、何も分からずじまい……………か)

そう結論付けた土はコーヒーのおかわりを受け取って香りを楽しみ、

栄次郎にそのまま背景フィルムを下ろすように命じた。

「それじゃ、下ろすね〜」

栄次郎の気の抜けたような声と共に、ガラガラとフィルムを下ろす金具が回る。

その流れに沿って上から巻かれていたフィルムが降りてきて、その背景を見せる。

「ハ、ハ、これは……………」

「土君……………」

「……………ああ、分かつてる」

そのフィルムに描かれていたのは、対照的な二人の人間だった。

ちようどフィルムを真ん中から半分に分断するように引かれた一本の線。

それを隔てた左側には、眩く輝く太陽と、それに照らされて右手を掲げる一人の男。

逆に右側には、淡く揺らめく白い満月と、それに照らされていながら俯く一人の男。

左側は雲一つない綺麗な青空であるのに、右側は黒より少し明るい色合いの一面の星空。

あまりにも幻想的で、非現実的で、理想的な、対照の背景。

だがよく見てみると、左側の男の掲げた右手の指先には紅いカブトムシが描かれていて、

右側の暗く俯いた男の足元には、分かり辛いが緑色の鋭角的なバツタが二匹描かれていた。

士はフィルムの正面に立ち、描かれた絵が暗示する世界の名を口にした。

「カブトの世界、か」

EP, 12『KABUTO's WORLD』カブトの
世界』

『カブトの世界』

かつて士達が旅してきたライダー世界の一つで、

突如宇宙から飛来した隕石の中から誕生した地球外生命体『ワーム』と日夜死闘を繰り返してきた仮面ライダーのいる世界だった。

士がかつて訪れた際に与えられた『役割』は、ワームと戦う秘密組織

『ZECT』の一戦闘員である『ゼクトルーパー』の一人だったのだ。

その組織の中でも、特に優秀な人材を集めて結成されたのが『シャドウ』。

シャドウの指揮官を務めていた男が、士達が出会った少女の兄に成り代わったワームであり、その世界のライダーを全滅させる算段を立てていたのだが、

デイケイドと暴走して全ての人間とは異なる時間軸の中を走り続けていた男、『仮面ライダーカブト』の二人の力を合わせ、ワームの悪策を打ち砕いたのだった。

戦いが終わっても全てのワームが倒れたわけではなく、カブトは再び異なる

時間軸の世界へと消えてしまった。愛する家族である妹と、祖母の二人を残して。

そして、今。

士達の目の前で静かに佇む背景フィルムには、その世界で見た事のある
紅い色をした機械のカブトムシのようなものが描かれていた。

「こ、今度はカブトの世界かよ……」

「らしいな。ブレイドの時みたいに色々変わってるかもしれない」

ユウスケが土を見ながら呟くと、当の土はぶつきらぼうに呟いて部屋を出る。

写真館から出た瞬間から土にこの世界での『役割』が与えられる事を思い出し、

夏海とユウスケは慌てて後を追ったが、栄次郎は珍しく何も言わなかった。

「どうなつてんだこりや？」

写真館から出た土は、瞬間頭上から降つてきた灰色の濁つたような膜に覆われ、先程まで来ていた白シャツにジーンズのラフな恰好から瞬時に着替えていた。ユウスケと夏海もそれを見ていたが、少し不思議な恰好をしていた。

清潔感漂う純白の衣服で身を包んでいるが、どう見てもオシャレでは無い。明らかにそれは、『料理人^{シェフ}』といった感じの衣装だった。

頭の上にも、円柱状のコックが被るような帽子が乗っかっている。その姿を見て、ユウスケがつま先から順に土をジロジロと眺める。

「コック、つてこと？ 土って料理とか出来るの？」

「自慢じゃないがサツパリだ。人生で一番美味しく作れたのは卵かけご飯だな」
「小学生じゃないんですから」

土の自信有り気な口調の割にはシヨボい内容に、夏海がツツコミを入れる。そして土がいつものように、全身をまさぐって何か無いかを探し始める。

しかしそんな土を余所に、ユウスケがクンクンと犬のように鼻を鳴らした。

「ちよつとユウスケ、何してるんですか気持ち悪い！」

「い、いやあ……………だって、スゴくいい匂いがしてくるからさ……………」

「え？ ………………本当ですね、いい匂い！」

「すぐ近くだ！ 行ってみようよ夏海ちゃん！」

「あ、ちよつとユウスケ！」

ユウスケが匂いに誘われて道に出て行くのを夏海が追いかける。

その様子をポケットから手を出しながら見ていた士は、同じように後に続く。

ポケットの中に入っていた『ノブレス・オブリージュ』と刺繍の施された

ハンカチを乱暴な手つきで元に戻しながら。

歩いて三分も経たない内に、ユウスケ達は匂いの発生源に辿り着いた。

少し小さめな一戸建て住宅の玄関先には、同じく小さな黒板のような本日デ・リスの献立スタが

遠慮しがちに置かれていた。

どうやら店の名前は、『Bistrot la Saillie』という洋風料理屋らしい。

匂いに釣られたユウスケが、遠慮も無しにその店の扉を開けて中へ入る。

カランカランと小気味良い音を立てて扉に付けられたカウベルが鳴り、来客を告げる。

音に気付いた従業員が、厨房から玄関まで良く通る声でいらつしやいませと言った。

ユウスケは早速テーブルに着き、後から来た夏海と士も同じテーブルに座る。

「いらつしやいませ、三名でよろしいですね？」

「はい！ えっと、オススメとかってあります？」

「ユウスケ！ はしたないですよ！」

「だって、こんないい匂いなんだしき……」

「そう言っていただけだと嬉しいわ。ね、ひよりシェフ？」

テーブルに着いたユウスケ達のオーダーを取りに来た女性が振り返り、厨房で鍋のフタを取りながらお玉で中身を混ぜている少女に声をかけた。声に反応した少女はこちらを少し見た後で、再び視線を鍋に落とす。

「……シェフとか言わないでくれ、弓子さん」

「なくんでよく！ 資格も取ったし、テレビや雑誌でも取り上げられるしで

もう誰もが認める立派な『日下部くさかべ ひよりシェフ』じゃなくいい！」

「……ダメなんだ、まだ」

「胸張っていいのよ、ひよりちゃん！」

「……だって、まだアイツが認めてくれてないから。」

ボクは認めてもらわない限り、ボク自身も自分の腕を認めない」

「ひよりちゃん……」

厨房の少女が話を打ち切って、フライパンを取り出し火にかける。その様子をテーブルから見ている弓子という女性と土達は微妙な空気になった。静寂を打ち破るように、ユウスケが弓子に声をかけて注文を取る。

「あ、それじゃあシェフさんの一番得意な料理がいいなあ」

「お客様、それならとっておきのがありますよ！　ね、ひよりちゃん！」

「……………とっておきって、いつ決まったのさ」

「今よ、今。さてお客様、シェフの一番の料理は『サバの味噌煮』なんですよ！」
「ちよつと待て、ここは洋風料理の店だろ？」

「いいじゃないですか土君。嫌なら私とユウスケだけで食べますよ！」

「ね！　それじゃあサバの味噌煮をふた「いや、俺も食う。三つだ」……………それで」

「は〜い！　ひよりちゃん、サバ味噌三つ入ったわよ！」

「……………分かった」

洋風料理屋なのにサバ味噌が出てくることに文句を付けていた土も結局同じものを頼んで、弓子がオーダーを厨房のひよりに伝える。

夏海が土に何かを言おうとした時、店の玄関が勢いよく開いて男が入って来た。男は弓子よりも大きく通る声で、厨房にいるひよりに向かって叫んだ。

「ひよりー!! サバ味噌いつちよー!!」

「あら、『加賀美』君じゃない。でも残念、もうサバ味噌は品切れよ」

「ええっ!! 何で、どうして!!」

「こちらのお客様のご注文で在庫切れ。お疲れ様!」

「そーーーんなーー!!!!」

弓子に加賀美と呼ばれた警官の服装をした男は、玄関で崩れ落ちる。しばらくそのままだった男が急に立ち上がって、土達を凝視する。そして土の前まで来ると、先程と同じ大声で吠えるように叫んだ。

「頼む! アンタのサバ味噌を俺に分けて欲しい!!」

「何だコイツ? 警官の癖に善良な市民からランチをタカろうってか」

「ちよつと土君! 何てこと言うんですか!」

「今度ばかりは俺の方が正論だろう夏ミカン。なあアンタ、警察官なのに」

これから楽しくランチしようって人間に向かつて『飯をよこせ』だと？
人を笑わせたいんなら芸人育成所にも行つてくるんだな」

「な、何だと!!」 あのな、俺はただのサバ味噌が欲しいんじゃない!

ひよりの作るサバ味噌だから頭を下げてまで欲しいんだよ!!」

「……………惚れてる相手が作る飯を他の男には食わせたくないってか」

「ち、違つ! いや、違わないけど違うっていうか……………とにかく!!」

士に言われた一言に何かを感じたのか、歯切れが悪くなった加賀美は
頼みこむと同時に下げていた頭を戻し、息を吸い込んで再び吠えた。

「頼む! アンタのサバ味噌を俺にくれ!! 代金は俺が持つから!!」

「…………ボクのサバ味噌だけどね。それと加賀美、うるさい」

「お、きたきた」

「人の話聞けよ!!」

厨房から三つの皿をボードに乗せたひよりが出てきて、士達のいる

テーブルに綺麗に等間隔で置いていき、一礼してから厨房へ戻っていく。

ユウスケは早速食べ始め、その味を口いっぱいに噛みしめている。夏美と士もまたサバ味噌を口に入れ、その味に酔いしれていた。

「す、凄く美味しい！ こんなサバ味噌初めてだ!!」

「ホントですね……………美味しい」

「無愛想なシェフが作つてるとは思えんほどの味だな」

「士君！」

「何だ夏ミカン。俺は今純粹に味を評価しているんだぞ？」

あのシェフは無口で無愛想だが、このサバ味噌がまるでシェフの真価を

代弁しているかのように強調された風味を醸し出している……………絶品だな」

「ああ、ああ！ サバ味噌があ……………」

「次はもっと早く来なさい、加賀美君」

サバ味噌の味に舌鼓を打つ三人の脇で、またも崩れ落ちる加賀美。

そんな彼にお冷を渡して弓子が励ますが、その効果は無いようだった。

ひよりがサバ味噌を出してからものの数分で、三人は完食してしまった。

骨と頭部だけを残した皿を弓子が回収しようとした時、士がそれを手で制する。

その行動をユウスケと夏海は不思議がるが、士は気にせず加賀美に声をかける。

「おいアンタ、名前は何て言うんだ」

「……………加賀美、加賀美 あらた 新巡査だ」

「加賀美、か。ホレ、これで文句は無いだろ」

「……………え？」

「俺は優しい男だからな、分けてやるよ」

「ほ、ホントか！ ホントにいいのか!？」

テーブルの下で未だにいじけていた加賀美に優しく声をかける士。

その位置からは見えないが、確かに回収されていない皿があるのが見えた。

加賀美は目から涙をこぼさんばかりに瞳を潤ませ、士の手を取って礼を述べる。

「あ、ありがとう！ 本当にありがとう!!」

「気にするな。と言いたいが、俺は聖人君子じゃないんでな。

さつき代金は自分が持つと言っていたな、その約束は守るよな？」

「ああ、ああ！ 守る！」

「そうか、良し。ユウスケ、夏ミカン。おごつてくれるそうだけ」

「え、あ、ちよつと土君!!」

掴んできた加賀美の手を払いのけ、土が立ち上がって店から出ようとする。ユウスケと夏海はその後に続いて出ようとするが、弓子に一礼しておいた。土のいた席に座って早速おこぼれに有り付こうとした加賀美だったが、元々大きかったその瞳をさらに肥大化させ、丸くさせる。

「シヨウガと味噌しか残ってない！ アンタ、コレどういう事だよ!!」

「あ？ 俺はサバ味噌を『分けてやる』って言ったんだぜ。

言葉通りに俺の食うサバとお前の分の味噌とを分けてやったんだ」

「ふざけてんのか!!?!」

「大真面目だ。逆に市民から飯を譲り受けるなんざ、アンタがふざけてるのか?」

「うっ……………」

「じゃ、代金はアンタ持ちだ。そういう約束なんだからな」

まるで悪びれていない口調で手をヒラヒラと振りながら店を出る土。

ユウスケと夏海は流石に悪いと思って店に残り、代金を置いていった。半ベそをかきながら皿の上に残った味噌とシヨウガを見つめる加賀美に、弓子が近付いて肩を叩いて笑いながら話しかけた。

「いやー、今の人すごかったわね〜」

「あんなに性格が悪い奴がまだ残ってただなんて……………」

「そうね〜。でも『彼』とどっちが上かしらね？」

「いいところ勝負ですよ」

弓子の問いかけにも拗ねながら答えた加賀美。

皿の上に残った味噌とシヨウガを食べきった彼は一息つく。

そのまま先程渡されたお冷を飲み込んだ直後、外から悲鳴が聞こえてきた。

「何、今の?!」

「表通りの方からだ!!」

加賀美は悲鳴の聞こえてきた方向から大体の位置を予測すると、

弓子にご馳走さまと簡潔に礼を言つて、店から飛び出して行つた。

「おかーさん、おかーさん！」

「……………逃げな、さい……………」

「おかーさん!!」

加賀美や士達のいた店からほんの数10m先の通りに悲鳴が木霊する。

小さな少女を庇うように、母親らしい女性が上から被さっていた。

少女はしきりに母親を呼ぶが、気を失ったのか返事が聞こえない。

そんな二人の背後には、アリの模したようなヘルメットを被った一団が

同じくアリの腹部を象ったような武器を手にして見下ろしていた。

その内の三人が武器の銃口を倒れた母親とその下の少女に向ける。

「おかーさん！ おかーさん!!」

「見苦しいぞクソガキが！」

「抑えろ、どうせ今から黙らせるんだから」

「いいからさっさと殺つちまえよ」

銃口を向けている三人が口々に暴言を吐くが、少女は気付かない。母親の身体を揺さぶって意識を戻そうとするが、彼女は目覚めない。武器の内部に内蔵されたトリガーに三人が指を添える。そこから弾丸が発射される寸前、少女は微かな声で助けを求めた。

「たすけて……………おとおさん……………!!」

ガキンツ!! ガキンツ!!

「うおっ!!」

「何だ、どうした!!」

「コイツ、『ガタツクゼクター』!!」

金属と金属がぶつかるような音が、少女の前で響き渡る。

彼女達の後方から、警官の服装をした男が駆けつけてきた。

そして脇道からは、男二人と女性が一人同じタイミングで出てくる。

その四人が、少女と母親の前で合流して交戦の構えをとる。

「やはりお前らの仕業か、『ワーム』!!」

「どうなってんだよコレ!!」

「何でゼクトの人達が、この人達を襲うんですか?」

「……………大体分かった」

加賀美が激昂し、ユウスケと夏海が混乱する中でただ一人、士だけが冷静に状況を分析して、クルリと身を翻して呟く。

「ユウスケ、夏ミカン。コイツらはワームだ」

「えっ、ワーム?」

「ゼクトの人達が戦っているのは、ワームですもんね!」

「そういう事だ。宇宙人なら遠慮はいらねえな……………行くぜ」

士が表情を険しくさせた直後、ユウスケと共に一步前が出る。

そして二人はそれぞれ瞬時に自分のベルトを腰に展開させた。

だがそんな二人を余所に、加賀美とゼクトルーパー達がいがみ合う。

「お前達の好きにはさせない！ 行くぞ
変身!!」

「来るぞ、『ガタツク』だ!!」

「総員射撃体勢!!」

「かかって来い!!」

加賀美が警官服を脱ぎ捨て、腰に装着している銀色のソレを露わにする。

そして右手を天高く掲げ、そこに収まるべきものが飛来するのを待つ。

掲げた右手の元へ、群青色のクワガタのような機械が飛んできた。

それをしっかりと握って、掛け声と共にベルトに右から装填した。

【H e n s i n !】

高音程の電子音声がベルトから発せられ、それと同時に六角形の

パネルのような物がバツクルから全身を包み込むように放出される。

やがてソレは全身を覆い、群青と銀を主体としたカラーの鎧となった。

彼の名は加賀美 新、そして『仮面ライダーガタツク』。

ガタツクは両肩に装着された2門の砲台『ガタツクバルカン』を起動し、発射した瞬間、即座に再装填されるといふ高速発射を開始した。

前方にいたゼクトルーパー達の何人かが放たれた弾丸に直撃して致命傷を受ける。少し後ろで待機していた残りの隊員達は武器を手にして応戦し始める。

その光景を、士達は啞然としながら見つめていた。

「何で、仮面ライダーとZECTが戦ってるんだ？」

「つ、士……………どうなってんだよ」

「士君……………」

「俺に聞くな！ まあでも、しばらくは様子見といこうか」

ぶつきらぼうに呟いた士は、手にしたカードを懐にしまう。

それに見習ってユウスケもまた、変身の構えを解いて楽にした。

そんな二人の後ろで、倒れていた少女の母親が目を覚ました。

夏海が慌てて駆け寄り、彼女と少女の安否を確かめる。

「あの、大丈夫ですか？ お怪我は？」

「……………ええ、大丈夫」

「気を付けろ夏ミカン。ワームかもしれないぜ？」

「そんな訳ありません！ この人がワームだなんて」

「根拠は？」

「……………ありません、けど…………」

士の言葉に反論できずに俯く夏海だったが、

母親と少女の方を一瞥してから顔を上げて声を荒げる。

「おかあさん……………おかしーさん!!」

「身を挺してこの子を守ろうとする人が、ワームなわけありません！」

「……………あのな夏ミカン」

「まあまあ士、ワームだったら俺達が倒せばいいだけだし。な？」

横にいるユウスケがお気楽そうに士に語り掛ける。

その笑みにやる気を無くした士は、ガタツクのいる方向に視線を向けた。

夏海は女性と少女をこの場から避難させようとするが、女性も少女もその場を離れようとせず、ガタツクを見つめている。そして、おもむろに女性の口から言葉が漏れた。

「……………『戦いの神・ガタツク』、あの方が……………」

「え？」

「かーみのおいさん……………おとーさんのおともたちー！」

二人の視線の先では、ガタツクがバルカンを撃ち続けていた。

最初にいた半分ほどのゼクトルーパー達が戦闘不能になっている。

そして次の瞬間、彼らの死体から『緑色の炎』が噴き出て爆発した。

よく似た光景を知っている士は、その炎を見て驚愕する。

「今のはワームの消滅するときの……………じゃあアイツらはー！」

士がある事実に気付いた直後、全てのゼクトルーパーが倒れた。

そして数秒後に、先程と同じ緑色の炎を噴き上げて爆発する。

クルリと向き直ったガタツクは、変身を解いて士達に駆け寄った。

「アンタら……そのベルトは一体？」

「まあ気にするな。それよりも、この人がアンタの事知ってるようだけ？」

「え？」

士に促されて女性を見つめるが、知らないなど小さく呟く加賀美。そんな彼に近付いて、女性は立ち上がって礼を述べた。

「助けていただき、ありがとうございます。」

あの、貴方は加賀美 新さんで間違いはございませんか？」

「え？ 何で俺の名前知ってるの？」

「……………」

加賀美からの質問に言葉を詰まらせる女性だったが、意を決したように瞳に力を込めて、射貫くような視線を加賀美に向けながら女性が再び語りだした。

「私とこの子を、ビストロ・ラ・サルというお店に案内してください。」

そこで待っていると云われたので……………お店で全てをお話いたします」

女性の力強い瞳に気圧されたのか、女性の顔立ちが端正でありながら儂げでまるで大和撫子を体現したかのような美しさに思考力を奪われたのか。

加賀美は女性の言葉を聞き入れ、士達を伴って元来た道に戻っていった。

「それでは……………何故襲われたのか、話してください」

店に戻って母親と少女を空いている席に座らせて、加賀美が話を切り出した。弓子からオレンジジュースを貰った少女は大人しく座ってソレを飲んでいる。母親は俯きながらも、重たげな口調で加賀美からの問いかけに答え始めた。

「私とこの子は、主人に言われてこの店を探していました。」

『ビストロ・ラ・サルに行け。そこで加賀美という男を探せ』と言われて、

主人は何やら焦っていたようだったので、すぐにこの子を連れてパリから……………」

「なるほど……………え、パリ？」

「ハイ。私とこの子と主人は、一週間前までパリで暮らしていました。

ですが主人は突然、『やるべき事が出来た。お前達は日本へ逃げろ』と言って

私達を家から離れさせて……………日本で加賀美という方が助けてくれるはずだから、

と」

「……………何故ご主人は俺の名前を？」

「それは……………」

「ちよつといいか？」

女性の言葉を遮るようにして、士が話に割り込んだ。

加賀美は少し嫌そうな顔をして士を睨むが、お構いなしに話を続ける。

「アンタ、さっきこの男の事を『戦いの神・ガタック』って言ったな。

仮面ライダーガタックなら分かるんだが、戦いの神ってのは何なんだ？」

士の言葉に女性と、そして加賀美も驚いた。

加賀美はすぐに女性に詰め寄り、興奮した態度で質問する。

「その名前！ 何でアンタが知ってるんだ!!」

ガタツクの異名を知ってるのは、俺と親父ともう一人だけだ!

答える!! 何でアンタが戦いの神の名を知っていたんだ!!」

「それは……………」

傍から見れば激怒しているような状態の加賀美に詰め寄られ、女性はオドオドとした態度を見せるが、自分の隣で美味しそうにジュースを飲んでいる少女を見つめて息を飲むと、覚悟したかのように口を開いて言葉を綴った。

「それは私の主人が……………」
夫が、選ばれし者だからです」

「え……………」

「選ばれし者? 何だそりゃ?」

女性の口から発せられた言葉に加賀美は目を見開き、土は疑問符を浮かべる。

ユウスケと夏海もまた訳が分からずに互いの顔を見合わせる。

僅かな沈黙が流れた後、また女性が口を開いた。

「申し遅れました。私は、『天道 アゲハ』と申します」

「て、天道つて……………じゃあ、まさか!」

「天道……………どこかで聞いた名前だな」

女性が名乗った姓に先程以上の驚愕を見せる加賀美の横で、士は自分の記憶の片隅に引つかかる天道の名を思い起こす。

そんな男二人を差し置いて、女性——アゲハは語り続ける。

「そしてこの子が、私のあの人の娘……………」

愛おしそうに少女のツヤのある髪を優しく撫でるアゲハ。

そしてその少女の名前を口にしようとしたその時。

「——天道を往き、優しい未来に恵まれる女。天道 優未恵だ」

カランカランとカウベルが鳴り、昼時の逆光の中から男が入店してくる。シャープな頬のラインに、色気すら感じられるような顎の形。

ウェーブがかかって散らばりながらも、決してだらしなくは無い髪型。キリツと上がった眉に、並行よりもやや上に吊り上がった目尻。

整った顔立ちに、老若男女問わずに視線を集めそうな大人の美貌。

威風堂々たるその歩き方から、貫禄どころか品格までもが溢れ出る。

そんな絶世の美男子が、右手の人差し指を右手ごと頭上に掲げた。

そのまま男は、自分の娘の名を告げた口から、自らの名も告げる。

「そして俺が、天の道を往き、総てを司る男。『天道 総司』だ」

時刻は夜。月と星の明かりが闇を照らす。

だがそれらが照らすべき闇も、今は地上の明かりで数えるほどしか無くなっている。ビルや住宅、店舗や信号、果ては車のヘッドライト。

無数の痛々しいほど輝く光が、星の瞬く夜空を無作法に照らす。

そんな夜空を興味無さそうに、一人の男が見上げていた。

男は自分の右手に握った銃を夜空に掲げ、左手でそつと撫でる。

「遂に来てしまったんだね、士。15のライダー世界の内の、2つ目まで」

悲しそうに、されども嬉しそうに男は呟く。

そのまま手にしていた銃を懐に戻そうとした。

だがそれは、背後から聞こえてくる足音によつて中断された。

男が今いる場所は、建ち並ぶビル群の最も高いビルの屋上。

ここに来れる人間など数人しかいないが、来る必要もないはずだ。

そう考えて足音の正体に疑問を抱くが、様子見することにした。

やがて足音は男から7 mほど離れた一位置で止まり、もう音は鳴らなかつた。

自分の持つている武器が最も有効な射程距離からわずかに離れている、と

男は相手の警戒心の強さを感じ取り、こちらも警戒心を強めた。

「ここにいたのか。随分探すのに手間が掛かつたよ」

背後から聞こえてきたのは、まるでスピーカーを通してあるかのような

無機質で感情の感じ取れない、皮肉がたっぷり詰まった男の声だった。

肉声では有り得ない違和感を感じた男は、銃を構えて振り返る。

その視線の先にいたのは、頭蓋骨が露出したような怪人だった。

頭部は人間のものでは無い異常な骨格をしている頭蓋骨が露出し、それ以外は輪郭以外において人間と共通する部分がどこにも見当たらない。胸のあたりには『ZZZ』の三文字が刻まれていた。

「やれやれ、せつかく来てあげた私に対して銃は無いだろう」

怪人は鉄のパイプを輪切りにしたような指を揃えて、

人間でいう『やれやれ、困った奴だな』と言いたげなジェスチャーをする。眼前の怪人の余裕とその行動に苛立った男はしっかりと立ち上がってから相手の頭部に銃口が向くような位置取りをして、話しかけた。

「君は何者だ？ 明らかに人間じゃないようだが？」

「失礼な奴だね、君は。確かに今の私は人じゃないが……………」

「まるで前は人間だったような言い回しだね」

「E x a c t l y^通。まあ今は強化機械生命体^{サイバロイド}なんだがね」

「……………サイバロイド？ 聞いたことの無い怪人だな」

「この私を怪人扱いか……………失礼を通り越し無礼だね、実に」

「だったら最初の質問に答えたまえ。君は何者だい？」

男の同じ質問に対して、サイバロイドを名乗る怪人は茶化さずに聞き入れる。正面から向き直ったサイバロイドは、まるで男爵のような仰々しさでお辞儀する。

「私は世紀の大怪盗、アルティメットルパンことゾルーク東条！」

「大怪盗、ね。名前を名乗る辺りからして三流の小物にしか見えないが」

「中途半端な一流の目には、超一流がそう映るものなのさ」

「……………僕を怒らせる才能だけはその通りらしい。失せたまえ」

「ここまで来て帰れるか。私は君に話がしたくて来たのに」

「何……………？」

「やつと話す気になったか。一苦労だよ、全く」

男が銃を下げるのを確認したゾルーク東条は、汗を拭う真似をする。

そしてゾルーク東条はそのままの姿勢で、男に話を切り出した。

「君はさつき、15のライダー世界と言っていたね？」

でもそれは間違いだ。正確に言えば、17のライダー世界だよ」

「どういう事かな？」

「君が知っているのは、『鎧武』とやらまでなんだろう？」

しかし、実はそこから先に新たな世界が二つも生まれたんだ。

この私のいた『ドライブの世界』、そして『ゴーストの世界』がね」

「ゴースト、だと？」

ゾルーク東条の話の中に、聞き覚えのある言葉が出てきて驚く男。

その反応に気を良くしたのか、ゾルーク東条は両手を広げて大げさに話を続ける。

「そう！ 君風に言うのならば……………」

『新たなお宝が産み落とされた』、とでも言うのかな？ 海東 大樹君？」

自らの名を呼ばれ、男

海東は顔をしかめる。

そんな表情の機微を知ってか知らずか、ゾルーク東条は笑いながら語る。

「君と私の大好きなお宝が、まだ見ぬ世界にあるのだよ。」

そこでどうかな……………我々と手を組む、というのは？」
「……………面白いね」

ゾルーク東条の出してきた手を組むという提案に笑みを浮かべる海東。だがその脳裏では、壮絶な駆け引きが幾度も繰り返されていた。

眼前の大怪盗とやらの言葉は本当か否か。
新たな二つの世界が存在するのか否か。

常人ならパンクしているであろう脳内信号の嵐の中から、海東はこの場において一番妥当な答えを導き出して口にした。

「僕はゴーストとやらに出会ったし、そこでお宝の確認も出来た。

でもその前に、今君は『我々』と言ったけど、お仲間がいるのかい？」
「ふむ、正解だ。その質問が来るのを待っていたよ。

ただし、正確に言ってしまうのなら……………彼女は仲間ではなく同胞だ」
「彼女？」

海東がゾルーク東条の漏らした“彼女”というワードに引つかかっていると、

ゾルーク東条が不意に、海東に向かって白い何かを投げて渡した。受け取ってしてみると、それは海東が一度だけ目にしたお宝だった。

「コイツは、『アイコン』じゃないか。どうして君が？」

「私の同胞の物だ。これで君にも彼女が『視える』ようになる」

ゾルーク東条の意味有り気な言葉に疑問を抱いた直後、海東の背筋が凍った。

先程まで誰もいなかったはずの彼の横に、白いボロ布を纏った人物が現れたのだ。その人物がゆっくりと海東に近付き、その正体を彼に見せた。

「もしや君の、あのゴーストとやらの同類………？」

「私をあんな雑魚と一緒にしないで」

女性の割には高い方ではない声色で、海東の疑問に答えた女性。

彼女はそのまま海東の真横まで行って止まり、ゾルーク東条に代わって話し始めた。

「海東 大樹、貴方が筋金入りの盗みのプロだと信頼するからこそ依頼するわ。」

私と、後ろにいるルパンと一緒に、新たな二つの世界の宝を盗み出して！」「
「どういう事だい？」

「理由は依頼を承諾してくれたら話してあげる。

でもこの依頼を断るのなら、二人がかりでも貴方を潰すわ」

「このルパン、暴力事は嫌いだが……………仕方あるまい」

「僕は、好きな時に好きな物を好きなように盗むんだ。

足を引っ張るような他人と、チームを組んで盗むなんて御免だね」

海東は心底嫌そうにしながら二人に言い放つ。

それを拒否と受け取った女性は、瞬時に殺気を放ち始める。

彼女の放った殺気をどうやったのか探知したゾルーク東条は、おどけたようにしてお手上げのポーズを取って女性から一歩下がった。

「なら……………交渉は決れ「君も気が早い奴だね」……………何？」

女性の言葉を遮って、海東が話し始めると共に一歩踏み出る。

自分と真逆の行動をとった海東を見てゾルーク東条は、ほうと呟いた。

そんな彼を気にも留めず、海東は女性に向かって話を続ける。

「僕は嫌だとは言ったが、やらないとは言っていない。

泥棒をビジネスワークにはしないようにしてたけど、お宝の為だ」

「よく分からん男だな。ひねくれ者か？」

「つま弾きものさ、世間からすればね。泥棒なんてそんなものだろう？」

「……………そうだな。自己紹介が遅れたわ、私は『平坂 黄泉』よ」

そう言って女性——黄泉が手を差し出してきた。

しかし海東はその手を払いのけ、ゾルーク東条の方へ歩き出した。

握手を求めたのに拒否された黄泉は、元々鋭い視線を更に鋭く尖らせる。

彼女の視線を浴びながらも飄々としている海東はゾルーク東条の元へ行き、早速二つの世界へ向かおうと声をかける。

「それで、先にどちらへ行くんだい？」

「先に私のいた『ドライブの世界』に向かおう。そこである物を手に入れる」

「一体何を盗むつもりなの？」

「フフフ………私が今最も手に入れたいお宝さ」

そう言つてゾルーク東条は黄泉の肩に手を軽く置いてから、どこからか煌びやかな装飾が施された巨大な銃のトリガーのような物を取り出し、その銃口に反対側の手のひらを押し当てて、スイッチを起動させた。

「さあ行こう、同胞たちよ」

ゾルーク東条の言葉を聞いた海東と黄泉は、彼の横に並び立つて

それぞれ違った方法で自らの持つ力を発動させる手順を踏み始める。

海東は右手に持った銃の側面の溝にカードを装填し、銃の前半分をスライドさせる。

黄泉は腰に右指を添えて、左から右にスライドさせて半透明なバツクルを装着した。

三人は同じ夜空の下、誰に言うでもなく高らかに告げた。

「――変身!!!!」

「ルパーン!!」

【KAMEN RIDE

DIEND】

【カイガン！ ゼンセ！

Here we go！ 因果！ ガ・ガ・

ガ・ガイスト！！】

三人がそれぞれ異なる、独特な形状の外装に身を包む。

わずか数秒で、夜の闇の中に三人の仮面の戦士が現れ出た。

金色と黒のメインカラーに、様々な宝石を散りばめた『仮面ライダーダールパン』。

ゼオンカラーを主体とした、9枚の板で顔を覆い隠した『仮面ライダーディエンド』。

白とゴールドがベースのパーカーを羽織った、流麗な『仮面ライダーガイスト』。

「我がが狙うお宝は、私の最高の宿敵たる『ドライブの頭脳』！

その力の根源たる『クリム・スタインベルト』をいたたく！！」

ルパンは狙った宝を宣言し、高笑いを夜空に向かって放った。

そのまま三人は、ディエンドの作った濁った色の膜に包まれ、この世界から旅立った。

Ep, 13 『WIND Rhapsody』
花が散り風は止む』

明るい真昼時の日差しが窓辺から差し込む『Bistro la Salle』の中に、一人の男が来店した。

その男は優雅でありながらみなぎる自信を主張するかのような足取りで店内を闊歩する。

店のテーブルに座っていた士達は突然の登場に驚いていたが、彼らよりも驚いた男がいた。

他ならぬ加賀美その人だ。

「天道!! お前、今までどこにいたんだよ!!」

「やかましいぞ加賀美。お前の声は四年経っても衰えないのか、鬱陶しい」

「な、何だその言い方は!! ……………でも本物だ、本物の天道だ」

「当然だ。俺こそが天道 総司、俺こそが天の道を歩む男……………」

加賀美が興奮気味に話しかけてもサラリと受け流した天道は再び右手を上にあげて人差し指をしっかりと伸ばし、その指先を焦がれるような目で見つめ始めた。しばらくそうやっていたが、やがてゆっくりと手を戻して正面に向き直る。その正面には、厨房にいたはずの少女が緊張した面持ちで立っていた。

「て、天道……………」

「ひよりか、久しぶりだな。調子はどうだ？」

「あ、うん。まあそれなり、かな」

「ちよつとちよつと天道君久しぶりじゃない!!」

「弓子さんか、久しぶりだな」

「ホント、四年ぶりよね。それで、その人本当に天道君のお嫁さんなの!!」

ひよりの調子を尋ね、天道は先程から浮かべていた表情を崩して微笑む。

そんな二人の間に割り込むようにして弓子が天道との再会を喜んだ。

そして先程の彼の発言を確かめる様に話を切り出し、彼もそれに答えた。

「そうだ。天道 アゲハ、俺が三年前に知り合つて同居した。

そしてそこにいるのが俺の娘の天道 優未恵、二年前に生まれた」

「へ〜！ 意外だわホント、天道君が結婚して子供まで作るなんて!!」

「天道……………お祝儀袋、用意してない」

「そんな物必要ない。それよりもひより、俺とアゲハにサバ味噌を作つてくれ」

そう言つて天道は厨房に近い席に座り、アゲハも今座っている席からそこに移つた。

オレンジジュースを飲んでいた少女——優未恵もよたよたと歩いて移動した。

アゲハは自力で椅子に座れない優未恵を抱きかかえ、自分の隣に座らせた。

椅子に座つてから身じろぎせず持っているジュースを飲む少女を見て加賀美が唸る。

「しかし天道がなあ……………優未恵ちゃん、だっけ？ 大人しいんだな」

「俺が教育しているからな。あらゆる作法や行儀を、完璧かつ完全に」

「お、お前……………ソレつてモンスターペアレントつてヤツじゃないか？」

「うるさいぞ加賀美。ひより、サバ味噌を早く作つてくれ」

加賀美の言葉を真つ向から切り捨て、立っているひよりをせかす。だが当のひよりは動かさず、申し訳なきそうな表情のまま立ち尽くしている。それを見て座っていた夏海が立ち上がって、天道の前に歩み寄った。

「あ、あの……………サバ味噌は私達で最後だったようで」

「何？」

「その、ごめんなさい！」

頭を下げる夏海に、天道は面食らってしまった。

そんな天道の正面に座っていたアゲハは、天道に優しく語り掛ける。

「総司さん、この方たちは先程私とこの子を助けてくださったのです」

「……………どういう事だ」

「それは、その……………」

「なあ、聞いてもいいか？」

天道がアゲハの言葉を聞いて夏海を冷ややかな目で睨んだ直後、士が立ち上がった。そして士は夏海の横まで歩き、ふてぶてしい態度で座る天道を上から見下ろす。士の視線に気付いた天道は同じく立ち上がって、士と同じ目線に立って口を開く。

「お前は誰だ？　まずはそこからだ」

「俺は別の世界から来た通りすがりの仮面ライダー、門矢　士だ」

「……………?」

「ま、覚えておけ。さあ名乗ったんだ、こっちの質問に答えてもらおうぜ」

「断る。俺達は今からひよりのサバ味噌を食べる」

「ああ、そのサバ味噌なら俺達でラストだ。悪かったな」

「何だと?」

「在庫切れだそうだ、また出直して来な」

「……………」

二人の間に流れる空気が、より一層険悪なものになっていく。

何故初対面であるはずなのにこうも互いの仲が悪くなっていくのだろうか。

ユウスケは二人を交互に見比べてからある一つの結論に至った。

「ああなるほど、二人とも似たタイプだから嫌ってるのか？」

「ユウスケ？」

「アレだよアレ。ほら、よく言うじゃん……………えっと、同族険悪？」

夏海と加賀美がユウスケの言葉に首を傾げる。

ユウスケは何だつたつけどひたすら考えるが、思うようにいかない。

すると店の扉が優しく開き、カウベルがカランカランと鳴って来客を告げた。

「それを言うなら、同族嫌悪、でしょ？」

昼下がりの穏やかな日差しを背に受けて、高めの少女の声が響く。

キツチリと統一された規則正しい学生の服装に、学生が所持する指定カバン。

スラリと伸びている脚は未だ発育途上ながらも、将来性を感じさせるもので、着ている学生服や身長とは裏腹に、少しくたびれた幼いニット帽を被っている。突然現れた少女の言葉に、ユウスケは納得いったように声を上げて頷く。

「そうそう、それそれ！ ………………って誰？」

「おじさんこそ誰？ ……ってどうでもいいや。それより弓子さーん！」

少女はユウスケをおじさん呼びわりして切り捨て、厨房に駆け込む。

普通の客なら厨房になど入りはしないが、この店は随分フランクなようだ。

厨房にいた弓子は少女の声に気付いて振り返り、また驚いたような声を上げた。

「あらゴンちゃん、もう学校終わったの？」

「えへへ、抜けてきちゃった」

「ダメじゃない、また先生とお母さんに怒られるわよ？」

「だって……………大介が今日帰って来るって」

「あら、風間君が？」

「うん。だからここで待ってることにしたの」

「んもう、仕方ない……………ちよつとだけよ？」

「ありがとー！ 弓子さん大好き!!」

弓子にゴンと呼ばれた中学生のような恰好の少女は黄色い声を上げる。

その真後ろで、士と天道はさらに雰囲気悪さを悪化させていた。

「同族嫌悪？ バカ言うなチョビスケ、俺がこんなと同族な訳あるか」

「同族嫌悪？ バカを言うなゴン、この俺とコイツが同等な訳があるか」

「……………案外合ってるかも」

士と天道が同時にゴンの言葉を否定し、それを見た夏海がこつそり笑う。

お互いの行動がゴンの言葉を証明したことに、二人はさらに苛立つて睨み合う。

ひよりと弓子は怯えるが、ゴンがそこに割り入って仲裁する。

「天の道を行くお兄さんも、巻き毛のイカしたお兄さんも落ち着いてつてば。

ここはご飯を食べるところなんだから、ケンカなんてしちや駄目だよ。

ねえ天の道を行くお兄さん、そうだよね？」

「……………ゴンの言う通りだ」

「……………ふん」

ゴンの言葉に毒気を抜かれた二人は互いの席に戻ってドツカリと座り込む。

全く同じタイミングだったことに、その場にいた全員が笑いを堪え切れなかった。その一瞬和んだ空気の間を突いて、黙っていたアゲハがゆつくり口を開いた。

「ごめんなさい皆さん。総司さんは向こうにいた頃からこのお店の話をするよ

必ず『お前にひよりのサバ味噌を必ず食わせてやるから』と息巻いておりました。

それが果たせなかった事がどうにもお悔しいようで……………土さん、でしたか？
どうぞお許してくださいな」

「あ、ああ……………まあ別に」

「ホントすみませんねアゲハさん、それと旦那さん！ 土がご迷惑を」

「おいユウスケ、お前な……………」

「お優しい方ですね、ユウスケさん？」

「い、いやあ……………ハハハ」

「……………このおじさん、美人さんに褒められたかったんだ」

「最低ですねユウスケ」

ゴンが漏らした眩きを聞いた夏海が白んだ視線をユウスケに浴びせる。

誤解だと叫ぶユウスケを中心に、またも笑いが渦を巻いて沸き起こった。

「つまり、本当に他の世界のライダーなのか……………」

「ゼクターを用いない変身か、興味深い」

「ま、俺らの事を信じてもらえて何よりだ」

「では、この世界の事についても教えてくださいませんか？」

一息ついてから加賀美と天道、士達は近くのテーブルに寄って会議を始めていた。士達はこの『カブトの世界』の現状についてを話す前に自分達の事を話した。

仮面ライダーディケイドの事、仮面ライダークウガの事。

九つの世界の事、世界の崩壊と消滅の事、そして新たな世界の誕生の事。

初めはもちろん信じてはもらえなかったが、夏海の真摯な態度が良く働いたのかアゲハが助け舟を出したおかげで天道を納得させることに成功したのだった。

そして今、夏海が加賀美たちにこの世界の現状を率直に聞き始めた。

夏海の問いかけに、まずは加賀美が答えた。

「そうだな……………確かアンタ達の世界とやらにもカブトがいたんだろ？」

「ええ、でもこちらとは全然……………」

「なら、ワームは知ってる？」

「ハイ、人間に化ける虫みたいなヤツでしたよね？」

「まあそんな感じだ、それならもういい、俺が話すからお前は黙っている」……………オ
イ！」

加賀美の言葉を遮って天道が口を開く。

そこから、カブトの世界の『今』が明かされた。

「ワームとは、1999年に東京の渋谷に降ってきた隕石の中に紛れていた生命体で人間の外見から性格、特徴や記憶すらも完璧に模倣する『擬態能力』を持っている。さらに言えば、『クロックアップ』という人間では太刀打ち出来ない能力も保有する」

「あ、ソレ知ってます！ 凄い速さで移動できるってヤツですよね!!」

「……………そのユウスケとやらは加賀美と同類のようだな」

「ああ、そこだけは同意見だ」

「オイ、どういう意味だよ天道」

「話を続けるぞ、ワームの『クロックアップ』についてだが」

クロックアップ。

地球外生命体のワームが保有する二つの能力の内の一つであり、最強の能力。ここでは天道に代わってクロックアップの細かい解説を行わせてもらおう。

まずクロックアップとは、どのような能力であるのか。

ユウスケが言っていた、いわゆる高速移動の能力などではない。

クロックアップとは、『時間の流れを変動させ、その流れの中を移動する』能力だ。

解りやすく言えば、高速移動ではなく局地的な時間操作の能力である。

数学で使われる、 x 軸と y 軸のグラフを用いた計算式がある。

これはクロックアップの説明にもってこいであるため、活用させて貰おう。

($x \parallel 0$ 、 $y \parallel 0$) という計算式は、 x 軸と y 軸の交差する中心点の事を指す。

この部分が、今私達が生活している『普通の時間軸』ということにしよう。

クロックアップはこの時間軸を時間の流れを変動させる事によって変化させることだ。

($x \parallel 0$ 、 $y \parallel 2$) が、クロックアップを使った時の時間軸とすればよく解る。

x の軸(空間)は同じだが、 y の軸(時間)は通常の時軸とは全く別の位置に存在

する。

通常の時間軸が一分を60秒とするが、クロックアップの時間軸ではそうはならない。

一分が2秒、あるいは3秒といったように、流れる時間の速度が異なるのだ。

高速移動とは、文字通りに移動する速度を増大させることだ。

しかし速度を上げれば上げるほど、周囲の空気が速度に耐え切れずに急速な移動をす

る。

いわゆる衝撃波やソニックウエーブというヤツがそれにあたるわけだ。

しかしクロックアップは、周囲の空気の流れる時間の速度も操作している訳だから

そういった空気の変動も起こらない。クロックアップの速度で動いているのだから。

この超常的な現象を引き起こすカギは、『タキオン粒子』という素粒子にある。

タキオン粒子とは、ワームの体内で生成される地球上には存在しない特殊な素粒子だ。

地球上には無かったが為に、その特異な能力はまさしく全地球上の生命体にとって脅威以外の何物でもない。そこで人類はこの素粒子を解析し始めた。

時が経ち、ある者の協力によって遂にタキオン粒子を生成するベルトが開発された。

それこそがこの『カブトの世界』のライダーベルトである。

「と、言うわけだ」

「……………」

「……………」

「なるほど、大体分かった」

クロックアップについての説明が終わり、ユウスケと夏海の頭には疑問符が浮かぶ。逆に士は理解出来たと宣言し、加賀美が士を驚愕を飛び越えた驚きの目で見つめる。そんな彼らの反応をさておいて、天道が弓子の持ってきたコーヒーを飲んで続ける。

「そこいらでクロックアップの説明はいいだろう。」

次は今現在の状況か……………どこから話せばいいか、そうだな。

1999年にヤツらがこの地球の侵略を人知れず開始してから数年後に、ゼクターが開発され

俺達ライダーが誕生した。そして全てのワームを殲滅するため、行動を開始した。

「どうもこいつも役に立たない連中だったが、俺の力で全てのワームを打ち滅ぼした」

「オイ天道ちよつと待て」

「だがワームには亜種が存在した。『ネイティブ』という角の生えたワームだ。

ソイツらはワームとは違って、戦闘能力はほぼ皆無といって等しい下等種だったがワームはネイティブを虐殺しようとした。理由は連中の卓越した頭脳によるものだ。

実際、人間の対ワーム用切札である『マスクドライダーシステム』を作ったのも彼らで

ネイティブは俺達ライダーにワームを滅ぼさせ、改めて自分達の科学力で地球上の人間をワームに変えるという装置を起動させてこの地球を支配しようとした」

「それを止めたのが、お、れ、と、天道の二人だ」

「……………その装置によってネイティブ化した人間は、存在しない。」

すんでのところでネイティブ化する装置を破壊した、俺g「俺と!!」……………俺と加賀美が」

「それで、平和な世界に戻ったんだけどな……………」

「だがそこから三年後、つまり今から一年前にワームは再びこの地球に戻ってきた。」

前回同様、巨大な隕石と共に。だが今回は人類側も対策は打っていた。人類の力で生み出した新たな二人のライダーが隕石の破壊に向かった。「マスクドライダーヘラクス」と「マスクドライダーケタロス」がな」

「え、あの、ちよつと待ってください!!」

天道と加賀美の話を遮って、夏海が声を荒げた。

ユウスケと土が見つめる横で、夏海は天道の方を向いて疑問をぶつける。

「隕石の破壊について……………仮面ライダーが宇宙に行つたんですか!」

「ああ、そうだ」

「宇宙局つてのが出来たんだよ。ワーム対策にね」

「別段不思議じゃねえだろ夏ミカン。【仮面ライダーBLACK RX】だって宇宙に行つて

太陽の超パワーを体に宿して復活したんだから」

「そ、それもそうですね。すみません、続けてください」

夏海が興奮気味になった気分を抑える様に息を大きく吐き、椅子に座る。

離れた席では、ひよりとゴンと弓子が優未恵と一緒に遊んでいた。そんな小さな喧騒を無視して天道が夏海に促されて話を戻した。

「ところが、宇宙局から二人のライダーが隕石の破壊工作を始めようとした直後、その二人は殺された。相手は宇宙局に潜伏していたらしく、隕石は宇宙局を素通り地球に飛来し、再びワームと人類の終わらない抗争の日々が始まった」

「俺と天道とあと一人のライダーが三人で戦えば何とかなるって思ってたけど、現実には甘くはなかった……………向こうも既に、ライダーへの対策を立ててたんだ」

話を区切って再びコーヒーを飲む天道と俯いたままの加賀美。

ユウスケが話の続きを催促しようとした瞬間に、天道の口が開いた。

「今回攻めてきたのは、ネイティブが支配したワームの軍勢だった。

単純に攻めてくるワームだけならともかく、知能を持って攻め込むネイティブの頭脳が加わったせいで、ワーム達の討伐が非常に困難を極めるようになった」

「何度も何度も危ない目にあっただぜ……………天道が急にいなくなるから」

「俺抜きで抑えられないとは、情けないぞ加賀美」

「仕方ないだろ！ アイツらがまさかZECTを乗っ取るなんて予想できるか!!」
「ゼクトが乗っ取られたんですか?!」

「……………ああ、ネイティブの手に落ちた」

悔しそうに両手を振るわせる加賀美を夏海は黙って見つめる。

天道は横目でわずかにアゲハと優未恵を視界に収め、また向き直った。

「ZECTを乗っ取られ、人類の対抗手段は激減した。

今となつては、人類とネイティブ達の割合は同じかもしれない」

「そ、そんなに……………」

「こうなつたのも、全部『アイツ』のせいだ!!」

今まで俯いていた加賀美が大声と共に急に立ち上がった。

周囲にいた者は驚いたが、ただ一人冷静だった天道が小さく息を吐く。

彼の目線はただただ、日の沈む西の方角を向いていた。

士達が集まっている『ビストロ・ラ・サル』から西に向かって約2 kmほどの地点。昼過ぎとはいえ人通りが多くてもおかしくないはずのビル街に、人の影は見当たらない。

そんな怪しげな雰囲気この場所に、一人の男がやって来た。

白いハンチング帽を浅く被り黄色の柄の濃いシャツを華麗に着こなし、

長身な彼の背中には、ミュージシャンが持つような巨大なギターケースが鎮座している。

顔立ちは天道同様に整っていて、同性の中でも異彩を放つほどだ。

シユツと流れる切れ目は微かに濡れているようにも見え、異性からの注目を常に浴びるようだ。

彼の名は『風間 大介』、『仮面ライダードレイク』の資格者である。

「……………ハッ!!」

人影の無いビル街の真ん中で風間が独り声を荒げて空を見上げる。

しばらく雲も何もない空を見上げたまま、彼はゆっくりと口を開いて呟いた。

「……………何故だろう、今日は美人と出会える気がする」

だが口にした言葉は至極残念極まるものだった。

「いわゆる一つの……………一つの……………えっと」

彼は自分が感じた予感を別の言葉に置き換えようとして失敗する。

風間という男は大した学は無いが為に、国語力が成人男性としては乏しい。

「……………駄目だ、やっぱりゴンが————百合子がいないと」

そう寂しげに呟いて風間はガツクリと肩を落として落胆する。

実は風間は四年前まで、記憶を事故で失っていた百合子という少女にゴンと名付け、しばらく生活を共にしていたことがあったのだ。

その時のゴンは彼の本職であるメイクアップアーティストの仕事の調整や彼自身の発言のフォローなどを見事にこなし、風間をしつかりとアシストしていたのだった。

だがワームとのとある一件でゴンは記憶を取り戻し、元の百合子としての人生を掴み

彼との浮浪者のような生活に一応終止符を打ったのだった。

「……………いや、百合子には百合子の人生がある。俺とはもう、関係ない」

先程とは打って変わって落ち込んだ気分になった風間はトボトボと無人街を歩く。

「……………見つけたぞ」

「ん？」

風間が独り街を東に、懐かしい『ビストロ・ラ・サル』のある場所に向かって歩き出すと、

入り組んだ路地の一つから、低くかすれた男の声が聞こえてきた。

顔だけをそちらに向けて見てみると、そこにいたのは一人のゼクトルーパーだった。

ZECTは既にネイティブの手に落ちていることを知っている風間はすぐさま戦闘態勢に入る。

ズボンのポケットから銃のグリップ部分のみを取り出し、それを空に掲げた。

数秒後、複数の機械が擦れ合うようだが決して不快ではない調和のとれた音が聞こえ

てくる。

その音の発生源が、まるで生き物のように上空を旋回しながら風間の掲げた物に音もなく留まる。

「……………『ドレイクゼクター』、風間 大介か」

「だったら何です？」

「……………排除する」

「分かりやすい敵ですね、でもたかがワーム風情が俺には勝てないと思うが？」

「……………風間 大介、一度勝ったくらいで凶に乗るな」

「……………何？」

眼前のゼクトルーパーは、普通の者とは違いその全身は白で統一されていた。

かつてのZECTであればそのカラーリングは、訓練生を意味するものであったが、今となってはその形態が残っているのかも分からない。

そして風間は白いゼクトルーパーの言葉に違和感を覚えた。

「二度？ 何の話だ？」

「……………行くぞ」

風間が白いゼクトルーパーに言葉の真意を尋ねるが、男は無視して行動に移る。

見覚えのある形状のメタリックカラーのベルトを腰に巻いて、右手で皿を持つように掲げた。

既に自分のゼクターを呼び出した風間は手にしたグリップにドレイクゼクターを装着させる。

「くっ、変身!!」

【HENSIN!】

風間の掲げたグリップに留まっていたトンボを模したドレイクゼクターがグリップと一体化する。

そしてガタツクの時と同じように全身に六角形状の装甲のようなものが広がっていく。

違うのはガタツクとは違って、ベルトからではなく右手のグリップから広がる点だけだが。

やがて全身を覆われた風間は、マスクの口部分から背中中のタンクにチューブの伸びた特殊な形状の

全身装甲に身を包んだ水中戦特化型「マスクドフォーム・ドレイク」となった。

「……………」

対して白いゼクトルーパーの掲げた右手には、あるものが飛来して来た。

明るいエメラルドカラーのカマキリを模した形状の、自立して動くゼクターが。

ゼクトルーパーはそれを掴むと、腰のベルトの中央部分を展開し、そこに滑り込ませた。

するとベルトから三角形状の装甲が全身に広がり、数秒と経たぬ内に全身を覆い尽くした。

「お、お前は……………」

「……………」

まるで尖り切ったリーゼントの如く突き出た頭部は、まるでカマキリの腹部を模して

いるように

その上には緑がかった半透明の翅のような装飾が施され、マスクの側面にも脚部が備わっている。

胴体はカマキリのカマらしいデザインの装甲が中心部から左右の肩部に向けて伸びている。

右腕にはベルトのバックルと同じように何かをはめ込むような形状のくぼみのある籠手を装着し、

左足にはバツタの後ろ足を巨大化したかの如き薄黄色のジャックアンカーが取り付けられていた。

「貴様、まさか『岬さん』が言っていた例の新型か!」

「……………」【Clock Up!】

「しま

がッ!!!!」

緑色の装甲のライダーが眼前から姿を消した瞬間、ドレイクの体が吹き飛ぶ。

自分の体に何が起こったのか瞬時に理解したドレイクは、敵と同じ時間軸に行くために

腰に装着されている『クロックアップシステム』を起動しようとして手を伸ばす。だがその直後、自分の腰の部分に違和感を覚え驚愕する。

「な、クロックアップシステムが、破壊されている!!」

ドレイクの腰にあったシステムは既にクロックアップの時間の中にいる敵によって破壊されてしまっていたらしく、いくら動かしてみてもその機能は発動しなかった。吹き飛ばされたドレイクが立ち上がるこの数秒の間、敵はどんな行動をとるのか。そんな事を考えていたドレイクの思考は、次の一瞬で停止した。

【RIDER HUNT!】

「……………まず一人」

【Clock Over!】

「いっっ!!」

クロックオーバー、時間の流れの変動の終了を告げる電子音声周囲に響き渡る。だがその音声に対して、誰も疑問や異議を申し立てる者はいない。

この場に居るのはただ一人、立っているのはただ一人、勝者はただ一人。緑色のライダーはドレイクの腹部を貫いた右手を引き抜き、ブラブラと脱力させる。やがていつの間にか装着していた右手のゼクターを外し、ベルトにマウントさせた。

「……………残るは二人、か」

濁ったような黄緑色の双眸を怪しく光らせながらライダーは呟く。そのまま振り返り、来た道に戻るようにして路地裏に消えていった。

「……………ぐ、かはっ！」

独り残され、耐久度を超え強制的に変身を解除させられた風間は激痛に苦しむ。地面を這うようにして、ゆっくりと亀の如き速度でただひたすら前進する。穏やかな日差しなど彼には意に介する暇もなく、虚ろになった目で見据える。掠れるような声で、風間は脳裏に焼き付いて離れない人物の名を呼んだ。

「……………ゴン……………れ、な……………さん……………」

糸が切れた操り人形のように、声を漏らしたきり風間は動かなくなった。彼の手に握られていたグリップからドレイクゼクターが、東に飛び立つ。それを薄れる意識の中で確認した風間は、一休みしようとゆっくり目を閉じた。

風間 大介はその後、意識不明の重体で発見された。

E P, 14 『HUNTING TIME』 地獄の残り火

『

男が一人、路地裏から人混み溢れる街中に現れた。

今この『世界』に起きている事態を知らながらも自分達とは無縁だと言い張るような雑踏。

彼らの感じる一秒の間に、どれほどの怪物が蠢いているのかすらも知らないままで。

男は独り、人間の群れの中に歩いていく。

周囲の人々から向けられる視線に、かつてのような好奇の視線は見受けられない。

まるでそこに存在していない幽霊であるかのように、男は人混みの中に紛れていく。

男は独り、何を思ったか振り返る。

自分の視線の先にあるのは、宇宙から来た生命体『ワーム』と共に飛来した二度目の隕石の

直撃を受けて倒壊してしまったこの都市のシンボルだった金属とコンクリートの残

骸。

ソレを見ている男の目には、感情と呼べるほどのものは無かった。

男は独り、ゆっくりと歩き出す。

人の気配から遠ざかるように歩を進め、崩れ去った廃墟に向かって行く。

彼の向かっている場所にはかつての人類の防衛拠点『ZECT』の本部があった。

しかし今はもう見る影も無く、むき出しの鉄骨と腐って砕けた灰白色の破片が散乱している。

男は独り、ようやく足を止める。

履いている黒色の革靴にはもう地面に散らばる残骸の粉末が付着して汚れているが、本人は気にせず廃墟の一つを目で見つめてため息をつく。

「……………またか」

半分苛立つように、半分呆れるように男は呟く。

すると廃墟の中から呟きを聞いた、別の男が姿を現した。

「ああ、まただ。だが仕方ないだろう、それが組織というものだ」

高級ブランド物のスーツで身を包んだ知的な印象を抱かせる眼鏡の男はそう語る。その言葉は聞き飽きた、と言いたげな表情をする最初の男を見て続けて小さく呟く。

「君ならその辺りはよく知っていると思つたがな」

「……………昔の話だ」

「昔、ね。だがそれは今になっているな。何せ今の君は我々の仲間なのだから」

「……………要件があるんなら早く言え、お前も暇じゃないんだろ『三島』」

三島と呼ばれた眼鏡の男は、元々釣り気味だった目をさらに上げて睨みつける。

人間が出せるとは思えないほどの殺気を纏つた視線にも、男は身構える事は無かつた。

効果が無いと最初から知っていたのか、三島は眼鏡の奥の瞳の殺気を素直に消した。

「その名をここで呼ぶな。ヤツらワームには印象が良くない名前だからな」

「……………自分のコピー元、オリジナルの名前なのか？」

「余計な事は喋るな。お前は黙って命令を実行していればいいんだ」

先程の怒りが覚めていないのか、若干喧嘩腰になって三島は男に詰め寄る。男の方はさつきと同じように気にも留めずに、三島の話の続きを促す。

「……………そうだな。それで、次の命令は？」

「今度は簡単だ、さつきよりもな。女と子供を攫さらってくればそれでいい」

「……………女と、子供？」

そうだ、と言つて三島は上着のポケットから二枚の写真を取り出す。

そこには盗撮されたような角度で、母親と娘のような二人が映っていた。

男は写真を受け取つて確認し、黙つて廃墟の中へと踏み込む。

彼はそこを寝ぐらにしていた。それを知っていた三島がわざわざここへ来たのだ。

三島は自分の横を通り過ぎて行く男に背を向けながら、ただ一言告げる。

「次でお前の求めるものに手が届くぞ。抜かるなよ、『ビヤクヤ』」

「……………俺が求めるのはいつだって、闇の底にある」

ビヤクヤと呼ばれた男はそのまま、沈みかけた夕日を背に廃墟の中に消える。

三島は要件は伝えたとばかりに歩いて瓦礫の山から出て行く。

その小奇麗な後ろ姿を見送りながら、ビヤクヤは写真を見て悲しげに呟いた。

「……………いや、闇の底にしかない。ここまで堕ちた俺にしか、見えない『光』が」

ビヤクヤの後ろにいた一匹のカマキリだけが、彼の言葉を聞いていた。

士とユウスケと夏海の三人は、今とつても困っていた。

彼らが今いるのは先程までいた比較的庶民感漂う洋食店では無く、豪華な城の門前。一体どうしてこんなことになっているのか、それはほんの三十分前に遡る。

士達は天道達とこの世界についての様々な事を聞いていた。

ワームについて、クロックアップシステムについての事など。

ところがここに三度目の来訪者が扉を蹴破るような勢いで現れたのだ。

白いスーツを完璧に着こなした才女、名前を『岬 祐月』ゆづきというらしい。

彼女は店に乱入してくるや否や天道と加賀美には目もくれず、士を見つけて怒鳴りだ

した。

そのまま土の手を引いて自分の乗ってきた高級車に無理やり乗せて去ってしまった。残されたユウスケと夏海は、ユウスケの持つバイクに乗って土の後を追ったのだ。

そうして辿り着いた場所で呆然と立っていた土を見つけ、三人で並んで突っ伏していた。

自分の記憶が正しいことを思い返しながら、土はここまでの出来事を思い出す。

とりあえず現状を把握しようと周囲を見回すが、自分と同じように立っている二人しか

目に入らず、無駄なことだったかと諦めて先程城の中へと行ってしまった女性を待つことにした。

するとちょうど巨大な両開きの扉を押し開けて階段を下りてくる女性と目があつた。

「おいアンタ、一体何のつもりだよ」

高圧的に女性に詰め寄る土だが、その格好はコックが着るあの白い服である為

如何せん迫力が無い。相手もそう思ったのか高圧的な態度を返すように話しかけて

きた。

「何って、どうもこうもないわよ」

「だから、どうして俺がここまで連れてこられたのかって事だ」

「あなたね、自分の立場を分かってないの?!」

女性は士の胸倉を掴む勢いだが、女性の身長はちょうど士の胸元辺りまでしかない。だから仕方ないというべきか、思ったよりも迫力が無くなってしまうた為に士に余裕が生まれる。

士は一步踏み出してさっきよりも態度を大きくして女性に話しかけた。

「俺様の立場は常に最上級だ。どの世界にいつてもチャホヤされっぱなしでな!」

「あなた、何言ってるの?」

「日本語」

「バカにしてるの?!」

「ああ、してる」

士とのやり取りにさらに苛立ちが募った女性が目つきを鋭くさせる。

ようやく二人の雰囲気は険悪になっているのに気付いたユウスケと夏海が女性に何とか

話をつけようとするが、全く聞く耳を持たない。

すると女性がやってきた城の中から、燕尾服を来た白髪の老人がヨタヨタと歩いてきた。

老人は女性と士達を見つけるや否や、しわがれてはいない音程の声で謝罪し始めた。

「も、申し訳ございません！ 貴方がたのお話は岬お嬢様から伺っております！

御気を悪くされたようでしたら、この爺じいやめがいくらでも頭をお下げいたします

！」

「じ、じいやさん！ 頭を下げないで、ちよっ!!」

「……………土、何がどうなってるの？」

「……………俺に聞くな」

眼前で起こっている出来事に脳内での処理が追いつかなくなった三人はうなだれる。

その場で突っ立っているわけにもいかず、後から現れた『じいや』という老人に促さ

れる

ままに大きな城の中へと足を踏み入れた。

最初に士達の目に留まったのは、金色の光で自分達とロビーを照らしているシャンデリア。

まるで最初からそこに存在するためだけに作られたかのようなソレを見て、庶民の二人は

感動の吐息を漏らし、士は黙って首元にぶら下げたカメラで城内を撮影し始める。

じいやに導かれるままに、おとぎ話に出てくるような城の中を見て回った三人は最後に

食堂に連れてこられ、ここでしばらく待つように言われた。

「いやあ、それにしても凄いとこだな士！」

「ま、ようやく世界が俺の要望に応えられるようになったってところか？」

「何偉そうなこと言ってるんですか、土君」

「偉そう、じゃねえ。偉いんだよ」

普段の生活では決して座れないような、金で縁取られた豪勢な椅子に座る三人。

椅子の脚の部分が緩やかな曲線を描いていて、三人が座るのに足が邪魔にならない。あまりに高価なものが溢れすぎている食堂で彼ら三人は完全に浮いてしまっていた。しばらくすると、正装に着替えた女性と老人が現れて対面座席に座って挨拶をした。

「まず最初に貴方への非礼は詫びます。本当にごめんなさい」

「ま、謝れただけマシか」

「土君！」

「……………まあいいわ。自己紹介がまだだったわね、私は岬 祐月。

隣に居るのは私の、と言うよりこの館の当主の執事を務めていたじいちゃんよ」

「先程のご無礼、どうかお許しください」

自己紹介と共に深々と三人に頭を下げるじいやという老人にユウスケはかしこまる。

夏海は気にしていないと手を振るが、土だけは完全に凶に乗っていた。

そんな不遜な態度の土を見かねて、とうとう夏海は奥の手を出してしまった。

「光家秘伝・笑いのツボ!!」

「いだっ！」

ふっはははは!! や、やめろ夏ミ

カン!!」

「出た、夏海ちゃんの必殺技！」

「え、何？ 何で笑ってるの？」

「ど、どこかお体の具合でも？」

岬がバカを見るまなざしで土を蔑み、じいやは心底心配そうに土を眺める。しばらくしてから笑いの治まった土は、夏海の前大人しくなった。

一番の不安要因を（強制的に）黙らせた彼女は、そのまま会話の主導権を握る。

「すみませんでした、土君は本当に他人を思いやれない人なので」

「オイ、今なんつった夏ミカン」

「ああ、やつぱり。それは仕方ないですね」

「岬お嬢様！ お客様にそのような言葉は慎まれた方が」

「そうだそうだ、言ったら爺さん」

「土、ちよつとだけでいいから黙ってるよ、な？」

とうとうユウスケにまで邪魔扱いされた土は拗ねて、カメラをいじりだした。

そんな彼を放っておいてどんどん話を進めて行く岬と夏海の二人。

「それで、どうして土君がここに連れてこられたんですか？」

「その事については、彼自身が知っているはずなんです……」

「土、どうなんだよ」

「……………」

「ちよつと土君！ 拗ねてないで話してください！」

「土様、お飲物でもお出ししましょうか？」

ユウスケの言ったように黙ってしまった土に、じいやは優しく話しかける。

じいやの言葉に無言のまま頷いた土を見て、夏海とユウスケは微妙な顔になった。

飲み物を取りに出て行つたじいやを除いた三人で話は続けられる。

「何故私が彼を連れて行つたか、それは多分彼の持ち物に関係があります」

「持ち物、ですか？」

「ええ。彼は多分、生前この当主が持っていた物を所持している

可能性があります。というより、ほぼ間違いないそうです」

「……………土君、出してください」

「土様、紅茶でございます」

「知らねえよ。俺が持つてるのはカメラだけだ」

話をしている間にじいやが戻り、紅茶を土の前にそつと置く。

それで少しだけ機嫌が直ったのか、手持ちのカメラをぶら下げて不機嫌そうに呟く。夏海はそれを信じて岬の方を見るが、彼女は土に食って掛かるように詰め寄る。

「いいえ持つているはずよ。彼の持っていた形見のハンカチを！」

「だから知らね……………いや、待て。ハンカチだと？」

「もしや、ご存知なのですか!!」

「ハンカチなら、確かコツチに……………あつた、コレか？」

「そう、ソレよ!!」

土が懐をまさぐって取り出した純白のハンカチを見て、岬が立ち上がる。

そのまま土の手からハンカチを取り上げ、細部まで見逃しの無いように凝視する。

手触りやハンカチの縫い方、そして隅に施された『ノブレス・オブリージュ』の刺繍。

これらを全て確認した後で、岬は心の底から安心したようにハンカチをたたむ。

「良かった……………ついで…剣君のお父様の形見が戻ってきて……………」

「本当によろございました。やはり、正統な後継者は貴方だったのですね!!」

泣き出しそうな岬の肩を支えて、じいやが感動したように士に視線を向ける。

当の士は何のことだか分からないまま、ただ突然の出来事にあたふたしていた。

その横にいたユウスケと夏海もまた、何が起きているのか分からず動揺していた。

しばらくして治まったのか、岬とじいやがそろって椅子に座りなおって話を始める。

「夏海さん、でしたか。先程も言ったように、彼を連れてきた理由はこれです。

このハンカチはここ、『デイスカビル家』の先々代当主の形見だったんです。

それが先代当主に継承されたんですが、彼の死後、行方が分からなくなってしまう
て」

「そんな事があつたんですか……………」

声が震えて涙交じりになっているのも構わず、岬がハンカチの事を語る。

話を聞いたユウスケと夏海は、士が何故そんな物を持っていたのか疑問に思った。二人の視線を受けて言いたい事を悟ったのか、カメラをいじる手を止めて呟く。

「ホントに知らんぞ俺は。ハンカチがあつたのは知つてたが、そんな物だとは」

「……………士君、正直に話してください」

「お前ホントいい加減にしろよ夏ミカン、俺はな」

「まあまあ、お二人とも。紅茶でも飲んで一息ついてはいかがでしょう」

険悪な雰囲気になりかけた士と夏海の間に、じいやが割り込んで仲裁する。

どこか高貴な香りを漂わせるティーポットを持って、カップを新たに並べて中に紅茶を注ぐ。

香りにつられた二人とユウスケはカップを手にとって、グツと傾けて一気に飲み干す。

「こ、これは……………落ち着くう」

「ホントですね、美味しい」

「この香りと味は……………バラを使ってるんだな、じいさん」

カップに注がれた紅茶を飲み干した三人は思い思いの感想を述べるが、士一人だけは紅茶に

使われた植物を言い当てた。岬とじいやの二人は、その事に少しではあるが驚いていた。

「士様は、紅茶も嗜たしなまれるのですね」

「ん？ いや、なんかそんな気がしたただけだ」

「貴方って、意外と紅茶の違いが分かる人間だったのね。少し驚いたわ」

「ああそうかい。ところでじいさん、このバラもデイスカビル家とやらの御用達なのか？」

「……………」

つい先ほどまで穏やかな笑顔を浮かべていた老人が、引き締まった顔つきになつて強張る。

一体どうしたのかと夏海とユウスケが気遣うが、何でもないと言うように手を振る。

そして何かを決心したようにじいやは顔つきを鋭くして、士の問いかけに応えた。

「このバラの紅茶は、先代当主の劍坊ちやまが心底嫌悪なされた一品でございます」
「……………嫌悪？ 自慢の一品じゃないのか？」

「ハイ。実は先代の劍坊ちやまには、お姉様がいらつしやいました。

御二人はとて仲睦まじく、御二方の幸せはいつまでも続くとおりました」

じいやの話が始まった途端、岬が下を向いて肩を震わせ始めた。

夏海が彼女を心配する横で、じいやが話をゆつくりとだが続けていた。

「ですが、とある清々しい穏やかな昼下がりの事でした……………」。

御二人は少し離れた場所にある庭園で優雅に御茶を楽しんでおられたのですが、

そこに一体のワームが現れて、劍坊ちやまのお姉様を殺害したのです」

「え……………」

「お姉さんを、か。俺にとつての姐さんみたいなもんかな……………」

先代の話を聞くにつれて明らかになった過去に、ユウスケが反応した。

彼もまた自分がかつて暮らしていた『クウガの世界』での思い出を思い出す。

ユウスケが愛し、慕っていた一人の女性と、見知らぬ女性を重ね合わせて。

「目の前でお姉様を惨殺された坊ちやまは、一人復讐を誓ったのです。

サソリの姿を模した、スコルピオワームに」

「なるほど、大体分かった」

「えり!!」

「要するに、そのサソリのワームと戦って惨敗しちまった先代とやらの

かたき
仇を取ればいいんだな？」

椅子から立ち上がってそう豪語した士だったが、じいやは困ったような顔になる。

岬もまたじいやと同様でやはり困ったような表情をしているが、士は全く気付かな

い。

そのまま食堂を歩き回りながら、独自の世界観に浸り始めた。

「まあ任せておけ。俺にかかればワーム程度相手にはならないしな。

「これがこの世界での俺の『役割』だとしたら、楽勝にもほどがあるぜ」

「さ、この世界？ 役割？」

「士様、一体それは何のことでございましょうか………?」

「あ、気にしないでください。コッチの話ですから」

士がうっかり漏らした言葉に違和感を覚えた二人だったが、ユウスケがフォローする。

その後椅子に座りなおした士が、急に真面目な顔に戻って自分で遮った話を戻す。

「それで、あのハンカチを戻したら俺がここに居る理由はもう無いのか?」

「いえ、まだございます」

「え、まだあるんですか?」

「ハイ。士様は正式に『ノブレス・オブリージュ』のハンカチを継承なされた御方。

であれば、この力を授けるに相応しいかどうかのテストを受けていただくことになります」

「テスト?」

帰れるんじゃないのか、と心底残念そうに嘆いた士にユウスケと夏海も同意した。

だが岬はおろか優しい気なじいやですらも怒りを含んだような表情になって語りだす。

「左様でございます、士様。これは非常に名誉あることですぞ！」

単なる平民がこのイギリスの名門たるデイスカビル家を継ぐ機会を得るなど!!」「何か腹の立つ言い方だったぞ、爺さん」

「士君、だったかしら？ この試験は受けるか受けないか、貴方に拒否権は無いわ。今この世界において、ライダーシステムの資格者は必要不可欠なの。

だから例え血反吐を吐いてでも、『サソードゼクター』の資格者になってもらうわ
！」

じいやが態度を一変させる最中、岬は食堂の端にある暖炉の上に崇められるようにして

供えられていた異様にメカチックな一振りの剣を持ち出し、土に突き出した。

困惑する土を差し置いて、じいやと岬の二人はジリジリとにじり寄る。

とうとう互いの距離がゼロになりかけたその時、食堂のステンドグラスが粉々に砕かれて

至るところに飛び散り、予期せぬ闖入者の来訪を高らかに、激しく告げた。

「やはり隠し持っていたな、あの世間知らずの遺した最後のゼクターを!!」

突然の事に誰もが驚いたが、特に岬と士の二人がこの場に居る誰よりも驚いていた。その二人だけしか、やって来た脅威の脅威たる理由を知らなかったのだから。

「さあ、ソイツを寄越せ人間。いや、我々に返上しろ……………なあ、岬?」
「……………やはり、貴方も関わっていたのね!!」

色とりどりのステンドグラスが舞い散る中、それは優雅な足取りで歩み寄る。

胸部を守る分厚く強固なメタルイエローの鎧に、腹部に伸びる針状の計測器。

左腕には腕輪の上に装着されたプレスに巨大なハチを模した機械のようなものが鎮座している。

胸部の鎧から両肩にかけて伸びているのは、鋼色のスズメバチのような翅の形状のアーマー。

頭部は同じくメタルイエローの装甲に包まれていて、そこから覗く狡猾に歪んだ鈍色の

昆虫の複眼のような構造になっている双眸。そしてそこから伸びる二本の触覚。

そこに現れたのは、組織を束ねる統率者の化身。

微々たる個であろうと全てを自らの支配下とし、完全たる集団を形成し敵を抹殺する。

まさしく『調和』^{ハモニー}と共にあり、『不協和音』^{コンクールド}を許さない自然界の縦社会の縮図。

——彼こそは「仮面ライダーザビー」

ザビーはゆっくりと岬に歩み寄り、その腕で抱き締めている剣を一点に見つめる。

だが彼と彼女の間に、ゆったりと場の空気を読まないように一人の男が割り込んできた。

知らない男に行く手を遮られたザビーは不快げに舌打ちして、瞬時に殺気を放ち始める。

しかし、そのドス黒い殺気でさえも、この男には届かない。

「テストに何を用意してたかは知らんが、要するに実力を見せればいいんだろ？」

「だったらちようどいい、ザビー程度なら軽く叩きのめせるってどこ見せてやるぜ」

懐からザビーには見慣れないバックルと取り出して、同じく見知らぬカードを取り出した

謎の男に対して、一応の警戒だけはしておく。

だがその慢心こそが、ザビーの最大の間違いだった。

その事に気付かせるように、男の持つカードが装着されたバックルに装填され、起動する。

唐突に聞こえた電子音声。その直後に目の前で起きた事実。

仮面の下で、ザビーの資格者は驚愕で声も出せなくなっていた。

何故、何故。どうして、どうして。

馬鹿な、馬鹿な。ありえない、ありえない。

ゼクターを使用しないライダーなんて、存在するわけが無い。

そんな彼の心中の叫びを打ち砕くように、目の前の男の姿が変化する。

[KAMEN RIDE DECADE]

マゼンタカラーの悪魔が、メタルイエローの支配者と対峙した。

Ep, 15 『WHITE NIGHT』 ～果たせぬ誓い

『

ディスクビル家の食堂に、周囲の厳かな雰囲気似合わぬ電子音声が響き渡る。

バックルにカードを装填した男の腰から発せられる音声が、その場の誰もを震撼させた。

特に驚愕で表情を大きく変えたのは、執事服の老人とスーツ姿の女性、そしてザビーだった。

見たことも無い仮面ライダークレストの紋章が空中に九つ投影され、そこに灰色の人影が現れる。

全ての影がハッキリと形作った直後、それらは奇妙な動きで中心にいた男の元へと集まり始めた。

ほんの数秒で全ての人影が合わさり、黒と灰色の装甲を身にまとった戦士が呆然と佇む。

しかし戦士の仮面からまたしても九つの、今度は大小様々な長方形のプレートが射出された。

回転しながら仮面へ戻って来たプレートはまるで初めからそこにあつたかのように仮面に収まる。

最後に仮面の眼ともいうべき双眸が、濁りながらも輝く緑色の光を放った。

【仮面ライダーディケイド】

彼の後ろに居る夏海とユウスケ以外は知らない、この世界において全く未知の戦士。様々なライダーを見てきた岬やじいや、そしてザビーをしても知りえない謎の戦士。全身を色褪せた返り血の如きマゼンタに染めたディケイドは眼前のザビーに悠々と告げる。

「前の世界じゃ随分世話になったが、今回はそうはいかないぜ」

「……………何の話だ」

「俺の話だ。とにかく、今からお前を捻り潰すって事に変わりはないぜ!!」

「誰だか知らんが、寝言は寝てほぎけ!!」

傍若無人たる態度で告げたディケイドに、ザビーは激昂し罵声を浴びせる。

怒りをそのままに突っ込んでいたザビーを、デイケイドはぼやくようにしていなす。

(ザビーに手持武器^{エモ}は無い。あるのは左手のプレスから伸びるニードルだけ、か)

右手を大振りに掲げて突進してきたザビーを躲しながら、デイケイドは冷静に相手を観察する。

手に持つて自らの範囲^{リーチ}を広げられるような武器など、ザビーには装備されていない。そもそもザビーの戦闘スタイルは多数の部下を引き連れ戦況を見極めて彼らを効果的に操り、

集団という一つの『個』となることで強大な敵に打つ勝つというスタンスが基本となっている。

なのに眼前のザビーはそのセオリーに反するように、単独で自分に接近戦を挑もうとしている。

(コイツ、ザビーの戦闘力を過信してるのか？ いや、もしかして使い慣れてないのか？)

蹴りを織り交ぜた近接戦闘を繰り広げているザビーの攻撃を躲しながらそう結論付ける。

今デイケイドの頭の中にあるのは、この『カプトの世界』における【ライダーの定義】だった。

この世界でライダーになるためには、まず『ゼクター』と呼ばれる意志を持ったシステムに

選ばれなくてはならない。彼らに選ばれて初めて、人はライダーになる権利を与えられるのだ。

しかし、ゼクターに選ばれたからと言って死ぬまでその権利があり続けるわけではない。

ゼクターが資格者と戦っていくうちに、その資格者を見限って変身を拒否することもある。

そうするとまたゼクターはより良い資格者を選び、資格者を替えていくのだ。

それらを踏まえた上で、デイケイドの脳内ではある仮説が浮かんでいた。

眼前のザビーは戦闘のセンスこそ見事だが、まだ選ばれて日が浅いのではないか。だからこうして単騎で相手に挑んでくるといふ愚行を犯せるのではないのか、と。

そう判断したデイケイドは観察のための手抜きを終え、本気で戦闘に意識を向けた。

「大口を叩くだけで、逃げ腰か！」

「いや、もう準備運動は飽きちまったから本番行くわ」

「何？」

相手を煽ろうとして出されたザビーの発言を上塗りするデイケイド。

そしてその宣言の通りに、今度はデイケイドの方からザビーに向かっていた。

デイケイドが軽く拳を打ち出し、ザビーがそれを弾く。

弾かれる勢いに任せて身体を回転させて繰り出した裏拳がザビーの右手に掴まれる。

動きを止めて右腕を押さえたザビーは左手で右肩を掴み、食堂のテーブルに叩き付けた。

磁器が床に落ちて砕ける音を聞きながら右腕をギリギリと締め上げるザビー。

だが右側を押さえられたデイケイドはその場で体を回転させ、床に二人もつれこむ。

転がった拍子に拘束を解かれたデイケイドは立ち上がろうとするザビーを一蹴。

大きくよろめいた相手を逃がさぬように、苛烈な猛攻を開始した。

右手で殴る、顔に直撃。左手でブロー、肩を強打。

右足で蹴る、左腕でガードされる。左手を突き出す、ガードを破る。

流れで左足を振り上げる、ギリギリで躲される。

一回転して右足を後ろから蹴り出す、体勢の崩れたザビーに突き刺さる。

デイケイドの蹴りを受けて吹き飛ばかと思われたザビーだったが、

両腕を鳩尾みぞおちの辺りに置いていたおかげか、彼の蹴りを止めていた。

ガツチリと足を掴まれたデイケイドは片足で拘束を解こうともがく。

だが一度拘束して解かれたザビーは二度と逃がさんとばかりに力いっぱい掴んでいた。

「もう逃げられまい。このまま脚を折って、その後で貴様をゆっくりいたぶってやる」

「そうかい。まあそれならそれでいいけどな」

「まだ余裕があるのか。今度は逃がさんぞ」

「それでいい。しっかりと掴んで、放すなよ?」

何だと、とザビーが尋ねる間もなく、デイケイドが一枚のカードをバックルに装填する。

バックルの機構がカードを読み込んで内容を反映させる中、デイケイドが宙に跳び上がる。

左足一本ではそこまで跳ぶことは出来ないが、この場に限ってはそれで良かった。唸るようにしならせた左足を体の回転と共に空中を滑らせ、そのまま右足にぶつかる。

無論、今彼の右足の先にはザビーがいるために、その蹴りは彼にあてたものである。空中で体を半回転させながら放った蹴りは、ザビーが脚を押さえていた右肘に直撃した。

「ぐうっ、あっ！」

予想だになかった攻撃で腕を負傷したザビーは苦痛の声を上げるが、まだディケイドは攻撃を止めてなどいなかった。

腰にマウントされていたライドブツカーをガンモードに切り替えて照準を合わせる。回転衰えぬまま滞空する中、右手のみでライドブツカーガンと共にカードの効果を発動させた。

【ATTACK RIDE

BLAST】

デイケイドのバツクルから高らかに告げられた電子音声に従って、銃口がブレる。その銃口のブレはやがて複数の銃口を形成し、それらが一齐に火を噴いた。

”下手な鉄砲数打ちや当たる”という言葉があるが、この至近距離で踏んできた場数の量。

それらが合わさりさながらショットガンのようにばら撒かれた銃弾がザビーを襲った。

「がああっ!!」

「まだまだ、こんなモンじゃ無いぜ」

滑らかに着地したデイケイドは無数の銃撃に地に伏したザビーに余裕を見せる。

上からの目線と威圧に負けじとザビーはよろめきつつも立ち上がる。

その間にもデイケイドはライドブツカーをソードモードへと切り替えていた。

そしてそこから新たに取り出したカードをバツクルに装填し、効果を反映させる。

【ATTACK RIDE
SLASH】

今度は先ほどの「アタックライド・ブラスト」の剣バージョンとも言える効果の「アタックライド・スラッシュ」を発動させ、複数の剣を形成して振りかざす。

右手に持ったライドブッカーソードと共に、よろめくザビーに突貫する。

右上段からの袈裟斬り、複数の剣が残像のようにザビーの胸部装甲に直撃。

返す刀での左下段斬り上げ、初撃以外はかするのみでダメージは与えられず。

深く踏み込んだ一步と共に左上段袈裟斬り、複数の剣がザビーの装甲を刻む。

最後に一際大きな一步で詰め寄り突き出し、胸部装甲に大穴を穿った。

銃撃で既にダメージを負っていたザビーに容赦無い連撃を浴びせるデイケイド。

その甲斐あつてか、ザビーのメタルイエローの装甲のあちこちにヒビが入っていた。

ポロポロになりながらも立ち上がろうとするザビーをデイケイドはただ見つめる。

現時点では彼が圧倒的に勝ってはいるが、それはいとも簡単に覆る。

戦いの中で戦局の有利不利は容易く裏返るが、この世界においてはまさにその通りだ。

「く、そ……………ぐう！」

「どうした、もう遊びは終わりか？」

「あ、遊びだと……………!!」

「ああ。何てことは無い生温いガキのお遊びだ」

無然と言い放つデイケイドを信じられないものを見るような目で見つめるザビー。お互いに仮面をしているものの、ザビーの奥にある感情はデイケイドにすぐ伝わった。

何なんだ、コイツは!!

驚愕と畏怖。その二つが入り混じった感情の視線をデイケイドは感じた。

だがそれでも油断しない。一片たりとも慢心など許されない。

何故ならザビーにはまだ、「クロックアップ」が残されているから。

内心でこの世界のライダーの使う奥の手に対して警戒していると、ザビーがふと呟いた。

「こんな、こんな奴がいたとは……………計算外だった!」

「俺を計算で測ろうとした、お前の最大の敗因はそこだ」

「ふざけるな!! だが、貴様は俺には決して勝てん」

「ほお？ 随分デカく出たもんだな」

「笑っていられるのも今のうちだ……………行くぞ!!」

デイケイドに相對したザビーは腰のベルトに備わっているレバーを一気に引いた。途端に彼のベルトから重厚な電子音声の流れ、瞬く間に全ての流れが変わった。

【Clock Up!】

食堂中に電子音声が流れると同時に、ベルトから放出されたタキオン粒子がその場の全てを包み込み、一秒前とは全く異なる時間軸の世界へと変貌させた。

誰もが静止したように思えるほど鈍くなってしまった世界で独り、ザビーはほくそ笑む。

「誰クよりも速クく動クける世界なら、私が負ける訳アツが無い」

冷静に考えれば、何てことは無かった。

クロックアップを使ってしまうえば、相手がいくら強かろうが関係ないのだ。

誰よりも速く動けるのであれば、そもそも戦闘のセンスなど関係ないのだ。

相手よりも先に拳を当て、相手よりも先に蹴りを浴びせ、相手より先に勝負を決する。自分が見下している人間の子供ですら理解出来る、絶対無敵にして最強無敗の条件。

「全く、私クよりも速く動出けないくせに、随分デカく出たものだ」

先程まで一方的に押されていたザビーが悪態を吐くほどの余裕をかます。

しかしのんびりもしていられないと、ザビーは眼前で突っ立っているマゼンタの戦士を睨む。

ゆつくりと歩み寄り、左手のザビーゼクターの胴体部のボタンをしっかりと押し込む。

【R i d e r S t i n g e r】

歩みはやがて速度を増し、ついには疾走とも呼べる速度に到達する。

眼前の敵との距離はどうとう己の拳の届く距離にまで縮まった。

容赦はしない。ほんの一片の慈悲すらも与えない。

ザビーの仮面の複眼状になっているサイバーブラックな双眸のその奥で。

使い慣れていない力を無理やり制御している資格者

「三島が怪しく笑う。

「喰らえ!!」

ザビーゼクターが保有するエネルギーをまとって電雷迸る左手を突き出す。

左拳よりも先に伸びているザビーゼクターの針がマゼンタカラーの胴体に突き刺さり、

およそ人体を殴るときには聞こえないはずの重低音が音も到達しない速度の世界に響く。

針の中から相手に直接注入されていくエネルギーを見届けたザビーはくるりと振り返る。

そのままゆつくりと、堂々とした足取りで立ち去っていく。

体感時間であと二秒ほどすれば、この食堂に爆発音と爆裂音ハルモニが調和を奏でるだろう。全身を粉々にされた男の表情も見てみたいが、今はそれよりも大事な任務がある。

そう考え、驚愕に目を向いたまま固まって人形のように静止している岬の方へと歩いていく。

心の内で二秒を数えた直後、粒子の効果が切れて世界が再び元の時間軸へと戻って

いった。

【Clock Over!】

重厚な電子音声と共に、ザビーの背後から盛大な爆発音が聞こえてくる。

テーブルの近くに居た女と男は何が起きたか理解していないようだがどうでもいい。

今の自分の目的は目の前に居る初老の男性と、後生大事に無用の長物を抱えた女の二人のみ。

誰もが動けるのに言葉を発せない中、ザビーは手を伸ばして岬に迫る。

「さあ、早くその『サソードヤイバー』を私に返せ」

「……………あなたに、お前にだけは渡さない！」

「そうか、なら死ね」

両眼に涙を浮かべながら後ずさる岬に強者の余裕からかザビーは歩み寄る。

だが今度は手を伸ばすのではなく、左手の針を突き刺すために振りかぶる。

とうとう食堂の壁際まで追い詰められた岬に対して、言葉をかけずに左手を振り下ろ

す。

「俺を前に余所見とは、随分デカく出たもんだ」

「なっ!!」

しかし岬に対して下ろされた拳は空中で止まり、腕を掴まれて身動きが取れない。

ザビーが横目で見たのは、自分の左手を掴んでいるマゼンタカラーの左手。

それを目視した瞬間、先程の爆発音の違和感を今更ながらに感じた。

何かが爆ぜる”爆発音”はした。

ならば何かがバラバラになって吹き飛ぶ”爆裂音”はしたか。

その問いに対する答えは、断じて否だと言わんばかりに視界の端に映るマゼンタカラー。

もはやザビーの頭の中はこの状況の打開よりも、何故この男が生きているのかという不可思議極まりない疑問で埋め尽くされてしまっていた。

故にロクに考えもしないまま左手を掴む相手の手を離そうと右手を動かした。

だが今度は左手だけでなく、右手までも動かなくなってしまった。

「おいおい、俺を前に余所見とはイイ度胸してんな」

「それさつきも言ったばかりなんだがな」

「な?! 何だ、お前は、何故二人いる?!」

左手を掴む相手と、右手を掴んでいる相手を交互に見やつて声高に叫ぶ。

視界を180°回転させても、自分の両の腕を掴んでいるのはどちらも同じ相手。何が起きているのか理解出来ない。理解できるはずも無い。

「お前がクロックアップを発動する直前、俺はそれに対する策を講じたわけだ」

「ああ。「アタックライド・イリュージョン」つってな、要するに分身だ」

「ば、バカな! クロックアップを貴様が何故?!」

「知ってるのかつて? なら先に応えといてやる」

ザビーの両手を掴んでいる二人のデイケイドが腕を高く上げた。

当然腕を掴まれているザビーもまた腕を無理やりあげさせられてしまう。

何とか拘束を逃れようともがくが、二人のデイケイドは一切力を緩めない。

そのままの姿勢で最初に左手を掴んだデイケイドが口を開く。

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ」

「つまり、今まで通りすがった世界でクロックアップを体験してんだよ」

「何だ……………何を言っている!!」

「日本語」

「ふざけるな!!」

両腕を掴まれたまま『万歳』のポーズをとらされているザビーが吠える。

しかし二人して冷静にザビーを押さえているデイケイドがさらに話を続ける。

その言葉を聞いたザビーは、今度こそ閉口せざるを得なくなった。

「ついで言つとくと、お前が倒したのはギリギリで生み出した分身の方で」

「ついで言つとくと、お前を今こうして掴んで押さえてんのも分身の方で」

「あつちでブレイドにライドしてんのが、本体ってわけ」

「な、んだと!!」

二人合わせて四つの緑眼とサイバーブラックの複眼が見つめる先に居たのは、

横に居る二人とは違う青いスーツに白金の鎧をまとった赤眼の戦士だった。

【KAMAN
RIDE
BLADE】

「俺が俺に遅せえつてのも、おかしな話だけどな……………」

少し離れたところからこちらに目線を向けてくる二人の分身に、デイケイドは呟く。だが今や彼は普段のマゼンタでは無く、青いスーツに白金の鎧をまとうブレイドとなっている。

この変身こそ本来彼が立てていたもう一つのクロックアップ対抗策なのだった。

しかし実際は「アタックライド・イリユージョン」によってクロックアップを切り切ったため

ブレイドに変身した今、やることは一つを残すのみとなっていた。

「待たせて悪かったな。今終わらせてやる」

ライドブッカーから一枚の、それまでとは一線を画したオーラを放つカードを取り出

す。

金色で縁取られているそのカードの中心には、ブレイドの象徴たるスペードの紋章があった。

輝かしいカードを腰のバックルに装填し、機構を動かして効果を読み取って反映させる。

直後、バックルから普段のとは違う高音程の電子音声が高らかに、そして厳かに告げた。

【FINAL ATTACK RIDE
B, B, B, BLAD
E】

電子音声が流れると共に、ブレイドのバックルから黄金のリングが幾重にも飛び出す。

飛び出たそれらはブレイドにライドしているデイケイドの体を包むと霧散してしまった。

しかしそのリングが触れた直後から、ブレイドの体が肉眼でも分かるほど発光していた。

否、発光しているのではなく、迸る雷撃を宿して輝いていた。

自身の中から溢れ出るほどの力の本流を感じたブレイドは即座に駆け出す。目標は言うまでもなく、身動きを封じられているザビーただ一点のみ。

「はあああああああつ!!」

彼我の距離が残り数mとなった地点で、ブレイドは大きく跳躍した。

前進と跳躍の2方向への運動エネルギーを、空中前転という行動で違和感無く組み合わせる。

体育座りを空中でするようにして前転したブレイドは、その勢いを活かして距離を縮める。

そして一回転したブレイドは前進+跳躍に加えてさらに落下のエネルギーを掛け合わせて

もはや大人一人分くらいの距離にまで迫っていたザビーの胸部に蹴りを叩きこんだ。

「「「やあああああああつ!!!!」」」

バチバチと耳の奥にまで響くように迸る雷撃をまとわせた蹴りがザビーに突き刺さる。

蹴りの直前まで両脇に居た二人のデイケイドは「ライトニングブラスト」が直撃する瞬間に

掴んでいたザビーの腕を放して左右から同時にハイキックを背後から決めていたのだった。

前後から同時に浴びせられたライダーキックの威力にザビーの装甲は耐え切れる訳が無く、

豪快かつ膨大な爆発の衝撃によつてガラス細工の如く粉々になつて破壊された。

「ふっ………まあ、こんなところか？」

疲れを感じさせない口調で振り返りながら変身を解いたデイケイド。

彼が変身を解くと同時に手をパンパンと鳴らして成し遂げた感をアピールしていた分身が消える。

そんな彼の

士
の戦鬪を間近で見っていたじいやと岬の二人は

もはや絶句していた。

しばらくはまともに会話できそうも無いな、と内心で苦笑した士は夏海とユウスケを見つめる。

二人は自分の送った視線にすぐ気付いて、夏海は頷き、ユウスケはサムズアップを見せてきた。

だがすぐに二人の笑顔は掻き消え、その表情は困惑と恐怖の混合体となった。

「……………あ、きさ、まあ……………」

「何?！」

二人の視線が自分の後ろをさしていることに気付いた士はゆっくりと振り返って驚く。

士が振り向いた先に居たのは、ザビーでも資格者の人間でもなく、一体のワームだった。

普通の蛹さなぎ体のワームでは無く、脱皮して能力を得た進化個体。

何の昆虫をモデルにしているかまでは、全身の組織を雷撃で焼き焦がしてしまった今では

もう誰も知る由が無いが。

「……………よく、も……………こんな、マネ、をお」

「……………お前がワームだったのか」

「やっぱりそうだったのね、三島さん」

ボロボロと崩れていく身体を必死に動かしながら土をおぞましい視線で射貫くワーム。
岬に恐怖を嫌悪の混じった視線と共に『三島』と呼ばれたそのワームはただ語る。

「わた、しは……………死なん、ぞ……………絶対に」

「不死だと？ そんなヤツの相手は前の世界でしてるから遠慮願いたいぜ」

「……………それに、もう、手遅れだ……………何も、かも……………」

「どういう事だ？」

「知りたければ……………自分で、調べるんだ、な……………」

土と数回言葉を交わした三島は、そのまま炭素の塊となって崩れて死を迎えた。

そこから数秒後、ワームが死ぬときに上げる緑色の炎を噴き上げて死体すら消える。

不穏な言葉だけを残して消えた三島に、岬はただただ困惑の色を浮かべて唸る。最後まで自分を睨んで目線を外さなかつた三島に対して士は違和感を感じていた。

「……に來た理由……………俺との戦闘……………手遅れ？」

思いつく限りの全ての事を考えて色々と考察を練るが、いまいちピンとこない。何かが、ほんの小さな何かを見落としてしまっているような。

自分でも気付かないうちに表情がこわばっていたのか、夏海が声をかけてきた。

「士君、勝ったんだからいいじゃないですか。ほら、優美恵ちゃんみたく笑って！」

「……………今、なんて言った？」

「え？ 勝ったんだからいいじゃないですかって」

「そつちじゃない、その後」

「……………優美恵ちゃんみたく笑って、ですか」

優美恵。天道 優美恵。この一言が士の違和感を取り除いた。

途端に浮かび上がった疑問のために再び閉口して考えを巡らせ始める。

士の言動が理解出来ない夏海とユウスケは首をかしげる。

しばらくして結論が出した士は、テーブルに置いていたカメラを手に駆け出した。

「ちよ、士!!」

「士君! どこ行くんですか!!」

慌てて追いかけているがかけられた二人の問いに、士は耳を貸さない。

ただ一目散に来た
—————
連れてこられた道を走って戻る。

「そもそもが間違ってたんだ!!」

息を荒げながら駆ける士は声にならない声を上げて自分の考えを残す。

そう、そもそも彼らから教わったこの世界の現状。

今現在こうなってしまうに至った経緯が、そもそも間違っていたとしたら。

「二年前にワームが地球に来れた事が、そもそもおかしいだろ!!」

走りながらも頭をフルで回転させて、自分の立てた仮説を一から紐解く。ここに来る前、あの店で自分と張り合った天道という男は言った。

『相手は宇宙局に潜伏していたらしく』

この時点で違和感を感じなかった自分が恥ずかしく思えてくる。

宇宙局は外宇宙から飛来してきたワームをこれ以上地球に飛来させないために造られた、

いわば人類が何をどれだけ犠牲にしても守り通さなくてはならない防衛の要。

そこに擬態出来るワームが侵入なんて、出来ていいわけが無いのだ。

士は知らないことだが、ワームと人間は実は区別が付けられる。

どれだけ精巧に擬態しても、どれだけ完璧に記憶を模写しても、変えられない弱点。ワームは温度の無い宇宙空間を飛来する際、体温を極限まで下げる術を身に着けた。

これによって隕石に守られているとはいえ、宇宙で凍死せずにすんでいたのだ。

故に彼らワームという種族は、人間ほどの体温を有することは決して出来ない。

つまり、サーモグラフィという温度を検知する機械を通せば人との違いが分かるのだ。

このような見分け方を知っている人類が、防衛の最重要拠点を簡単に墜とさせたのか。

た。 どれほど有力そうな説を上げたとしても、宇宙局には有事の際の戦闘員が数多くい

た。 さらに人類側の切り札たる「マスクドライダーケタロス・ヘラクス」の二人までも

が 配備されていたというのに。数十人単位でも奪えるような場所では無いだろうに。

ここまで考えて、士はふと思考を逆転させた。

天道と一緒に居た加賀美、夏海やユウスケですらも考えないような馬鹿げた仮説を。

「宇宙局を襲ったのが、ワームじゃなく人間だとしたら!!」

辻褄は合う。途方も無く馬鹿げているとは理解しているが、一番納得がいく。

人間だとしたら疑われることなく施設には侵入出来るし、機械も誤魔化せるだろう。しかし今度はまたしても天道の口にした言葉がこの仮説を削り取っていく。

た』

『隕石の破壊工作を始めようとした直後、その二人は殺され

つまりこの時点でおそらくだが、二人のライダーは変身していたのだろう。

対ワームの切り札である「クロックアップ」を有するライダーを同時に殺せる人間など。

そんな明らかに常軌を逸した力を有している人間など、この世界には一種類しかない。

「ライダーしかないだろ!! 人類を裏切ったのはライダーだ!!」

いったいどんな目的があつてそんな凶行に及んだのかは見当もつかない。だが、ここまでの流れで一体誰が人類を裏切ったのかは見当がついた。

「アイツだ! クソ、やつぱりこの世界でも邪魔しに来るのか!!」

カブトでは無い。ガタツクに変身した加賀美とやらはまず除外してもいいだろう。

次いで怪しいのはザビーだったが、ワームが資格者を強制していた時点で可能性は薄い。

ならばサソードかドレイクだが、サソードは故人であるために判定が出来ない。

残るドレイクは戦闘のスタイルからして犯人である可能性はそこまで高くは無はずだ。

なにせ彼は射撃型の戦闘スタイルのため、遠距離戦で最も強さを発揮するのであつて宇宙局というあからさまに限られてる屋内戦はどう考えても不得手のはずなのだ。だとしたらもう、容疑者は二名に絞られた。

士はここまで考えた時、間違いなくこの二人だと確信した。

しかし今度は天道ではなく、加賀美の言葉が士の仮説をより引き立たせた。

『こうなつたのも、全部アイツのせいだ!!』

この言葉からして、容疑者はただ一人。

自分の頭に浮かんでいた容疑者の内、どちらか片方のみとなる。

二人の容疑者の内、片方は戦闘力と性格からして除外された。

たった一度きりの邂逅だったが、奴一人ではユウスケにすら劣る事は知れた。

ならば残る最後の一人が暫定的に、この一件の容疑者として確定された。

戦闘力に関して、自分ディケイドを両足のみで圧倒するほどの洗練されたものがあるのだ。

間違いない。地球をワームに売り渡した男は

「……………」
【仮面ライダーキックホッパー!!】

証拠など無い。だが不気味なほどその答えがしつくりときてしまうのだった。士の中にさきほどよりも、もつと大きくのしかかる様な圧迫感が生まれる。

地球にワームを素通りさせたのがキックホッパー、ライダーである人間だとすればもう一つ納得のいかなかった疑問が解消される。いや、されてしまう。

加賀美という男と偶然にも再開した時の当時の状況を思い返す。

あの時自分と夏海とユウスケの三人は、女性の悲鳴と銃声を聞いて戻ったのだ。そして銃口を向けていたのは『ZECT』の隊員で、向けられていたのが人間。自分はその時、『ZECT』の敵ならば人間の方がワームである、と考えていた。しかしそれは今この思考に行き着いてからは、早計だったのだと己を叱責する。

何故だ、何故あの時違和感に気付かなかった!!

自分の目の前で『ZECT』の部隊がワームで構成されているのを見たのに。自分の目の前でワームだと断じた相手がワームに殺されかけていたのに。

自分の目の前でライダーと子を成した人物が、人間だと思いついてしまった。

全てが違った。全てが間違っていた。

ワームが人間を騙して仲間を通したのではなく、人間が人類を裏切っていた。

人間がワームを撃とうとしていたのではなく、ワームがワームを撃とうとしていた。

ネイティブとワームが結託したのではなく、人間とワームが結託したのだとすれば。

浮かび上がる最悪の答えに、士は冷や汗を流しながらとにかく走る。

理由など知らないまま、ワームに組織として狙われていた彼女ら二人。

士は疲労が溜まっていく自らの肉体を気にするでもなく、息を切らせて呟く。

「無事でいてくれッ!!」

地球を照らしていた太陽が徐々に高度を下げ始める時間帯。

真昼時と夕方の間らしい今、その男はとある場所に向かって移動していた。しかし足音は彼一人のものではなく、訂正し、彼らは移動していたのだった。

太陽の光を吸収して高温を保ってしまう黒で統一された集団、『ゼクトルーパー』。それらの先頭に立っているのは、黒と相反した白で全身を覆った隊長と思しき男。彼らは目的地を目視出来る場所まで来ると、作戦の内容を密やかに確認した。

「……………我々の目標は、この二名の捕獲だ。異論はあるか？」

「失礼ながらビヤクヤ隊長。その二人をわざわざ『捕獲』するんですか？」

「……………ああ、この二名は殺害ではなく捕獲だ。くれぐれも間違えるな」

「了解しました。ですが、その……………理由は教えてもらっても？」

「……………上層部からの密命、としか言えねえな」

「了解です、隊長」

「……………そろそろ時間だ。ぬかるなよ」

ビヤクヤと呼ばれた白いゼクトルーパーが号令をかけると、全ての黒が頷いた。そのまま周囲を警戒し、誰もいないことを確認させて隊員に移動を開始させる。音を極力立てずに目的地周辺に全隊員の配置を完了させると、ビヤクヤは呟く。

「……………十秒後、煙幕を投下して突入しろ」

装着している頭部のマスクに内蔵されたマイクが各員に命令を伝達する。自分の視界内にいる全ての隊員は彼の言葉に無言で頷き、準備を始めた。たった十秒。それだけの時間が、ビヤクヤには妙に長く感じられた。

とうとうここまで来た。あともう少しで、ようやく手が届く。

自分がかつて目指して手に入れられなかった、命よりも大切なもの。

自分がかつて捨てざるを得なくなつた、自分自身よりも大切なもの。

自分がかつてより引き摺り続けている、強く深い未練と後悔。

もうすぐで一切合切、何もかも決着が着く。

人を殺した。ワームを殺した。しかし後悔などしていない。

今からすることに関しても、ほんのわずかな罪悪感などありはしない。

自分の視界は全てが闇に覆われている。故に今更多少暗くなつても意味は無い。

だからこそ、この希望^{ひかり}だけを見て生きてきた。

一度捨てたプライドも、調和^{ハーモニー}も再び手に入れて。

一度捨ててしまった自分自身を焼き焦がすほどの強い光を求める。

深く淀んだ思考を裂くように、作戦開始の時刻を告げる煙幕の炸裂音が聞こえた。

もう後戻りは出来ない。もとよりもう、後戻りする様な道など見えていない。

だから、先に何が待っていようと進み続けよう。

更なる地獄があろうと、どんな痛いしつぺ返しが待っていようと。

お前なら分かってくれるよな、相棒？

「作戦開始」

ビヤクヤの冷酷な声と共に、ピストロ・ラ・サルに煙が上がった。

E p, 16 『ENDING REVERSE』 最期の約束

陽も既に南の空から下降し始めた頃、洋食店『Bistro La Salle』で二人の男が淹れたての

コーヒーを一人は優雅かつ爽やかに、もう一人は素人丸出しの飲み方で味を楽しんでいた。

士達が岬に半ば拉致のように強制連行されていくのを眺めていた、天道と加賀美の二人だ。

二人は客足の途絶えたこの店に残って、三十分ほど前に消えた彼らについて語らっていた。

「しっかし、異世界のライダーか。なんかちよつと面白そうだよな」

「さあな。だが、どんな世界だとしても、俺がいればその世界の中心は必ず俺になる」

「出た、天道の俺様節！ コレ聞くのも懐かしいもんだなあ!!」

「……………全人類が望んでやまない俺の言葉を、名物か何かだと思ってるのか？」

「あー、ソレソレ！ それでこそ天道だよ!!」

「……………お前が俺を語るなど、それこそ光の速度で年を重ねても永劫かなわらない領域だぞ？」

「そうだな。俺なんか聞けるなんてありがたいなーっと、弓子さん、おかわり！」

「はいよー！」

「……………もういい。お前の相手はやはり疲れる」

大きなため息と共に対面している加賀美から視線を体ごと背けて、天道は疲れた表情を浮かべる。

それを厨房で見ていた弓子とひよりは、本人には悪いと思いつつも笑いをかみ殺せずにした。

すると天道達から少し離れた席でゴンとアゲハと一緒にいた優美恵が母親の腕の中から抜け出て

小柄な体躯を一生懸命に動かして、父親である天道の元へと駆け寄って下から見上げて尋ねる。

「おとーさんだいじょーぶ？」

「……………優美恵」

「だいじょーぶ？」

「……………ああ、俺は何ともないぞ優美恵！」

愛する娘からの心配を受けて、天道は優しく力強いハグで応えた。

抱き上げられて父親の腕の中に納まった優美恵は、幸せそうに顔を緩ませて胸に顔をうずめる。

一組の親子の心温まる光景だったが、天道 総司という人間をよく知っている加賀美にとっては

初めて見る彼の屈託の無い満面の笑みに、飲んでいたおかわりのコーヒーを喉に詰まらせた。

淹れたてで熱々のコーヒーに加賀美が四苦八苦していると、アゲハが天道のそばに寄って来た。

「良かったわね優美恵、お父さんにギョってしてもらえて」

「うん！」

「アゲハ、優美恵をしっかりと面倒見ていないと危ないだろう」

「いや、完全に抱きしめて頭撫でながら言うセリフじゃないよな天道」

「ごめんなさい、総司さん……………」

「いいんだ。お前は俺が選んだ女、その自覚さえあればいい」

「ハイ、私は貴方に選んでいただけだ。幸せな女です」

「……………天道、お前嫁さんを何だと思ってるんだよ？」

「お前には理解できんだろう、一生独身のお前にはな」

「はあ!! そ、そんなわけあるか！俺にだって結婚ぐらい!!」

「無理だ。お前はひよりと結婚はできない、というより兄の俺が認めない」

「お、お前！いくら何でもそれは酷いだろ!!」

午後の気だるさを誘う暖かな日差しの中、真夏日も根を上げるほど暑苦しい怒号が店内に響く。

もちろんそれほど広くは無いこの店だ、厨房に入る話の中心人物にもちゃんと聞こえていた。

「だつてさく。どうするの、ひよりちゃん？」

「……………どうもこうも、僕には関係ないよ」

「大ありよ！ ひよりちゃんの将来がかかっているじゃない!!」

「……………将来って言われても、僕イマイチ実感湧かないよ」

「あ、でも待つて。加賀美君つて現職、警察官よね。だつたら止めときなさい」

「……………どうして？」

「警察関係者との結婚は絶対失敗するわよ、私の友達もそうだったもの」

「……………じゃあ止めとこうかな」

「だつて、加賀美君！」

「嘘だああああああ!!」

厨房で始まったやり取りもまた狭い店内において、座席に座る加賀美達に筒抜けである。

両手で頭を押さえながら慟哭する加賀美に見向きもしないまま、アゲハは優美恵を抱いて

ゴンのいるテーブルへと戻つて再び彼女に優美恵を可愛くもてあそばせた。

こうして今日もまた、平和な一日が過ぎるのだろうか。誰もが過信していた。

だが次の瞬間、安寧はガラスの破砕音と共に破られた。

店の窓ガラスを拳大の何かが砕き、そのままソレが炸裂して噴煙を撒き散らす。

突然起こった出来事に店内の誰もが碌な対応も出来ないまま、噴煙が充満していく。しかも噴煙を撒き散らす何かは、今もなお絶え間なく店内に放り込まれ続けている。

途端に肺での呼吸に支障をきたし、店内にいた弓子やゴンは激しく咳き込んでしゃがむ。

天道と加賀美の二人が店内に投げ込まれたのは特殊なガス・グレネードだと気づいた時には

既に店の扉を蹴破って数人のゼクトルーパーが突入してきた後だった。

またしても唐突な敵の来訪に驚く面々だったが、ただ一人冷静を貫いていた男がいた。

紛うことなき、天道 総司その人だ。

「……………やはり俺を、俺達を狙ってきたか」

「コイツら、何てことするんだ!!」

「加賀美、お前は皆を守れ」

「お前はとうするんだよ!!」

「……………俺は俺の成すべき事をする!」

立ち昇る噴煙の中で天道がそう加賀美に伝えて右手を高く上げ、人差し指を立てる。混乱の渦中で彼の行動をまともに見る者はいないのに、それでも彼はそうしていた。煙の中でも周囲を把握出来るマスクを装着しているゼクトルーパーは天道の行動をどう捉えていいか分からずに固まるが、その一瞬が彼らの勝機を失わせた。

ガラスが割られた窓から特異な羽音のような音を響かせて赤いカブトムシが飛来し、天道が突き立てていた人差し指に惹かれるように停まり、天道はソレを掴む。

掴んだカブトムシ状の機械を腰のベルトのバックルとして装着し、彼は告げる。

「変身!!」

〔HENSIN!〕

「天道……………分かった、俺もやるぞ! 来い、ガタツクゼクター!!」

〔Hensin!〕

天道の力強い声に呼応するように、加賀美もまた青いクワガタを呼び出して装着する。

低めの電子音声の直後に、先程よりも高めの声色の電子音声が入り響き渡った。

並び立つ二人の男のベルトから六角形状のパネルが全身を覆うように展開されていき、

ものの数秒でガツシリとした構造の鎧とパワードスーツをまとった仮面の戦士が現れた。

不純物の一切無い聖水の如く蒼いコンパウンドアイにV型のカブトレシーバー。

まるで蛹かぶのような丸く太い肩部アーマーに『ZECT』ロゴの入った円形のパーツ。

ワゴン車のように前方へ台形に突き出た強化チェストボディに腹部アーマー。

両肩部にバルカン砲を携えたガタツクと共に噴煙の中に現れた、赤と銀の装甲。

彼こそが「仮面ライダーカブト マスクドフォーム」

重厚な鎧に包まれた彼らは眼前でマシンガンを内蔵した武器を構えたゼクトルーパーを

殴り、蹴り、何とか後ろに回り込ませないように狭い店内で大立ち回りを演じ始める。

カブトが先陣を切って数人のゼクトルーパーを投げ飛ばして店外へ戦闘を拡大させ、

る。ガタツクがカブトが一通りダメージを与えた残党をひより達に近付けぬように構え

「来るなら来い！ ここから先には絶対に行かせない!!」

『クソ、これがあのガタツクか!!』

『落ち着け、俺達の任務はコイツらとの戦闘じゃない!!』

『だがコイツは遂行の邪魔になる！ どのみち片付けるしかないだろ!!』

「任務？ 遂行？ 何だ、何を言ってるんだお前ら?!」

み、ゼクトルーパー達の言葉を耳にして疑問が生じたガタツクはほんの一瞬だけ気が緩

彼らの武器の変更を許してしまい、接近戦用にブレードを出した彼らの攻撃を受けざるを得なくなった。

「なつ、クソ！」

『二人で抑える！ お前は対象を確保しろ!!』

『了解!』

「どけ!! 邪魔するな、オイ待て!!」

二人がかりで懐に潜りこんだ相手に身動きを封じられて、残った一人がガタツクの背後へと回り込むのを許してしまう。

それを止めようと必死に手を伸ばすがガタツクを、同じく必死に妨害するゼクトルーパー。

まず手前の二人をどうにかしないとマズいと判断したガタツクは自分を押さえているゼクトルーパーを膝蹴りで吹き飛ばし、もう一人の相手を三回殴打して殴り飛ばした。

倒された二人のゼクトルーパーは少しうめいた後、緑色の炎を噴き上げて消滅した。敵がワームであったことを確認したガタツクはひより達の方へと向かった残りの一人を

打ち倒そうと振り返るが、その瞬間に一発の銃声が響き渡り、ゼクトルーパーは爆散した。

「何だ、何が……………?」

唐突な攻撃に焦るガタックだったが、銃声のした方向を見て安堵し、叫ぶ。

「風間！ ナイスアシスト!!」

「……………別に君なんかの為じゃない。ゴンと、その美人さんの為だ」

「大介!! 大介!!」

「ゴン……………ゴン、離れてろ!」

「うん!!」

「手を貸してくれ、風間!」

「言われなくとも。でも、足だけは引つ張らないで下さいよ!!」

「上等!!」

割れた窓の外から敵を狙撃したのは、マスクドフォームのドレイクだった。

不意に窮地を救ってくれたかつての相棒パートナーとの再会にゴンは涙を浮かべて喜び、

ガタックは共闘を持ちかけて二人立ち並んでまた扉から侵入してくるゼクトルーパーを

相手取り、乱戦を再開した。

「うおっしやあ!!」

『ぐああああああ!!』

「せいっ!!」

『ぎやああああ!!』

噴煙もだいぶ晴れて視界が良好になり始めた頃、全てのゼクトルーパーを打ち倒し、ワームが絶命する時に噴き上げる緑色の炎を確認したガタツクとドレイクは一息つく。

そして二人同時に振り返ってガタツクはひよりに、ドレイクはゴンに駆け寄って安否を確かめる。

「ひより! 無事か!」

「ゴン! ケガは無いか!!」

ガタツクとドレイクの問いかけにひよりもゴンも無言でうなづく。

守りたいものを守れたという達成感と安心感から、二人はわずかに気が緩んだ。

その一瞬の油断が、再び彼らを窮地に陥れた。

【Clock Over!】

「何ッ?!!」

「お前は!!」

弛緩した彼らの聴覚に突如響いた低めの電子音、それは警告と同義だった。今まで誰もいなかった背後に一瞬で現れた仮面の戦士に二人は驚愕する。だが、彼ら二人よりもさらに驚愕に顔を歪ませた人物がこの場にいた。

「あ……………ああ……………」

「……………捕獲対象を確認、任務を遂行する」

「クソ、またお前か!!」

「さつきは油断したが、今度はそうはいかない!!」

ガタツクとドレイクは即座に構えを取り、両手をダラリと脱力させている。カマキリを思い起こさせる印象を強める装甲を有した緑色の仮面の戦士と

相対した。

「……………無駄だ」

緑色のライダーがそうつぶやくと同時に、手に持っていた丸い手榴弾のような物体を二人に向かって投げ放ったが、ドレイクがそれを専用武器の銃で撃ち抜く。すると撃ち抜かれたそれは先程のガスのように噴煙を撒き散らして破裂した。

「また煙幕か!?!」

「……………違う。コレは、対ネイティブ用特殊ガス・グレネードだ」

「対……………ネイティブ用だと?」

二人は謎のライダーの言葉に耳を疑うが、すぐにその真意を理解させられた。弓子やゴンは煙で咳き込んでいるが、横のひよりは嗚咽を漏らし始める。

やがて耐え切れなくなったのか、ひよりの体は不自然に歪んで変異してしまった。四枚の翅を背中から展開した、悲しげな表情のネイティブへと。

その光景を目の当たりにした弓子やゴンは声帯をすくめて小さく悲鳴を発するが

ガタツクもドレイクも彼女のことを見て驚いたわけでは無かった。ひより達から少し離れた場所にいた、アゲハと優美恵の二人の姿に驚愕していた。

『うう……………あう』

『優美恵……………しつかりして、優美恵！』

「……………化けの皮が剥がれたか、ネイティブ」

「何で、何であの二人が……………何がどうなってるんだ!？」

ガタツクは自分の理解の範疇を超えた出来事に激しく慟哭する。

未だ外で戦っているのであるうカブト

天道が連れてきた彼の

妻と娘が

自分たちの目の前で人ならざるモノへと変貌していく衝撃の光景に。

信じられない。信じたくない。

嘘だ、夢だ、幻だ。こんな事が現実なはずがない。

頭の中が混乱で支配されゆく中、ガタツクはその場で立ち尽くしてしまう。

無論、その間にも世界には流れ続けている。

彼の後ろではドレイクと謎のライダーが戦闘を続行していた。

しかし、その戦いは決して対等なものでは無く、一方的な蹂躪だった。

「ぐっ！ 何してるんです、君も早く戦って
——がつ!!」

「……………やはりドレイク、お前はまださっきのダメージが抜けていないな？」

「ぐっ……………それが、なんだ！」

「……………お前に勝機は無い。消え失せろ」

マスクドフォームのドレイクは防御には優れているが、俊敏性には劣る。

その為、ライダーフォームの緑色のライダー相手には分が悪過ぎた。

いくら防御が優れていても、手数で負けてしまえばいずれは押し負ける。

そしてついに、度重なる攻撃に耐えきれなくなったドレイクの装甲が砕けた。

「う、ぐああああああ!!」

装着者へのダメージが蓄積され、負荷が容量を超えたために変身が強制解除された風間の元からドレイクゼクターが飛び立ち、どこかへと早々に去っていった。

逃げたゼクターを見送りながら、謎のライダーは目標をガタツクへと変更する。

未だ茫然自失の彼の背後に近付き、腰のカマキリ型ゼクターを右腕の籠手部分のクロツチに装着し、内部で生成されるタキオン粒子を圧縮し、一気に放出した。

「……………お前も消えろ」

〔Rider Hunt!〕

『加賀美、危ない!!』

バリバリと空間を裂くように放たれるタキオン粒子をまとった拳を振りかぶる緑色のライダーの存在に、ただ立ち尽くしているガタツクはまだ気付かない。だがガタツクの前方に入るひよりはそれに気づき、彼に叫ぶように警告した。しかし、既にモーションに入っている相手の攻撃を、この距離では防げない。

「はっ!! がああああああ!!!!」

「……………任務遂行の障害を排除、これより捕獲を再開する」

そうかほそく呟いた緑色のライダーの振り抜かれた右手が、眼前のネイティブへと迫る。

『ぎゃあああああ!!』

『うわあああああ!!』

「……………この程度か」

狭い店内から屋外に戦場を移したカブトは、ガタツクやドレイクなどとは比べ物にならない速度で数人いたゼクトルーパーを残らず撃破していた。

道路のあちこちにワームの残骸

——もとい緑色の炎が噴き上がる。

それらを確認したカブトはガタツクの加勢をしようと店内に戻ろうとするが、前方から新たに二人の人影がやって来るのを目視して踏み止まった。

「お前……………何故お前が生きている、三島?！」

「久しぶりだなカブト。いや、初めましてと言うべきか」

「何……………?」

「私は一年前にやって来たワームであり、三島に擬態しただけに過ぎん。

だがお前が言いたいのは、何故死んだはずの男に擬態できるのか、だろ?」

「分かっているなら回りくどい言い方はよせ」

「フ……………だがまずは、『彼』との再会を喜ぶべきだろう」

「……………久しぶりだな、天道」

「またお前か。いい加減諦めたらどうだ、つまらない復讐などな」

「……………今の俺には生きる理由が二つある。お前への復讐と、もう一つ」

眼鏡をかけたインテリ風のスーツ姿の男、三島と共にやって来た

白いゼクトルーパーの二人は半分懐かしむようにカブトと会話する。

そして話の主体が白いゼクトルーパーになった時、彼はヘルムを脱ぎ捨てた。

眉にまでかかるツヤを失った前髪に、ストレートパーマの髪型。

前髪にわずかに隠れている両眼には、鋭い殺意と憎しみが込められている。

頬から顎にかけての輪郭はシャープでどこか痩せこけた印象すら抱かせる。

天道は白いゼクトルーパーの素顔を見た瞬間、納得したように呟いた。

「やはりお前だったのか、矢車」

「……………ああ、地獄からもう一度光を掴みに戻って来たぜ」

「世迷言を並べていても、やはりお前もかつての自分が恋しいのか」

「……………黙れ、今の俺はそんなくだらない物にこだわりはしない！」

「そのくらいにしておけ、ビヤクヤ。君は早く対象を捕獲して来い」

「……………分かった、変身」

【Hensin!】

【Change Mantis!】

【Clock Up!】

三島と言葉を交わしたビヤクヤ

—— 矢車はカマキリ型のゼクターを

呼び出して自身の腰に巻き付けたベルトのバックル部分にそれをマウントした。

その瞬間、六角形状のパネルが全身を覆っていき、やがて仮面の戦士となった。

緑色のライダーは腰部分のスイッチを素早く押して「クロックアップ」を発動し、

カブトの横を抜き去っていった。

マスクドフォームでは追えないと考えたカブトは自分もキヤストオフするため

カブトゼクターの角に見立てた装置を起動しようと右手を動かす。

だが、その動作は突然突貫してきた三島によって中断させられた。

「お前の相手をしてる暇は無い、邪魔をするな」

「それは私のセリフだ、カブト。貴様にもう用は無い!!」

「……………仕方ない、キャストオフ」

【CAST OFF!】

掛けていた眼鏡を外して投げ捨てた三島を見据えながらカブトは装置を起動する。重低な待機音と共に全身の強固な鎧が所々浮き上がってタキオン粒子を撒き散らす。やがてカブトゼクターの角を反転させ、全身の装甲が一気に弾け飛んだ。

吹き飛ぶ装甲の一つ一つが散弾のように三島に襲い掛かるが、当の三島はその姿を大きく歪ませて緑と黒を混ぜ合わせたような不気味な色合いのワームとなってキャストオフによってパージされた装甲を防ぎ切る。

そして、キャストオフ脱皮を終えたカブトは、その真の姿を現した。

天を貫くように直立するカブトムシを彷彿とさせる形状の赤い角。

その角が蒼いコンパウンドアイを二つに裂き、複眼状の双眸へと変わる。

胸部を覆っていた分厚いアーマーは、カブトムシの体を意識した紅蓮の装甲へと変わり、両肩もスツキリとした軽装甲へと変わっていった。

【仮面ライダーカブト ライダーフォーム】

奥の手であるクロックアップを発動できる姿に変わった天道は
眼前で殺気を撒き散らしている三島を正面から見据え、言葉を紡いだ。

「もう一度、お前をいるべき場所へと送り還してやる」

『やってみろ!! だが、貴様に私と、”マデイカ”は止められない!』

「マデイカ………」【マスクドライバー マデイカ】か」

『ああ、矢車の持つ新たなゼクターとライダーの事だ。』

だが今はそんな事どうでもいい、今は貴様を殺せばそれでいい!!』

「やってみろ、と言っても不可能だからな」

『ほぎけカブト!!』

「なにせ、俺は世界の中心だからな」

互いに会話を終え、戦闘体勢に移行する。

そして数秒後、緑の異形と赤い戦士が激突した。

E P, 17 『LOAD OF 』先を往く者』

どこにでもありそうな、陽だまりがよく似合う洋食店のすぐ目の前。

そこで繰り広げられているのは、見る者を圧倒させる『激戦』だった。

全体的に赤い色の目立つ装甲をまとった仮面の戦士カブトと、

緑色と黒色を混ぜ合わせたような不気味な色合いのワームの二人が、

己の身体一つのみを武器にして、勢いを殺すことなく争っていた。

カブトが右拳を突き出せば三島
—— ローカストワームが即座に

反応して

左手で薙ぎ払い、逆に体の軸回転を利用したカウンターキックを浴びせる。

だがカブトはキックが直撃する瞬間にわずかに体を逸らしてダメージを軽減し、

体勢が不安定になったローカストワームに意趣返しのように拳の連打を叩き込む。

『ぐうう!!』

「どうした、蘇ってもその程度なのか？」

『減らず口を……………まあいい、時間稼ぎはこれくらいで十分だろう』

「時間稼ぎ、だど？」

『そうだ、今の私ならお前程度相手に手こずるわけが無い。』

だが、本来の任務の邪魔をされてはかなわないからなあ』

「……………そうか、狙いはやはりアゲハと優美恵か」

『正解だカブト。だが残念、どうやら時間切れのようだな』

構えを解いて自分の計画を隠す素振りも無く話し始めたローカストワームの言葉に彼らの本当の目的を悟ったカブトだったが、敵の言うとおりにまさしく手遅れだった。

唐突にカブトの背後にある『B i s t r o l a S a l l e』から、轟音と断末魔が聞こえてきた。

それらに振り返ったカブトが見たのは、脱力しきった二体のネイティブを引きずりながら

店内から出てきた緑色のライダー「マスクドライダー マデイカ」の姿だった。

マデイカはカブトを視認すると見せつけるようにして脱力したネイティブの腕を掴む。

そのまま戦闘中のカブトとローカストワームに構うことなく歩き去ろうとする。

「それは……………待て、矢車!!」

「……………三島、足止めは任せた」

『私に命令するな。言われなくとも足どころか息の根を止めてやる』

「……………ああ、分かった」

ネイティブを見て態度が豹変したカブトを尻目にマデイカはそのまま歩き出す。引きずられゆくネイティブに手を伸ばしたカブトは直後に大きく吹き飛んだ。

アスファルトの大地を三回転ほどした後でようやく止まった彼は、なぜ自分が急に吹き飛んだのかという疑問の答えを目の当たりにした。

『お前の相手は、この私だア!!』

「……………お前の相手をしてる暇は無い、邪魔をするな!!」

自分が先程までいた位置に、膝を折り曲げて屈伸したローカストワームがいた。

おそらく背後から飛び蹴りを不意打ちのように食らって吹き飛ばされたのだろうと

カブトは

即座に予想を立てるが、そんな時間すら惜しむように立ち上がって駆け出す。

疾走してくるカブトを迎え撃つようにして、ローカストワームもまた同じように駆け出した。

カブトは走りながらバックルの上部分にある三つのフルスロットルを全て押し込んでオンにして、

ゼクターの角状のレバーを一度マスキドフォーム時と同じ位置に押し戻して一呼吸置いた。

【ONE, TWO, THREE】

低い電子音声が入ルスロットルをカウントし、エネルギーの供給開始を告げる。

腰のカブトゼクターから青白い稲妻のような力の奔流が迸り、上半身の装甲の隙間を縫うようにして頭部の天を貫くカブトホーンへと到達した。

そして頭頂部で折り返したエネルギーはそのまま体を駆け下り、雷光となって右足に充填された。

それら全てを数歩の内に行ったカブトはローカストワームめがけ跳躍しながら叫ん

だ。

「ライダーキック!!」

【R I D E R K I C K !】

跳躍し終えると同時に戻したレバーを再び真逆に押し戻して全タキオン粒子を解放した。

ゼクター内で超圧縮されていた粒子が爆発的に噴出され、キックの威力と速度が文字通りに

神をも超える速度、即ち神速の飛び蹴りで眼前のローカストワームへと突き刺さった。

「はあッ!!」

『ガアアアアアアアアッ!!!!』

カブトのライダーキックがローカストワームに炸裂し、辺りに漂う粒子が衝撃で爆裂した。

日差しが差し込む通路の真ん中で一際異彩を放つ緑色の炎が怨嗟と断末魔と共に燃え上がる。

粉微塵も残らないほどに爆散した敵を見据える余裕も無く振り返ったカブトは辺りを見回す。

だが既にマデイカの姿はどこにもなく、二体のネイティブもまた連れ去られていた。その事実には歯噛みしながらもカブトはマデイカが去っていった方向へと歩を進めようとした。

しかしカブトが一步目を踏み出した直後から、次の一步が踏み出されることは無かった。

『……………どうした、もう終わりか?』

「馬鹿な……………何故だ、お前は今……………」

カブトの見つめる先には、先程倒したはずのローカストワームが無傷のまま立っていた。

自らが仕留めたはずの敵が再び姿を現した事に驚愕を隠せないカブトだったが、居場所が分からない二体のネイティブの事を最優先に考え、その場を去ろうとした。

「……………何でもいい。もうお前には付き合えん、クロックアップ!」

『二度も貴様に先手は取らせん!! 喰らえカブトオオツ!!』

しかし、またしてもそこにローカストワームの邪魔が入る。

腰のクロックアップ起動装置となるボタンをカブトが押し込む直前に、ローカストワームは自身の右足に紫色の毒々しい色合いの粒子をまとわりつかせて空中に飛び上がり、先程のカブトと同じような姿勢になって飛び蹴りを繰り出した。

それはまさしく、「ライダーキック返し」

かつてカブトが戦ったワームの中に、その特殊能力コピー&ペーストを持ったワームがいた。

隕石に紛れて地球に侵攻してきたワーム達の統率者とも言える存在として、

幾度もカブトやガタック、その他のマスキドライダー達と死闘を繰り広げた。

そのワームの名は、カッシスワーム。

カッシスワームはワームの中でも規格外の再生能力と適応能力を誇り、

過去に二度、ライダーの手によって倒されても蘇り自身の肉体をより戦闘に特化させ複数のライダーによる同時攻撃でしか打倒することが出来なくなるほどにまで成長

した。

しかしそれは四年前の話で、今日の前にいるローカストワームはその事実を知らない。

仮に知っていたとしても、固有の能力である彼らの能力を得ることは不可能のはず。

天才的な頭脳でローカストワームの蹴りが直撃するまでの数瞬でそこまで分析を終えた

カブトだったが、あまりに不可解な要素が多かった為か、避けきれずダメージを受ける。

「がはあっ!!」

『フツ………哀れだなあ、総てを司るが聞いて呆れるぞカブトオー!』

大きく吹き飛ばされたカブトを見て、着地したローカストワームが嘲笑う。

自身の放った必殺の蹴りが自分に向けられるとは思っていなかったカブトは想像以上の

激痛とダメージでもだえ苦しみながら余裕の態度を見せるローカストワームを睨む。

だが、丁度大きく吹き飛ばされたおかげで周囲の状況をよく把握出来る位置にきた。

そしてカブトは見た。ローカストワームの背後に迫るマゼンタカラーの仮面の戦士の姿を。

「はあッ!!」

『ぐおッ!!』

マゼンタカラーのライダーが背後からローカストワームに飛び掛かる。

背後からの突然の奇襲に驚いたローカストワームはもつれ合つてアスファルトに転がった。

そのまま起き上がろうとした彼を、マゼンタカラーのライダーの蹴りが追撃した。

起き上がりざまに腹部にかまされた蹴りで体勢を崩し、更なる追撃を許してしまう。

右拳で殴られ、左手で肩を強打され、懐に潜りこまれて腹部を右フックに集中砲火される。

アッパーカットで怯まされて、止めに突き出された鳩尾へのキックで大きく飛ばされた。

攻撃を終えたマゼンタの戦士は両手に付いた埃を払うように数回パンパンと打ち鳴らす。

余裕しやくしやく綽々といった態度の乱入者をアスファルトに顎あごを擦らせながら睨みつける。しかし当の本人はその視線に気付くことなく倒れたカブトを助け起こしていた。

「よおコツチの世界のカブト、随分待たせたみたいだな」

「……………その声、岬に連れていかれた内のやけに態度のデカイ男だな？」

「助けてやったのに辛辣な奴だな、向こうの世界のお前は礼くらい言えたぞ？」

「……………お前は、何者だ？」

「オイオイ、いきなりそれ言わせるのかよ」

眼前におぞましい異形がいるにも関わらず日常的な会話をし始める二人。

だが突然現れた挙句に背後から不意打ちされて放置されたローカストワームは堪らない。

苛立ちを隠そうともせず声荒げてカブトと並び立つ謎の戦士を問い詰める。

『貴様、いきなり何のつもりだ!!』

「とりあえずワームとライダーが戦ってたからライダーに加勢した、じゃダメか？」

それがダメなら……………そうだな、全ての世界を破壊するつもり、つてのはどう

だ？」

『貴様、誰だか知らんが私を怒らせるのは感心出来んなあ!!』

「俺を知らない、か。いいぜ、だったら俺が何者なのか教えてやる」

ローカストワームの激昂すらも受け流す謎のライダーは偉ぶって語り出す。

自身の名前、世界の破壊者と呼ばれる誰からも疎まれる存在の証明を告げる。

「通りすがりの仮面ライダー、デイケイドだ。覚えておけ!!」

『仮面ライダーデイケイドだど?』

「デイケイド……………か」

「ああ、覚えとけよ。まあでもすぐに変わるけどな」

腰にマウントしていたライドブツカーを開いて一枚カードを抜き取って、手のひらで包み込むようにしてそれを持ち、自身の仮面のそばまで持つてきて反転させる。

そのカードの裏に刻まれていた紋章は、超古代の文明で使用された『戦士』の記号。

デイケイドはそれを機構を動かしたバックルに装填して、再度機構をミッションさせ

た。

途端に装填したカードがバツクルの中心で輝く宝玉に読み取られ、自身の身体に反映する。

読み込まれた力がデイケイドの身体を包み込む瞬間、バツクルから電子音声が発せられた。

【KAMEN RIDE KUUGA】

読み込まれたカードは「カメンライド クウガ」のカード。

デイケイドが旅した九つの世界の一つで出会った超古代の戦士の力を発動するカードを

使用し、マゼンタだったデイケイドの姿は瞬く間に赤く輝く金色の二本角の戦士となった。

唐突に姿をガラリと変えたデイケイドに驚愕するローカストワームとカプトだったが、

一早く冷静さを取り戻したローカストワームが再び紫色の粒子を右足に溜め始める。

『そうか、貴様か！ 貴様がサソードヤイバー回収の邪魔をしたライダーか!!』

「あん？ ああ、あのお屋敷で戦ったのはお前の仲間か。情報が早いんだな」

『未知の力を使うらしいが………この私の前では全て無意味と化す!!』

「面白い。このデイケイドの力もコピー出来るんならやってみる」

自分の能力を知りながらも毅然とした態度で言い放つデイケイドに苛立ち、

カブトに見舞った時と同じように駆け出して空中へ飛び上がり、飛び蹴りを繰り出す。

しかし、この技を繰り出す前にローカストワームは気付くべきだった。

デイケイドが何故、カブトですら知らない自分の能力を知っていたのか。

空中で火花のように弾けるタキオン粒子をまとった蹴りが放たれる中、

デイケイドはライドブツカーから新たに金色のカードを取り出してカブトに小声で話しかけた。

「アイツは複数の同時攻撃、しかも同程度の威力の技を上手く合わせて当てなきゃ倒せない」

「………俺は天道 総司、世界の中心である俺が知らないことは無い」

「随分大きく出たな。だったら世界の中心さんよ、上手く俺に合わせろよ?」

「ふっ、今お前も言ったろ、俺が世界の中心だと」

「それがどうした?」

「俺が世界の中心。なら、その世界の一部であるお前が中心おれに合わせろ」

「……………これだから自意識過剰な奴は嫌いなんだ」

「自信過剰な奴よりマシだろう」

「言つてろ……………チャンスは一瞬、タイミングを逃すな」

「分かっている、行くぞ」

皮肉を言い合いながらも共闘の意思を交わした二人は迫り来る攻撃に備える。

空気に悲鳴を上げさせながら突貫してくるローカストワームの飛び蹴りを見据え、タイミングを計った二人は同時に異なる段階を踏んで必殺の一撃を発動させる。

クウガとなったディケイドは手の中の金色のカードをバックルに装填し、

カブトはバックルのフルスロットルを再び三つとも全てオンにしてレバーを戻す。

それぞれの機構を動かして二人同時に右足へ力を流し込む。

『死ねええ!!』

怒号ともとれる雄叫びと共に放たれたローカストワームの攻撃を前に、二人の紅色のライダーは全く同時に必殺の一撃への工程を済ませていた。

【FINAL ATTACK RIDE】

【ONE, TWO, THREE】

「ライダーキック!!」

【KU KU KU KUGA!】

【RIDER KICK!】

二つの電子音声が二重奏デュエットを奏でた瞬間、二人はその場で跳躍。

同じタイミングで右足での蹴りを突き出してローカストワームを迎え撃った。

バチバチと空中で火花を散らし合う二人と一体だったが、すぐに均衡は破られる。ライダー二人分のエネルギーを受け止めきれなかったローカストワームが徐々に押され始め、とうとう耐え切れずに空中で粒子が膨張して内側から爆裂した。

『そんな』

馬鹿なああああああ!!?!』

壮絶な断末魔を上げながら空中で塵となったローカストワームはそのまま爆風と炎熱によつて残つた塵すらもこの世に一片たりとも残らずに消えていった。着地した二人のライダーが同時に立ち上がり、互いを正面から見つめる。そしてそのまま同時に変身を解除して互いの素顔を晒し合つて呟く。

「やはりさつき店にいた奴か」

「ああ、そういうお前こそ」

「……………礼を言う」

「分かればいい。それより、何ださつきのワームは」

「……………奴を知っているんじゃないのか？」

「俺は能力を知ってるだけで、奴自体に関しては何も知らん」

「そうか……………」

「どうかしたのか？」

仮面を拭い去つた二人が言葉を交わし、天道は表情に陰りを生み出す。

少し下を見て俯いた天道の様子の変化に戸惑いながら士は周囲を見回した。

やがて背後から自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた気がして振り返る。そちらを見てみると、愛用のバイク『ビートチエイサー』を駆った顔見知りはこちらに向かつてやって来ていた。

「おーい！ 士あーい!!」

「土くーん！」

「ユウスケと夏ミカンか」

先程士がライドしたクウガに変身するユウスケと夏海の二人が、自分が飛び出したあの屋敷から自分を探してきてくれたのか。

そう思い返しながら二人に対して士は軽く手を振った。

二人もそれに気付いて士の前まで来てバイクを降りる。

再会を喜び合おうとした三人だったが、背後から聞こえてきた怒号によって中断された。

「どうい事だ天道!!」

「加賀美……………」

傷だらけになった加賀美がボロボロの体を引きずるようにしながらも

天道の胸ぐらを掴んで激しく揺さぶりながら問い詰めていた。

状況が理解出来ていない若干二名を置き去りに、事態はどんどん進行する。

荒々しく詰め寄る加賀美の言動の総てを無抵抗で受け入れていた天道だったが、次に発せられた加賀美の一言が引き金になった。

「なんで、どうしてアゲハさんと優美恵ちゃんがネイティブになるんだよ!!」

「えっ?!」

「ネイティブ……………あの人の奥さんと娘さんでしたよね、土君!」

「夏ミカン、ユウスケも少し黙ってる」

「天道!! お前が秘密主義者だつてのは知ってた、知ってたつもりだった!!」

でも今回だけは絶対に話してもらおうぞ!! オイ、黙ってないで何とか言えよ!!」

「……………」

加賀美が必死に訴えかけているのに天道は答えようとしない。

頑なに拒み続ける天道に対して、決して譲らぬと加賀美も言及を止めない。

路上での二人の雰囲気は険悪になりかけたその時、店から一人の少女が出てきた。

「ひより……………」

「……………天道、僕も教えてほしい。何であの二人が僕ネイティブと同じなのか知りたい」

「天道、ひよりの頼みも聞けないってのか？」

「……………分かった」

世界を敵に回してでも守り通そうとした妹の懇願までは拒否出来なかった天道は俯いていた顔を上げて正面にいる加賀美と人の姿に戻ったひよりを見つめる。
この状況についていけないユウスケと夏海はただただ首をかしげていた。

「それで、なんであの二人がネイティブになったんだ。

そして何故お前がそれをかくま匿っていたのか、それを先に話してもらおうぞ」

「……………いいだろう、話してやる」

て
ひよりの頼みを聞き入れた天道は自分の窮地に割り入った士にも一応義理立てをし

話を聞くことを許可して内装も何もかも荒れ果ててしまった店の中へ入った。

店には意識を失った見知らぬ男性を必死に介抱する女子中学生と弓子さんの姿があった。

ユウスケが何があつたのかと尋ねたが、二人は口をそろえて「分からない」と答える。そんな二人を無視して士は加賀美と同じように天道の座った席の近くで話を聞いた。

「アレは三年前、俺がパリに料理の極意を会得し、帰国した年だった」

荒れた店内に残っていた木製の椅子に座って話し始めた天道。

彼が口を開いた瞬間に、その場にいた誰もが彼の言葉を黙って聞き入れていた。そして、彼の口から真実が明かされた。

四年前、人間社会の裏で暗躍していたワームの亜種『ネイティブ』が本性を表し、警察機構や対ワーム秘密組織『ZECT』のコネクションを巧みに利用して長年の人体実験の

末に完成したネイティブ化装置を使用し、一挙に全人類をネイティブに変えてしまおうと

いうおぞましい計画をすんでのところ、阻止した加賀美と天道。

二人のライダーがその使命を終えた数カ月後に天道はパリへと出国した。

理由は当人の言っていた通り、料理の極意を会得するため。

天道 総司という男は、幼少の頃に無数の悲劇を経験してきた。

実の両親を宇宙から飛来したワーム（本当はネイティブ）の手にかかり殺害された上に、

母親のお腹の中に宿っていた小さな命もろとも全てを完璧に擬態されてしまった。

その事実を知った彼は未来から過去を変えるためにやってきた自分自身にベルトを手渡され、

わずか十三歳にして自分に課せられた使命を知り、力を手にするために自らを鍛えてきた。

血反吐を吐くような訓練の日々。その一環として自炊もまた特訓の一部だった。

彼はその類稀なる明晰ぶりでパリの料理学校をわずか数か月で飛び級卒業し、

三ツ星レストランを渡り歩いてその店の料理長を自身の腕試しの相手になっていた。

その後、彼の挑戦を受けられるほどの腕の職人が見当たらなくなってしまうのでネイティブにコピーされた命である妹のひよりの様子を見るために一度帰国したのだ。

「日本に戻るの是一年ぶりか。ひよりも樹花も元気になっているだろうか」

手荷物程度の荷を持って一度帰国した天道は、引き取り手である実の祖母の家の一人娘（天道の義理の妹）の樹花と共に実の妹であるひよりを気に掛けていたので空港を出た天道はその足でまず樹花が合格したという全寮制の大学へと向かった。当の樹花はとも明るく、元氣快調であることを天道に告げていった。

天道も彼女の安全を確認して安堵し、次なる目的地に向かおうとした。

しかしその目的地である『B i s t r o l a S a l l e』へと向かう途中でかつての被災地、

隕石が落下して甚大な被害の爪痕が今も残っている渋谷へと足を運んでしまった。

見渡す限りの瓦礫の世界と化した渋谷跡地に踏み入った天道は過去を思い返す。

自分はここで両親の仇である二体のネイティブに復讐しようとして

当時の自分より少し年下の、ひよりと名を呼ばれていた少女と出会ってしまった。

彼女の正体が生まれる前に死んでしまった自分の妹であることを悟った彼は、

復讐を果たせずに隕石の落下に巻き込まれて命を落としかけたのだった。

「俺はひよりを、ひよりの生きる世界を守れたのか……………」

晴れ晴れとした青空を見上げながら心地良さそうに天道は呟いた。子供の頃から、やがて来る闘いの日々に向けて己の全てを鍛え上げてきた。その努力が報われた成果が、今のこの世界なのだ。天道は胸を張る。思い出にふけることで満足した彼はそのまま本来の目的地である洋食店へと足を向ける。だが、その時彼の耳に微かな嗚咽とすすり泣く声が聞こえてきた。

「……………泣いている、のか？　こんなところまで？」

研ぎ澄まされた彼の聴覚が拾った泣くような声に対して思ったのは、疑問。

ここは普通の世界で行き場所を失くした浮浪者がいるような場所だ。

世を捨てた彼らは泣く暇があったら今日を生きるための食い扶持ぶちを探すはずだと考え、それら以外の誰かが涙を流しているのだろうと推察した。

もしかしたら自分と同じ被災者、もしくはここに來ざるを得なくなつた子供かもしれないと

思い至つた天道は、掠れるような泣き声を鋭敏な聴覚に従つて辿つていった。そして瓦礫に埋もれたかつてのビル敷地内に入り、声の主を目視した。

「あれは女だな。だがここで何をしているんだ？」

天道が物陰から見つめる先にいたのは、全身の身なりが貧しい女性だった。

遠くから見ていただけなのに髪の状態も悪く、肌も荒れていることが知れるほどにみすばらしい姿の女性は、どうやら眼下の水たまりを見て泣いているらしい。

事情は知らないが手を差し伸べるべきだと考えた天道はしばらく物陰で息を潜め、彼女が落ち着いたら話しかけてようとしていた。

しかしそんな彼の目の前で、女性の姿が徐々に醜くおぞましく変化していった。

「何?」

驚愕のあまり物陰から飛び出してしまった天道に気付いたソレは驚いて振り返る。

その姿は天道にとって愛する妹と同種であり、憎き両親の仇の同種でもあった。

皮膚を剥がした髑髏^{どくろ}状の顔を手で覆い隠したような人ならざる形状の頭部。

背中から頭頂部に掛けて丸方に膨らむ蛹に近いフォルムの背部に、そこから生えた角。

全身が人を不快にさせる重々しい緑色の外骨格で覆われた人外、ワームの亜種族。

泣き腫らしていた女性の正体は、もうこの世にいないはずのネイティブだった。彼女の深緑の身体を凝視した天道は一瞬で様々な疑問を頭に浮かべては一蹴する。お互いに固まっていたが、やがて天道もネイティブも警戒を解き始めた。天道を見つめていたネイティブは力なく振り返り、再び水たまりに視線を落とす。そして自分の姿を確認してはまた掠れるような声で泣き始める。

「……………お前、泣いているのか」

『……………』

天道の問いかけに泣いていたネイティブが小さくうなずくように頭部を上下に揺らす。

その行動を見て、彼の頭の中にこの状況を説明する二つの仮説が浮かび上がった。自分の立てた仮説を立証するために、天道は意思の疎通が可能なネイティブに問いかける。

「お前の名前は？」

『……………名前なんて、もうどうでもいい』

「いいわけあるか。名前は自分を生んだ親がくれる最初の誕生日プレゼントだ」
『誕生日……………それこそもう関係無いわ』

自分の言葉に耳を傾けるネイティブを見て、天道は一つの確信を得た。
何故彼女が泣いているのか、何故いないはずのネイティブがいるのか。
答え合わせだというように天道はさらに突き詰めた質問を投げかける。

「誕生日は自分の生まれた、つまり自分という世界が誕生した日だ。

その日、その時、その場所は、自分こそが世界の中心だと泣き叫んで産まれる。

それこそが人間だ」

『うるさい!! アンタに何が分かるのよ!!』

「全てが。俺は世界の中心だ、だからこそ俺は世界を救った」

『何言ってるの……………世界を救った? じゃあ私は何なの!!』

人間のものとはかけ離れた腕を振るって自分自身の身体を指す。

悲しみの感情が振り切れて怒りに転換した彼女を、天道は冷静に見つめていた。
その様子が彼女の琴線に触れたのか、半狂乱になったネイティブは天道を睨む。

『突然現れて偉ぶって、私の事なんて何も知らないくせに!!』

「お前の事は知らない。だが、俺が中心たるこの世界はお前を知っている」

『訳の分からないことを!! アンタに私の何が分かるって言うのよ!!』

「言ったはずだ、全てが、とな。お前がそうなた原因は見当がついている」

『えっ?!』

天道の放った一言にネイティブが明らかなる動揺を見せる。

今までのやり取りを振り返って、天道は自分の仮説が正しかったと考察し、

それが最悪の答えであるということに認めざるを得なかった。

次の言葉を待ちわびるネイティブに、天道は残酷な事実を告げる。

「お前がネイティブになった原因は、一年前のペンダントだ」

『ペンダント……………何のこと?』

「二年前、ワーム検知器と謳ってZECTが無料で配布した緑色の石が加工された

ペンダントの事だ。お前はおそらく一年前にそれを貰って身に付けていたな」

『……………そう言えば、そんなのを貰ったような』

「それは今のお前と同じネイティブが人類を一度にネイティブ化させる為に作った、言ってしまうえば人体改造装置のような物だったんだ」

『そんな、馬鹿げてるわ!』

「それ以外にどう説明がつく? それに、俺はZECTをよく知っている」

『……………本当なの?』

「俺は人を不幸にする嘘はつかない。だからこそお前には残酷な答えがな」

『そんな、そんな事って……………』

力なく膝から崩れ落ちて嗚咽を漏らし始めるネイティブを天道はただ見つめる。

自分が言ったように彼女にとっては残酷な事実だが、それでも彼は伝えたかった。

それで彼女が満足するのなら、自分はどれほど憎まれても構わない。

例え世界を敵に回しても、守りたいと思ったものは必ず守り通す。

天道 総司とは、そういう男だった。

しばらく顔を伏せて泣いていたネイティブが急に泣き止んで立ち上がる。

様子の変化に警戒心を露わにした天道だったが、彼女からの言葉に戸惑った。

『アンタ、ZECTを知ってるんでしょ?』

だったら私をどうにかする方法を知ってる人を知らない？」

「……………残念だが、一度ネイティブ化した人間の戻し方は研究されていない」

『……………そう、分かったわ』

「どうするつもりだ？」

『……………人間に戻れずにこんな体で生きるくらいなら、死んでやる』

「よせ、命は簡単に捨てていいものじゃない」

『私の人生よ、アンタには関係無いわ。』

それに、アンタに分かる？ 突然自分が化け物になるって気持ちだ!!』

「……………ああ、よく分かる」

『ふざけるな!!』

吠えるように怒ったネイティブは天道に危害を加えようとする。

短い距離を詰めて人外の腕を振るって、彼女は天道を殴ろうとした。

しかし殴られる直前、天道はハッキリとした口調で心に響くように語った。

「俺の妹も、お前と同じネイティブだ!!」

『……………え?』

「俺は八年前、実の両親をネイティブの手によつて殺され、擬態された。

その時に母の中に宿っていた命も、完璧にコピーされたんだ」

『……………』

「俺はその事実を知った時、怒りよりも喜びが先に沸き上がった。

死んだと思っていた俺の妹が、この世に生を受けられたんだからな」

『でも、でもその子は人間じゃないんでしょ？』

「関係無い。俺はさつきも言った通り、世界の中心たる男だ。

俺が世界の中心である以上、人間であろうとなかろうと妹は妹だ」

『……………その子は、今どうしてるの？』

「長く日本を空けていたから詳しくは知らないが、俺の行きつけの洋食店で

シェフを務めているはずだ。俺の妹だからな、料理の腕は天才的なんだ」

天道は愛する妹を思う浮かべながら眼前のネイティブに語る。

彼の真摯なまなざしと言葉を受けて真実だと悟った彼女は腕をゆつくりと下げる。

攻撃の意志が消えたことを確認した天道は、改めて告げた。

「だから、俺の妹の作るサバ味噌を食べてみる」

『えっ?』

「世界最高峰の俺が太鼓判を押す逸品だ。アレを超える事は絶対に出来ない」

『サバ味噌なの?』

「サバ味噌だからこそだ。それに、お前も味わったほうが良い。」

同じネイティブが作り出す感動と笑顔を、生きていくことの素晴らしさをな

『!!』

「ネイティブである俺の妹が生きられる世界だ、お前も生きられるさ。」

アメンボから人間まで、地球上の生きとし生ける全生命を守るのが俺だ」

『……………誇張し過ぎじゃない?』

「事実だ。それに、何度も言っただはずだ。俺は世界の中心だとな」

『聞き飽きたわよ、世界の中心さん』

「天道だ、天道 総司」

『天道……………かっこいい名前ね』

「”天の道を往き、総てを司る”、それこそが俺という人間だ」

『壮大な名前。でも不思議とピッタリな気がする』

「ああ。世界の中心たる男にふさわしい名前だろう?」

天道が右手の人差し指を天にかざしながら自分の名をネイティブに告げる。

ちようど太陽と指の頂点が重なって、眩い後光を携えた輝ける男がそこに現れた。彼の自信溢れる言葉に揺り動かされたのか、ネイティブの姿が元に戻っていく。先程のみすばらしい女性の姿に戻った彼女は、改めて自身の姿の貧相さに気付く。

「あつ……………」

「酷い有り様だな、こんな格好じゃひよりの店には行けない」

「……………そうね」

「仕方ない、今回は諦めて出直そう。」

「俺はパリに戻るが、お前は どうする？ いや、どうしたい？」

「私は……………」

「……………おばあちゃんが言っていた。」

『人生で一番大事なのは、どの道歩くかを決める決断。あとは必要無い』つてな」

「おばあちゃん？」

女性が天道の言葉に悩んでいると、おもむろに天道が自慢の格言を言い放つ。

唐突に始まった加賀美日くの『天道節』を初体験した女性は微妙な表情になる。

天道はそんな女性を気にすることも無く、ただ淡々と言葉を続けた。

「お前がするのは決める事だけ、それだけでいい。

後は世界の中心である俺が、お前の歩む道を切り開いてやる」

「……………私の、歩む道？」

「そうだ。それで、どうする？」

「……………ここでずっと泣いているのか？ それとも、俺と共に世界を見るか？」

「……………私は、アンタと一緒にいきたい！」

「決まりだ。なら、お前とアンタじゃ呼びにくい。名前を教えろ」

「……………日比野、日比野 アゲハ」

「アゲハか、良いだろう。俺と一緒に来い、世界を見せてやる」

「ハイ!!」

人生を変える決断を下した彼女に天道が手を差し伸べ、アゲハがその手を取る。

手を繋ぎ合った二人は、そのまま太陽が照らす瓦礫の世界から飛び立って行った。

E p, # 『THE OUT NUMBER ～番外～』

『仮面ライダーディケイド』 The Darkness History』番外編

キャラクター設定およびキャラクター紹介

【仮面ライダーディケイド／門矢 士】

・二つ名『世界の破壊者』、『通りすがりの仮面ライダー』、『写真館の居候1号（夏海談）』

- ・性格 『写真を撮ること以外は全知全能（本人談）』
- ・弱点 『光家秘伝の笑いのツボ』、『ナマコ（食材）』

『設定および紹介』

自分の名前と様々な仮面ライダーの事以外の自分に関する記憶を失った青年。記憶喪失以前から愛用していたらしいカメラで世界の風景や人物を写すのが趣味だが、それらはピンボケばかりで上手くいった試しがほとんどない。

自分が居候している『光 写真館』の館長の孫である夏海に対してやたら挑発的な言動が目立つが、本人はあまり意識しての事ではない。

ある日夏海の暮らす世界を襲った不可思議な現象に巻き込まれ、

そこで彼女が偶然手に入れた謎のベルトとバックルを吸い寄せられるように

装着し、自身が「仮面ライダーデイクイド」という仮面の戦士であることを知る。

デイクイドの能力は、同じ時間の流れの中で異なる歴史が紡がれている

パラレルワールド、いわば並行世界に存在する仮面ライダーの力を使役出来るという

『世界の破壊者』なる異名に相応しい、破格のものであった。

現在、彼は『謎の五人のライダー』が現れる夢にうなされていて、

その夢を見た直後から、かつて巡ったライダー世界を再び巡る旅を余儀なくされている。

『能力及び必殺技』

【KAMEN RIDE / カメンライド】

ライダーの力が刻まれたカードをベルトのバックルに装填することで発動し、読み込んだライダーの姿や能力を自分自身に投影することが出来る能力。

(簡単に言えば、使ったカードのライダーに変身出来る能力)

現在この力は何故か使用に制限が掛けられてしまっていて、

九つの世界のライダーの内、既に巡りなおした【仮面ライダー^{ブレイド}剣】のカードと、

理由は不明だが最初から使用可能になっていた【仮面ライダークウガ】の二種類とその派生形態、あるいはそのライダーの持つ特殊能力のみしか使用出来ない。

【FOAM RIDE / フォームライド】

カメンライドで変身したライダーの持つ派生形態へと姿を変化させる能力。

上記の通り、現在は剣とクウガの二人のフォームライドしか使えない。

加えてこの能力ではライダーの持つそれぞれの『最強形態』への変身は出来ない。

【ATTACK RIDE / アタックライド】

カメンライドで変身したライダーの力を引き出して特殊な攻撃などを発動させることが出来る能力。

上記のフォームライドはディケイド以外のカードを使用しないと使えないが、このアタックライドはディケイド時でも発動できるものが数多くある。

今作では独自に『ATTACK RIDE BARRIER/アタックライド バリア』を使用可能。

【FINAL FOAM RIDE/ファイナルフォームライド】

フォームライドとは違い、カードに描かれたライダーそのものを他の存在へと変化させてしまう変わり種な能力。

自分自身には使用が出来ない（劇場版で使用されたディケイドのカードは例外）代わりに

他のライダーをその者に縁ゆかりのある全く異なるものへと変化させて、ディケイドの戦闘を援護するような効果を発揮する。

クウガは巨大なクワガタを模した飛行する鎧、『クウガゴウラム』に。

剣は彼自身の持つ武器を長大化させた、『ブレイドブレード』に変化させる。

【FINAL ATTACK RIDE／ファイナルアタックライド】

ファイナルアタックの名の通り、デイケイドの持つ必殺技を発動させる能力。他のカードとは異なり、贅沢にも一面を黄金色であしらわれていて、その中心にはそれぞれのライダーの紋章が大きく刻まれている。

・デイメンションキック

デイケイドが発動するファイナルアタックライド。

自身の前方にデイケイドの紋章が刻まれた巨大な黄金のカードを十枚ほど展開し、その場で真上に跳躍した後、上空へ連れ添って斜めの道筋のようになつたカードをすり抜け、その度に加速してエネルギーを右足に収束、標的に着弾させる。

また、カードをすり抜けるごとにデイケイドの姿が一瞬だけ掻き消えてしまうため、カードの数（渡る世界の数）だけ次元を越え、速度を増しているのだと推測する。

・デイケイドアサルト／マイティキック

クウガをファイナルフォームライドさせた時に発動するファイナルアタックライド。

ゴウラムへと姿を変えたクウガが先攻して標的をホールドして急上昇後、

一気に急降下してきたところを真下からの飛び蹴りで迎え撃つ合体必殺技。

また、クウガにカメンライドした場合に発動すると、

右足を前方に出しながら腰を落として両手を腰の辺りへ下げて大きく開く。その後右足へとクウガの持つ『封印エネルギー』を収束させてから猛然と駆け出し、跳躍して勢いそのままに空中で一回転して右足を突き出す飛び蹴りを放つ。

〔仮面ライダークウガ（未確認生命体第4号）／小野寺 ユウスケ〕

・二つ名 『人の笑顔のために戦う男』、『写真館の居候2号（夏海談）』

・性格 『明るくて誰からも好かれる人気者（本人談）』、『ただの馬鹿（士談）』

・弱点 『不意のファイナルフォームライド』、『心の闇を抑えきれない事』

『設定および紹介』

士が仮面ライダーデイクイドとして世界を巡る旅を始めた先で出会ったライダー。

超古代の遺跡から甦ってしまった『未確認生命体』から人間の笑顔と平和を

守るために、日夜己の持てる全力を尽くして同じ『未確認生命体第4号』として戦い

を

続けていた青年だったが、それらは士の出現によって大きく変わる事となった。デイクイドが初めて訪れた世界のライダーであり、心を通わせた数少ない理解者。だが彼らの性格上上手くいかない事がほとんどであり、行き違いの果てには二人が互いを殺し合うという凄惨な未来が待ち受けていたのだが、彼らは知る由も無い。彼が変身するクウガの能力は、古代の怪人を封印するためのものであったが、人間が繰り返してきた長い闘争の歴史の影響か、彼の体内に宿ったその力自体も封印ではなく破壊のエネルギーへと変換され、敵を爆散させるほどに至ってしまった。

また彼の人並み外れた正義感は時として振り切れ、心に巣食う『闇』に囚われてしま
い、

古代の碑文に刻まれた『究極の闇』を目覚めさせるきっかけにもなっている。

現在、彼は突如として再スタートした士の旅路に同行しながら再び出会うライダーに懐かしさを感じながらも、以前巡った世界とは何かが違う事に戸惑いを感じている。

『能力及び必殺技』

【超変身／フォームチェンジ】

クウガに変身するユウスケが持つ独自の派生形態への変身を指す。

基本形態である『炎の如く邪悪を打ち倒す戦士』こと、赤い『マイティフォーム』から

『流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士』こと、青い『ドラゴンフォーム』。

『疾風の如く邪悪を射抜く戦士』こと、緑の『ペガサスフォーム』に、

『地割れの如く邪悪を切り裂く戦士』こと、紫の『タイタンフォーム』。

さらにユウスケは人が本来持つ『心の闇』を増幅することで変化してしまう

『凄まじき戦士、雷の如く出で、太陽は闇に葬り去られん』とする邪悪に蝕まれた姿、

『アルティメットフォーム』にまで自我を保ちながら変身することが可能。

・マイティキック

クウガがマイティフォームの時に発動する必殺技。

動作はほとんどディケイド変身時と同じなので割愛。

【仮面ライダーディエンド／海東 大樹】

・二つ名 『お宝好きの泥棒（自称他称共に）』

- ・性格 『旅の行き先は僕が決める』
- ・弱点 『お宝』、『家族の情』

『設定および紹介』

自身を『お宝好きの泥棒』と揶揄する真正銘の泥棒ライダー。

士が旅する世界の行く先々で妨害とも取れる迷惑行為を働く旅の道連れであり、彼よりも先に世界を旅する『通りすがりの仮面ライダー』を名乗っていた青年。

ありとあらゆる個人情報をかきさない秘密主義者でありながら、

入手経路が不明なお宝の情報を携えて士達の前に幾度となく現れては、

その都度共闘したり戦闘したりと訳の分からない関係が続けている相手でもある。

また、どうやら記憶喪失以前の士と面識があるようで、

彼が嫌っていたナマコの事も知っていた上に彼がディケイドとして渡っていない

世界のライダーのカードを既に所持している等、未だ謎を多く隠している。

海東が変身するディエンドの能力は、古今東西あらゆるライダーの中でも異質極ま

る。

彼は自身が変身するのに使用する『ディエンドライバー』と呼ばれる携行型の銃器に

ライダーのカードを装填することで、そのライダーを文字通りに召喚することができる。

デイケイドとは違い自分がカメンライドすることは出来ない代わりにライダーを召喚し、

戦闘を混乱させたり乱入したりしつつ、自分自身はお宝の奪取に専念するという乱用ぶり。

しかし実際この能力は非常に厄介で、彼は巡った世界に存在するほぼ全てのライダーを

召喚することが可能で、彼らは召喚したデイエンドの命令に忠実に動く。

個人で多種多様なライダーの軍勢を操る、それがデイエンド最大の強みと言えよう。

現在、彼はとある世界で自分を探してやって来たという謎の二人組の男女

『ゾルク東条』こと『アルティメットルパン』と『平坂 黄泉』こと『ガイスト』と共に彼らの依頼を請け負って一路、『仮面ライダードライブ』の世界へ向かっている。

『能力及び必殺技』

【KAMEN RIDER / カメンライド】

デイケイドとは大きく異なる力を有した、デイエンドのカメンライド。

手にした銃器にカードを装填し、そのカードのライダーを召喚する能力であり、

彼が同時に召喚出来るライダーの数は（明確には不明だが）おそらく無制限だろう。

現在彼が使えるカードにデイケイド同様の謎の制限が掛けられているかは不明である。

【ATTACK RIDE／アタックライド】

原作通りにデイケイド同様の多種多様な攻撃手段を誇る。

彼が最も多用するのは『アタックライド ブラスト』と『アタックライド インビジブル』。

【FINAL FOAM RIDE／ファイナルフォームライド】

原作通りにデイケイド同様の九つの世界のライダー達を変化させる能力。

デイケイドと違う点があり、彼は直接手で触れて変形させるのに対し、

デイエンドは銃器から発射する特殊な弾丸を背部に打ち込むことで変形させる。

『ちよつとくすぐつたいぞ』、『あっち向いてろ』はデイケイドのセリフ。

『痛みは一瞬だ』、『なに、すぐに慣れるさ』はデイエンドのセリフ。

【FINAL ATTACK RIDE／ファイナルアタックライド】

原作通りにデイエンドの持つ必殺技を発動させる能力。
カードの特徴もデイケイドと共通しているため割愛。

・デイエンドプラス

デイエンドが発動するファイナルアタックライド。

自身の前方に九枚の青いカードで構成された円陣を無数に展開し、

それらが同時に不規則な回転をしながら標的をロックオンして動きを止める。

デイエンドが銃器のトリガーを引いた瞬間、カードの道筋を弾丸が辿っていきながら徐々にエネルギーを増大させ、最後は巨大な光条となって標的を撃ち貫く。

【光 夏海】

・二つ名 『夏ミカン（土談）』、『夏メロン（海東談）』

・性格 『凶暴で残忍（土談）』、『真面目でいい子（栄次郎談）』

・弱点 『ライダー（特にデイケイド）を否定されること』

『設定および紹介』

ある日突然、自分の暮らす平和な世界を怪人に襲われた不運な少女。

彼女の祖父が経営する『光 写真館』で暮らしていたが、そこに士が転がり込んでからは

彼の教育係兼監視役として厳しい態度を取りながらも若干ながら異性として意識している。

怪人や不可思議な現象に襲われる最中に偶然見つけた謎のベルトとバックルを手にし、

それを士に手渡ししてしまったことから彼女のデイケイドに同行する旅が始まった。

数あるライダーの世界を士や途中で仲間に加わったユウスケ達と共に旅していく内に

デイケイドというライダーに対して形容しがたい特別な感情を抱くようになっていた。

現在、彼女は再び巡りなおしたライダーの世界が前回のそれとは大きく異なることにユウスケと同様に困惑しながらも、士の世界が見つかることを切に願っている。

なお、今作の夏海には「仮面ライダーキバ（ラ）」に変身した記憶も事実も存在しない。

【光 栄次郎】

- ・二つ名 『爺さん（土談）』、『お爺ちゃん（夏海談）』、『お爺さん（ユウスケ談）』
- ・性格 『菓子作りとコーヒーの名人（土&ユウスケ談）』、『甘過ぎる（夏海談）』
- ・弱点 『不明』

『設定および紹介』

自身が経営する『光 写真館』の館長であり、夏海を溺愛する温和な初老の男性。常に何かのお菓子やスイーツを作っているような掴みどころのない人物であり、今作でも原作でも、これといった弱点が発見されていない唯一の存在でもある。夏海同様にある日突然、ディケイドの世界を巡る旅に同行することとなったが、行く先々でどんな人と出会えるか、どんなお菓子を作ろうかと何気に旅路を一番満喫しているようでもある。

そして、時折ディケイドの事を知っていたかのような言葉が漏らすことがある。

なお、今作の栄次郎は「死神博士／イカデビル」に変身した記憶も事実も存在しない。

【仮面ライダーガイスト／平坂 黄泉】

- ・二つ名 『魂の処刑人（本人談）』、『気難しい奴（海東談）』
- ・性格 『真面目な堅物（海東談）』、『実直で美しい（ルパン談）』
- ・弱点 『チャラチャラしてる男（本人談）』

『設定および紹介』

とある世界で『ゾルーク東条』と共に海東を探してやって来た謎の女性ライダー。短い黒髪をきれいに切り揃え、正直見ている分には絶世の美女であると言える。

しかし実際はトゲのある口調で、やたら攻撃的な言葉が多く見られる。何故か海東の『泥棒としての力』を見込んで自分達と共に二つの世界、

【仮面ライダードライブ】と【仮面ライダーゴースト】の世界を巡るようにと依頼し、自身も『英雄のアイコン』と呼ばれるものを所持している。

現在、彼女は海東やルパンと共に【仮面ライダードライブ】の世界へ進行中。

『能力（所持しているアイコン紹介）』

【ゼンセ アイコン】

彼女が変身する『仮面ライダーガイスト』の基本形態に必要なアイコン。
白を基調とした金色のラインが入っている魂パーカーを鎧として装着する。

【クレオパトラ アイコン】

『クレオパトラ魂』という派生形態にフォームチェンジするのに必要なアイコン。
砂色を基調とした藍色の装飾が施された魂パーカーを鎧として装着する。

【ジャンヌ・ダルク アイコン】

『ジャンヌ・ダルク魂』にフォームチェンジするのに必要なアイコン。
銀色を基調とした黄色の装飾が施された魂パーカーを鎧として装着する。

【セイメイ アイコン】

『セイメイ魂』にフォームチェンジするのに必要なアイコン。

彼女の持つアイコンの中で最強の力を誇る、いわゆる現時点での『最強形態』である。青紫を基調とした様々な装飾の施された魂パーカーを鎧として装着する。

EP, # 『THE OUT NUMBER』 番外2

『

名前 神崎 隴

性別 男

性格 水平思考 敵には一切容赦しない

容姿 Dies iraeの藤井 蓮

戦い型 ワールドトリガーのパーフェクトオールラウンダーと同様

口調 Dies iraeの藤井 蓮と同様

変身するオリジナル仮面ライダー

仮面ライダークライム

解説

仮面ライダークライム（元ネタ） 仮面ライダーディケイド 仮面ライダーディエン

ド)

いろんな設定（要するに*1” 想像・作る・改造・召喚・送還・使役・融合・変化の抑制or推進”）が

できディケイドみたいな戦い方をする（ただディケイドみたいに色んなカードを使うわけでは無くそれぞれのオリジナル所持カードしか使わない）

*1をまとめて”クリエイト”とする

所持カード

仮面ライダークライム（変身する為のカード）

クリエイト

仮面ライダームゲン

仮面ライダートランス

仮面ライダーディメント

仮面ライダーライフ

仮面ライダーソウル

仮面ライダーウロボロス

仮面ライダージオーネ

仮面ライダーディアック

仮面ライダーシエイク

仮面ライダームゲン（元ネタ 仮面ライダーエグゼイド）

MUGENガシヤト（元ネタ MUGEN 並びに 大乱闘スマッシュブラザーズ）

色んなゲームキャラの技・必殺技・道具・武器を使用する（ランダム決まり一度の戦いで3人まで）

仮面ライダートランス（元ネタ 仮面ライダードライブ）

ルートクラフト（元ネタ イナズマイレブンGOクロノストーン ザナーク・アバロニクのバイクの黒ver）

マツハで動いて仮面ライダーブラックRXと同じパワーを持ち魔法先生ネギま！

学園祭編 超鈴音のカシオペアを使った戦い方ができる

仮面ライダーデイメント（元ネタ 仮面ライダーW）

エンボデイメントメモリ イニシャル E 具現化の記憶

原作並びにオリジナルメモリを具現化し使用する事が出来るが具現化出来るのは一度の戦いで三回のみ（要するに エクストリーム+ウエザー+エターナル等）

スペースメモリ イニシャル S 空間の記憶

仮想空間に転移させることができ別空間から別空間へ攻撃ができ別の姿になる事もできる（要するに仮想空間を自由に作り出入りを強制or自由にでき別方向にミサイルを打つても空間を跳躍して相手にダメージを与える事ができたりA地点からB地点に転移することもできる）

イリユージョンメモリ　イニシャル　I　幻影の記憶

実体を持ったor実体を持たない幻影を作りだすことができ、ある一定以上のダメージを与えないと消えず幻影自体も闘うや動く等もできる

クリエイトメモリ　イニシャル　C　創造の記憶

思った武器や道具を自由に作る事ができる（メモリは創る事はできない）

テンペストメモリ　イニシャル　T　嵐の記憶

圧倒的なパワー（ワンパンマンのサイタマと同等）で攻撃ができマツハで動く事もできる

ブーストメモリ　イニシャル　B　倍化の記憶

色んな物や事を無限に倍化できる

仮面ライダーライフ（元ネタ　仮面ライダーウィザード灰色ver）

色んな魔法（スタイル・リング）を作る事が出来る（ただし新しく作る為には一週間に一個のみ）

仮面ライダーソウル（元ネタ 仮面ライダーゴースト）

F A T E / 眼魂（元ネタ F A T E / ）

F A T E / に出てくる全英霊の宝具・スキル等を使用できる（グレートアイザーと同等のスペックで一度の戦闘で使用できるのは三体）

仮面ライダーウロボロス（元ネタ 仮面ライダー龍騎）

制限時間無しで戦う事ができる

所持カード一覧

オリジナル契約モンスターカード：ウロボロス

アームドベント：籠手を装備するカード

トリックベント：原作と同様

リフレクトベント：ガードベントの最上位カード

バンベント：スチール・コピー・タイム等のカードを使えなくするカード

インビジブルベント：姿・影・存在を消せるカード

リセットベント：使用したカードを何度でも使用できるカード

サモンベント：モンスターを役するカード

アドベント：モンスターを召喚するカード

サバイブ：モンスターを融合し纏い圧倒的なパワーを持つカ

ファイルベント：全カードを使えなくなり相手は動けなく龍騎と同様の攻撃をする)

仮面ライダージオーネ(元ネタ 仮面ライダーオース)

所持メダル

”クジラ・ヘキサ・ユニコーン” 基本形態

”ハクメン・メタモン・ハートレス” 変形形態

”オシリス・オベリスク・ラー” 飛行形態

”メデューサ・バンパイヤ・ハチ” 操作形態

”ウロボロス・フェニックス・フェンリル” 超高速形態

”ハジュン・アシユラ・ニヤルラトホテプ” 狂気形態

セルメダル(無限)

クリアメダル(無限 オリジナルメダル 仮面ライダーWのように(いろんな全並列

並びに全平行世界の) 記憶から作り出す事が出来る)

仮面ライダーディアック(元ネタ 流星のロックマン 仮面ライダー剣)

流星のロックマンシリーズの全カードを使って戦う

仮面ライダーシエイク（元ネタ 仮面ライダー鎧武）

シエイクコア（元ネタ トリコ）

ランダムでいろんな食べ物のゲネシスコアを使って戦う

備考

ある人物の複数ある姿の1つで色々な世界に行ける人物で料理・戦闘・物作り・アクロバティック・変装等を全て極めている

（認めた者しか本当の姿を見せない。なお、ちなみに本当の姿は有と無の存在の龍である）

また、首から胴体にかけて龍を象った紋様があり、強い精神力や何らかの耐性が無い者を魅了する

龍の紋様を持つ理由については

「有無であり有無で無く神であつて神でも無く人であり人でも無く中途半端な存在であり中途半端な存在では無く抑止力であり抑止力でもなく自分であり自分でも無く俺であり俺でも無く……だからだ」とのこと

E P, 18 『THE SPEED 最速を追う者』

「……………それが、俺とアゲハの出会いだ」

荒れ果ててしまった洋食店の椅子に腰かけ、天道が動かしていた口を閉ざし

今まで多くの人間がしながら活気づいてはいなかったこの場に、静寂が訪れる。

ある者は俯いて肩を震わせ、ある者は彼の話を一片の疑いも無く聞き入れ。

天道の話聞いた誰もがそれぞれ異なる反応を見せたが、思いは全く同じだった。

先程まで髪が逆立ちそうになるほど怒り狂っていた加賀美は全身から力を抜かし、

全てを語り終えて黙っている天道に顔向けできないと言いたげに視線を逸らす。

またひよりは、同じネイティブでありながら世界に絶望して自ら命を絶とうとした

美しき女性の過去を知り、自分がこの世界にどれだけ生かされているのかを改めて痛感した。

「ねえ、天道君」

「……………何だ、弓子さん」

そんな誰しもが口を閉ざす中、この店を切り盛りする女主人の弓子が静寂を裂いて過去を語った天道に優しく語り掛ける。

「私、今でも何が起こってるのかよく分かってないんだけど

それでも私は、あの怪物からこの世界を守った天道君や加賀美君。

そして、その二人が守ったひよりちゃんも信じられるし、信じてる」

「弓子さん……………ありがとう」

「いいのよひよりちゃん。それに、ひよりちゃんはウチの稼ぎ頭なんだから！」

「……………そうだね、ボクはこの世界に必要なんだよね」

「そうよ！」

「……………天道、ボクなら大丈夫だ。

だから、お前はアゲハさんと優美恵ちゃんを助ける」

「ひより……………」

「加賀美もだぞ。お前が落ち込んでるのを見るとウザくて仕方ない」

「な、何だよそれ……………もつと言いつてあるだろ」

「これくらいが、お前にはちようどいい」

肩を落としてうなだれていた加賀美を多少荒くもひよりが励まし、

彼女の言葉を聞いたその場の誰も、気を強く引き締めた。

それに応じて静観を貫いていた士らが話し合いに混ざって口を出す。

「さて、とにかく俺らは詳しい現状が知りたい。

それについては話してくれるんだよな、この世界のカブトさんよ？」

「……………ああ、話してやる。」

だがその前にディケイド、だったか。

お前のことについても詳しく話してもらおうぞ」

「いいぜ、好きならこの俺様の魅力を語ってやるよ」

「士……………お前はまたそうやって「そうか、楽しみだ」……………え？」

「天道お前、今なんて？」

「加賀美、お前は風間を見てやれ。」

ディケイド、話は奥のほうでするとしよう」

「そうだな。夏ミカン、ユウスケ、大人しく待つてろ」

士の言葉に突っかからずに頷いた天道は彼を店の厨房の奥へと連れ出し、彼の態度の急変ぶりに驚いた一同を無視してそのまま話を切り出す。

「それで、まずはどこから話せばいい？」

「まずはデイケイド。お前の持つ力のことから話せ」

「仕方ないな、そうだな……………」

私のお店なのに、と軽く憤慨する弓子を差し置いて厨房の奥の部屋で語り始めた二人の男を除いたこの場の全員は、これからどうすればいいのかについてを誰からというわけでもなく数秒後には話し始めるのだった。

『止めて……………放して……………!』

「……………それは無理な相談だ」

『ならせめてその子は！ 優美恵だけは返してあげて!!』

「……………ネイティブの言葉を聞く義理は無い」

士と天道が互いを認め合った頃、緑色のライダーことマディカは数分前に突入作戦を執行した洋食店から数十km離れたビルの内部で深緑の異形を見下ろしていた。

二体いるうちの一体、身体の大きな方のネイティブがマディカに必死に訴えかけるが彼の耳にも心にも、人ならざる者の言葉は届かない。

それでも諦めずにネイティブは自身の隣で動かない小さな同族を庇い立てる。

『お願いします……………この子だけは!!』

「……………何度も言わせるな、俺にお前らを救う理由も道理も無いと」

『私はどうなってもいい、でもこの子だけは助けてください!』

「……………分からんな。ネイティブの癖に何故そこまでする?」

人の気配が感じられない寂れたビルの一室に久しく静寂が訪れた。

誰もいなかったこの部屋に連れてきてからも彼女はマディカに対して説得や懇願することゝ

全く止めず、それどころか自身よりも動かない娘の事を心配している。

助けが来るどころか場所の特定すら難しいと思わせる無人の要塞と化した廃墟ビルに

連れ去られた天道の妻アゲハとその娘の優美恵が囚われていたのだった。

そんな身でありながらも自分以外を気にかける眼前の人外のことマデイカには理解出来ず

思わず質問を投げかけてしまった。

そして彼女は、彼の質問に真摯に受け答える。

『この子が、この子が私とあの人の娘だから！』

「……………くだらない、何が娘だ。所詮は幼児のコピー品だろう」

『違う！ この子は擬態で産まれたんじゃない、本物の命なの!!』

「……………それ以上口を開くな。そろそろ時間になる」

マデイカの発した言葉にネイティブが何をと尋ねるよりも早く、

彼らのいる部屋の扉が音を立てて開き、その向こう側から一人の男が顔をのぞかせる。

眼鏡をかけ、スーツを着こなし、知的な雰囲気を漂わせているその男は自身の命令通

り

二体のネイティブが捕獲されていることを確認して、その鉄仮面の如き顔に笑みを浮かべた。

「上出来だ矢車、ご苦労だったな」

「……………ああ。三島、お前何体減らされた？」

「三体ほどやられた。カプトと、未知のライダーデイケイドに」

「……………未知のライダー？」

「ゼクターを用いずに変身する厄介な相手だ。分身や他の姿にも変身出来るようだな」

「……………俺がやるか？」

「後でいい。それよりも今はコイツらだ！」

扉の向こうから姿を現したのは、カプトとデイケイドによって倒されたはずの三島。

彼は話の途中で変身を解いたマディカ

げて歩き出し

矢車との会話を切り上

弱々しい声で懇願し続けているネイティブの角を掴んで乱暴に振り回す。

当然痛みを感じたネイティブが逃れようともがくが、彼は構わず手を休めない。

「世話を焼かせてくれたなネイティブが！」

『この子は……………この子に手を出さないで』

「ハッ、ネイティブの分際で感傷にでも浸っているつもりか？」

所詮貴様らの姿や記憶など人間から奪い取った模造品に過ぎないのだ。

何も憐れむことも落ち込むことも無い、全て忘れて俺の計画の駒になれ」

『一体、何をさせるの……………？』

「すぐに分かる。矢車、俺は装置の作動準備を進めておく。

コイツらの監視と邪魔者が出てきたらそいつらの排除を命じる、いいな？」

「……………ああ」

「ぬかるなよ矢車」

「……………お前こそ、約束を忘れるな」

三島はネイティブに対しての暴力に飽きたのか、矢車に対して上から目線で命令を下し、自身は立ち上がってそのまま入ってきた扉を押し開けて部屋から出て行った。彼の後ろ姿を見送った矢車は命じられたとおりに眼前にいる捕らえた二体のネイ

タイプの

監視を始めるが、その必要性も感じられないほどに彼女らは弱りきっていた。だからだろうか、彼はほんの少しだが気を緩めて彼女と言葉を交えた。

『約束、その為に私とこの子をどうする気なの？』

「……………俺は別にお前に恨みがあるわけじゃないが、お前が嫌いだ。

そして、お前と共にいるあの男、天道 総司もな」

『総司さんを知ってるんですか?!』

「……………俺もその昔、ZECTの精鋭部隊のリーダーだったからな」

『総司さんの知り合いなら、何故あの男と手を組んで?!』

「……………言ったはずだ。俺はイツが嫌い、そしてお前も」

『……………聞かせてもらえませんか。総司さんを、私を憎む理由を』

「……………いいだろう、どうせ時間まですることも無いしな」

矢車と言葉を交えたネイティブは心情が穏やかになったのか、それとも警戒を解いたから

なのか、人間の姿に、アゲハの姿に戻って大人しく彼の言葉に耳を傾ける。

彼女の行動を見ても動じることなく、矢車は昔を懐かしむように語りだした。

「……………俺はかつて渋谷で起こった『渋谷隕石』の事件によってそれまでの暮らしの全てを失い、路頭に迷い、それでも何とかして生きようとひたすら上を見上げていた。大学の頃の友人や高校時代の恩師を頼ったりしながら俺は事件から二年で再び自立する

まで自身を復興することが出来た」

「……………並ならぬ努力をしたんですね」

「……………ああ。だが、それでも現実には悲惨なものだった。

ちようどその頃に出会った女性と俺は付き合い始めて、婚約までした。

だが婚約指輪を買いに行ったその日の夜に、その人はワームに擬態されて殺され

た」

「……………」

「……………当時は目の前で起こったことが現実だと信じられなかった。

だが彼女の死が本当の出来事だと知り、俺は見知らぬ怪物に復讐を誓ったんだ。

そしてその怪物と人知れず戦う秘密組織の存在を知り、入隊を強く希望し、合格し

た」

「それがあなたの、原点ですか」

「……………月日が流れて俺はワームとの戦い方を学び、そして力を手に入れた。

組織が開発した対ワーム用兵器の二号機である『ザビーゼクター』の資格者として

俺は

選ばれ、精鋭部隊シャドウの指揮官として任命されたことでより力の大きさが実感

出来た」

「マスコドライダーザビー。個を束ねる統率者、ですか」

「……………そうだ。当時の俺は『完全調和』パルフェクトハーモニーを信条として掲げ、何よりも集団での規

律ある

戦闘と行動を心掛けてワームとの日々激化する戦闘を隊の仲間と乗り越えていった。

だが唐突に現れたあの男、天道によって俺の光輝く道は閉ざされた」

「総司さんがあなたの道を閉ざした？」

「……………天道は組織に加わらずにゼクターを所持し、単独でワームと戦っていた。

当時の俺は組織からの命令と個人的なスタンドプレーへの嫌悪でアイツと何度も

戦い、

その度に俺の中にあつた大切な信条が汚され、冒され、打ちのめされていった」

「まさか、それでザビーゼクターに見限られて……………」

「……………その後、ザビーの力は俺の目の前で新入りの加賀美に移った。

だがそれだけなら俺も納得出来たのに、今度は俺が隊にいた頃から目をかけていた部下の一人に資格者としての権利が譲渡されていた」

「それが、『影山』さんですか」

「知っているのか、アイツを?!」

「総司さんから大体のことは聞かされています。

あなた方は『自ら光の照らす道を外れて日陰に居場所を探す迷い人だ』と」

「……………分かったようなことを」

アゲハが語った天道の言葉を聞いて矢車が一度口を閉ざし、話を切ってしまう。

当初は無口に思えた彼が意外にもよく話をしてくれることにアゲハは少し戸惑ったが、

それでもまだ彼女には矢車から聞きたいことがあったので、再び話を促した。

「それで、総司さんはまだしも何故私まで恨むのかについては、何故です?」

「……………今お前が言った影山だが、アイツは心に闇を抱えていてな。

俺と同じかそれ以上に黒く冷たく底が深い、ハマったら抜け出せない沼のような。

そんな闇を感じた俺は、アイツが落ちるところまで落ちてから手を差し伸べた」

「……………」

「……………アイツは調子が良くてな、それまで散々全てを失った俺をバカにしていた癖に自分が同じように捨てられてからは、俺に取り入ろうと必死になつてな。

俺の世を捨てた言葉にも賛同して、『兄貴とならどこまでも』とまで言ってくれた」
 「それでもあなたは彼を、憎めなかった」

「……………同じ闇の底へと叩き落された者同士だ、手を取り合つて何が悪い。

なんて、あの時の俺はそう考えて天道や加賀美達には影山と一緒に突つかかった。

俺と影山を地獄に落としたこの男には、復讐する権利が俺達にはあるつてな」

「……………逆恨みじゃないですか」

「……………否定はしない。だがそれでも良かったんだ、あの時はな。

俺達は日陰の道を歩くしかなくなつたのに、どうして奴らは光の照らす道を

自由に、当たり前のように歩いているんだ。俺達のことなど知りもしないだろう

に。

そう言つては俺達二人で一緒に目的も無くただ何かと戦つていた」

「それで今、影山さんは？」

「……………相棒は、弟は、死んだ」

そう一言呟いた矢車は再び口を閉ざして目を閉じる。

彼のまぶたの裏にある暗闇には、今もなお刻み付けられた地獄が映っている。

自らが闇の道に引きずり込んだ相棒を、自らの蹴りで命を奪うという光景が。

目の前の闇に映る光景をかき消すように目を見開き、懐にしまいこんでいる一枚の

古ぼけた写真の切り抜きを手にとって、アゲハにも見えるように眺める。

自身が名乗っている、『白夜』をあらわすかつての相棒との約束を思い出す。

太陽が大地を燦然と照らす昼間ですら肌を刺すように寒い季節のその中で、タンカーが積み荷を運ぶための運河沿いの防波堤に男が一人立っていた。

真冬の夜だというのに、男は寒さも常識も関係ないと主張するかの如く奇抜な

服装の上に黒い革のコートを一枚羽織っただけの状態で運河の寒風に耐えていた。

目の前のフェンス越しに夜でも眩しく光る運河の対岸を忌々しげな視線で見つめる

男は

ふと背後から誰かが近づいてくる気配と足音を感じた。

そしてその感覚は間違いではなく、男の背後からもう一人の男がやってきた。

「遅かったなあ、兄弟」

運河を渡るタンカーの野太い汽笛の直後に立っていた男が小さく呟くが、呼ばれた男はその呼び声に答えず、そのまま足をもつれさせてフェンスにぶつかった。

勢い余ったにしては随分弱々しいぶつかり方だと男は訝しんだのだが、やってきた男の様子がいつもよりもおかしいことに気付いて黙っていることにした。その判断が、二人の運命を別つた。

「俺は……………兄貴も知らない暗闇を知ってしまった」

弱り切つて息も荒くなっている男は、フェンスを掴みながらさらに苦しみだす。

そして彼の姿は徐々に揺らぎ始め、ほんの一瞬だが人とかけ離れた深緑の怪物となつて

再び立っている男と同じような奇抜な世捨て人ファッションの男に戻つた。

今もなお苦しみがいている男が、『影山 瞬』

いまだに対岸の明かりを睨んでいる男

あり、

彼がザビーの資格を剥奪されてから紆余曲折を経てゼクターに選ばれた経歴を持ち、

矢車のかつての部下で

自らを信じてくれた矢車を道具として利用した挙句、ZECTにもワームにも人間にも

見限られて今の矢車と同じ無限の暗闇地獄に落とされた、日陰の住人である。

影山は一度裏切った自分を救い上げてくれた矢車を”兄貴”と呼び慕い、

以後の行動を共にしてきたのだったが、自分が所属していた組織が開発して世間に

無料で交付し始めた『ワーム探知機能付きネックレス』を矢車の分も貰って行こうと

欲を出して幾つも入手し、その全てを自分の身に着けてしまっていた。

だがこのネックレスには人間社会の裏に潜むネイティブの狡猾な罠が仕組まれてい

て

身に着けた者を徐々に人間からネイティブへと変貌させてしまう効果があった。

それを知らずに大量に身に着けた影山はものの数日で肉体が急変し、

今まで自分が散々打ち倒してきた深緑の怪物へと成り果てかけていた。

「連れて行ってほしかった……………けどさ」

呼吸すらも辛そうに息を荒げる影山が言葉を無理矢理口から放り出すけれど、

傍らで自らの肉體の変貌を目の当たりにした兄と慕う矢車は何も語らない。

自分を闇に引き込んだ彼ですら、知りえない闇の奥底に自分は落ちてしまった。

もう二度と、この暗闇から這い上がることは出来ない。

無言の彼の姿を横目で見た影山は最後の力を振り絞ってフェンスから離れて言葉を紡ぐ。

「俺はもう、一生この暗闇から出れないよ……………」

フェンスを支えにしがみついていた影山は力の抜けていく身体を気力でなんとか持ちこたえさせ、何度も転んで倒れそうになりながらも矢車から遠ざかる。

距離にして十数m離れた地点まで離れた影山は残された意地で兄から貰った大切な宝物である

『ホッパーゼクター』を自分の元へと呼び出して、腰のバックルに装填して変身した。今にも変身が強制的に解除されそうなほどふらくく身体で、目の前の暗闇を見据える。

自分の背後にいる兄は今、夜であつても対岸で光輝く大地を眺めている。

そんな彼を自分の見てしまった闇には引き込んでしまいたくは無い。

せめて誰も見向きもしなかった自分を見てくれた彼だけは、光の道を見せてやりた
い。

これがかつて彼を裏切った報いだというのなら、怖くても寂しくても受け入れよう。
ほんのわずかな一時の間でも、自分を“義弟”と呼んでくれた“義兄”の為に。
最期くらい、こんな暗い夜空でも、上を向いて逝きたいと願ってもいいよね。
月の無い真つ暗な夜空を、影山はたった独り見上げて立ち尽くす。

「……………」

そんな影山の背後で、矢車はただ真つ直ぐに目の前の運河と、対岸の光を見つめてい
た。

本当は連れて行ってやりたかった。彼と共に『約束の場所』へ行きたかった。
でもそれを本人が望んでいない。今の現実を受け止めるのに必死だから。

「だつたらもう、最期くらい”相棒”のわがままくらい聞いてやるのが”相棒”の務め
だ。」

これが今まで散々自分のエゴに付き合わせた報いならば、辛くても悲しくても受け入
れよう。

最期くらい、こんな暗い夜空でも、上を向いて逝かせてやってもいいだろう。光溢れる運河に背を向け、矢車は唇を噛み締めながら肩を震わせて変身する。

「……………」

お互いが変身を完了し、影山は背を向け、矢車はその背を見つめる。

服装もライダーの姿も瓜二つな彼らが、今初めて別々の方向を向いて立った。

距離を置いて立ち尽くす二人の間に、もはや余計な言葉など必要無い。

ただ一言、たった一言許されるのなら、矢車は影山に伝えたかった。

済まない、と。

矢車が噛み締めて閉ざした口を開いてその言葉を伝えようとした矢先、

先に覚悟を決めていた影山が背を向けたまま自分を見つめる矢車に告げる。

今にも泣きだしそうになるのを堪え、命乞いしそうになるのを抑え、

それまで生きてきた中で彼は初めて、他人を思いやって人としての別れを告げた。

「さよならだ、兄貴」

影山の言葉を聞いてから、矢車はもう迷わなかった。腰に装填したゼクターのレバーを右側に倒し、即座に左に押し戻す。

「相棒おおお!!!」

その動作でタキオン粒子がチャージされた左足を飛び蹴りのように突き出して、空気を裂く雷鳴の如く火花を散らす「ライダーキック」が直撃した。

矢車の一撃によって完全にネイティブとなる前に死ぬことが出来た影山は

ダメージの負荷により変身が解除され、そのままホッパーゼクターは姿を消した。

どこかへ跳び去っていく影山のゼクターを見送ろうともせず矢車は死んだ彼の身体を

優しく抱き上げ、元から目を付けていた貨物船に密航目的で乗り込んだ。

寒空と波風で温度を奪われた無機質の貨物がうず高く積まれた貨物船の上で、

周りの貨物と同じく冷たく動かなくなった影山を片手で抱き寄せた矢車は、

自らが吐く息が白く温かいことを確認し、微笑みながら独り呟く。

「相棒……………俺達は永遠に一緒だ」

時折船体を揺らす波と風の音以外に何も聞こえなくなった夜空の下、

矢車は隣に座らせた影山を優しい目で見つめ、やがて視線を空へ移した。

積まれた貨物に遮られ、点々としか見えないう星空を見上げて矢車は笑い、

左手で冷たくなった影山の頭に手を置いて彼と同じように目をつぶって言った。

「行こう、俺達だけの居場所ひかりを掴みに……………」

真冬の寒さと張り詰めた緊張の糸が解れた影響か、矢車はそのまま意識を手放した。

その最期の瞬間まで、彼は隣にいる相棒と深く強く結ばれた繋がりを感じて。

暗がりの中、廃墟と化した古いビルの展望フロアで三島が笑う。

彼の目の前には巨大なテレビとパラボラアンテナが合体したような不可思議な装置

と

それに繋がれた三体の角の生えたワーム

ネイティブがいる。

ネイティブの身体に付けられた管が装置に繋がっていて、見た限りでは明らかに実験台か道具の一部としか彼らを見ることが出来ない有り様になっていた。

それでもなお三島は眼前の装置を見ながら笑っている。

そして彼の背後には、全く同じ姿の三島が四人立っている。

事情を知らぬ人が見れば卒倒しそうな光景の中で、中心にいる三島が語る。

「もうすぐだ、もうすぐ完成する!!」

まるで指揮をするかの如く両手を高く掲げた三島を残りの四人が見つめるが、

そんな事を気にすることも無く三島は狂ったかのように手を振って高笑いを上げる。

「あと二体、あと二体だ。それで俺の計画は完成する!!」

誰に言つて聞かせるわけでもなく三島は声を荒げて語るが、

この場にいるのは四人の自分と物言わぬ部品となったネイティブと装置のみ。

それすら構わず三島は息を荒げ手の指揮を止め、眼鏡の奥の瞳に野望の炎を灯す。

「今日ここに、完成する！」

ネイティブの卓越した頭脳と演算能力をパーツとしてライダーのタキオン粒子を原動力に発動する、「クロックアウト・システム」がついに完成するのだ!!」

計五人の三島はそろってその姿を人間のものからかけ離れた異形へと変える。それら全てが全く同じで些細な違いすら見受けられない、完全なる同一個体。群体、故にこそ彼らは単一であり同一であり唯一である。

大勢であるが故に、彼らの意思は確固として統一された『個』の意識。全員が全く同じローカストワームへ成り変わり、装置を見つめる。

「さあ行くぞ、この装置を使って、四年前の過去へ!!」

E P, 19 『EVERYONE、S SUN』 天の道

『

「と、言う訳だ」

「なるほど。この世界で与えられた役割を果たす、か」

厨房以外の場所がほとんど滅茶苦茶に荒らされたような状況になっている洋食屋で、
 デイクイドこと士は、この世界のカブトこと天道に自分自身の経歴や目的を話し終えていた。

つい先ほど彼らは人類の対ワームへの切り札ともいえる秘密組織ZECTの構成員とその部隊の

指揮を行っていた深緑色のライダー「マスクドライダー マデイカ」と対峙し、天道の妻と娘を

誘拐されてしまっていて、今彼らはその奪還作戦の内容を練っているところのようだった。

そのためにまず天道が士にデイケイドとは何なのかを尋ね、士もそれに応えて説明していた。

互いの事を知った二人は頷き合って本題である奪還作戦の話へと話題を変える。

「俺のことよりもまずはお前の嫁さんと娘っ子の事の方が大事だろ。」

「どうやって取り返すつもりなんだ？　ってか、敵のアジトは分かっているのか？」

的を射ている士の言葉に対し、天道はただ小さく笑って答える。

「当然だ。俺は世界の中心、即ち天は常に俺の味方という訳だ」

「どういう訳だ、ちゃんと会話をしろよ会話を」

「……………俺の知り合いが調査をしている。そろそろ報告が来るはずだ」

天道はそう言ってズボンのポケットからスマホを取り出してかざして見せる。

彼の言葉は狭い店内であるが故に誰にも聞こえていて、特に加賀美と岬がその言葉に

過敏な反応を見せ、天道の元へと言い寄ってきた。

「知り合いが調査?! そんな話聞いてないぞ天道!!」

「話してないからな」

「天道君、今のZECTがどれほど危険な場所なのか分かっていてるでしょ!!」

そんな危険な場所に他人を調査に向かわせるなんて何考えてるのよ!!」

「策を考えている。それに、その男と俺達は親しい間柄だぞ?」

「えっ?」

「その、男?」

「ああ、そいつがもうすぐ連絡を『Pr r r r!』……噂をすれば、ってな」

「もしかして、その人からの?」

加賀美や岬の苛烈な言及をするりと躲しながらタイミングよく鳴り響いたスマホの着信音を境に天道は一度会話を止めて通話ボタンを押して電話の相手と話し始めた。

「俺だ、そつちの様子はどうか? そう、明確な場所と連れ去った目的についてだ。

……そうか、分かった。場所のデータをメールで送ってくれ。じゃあ

な

「て、天道君！ もしかして奴らの居場所が分かったの!？」

「ああ、そういう事だ。これでこいつの優秀さが分かっただろうか？」

「こういつた事態に慣れてる専門の男だ。分かったら手を放せ加賀美」

「あ、お、おう」

加賀美に胸倉を掴まれながらも冷静かつ端的に話した天道の言葉に二人は困惑し、一度熱くなった頭を冷やしてこいと促されて渋々元居たテーブルに戻っていった。士はその間に別のテーブルに座っているユウスケと夏海、弓子とひよりのそばに近づいて今後の方針についての話をし始めた。

「おぼちゃん、それとそっちの不愛想。二人ともここを動くなよ。」

夏海、お前もだ。こっちのユウスケっていうよく働く馬車馬がお前たちを守る」

「ちよつと土君!」

「おい士、そんな言い方は無いだろ！ それに、今回は俺も行くぞ!!」

「着いてくんユウスケ、足手まといだ。」

「お前にヤツらのクロックアップを破る方法は無いはずだ」

「無くても行く！ 俺は、アゲハさんと優未恵ちゃんを助けに行く!!」

「お前なあ！」

「俺は！ これ以上、誰の涙も見たくないんだよ、士……………」

「……………」

「俺は難しい事はよく分かんないから、アゲハさんたちが連れ去られた理由とか、

ワームとネイティブの関係とか、そんなことはいくら考えても全く答えが出ないんだ。

それでも今、多分優未恵ちゃんは泣いてる……………だから俺は行く!!」

右手を握りしめて拳を作ったユウスケは士に大声で迫りながら決意を語る。

彼の持つ本来の心の性質を思い出した士は呆れたような表情を浮かべたまま溜め息を

ついて面倒くさそうにユウスケに告げた。

「分かった分かった、そこまで言うなら勝手にしろ。

ただし、後で泣き言を言ったりするんじゃないぞ」

「分かってる！」

「暑苦しいな、近寄るな」

「何だと!! どういう意味だ士!!」

「ディケイドの言う通りだな、まるで加賀美の生き写しだ」

「何だと!! どういう意味だ天道!!」

「ああ、全くだ」

まるで一卵性の双子のようにシンクロする二人をジト目で見つめる天道と士。

そんな四人の姿を見て不謹慎だとは分かっているも、傷付いた風間を看病していたゴンと弓子は顔を綻ばせて明るい声で笑い出した。

二人の声高な笑いにつられて夏海も笑い出し、ついには士に不愛想とまで言われたひよりまでもが小さく笑い始めてしまい、壊れた店内につかの間の安らぎが生まれた。

ほんのわずかな時間を共有した士達はそれぞれの思いを感じ合い、

同じ決意を胸にしつつ日が少しずつ落ち始めた頃、一步を踏み出した。

士や天道、加賀美にユウスケは自分たちの愛用するバイクに跨ってエンジンを吹かし、

ヘルメットをしつかりと被ってから横目でチラリと店に残る面々を見つめる。

「……………天道」

「どうした、ひより?」

すると弓子に肩を貸していたひよりが天道に対して声をかけ、当の天道も応じる。ひよりは真っ直ぐに天道だけを見つめながら、思いを吐き出すようにして語った。

「アゲハさんと優未恵ちゃんを必ず助けてこい。」

あの人に僕の作ったサバ味噌を食べさせてあげたいんだろ?」

「……………ああ、分かってるさ。ひより、とびきり上手い料理を作って待っている」
「分かった。絶対に、戻って来てくれ」

お互いがお互いの言葉に頷き合い、視線でそれ以上の言葉を必要とせず意思を通じる。

ひよりは天道の、天道はひよりの思いを誰よりも分かっているからこそ何も言わなかった。

守るべきものの為に戦う。そういう男であると知っているからこそ、送り出す。

そんな二人を加賀美は黙って見守り、自分自身の中にある想いを押し殺して前を向いた。

天道とひよりのやり取りを見た夏海もまた土に何か声をかけようと試みるものの、気の利いた言葉が思い浮かばずに下を向いてうつむいてしまう。

「心配すんな、夏ミカン」

「え？」

目線を下へと落とした彼女に、彼はいつものような軽口で話しかける。

あだ名を呼ばれて顔を上げた夏海の視線の先には、普段通りの土がいた。

「ここでおばちゃんとその不愛想と一緒に待つてろ。」

「この世界でやるべきことを終えたら、迎えに来てやるから」

「……………絶対ですからね！ 待つてますよ!!」

「ああ。俺が夏ミカンのお迎えを忘れなかったらな！」

「……………もう！ 土君って人は！」

「そんだけやかましけりや大丈夫だ。行つてくるぜ、夏ミカン」

ヘルメットのバイザーを勢い良く下げた土とユウスケを見て、夏海の心にはいつものような不安と、いつも以上の安心感が広がっていった。笑顔になって土の言葉に頷いた夏海を背にして、四人の男がグリップを回してブレーキを手放し、一気に加速して洋食屋の店先から出立した。

その頃、三島ことローカストワームの軍勢は元ZECTの本部であったビルの地下に作り上げていた、とあるシステムの最終調整に取り掛かっていた。

それぞれが一丸となって一つの目的の為に集団として正しく機能するその様は
ローカスト飛蝗アントというよりも蟻の方が表現としては合っているように思える。

蠢く同一の軍勢の中でただ一人だけは彼らの作業を高みから見物している個体があった。

彼は彼らの始まりの個体で、言ってしまうと「親」のような存在であった。

『ローカストワーム』、それはワームの中でも特に優れた個体。

ワームとしての基本機能である擬態にクロックアップは勿論のこと、

かつてはカッシスワームというワームしか扱え得なかった『コピー&ペースト』とい

う

敵の技を吸収して同様の威力で跳ね返すカウンター技すらも会得している。そしてこのワームが他のワームよりも優れている点はもう一つある。

それが今の彼の眼下に蠢く、無数の同じ自分が何よりの証明だろう。

ローカストワームは自分自身と何ら変わらぬクローンを生み出す能力を保持している、

しかもそれら一体一体が思考を共有させられるリンク機能も備わっている。

だから倒したはずのローカストワームが生き返ったような錯覚をカプトに与えられた上に

自身の一体を倒したデイケイドの情報を他の個体に伝えることが出来ていたのだ。

無数の自分を軍隊として使役する、それこそがローカストワームなのだ。

そんな彼ら、もとい彼は今まさに最高の幸せを感じていた。

何故ならば、彼らの悲願を叶える瞬間がっいにやってきたからだ。

制御しきれない感情の膨張を露わにしながら彼
——— 三島はひたすら笑い続ける。

「ついに………ついに………ついに………!! ついに、この日がやってきた!!」

彼の悲願とは、制作した装置を使って『四年前の過去』へとタイムスキップする事だった。

四年前の過去とは、かつてワームやネイティブが人間社会に溶け込んで潜伏し、各々の企みを進行させながら人間を影から抹殺せんと暗躍していた時代である。

何故三島はそんな過去へと行こうと考えているのか、それは彼らにしか分からない。彼の命令に従って多くの人類を裏切った、矢車という絶望の淵に生きる男でさえも。

「ああはははあ、ふは、はははははー！ これでもいい！」

これでようやく我々の、ワームの支配する世界が実現されるのだ!!」

狂ったように笑い続ける彼の視線は、彼の足元にある巨大な装置の中にパーツとして無数の機械や配線の奥へと押し込まれている深緑色の角の生えた蛹の怪物に向けられていた。

ワームの蛹形態の姿に非常に酷似しているそれらは、ネイティブと呼ばれる種族。

彼らは争いを好まず、持ち前の知略や能力を駆使して人間を裏から操ろうとしていたのだが、

今のこの世界ではワームに勝つことが出来ず、そのほとんどが根絶やしにされてし

まっていた。

「だが、俺の計画にはどうしてもコイツらの頭脳が必要だった!!

卓越した演算処理能力、解析力、応用力！ それら全てがパーツとして必要だったんだ!!」

三島の制作していた装置の使用には彼らをパーツとして利用する必要があったらしく、

そのためどうしても彼らネイティブを殺さずに生け捕りにしておきたかったのだ。

しかしワームによってそのほとんどを消されたネイティブの生き残りを探し出すのは骨が折れ、

一年かかって三体のネイティブを捕獲するのがやっとだったのだが、その苦労は報われた。

ちようどおあつらえ向きな若いネイティブを二体、手に入れることが出来たのだから。

「順調なようだな……………あの二体を持ってこい！」

「ああ、既に手配してある。あと二分ほどでここに来る」

「そうか、ふはは！ 待ち遠しいな………四年前の過去が」

「全くだ。早く理想の世界を実現させたいものだ」

三島の後ろにやってきた別の三島が全く同じ声と顔で同じように笑い出し、それが瞬く間に他の三島たちに伝播して不気味な嘲笑のオーケストラと化して地下にある

装置の保管場所の中でいつまでもいつまでも木霊していた。

後からきた三島の言葉通り、壊れた笑みの合唱祭からちようど二分後に扉が開かれてそこから二体のローカストワームに連れられた女性と少女が足をふらつかせつつ現れた。

女性の方はここへ来るまでに抵抗したらしく、体の至る所にアザや擦り傷が出来ていたものの

三島たちはその事に意を介することなく無慈悲に彼女らを装置に取り付ける作業を開始した。

「しかし、なんでコイツらはいつまでも人の姿をしているんだ？」

「私が知るものか。ネイティブ如きの行動など、我々が理解する必要も無い」
「それもそうだな。早く装置に繋げろ！」

「分かっている。だが、クソ！　いつまで抵抗するつもりだ!!」

装置の上の階にあるキャットウォークにいる二人の三島が他の自分に命じるものの、連れてきた女性が両腕を縛られていながらも抵抗を続けているためにあまり作業が進まずに時間が無下に過ぎていた。

痺れを切らした三島の一人がワームの姿になってその女性
アゲハの首を

乱暴に掴み上げて腹部へと拳を何度も何度も叩き込む。

「ぐっ、がっ！」

『あまり手を焼かせるな……………大人しく我々の道具となれ』

「ぐ……………あの、子に！　優未恵に、触ら、ないで！」

『まだ人間の真似事を続けるつもりか!!　いい加減目障りだ!!』

「あっ……………かはっ……………」

腹部を貫く勢いで叩き込んでいた拳を収めたローカストワームはそのままアゲハを掴んだまま自分自身よりも上へと持ち上げてギリギリと彼女の首を締め上げる。

人間の姿をしている今の彼女では抵抗する術は無く、ほぼ無力に等しい腕力では今の状況を自力でどうにかすることは不可能になっていた。それでもアゲハがネイティブの姿にならないのは、単純な理由だった。

（あの人、総司さんが救ってくれた私は、こんな化け物じゃない！

人間として生きていた私………日比野 アゲハという人間なのよ!!）

醜い自分の姿を見たくない。そして、自身の授かった大切な娘に見せたくない。女性らしくもあり母親らしくもある、実に『人間』らしい理由だった。しかし、そんな事を考えている間にも首を絞める力はどんどん増していく。とうとうアゲハが耐え切れずに意識を手放しかけたその時。

ん?』

アゲハの首を絞めていたローカストワームがある違和感に気付いた。ここには自分自身である三島、もといローカストワームしかいないはずである。にも関わらず、どこからか規則正しい靴音がこちらに近付いて来ているのが聞こえ、それが他の三島が履いている物とは違う靴であることも気付いたのだ。つまり、ここに何者かが侵入してきたことを意味する。

「——アイコンを探しに来てみれば、これはどういう状況だ？」

『俺様を知るわけないだろ。それよりもホラ、早く探せよー！』

『貴様………全く、『タケル』も面倒な奴を案内人にしたものだ』

『あア!! なんか言ったかコノヤロ!!』

「騒ぐな。それより今は、この状況をどうにかするのが先決だ」

違和感に気付いたローカストワームが辺りを見回し始めた直後、装置のある階の上の方から何者かが話し合う声が聞こえてきた。

片方は落ち着きのある若い男の声だったが、もう片方は少女とも少年ともつかない不思議かつ不可解な印象を抱かせる声であった。

『誰だ!! 一体どこで何をしている!!』

謎の二人組が自分たちのテリトリーに侵入している事を他の自分へ伝えるのと同時に、最大級の警告の意を込めた大声をフロア全体に聞こえるように張り上げる。当然周囲に無数ほどいる自分自身たちはすぐさま異変に気付いて集まりだし、現れた侵入者に対して敵意と同等の殺気を放ち始めた。

自分たちに殺気が向けられたことに気付いたのか、二人組は急に静まり返ってしまいローカストワーム達の翅の擦れる音しか聞こえないほどの静寂に隠れた。

『さっさと出て来い!! 今なら、苦しまないよう一瞬で楽にしてやる!!』

「……………苦しまないように、だど?」

『あつ! オイコラ!』

無数の同胞の内の一体が思ってもいない事を口にして侵入者の反応を引き出そうとした直後に反応が示され、さらには隠していたその姿までも露わにしてくれた。

若い男の声という分析は、間違っではないなかった。

クセのあるウェーブがかかった茶髪に耳からは翼を表した装飾のついたピアスを垂ら

し、
やや頬の痩せこけたような輪郭の整った端正な顔立ちをもつ冷ややかな視線の青年
が
蠢く深緑色のローカストワームの群体を前に臆する事もなく悠然と歩み出たのだ。
右肩からは着ている衣服と同色の布を下げ、さながらどこかの貴族か王族であるかの
ように見える出で立ちをしている姿の青年を見て、三島たちはますます混乱してい
た。

『貴様、こんな所で何をしている?!』

「それは私が聞きたいことでもある。話してみろ、緑色の怪物たちよ。」

傷付いた女性と子供をいたぶって、一体何をしているんだ?」

『質問をしているのは俺だ!! 答えろ!!』

「……………この私に対してなんと無礼な口の利き方だ。いいだろう、気が変わった。」

本当ならばすぐにでもアイコンを探して帰るつもりだったんだが、それは延期だ」

『アイコン? 一体何の話をしている?』

「お前たちの望んだ、ここで何をしているのかという問いへの答えだ。」

そして、この私からお前たちに贈る最期の手向けという言葉でもある」

『何……………?』

「タケルやスペク
ろうが、
マコトなら何も言わずにその女性を救うのだ

私は彼らのように優しさの為に命を投げ打てるほどの『心』を持っていない」

『何の話だ!!』

『もういい、貴様の話は充分だ。ここで消えろ!』

現れた青年の口から発せられた言葉を聞いて業を煮やしたローカストワームの内の数体が先陣を切って駆け出し、未だに何かを呟いている侵入者へと牙を向ける。

たかが人間。そう侮ったローカストワームたちはその数瞬後、後悔することとなる。自分たちが攻撃を仕掛けた相手が、異なる世界の戦士であることを知らなかったという、最初にして最期の後悔を。

青年は懐から取り出したメカチックな物体を左手首に装着して固定させる。その後、右手に持った小さな球体についてボタンを押し込んで起動させた。

〔Standby〕

起動した球体はサイケデリックな緑の輝きを放ち始め、青年はそれを左手首に装着した

機械のくぼみ部分に装填して機構を動かし、横長だったそれを縦長の向きに変える。

【Yes sir!】

向きが変わった左手首の機械には先程の球体のものよりも大きなボタンがあり、青年は空いた右手の親指を立ててそのボタンを勢いよく押し込んだ。

【Loading】

ボタンを押し込んだ彼は次に機械の上部に備わっている『のような形状の部分に備わっている別のボタンに軽く指を置き、そこで再び彼自身の口が開かれた。

「……………変身!」

【テンガン! ネクロム! メガウルオウド!!】

【Crash the Invader!!】

液体が滴り落ちるような音が聞こえた直後に機械からパーカーが出現して、迫り来る三体のローカストワームに向かって行って体当たりの要領で迎撃し、変身して姿を変えた仮面の戦士の真上に戻っていき、彼に覆いかぶさった。

深緑色の地獄へと降り立ったのは、フードを被った死神の如き戦士。

白を基調としたボディに、死霊の眼窩のように底の見えない漆黒と

明るく見えるも無機質で無感情な色合いで均一に輝くサイケグリーンのラインが

入ったパーカーを上から羽織ったような姿をした仮面の戦士。

そんな彼のフードの下にある仮面部分にある眼球を模した単眼モラアイが

標的を見定めてロックオンしたとでも言わんばかりに怪しく煌いた。

「マコトやタケルの言う『心』が芽生え始める前の私のように、

お前たちのような化け物に対して慈悲をかける事は決して無い!!」

彼の名は、【仮面ライダーネクロム】

『貴様も未知のマスクドライバーか!!』

『あのデイケイドとかいう奴の仲間か?!』

「……………デイケイド?　なんだそれは」

口々にローカストワーム達が吐き捨てる『デイケイド』という単語に聞き覚えの無い彼は

首を傾げながら問いかけるも、深緑の群体には聞き入れられず代わりに怒号が返ってくる。

群がる同一個体の中から四体が飛び出し、フードをゆっくりと下ろして視界を広げている

ネクロムの元へと肉迫していく。

向かってくる化け物を見ても一切動じないネクロムは右手でパーカーの胸元部分の端を

つまんでキュツと音が鳴りそうなほど強く引き締め直して敵と対峙した。

「エネルギー切れが起きたら厄介だな……………一撃で決める」

誰に語るわけでもなく呟いたネクロムは自身の左手首の装置、「メガウルオウダー」の

機構を再び動かし、正方形の部分についているボタンを右手で勢いよく押し込んだ。

【Destroyed!】

直後にメガウルオウダーから電子音声が響き、ボタンを押し込んだネクロムは右手を装置の上の『の部分についているもう一つのボタンを人差し指で軽く弾くように押しした。

【ダイテンガン！ ネクロム！ オメガウルオウド!!】

液体が滴り落ちるような音が周囲に鳴り響いた瞬間、ネクロムの背後に角の生えた単眼の

ように見える紋章が現れ、そこから彼の右足へとサイケグリーンのエネルギーが流れ込む。

最大までエネルギーを充填したネクロムはその場で大きく跳躍してローカストワーム達の

頭上へと辿り着き、そこで素早く飛び蹴りの姿勢になって背後の紋章から右足へ流れ

出る

エネルギーの全てを解放した。

「はあああああ!!」

ネクロムの放った必殺のライダーキックは飛び出してきた四体も巻き込んで、

その背後で驚愕していた残りのローカストワーム達の大群の中心に突き刺さった。

蓄えられたエネルギーの放出によって大爆発が引き起こされ、その余波を全身に浴びた

ローカストワーム達の肉体は衝撃と熱風に耐え切れずに消滅していく。

着地したネクロムが振り返った先に広がる光景は、まさに地獄の縮図のようなものだった。

しかし彼はその光景に何の関心も示さずに歩き出して当初の目的の遂行に戻ろうと変身を解き、

いつの間にか姿を消したローカストワームに締め上げられていた女性を助け起こす。

青年によって救い出されたアゲハは咳込みながらもお札の言葉を述べる。

「ケホツ……あの、どなたか存じませんが、助けていただいてありがとうございます」

「気にするな。私は私の『心』の声に従っただけだ」

「そうですか……あの、あなたは」

一度視線を青年から外したアゲハがもう一度視線を彼に向け直したその時、既に不思議な格好をした青年の姿は、影も形も無くなってしまっていた。

慌ててアゲハは周囲を見回すが、彼女の近くには人の気配など感じられない。

何が起こったのか理解出来ないまま立ち上がった彼女はよろめきながらも自分の背後にある装置に繋がれてぐったりとしている娘を助け出そうと歩み寄る。

「何だこれは、何がどうなっている!!」

しかしそんな彼女の背後から、凄まじい怒号が聞こえてきた。

驚いたアゲハが振り返ると、そこには鬼気迫る表情を浮かべながら怒りを露わにしている三島がいた。

「貴様！ 一体何をした！」

「……………」

『答えろお!!』

どうやら他の場所から今しがたやって来たらしい三島は状況が飲み込めておらず、数十匹はいたはずの同一個体がほとんど全ていなくなつた現状を見て怒り心頭の様相を呈しているようだが、アゲハは無言のまま娘に繋がれたコードをゆつくりと解きながらローカストワームへと変貌した三島をただ睨みつけていた。アゲハの視線に気付いた三島は、不快気に舌打ちしながら彼女に歩み寄る。

『何が起きたかは知らないが、ただで済むと思うなよ』

「……………」

『まだ人間の真似事か!! ここまでくると滑稽だな、何がそんなに大事なんだ？ 人間のような愚劣で無知蒙昧な劣等種などの姿であり続ける理由は何だ？』

「……………ワームなんかには、分かるもんですか」

『ほぎけネイティブが!! 貴様も同じ化け物だろうが!!』

「私は！ 私達は、あの人が世界の中心であり続ける限り、人間よ!!」

眼前まで迫ってきたローカストワームに毅然と言い放つアゲハ。

しかし今の彼女には彼に対抗する術など無く、その振る舞いは無意味に終わる。否、終わるはずだった。

「よく言った。それでこそ俺の横に立つ女だ、アゲハ」

唐突に。まさに唐突に無人のフロアに人の声が木霊する。

その声は、その声の主はアゲハが待ち望んでいた世界でただ一人の男の声だった。

上の階のキャットウォークから自分たちを見下ろすその人影は、

右手をゆつくりと自身の顔の前に持つてきて、そこから頭上へと押し上げる。

人差し指を真っ直ぐに突き立て、天を突くかのような姿勢のまましばし動きを止める。

その男はただ、当たり前前であるかのように平静なままに告げた。

「待たせたな。『お前の世界の中心天の道を往き、総てを司るであり続ける男』、この俺が迎えに来たぞ」

太陽の下に君臨する世界の中心、天道 総司は厳かにそう告げた。

E p, 20『SUNRISE ~俺が正義だ~』

太陽。

それは、数ある天体の中でも最上位に位置するほどの光陵と熱量を宿した星。それは、無数の命が生まれ生きる地球という星を常に照らし続ける不滅の星。それは、人類程度の生命体では触れるどころか接近すらも許されない強き星。

そして太陽とは、決して変わることなく数多の命の上で輝き続ける孤独な星。

かつては地球外生命体ことワームに対する人類側の兵器を生産していたはずの建物の地下で

無数に蠢く深く醜い緑色の怪物の群れの頭上にも、尊く綻びえぬ光が問答無用で差し込んだ。

『なっ!!』

『うっ、ぐおお!』

それまで人工的に造られた微小な照明の中で動いていたローカストワーム達は突然自分たちの頭上から無遠慮に視界に押し入って来た強い光に充てられて眼を閉じて防ぎ、

ほんのわずかな間だったが、自分たちの領域に他者を踏み込ませるといふ愚を犯した。

統率された翅音以外の雑音が彼らの人間以上の聴覚が捉えて標的の位置を把握し、途切れた視力が回復してからすぐさまその音が止んだ地点に同一個体が同時に目を向ける。

その場所にいたのは、彼らが、彼らが擬態した男が最も恨んだ男だった。

『貴様ツ……………どうやってここまで!!』

「三島か、どうやら普通のワームとは少し違う仕組みらしいな」

『質問に答えろ!』

「アゲハ、優未恵を頼んだぞ」

「は、ハイ！」

『カブトオオ!!』

「……………相変わらず自分のことしか考えん奴だな。そこは今も昔も変わってない。

いや、ワームだからこそ変えることも考えずにそんなところまで擬態したんだろ
う」

『殺す!!』

「やってみろ、と言っても不可能だがな」

数えることすら億劫になるであろう数のローカストワームの群体が一斉に殺気をば
ら撒き、

頭上で天に人差し指をかざすポーズをとり続けている男
——天道に飛
びかかっていく。

最も近くにいた二体のローカストワームが肉体構造の特性を駆使した尋常ならざる
跳躍で

一秒すらかけず、二階のキャットウォークで佇む隙だらけの天道に攻撃を仕掛ける。

『があッ!!』

『なっ! うっ、ぐう!!』

ところがその二体は立て続けにその体から火花を散らし始め、空中でもんどりうって跳躍をした元の場所へと落下していった。その不可解な動きを目撃した他の同一個体は

湧き上がった殺気をほんの少しだけ抑え、今何が起こったのかを確認すべく周囲を見渡す。

そしてローカストワーム達は聴覚同様に発達した視覚で、天道の後ろに立つ人影を捉えた。

人影は靴音を規則正しく鳴らしながらゆっくり歩き出し、その姿を白日の下に晒す。現れた人物を完全に目視したローカストワームは皆一様に驚愕し、そのうちの一体が叫ぶ。

『貴様は

田所!!』

ローカストワームの叫んだ名前が室内で反響し、やがて収束して静寂に包まれる。

その静寂の中を、手にした小銃から薄い煙を立ち昇らせている男が天道の横に歩み寄り、

百数体はいるであろう怪物の軍勢の前ですら震え一つ起こさない屈強な精神を見せつける。

ワックスで黒髪をオールバックに固めたいぶし銀な風潮の男、田所は呟く。

「ああそうだ、久しぶりだな三島さん。いや、初めましての方が合ってるか」

『何故貴様がここに！ いや、何故貴様がカブトと共にここにいる?!』

「……………俺は人類の平和と安寧を守るためにワームと戦うZECTの兵士だ、他に理由がいるか？」

『ふざけるな!! ネイティブ風情が何をほざくか!!』

『貴様も我々と同じ、人類を脅かす側の存在だろう!』

「一緒にしてもらっちゃ困るな、三島さん。俺はアンタと違って美味しいモンを美味いって

感じて言葉に出来るんだ。人が作る感動を分かち合いたいと思える、だから俺は人間だ」

銀色に輝くフレームの小型の銃に弾を補填しながら、田所は確固とした意志を見せつける。

同じ人外存在である田所の言葉に激昂した三島は全ての個体に意思を疎通させて再び

統一された殺気を各個体が同時に展開し、共鳴し合い、殺意の奔流を生み出す。

『戯れ言をオオオ!!』

「……………戦うしかないわけか。天道、覚悟は出来てるぞ」

「よく言った。それで、アレはちゃんと見つけられたのか？」

「……………いくら俺が元ZECTだからといっても何でも出来るってわけじゃ」

「見つけられたのか？ 是非かで答えろ、どちらでも構わん」

「……………人使いの荒い男だな君も。ちゃんと見つけたさ！ だがアレをどうする気だ？」

『無駄話はそこまでだ!!』

『カブトもろとも、死ぬ田所オ!!』

『貴様は殺して我らが希望の部品に組み込んでやる！ ありがたく思え!』

「くそつ、使い道は後で聞こう！ 来るぞ天道！」

「ああ、行くぞ田所」

二人は小声で何かを確認し合おうとしたものの、抑えようともされない強烈な殺意を浴びせられて瞬時に戦闘準備に移行し、互いが互いの背を守るように居場所を変え

る。
徐々に肥大化していく翅音が近付く中で、田所と天道は同時に深緑の濁流へ対峙した。

時はほんの少し前、十五分ほど過去に遡る。

天道は士とユウスケ、加賀美の三人を連れて情報を提供してくれた仲間の送ってきたデータに従って一路、ZECTのワーム対策兵器生産工場跡地へと向かっていった。

四人はそれぞれが持つ専用のバイクを最大全速にまで到達させて急いでいたのだが、その前に四体のローカストワームとサナギ体のワームが数十体ほど群れを成して現れ、

行く手を遮る壁のように陣形を組んだため、四人はブレーキをかけて足止めを余儀なくされた。

目的地である工場跡地までの道のりは長く、こうしている間にも誘拐された二人の身には

何が起きているのか見当もつかない。仕方なく士と天道は群がるワームを一掃すべく自身の

ベルトを腰に装着して変身するための工程を開始しようとしたが、それを加賀美が止めた。

「天道、お前は行け」

「……………どういうつもりだ？」

「ここは俺が引き受ける。だからお前はすぐにアゲハさんと優未恵ちゃんを助けに行け」

「全員でぶつ潰せばすぐに終わるだろ」

「異世界から来たアンタ達には悪いけど、これは俺と天道の問題なんだ。」

おい天道、今お前が一番しなきゃいけないことくらい分かってるはずだよな？」

「……………ああ」

「それならいい。さあ、早く行け！」

「分かった」

「おいカブト、コイツ一人で本当にやらせる気か？」

不気味な緑色の群れがじわじわと近付いてくる中、天道と加賀美は視線を交錯させる。

たった一瞬の間だったが、幾つもの死線を共に潜り抜けてきた二人にとっては充分過ぎた。

天道はバイクのエンジンを吹かしていつでも飛び出せるように発進準備を整えるが、二人の息の合った行動についていけない士とユウスケはどうすべきかを考えあぐねる。

するとユウスケは何かを決心したように顔を引き締め、乗っていたバイクから降りて既にヘルメットを外して腰にベルトを巻いていた加賀美の横に立ち、自らの決意を告げる。

「俺も一緒に残ります。加賀美さん、一緒に戦いましょう」

「ユウスケ君……………」

「多分ですけど、天道さんの戦いについていけるのは士だけだと思うんです。

だから士、お前は二人でアゲハさん達を助けに行くんだ！」

「ユウスケ、お前……………」

「心配しなくても大丈夫、俺なりの作戦も考えてあるしさー！」

そう言つてユウスケは士にとつて最早見慣れたサムズアップを突き出して微笑む。

天道は依然バイクに乗つたまま動かず、ただ首だけを縦に動かして頷いた。

ユウスケの底抜けた明るさを垣間見た士は軽く笑い、自身もバイクのエンジンを吹かす。

士は知つていた。ユウスケがこうした時はいつでも、任せても大丈夫な時だと。

天道と加賀美、士とユウスケはそれぞれ互いが最も信頼する友の決意を受け取つて

それぞれが今成すべきことをするために、しなければならぬことのために動いた。

四人の行動を観察していたローカストワームが頃合いを見計らつてサナギ体に命令を下し、

深緑色の濁流を一気にけしかけて一人残らず抹殺せんが為に攻撃に転じる。

お互い二人一組となつた士たちは、ほぼ同時に動き出し、未来のために駆け出した。

士と天道の二人は最高速度に達したバイクで軍勢の両脇をかすめるようにすり抜け、

残つた加賀美とユウスケもまた先行した二人の後を追わせないために戦闘を開始する。

「巻き込んで済まないが、一緒に戦おう！ ユウスケ君!!」

「俺の事はユウスケでいいですよ、加賀美さん！」

「なら俺の事も加賀美でいい!! 行くぞユウスケ!!」

「ハイ！」

迫り来る深緑の波を前に、二人の男は息を合わせるように腰のベルトに手を添え、ユウスケは何度繰り返し返したかも知分からぬほどに洗練された動きで変身の工程を終え、加賀美もまた変身に必要なガタツクゼクターを呼び出して右手に握りしめていた。二人は雄叫びを上げながら同時に力み、互いの決意の炎を燃え上がらせて叫ぶ。

「変身!!!!」

【Henshin!】

「キャストオフ!!」

【Cast off! Change Stagbeetle!】

ユウスケは走りながら自身の内部に埋め込まれた『クウガのベルト』を呼び起こし、その中心部である” 霊石 アマダム” の超常的な秘めたる力を開放することで全身

の

細胞を瞬時に分解、再構築し、戦士クウガの完全無欠な肉体へとその姿を変貌させた。一方の加賀美も右手のガタックゼクターをベルトに装填して瞬時に鎧を形成させて、さらにバツクルと化したゼクターの顎部分にあたるレバーを左から右へと引くことで

全身に装着された重厚な鎧を電磁力によつて強制的に分離させ、本来の姿を露わにした。襲い来る怪物の荒波の前に、二人の仮面の戦士が立ち塞がる。

「おっしやああ!!」

「おりやああ!!」

ど
突撃してきた複数のサナギ体の長い鉤爪による攻撃を受け、流し、防いでは避けるな
ど
無力化して隙を見つけ次第パンチやキックなどを叩き込んでけん制する徒手空拳のクウガ。

それに対しキャストオフして軽装備になったガタックはマスクドフォーム時に両肩に装着

していた二門の砲台の下に格納されていた二振りの曲刀、ガタツクカリバーを握りしめて

接近してくるワームを容赦なく斬りつけては蹴り飛ばし、蹴っては斬り捨てるといった

勇猛果敢な戦闘スタイルで四方から攻めてくる全てのワームに対応している。

二人のライダーの烈火の如き闘争心はさほど時間をかけずに全てのサナギ体を打ち倒し、

その亡骸から緑色の炎を噴き上げさせて爆裂させた。しかし、まだ終わったわけではない。

『戦いの神　ガタツク、流石は選ばれし者と言うだけはあるか』

『だがいくら兵器が優れていても、それを使う者が無能では意味は無い!!』

『サナギ体程度を倒したからといって凶に乗るな』

『加賀美　陸の遺産！　ここで死ね!!』

『気をつけるユウスケ、来るぞ!!』

『分かってる、こうすれば問題ない!!　超変身!!』

全ての手下を倒された四体のローカストワーム達が一斉に飛びかかってくる中で、ユウスケはその右手にある物を取り出して腰の左側にあるボタンを押し込んで叫ぶ。彼の呼び声に応じたベルトが彼の肉体を再び変化させ、赤い鎧から緑の鎧に変わった。

唐突に姿を変えたクウガにローカストワーム達は驚いて一旦距離を置いたのだが、それよりも驚愕に目を見開いていたのは隣にいたガタックであった。というのも、ガタックはクウガの姿よりも彼が持っている物に驚いていた。

「おま、それ、俺の拳銃じゃないか!!」

「済みません！ あのお店を出る前に士に言われたことを思い出して自分なりにワームと

戦える方法が無いかと色々と考えたんですけど、やっぱりこれしか思いつかなくて！」「だからって何で俺の拳銃を盗んだんだよ！」

クウガが右手に握りしめていた物。それは、加賀美が警察官として所持していた拳銃。

本職が警察官である加賀美は当然所持しているのだが、一体ユウスケはいつの間に

彼から拳銃を盗み取ったのだろうか。疑問は尽きないが何より分からないのは、その理由。

ガタツクである加賀美は知る由も無い、緑色になったクウガが持つ特殊な能力の事を。

「それは……………まあ見ててください！ 俺の、作戦を!!」

「お前……………この非常時じゃなかったら窃盗容疑で現行犯逮捕だからな」

「それは勘弁してもらいたいですね、俺まだまだやりたいことあるし」

「へえ、何したいんだ？」

「とりあえずは、士や夏海ちゃんたちと世界を巡る旅ですかね!!」

明るく、混沌とした戦場でありながらもなおも底抜けに明るいユウスケから何かを感じ取ったガタツクは彼の持つ可能性に賭けてみようと考え、自身の敵だけを見据える。

姿が変化しただけで何もしてこないクウガへの警戒心を一段階下げて二人を囲むように

陣形を組んだローカストワーム達は今にでも飛びかからんと機会をうかがっている。

迎え撃つようにガタツクとクウガもまた臨戦態勢に入るが、クウガは右手に持つ拳銃を

自身の姿を変えたように変化させてクウガ専用の射撃武器であるペガサスポウを生
成し、

いつでも標的を撃ち抜けるように銃口を深緑の敵に向けて構える。

「さあ、来い!!」

クウガの掛け声を皮切りに、新たな戦いの火蓋は切って落とされた。

先制を取ったのは無論、四体のローカストワーム達の方だった。

四体は同時にクロックアップを発動し、クウガとガタツクのいる時間軸とは異なる速
度の

時間軸に突入し、目では到底負えない速度で移動しながら二人に攻撃を仕掛け始め
る。

一体がガタツクに殴り掛かればもう一体がクウガに掌底を食らわせ、さらに残った二
体が

追い打ちとばかりに同時にドロップキックを浴びせて仮面の戦士を弾き飛ばす。

アスファルトの上を転がったクウガとガタツクは急いで体勢を立て直すものの、その頃には既にローカストワーム達は再びクロックアップの時間軸に突入していた。ガタツクはすぐさまベルトの右腰部分にあるクロックアップ発動装置に手をかけるが、

自分の隣にはクロックアップに対抗出来ないクウガがいることを思い出し、防戦に徹する。

弾き飛ばされてからその場でピクリとも動かなくなったクウガを四体の異形達は確認し、

次なるターゲットを確定して狙いを定め、四体で同時に攻めようとタイミングを合わせる。

『いいか、あの緑のを先に潰すぞ』

『ああ。異世界から来たライダーとやらだからな、油断は出来ん』

『ここで一気に叩く！』

『同時に行けば確実に殺せる、行くぞ！』

四体は四方を囲むようにしながらクロックアップの速度で移動して隙をうかがう。

唯一の懸念材料であったガタツクも、クロックアップは発動せずにクウガを守るべく彼の背後に寄り添って両手の曲刀を一つに連結させて一撃必殺の構えを作っている。しかしクロックアップの世界ならば、一秒の動作が何分後に終わるか分からないほどに時間が凝縮されている。当たれば一撃で倒される攻撃でも、当たらなければ怖くはない。

「そこだッ!!」

だが、彼ら四体は知るはずもなかった。

緑色の鎧をまとったクウガの持つ、人知を超えた知覚領域の存在を。

『がっ！ な、ああ!!』

目標に狙いを定めて接近していたはずの一体が唐突にクロックアップの世界から外れ、

二人の戦士の前に姿を現す。と同時に金色の紋章をその身に浮かび上がらせたかと

思えば

一瞬の閃光が煌めいた直後にそのローカストワームは内側から膨れ上がって爆発四散した。

仲間である同一個体が撃破されたことに驚いた残りの三体は狙っていたクウガの底知れぬ

未知の力に怯えてわずかにその場に留まってしまい、そのわずかな隙をガタツクに狙われた。

「今だ!! うおおおおおッ!!」

『しま——があああッ!!』

【R i d e r C u t t i n g !】

二振りの曲刀を交差させて連結し、あたかもハサミのような形状になった武器を突き出し、

手前で隙を見せて立ち止まっていた一体の胴体を完全に挟み込み、ギリギリと締め上げる。

少しずつ脇腹を抉られていくローカストワームは何とか脱出を試みようとして抵抗した

ものの、

刃に充填されていたタキオン粒子が解放されてエネルギーが放電さながらに火花を散らし、

数秒の抵抗虚しく悲鳴を上げる間もなく肉体を両断されて緑色の炎と共に消滅した。数の利で勝っていたローカストワーム達は四体だった個体を二体にまで減らされ、

相対する仮面の戦士と数的な意味では互角となってしまった。

しかし実際は戦闘能力が未知数の相手に加え、戦いの神と称されるゼクターの資格者の

の
二人を相手取らなければならなくなった時点で軍配がどちらに上がるかは明らかだった。

『クソ！ 戦いの神ガタック、これほどとは……………』

『なんだあのライダーは！ どうやってクロックアップを破った?!』

が
先程までの圧倒的な有利に酔いしれていた二体は状況が瞬時に逆転したことに思考

追いつかずに恐慌状態に陥ってしまったが、クウガ達からすれば絶好のチャンスでし

かない。

勢いづく二人は互いの顔を見合わせて視線を飛ばし、仮面の奥にある相手の真意を読み解き、

二人は同時にそれぞれが放つ必殺の一撃の構えを取って標的を見定め、力を溜め込む。

クウガは再び赤い鎧を身にまもってから両手を開いて腰を落とし、右足だけを前に出した

ウガの
まま左足を後ろに下げる。ベルトの中心に鎮座する霊石アマダムが全身に流れるク

ウガの
封印エネルギーを右足へと集中させ、力を最大限まで溜めた瞬間に迷うことなく混乱する

二体の内の片方に狙いを定め、走る速度をそのままに跳躍し、一回転してから迸るエネルギーを溜め込んだキックを放つ。

ガタツクも同じタイミングでクウガの横に並び、バックルのフルスロットルボタンを
三回

連続で押し込んでリミッターを解除。一度右に倒していたレバーを左側に押し戻してから

一呼吸置き、もう一度右側へと強く押し倒してエネルギーの循環速度を高める。

【One, Two, Three!】

「ライダーキック!!」

【Rider Kick!!】

甲高い電子音声のアナウンスと共にベルトから放出されたタキオン粒子のエネルギーは

全身の装甲やスーツの溝を伝って頭頂部にあるクワガタを模した青い二本角の先端へと

流れていき、そこから折り返してガタツクの右足へと一秒とかならずに収束していった。

右足に力がみなぎるのを感じたガタツクはクウガと全くの同タイミングで駆け出してい

き、
またしても同時に跳躍、そこから右足を水平に近い角度で横方向から薙ぐようにキックを放つ。

「うおおりやあああああああ！！！！」

二人の熱い魂が共鳴し合っているかのように雷光迸り続けながら繰り出された必殺の一撃。

それらは完璧なタイミングで二体のローカストワームに正確に直撃し、標的を爆散させた。

断末魔と爆音を背にして二人は着地し、互いの繰り出した攻撃が成功した事を確認し合う。

立ち上がった二人は向き合い、クウガはサムズアツプをガタックに対してして見せる。

これは納得した行いをした者にのみ許された行為である。その意味は互いに知っているが

対してのガタックはクウガが未だに握りしめているペガサスボウを見つめて手を差し出した。

無言のままに二人は互いの気持ちを理解し合うことが出来た。

たった一度の戦いの中でも二人は心を通わせ合い、通じ合うことを可能にした。

今だからこそガタックにはクウガの気持ち、クウガにはガタックの気持ちが分か

る。

『早く拳銃返せ』『逮捕は本当に勘弁してください』

ユウスケと加賀美が全ての敵と戦闘を終えた頃、士と天道は目的地に到着していた。ZECTが四年前まで活用していた対ワーム用兵器を開発するための工場施設跡地だが、

今やそこには無数のワームとその陰謀が深くドス黒く巣食っている。

二人は共にバイクから降り、一緒に誘拐された二人の救出に向かおうと士が提案したが、

意外にも天道はこの案を却下して単独で動くと言い放って独りでに探索を開始してしまった。

わがままな行動に振り回されるのは御免だとぶつきらぼうに呟いた士は天道と同じく一人で

広い工場跡地の探索に向かうこととなった。

「しかし、無駄に広いな」

士が施設内に潜入してから十分が経過したが、めぼしい物は何もなく探索は難航していた。

勝手にどこかへ行ってしまった天道に対する愚痴を募らせつつも周囲をくまなく捜索して

いた時、不意に屋内の廊下の曲がり角から物音一つ立てずに誰かがやって来た。

現れた相手を見た瞬間、士の表情はいつものすかしたものから好戦的な笑みに変わる。

「よおキックホッパー、で合ってるよな？ この世界じゃ初めましてか」

「……………異世界から来たライダー、お前のことか」

「だろうな。前会った時も面倒な性格してたが、この世界でも変わらずか」

「……………まるで俺の事を知ってるような口ぶりだな」

「知ってるからな。それで？ やるのか？」

「……………そういう命令だからな」

覇気の無い声で囁くように応えたビヤクヤこと矢車はベルトを出して右手を平らにする。

そこにどこからともなくやって来たカマキリ型のゼクターが飛び乗って待機形態になり、

右手にゼクターを掴んだ彼はそのままベルトのジョイントを外してそこに差し込んだ。

「……………変身」

【Henshin!】

【Change Mantis!】

に
カブトやガタツクの物とは少々違ってくぐもったような電子音声がかえたと同時に

ベルトからは六角形のタイルが放出され、それが徐々に矢車の全身を包み込んでいき、

ものの数秒も経たないうちに簡素な装甲に身を包んだ新緑色の仮面の戦士が現れた。変身の一部始終を目撃していた士もまた相手の変身に応じるように懐からバックルを

取り出して腰にかざしてベルトとして機能させて装着し、右手にカードを掴んで叫ぶ。

「変身!!」

【KAMEN RIDE! DECADE!!】

ベルトの機構を動かしてカードを装填して読み込ませ、書かれたデータを反映させる。

瞬く間に士の全身を装甲が覆い尽くし、最後に仮面に九枚の大小様々な長方形が回転しながら突き刺さる事で工程を完了し、モノトーンめいた全身にマゼンタの彩が加わった。

両手についた汚れを払うようにパンパンと鳴らし、デイケイドとなった士は仮面の瞳で

眼前の相手を捉え、動きが出るのを待つて直立のまま待機する。

「時間が無いんだ、とつととかかってこい」

「……………そうだな、早く終わらせよう」

返り血の如きマゼンタで全身を染め上げた破壊の悪魔ことデイケイドと、ワーム同様モスグリーンの装甲に包まれた人類の反逆者ことマデイカ。背後に屍の山しか残さぬ二人が相對し、戦いが始まろうとしていた。

E p, 21 『HELL BROTHER ～届かぬ光～』

そこはもはや、人は誰も寄り付かなくなってしまった無人の工場跡地。

かつては迫り来る脅威に人類が対抗するための兵器が製造されていた土地であったが、

その栄華も活気も今は見る影もなく廃れ、人知れず錆びて崩れゆくのみのもろくろとなつている。

そんな物寂しい土地に普段は聞くことのない無数の音が響き渡っていた。

打撃音、斬撃音、射撃音、倒壊音、粉碎音。

数え上げればキリがないような無数の音が無人の地で鳴り響くはずもなく、

今その場所では人ならざる仮面の戦士たちが己の全てをかけて戦っていたのだ。

「ハアッ!!」

「……………フンッ!」

これで幾度目かになる衝突音が廃墟に木霊し、動き回っていた二人の戦士が切迫し合う。

片方は、全身を色褪せた返り血の如きマゼンタで染め上げた翡翠の双眸を持つ、デイケイド。

もう片方は、悪意と敵意を混ぜ合わせたようなモスグリーンの装甲に身を包む、マデイカ。

二人はそれぞれ互いの獲物を手にして激しく押し合い、両者の間に火花を散らせていた。

実力は拮抗しているらしく、両者とも自身の装甲に無数の傷がつけられているものの致命傷や行動不能なほどの大きな怪我には至っておらず、決定打を与えられずいた。

実際この戦闘において、俊敏性や動作性においては明らかにマデイカの方が上回っているが、

相手に一撃を与えるための攻撃の手数や重さなどは逆にデイケイドが相手より優れている。

当たれば脅威となる攻撃を軽やかに回避し続けるマデイカが一見して戦場で有利な

ように

見えているが、現実には豊富かつ際限無く繰り出されるデイケイドの攻撃に警戒して迂闊に

攻め入ることが出来ない状態に陥らされていたのだった。

このままでは時間の無駄だと確信したデイケイドとマディカは二人同時に駆け出し、先程まで戦っていた屋内から古びて老化した壁や窓を砕きながら屋外へと飛び出した。

ガラガラとコンクリートの壁や砕けた窓ガラスをまき散らしつつ二人は体勢を立て直して、

デイケイドは両手の埃をパンパンと払い落とし、マディカは首を二度ほどゴキゴキと鳴らす。

相手を見据えて距離を保ち、互いの次なる一手を見定めるべくしばらくの間静寂に身を委ねる。

「さ、第二ラウンドと行こうぜ？」

「……………口が減らない奴だ」

「生憎だったな、まだそんだけ余裕があるんだよ」

「……………それが油断にならないといいな」

「なんだ、油断してても勝てるって分かりやすく言わなきゃ分かんないか？」

「……………遊びは終わりだ」

出方をうかがうデイケイドはマデイカを相手に軽口を叩いて挑発を試みようとするも、

常に冷静沈着かつ寡黙なマデイカには効果が無く、逆に戦意を向上させてしまった。

腰を落として臨戦態勢を整えた新緑のライダーは腰にマウントしていた専用のゼクターを

右腕のクロツチ部分に装着し、さらにそこからレバーを引き起こして2本のクロウへ変形させた。

対するデイケイドはライドブツカーから一枚カードを取り出し、バックルへ装填する。

【KAMEN RIDE BLADE】

バックルで読み取られたカードの情報が即座にデイケイドに反映されて姿が変わっ

ていき、

マゼンタカラーの戦士は青いパワードスーツに白金の鎧をまとった剣士、ブレイドへと変貌した。

唐突に外見がまるで変わったデイクイドの姿を見て驚くマディカだったが、彼が異世界から来た

謎の力を持つライダーであるということは知っていたため、動揺するほどまでには至らなかった。

「……………随分と様変わりしたな、手品か？」

「手品とは聞き捨てならないな。コイツは、『変身』だ！」

逆にマディカからの挑発に対し、ブレイドと化したデイクイドもまた応々として答える。

そしてブレイドは答えながらライドブッカーをソードモードへと移行して右手に構えながら、

激しい踏み込みと共に駆け出して眼前のマディカへと迫った。

鋼色の刀身を揺らしながら迫るブレイドを正面から見据え、マディカは右腕のマン

テイスクロウ

という鉤爪状の武装を展開して肉弾戦に応じるが如く突進していき、剣の切先に爪をぶつけた。

金属同士がぶつかり合う甲高い音が両者の間で響き、同時に仮面に火花がわずかな燈を灯す。

しかし空中に散った火花がすぐに消えるのと同じく、両者の膠着もまたすぐに終わりを迎えた。

次いで振り下ろされるライドブッカーソードの切先の軌道を完璧に見切つてほんの半歩だけ

身体を逸らしたマデイカはその場で即座に反転し、クロウを裏拳の要領で薙ぐように繰り出す。

横合いから風切り音をさせて迫る裏拳を、ブレイドはライドブッカーソードの柄で弾いて防ぐ。

裏拳を弾くのと同時に引いた剣先を再びマデイカへと向けて今度は躲されにくい突きを剣士の

力によって特化された速度と重さを載せて繰り出され、その切先が装甲に突き刺さるその瞬間。

【Clock Up】

世界が、止まった。

「……………言つたよな、遊びは終わりだと」

自分以外の何もかもが動くことを拒絶させられた、クロックアップ 静寂と孤独の世界。

その中でごくわずかにしか動かない、というより動いているかすら定かではないほどの速度の

剣をやんわりと眺めながらマデイカはそう呟いて右腕のゼクターのクロウ部分を一度引き戻し、

レバー状に戻して再びそれを押し戻し、ベルトからタキオン粒子をゼクターに収束させる。

バチバチと帯電しているかのような青い雷光の迸りを感じつつマデイカは右腕を肩より上へ

持ち上げて構え、クロウ部分がブレイドの仮面の複眼辺りにくるように調節し、歩き

出す。

「……………三島のザビーを破ったと聞いていたが、過大評価だったか？」

ゆつたりと歩きながら確実に必殺の一撃を叩きこめるように相手の微細な動きを正確に捉えて

腕の位置や角度を調節し、そのまま歩行から走行に、そして疾走へと速度を上げていく。

しかしそのマディカとは対称的に全く変わらない緩慢過ぎる動きで剣を振り下ろすブレイド。

彼我の距離はわずか数mにまで縮まり、あと二秒ほどあれば確実に息の根を止められると

内心でマディカは確信し、自身の攻撃の射程圏内にブレイドを収めた直後、右腕を振るった。

【R i d e r H u n t】

【C l o c k O v e r】

「……………終わりだ、異世界のライダー」

世界の時間が元に戻り始めるのと同時に、マデイカのささやきと爆音が廃墟に鳴り響いた。

「ぐあああ!! あつ、ぐつ!!」

気が付いたら新緑色のライダーに一撃を叩きこまれていた。

ありのままを見てしまえば相手が瞬間移動してブレイドの眼前に迫ったようにも見えたのだが、この現象の正体を知っている彼だけは冷静に現実を分析していた。

（クソ、やっぱりクロックアップを使ってきたか………!）

に
超高压で圧縮したタキオン粒子を一気に展開、周囲に散布することでその範囲内のみ

切
局所的な異なる時間軸を発生させ、自分以外の全てを置き去りにする世界の中から一

抵抗も反撃も受けることなく一方的に敵を蹂躪できる究極の特殊性能、クロックアッ

プ。

それをひとたび使用されれば最後、対抗策を持たない者であれば成す術なく理解すらも

ままならず息絶えていくのだが、デイケイドにはその対抗策がないではなかった。しかしその策を講じようとした直前に相手に先手を打たれてしまい、そのダメージから

ブレイドの姿を維持できなくなり、強制的にライドが解除されてデイケイドに戻ってしまう。

よろよろとおぼつかない足取りで立ち上がりつつも思っていた以上に受けた傷が大きい

らしく、すさまじい激痛によって仮面の下で苦悶に顔を歪ませる。

そこに必殺の一撃「ライダーハント」を浴びせたマディカがゆっくりと歩いて近づく。

「……………大したことは、なかったな」

「くっ……………相変わらず戦闘のセンスだけは一流だな」

「……………いい加減俺を知っているような口ぶりは止める」

「止めるも何も、知ってんだから言ってるんだよ」

「…………お前が俺の何を知っていると?」

ボロボロの状態でなおも交戦の意思を見せるデイケイドにわずかながらも苛立ちを見え隠れさせるマデイカは、見ず知らずのデイケイドについてそう言葉を投げかけてしまった。

自分は何を言っているんだと少し後悔するが、その後悔よりも先にデイケイドが答える。

「お前が誰とも共存できない、哀れな男だつてことぐらいか?」

「ッ!!」

既に自分の与えた一撃で立つのもやっとの状態であるデイケイドにそう言われ、

マデイカは珍しく頭に血が上って眼前の死にぞこないをすぐさま消してやろうと考
え、

右腕にマウントしていたゼクターを腰のベルトのバックルとして変身直後にあつた
位置へ

戻して再び装着し、カマキリの鎌を模したレバーを引き上げてタキオン粒子を加速さ

せる。

目の前でバリバリと空気に悲鳴を上げさせるエネルギーの余波を仮面越しに浴びせられながら

ディケイドはなおも振るえる体に鞭を打って立ち続け、マディカに返答を返し続ける。

「所詮無理だったんだよ。お前みたいに自分の都合しか考えられない奴は、

いつだって一番失いたくないものを一番失いたくない時に失うんだ。そうだろ？」

「……………お前に、何が分かる!？」

「分かるさ。少なくとも

—————

そこまで言っていてディケイドはライドブッカーからカードを二枚取り出し、その内の一枚を

腰のバックルに装填して機構を動かし、情報を読み取らせながら言葉を紡いだ。

「お前には、信頼出来る仲間がない。この世界のカブトや、俺のようにな!!」

【KAMEN RIDE KUGA】

「待たせたな、士!!」

の
デイケイドライバーが読み込んだ情報を反映させた直後、だだっ広い敷地に佇む二人

前に真紅色の生体鎧に身を包んだ赤い瞳の仮面の戦士が飛び込んできた。

さらにデイケイドの姿が突然現れた赤いライダーとほぼ変わらぬ見た目に変化していき、

同じ顔と姿を持つ二人のライダーは共に肩を並べてマデイカに対峙する。

「さあ、こいつで決めるか。頼むぜ、ユウスケ!」

「おうっ! 任せとけ!!」

新緑色のマデイカの目の前に、二人のクウガが並び立つ。

Ep, 22 『PERFECT HARMONY』 ～繋がる

想い〜』

「おりゃああ!!」

「はっ!!」

腰に装着しているベルト以外は全く見分けがつかないほど酷似した姿の二人のクウガは、

眼前で驚きのあまり意識をわずかに逸らして棒立ちしているマディカに同時に殴り掛かる。

「くっ!!」

つい先程まで戦っていたマゼンタカラーの仮面の戦士が突如、横槍を入れてきた真紅

の

戦士と全く同じ姿に変化したことに意識を乱されたマデイカは対応しきれず、防御に専念した。

しかし相手はオールランドタイプとはいえ徒手空拳に優れた肉弾戦特化型のマイティフォーム、

そのクウガが二人同時に攻撃をしたとなれば当然耐えきることなど出来ず、大きく吹き飛ぶ。

腕を交差させて防御をしたが耐え切れずに押し切られたマデイカの姿を見て、二人のクウガは

追撃のチャンスと踏んで互いが互いの呼吸に合わせるかのように息の合った動きで攻撃する。

先にデイケイドがライドしたクウガ（以後はデイケイドと呼称）がマデイカの懐に潜り込んで

左拳のフックを脇腹にくらわせ、ユウスケの変身したクウガ（以後もクウガと呼称）がそこへ

追い打ちをかけるように二つの拳の乱打を浴びせた。

「おおおお、りゃあ!!」

「ぐうあ!!」

二人の同時攻撃を受けてわずかによろけるマディカ。そしてその隙を、二人のクウガは逃さない。

いつでも攻撃できるように臨戦態勢を整えているクウガの横で、デイケイドはライドブツカーを

取り出して開き、そこから一枚のカードを取り出して指でつまみ、ひらひらとクウガに見せる。

デイケイドの取り出したカードの意味を理解したクウガは無言で頷き、マディカを見据ながら

ベルトの左腰部に備わっているボタンを、左手を拳上にした外側で押し込んで叫んだ。

「超変身!!」

「さて、クワガタvsカマキリの第2ラウンドだぜ。立てよ」

【FOAM RIDE KUGA TITAN!】

クウガがボタンを押し込むのとはほぼ同タイミングでデイケイドもカードをバックルに装填し、

機構を動かして情報を読み取り自身へと反映させていた。

よるめいたマデイカが受けたダメージを確認しつつ顔を上げて前を見ると、その先にいたのは

真紅の鎧をまとった二人の戦士ではなく、青と銀の鎧をまとった別々の戦士が立っていた。

「……………また、変わったのか」

「当たり前だ。行くぞユウスケ！」

「おうっ！」

マデイカの呟きにデイケイドが答え、クウガと共にマデイカへ向けて前進し始める。駆け出す二人の戦士を前にしてもマデイカは臆することなく拳を構え、迎撃の態勢をとった。

対するは流水の如き青の龍戦士に超変身したドラゴンフォームのクウガと、フォーム

ライドの

カードを使ってフオームチェンジした地割れの如き紫の重戦士こと、タイタンフオームのクウガ。

異なる特性と戦法を得た二人が同時にマディカへと向かっていき、共に攻撃を繰り返す。

「……………いい気になるな」

しかしマディカは互いの移動速度の違いから迎撃の優先順位を定め、先にドラゴンフオームの

クウガを相手取ることを決めた。強化された脚力を活かしての飛び蹴りを繰り返すクウガの

蹴りを躲して身をひるがえし、マディカは相手の着地の隙を狙って両拳で二度打撃を与える。

怯んだ青のクウガを確認し、今度は向かってくる銀の鎧をまとったタイタンフオームを見据える。

一撃の攻撃力が高いことを読んだマディカは迫り来るデイケイドに向けて逆に接近

戦を挑んだ。

「ほお、面白い」

マデイカが自身に接近した来たことの意味を即座に理解した。デイケイドは首を上向きに逸らし、

挑発的にも取れる上からの目線と態度と共に軽口を叩きつつ応戦の意思を見せる。

言外に「かかってこい」と言っているに等しい。デイケイドの態度にわずかながらの苛立ちを

覚えたマデイカは、バックルのゼクターを右腕部のクロツチに装着し、クローを展開した。

デイケイドがソードモードにしたライドブツカーを、マデイカがマンティスクローを互いに

向け合いながら駆け出すその最中、不意にデイケイドが声を張った。

「今だ、ユウスケ！」

「おう！ とりゃあああ!!」

デイケイドへと猛進するマデイカの背後から雄叫びが聞こえたと同時に、彼の背後に衝撃が奔る。

火花を散らしながら衝撃を受けて前方へと転がっていくマデイカは、自身の背後にいる者を見た。

マデイカがいた場所には、いつの間にか専用武器のドラゴンロッドを手にしたクウガがいた。

ドラゴンロッドを振りかざしたクウガは油断無く地面に転がっているマデイカを捉え続けている。

突然の背後からの奇襲に完全に出し抜かれたマデイカは怒りのボルテージを底上げさせられたが、

その怒りの感情に吞まれたわずかな時間の間に、前方にいたデイケイドは攻撃に移行していた。

「やああ!!」

「ぐおッ!! ぐ、くっ!」

デイケイドの振り抜いたソードブッカーの剣先は、確実にマディカの装甲を切り裂いていた。

元々ホッパー型の装甲を改良して作られたマディカの軽装甲は、大した強度ではなかった上に

攻撃力にも特化しているタイタンフォームのクウガの一撃を受け無事であるはずがない。

先程以上に激しく火花を散らして大きく吹き飛ばされて、さらに深いダメージを負った。

喰らいたくなかった一撃を受けてしまい、立ち上がるのも苦労するほどの傷を蓄積させられた

マディカは、これ以上の攻撃を受ければ確実に負けると結論付け、次の戦法を模索し始める。

しかし、二人のクウガの攻撃はまだ終わってなどいない。

「超変身!!」

【FOAM RIDE KUUGA PEGASUS!】

「第3ラウンド、いくぜ?」

再びクウガは左腰部のボタンを押して超変身し、デイケイドもカードを装填して姿を変えた。

ドラゴンフォームだったクウガはその生体鎧を変化させて銀色の鎧を、タイタンフォームへと

変化を遂げて、デイケイドは次なるフォームライドで緑のペガサスフォームへと変わった。

二人はクウガの固有能力である『モーフィンングパワー』、いわゆる物質変換の力を発動させて

互いが手にしている武器をそれぞれの専用武器へと変化させて、マディカに向けて構える。

フラフラとよろけながら立ち上がってみせたマディカは、彼らに対抗するようにクローを

どこからでもかかってこいと言わんばかりに揺らして挑発した。

「余裕そうだな。いや、慢心か？」

「……………強者の余裕、と言うヤツだ」

「強者、ね。だったら今すぐ敗者にランクダウンさせてやるぜ」
「……………やってみろ」

マデイカからの挑発にデイケイドはさらに挑発を上乗せして返答する。

互いが互いの挑発に乗ってほぼ同時に駆け出し、両者の攻防の幕が切つて落とされた。

颯爽と駆け出したマデイカはクローで頭部を庇い、デイケイドはそこに集中砲火を浴びせる。

手にしたブツカーソードをブツカーガンに変形させ、さらにそこからペガサスボウガンへと能力

によつて姿を変えさせた彼は、トリガーを引きながらひたすら銃口をマデイカへ向け続けた。

絶え間無く射出され続けるペガサスボウガンからの銃撃をマデイカはどうかしのぎ接近し、

射撃特化型のペガサスフォームであれば接近戦に持ち込もうとひたすら前進を止めなかつた。

しかしマデイカが己の拳が届く範囲にデイケイドを捉えたものの、自身の繰り出す拳

も蹴りも

全て難なく受け止めるか回避されるかでダメージらしいダメージを与えられなかった。

と
回し蹴りを織り交ぜた連撃をつなぎ、最後にクロウを装着した右拳の正拳突きで止め

考えていたマデイカの想定を裏切るが如く、デイケイドは全てをいなし、無効化した。

「……………バカな」

「悪いな、この程度でやられるほど俺は柔じゃない」

「……………異世界の、ライダー」

「ああそうだ。俺も、そして——ソイツもな」

「何ッ?! しまつ!!」

「どりやああああ!!」

が
デイケイドとの攻防で意識がそちらに向いていたわずかな時間の隙を狙って、クウガ

マデイカの背後を完全に捉え、タイタンの膂力を活かして全力のパンチを叩き込ん

だ。

が、攻撃力そのものが向上している紫の力での一撃の重さは既に身を以て経験したはず

ほんの一瞬の油断で再び軽装甲のマディカへその圧倒的なダメージが打ち込まれる。前方にいたデイケイドすらも飛び越えていくほどのパワーで殴り飛ばされたマディカは

飛ばされた先にあつた建物の一角にぶち当たって、コンクリートの破片などを辺りにまき散らしながらそのまま建物の中へと消えていった。

「あつ、ヤバ。ちよつと強く殴り過ぎたかな」

「……………オイ、くるぞユウスケ。さっさとフォームチェンジしろ」

「え？ あ、お、おう！」

「……………くるぜ、クロックアップが」

「アレを使われたら厄介だな、よし！ 超変身!!」

「次で一気に畳みかけるぞ、ユウスケ！」

【FOAM RIDE KUGA DRAGON!】

姿が見えなくなったマディカに対する警戒を怠らず、ディケイドはクウガに注意するよう

呼びかけながら再び同じタイミングで異なる姿のクウガへとフォームチェンジを果たす。

ディケイドは青いドラゴンフォームへ、クウガは逆に緑のペガサスフォームへ変化した。

そして二人は互いの持っていた専用武器を投げ渡して交換し、モーフイングパワーを発動させて自分のフォームに特化した専用武器へと変換させて臨戦態勢を整えた。

ドラゴンロッドを一回転させて肩にコツンと乗せたディケイドは、クウガに告げる。

「俺が先に仕掛ける。お前はペガサスの超感覚で奴を撃ち抜け、いいな？」

「へっ、分かっているって！ さっきクロックアップしたワームもこれで倒したんだぜ？」

「相手をワームと同列に考えるな。奴はライダーだ、甘く見るなよ」

「大丈夫だって！ それに、急がなきゃいけないだろ」

「……………それも、そうだったな」

改めてクロックアップ発動を警戒するように言ったデイケイドをクウガは見つめる。クウガが放った言葉の意味を理解したデイケイドは、既に自分たちよりも先にここで戦闘を行っているであろうこの世界のライダーの事を思い出し、戦意を再び高めた。二人のクウガが臨戦態勢を取る中、マデイカは自身がぶつかって崩した建物の一部をどこか虚ろな双眸で見つめ、人の頭ほどの大きさのコンクリート片を足で踏み砕いた。

「先程からいいようにやられている自分に対する怒りも当然あるのだが、それよりも完璧に息の合ったコンビネーションを見せてくる彼らを見て、『ある事』を思い出しかけた自分自身に最も苛立ったことによる行動だった。

(……………相棒)

言葉には出さないが、二人の連携を見てマデイカは失ったかつての義弟を思い出し、ガラにもなく、まして戦闘の最中だと言うのに物思いにふけてしまっていた。そのことに気付き慌てて思考を切り替えて冷静になり、目の前の現実と向き合う。完璧なコンビネーションはかなり厄介だ。敵の腕の高さを認めざるを得ない。しかしそれでも自分が負ける理由にはならないし、負ける事こそ有り得ない。

何故なら自分にはまだ、状況を一手でひっくり返すことのできる力があるからだ。

「……………先に地獄へ、送ってやろう」

誰に言うでもなく細々と呟いたマデイカは、自身のベルトの右腰部のレバーを押す。それと同時にベルトから電子音声の流れ、今行った行動の結果を機械的に伝えた。

〔Clock Up〕

マデイカがクロックアップ発動装置を起動した瞬間、世界に流れる時間が変わった。風に乗って巻き上げられた土埃はその場で動きを止め、崩れ落ちていく壁の破片は空中で固定されているようにピタリと動かなくなった。クロックアップの世界だ。時間の流れを局地的に変動させて相手と自分との間に絶対的なアドバンテージを生み出すこの能力を使えば、相手が未知の強敵だろうと二人がかりだろうと問題無い。

右腕のゼクターから伸びるクローを構えて崩落しつつあった建物から飛び出し、十数メートル先で応戦する用意をしているであろう相手の懐に潜るべく駆け出す。

静止して動かない土埃を突き抜けていったマデイカは、そこで初めて違和感に気付いた。

「……………一人いない？ どこだ?!」

クロックアップを発動している以上、自分よりも早く動ける存在など皆無のはずなのに、なぜ今自分の目の前には銃のような武器を構えた緑色の戦士しかいないのか。

状況が呑み込めずに周囲を見回したマデイカだったが、そこに小さな影が差していた。

一体何の影かと気にも留めようとしなかった彼は、違和感の正体に気付き上を見る。するとマデイカよりもはるか上空に、ロッドを構えた青い戦士が浮いているではないか。

（何故あんなところに?! いや、そうか。あの青色は脚力を強化しているのか!）

忌々しげに上空で無防備な姿を晒している青い戦士を下から見上げてそう思考する。

い。いくら誰よりも早く動ける世界に身を置いても、自身の身体能力が上がる訳ではない。

つまり、発動した者のステータス自体に変化は無く、跳躍力も何ら変化はないのだ。このクロックアップが単純な加速の能力だったのならば話は違っていたのだろうが、違うものは違う。マデイカの脚力では青いクウガのいる場所までは到達できない。

自分の力では、遙か高みには到達できない。自分では、あの場所には届かない。まるで今の自分自身を暗喩しているかの如き状況にますます苛立ちが募る。

日陰者とならざるを得なかった自分はそうなるのが宿命だったとでも言うのか、とマデイカは空中でロッドを構えたまま動けない青のクウガに憎悪の視線を向けた。するとちょうど空に輝く太陽とクウガが重なり合い、マデイカの視界を覆った。

「ぐっ!! くっ……………太陽お、またお前は俺の邪魔をオオ!!」

上空に佇む敵に向けたものよりもさらに強い憎しみの念を込めた視線を、

その背後にある巨大な天体

——燦然と輝く太陽に向けて射貫くよ

うに睨む。

まるでその太陽が自分を栄光の道から突き落としたあの男であるかのように見えて、

マデイカは一瞬で二人に感じていた苛立ちを遥かに超えた怒りを胸の内に沸き起こした。

両方の拳を握り締め、彼は上空で自らを見下す太陽と戦士ふたりのおとこに怨念を向ける。

しかし、彼は知らなかった。

クロックアップの最中に立ち止まるとどうなるのかを。

そして、彼の背後で銃を構えている緑のクウガの超常的な感覚の存在を。

「そこだツ!!」

「があツ!!」

【Clock Over!】

またしても背後からの不意打ちを許してしまったマデイカはそのまま膝を地に付ける。

そしてクロックアップを発動している最中は、自身の装甲の溝を絶え間無く流れて自分自身の防御力と制動性を高めているタキオン粒子を全て動力にしてしまっている。

ために一時的に弱体化してしまい、ダメージの許容値が大幅に下がってしまう。

その影響で限界値を超えた結果、装着者の保護を優先するプログラムが施行されてタキオン粒子を再度身にまとうために強制的にクロックアップ発動を解除された。世界に流れる時間が正常に戻り、上空へと跳躍していたデイケイドも地上へと落下して戻ってきた。そしてそのまま立ち上がろうと踏ん張るマデイカにロッドを回転させながら攻撃を加え、流れるような連撃を叩き込んだ末に打突で吹き飛ばした。

「ぐおッ……………ぐ、ああ」

既に装甲の三割ほどがダメージによつて壊れてしまったマデイカはうめき声をあげる。

そんな相手の姿を見やりながら、デイケイドとクウガは互いの武器を取り換えた。

「ほらよ、士」

「ああ、ほれ」

デイケイドはクウガから渡されたペガサスボウガンを本来のブッカーガンの状態へと戻し、

クウガはディケイドから渡されたドラゴンロッドを元々の長めの鉄筋へと変化させた。

「さて、俺たちも忙しいんでな。コイツが最終ラウンドだ」

「はああ……………はっ!」

【K A M E N R I D E K U U G A!】

肩を並べた二人は互いの変身シークエンスを通して再び同じ赤いクウガとなった。そしてそのままディケイドはライドブツカーから二枚のカードを取り出してみせる。豪華な金色の縁取りのカードを見たクウガはわずかに動揺するも、それよりも早くディケイドがバツクルに二枚の内の片方を装填し、機構を動かして発動させた。ベルトのバツクルに装填されたカードの情報が読み取られ、電子音声で響き渡る。

【FINAL FOAM RIDE KU, KU, KU, KUUGA!】

「うおおああ!! やっぱりコレかああああ!!」

「大人しくしてろ、暴れるな」

「ファイナルフォームライド クウガ」を発動させた直後、クウガの体が宙に浮き、そのまま足や胴体がグルグルと回転したり展開したりして、その姿が変わった。超古代の戦士クウガに厚き忠を尽くす叡知の結晶、ゴウラムへと変貌を遂げた。外観は完全に巨大なクワガタのゴウラムを従え、クウガにライドしたデイケイドはさらにもう一枚の金色のカードをバックルに装填し、その効果を発動させる。

〔FINAL ATTACK RIDE KU, KU, KU, KUGA!〕

ファイナルアタック
最終攻撃の名の通り、デイケイドの持つクウガの必殺技を呼び起こすカードを発動させて

デイケイドは腰を落とし両手をその辺りへ下げつつ、右足を前方へと突き出して構えを取る。

途端にクウガが体内に宿す封印の力が右足へと収束していき、バリバリと火花を散らす。

〔俺に任せろ、士!〕

力を蓄えているデイケイドにゴウラムと化したクウガが語り掛け、行動を始める。ゴウラムは下を向いて自身を回転させながら掘削機のように地面に穴を掘り出し、そのまま自身を通れる大きさへどんどん穴を拡大させ、その姿を地中へ消した。しかしその数秒後にダメージを負ってふらついていたマデイカの足元に潜り込み、アスファルトの地面を容易くぶち破ってそのままにいた敵を挟み込んで拘束。その状態のまま地面から飛び出して建物に三回ほど突っ込んでから旋回した。

【今だー！　いくぞ士あ!!】

「はっー!」

挟み込まれて壁に三回もぶつけられながらも抵抗を試みるマデイカを落とさぬように

しっかりと拘束しながら、ゴウラムは力を蓄えるデイケイドへと急接近する。ゴウラムの、クウガの言葉を聞き入れたデイケイドは猛然と駆け出し始めていき、数メートルほどダッシュした後大きく跳躍し一回転、右足を素早く突き出した。

「やああああああ!!」

【おりやあああああ!!】

跳躍してクウガの必殺技、マイティキックを繰り出したデイケイドにゴウラムが突貫していき、『デイケイドアサルト』ならぬ『クウガアサルト』が直撃する。

逃げる事も防ぐことも出来ずにまともに喰らったマデイカは断末魔一つあげる暇すら

与えられずに両者の間で全てのダメージを受け切り、大爆発に飲み込まれた。背後に爆炎をたたえながら、二人の戦士が同時に地面へと着地する。

ゴウラムはその姿を空中で可変させながら元のクウガに戻り、サムズアップをしてみせ、

デイケイドはライドしていたクウガの姿が歪み、本来のマゼンタの装甲に覆われた。両手をパンパンと音を立てながら打ち払い、デイケイドは悠然と背後を振り返る。

その視線の先には限界値を超えたダメージによって変身を解除されたマデイカ、もとい装着者の矢車がうつ伏せになって身体を痙攣させながら倒れていた。

「……………」

無言のままに矢車を見つめる士だったが、その行動はすぐに中断させられる。

「よし！ 士、早く優未恵ちゃんを助けにいこう!!」

「ん？ ああ、そうだな」

ここに来た本来の目的を変身を解除したクウガ、ユウスケに諭される。

その言葉に了解して同じく変身を解除したデイケイド、士は二人で周囲を見回す。

すると突然轟音と共に巨大な建物の内の一つから爆発の炎が噴き上がり、そこで戦闘が

行われていることを二人に告げた。ユウスケと士は迷うことなくその建物を目指し駆け出す。

「……………」

二人の戦士が駆けていったその後ろ姿を、倒れていた矢車はただじっと見つめていた。

その眼には先程のような強い憎しみも怒りも無く、ただただ空虚な眼差しでしか

かった。

自身の肉体を駆け巡る痛みに顔を歪めながらも、彼はその視線を途絶えさせずにいた。

しかし、突然彼の見つめる視線の前に、あるものが訪れた。

唐突に現れたソレに気付いた矢車は、ソレが何であるかを思い出して驚愕する。

「おま、えは……………」

倒れ伏した矢車の前で、新緑色のバツタ型ゼクターが飛び跳ねていた。

ユウスケと士がマデイカを撃破した同時刻、工場内にて。
無数に蠢く深緑色を前に、二人の男が果敢に立ち向かっていた。

「……………ふん」

「くっ！」

鮮やかな深紅の鎧をまとっている蒼眸の戦士と、スーツを着て銃を撃つ男。

この二人がこの工場内で群体を成すローカストワームと対峙してから既に、二十分以上の時間が経過していたのだが、当の二人は知る由もなかった。しかし疲労と集中力の低下は実感させられているようで、戦士も男も互いの攻撃が徐々に相手に対して効果が薄れてきていることを悟り始めた。

「くつ、もう残弾が……………どうするんだ、天道!!」

オールバックでスーツを着こなす男、田所が銃を撃ちながら戦士に問う。蒼い双眸を暗い工場内で輝かせながら徒手空拳で戦い続けている戦士、天道は田所からの問いかけにローカストワームの一体に拳を打ち込んでから答えた。

「……………そろそろか。アレを使え、田所」

「使えつたつて、そんな急に言われても、なあ!」

それにアレを見つけたはいいが、結局使えるかどうかまでは試してないぞ!!」

「俺を信じろ、お前なら必ず使える」

「何故そう、言いきれぬ!!」

「俺が……………選ばれし者だからだ」

「……………ふつ、その俺様節を聞くのも何時振りだったか」

天道からの自信に満ち満ちた返答を聞いた田所は、その数年ぶりに聞く独特な言い回しを懐かしみながら左手をスーツの内側に忍ばせ、ある物を取り出した。田所が取り出したものを見て近くにいた数体のローカストワームが声を荒げる。

『バカな!! それ……………何故貴様が持っている?!!』

『ソレの資格者はもう死んでいる!! 何故だ、答えろ田所!!』

明らかに狼狽している数体のローカストワームに気付き、他の同一個体も同じく田所の持つものを見て驚愕に息を飲み、同時に田所への警戒度を一気に高めた。ほんのわずかな間に場の空気を完全に変えた田所は手にしたものがどうか正しく作動してくれるようにと心の内で願いつつ、それをスーツで上手く見えなくしていた独特な形状のベルトのバックル部分に装填し、ゆっくりと瞳を閉じつつ声高に叫んだ。

「変身!!」

【Change Punch Hopper!】

天道のカブトゼクターや加賀美のガタツクゼクターよりもわずかに高い電子音声が高薄明りとざわめく深緑色の異形たちの中で響き渡り、その存在をより強調させる。

田所の身体が瞬時に六角形のタイルが覆わていき、五秒も経たぬうちにその姿を

先程のスーツ姿とはかけ離れた、軽微かつ鋭角的な装甲をまとった戦士へと変貌させた。

バツタを後ろから見たようなフオルムの鋭角的な頭部に、両側頭部の脚型アンテナ。

カブトやガタツクらとは明らかに異なる形状のマスクで田所の顔は完全に覆われる。

胴体の鎧には巨大なXを思わせるラインが奔り、両肩部には刺々しい防具が装着され、

彼の右腕にはまさしくバツタの後ろ脚の如き巨大なアンカージャッキが備わっている。

かつてはこの世の何者からも否定され、利用され、捨てられた哀れな弱者だったこの姿。

しかし今は違う。拳を構える角度、脚の開き具合、立ち振る舞いと全てが別人となっ

た。

だが彼の、人間の醜い部分を凝縮して濁らせたような、白濁色の双眸は変わらない。光を奪われて歪み淀んだその瞳は、己以外の全てを汚そうとするかのように怪しく輝く。

地獄の底を歩み続ける日陰者の弟、『仮面ライダーパンチホッパー』が再び甦った。

Ep, 23 『NEXT LEVEL ～光差す道へ～』

不気味な深緑色の体表を持つローカストワームの群体の中に、新たな戦士が現れた。

『仮面ライダーパンチホッパー』

かつてネイティブが地球を侵略しようとして裏で計画を進行していた四年ほど前にワ
ム、

及びネイティブ対策用として人類が密かに製造していた量産型ライダーの基盤であ
り、

矢車と共に地獄の底を歩み続けて最後には死を選んだ哀しい男、影山 瞬の変身した
姿だった。

影山が兄と慕った矢車が変身する『仮面ライダーキックホッパー』に瓜二つの外見で、
違う個所を挙げるならば、白く濁った双眸と右腕部に装着された脚型アンカージャッ
キの

二点ほどしかない。それほどまでに形状が似通った仮面ライダーの片割れが、今蘇っ

た。

「おっし！ やればなんとかなるもんだな！」

世界の全てを憎んだ影山は既に亡く、今変身しているのは彼と面識のあった田所だった。

本来ならばゼクターに選ばれた者以外には変身することはできないはずなのだが、それは人間に限って言えばの話である。そして田所は、人間ではなくネイティブの生き残り。

そして本来マスクドライダーシステムを設計したのは彼と同種族のネイティブに他ならない。

だからこそ彼ならば人類に残された対抗手段を正しく扱えるはずだと天道は考えて、田所にかなり前からホップパーゼクターの回収を命じていたのだった。

目論見通りの結果を見て、カプトに変身して戦っている天道が田所に語り掛けた。

「やはり、俺は正しい」

「ああ、そうだな！ 少なくとも天道、君が間違ったところは見たことが無い」

「まあな。それより、くるぞ」

「分かってる！」

田所が天道の主張を全面肯定したところで、互いが背を向け合つて蠢く異形たちの中に陣取る。

彼らの視界には見渡す限りの同じ姿をした深緑色の怪物がひしめき合っていて、逃げ場は無い。

二人はそれぞれ自分の目の届く範囲の敵を攻撃するために、急所となる背中を互いに預けたのだ。

もはや一種の合唱のようにも聞こえてくる羽音と外殻の擦れる音の中で、二人は静まり返る。

そしてどちらかが動き出した瞬間に均衡が崩れて深緑色の群体が雪崩れ込むであろうと悟り、

うかつに手が出せずに膠着状態に陥りかけたその時、どこからか風を切る音が聞こえてきた。

徐々に近づいてくる音にローカストワーム達も気付き、周囲を見回しだした直後。

『ぐおおお!!』

カブトとパンチホッパーを取り囲んでいた大勢の群体の一番外周側に居た一個体が、うめき声に近い悲鳴をあげてよろよろとよろめき、しばらくして音を立ててその場に崩れた。

何事かとローカストワーム達が倒れた同一個体の死骸に目を向けると、その背には一振りの剣が。

「はあッ!!」

『何ッ!! うぐあああ!!』

深緑色の異形達が戦慄する中、明らかに注意を逸らされたことに気付かず新たにもう一体が

悲鳴をあげてドサリと崩れ落ち、最初に倒れた個体とほぼ同タイミングで緑の炎を噴き上げた。

不意打ちのようにして二体の同胞を失ったローカストワーム達は、新たな敵の姿を捉える。

『貴様は、ガタツク!』

『何故だ?!』 貴様は我らが足止めしていたはず!』

異形達の歪な複眼が捉えたのは、この深緑色の地獄に似つかわしくない群青の戦神の雄姿。

右手にクワガタの顎を模したように湾曲したガタツクカリバーを一振り携えて緑色の炎を

鎧に映し出すその姿はまさしく、戦の神”そのものであった。

ガタツクはそこから雄叫びをあげながら剣戟と蹴りで無数の群体を相手取りつつ進み、

先ほど自分が投擲したもう一振りのガタツクカリバーを左手で掴んで二本同時に振り抜く。

本来の二刀流スタイルを取り戻した彼の乱舞を受け、周囲に居た異形は緑の炎と化して散った。

突然の襲撃による混乱もあつたのだが、ローカストワーム達はガタツクの強さに息を呑む。

そうしている内にカブトとパンチホッパーを包围する陣形が崩れ始め、さらに大きな隙を生む。

そしてその隙を、またしても唐突な奇襲によつて突かれることとなった。

【ATTACK RIDE SLASH!】

「やあああああ!!」

軽快な電子音声が響き渡った直後、ローカストワームの包围網から緑色の火の手が上がる。

ガタツクによる攻撃で聞いたのと同じような断末魔が群体から絶え間なく上がりだし、

その場の誰もが悲鳴の発生源の方へと視線を向け、そこに立つマゼンタの戦士を視認した。

「……………よくここまで来られたな」

「やっと見つけたぜ、カブト」

ガタツクと同じように緑の火の粉が噴き上がる中で剣を手にして立つデイケイドの姿を見て、

カブトはそれが誰なのかを察して言葉を掛け、デイケイドもまた同様に声を掛けた。二人の視線が緑の炎と深緑の異形達の間で重なり合い、無言のままに互いの健闘を労う。

そんな二人の再開を余所に、ガタツクはカブトの隣にいるパンチホッパーの存在に驚いていた。

「その姿……まさか、影山さん!! 生きてたんですか!!」

「落ち着け! 加賀美………俺だよ」

「えっ………その声、まさか田所さん!!」

「ああ。久しぶりだな、加賀美」

「田所さん!!」

かつての上司であり恩師でもある田所が目の前に居ることに、ガタツクは声を震わせる。

「今まで一体どこに……急に連絡取れなくなったから、俺、心配で！」

「分かってる。心配するな、俺はこの通りだ」

「田所さん……良かったあ」

「安心するのは早いぞ、加賀美。まずはここを生きて切り抜けるのが先だ！」

「は、はい!!」

パンチホッパーに変身している田所に諭され、ガタツクである加賀美も気合を入れ直す。

そんな二人を遠巻きから見つめていたデイケイドはそのまま歩いてカブトの横に並ぶ。

そうしてカブト、デイケイド、パンチホッパー、ガタツクの四人の戦士が堂々と立ち並んだ

直後に、廃工場の地下であるこの場所の壁を突き破って巨大なクワガタが入り込んできた。

その場の全員の頭上を旋回した後で、それはデイケイドの真横に人型に変形しながら着地する。

「遅かったな」

「悪い悪い、待たせたな！」

デイケイドの横に降り立ったのは、ゴウラムから元の真紅の鎧をまとった戦士、クウガだった。

パンチホッパーが呆然としている中で、異形達の目の前に五人もの仮面の戦士が揃った。

次々とやって来る仮面の戦士に驚いたローカストワームは、その事実には驚愕する。

まず手始めに自分たちの同胞をサナギ体のワームと共に送り出し、先兵として足止めをさせた。

もちろんそれを突破することは予測していたため、次に矢車を呼び出して対抗戦力である

マデイカをぶつけることで戦力の消耗を量ったつもりでいた。しかし、現状は全く異なる。

自分たちの前には仮面の戦士が五人。誰一人欠けることなく、消耗した素振りも無く並び立つ。

どこで計画が狂ったのかと必死に考え起こすが原因が見当たらずに焦りばかりが

募っていく。

焦燥に駆られた群体の中の一体が、わずかな声の震えをごまかすように声を荒げる。

『馬鹿な!! 我らが同胞は……矢車は何をやっている!!』

『貴様ら! 異世界のライダー、貴様らが何かしたのか?!』

「ああ、あのカマキリ野郎ならぐつすりお昼寝中だ」

『な………そんな、馬鹿な事が』

何でもないように軽い口調で答えたデイケイドに、信じられないものを見る視線を投げかける。

しかし実際に自分たちの目の前に確かに奴らはいる。それは紛うことない事実であり、真実だ。

自分たちの人間を超えた頭脳を以てしても計算できない力を秘めているのか、と異形は恐れる。

幾度となく見てきたカブト達とは明らかに違うタイプの装甲に覆われた二人の仮面の戦士、

ローカストワーム達はその鎧の赤が鮮血に、マゼンタが褪せた返り血に見えてくるよ

うだった。

合流した五人の戦士は互いの無事を確認し合い、さらにクウガは本来の目的の達成を尋ねる。

「天道さん！ 優未恵ちゃんは、アゲハさんは無事でしたか?！」

「……………問題無い。二人はもう逃がした」

「そうですか！ はあ、良かった……………」

淡々としながらもキチンと身の安全を確保したと告げるカプトの前で、クウガは安堵した。

まるで自分の事のように安心してゐる彼を横目で見やりつつ、カプトは小さく呟く。

「本当に加賀美の生き写しのようにおかしな奴だな」

「俺もそう思うぜ」

カプトの小言をすぐ近くに居たデイケイドは聞いており、その言葉に同意を示す。

自分の言葉に返事が返ってくるとは思ってなかったのか、カプトはデイケイドの方を

向く。

その蒼い双眸の先には、自分たちよりも二歩ほど前に歩み出しているマゼンタの戦士の

後ろ姿が映し出されていた。そしてデイケイドはカブト達から四歩ほど手前で立ち止まる。

前に出た途端にローカストワーム達からの殺気と注目の的となったデイケイドは、彼らの放つ

不協和音に近い雑な羽音も外殻が擦れる音も何もかもを無視して、唐突に語り出した。

「世界つてのは、何を中心に回ってるか知ってるか？」

『……………何？』

いきなり投げかけられた疑問。その意味と意図が分からずに異形達は静まり返る。

そんな彼らを気にすることなく、デイケイドは右手の人差し指を立てつつ話を続ける。

「この大きく広い世界は、一つの命を中心に回っている。

その命は他のどんな命とも変わらない、ごく普通のありふれた命だ」

『何の話だ!!』

「だが、そんなたった一つの命でも、自分を中心に世界を回すことができる!」

それは、自分が守りたいものの為に、世界を敵に回すことができるってことだ!!」

「……………」

デイケイドは立てた人差し指をゆつくりと持ち上げ、自身の頭上に掲げて語る。

それはさながら、その指で世界という巨大な命を回しているかのようにも見えた。

堂々たる振る舞いと言葉に仮面の戦士たちは息を呑むが、ただ一人だけは冷静に彼を見ていた。

今デイケイドがとっているポーズをよく知る男、カブトはその蒼い双眸で見つめ続けた。

「自分が守りたいと思ったものが世界の敵なら、自分が世界そのものを敵に回せる!」

そうして世界と戦い、守りたいものが平和に暮らせる新しい世界を作り上げる!

自分がその世界の中心であり続ける限り、守りたいものを脅かす存在は無くなる

!!

『ええい貴様！ さつきから何の話をしている?!』

「アメンボから人間、人間として生きようとする地球の外の生物であっても守り通す！

この世界の中心であり続けようとしている男は、そういう男だ!!」

話の意味が分からずに痺れを切らし始めたローカストワーム達が敵意を剥き出しにして、

いつでも戦闘を始められるように臨戦態勢を取り始めるが、デイケイドはまるで動かない。

マゼンタの戦士が語っている言葉の意味を、彼の後ろに居る仮面の戦士たちは理解していた。

特にパンチホッパー、田所とガタック、加賀美の二人はその生き様を貫く男の事を知っていた。

だからこそデイケイドの口上の中でも静寂を守っているカブトを見つめ、そして確信する。

デイケイドが語る男の正体と、その目的を。彼が語る戦士の生き様を、その真意を。

仮面の戦士たちの思いが一つになる中、デイケイドが声を大にしてさらに続ける。

「今この世界の中心にいるべきなのは、全ての命を導くことができるこの男^{カブト}だけだ！

お前らみたいな自分と同じ姿形をしてなきや仲間意識も湧かないようなヤツらが、

この世界の中心になんてなれるはずがない！　そして、なる必要も、無い！！」

『黙って聞いていれば貴様！！　凶に乗るなア！！』

『一体貴様は、貴様は何なんだ？！』

とうとう痺れを切らした深緑の異形が怒りを露にし、デイケイドに何者かと問う。

デイケイドはその言葉を待つていたとでも言わんばかりに手を腰に当て、堂々と名乗った。

「通りすがりの仮面ライダーだ！　覚えておけ！！」

デイケイドがそう名乗った瞬間、彼の腰にあるライドブツカーからエンジンを吹かすような

音が響いてきて、そこから見慣れた三枚のカードが射出され、デイケイドの右手に収

まった。

手にしたカードをライトグリーン双眸が見つめ、満足げに頷くと二枚を左手に持ち替えて

残った一枚をバックルの機構を動かして装填し、その情報を読み込んで自身に反映させた。

【KAMEN RIDE KABUTO!】

ディケイドのベルトのバックルから電子音声が発したのと同時に、彼の姿が変化し始める。

マゼンタカラーの装甲が、徐々に形状と色彩も併せて全く別のものへと書き換えられていく。

天を貫くように直立する、カブトムシを彷彿とさせる形状の赤い角。

その角が蒼いコンパウンドアイを二つに裂き、複眼状の双眸へと変える。

カブトムシの強固な外殻を連想させる独特なフォルムをした紅蓮の装甲をまとい、全身を太めのラインが刻まれたような外観の黒いスーツが包み込み、肉体を覆う。

数秒後に変身を完了したディケイドの姿は、彼のすぐ後ろで立つカブトと同じもの

だった。

『『何だとツ！！！！』』

目の前でマゼンタの戦士がカブトに変化していく様を見せられた深緑の異形達は驚愕し、

同一個体の全てが意思を共通させて同じ言葉を口に出す。

だが驚愕したのはローカストワームだけではない。ライダーたちも同様だった。

パンチホッパーとガタツクは眼前にカブトが二人もいる現実に目を白黒させて驚いた。

しかしそんな驚愕の渦中にいるデイケイドも、カブトも全く動じずにいる。

そのままカブトにライドしたデイケイドは左手に移した二枚のカードの内、一枚を再び

右手に戻してバツクルに装填した。先ほどのものとは違う、金色で縁取られたカードを。

〔FINAL FOAM RIDE KA, KA, KA, KABUTO!〕

再びディケイドのバツクルから電子音が鳴り響き、金色のバーコードが浮き上がる。カードを発動させ終えたディケイドは向きを変えてカブトの後ろへと回り込み、自分の後ろへ来たことに戸惑いと警戒心を隠せずにいるその背中に両手を差し込んだ。

「んっ……………?」

「じつとしてろ。ちよつとくすぐったいだらうけどな」

今まで感じた事の無い感覚にカブトが変な声をあげそうになるが堪えようとする。

その間もディケイドは彼の背中に手を差し込み続け、少し経ってから左手を頭の方へ、

右手を腰の方へと開くようにして引き抜き、両手で埃を払うような動作をして見せた。

そんなディケイドの目の前で、カブトの姿がとんでもない変貌を遂げていた。

カブトの背中が腰より少し上の辺りから前の方へと真つ二つに割れていき、

下半身は倒れてくる上半身との間に格納されるように折りたたまれ始め、

背中からカブトが腰に装着していたゼクターのレバーを巨大化させたものが突き出た。

その場にいる者の視線を釘付けにしながら、五秒足らずでカブトの全身は変化し終える。

カブトが変化したのは、彼が変身するために使用するのと同じ『カブトゼクター』。しかし実際のもので違う点が一つ。それは、とてつもなく巨大になっていたのだ。

「天道おおお!! お前、天道に何を!!」

「落ち着いてください加賀美さん!」

「落ち着いてなんていられるか!! 天道お! 大丈夫かああ!!」

「落ち着け加賀美! 俺にも何が何だか分からんが、ひとまず問題は無さそうだ!」

「そうですよ! 加賀美さん落ち着いて!」

あまりに急過ぎる展開にガタツクが声を荒げてディケイドに突っかかろうとする。

それをパンチホッパーとクウガが両脇から抱き着いて必死になだめようとするもの

の、

既に頭に血が上り切ってしまっているガタツクの耳には届かないようだった。何とか押さえようとする二人を横目に、ディケイドは肩をすくめる。

【加賀美、俺なら何ともない。だから静かにしろ】

「て、天道！　天道なんだな！」

【同じことを何度も言わせるな。それにお前は、目の前の状況に集中しろ】

「……………そうか。お前がそうしろって言うんだから、そうした方が正しいんだろうな」

【当然だ。俺は常に、正しい】

「ああ、良く知ってるよ。おっしやあああ!!」

【……………面白い奴だな、まったく】

荒ぶるガタツクをなだめるために、巨大カブトゼクターとなったカブトが語り掛ける。

聞きなれた声を聴いたガタツクは冷静さを取り戻し、カブトの指示通りに剣を構えた。

そんな長年の戦友の姿を見やりつつ、カブトは今度こそ誰にも聞かれない声量で呟い

た。

『殺せ!!』

『先にヤツを殺せ! 姿が変わるあのライダーからだ!!』

『もう一度取り囲め!! 今度こそコイツらを生かしては帰さん!!』

仮面の戦士たちが動きを見せたことで、深緑の群体も完全に戦闘行動へと移行し始めた。

ほぼ全個体が背中のバツタに酷似した形状の翅を振動させて低空に浮き上がり出して、

そのまま固まって陣を組んでいる五人のライダーたちを取り囲むように動いた。

次第に視界が異形達によって埋め尽くされていく嫌悪感に、仮面の下で苦い顔をするパンチホッパーとクウガだったが、それでも戦士たちは既に己に覚悟を決めていた。

【……………ディケイド】

「ああ、分かつてる。次で決めるぜ」

カブトにライドしているディケイドに、巨大なカブトゼクターが語り掛ける。

その声に応じたディケイドは左手に持つ最後の一枚もバツクルへと装填し、発動させた。

〔FINAL ATTACK RIDE KA, KA, KA, KABUTO!〕

ファイナルアタック
最終攻撃を予告する電子音声がバツクルから響き、カブトの戦士の紋章が浮かび上がる。

そのアナウンスに導かれるようにして巨大カブトゼクターが動き出し、分厚い壁を突き抜けた。

突然カブトゼクターがいなくなったことに戸惑いながらも、深緑の異形達は戦士に飛びかかる。

全方位からローカストワームが放つ同時攻撃。それは中心部にいる四人の戦士を葬り去る。

はずだった。

突如彼らが飛びかかっていった後方の地下から、とてつもない衝撃が襲い掛かって来た。

その衝撃の余波や同時に吹き飛んできた瓦礫片などが、無防備な姿を晒す深緑の群体にも

降りかかり、大きく体勢を崩させた。

何が起こったのかを知るためにローカストワームは歪な複眼を自らの後方へ向ける。するとそこにいたのは、地面を掘削して工場の地下から這い出てきたカプトゼクターだった。

奴は一度工場の外へ飛び出してそこから地下へと潜行。そこから弧を描くように突き進んで

自分たちの背後へと回って地面を突き上げることで邪魔をしたのだと全個体が推測した。

しかしそのわずかな推考の時間が、彼らに必殺の暇いとまを与えることになってしまった。

【Rider Jump!】

【One, Two, Three!】

「はああ……………はっ!」

飛び散った瓦礫片が一つたりとも当たっていないライダーたちが、それぞれ必殺の構えを取る。

パンチホッパーはマウントしたゼクターのバッタの脚を模したレバーを左へ押し倒し、

超圧縮されたタキオン粒子を三回ほど連続で右足へと収束させて脚力を引き上げる。

ガタツクはゼクターのフルスロットルボタンを三回連続で押してリミッターを解除して、

クワガタが閉ざした顎のようになっていたレバーを左へ倒し、粒子を高速収束させる。

そしてクワガは腰を落としてから両手を開き、落とした腰と同じ場所までその手を下げて

右足へと霊石アマダムが生成する超古代の封印エネルギーを流し込み、解放の時を待つ。

そしてカブトゼクターがローカストワームをまとめて吹き飛ばした瞬間、

デイケイドは彼らに背を向けた状態で光が差し込む工場の天井を見つめていた。

ほんのわずかな時間がまるでクロックアップの時間軸のようにゆっくりと動き、

それはライダーたちが己の渾身の一撃を叩き込む寸前になった瞬間、元に戻った。

「ライダーパンチ!!」

【Rider Punch!】

「ライダーキック!!」

【Rider Kick!】

「おりやああああ!!」

三人の戦士が高らかに叫び、一つの拳と二つの蹴りが深緑の群体へと突き出された。バチバチと放電するようなエネルギーの余波が周囲の空間に悲鳴を上げさせながらそれぞれの標的へと突き刺さり、内包された力によって対象を完全に粉砕する。

パンチホッパーは超強化された脚力で崩れかけの天井すれすれまで飛び上がったから

右に倒したレバーを右へ引き戻しつつ右拳を引き、敵の密集地へ向けて振り下ろした。

即座に右腕に装着されたアンカージャッキが作動し、追加の衝撃波が万物を穿つ。ガタツクは左へ倒したレバーを再び右に押し戻してタキオン粒子を圧縮開放して

その場で跳躍。右足を鞭のようにしならせて横薙ぎに放つキックで敵を爆散させる。クウガは封印エネルギーを溜めた右足をそのまま前方へ突き出し、力を解放する。いずれの攻撃も全て深緑の異形達に着弾し、その全てを例外なく緑の炎へと変えた。無数ほどにいた同一個体のほとんどを失い、その光景を目の当たりにした残りのローカストワーム数体は自分たちの威厳も何もかもをかなぐり捨て逃走を図ろうとする。

しかしそんな彼らを嘲笑うかのように、巨大カプトゼクターが残った異形達をまとめてその角で突き飛ばした。そしてその先に待つのは、虚空を見上げた一人の戦士。

『ツ!! 死ぬ、異世界のライダー!!』

突き飛ばされた勢いを逆に利用して、背を向けたまま天井を見上げるディケイドに攻撃を加えようとするローカストワーム。同じく突き飛ばされた同胞もそれに続く。四体ほど残っていた彼らはバラバラのタイミングながらも、多方向からの攻撃を加える

ことができればディケイドを倒せるはずだと能力で意思疎通させ、連携してかかっ

た。

そのまま吹き飛ばされて二秒足らず。あと数センチで敵の背に致命的な一撃を与えられる。

そう確信して疑わずにいた彼らだったが、この時この異形達はあることを忘れていた。

それは――
この世界のカプトが最も多用した、ライダーキック回し蹴りの構え。

醜い深緑色の異形と化した三島がその事に気付いた時には、もう全てが遅かった。

それまで背後を見せていたカプトの姿をしたデイケイド、その左足が向きを変えた。

そこから先はまさに神速。左足の向きを変えるのと同時に体もグルリと向きを変え、飛びかかってくる四体の同一個体全員をその視界、及び攻撃の射程範囲内に捉える。

体の向きを変えた勢いを殺さずに右足を流れるような動作で振り上げ、空を薙ぐ。

彼が繰り出したのは、一点の曇りも無い完璧な回し蹴りだった。

「やああああああ!!」

カブトにライドした影響で超圧縮されたタキオン粒子をまとわせてのライダーキックは、

飛来してくる四体の異形の肉体を完璧に捉えて放たれ、その全てに着弾させていた。必殺の一撃をその身に受けたローカストワームは断末魔すら上げる間もなく爆散し、ワーム特有の緑色の炎を噴き上げて塵も残さずこの世から抹消された。

「……………」

ライダーキックを炸裂させたデイケイドはすぐに元のマゼンタカラーの姿に戻り、旋回していた巨大カブトゼクターも彼の横に舞い降りて元のカブトへと戻った。

デイケイドはいつものように付着した埃を両手で払うようにパンパンと打ち鳴らし、カブトは左手を腰に据えて右手の人差し指を伸ばしつつ頭上に掲げ、虚空を見上げる。

こうして彼らの、生きとし生ける全生命を守る男の戦いは、終わった。

デイケイド達が無数のローカストワームとの死闘を終えてから、数分。

『はあ……………はあ……………クソ!!』

巨大なカプトゼクターになったカプトが地下から突き上げた勢いで生じた瓦礫片に、運良く埋もれてライダーたちの攻撃から辛くも生き延びたローカストワームがいた。彼はその場で息を殺してライダーが帰って行くのを待ってから動き出したのだ。瓦礫をどかしつつ立ち上がり、自分の肉体が受けたダメージを再確認する。

『……………左腕と左翅が二枚ともやられたか、クソ!!』

彼が忌々し気に吐き捨てた通り、深緑の異形の左腕は肘から先が千切れて無くなっていて、

背部にあるはずの翅も左側は見るも無残な状態になってしまっていた。

こんな身体にさせられた原因を頭に思い浮かべつつ、自分が今すべきことを考える。

『とにかくまずは、力を取り戻すことが先決か。肉体の回復は望めないが、

同胞をまた生み出して数を揃えればどうでもなる。まずは、そこからだな』

自分自身が再生することは望めないが、無傷の同一個体を作れば問題無い。

彼らは全個体が意識と目的を共有しているが故の思考であり、結論なのだった。

一度乗っ取ったZECT本部にある隠れ家へ帰投して時間を掛けて計画を立て直そうと

目論むローカストワームこと三島だったが、彼の足はある場所へと向かっていた。

瓦礫の山と化した廃工場跡地を幽鬼の如く歩いて数分後、目的地へと辿り着く。

そこにあつたのは、数時間前に完成目前となつた『彼らの切り札』だった。

『……………よし、これならまだ直せる。まだ夢は潰えていない！』

装置が破損していないかを確認し、大した事がないと知つて三島の顔がほころぶ。

『今度こそ、今度こそ四年前に！そして私はネイティブもワームも、人をも支配する

!!』

無人の廃工場跡地である瓦礫の残骸の中で、ローカストワームが独り笑い出す。

狂つたように、壊れたように笑い続ける彼だったが、ふとその笑い声が止んだ。

彼の背後から何者かが近づいてくる足音を、ワームの聴覚で拾ったからだ。

『誰だ!!』

もしやライダーが戻って来たのか、と内心で焦りつつも三島は振り返りつつ叫ぶ。

彼が振り返った先に現れたのは、くたびれた衣装と傷で汚れた矢車だった。

人類を裏切って自分の下についた人間であると知れた瞬間、三島は安堵の域を漏らす。

するとそれまでの緊張の糸が解けたのか、次第に苛立ちが彼の心に押し寄せてきた。

『貴様が無能なおかげでこのざまだ！　これだから人間は嫌になる』

「……………ああ、まったくだ」

嫌味を盛り込んだ三島の言葉を、どういうわけか矢車は一呼吸置いて同意した。

彼の言葉に妙な違和感を覚えた三島は、ふらついている彼をもう一度よく見る。

矢車の姿に不自然なところは見られない。敵にやられて傷や服の汚れが目立っているものの、それくらいなら別段大したことは無い。

ただの思い過ごししかと気も揉んだ三島は、視線を矢車から逸らした。

【H e n s h i n !】

その直後に、三島の背後から聞き覚えのある電子音声 flowed 。

カブトやガタツクよりも数段高めこの音声は、つい先ほど聞いたばかりなのだから。

二つの意味で驚愕した三島が振り返った先に居たのは、もう矢車ではなかった。

バツタを後ろから見たようなフォルムの鋭角的な頭部に、両側頭部の脚型アンテナ。

カブトやガタツクらとは明らかに異なる形状のマスクで、矢車の顔は覆われていた。

胴体には巨大なXを思わせるラインが奔り、両肩部には刺々しい外見の防具が装着され、

その左足にはまさしくバツタの後ろ脚の如き巨大なアンカージャッキが備わっていた。

かつて栄光の道を思うがままに往き、そこから突き落とされた哀れな敗者だったこの姿。

そしてそれは今も変わることなく、わずかに深みのある緑の鎧のくすみをそれを物語

る。

そんな彼の、人間の憎悪や憤怒を凝縮させて業火にくべたような赤濁の双眸は変わ
ない。

闇を強要されて歪み淀んだその瞳は、己を含めた全てを嘲笑うかのように不気味に輝
く。

地獄の底を歩み続ける日陰者の兄、「仮面ライダーキックホッパー」がそこにいた。

『……………何を、してる……………?』

「……………ハア、何をしてるんだろうな、俺は」

いきなり自身を仮面の戦士へと変化させた事について三島が尋ねたものの、

矢車はその質問に対する答えとは呼べない返答を口にして大きくため息をついた。

目の前の人間の行動の意図が理解できず、先程から湧き続ける苛立ちも相まって声を
荒げる。

『答えになっていないぞ矢車……………答えろ!!』

「……………正直なところ、俺は今自分が何をしてるのかさえ分からん」

『何だと……………?』

「……………ただ、俺はさっきのアンタらの戦いを見て、気付いた」

変身した矢車、キックホッパーが両手をだらだらと揺らしながら静かに歩み寄り、今まで感じた事の無い感覚が三島の異形となった背を泡立たせて、悪寒を味合わせる。

ゆつくりと迫るキックホッパーに反比例するように、少しずつ三島は後ろへ後退するが、

すぐ後ろには彼の切り札たるネイティブを部品とするタイムマシンが鎮座していた。千切れた翅と外骨格に覆われた背中で、無機質で冷たい機械の存在を確かめる。

するとキックホッパーが突然左足を振り上げて三島、ローカストワームに突きだした。

『うっ、ぐう……………き、貴様あ!』

「……………田所さんが変身したんだと頭では理解できていても、それでも」

【Rider Jump!】

「……………俺にはアイツパンチホッパーが、相棒に見えたんだよ」

背後には巨大な装置があるために身動きが取れないローカストワームを左足で押さえつけるようにして、キックホッパーはゼクターのレバーを右へ引き倒した。

機械的なアナウンスがゼクター内のタキオン粒子を超圧縮して左足へと転送し始めた

ことを二人に知らしめ、キックホッパーの左足に粒子が次々に転送されていく。

この工程が何を意味するのかを知っているローカストワームは必死に抵抗するものの、

傷だらけだったとは思えないほどの脚力で押さえつけられ、逃れることができない。どうにか脱出しようと試みている彼を余所に、キックホッパーは細々と語り続ける。

「……………コイツが現れた時、相棒の声が聞こえた気がした。

前と変わらずこつちがうるさく感じるくらいの声で、『戦ってくれよ、兄貴』ってな『ぐつ、く、そお……………!』

「……………そしてあの場に行ってみれば、本当に相棒が戦ってた。

相棒とは違うとすぐに気付いたが、どうしても目に焼き付いて離れなかった」

『何を、する気だ! 放せ矢車あ!!』

「……………光の差す道を歩いてる奴らと一緒に戦つてる姿を見て、確信した。

アレは相棒じゃないと。だがそれでも、相棒の姿は光の中で眩しく輝いていた」

キックホッパーが語り続ける間もローカストワームは必死の抵抗を続けるが、粒子が転送される度に強化されていく脚力に敵うことは無く再び押し戻されていく。そうしている内に左足にタキオン粒子が最大まで充填され、解放の合図を送り出した。

両者の間で機械的に流れ続ける音が、さながら処刑のカウントダウンとなつていった。いつ解放されてもおおかしくない状況の中で、キックホッパーは小さく笑った。

「……………おかしいよなあ、あんな相棒の姿を見て、俺も思い出していた。

光の中で懸命に輝いていた頃の自分の姿をなあ。だから、俺は決めた」

『いいからこの足をどかせ、矢車!!』

「……………もう一度光を掴む。今度はまた闇に戻るなんて甘えたことは言わねえ。

二度とどこにも戻らない、光が照らす道を歩むために俺も、相棒と共に戦う!!」

『ふぎ、けるなあ!!』

自嘲気味に低く笑いながら、彼はローカストワームに漆黒の決意を告げる。
 キックホッパーが何を企んでいるのかを悟り、逃れようと最後の力を振り絞った。
 しかし、ローカストワームの生への執着は、彼の決意には届かなかった。

「ライダー、キック」

【R i d e r K i c k !】

キックホッパーは右手でレバーを左側へ押し戻し、圧縮された粒子を解放させた。

瞬間彼の左足に押さえつけられていたローカストワームに怒濤の如き衝撃が押し寄せ、

その余波で彼の背後にある巨大な装置の数か所に大きな亀裂が生じる。

『おのれえ……………許さんぞ、矢車アアア!!!!』

既に異形の肉体のあちこちから緑色の炎が噴き出始めているローカストワームだが、それでもどうにか装置への被害を減らそうと必死でキックホッパーにしがみつく。

すさまじい怨嗟の念を含んだ怒号がキックホッパーに向けられるが、彼は無言のまま

しがみつかれた左足をわずかに屈伸させて、渾身の力を込めて再び左足を伸ばした。その瞬間、彼の左足に装着されているアンカージャッキが作動し、蓄えられていた超圧縮タキオン粒子を追加で左足先へと送り出し、解放の衝撃を炸裂させた。

「……………あばよ」

『矢車アアアアアアアア!!!!』

アンカージャッキによる衝撃とエネルギーの解放による爆裂の閃光が二人の間で巻き起こり、緑色の炎と断末魔が入り混じった大爆発が瓦礫の山を吹き飛ばす。

キックホッパーが繰り出した一撃と途方もないエネルギーの余波を浴びて、生き残ったローカストワームの背後にあったタイムマシンも粉々になっていた。

叩き込んだ一撃に己の全てを賭けていた結果、キックホッパーの装甲は大爆発の威力に

耐えきる事が出来ずに自壊し、爆炎の中で矢車は強制的に変身が解除されてしまっ

た。
う。 スーツで守られていたために感知していなかった爆風や熱気が一気に彼の身体を襲

髪は即座に燃え上がり始め、戦闘で汗ばんだ皮膚は爆炎で完全に焼けただれていた。目も明けることができないほどの閃光で一切を知覚できず、痛覚だけが突き刺さる。しかし彼の肉体もまた既に限界を迎えていたため、想像を絶する痛みに狂い悶えることは

なく、ただ冷静に自分に迫る死を実感することが出来た。

(最後の最後で俺はやはり、羨んでいたのか……………光の差す世界に)

朦朧となりつつある意識の中で、矢車は最後に自分の生き方を曲げたことを悔やむ。けれどその悔恨の念はほんの一瞬で過ぎ去り、代わりに別の感情が芽生えてきた。

(ああ、相棒……………これでようやくお前の傍にいつてやれる)

矢車の消えかかる脳裏に浮かんできたのは、共に地獄を歩んだ弟を殺したあの日の記憶。

何もしてやる事が出来ず、ただ彼の覚悟を無下にはすまいと心を殺して彼の命を奪い、

冷たくなり果てた弟の亡骸を抱きしめ、「永遠に一緒だ」と誓った四年前の自分の姿を。

結局俺は、何の為に生きてきたのだろうか。

(……………もう何も分からねえ。今となっては、何もかも)

もはや全身の感覚も感じられなくなった矢車が最後に思うのは、彼の事だった。

(相棒……………笑ってくれ。最期にみつともなく光を求めた俺を、笑ってくれ……………)

少しずつ自分が無くなっていくような感覚に見舞われる中、矢車は、笑った。

(こんな俺でも、相棒……………また一緒に地獄に墜ちてくれるか……………?)

何もかもが失われていき、爆発が収まり出した時、矢車の意識は懇願と共に消えた。

『 兄貴となら、どこまでも』

懐かしい誰かの声が、矢車の最期の意識に、届いた。

激闘の中で受けた傷を癒すという名目で光 写真館へと集まった士たちはそのまま
ローカストワーム撃破から二日後。

共に戦ったこの世界での戦友たちと交友を深め、楽しい一時を笑顔で過ごした。

ローカストワームを倒してからしばらく経った後である戦った場所で原因不明の大爆発が

起こつたと、後からやって来た岬によつて知らされ、天道は少し哀しげな顔をしたが、それでも戦いを生き抜いたことを無事に戻つて来たアゲハや優未恵と喜び合った。

栄次郎特製のスウィーツの数々に弓子や同席したゴン、意識を取り戻した風間たちも舌鼓を打ち、ついには加賀美やひよりまでもがその味に感動したと絶賛した為に、

天道が栄次郎に対してスウィーツ料理対決を申し込んだりと、一波乱あったりした。しかし士たちは世界を巡る旅の途中、別れは必然だった。

「しっかし、楽しかったな〜！」

「ホントですね。土君もそう思いませんか？」

「ああ、割とな」

「そんな事言つて、ホントは満喫してたんじゃないのか？」

「うるさい。お前は本当に口が減らないなユウスケ」

「だってホントの事じゃんか」

天道達に別れを告げた後、パーティーのような時間を思い出しているユウスケと夏海は

残った皿の片付けや台所で洗い物に勤しむ栄次郎を気遣うことなく余韻に浸っていた。

そんな二人の不拔けた顔を持ち前のマゼンタカラーのカメラで断りも無く撮影し、またしてもピンボケとなってしまうたためにユウスケの緩んだ顔に押し付けた。

「おわっ!! いきなり何すんだ士!」

「思いがけない最高の一枚が取れたからな、くれてやる」

「おっ? どれどれ……………っていつものピンボケじゃないか」

期待して損した、とピンボケ写真を士専用写真入れという名札が張られたかごの中へ投げ入れたユウスケは、再び先程のように緩みきった顔で余韻に浸りなおしていた。

「……………つたく、どいつもこいつも」

何をしても反応しない二人に見飽きた士は、台所にいる栄次郎に食後のコーヒーを

淹れるように注文し、頼んだものが来るまでの間にカメラの手入れをし始める。

しばらくして洗いの物を片付けた栄次郎が三人分のコーヒーカップを持って来たが、

明らかに手伝いもせずにサボっている土たちを目撃して分かりやすく怒り出した。

「もう！ 僕が一生懸命洗い物したりコーヒー淹れたりしてたのに！」

「ごめんなさいおじいちゃん。でもなんかあんな楽しいこと久々で〜」

「そ〜そ〜。な〜んか思い出すだけで楽しくなってきたよ〜」

「……………俺は違うぞ爺さん。俺はカメラの手入れで忙しかつただけだ」

悪びれることなく語る三人に怒った栄次郎はテーブルにカップを音を立てて置き、年老いた老人がするには似合わない歩き方で台所へと戻ろうとしたその時だった。

「あらっ！」

片付け忘れていたらしい紙皿に足を乗せてしまい、滑って転びそうになる。

慌てた栄次郎は何か捕まろうと手を振り回し、とつさに掴んだものを引っ張った。

「ふう……………危なかったよ。まったく、夏海も土君も片付けしてくれないからだよ！」

危うく転ぶところだったとなおも怒る栄次郎だったが、誰一人何も言わない。

流石に今度は本気で怒ろうと顔を上げたのだが、三人は栄次郎を見ていなかった。

彼らが揃って見つめていたのは、栄次郎の前にいつの間にか降りていた背景フィルムだった。

デイケイドが世界を巡る旅に出る時、最初に変化するはこの背景フィルムだと

いう謎の法則を思い出した栄次郎は、次がどんな世界なのか気になつて起き上がり、見やすいように土の横に足早に移動して正面からフィルムを見つめた。

そこに映っていたのは、今まで見たことも無い絵だった。

絵の大半を占めているのは、沢山の風車が描かれた炎上している街並み。

そしてその街並みの一番奥、絵の中央部にあるのは、巨大な風車のようなタワーらしき建造物。

それらが絵の上半分に描かれているのだが、肝心な部分は下半分に描かれていた。

左側が黒く、右側が緑色にきれいに分かれている仮面の戦士と、

輝くような碧いコンパウンドアイを持つ、タイヤを背負った紅蓮の戦士が、炎上している街並みを呆然と膝を折るようになんて見つめている。

そしてその戦士たちの眼前には、全身が白で黒いマントをはためかせた戦士が立っていた。

「土、これって……………」

「土君……………この世界は？」

椅子に座って呆けていたユウスケと夏海も立ち上がってフィルムを凝視している。

眩くようにして紡がれた言葉は土の耳には届いたが、彼は答えることができなかつた。

E p, 2 4 『Wの世界 / 破壊者の来訪』

夢を、見ていた。

「スキヤニング・チャージ！」

「はあああああ！ セイハアーツ!!」

岩肌が露出している切り立った崖や荒れ果てた大地に響く、盛大な爆発音。

「LOCKET / DRILL / LIMIT BREAK！」

「ライダーロケットドリルキイーンツク!!」

鳴り止まない暴虐の嵐の中で絶え間なく飛び交い続ける、絶叫に近い怒号。

「チヨォーイイネ！ キックストライク！ サイコー！」

「はっ！　だあああああああ！！」

聞けば誰もが耳を塞ぎたくなるほどに異常で、異様で、痛烈な戦士の悲鳴。

【オレンジ　スパーキング!!】

「ゼイハアーーーーッ　!!!!」

それらの中心には、一人の『悪魔』が孤独に立ち尽くしていた。

【F a I n a L　A t T a c K　R i d E　D e, d E, d e, D E C A D E!】

その全身を染め上げる、色褪せた返り血の如きマゼンタカラーに、淡く、けれど決して弱くはない光を宿したライトグリーンの双眸。左肩から胸部を斜めに貫いた十字架のような、白と黒のライン。両腕と両足を包む装甲の内側に映える、ボディとは対照的な白さ。

「……………ハ、の……………悪魔め……………」

爆音と同時に吹き上がった業火に焼かれた一人の仮面の戦士が、心の底から湧き出る憎しみをぶつけるように『悪魔』に吐き捨て、倒れた。広大な戦場の中で立っているものは、自分を置いて他にはいない。数えることすら億劫になるほどの戦士たちを、自らが戦って倒したからだ。そのまま少し視線を下に向け、つい先ほど倒したばかりの戦士たちを見やる。

上から赤、黄、緑と三色のパーツを組み合わせたような仮面の戦士も、全身を白で統一している、やけに尖った頭部をしている仮面の戦士も、頭部と胸部を赤く煌めく巨大な宝石で覆う、黒ローブの仮面の戦士も、オレンジ色の武者鎧を装備し、二振りの刀を持っていた仮面の戦士も。

全てから憎まれる自身に挑み、無様にもその命を散らした哀れな敗者の末路をその双眸に焼きつけたところで、少し離れた場所にいた戦士が立ち上がり始めた。ポロポロの身体を庇うように時間をかけて這いずるように立ち上がった戦士は、『悪魔』と称された自身を中心に倒れ伏している仲間を見つめ、激昂のままに吠える。

「許さねえ!! よくも、よくも俺たちの仲間を!!」

『火野映司……………如月弦太郎……………みんなを、よくも!』

傷だらけの身体を怒りで震わせながら、その仮面の戦士は『悪魔』を睨みつける。しかし彼の、彼らの激しい怒りを真つ向から受けたところで、何も変わらない。

ただただ『悪魔』は目の前の戦士の風体を噛い、嘲り、弱者だと吐き捨てる。

多くの同胞の命を奪い尽くした『悪魔』は、まるで自ら憎まれようとしむけているかのように、眼前の戦士の義侠の心を燃え尽きさせようと命尽きた戦士の顔を踏んだ。

「だからどうした。お前らが何人束になろうが、俺には敵わないだろうが」

まさしく『悪魔』を体現するかのような行いに、立ち上がった戦士が咆哮を上げる。

「コイツだけは、コイツだけは絶対に許せねえ!! 行くぜ相棒オ!!」

『ああ、分かっている。僕もコイツだけは許せない。行こう、相棒!!』

一つの身体から二つの声を放つ仮面の戦士、「仮面ライダーW」^{ダブル}が轟き叫ぶ。

するとその左側が黒く、右側が緑色だった身体の中央に白銀の煌めきが迸り始め、Wがそれを声帯が張り裂けんばかりの雄叫びを上げながら、光を両手で引き裂いた。

【XTREME!】

『俺が、俺たちが！ 風都を守る探偵で、仮面ライダーであり続ける限り!!』

『僕らは決して折れはしない！ 例え相手が、同じ悪魔だったとしても!!』

緑と黒の装甲の間に、万物の存在全てを掌握せし知性の結晶の如き白銀の色を

挟み込んだWは、自身の体内に渦巻く全ての力を両足へ集結させ、一気に跳躍する。

そして上空で唐突に吹き始めた膨大な量の風を背に受け推進力とし、Wが蹴りを放つ。

だが迫り来る凄まじい力を前にしても、『悪魔』は立ち尽くし、不敵に笑うだけだった。

「ハッ！ 極限^{エクストリーム}だろうが究極^{アルティメット}だろうが、俺はその領域を超えている！」

豪胆に語ったマゼンタの悪魔は、急降下して迫るWの蹴りに拳を放ち



「うあ、ああ……………ああ？」

奇妙な呻き声と共に、門矢 士は目を覚まして起き上がった。

上から見ても分かるほどにびっしりと服を濡らした汗のせいなのか、それとも、自分がついさつきまで見ていた、あの謎の夢のせいなのか。

「仮面ライダー、ダブル……………風都、探偵……………奴の事だよな」

頭を押さえながら夢の内容を少しづつ思い出し、そのまま少し右に視線を向ける。

彼の視線の先にあったのは、記憶に新しい、新たな世界を示す背景フィルムだった。

そこに描かれている戦士のような人物の姿は、先の夢に現れたものと非常に似ていて、

もしかしたら自分が見ていた夢の原因はこれなのかもしれないと思案し始めたその時。

「あ、士！ 良かったあ、目が覚めたんだな！」

「士君！ 良かったです、なんともなさそうです」

「…………ユウスケ、夏ミカン。いきなりどうした？」

士にとっては見慣れてしまった顔ぶれ、旅の仲間であるユウスケと夏海が何やら口々に

「良かった」だとか「安心した」だとかと呟きながら、士の両脇にくつついてきた。寝起きで働かない頭でこの状況を冷静に分析しようとしたものの、結局諦めて尋ねる。

「だから、お前ら急に何なんだよ」

「何って、士……………覚えてないのか？」

「覚えてないって、何をだよ」

「士君、本当に覚えてないんですか？」

「だから何をだよ！」

「士、お前いきなり倒れたんだぞ？」

「そうです。あの絵を見て少ししたら倒れて、今までピクリともしなくなつて」

「……………倒れた？ 俺が？」

ユウスケと夏海の言葉を聞き、若干信じられないといった表情で自身の両手を見つめる。

これまで幾つもの激戦や死闘を繰り広げ、それらに悉く勝利して来た自分がまさか、たかが絵を見たくらいで意識を失うだなんてことあり得るはずがない。

そう思うことは簡単だったが、次に彼が見た物が二人の言葉が真実であったと告げた。

「……………午前8時、だと？」

士が目にしたのは、写真館の撮影ホールの扉の上に飾ってあった置時計の針の位置。短針が8を指し、長針が12から少しだけ右にずれた場所を指していたのだ。

ここで士は、自分の中にある記憶と現状が一致しない違和感を感じた。

士が思い出すのは、自分が倒れたらしい時間よりも、少し前の記憶。

カプトの世界の住人たちとパーティーをして騒ぎ、彼らが帰ってから数分後の事。

あの時士はカメラを片手にユウスケや夏海を撮影しつつ、時間の確認もしていた。

覚醒直後のぼんやりとした頭でゆっくりと思い出した記憶は、午後18時の事だった。

つまり自分は、約8時間も意識を失っていたことになるのか。

「……………なるほどな、だいたい分かった」

に
だんだんと冴えてきた頭を持ち上げながら椅子に座り、心配そうに見つめてくる二人

にお決まりの言葉を言い放ち、心配は無用だとばかりに鼻を鳴らして言葉を続ける。

「俺が8時間も眠っちまってたって事実も、この世界のライダーの事もな」

「そーなんだよお前ぐつすり眠り過……………なんだって？」

「この世界のライダーって、あの絵のことですよ？ 何か分かったんですか!!」

「ああ。ま、すぐに分かる。行くぞ夏ミカン、ユウスケ」

た
肩をコキコキと鳴らしながら座ったばかりの椅子から立ち上がり、そばに置かれてい

出る。
士愛用のマゼンタカラーのカメラをしつかりと持ち、二人を先導するように写真館を

の、突飛な行動をする彼を見て、「またか」と二人で腹立たしそうな顔で見つめ合うもの、それが彼だからという結論に至り、置いて行かれないようにと歩き去る彼を追いかけた。

「はあくいお待たせ。朝一番のモーニングコーヒー……アレ？」

そして写真館の館長である栄次郎は、自信作のコーヒーを手にしばし呆然となった。

「さて、今度はどうなるんだろうな」

一方写真館を出た士は、別の世界に来た時に起こる謎の『着せ替え現象』とも言える、士個人にのみ作用する不可思議な衣装チェンジが来るのを今か今かと待ちわびる。実はユウスケや夏海が見たがるこの着替え、一番楽しみにしているのは士なのだ。

世界が自分に与えた”役割”だと認識しているこの現象の結果で、彼のその世界でのモチベーションが決まると言っても過言ではない。実際、アップダウンは激しいのだ。

ちなみに前の前の世界、ブレイドの世界ではアンデッドの総支配人。

前の世界であるカプトの世界では、料理経験も無いのに由緒正しきデイスカビル家の料理人。

このように、与えられた”役割”の重要性によって、土のその世界の気分が決まる。今回もまた世界が自分に何らかの”役割”を課すのだろう。期待に胸躍らせて待つ。

「土ー！ 今度はどんな格好になったんだ………って、なんだ。何も変わってないじゃん」

「ホントですね。土君、もしかしてもう着替え終わったんですか？」

「……………いや、来ない」

しかし彼らの予想に反して”役割”の現象は現れず、土は私服姿のままだった。

そのまま様子を見ようと待ってはみたものの、結局五分経っても現象は起こらなかった。

今までにないパターンだと三人は驚くものの、頭の回転が速い土はすぐに屁理屈を語る。

「な、なるほどな。つまり今度の世界は俺に、ありのままでいろってことだ」

「どういう事だ？」

「つまり、俺はこの状態でも、世界の中で何かしらの”役割”を担ってるってことだ」

「なるほど！ 流石士だな！」

「……………それホントなんですか、士君」

「なんだ夏ミカン、この俺の名推理にいちやもんつけようってのか？」

士の演説を何も考えず信じ切るユウスケと、胡散臭いものを見る目で士を見る夏海の二人からの視線をその背中に受け、若干無理やり過ぎたかと士は内心で焦り始める。

そんな焦りを悟られぬためにも、彼は急な話題転換で乗り切ろうと図った。

「とにかく、今必要なのはこの世界のライダーの情報だ。こんなところでぐずぐずしてても何も始まらない。そうだろ？ だったら行くぞ、俺についてこい」

善は急げと言うだろ、と半ば強引な言い訳と共にまたも勝手に歩き出す士。

良くも悪くも普段通りな彼を見て、急に倒れたという不安も心配も必要ないのだと取り残されそうになっている二人は考え、先を歩む男の背を律儀に追いかける。

「それにしても土、一体どこに向かっているんだ？」

「……………俺についてこい」

新たな世界での船頭を買って出た戦友の無計画さを、不安げに見つめながら。

「おのれ……おのれえ！」

口惜し気に息も絶え絶えな状態のまま吐き捨てた男は、再び背後に目を向けた。けれど視線の先には、朝のジョギングを楽しむ人々などしか見受けられない。

ここまでくれば。安心したような面持ちになった男は走るのを止め、息を整える。

「どこへ行かれるのですか？」

「ッ!!」

男が全速力で走ったために乱れた呼吸を元通りにしようとして試みた瞬間、声が聞こえた。

まるで自分がどこかへ行くことを咎めるかのような物言いに、男は冷や汗を流す。肉体的疲労と精神的圧力から起こる震えを悟られぬようにしながら、男は叫んだ。

「おのれ！ この世界まで私を追って来たのか！」

「当然でしょう、それが命令なのです」

「捕まるわけにはいかない！ 私が、私が捕まるわけには！」

「往生際が悪いですねえ

鳴滝さん

ツバが広めのチューリップハットに同色のくたびれたコートを羽織り、どこにでもあるような普通の眼鏡をかけた、中肉中背の謎めいた男。

彼こそがデイケイドを目の敵にしている、「鳴滝」と呼ばれる男だった。

普段はデイケイドが巡る世界の行く先々へ先回りし、そこで旅路の妨害とも取れるような行動や暗躍をして、裏でデイケイドの抹殺を目論んでいる人物でもある。

しかしデイケイドである士は知らないことだが、旅の同伴者である夏海に対しては幾度となく警告のような言葉を残し、敵意が無いことを証明するような素振りも見せた。

まるで謎めいたことしかししないその男が今、突如現れた声の主に追い詰められていた。

「く、来るな！」

「そうはいきません。『あの御方』のご計画には、あなたが必要なんですから」

「私は何もしない………お前たちのおぞましい計画に、手など貸さんぞ！」

「それは困りましたねえ。さて、ではどうすればお願いを聞いてもらえますか？」

そう言つて鳴滝に少しづつ詰め寄っているのは、彼よりも若い青年だった。

どこにでもある白地のＴシャツにジーンズ、髪は少々色の薄い茶色の短髪の彼は特に目立つて危険な凶器なども所持しておらず、鳴滝が怯む理由は見当たらない。

それでも現状を見れば、どちらが優位に立っているのかは火を見るよりも明らかだった。

「あまり抵抗されるようなら、私だつて手荒な真似をしなければならなくなります」
「何故だ、何故今になつて私を狙う!! 私はもう!」

「ですから、『あの御方』のご命令なのです。生きて連れてこいとね」

「私は、私は……………」

散歩を楽しむかのように明るい笑顔で歩み寄る青年とは対照的に、鳴滝は少しづつ後ろへと震える足を巻き戻していき、ついに耐え切れなくなつて後方へ駆け出した。しかし追い詰められた焦りからか、彼の足は追いつかずにもつれてしまい、転んだ。起き上がろうと腕に力を込めた直後、自分のすぐ後ろで足音が止まったことに気付

き、

もはやこれまでか、と鳴滝が絶望を色濃く顔に浮かび上がらせた、その時だった。

【ATTACK RIDE BLAST!】

「何だツ!」

どこからか電子音声が響き渡り、直後に青年の背後へ青い光弾が襲い掛かった。

そのすぐ後に巻き上がった火花と着弾時の煙が二人の視界を遮り、何が起きたのかを分析するための判断材料を不透明にした。そうしている間に鳴滝の腕が何者かに掴まれ、

力の加減を全くされないまま後方へと大きく放り投げられた。

「うっ!」

「やあ、お久しぶりですね。間に合った良かったですよ」

「……………貴様あ」

石畳の道に腰を打ち付けた鳴滝に、襲撃者が飄々とした態度で語りかける。

そして背後に光弾をばらまかれたはずの青年は無傷のまま、現れた闖入者を睨む。

鳴滝と青年の前に現れたのは、仮面ライダーディエンドこと、海東 大樹だった。海東は先程銃撃を放った愛用の銃、ディエンドライバーを器用に回してから再び眼前の青年へと銃口を向け、鳴滝に向けたのとは正反対の声で厳かに話し出した。

「君の方は本当に久々だね。もう二度と出会いたくはなかったよ」

「それはこちらのセリフだ、海東……私は貴様が殺したいほどに憎い!!」
「だろうね。だからこうして来てあげたんだ、ありがたく思いたまえ」

青年もまた、鳴滝に見せた余裕が嘘のように掻き消された声と表情で海東を睨み、両者は互いの一挙手一投足を見逃さぬとばかりに睨み合ったまま動かなくなった。そんな状態の海東の後ろで守られるような形となった鳴滝は、彼に尋ねる。

「海東君、君は……新たな力を求めて世界を旅していたのでは?」

「ええ、してきましたよ。ひとまず『仮面ライダードライブ』の世界はね。」

その後で気になって様子を見に戻ってきたらこの有様さ、まさに危機一髪だ」

「……………すまない、海東君!」

「いいんですよ、鳴滝さん。今のうちに逃げてください」

鳴滝の質問に律儀に応えた海東は、そのまま彼に逃げるよう伝える。

海東の言葉を聞いて一瞬反論しようとしたものの、状況がそれを許さなかったように、

謝罪の言葉を述べながら、彼は後ろを向いて一目散に駆け出し、姿を消した。

青年は追っていた鳴滝を逃がした海東を見て、ますますその視線に憎しみを込める。対して海東も普段の掴みどころの無いような態度は鳴りを潜め、殺気を剥き出しにして眼前の青年にそれを躊躇なくぶつける。

「……………海東、お前を殺すのは後だ。今は『あの御方』のご命令の完遂が先決」

「そうやって逃げるのかい？ 良くないねえ、君のその逃げ癖は」

「何とでも言えればいいさ。自分の世界から逃げ出したお前に言われたところで大して

心にも響かないし、何より僕を怒らせようって魂胆が見え見えだ」

「ああそうかい。だったら力づくでも今ここで君を倒す」

「倒せないよ。僕はこのまま鳴滝を追うから、君の相手はコイツらだ」

力強く銃口と殺意を向ける海東だったが、彼の常套句を怒りを押し殺しながら

噛み砕いた青年の発した言葉によって向けるべき殺意と銃口がぶれることになった。青年は薄ら笑いを浮かべながら左手を頭上に掲げた。すると彼の背後にどこからともなく濁ったような灰色の薄い膜が現れ、その膜へと姿を消してしまったのだ。そして青年と入れ替わるようにして幕の中から姿を見せたのは、異形の怪物だった。

『『ギャギャア！』』

『ウオオオオ！ グオオオオオオアア!!』

「……………やれやれ、面倒な置き土産を残していったものだ」

少しも危機感を感じさせない口ぶりで語る海東の前には、多くの怪物が現れた。その怪物は、彼が最近巡ってきたばかりの世界にいるはずの異形たちであった。泥で塗り固められて作られたような上半身と、その中央に佇む頭蓋に似た頭部。上半身とは対照的に、皮膚を引き裂かれて丸見えになった人体のようにも見える筋肉繊維や外骨格を剥き出しにして、両腕の鋭く長い爪を振り回して暴れだす異形。筋肉繊維が赤や緑や青と個体ごとに若干違いがみられる怪物は、「インベス」そして彼らとは形状や姿は全く異なるものの、全く同じルーツを経て生み出された獣の姿を宿した人型の異形たちは、「中級インベス」という。

恐ろしく盛り上がった上半身からぶら下がる両腕を振り上げ、普通のインベスが何体か海東の元へと駆け出すが、迫り来る異形たちにも彼は一切動じない。右手に携えた銃を自らの顔の横へ持ってきて、左手にいつのまにか持っていたライダーカードを銃の横にあるソリットに装填し、銃の前方部をスライドさせる。そしてそのまま銃口をインベス達へと向けて、合言葉と共にトリガーを引く。

「変身！」

【KAMEN RIDE DIEND!】

銃口から放たれた弾丸が炸裂し、インベスに着弾したそれらが長方形の板状の物質に変換されてき、それら全てが海東のいる場所へと回転しつつ舞い戻っていく。

その間に彼の周囲に赤、青、緑の三色に分かれた戦士の残像が周囲を囲むように飛び交い、
やがて彼を中心として集結し、全身をゼオンカラーに染めた仮面の戦士を登場させた。

「さて、さっそく試してみようか。手に入れたばかりの力を」

不敵な笑みを仮面の下に浮かべながら、銃撃に怯んだインベス達に見せつけるように左腰のカードホルダーから抜き取ったカードを手に収める。そしてそのカードを先程と

同じように愛銃^{アイエン}ドライバーに装填しようと手を動かした時だった。

「変^{へん}身^{しん}!!」

【ACCEL!】

河川敷の道から見て坂になっている場所の向こう側から、何やらバイクのエンジンを吹かすような騒々しい音が連続して響き始め、しばらくしてから音が収まった。

そして音が収まったと同時に、その坂の向こうから猛烈な勢いで駆けてくる者がいた。

「市民からの通報を受けてきてみれば、何だこの状況は!!」

「……………これはこれは。厄介な時に来てくれたもんだね、刑事さん」

現れたのは、全身をメタリックレッドの重装甲で覆った仮面の戦士。
仮面の戦士としては異形に近い、碧いコンパウンドアイに白金のアンテナ。

まさしく燃え盛る紅蓮を鎧として凝固させたような、メタリックレッドの重装甲に、背部や両脚部に見える、バイクのホイールを思わせるデイトール。

インバスとデイエンドの目の前に現れたのは、このWの世界にいる仮面ライダーの一人。

そして、街を脅かす悪を許さず、正義の炎にその身を焦がす、無頼漢なその男の名は。

「さあ、振り切るぜ!!」

『アクセルメモリ加速の記憶』の過剰適合者。

愛するものを守るため、決して死なない不死身の男。

風の吹く街『風都』を守護する二人の英雄の一人。

奴の名は、〔仮面ライダーアクセル〕

E P, 25 『Wの世界 / 街を泣かせない男』

風が絶え間なく吹き抜ける街、風都。その街の一角である、運河沿いの河川敷。

無論そんな場所であっても分け隔てなく風は吹いているのだが、この時に限定して言えば

風以外にも漂っているものがあつたのだ。戦いに身を置く者のみが放つ、濃厚な敵意が。

「困った時に来てくれたもんだね」

本能的な野生の敵意と、理知的で人為的な敵意の間に挟まれたデイエンドは心の底から

迷惑だと言わんばかりの仕草と態度で、新たに乱入してきた仮面の戦士にそう告げた。

普通ならば彼の神経を逆撫でするかのような物言いに、少なからず言葉を返したりしても

おかしくはないのだが、そこにいる紅蓮の装甲をまとう戦士に関しては、無意味だった。

いつの間にか右手に握っていた長めの剣、『エンジンブレード』の切先をダイエンドへと

向けて、実に彼らしい威圧感に満ちた言葉を言い放つ。

「何が何だかさっぱり分からんが、この化け物たちとお前とは関係があるようだな。

話は署の方でいくらでも聞いてやる。大人しく抵抗すれば、の話だがな」

「あのね、僕はもう君に興味は無いんだよ。もう君の力は持っているからね。

僕から話すことは何も無い。さっさと失せたまえ、今なら見逃してあげるよ」

無数の怪物

インベスの群れが不気味な鳴き声を発しているのを横目

で見やりながら

互いに一切妥協するつもりがない会話が繰り広げられる。そして、そこで会話が途切れた。

片や警察に属する刑事、片や泥棒を自負する無法者。相容れるなど、初めからありえない。

さらに言えば、二人はそれぞれ自分の生き方に対して、鋼の如きプライドを有しているのだ。

法を犯す者を見逃せない義侠の男と、法を犯しても自分の生き方を貫く風来坊。

例え出会い方がもう少し穏やかだったとしても、結果的には矛を交えたに違いはない。

機嫌が良いのか悪いのか、相手を見逃すという余裕を見せるデイエンドの言葉だったが、

それを向けられた当の仮面の戦士
————— アクセルは無言のまま右足を前に踏み出す。

彼の行動の意味が分からないほどデイエンドは愚かではなく、今度は威嚇の意味も兼ねて

インベスたちに向けていた愛銃の銃口を、迫るアクセルの目線の高さに向け直して語る。

「まさか、僕と戦うというのかい？ だとしたら、止めておいた方がいい」

「警察官が怪物騒動の容疑者を見逃すわけがないだろうが。署に連行してやる」

「……………分かったよ。だったら、君を始末するしかないんだが、覚悟はいいかい？」

「俺に質問をするな」

「……………決まりだね」

交渉という言葉を知らないのではないかと思えるほどに意固地な二人の会話は、両者の絶対的な不和を生んだという結果に終わったと同時に、そこで途切れる。

デイエンドは自分の言葉が言い終わるよりも数瞬速く銃のトリガーを引き絞り、内部に充填されている青いエネルギー弾をマシンガンの如き速度で発射した。

ところがその弾丸の標的であるアクセルは、重厚そうな長剣を持ち前の剛力で乱暴に振り回して攻撃の一切を弾き落とすという荒業を見せ、デイエンドに突撃を仕掛ける。

接近を許したデイエンドは左手に収めていたライダーカードを銃のスリットへと挿入し、

前方へスライドさせる機構を動かして一体となっているドライバーに装填した。

途端に右手に持つデイエンドライバーからは、デイケイドのバックルと同じ電子音声が
発せられ、何かと警戒して一瞬動きを鈍らせたアクセルに答え合わせのように告げる。

「さあ、腕試しと行こうか。行ってらっしゃい、僕の新しいお宝！」

【K A M E N R I D E C H A S E R】

デイエンドライバーの銃口からエネルギー弾とは違う別のエネルギーが発射され、
剣による攻撃が届く範囲まで接近していたアクセルは不意の一撃を何とか回避した。
後方へと下がって距離を置いたアクセルは、そこでようやく相手が何をしたのかわか
り、

その蒼いコンパウンドアイに映された光景を疑うほど、驚愕に身を震わせた。

「なんだそいつは……………今まで一体どこに?！」

「どこにもいなかったさ。僕が召喚したんだから」

「召喚、だと? そんなふざけた記憶を持ったメモリがあるのか……………」

「さてと、それじゃあ場も盛り上がったところで、聞きたいことがある」

アクセルの呟きに耳を貸すこともなく、自分の話を一人で進めていくデイエンド。

そんな両者の間には、つい先ほどまで影も形も無かったのに、仮面の戦士が立っていたのだ。

微動だにしないまま、仁王立ちの姿勢で立ちはだかるその様は、さながら守護神の如く。

その身を覆う装甲や肉体を保護するスーツに至るまで、輝きを無くした鋼銀に統一され、

胸部や腕部、脚部などの装甲の一部と頭部の右側面にはメタリックパールが垣間見える。

頭部の額に位置する場所には、細い部品で端正に組み込まれたような四本のアンテナが鎮座し、

アクセルからは見えないが、背部には小型に作られたバイクのホイールが装着されていた。

鋼銀と紫紺に身を包み、オレンジの双眸を持つその戦士の名は「仮面ライダーチェイサー」

自らの召喚者を、敵であるアクセルから守るようにして立ちほだかる彼の後ろで、
デイエンドライバーと空いた左手をひらひらさせながらおどけるデイエンドは快活
に笑う。

「走り続ける加速アクセルと、追いつける追跡者チェイサー。どちらが強いのかな？」

言葉遊びを楽しむかのようなセリフを残し、デイエンドは待ち切れないとばかりに
迫っていた

インベスの群れに身体の正面を向け、応戦の意思を見せる。まるで、アクセルを無視
するよう。

眼前に鋼銀の戦士を召喚したと嘯うそぶいたデイエンドを蒼いコンパウンドアイが睨むが、
一切気に掛けることなく怪物と戦い始めたため、仕方なくアクセルは眼前の戦士を相
手取る。

しかしどんな分野であれど他者に対して負けん気が強い彼は、自分に背を見せるデイ
エンドに

向けて、もはや条件反射と化したようにお決まりの文句を叫ぶ。

「俺に質問をするな！」

エンジンブレードを振り上げながら、アクセルは吠えるような雄叫びと共に駆け出す。

わずか数秒でチェイサーとの間合いを詰めた彼は、その重く鋭い長剣を力のままに振るったが、

目の前の戦士はその攻撃から目を逸らし、あろうことかアクセルに対して背を向けたのだ。

剣を振り下ろす瞬間の行動にアクセルはわずかに動揺したものの、踏んできた場数の多さからか、

このまま全力を以て振り下ろせば問題はない、恐れる必要もないと確信し、その通りに動く。

アクセルが振り下ろしたエンジンブレードの切先は、少しのズレもなくチェイサーの無防備な

背中へと振り下ろされた。そのはずなのだが、そこから剣はピクリとも動かさなくなっていた。

「なに?！」

「……………無駄だ。俺の〈ホイーラーダイナミクス〉は、砕けない」

驚愕に目を見張るアクセルを無視して、背中を見せたままのチエイサーが淡々と話す。

そんなチエイサーの背部では、長剣の切先とマウントされていたバイクのホイールとが火花を

散らしながら拮抗しているという、なんとも不可思議な現象が起こっていた。

アクセルは振り下ろした剣をそのまま斜め下へと袈裟斬りに振り抜こうと力を込めだが、

彼の行動に抵抗するように、チエイサーの背部にあるホイールが突然回転して剣を弾き返す。

まさか自身の主力武器が弾かれるとは思っていなかったアクセルは、エンジンブレードが弾かれた

勢いそのままに、またも後ろへと距離を置くことになってしまった。

その外見からは思いもよらぬほどに重量のあるエンジンブレードの剣先が地面に深くめり込み、

それを引き抜こうと一瞬チエイサーから目を離したアクセルだったが、それは間違っていた。

「碎け散れ！」

「な

ぐああ！」

ほんの二秒ほどの間に距離を詰めていたチエイサーが、その握りしめた右拳をアクセルへ振るい、

戦っていた河川敷の上の方にある道にまで大きく吹き飛ばした。大の男を一撃で吹き飛ばせる

彼の拳の威力は、計り知れない。地面を転がって体勢を立て直すアクセルは、警戒心を高めた。

急いでさきほどの場所まで戻ろうとする彼の前に、チエイサーが跳躍一つで再び立ち上がる。はだかる。

しかし先程と違う点は、鋼銀の戦士の右手に、エンジンブレードが収まっているという点だ。

自身の主力武器を奪われたアクセルは、内に湧き上がる動揺を表に出さないように務

める。

だがこれは非常にまずい状況だった。チェイサーからすれば、その剣はただの剣ではない。

アスファルトにクレーターを作るほどの重量を、自分と同じように片手で持つという脅力に

関しては勝敗が着かないと悟ったが、あの武器を取り戻せば自分には勝機が見えてくるのだ。

チェイサーには使えず、アクセルには使える利点。それこそが、主力武器たる所以なのだから。

どうにかして奪い返さなければ、と思索するアクセルにチェイサーはまたも淡々と語る。

「その姿、お前も仮面ライダーなのだろう。何故、お前は戦う？」

「……………何だと？」

「人間を守るのが、仮面ライダーの使命ではないのか!？」

まるで機械のように平淡な口調のチェイサーだったが、最後の一言にだけは人間臭さ

とも言える

熱意が込められているようにも思えたのだが、アクセルにはそんな心のゆとりは皆無だった。

むしろ、自らが「仮面ライダー」であることの誇りを、けなされたようにさえ感じられた。

故に、アクセルは常にうわずり気味だった声色をさらに張り上げ、激昂したように叫んだ。

「貴様に言われなくとも、俺はこの街を守る仮面ライダーだ！」

「街を、守る？ 人間は守らないというのか！ それがお前の、正義なのか!!」

だが今度はアクセルの言葉に、チエイサーが憤りのような感情を露わにした。

紅蓮の戦士は愛する街を守ると叫ぶが、鋼銀の戦士は人を守らないのかと怒号を発する。

形は違えど、同じ『何かを守る』という精神に誇りを重んじる二人の戦士は分かり合えずに、

まさしく言葉遊びを楽しむかのようだった。デイエンドと同様に、眼前の戦士を敵と認

識した。

目の前にいるのは、敵だ。自らの守りたいものを害しようとする、敵なのだ。

アクセルはただ、チエイサーを倒すことだけを考える。チエイサーも同じことを思考する。

相手が仮面ライダーであれ、自分の敵ならば倒す。自分の守りたいものを、守り抜くために。

剣を奪われた、ならば拳で粉碎する。

剣を奪った、ならばその剣で切り払おう。

両者の視界にはもはや、街の風景も背後の怪物たちも映ってはいなかった。映す気すらない。

ただ眼前の鋼銀を、紅蓮を。

この拳で、この剣で。

叩き伏せよう、切り伏せようと。

「さあ……………振り切るぜ!!」

【ACCEL】

「俺は、仮面ライダーとして戦う!!」

【ズーッと！ チェイサー!!】

二人の戦士は全く同じタイミングで、自身のベルトに備わっている機能を発動させる。

アクセルはバイクのハンドルを模したバックルの右グリップ部を、さながらバイクのエンジンを

吹かせるようにして二、三回ほど手首を使って捻る。すると、彼の体に変化が現れた。まるで全身から放熱しているかと思紛うほどに蒸気を発し始め、アクセルの姿が大気に揺らぐ。

またチェイサーもバイクをしまし車庫を模したバックルの、上部にあるスロットルボタンに

めがけて左拳を軽く、けれど素早く五回ほど振り下ろしてドライバーの機能をオンにした。

両者が準備を終え、再び視線をぶつけ合う。

アクセルは文字通りに〈加速〉の力を引き出し、同様にチェイサーも〈追跡〉の力を引き出した。

どこまでも速くなるアクセルと、どこまでも追いつけるチェイサー。

二人の全身から迸る力が、それぞれに絶対ともいえる自信と力を発現させているのだ。

「貴様、街を守るのが正義なのかと俺に聞いたな」

「……………」

ほんの小さな挙動ですら互いの均衡を破る引き金となりうる状況で、アクセルが尋ねる。

彼の意図を理解できないチエイサーだったが、聞かれたからには問いに答えるしかない。

返答を待つアクセルに対して、チエイサーは無言のままに首を縦にしつかりと振った。

その行動を是と捉えたアクセルは、剥き出しの敵意を抑えようとしないうままで語る。

「いいか、一度しか言わんからよく聞け」

「……………」

「俺に

質問をするな!!」

決して信念は曲げない。たとえそれが、ただのつまらない意地の張り合いだったとしても。

堂々と豪語したアクセルはそのまま一步を踏み出し、チェイサーへと肉薄する。

まともな返答が来ることを期待していたチェイサーは、今までとまるで変わらない態度に

辟易しつつも、そう答えを受け入れていた。そんな人間もいると、彼は知っていたから。

並の人間であれば当然だが、通常の状態であれば仮面ライダーであるチェイサーですらも

反応しきれないほどの速度で迫るアクセル。だが、それはあくまで通常の状態であればの話だ。

相手が〈加速〉したのなら、自分はそれを〈追跡〉し続けるのみ。
だからこそ、追跡者^{チェイサー}なのだから。

「はあッ!!」

「ふんッ!!」

一秒にも満たない刹那の時間。その間に、彼らの攻防は一進一退を繰り返していた。拳よりも広い攻撃範囲を得たチェイサーがエンジンブレードを振るえば、アクセルは自身の

凄まじいまでの〈加速〉の力によつてその剣先を回避し、相手の懐へと一息に潜り込む。

そこからはただひたすらに、勢いに任せた拳の乱打を叩き込む。左右二つの拳の二重奏は

一つも外すことなく鋼銀の装甲に着弾した。だが、チェイサーにダメージは見受けられない。

お返しとばかりに、今度はチェイサーがサイドステップの要領で真横へ移動して重心をズラし、

その反動を勢いに乗せて右手に握ったエンジンブレードを容赦なくアクセルへと振り下ろす。

一撃目の切先は紅蓮の装甲に火花を散らせ、すくい上げるようにして切り上げた二撃目は

胸部の装甲に傷をつけ、そこから流れに任せて三撃目を加えようと、腕を大きく振る

う。

しかしその大振りの攻撃を見極められてしまい、アクセルに右腕をがっしりと掴まれた。

「むっ!!」

「コレは俺の剣だ!」

「くっ!」

右腕を拘束されたチエイサーはどうか逃れようとするものの、アクセルはまるで動かない。

ならば蹴りを入れて離脱しようと考えたチエイサーは、実行しようとして足に力を込めるが、

先に考えを読まれていたらしく、肘打ちを腹部に受けた後で右足の蹴り飛ばしをくらった。

全身に〈加速〉の力を発動させているアクセルの蹴りは、恐ろしく速いうえに、重い。

そのため、特性上は速度に追いつけるチエイサーでも、もろに受ければ一たまりもなかった。

最初の攻防の時とは逆に、大きく吹き飛ばされたチエイサーはエンジンブレードを失い、

それを目の前で拾い上げているアクセルを、立ち上がりながらも見つめ続けている。ほんの一瞬ですらも気が抜けない。どこまでも加速する相手である以上、油断は禁物だ。

自身にそう言い聞かせ、次に来る攻撃には追いつけるだろうと再び構え直した時だった。

「やれやれ、速さ勝負は引き分けということか」

チエイサーの背後でインベスと競り合っているデイエンドが、拍子抜けとばかりに呟いた。

たった一人で十数体以上の怪物を相手取っているにも関わらず、自分たちの戦況すらも把握

していたように語るデイエンドの言葉に、アクセルのみならずチエイサーですらも内心で驚く。

しかし、彼ら二人がさらに驚くことになるのは、ここからだった。

「仕方ない。一人でダメなら二人にすればいいだけさ」

「何?!!」

「速さで勝負が着かないなら、賭け事ギャンブルで勝負といこうか」

あつけらかんと語るデイエンドに対して、アクセルはただただ混乱の深みに嵌つていく。

一体自分は、誰を相手にしているのか。一体自分は、何と戦っているのだろうか。

無数の怪物に攻撃を加えつつも、こちらを気にかけるほどの余裕を見せる仮面の戦士を前に、

既に〈加速〉の力の発動時間を終えてしまった彼は、妨害すらも不可能となっていた。そんなアクセルを尻目に、デイエンドはさらなるカードを装填して情報を読み取る。デイエンドドライバーが電子音声を発し、新たな戦士が出現することを無感情に告げた。

「さあ、賭けたまえ。どちらのAエースが強いのかをね」

【KAMEN RIDE GARREN】

淡白な電子音声と高らかな銃声が鳴り響いた直後、新たな戦士が姿を現した。

大部分を白金の重装で覆い、細部に金色の意匠をきらめかせる独特な風体。

全身を包むパワードスーツは、歴戦をくぐり抜けたためか酷く褪せた小豆色に染まり、

佇む姿だけでも只者ではないという、威圧感に近いオーラを放っているかに見える。

その頭部は、まるでトランプのダイヤを縦に裂いたような形状の角が白金色に映え、角の真下にある円形に近いモスグリーンの双眸が、射貫くようにアクセルを見据える。

ダイヤのAに封じられし不死生物アンデッドによつて変身する戦士「仮面ライダーギヤレン」

こんな場面だというのに、またしても言葉遊びのつもりか。アクセルは憤りに心を燃やす。

自分が直接手を下すでもなく、それどころか手を加えるつもりもない。自分は高みの見物で、

敵と相対させるのは自身の部下に丸投げする。アクセルにはデイエンドがそう見えていた。

あれは人の悪意の塊だ。邪な力を得た、悪辣な屑だと吐き捨てたくなる気持ちを抑え

込み、

自分が戦う理由を忘れて暴走しないためにと、冷静を装って高圧的な口調で話し出す。

「怪物騒ぎの容疑だけでなく、どうやら他にも聞かなきやならんことが増えたようだな」

「僕は何も話す気はない。だから見逃してあげると言ったのに」

「貴様には、自分から話したくなるほどの苦痛をたつぷりと与えてやる」

「御免だね。僕はいつだって奪う側さ。僕が欲しいから盗む、苦痛なんていらぬよ」

「安心しろ。署に連行したら一歩も外に出られん牢獄暮らしを与えてやる！」

「それこそ御免被る。僕が一番嫌いなのは、自由を奪われることなのさ」

アクセルの言葉も、ディエンドには届かない。まるで街に吹く風のように通り抜けるだけ。

これ以上の会話は無意味だと痛感したアクセルは、二人に増えた敵を油断なく睨みつける。

蒼いコンパウンドアイが眼前の戦士たちを視界に収め、闘争本能にガソリンを流し込

む。

「そつちは仮面ライダーへの強盗傷害、そつちは公務執行妨害で逮捕だな」

「……………人間の決めたルールが、俺にも当てはまるのか？」

「俺は俺の強さを証明するために戦う。それが、国家権力であつてもだ」

「随分立派なご高説だな。留置場でも同じセリフが吐いたら褒めてやるぞ!!」

「……………罪を犯した相手には、更生させる機会を与える人間のルールがあるはずだが？」

「そもそもお前は、俺たち二人を相手に勝てると思つているのか？」

「くだい！ 俺に質問をするな!!」

並び立つチェイサーとギャレンの前に、アクセルは何度でも同じ文句を言い放つ。

同じように雄叫びを上げながら、今度は新たに現れたギャレンに向かつて距離を詰める。

その理由は二つ。チェイサーならともかく、ギャレンには自分の太刀筋はばれていない。

加えてもう一つは、相手の右腰部にホルダーされている銃らしき武器を警戒したから

だ。

アクセルは駆け出すと同時に、右手のエンジンブレードに備わった機能を動かした。彼のエンジンブレードは、刃の部分と柄との間に普通の剣ではありえない間があり、そこにはこの世界のライダーが使う、とあるツールを装填できるスロットが備わっていた。

懐から取り出した物を左手に収め、それを慣れた手つきでその空白のスロットに差し込む。

半ばから刃が折れたような状態のブレードの背を左手で押し込んで元の形状へと戻し、
 剣の柄を握っている右手の人差し指で、本来そこにあるはずのないトリガーを引いた。

【ENGINE / ELECTRIC】

瞬間、エンジンブレードからアナウンスが響き、刀身に電光が騒がしく迸り始めた。アクセルがスロットに差し込んだものは〈エンジン機関部〉の記憶を司るメモリであり、その能力の一つに、蓄積した電力を一気に放電させるといふ強大なものがある。

それを最大解放させる一歩手前で力を引き出すこの方法ならば、力を温存させたまま
で

実力が未知数の敵を迅速に倒すことが出来ると、彼は考えて実行したのだ。

自身の加速に追いつけるチェイサーへの対抗策も、あるにはあるが不確定過ぎる。

ならば遠距離武器を装備した未知の敵から排除しようと思ひ至るのは、普通の思考だ
ろう。

誰もアクセルを非難はできない。彼もまた、幾多の死闘を繰り広げた英雄の一人なの
だから。

しかし、彼は知らなかった。いや、知る由も無かったのだ。

呆然と佇んでいるように見える戦士こそ、自身を上回る死線を越えた戦士だとい
うこ
とを。

「終わりだ………はああッ!!」

紅蓮の装甲に覆われたアクセルが放つ斬撃に、今は青白い電光が対照的な彩りを加え
ており、

さながら燃え盛る炎が雷鳴をまとった剣を振ったかのようにも、見えたのかもしれ

ない。

そこに一般人がいたのならば、きつとそう見えたに違いないだろう。しかし、現実とは違う。

左下から右上へと逆袈裟気味に切り上げたアクセルは、何度目かになる驚愕で硬直してしまふ。

自身が剣を振り上げたのは、既に攻撃の届く範囲内にまで敵に近付いたからであり、決して

その彼我の距離を見誤るようなことは、歴戦の経験上からほぼありえないはずだった。

しかし、現実とは違う。彼が振り上げた剣の届く距離に、ギャレンの姿は無かったのだ。

「
遅い」

底冷えするほどに冷徹な声が聞こえたのは、エンジンブレードの切先の、遙か先。

数メートルは離れているだろうギャレンの声が、アクセルには何故かはつきり聞き取れた。

確実に捉えたはずの射程範囲に何故敵の姿がないのか、ここで彼は初めて気がついた

のだ。

ジャンプしていた。それも後方に、思いつきり。

言葉だけならば大したことはない。ライダーでなくとも誰にだって出来ることではある。

しかしそれだけではない。それだけならば、アクセルがここまで狼狽することなどありえない。

では何が彼を驚愕に身を固めさせたのか。それは、ギャレンの姿勢が物言わず語っていた。

ギャレンはジャンプするその瞬間まで、実は後ろを向いていたのだ。

やってくる敵に対して正面を向いたまま後方に飛んでも、そこまで距離は稼げない。

だから彼はアクセルを視界から外して、背を向けるように振り向いて跳躍したのだ。

そしてその直後、身体を捻るようにして無理やり空中で振り返り、右腰にマウントしていた自身の

専用武器であるギャレンラウザーを手に取って滞空したままその照準を、狙いを定めた。

つまり、アクセルが剣を振り上げた時にはもう、ギャレンは空中で攻撃を開始していたのだ。

「ぐおおあぁッ!!」

落下し始めているというのに、ギャレンの正確無比な射撃は全てアクセルに着弾した。

跳躍し、そのまま振り向き、滞空中に武器を手に取り、そのままの姿勢で照準を合わせる。

全ての動作がコンマ以下の世界で行われていたことを、銃撃による衝撃と痛みに膝を折らざるを

得なくなったアクセルは文字通りに痛感する。この敵は、自分以上に相手を観察していたと。

そして、自分の慢心を、的確に撃ち抜かれたのだと。

近距離戦と遠距離戦との違いはあれど、戦士としての技量の高さを思い知らされたアクセルは、

続けざまに繰り出されたチエイサーの近接攻撃にすら対応が遅れ、数回の殴打を許した。

チエイサーの重い攻撃を受けて大地を転がって距離を開けさせられたアクセルは、何

とか

エンジンブレードを杖のようにしながらも立ち上がり、眼前の戦士二人を精一杯睨む。

だがその視線に戦いが始まる前ほどの気迫は無く、わずかに諦観が見受けられるほど小さかった。

「手痛くやられたようだね。どうだい？ 僕のお宝の実力は」

そこにまたしても軽薄な声が割り込んできた。その声の主は、今も戦いを続けているのに。

一体いつこちらを見ているのか、自分にその余裕が無いのに確かめる術などありはしないが、

まるで実態の掴めない敵を目の当たりにしているようで、アクセルの心の炎が微かに揺れた。

ギヤレンとチエイサーによって追い詰められている自分に、あの蒼い戦士が倒せるのだろうか。

その答えはアクセルには出せなかった。だが、それでも彼は自身に言い聞かせ続け

る。

「俺に、質問をするな……………」

曲がらない。歪まない。折れない。自分はこの街を守る、仮面ライダーなのだから。胸部に受けた切り傷も、全身に浴びせられた銃撃も、痛みは引かずに身を蝕み続けている。

それでもアクセルは立ち向かうことを止めない。警察官であり、英雄である内は絶対に。

「嫌あ！ 来ないで!!」

『グルウ……………グギヤアア!』

ゆつくりと詰め寄る戦士を前にたじろいでいた時、不意に河川敷に悲鳴がこだまする。

次いで聞こえた人ならざるものの呻き声を耳にした直後、アクセルの体は動いていた。

悲鳴の発生源は、道路を挟んだ逆側の広場。そこにいたのは、人間の母子と異形の怪物。

デイエンドが討ち漏らした内の一匹が逆側へ転がり、たまたま居合わせてしまった彼女らへと

襲い掛かっていると、アクセルは疾走しながら冷静に状況の把握に努めた。

傷だらけの身体を動かし、襲い来る怪物の姿に怯えて目を閉じる市民の下へ向かう。

チエイサーによってつけられた切り傷が、装甲をまとっている彼に痛みを伴わせる。

ギャレンによって撃ち抜かれた全身が、痛覚神経を巡り巡って肉体に悲鳴を上げさせる。

痛い。苦しい。痛い。辛い。痛い。痛い。痛い。

脳裏に浮かんで消える泣き言は、戦士ではなく人間の部分が発している警報に思える。

吐き捨てたらどんなに楽か。走るのを止めたらどんなに楽か。助けなかつたらどんなに。

痛みを回避しようと発せられる警告を、アクセルは意に介することなく駆けて行く。諦めれば楽になる。これ以上の痛みを身体に与えずに済む。理解はしている。

けれどアクセルは足を止めることなく走り続け、そして怪物へとその剣を振るった。

『ギャギャア!』

「……………早く、逃げろ!」

「か、仮面ライダー……………?」

斬り払った怪物が悲鳴を上げて地に伏し、アクセルの言葉に母子がようやく目を開ける。

状況を把握するのに数秒を要したようだったが、それでも彼女らは一つ確信していた。

迫りくる謎の怪物から自分たちを救ってくれたのは、この街の英雄なのだということ。

そしてアクセルもまた、涙目になって虚ろ気にこぼした言葉を聞き、心を震わせた。

これでいい。これでいいのだ。これこそが自分の、自分たちが貫くと決めた道なのだと。

自身に降りかかる災厄と、不幸と、絶望と、恐怖と、それら全てと立ち向かうという決意。

並々ならぬその決意を実現可能にしたのは、彼自身もまた、仮面ライダーに救われた

からだ。

人知れず街に蔓延る悪と戦い、時に傷つき、時に悲劇に身を落とす、時に絶望したとしても、

必ず最後は立ち上がり、この街に暮らす人々の笑顔と平和を守り抜く仮面の英雄。

街の人々の希望の象徴、それこそが彼の知る仮面ライダーなのだ。

彼を救ったライダーは自身を、「街の涙を拭う二色のハンカチ」だと例えている。

街の涙を拭うということは、街に住まう人々の不安と恐怖を拭い去るということ。

街の流す涙とは、風の吹く街で暮らす罪もない人々が強いられる理不尽に対する涙。

普段はどこかとぼけているが、彼は決して間違た事は一度もしていない。

何度もぶつかって、何度も戦った。それでも、彼は自分以上に曲がらない男だった。

自分が受けている痛みや悲しみを、抗う力もない無辜の住民には味合わせたくはない。

無慈悲な暴虐に曝されるのであれば、いつその身を傷つけてでも守り通したい。

愛する街で生きる人々は、愛する街の一部なのだ。だから、何があっても必ず守る。

それが彼の、彼らの『仮面ライダーの流儀』なのだから。

「俺がこの街を守る!! 俺は、仮面ライダーだ!!」

【ENGINE / MAXIMUM DRIVE】

『ギギヤアア!!』

警察官として、仮面ライダーとして、そして一人の男として。

アクセルは恐怖に怯える母子を背に守り、起き上がる怪物に再びその剣を振るつた。トリガーを引いて〈機関部〉の力を最大解放させた剣には、異常なほど供給されたエネルギーが蓄えられており、それは振るわれた一閃ごとに衝撃波となつて敵を切り裂いた。

両脚部に装着されているタイヤ型のムーブアシストが作用し、まるでUターンしているように

見えるほどの鮮やかな回転を加え、アルファベットのAに身体を切断された怪物が爆散する。

荒い呼吸を繰り返しながら、背中にいる風都市民の安全を確認する。

母子は目立った外傷は無く、寸前で怪物の手で命を奪われる悲劇は回避されたようだ。

苦痛の中に見出し出した二つの命を肩越しに見つめ、これで良かったと改めて身に刻

む。

「ご苦労様。これでもう、君に抵抗する余力は無いはずだね」

【ATTACK RIDE CROSS ATTACK】

ところが、そこに割り込んできたのは、やはりデイエンドだった。

終始変わることのない煽るようなセリフと共に、彼は新たなカードを発動させる。

また別のライダーを呼ぶのかと警戒するアクセルをよそに、敵は行動を開始し始める。

【ヒツサツ！ ライダー・フルスロットル！ チェイサー！】

【DROP・FIRE・GEMINI BURNING DIVID

E】

「痛みは一瞬だ。あとはもう、何も感じなくなる」

チェイサーはバックルのスロットルボタンを親指で押し込んで構えを取り、

ギャレンは三枚のカードをギャレンラウザーに読み込ませてコンボを成立させる。

たった今ディエンドが使用したのは、自身の攻撃の支援が主となるアタックライドのカードの

中でも凶悪な部類に入る、『クロスアタック』というものだった。

効果は単純。自身が発動前に召喚していたライダーの必殺技を同時に発動させるというもの。

言葉だけで見れば脅威は伝わりにくいかもしれないが、アクセルから見れば非情極まらない。

満身創痍とまではいなくても、傷ついた身体へ向けて必殺技を撃ち込ませるのだ。

チェイサーは両足のバネを最大限に利用して空高く跳躍し、ギャレンもまた同じように

力の限りに跳躍し、二人のライダーは完全に同じタイミングでライダーキックを放つ。

紫色のエネルギーに包まれた右足による飛び蹴りを繰り出す、チェイサーエンド。

空中で二人に分裂し、身体を翻らせてオーバーヘッドの要領で放つ、バーニングディバイド。

ギャレンの使ったジェミニの効果で分裂した結果、実質三人分のライダーキックが全て、

たった一人で傷ついたアクセルへ向けて無慈悲に繰り出されたのだ。

「……………所長、済まない」

迫る三人の蹴りを前にして、アクセルはポツンとそう眩き、右手の剣を投げ捨てる。怒りからか、それとも他の何かなのか、彼は声帯を嗄らさんばかりに雄々しく咆哮を上げながら

ベルトのバックルにある左グリップを力強く握り、〈加速〉の力を最大解放させた。

【ACCEL / MAXIMUM DRIVE】

「はあああああああッ!!」

バイクのエンジン音が幾重にも重なるような音と共に繰り出されたのは、紅蓮の一蹴。

高空から落下してくる三人を相手に、アクセルはその場で後ろ向きに跳躍してから空中で回し蹴りをするように身体を捻り、右足のかかとから紅蓮の残光をまとう蹴りを放った。

彼の多用するライダーキックにして、〈加速〉の最大解放、アクセルグランツァー。紫紺と炎赤と紅蓮がぶつかり合い、周囲に凄まじい衝撃の余波を撒き散らす。風の吹く街に吹き抜ける風の全てを焼き焦がすが如き熱風は、街中を駆け巡った。こうしてまた、街の一角で人知れず、仮面ライダーは戦う。

「……………まあ、やっぱりこうなるよね」

近くにあつた芝生を燃やし尽くすほどの熱風を受けて、デイエンドは眩く。

彼の視線の先には、変身を強制解除されて倒れたアクセルがいた。

本来デイエンド、海東は自身の邪魔をした相手に対して慈悲をかけるようなことはない。

その証拠に、差し向けられたインベスはアクセルが倒した一匹以外は全て倒している。

しかし今の彼にとって大事なのはアクセルとの勝敗ではなく、新たな自分の『目的』なのだ。

だからこそデイエンドは変身を解除して、世界を渡り歩くための『膜』を呼び出した。

ゆつくりと近付いてくる『膜』を前にして、海東はふと思い出したように口を開いた。

「そう言えば、最初に言った賭けの話だけど、僕の勝ちで良いよね？」

そう言い残して海東は『膜』の中へと姿を消した。

しかし、彼の質問に言葉を返せる者など、そこにはいなかった。

ただ一人、ダメージによって意識を失ったアクセル、『照井 竜』以外は。

E p, 26 『Aの消失 / 不思議な依頼』

頃、
この世界に姿を現した謎の男、鳴滝と不思議な少年が海東と三つ巴になっていたその

た。
光写真館から飛び出していった士を追って、夏海とユウスケは新たな世界を探ってい

だ。
彼らの拠点である光写真館が転移していたのは、巨大な都市区画の中心部であったの

事実を
調査していくと、その都市が『風都』と呼ばれる場所であると判明したのだが、この

た。
聞いた士の反応は芳しくなかった。不思議に思う二人に、士は珍しく丁寧に解説し

「風都って街の名前を、聞いたことあるか？ しかも、都だぞ都」

「それは、ないですね」

「俺もない」

「だろうな。日本の首都は東京都で、残る都道府県の都を意味するのは京都府だからな。

そこに風都なんて市も無けりや、独立して都と呼ばれている街なんかもありやしなかつた」

士の解説をここまで聞いて、夏海とユウスケはようやく得心が言ったように頷いた。

そう、彼が言ったように、この世界では日本に新たなる都が設立されているのだ。

地理的狀況から鑑みるにこの風都と呼ばれる都市は、東京都と同じ機能を果たしているらしく、

事実彼らが知っている東京都の地理に当てはめても、思い当たる場所などもあった。分かりやすい場所を上げるなら国会議事堂などだが、今はそこに焦点を当ててはいない。

「ってことは、この世界は俺らの巡ってきた世界とは明らかに違う『何か』がある」

「何か、ですか？」

「それが何かまでは分からん。が、とにかく用心するに越したことはないってわけだ」
今警戒すべきなのは、これまでの世界と何かが違うという事実に対してだと語り、士は首から

いつもぶらさげている愛用のカメラを手に持ち、特に被写体もないのにシャッターを切った。

撮影から数秒後に吐き出されたフィルムと手に取り、そして分かっていたように失望して捨てる。

「どうやらここも、この世界も俺に撮られたがってないらしい」

もはやお決まりとなりつつある台詞を久々に聞いた二人は、そろって苦笑いを浮かべる。

しかし警戒すべき点を挙げられたと言っても、彼らには現状すべきことがない。

いや、与えられていないといった方が正しいだろう。今回は世界が、彼らに役目を与えていない。

これまでに旅してきた世界と、再び巡りなおすこととなった二つの世界を含めてそれは常に、

士に大して何らかの役割を与えてきた。会社の総支配人や、名門家の専属料理長などがそうだ。

ならば今回もそれがあるのだろうと当たり前のように思っていたのだが、今回はそれがない。

今までの旅路では一度もしていない経験である。それが、士の警戒心を異常なほど高めた。

だとしてもこのままではらちがあかない。故に、この場は行動あるのみであった。

「士君、とにかく今はこの世界の仮面ライダーについての情報を集めましょう！」

「情報、ね。前の『クウガの世界』みたく、外敵扱いされてたらどーすんだろうな」

「外敵じゃない！俺は未確認四号だ!!」

「要は他のグロンギ共と同種扱いってことじゃねえか。大して変わらん」

「なんだと!!」

「二人とも、ケンカは止めてください！」

なのにこの場の誰もがまとまろうとしない。完全なる個人主義者が筆頭であるからだ。

他人を煙に巻く発言で飄々とした態度を取り続ける土と、すぐ熱くなる無鉄砲なユウスケ。

二人の人柄をよく知る自分だからこそ喧嘩になるとは分かっていたが、それ故に止められないと

頭の片隅で理解していた。男という生き物は、意地を張りたがるものだと半ば諦観すらしていた。

こうなったら下手に関わるよりも、好きだけ言い争わせていつものようにユウスケが話に

乗せられて、収まりがつかぬのを待つしかないと計算式を立てた夏海が肩を落とした。しかし思わぬところからかけられた声によって、その計算式は別の答えを導き出す。

「あらあらあ〜？ これはもしや、痴話ゲンカって奴じゃないのお〜？」

「あらま本当だ！ 止めた方がいいかな？」

「ボキは遠慮しま〜す！」

「ならわたしも遠慮しま〜す！」

「どうぞどうぞ」

聞き込みや士の当てもないぶらり旅でやってきていた河口場に、漫才のような声が吹き抜ける。

それくらいであれば赤の他人と無視できるが、彼らの話の内容とその外見を見て無視することは

出来なくなっていました。

士とユウスケが食って掛かるのを見ていたのは、サンタの格好をした男とパーマ頭の男だった。

片方はいい。爆発したかのようなパーマの男など、都会であればいてもさほどおかしくはない。

しかし問題はもう片方の、サンタの格好をしている男の方だ。今の季節は、初夏のはずなのに。

日本は北半球に位置しているが、南半球ではクリスマスのは時期は夏真っ盛りというところになる。

重ねて言うが、ここは日本だ。北半球なのだ。12月の25日は、寒さ深まる真冬時であるのだ。

不可思議な連中が現れたと考えた士は、関心を寄せる対象をユウスケから彼らへと向ける。

「なんだ、お前らは？」

「ど、どどどうしようサンタちゃん！ イケメンのお兄さんの方に声かけられちゃったよ？」

「だ、だ大丈夫さウオツチャマン！ わたしたちは善良な、一般市民だもの！」

「そ、そっか〜！」

士に声をかけられた二人は、互いを愛称のような名で呼び合っている。

見た目からして、サンタちゃんとやらがサンタ服の男だろう。ではもう一人のパーマ男が

ウオツチャマンとかいう輩なのだろうと士は分析する。

「何を言ってるか知らんが、これは痴話ゲンカじゃない。これは、しっせ 騷だ」

「何が騷だ！」

「ユウスケ、お前俺とやる気か？」

「やってやろうじゃなか!」

誤解を解こうと二人の男の前に歩み出た士は、調子に乗って自身を上に見立てて話す。

ところがそこにユウスケが再び食らい付き、またも中断された喧嘩が再開してしまつた。

「あわわわわ!」

いさめるのを手伝ってもらおうにも、先の二人組は抱き合つて震えだす始末。

もはや彼らに扱ひ慣れた自分しか、止められる者はない。決断した夏海の行動は素早かつた。

「こうなつたら、光家秘伝・笑いのツボ!」

「ははははは! あはっ、はっ、あーっはっははは!!」

「ひいひいっ!」

「…………ハア、最初からこうすればよかつたんですよね」

いがみ合う士とユウスケの首のある部分を親指で指圧し、笑いの奥底深くに叩き落とす。

呼吸と直立すら困難となった二人の男と、それを行った女性を交互に見つめた後に、さらに強く抱きしめ合って震えだしたサンタちゃんとうおツチャマン。

合計四人の男を指先一つで沈黙せしめた夏海は、要らぬ気苦労だったため息を漏らした。

士とユウスケの二人が笑いのツボから復帰してから、十数分が経過した。

彼らは現在、風都の河口場ではなく街の中心部から少し外れた場所に赴いていた。

しかし今回は、士の先導による当てもなくさまようような愚行によるものではない。

「ほらほら！ あそこだよお、夏海ちゅわくん！」

「あそこよあそこ！ ほらあ、わたしの言った通りでしょー！」

卑しい商人というものを体現するかのようなゴマすりの姿勢をしている二人の男に案内され、

新たに夏海を筆頭とした士一行は、一応の目的を達成することができたのだった。

「この風都で探偵と言ったら、ここしかないのねー！」

「あ、それボキが言おうとしたのにいー！」

「ふふーんだ！ わたしが先に言っちゃいましたー！」

「あ、あの、教えてくれてありがとうございました」

「いえいえ、夏海さんのためならこれくらい」

「……………ホントに何なんだ、お前ら」

その目的とは、この風都にいる”探偵”についての情報を掴むことだった。

光写真館から外出した直後、夏海とユウスケはこの世界の事を少しでも士から聞いていた。

曰く、「この世界のライダーは、探偵をやっているらしい」との事だったが、

どうしてカブトの世界で倒れた彼がそんな事を知っているのかと少し疑ったりもした。

けれど士は、ライダーについては博識だ。自分の記憶は無いのに、それ以外には聡いのだ。

そのうえ、長く旅を共にしてきた夏海にとって、士の言葉は信頼に足るものでもある。

だから彼の言葉を信じて、先程の二人組にこの風都の探偵についてを訪ねたのだつた。

夏海がその事を伝えた直後から、二人組は言い争うようにここまで案内してくれたのだが。

「とにかくここが、この風都で一番の探偵がいるところなんですね？」

「うんうん！ 実ほボキの大親友なんだよね〜！」

「あ、ずるいぞウオッチャマン！」

「サンタちゃんだつて抜け駆けしようとしたじゃない！」

「あーもう！ とにかく、ここに凄腕の探偵さんがいるんだろ？ 行こうぜ士！」

「ん、ああ」

いつまでも夏海に媚びを売り続ける二人組を取り払うようにしてユウスケが声を荒げ、

一歩後ろで全員をカメラ越しに覗き見していた士を引つ張り、先へ行こうと歩き出す。

またも独断専行する彼らにおいて行かれまいとして、夏海も簡素にだが礼をしてから

二人の後を追いかけてゆく。後に残ったのは、醜い争いをして肩を落とした二人組だった。

やたらと夏海に取り入ろうとした二人組から離れてみて、三人は改めて目的地を見つめる。

しかし彼らの予想とは裏腹に、探偵のいる場所と案内されたのは、古いビリヤード場。平坦な屋根に取り付けられたカモメ型の風見鶏のペンキも剥げ、より一層の哀愁と重ねた

月日の重みを感じさせる外観となっていたが、それでも看板のビリヤードの文字は健在だ。

少なくとも巨大な都市である風都一番の探偵がいる場所だとは、到底思えなかった。

「あ、本当に看板があった」

「なにに？ 『鳴海探偵事務所』、『所長 鳴海 亜樹子』？」

「亜樹子って、女の人の名前ですよね」

「だろいな」

「じゃあ、女探偵ってことかあ！ なんか、素敵だなあ……………」

「ユウスケ、不潔です」

「なんでッ!」

そんなオンボロビリヤード場の屋根を支える支柱に、お手製の立て看板がかけられていた。

探偵というからには男だと思っていた三人は、その溢れんばかりの乙女チック絵描きセンスに

驚き、そして同時に「これで探偵が務まるのか」と頭に思い浮かべるが、考えを振り払う。

人は見かけにはよらないという言葉がある。それをまたも同時に思い浮かべた士たちは、

数秒の迷いはあったものの、看板の案内に従ってビリヤード場の二階へと上つていく。

二回を上がつてすぐの場所に扉があり、そこにも鳴海探偵事務所の札が設置されている。

ここまでできれば疑う気も起きなくなる。士を先頭に配置し、意を決して扉を開けた。

「ちわー、探偵つてのはいるかー?」

士の軽口と共にゆっくりと開かれたドアの先には、壁を背にして立つ一人の男の姿があった。

何故か室内なのに帽子をかぶり、そのつばを指で軽く押し下げるようにして俯く、一人の男。

どんな理由があるにしても、その姿を入室一番に見せられた士には、こう思う他なかった。

「何を気取ってんだ?」

「なんだとゴラア!!」

士に”気取っている”と揶揄されたその男は、先程までのクールな態度を一変させて、

その感情の赴くままに怒号を放つ。しかし咳払いを一つした後に、同じ体勢に戻る。

何がしたいんだと問おうとする士を手で制し、謎の男はまたも気取った態度で口を開いた。

「それで、今日はどんな風を街に運んできたんだ？」

「……………自分がかっこいいと思ってるのか？ 哀れだな」

「なんだとゴラア!!」

「またも憤怒し、今度は掴みかかろうとさえしてくる男を前に、夏海とユウスケは硬直する。」

しかしその男が士たちに危害を加えることはなかった。いや、出来なかった。

男は部屋の奥から出てきた背丈の低い女性に耳を掴まれ、引きずられていったからだ。

「アンタって奴は本当にいゝ!! 売上下がったらどないしてくれるん!!」

「亜樹子オ! おまつ、なんでハードボイルドが分からねえんだよ!」

「ぐちぐち言うな、ハーフボイルドの癖に!」

「誰が半熟だコラア!! 撤回しろ亜樹子、今日の俺は過去最高にハードボイルドなんだよ!」

「知らんわそんな事!」

部屋の奥に設置されている執務用の机の前まで引きずられた男と、引きずった女の二人が

ぎやあぎやあと言ひ争ひ始める。客を放っておいて騒いでいいのか、と士が内心で男の女

やり取りを眺めるが、結局二人の口論は女性の出したスリッパによつて決着がついた。

「おりゃあー！」

「いつてえ!! オイ亜樹子オ!!」

おそらく便所用のスリッパに見えるそれを、女性が男の頭部へとすつぱ抜いたのだ。幸いにも男は帽子をかぶっていたため損傷はない。だから室内で帽子をかぶっているのかと

士は勝手に納得し、それでも眼前で繰り広げられる茶番に口を挟めずにいた。

「なに？ アタシに手えだすの？ そんな事したらりゅー君が黙ってへんで！」

「ハッ、何が”りゅー君”だ。照井の奴は捜査で署の方に缶詰だろうが」

「……………りゅーくんなにしてんねーん！ はよ帰ってきて〜！」

「だあああもー！ 泣くなっつーの!!」

士たちの見ている前で突如始まった茶番は、突如幕を下ろしたのだった。

何故女性が泣き始めたのかも分からぬままに、三人は互いの顔を見合わせる。

仕方なく声をかけようとしたその時、不意に横にある帽子掛けが音を立てて開いた。

否、帽子掛けであると思っていた壁は、巧妙に隠された扉だったようだ。

その扉がいきなり開き、奥から現れた人物が驚きに目を開く夏海とユウスケを見て状況を察して場にいる全員に聞こえる声量で言葉を発する。

「亜樹ちゃん、お客さんが来てるんだから泣いてる場合じゃないと思うよ？」

「それもそうね！」

「……………ハア、助かったぜ相棒」

「毎度毎度よくやるね、相棒」

帽子掛けの扉の奥から現れたのは、何故かクリップで髪を留めている細身の青年だっ

た。

明るい緑色とクリーム色のストライプが映える服装に身を包む青年が、左手に抱える本を

開いて中を読むように覗き込みながら、帽子の男と泣き止んだ女性に話を切り出している。

士たちからしてみれば、いつ終わるとも分からない茶番に終止符を打ってくれた恩人とも

言うべき青年へと感謝の視線を向ける。

開幕直後の嵐は収まり、改めて士たちと帽子の男たちの六人はテーブルを挟んで向かい合う。

「先程は失礼しましたー、私がこの探偵事務所所長の、鳴海亜樹子です」

「そしてこの俺が、どんな難事件であろうとも必ず解決するハードボイルド探偵の」

「んでこっちのが、ハーフボイルドの左 翔太郎くんです」

「ハードボイルドだっつってんだろ亜樹子オ！」

「うっさいわ！ それでー、こちらの大人しいのが、フィリップ君です」

「どうも」

先程までやかましく泣いていた女性が、自分の両隣に座る男と青年を紹介していく。紹介に預かった二人に夏海は軽く頭を下げ、今度は自分たちを紹介し始める。

「私は、光 夏海と言います。それで、まずこつちにいるのが」

「世界中の誰もが求めてやまない最高の逸材、門矢 士様だ」

「土君で、こつちにいるのが、小野寺ユウスケです」

「どもつすー！」

相変わらずの俺様節を語る士に向けて、夏海は無言のまま右手の親指を見せつける。その威圧感を感じた彼は、自分の首筋をガードしながら「おお、怖え」と小さく呟き、ユウスケはそんな士のピンチ(?)に気付きもしないまま人懐っこい笑みを浮かべる。これでこの場にいる全員の紹介が終わり、いよいよ本題に入る。

「それでー、今日はご依頼の事でいらつしやったんですかー?」

「え、ええ。まあ、依頼と言いますか、聞きたいことと言いますか」

「おい夏ミカン。自分にできることを金まで払ってさせようとするのが探偵って奴ら

だ。

そんな連中に聞きたい事があるなって言ってみろ、すぐに報酬の話をもちかけられるぞ」

話し合いの開幕直後に、土の口から爆弾が放り込まれた。

即座に鋭い視線を向ける翔太郎とフィリップだが、土本人にはまるで届いていない。出会って五分ほどしか経っていない人によくもそこまで酷い事を言えるものだと、良くない方の才能に感心、というより辟易しながらも夏海がフオローに回る。

「す、すみません！ 土君は、その、人との付き合い方が絶望的に悪くて！」

「おい夏ミカン」

「ごめんなさい！ 確かに口も態度も性格も、どれ一つとつてもいいところなんか無い
い

土君ですけど、それでも悪気なんかありません！ 本当にごめんなさい！」

「俺も謝ります。土は本当に他人を思いやれない奴なんです。すみません！」

「お、おう。別にお嬢さんが謝る事なんか何も無いさ」

「そーよそーよ！ 男が女の子に謝らせるなんて、サイテーね！」

「女性に優しく振る舞うのが、男としての器量であり魅力だと聞いたことがある」
「……………勝手にしろ」

弁解しようにも口を開く暇すら与えられず、彼はあつという間に5対1の環境へと放り込まれてしまい、すこぶる機嫌を悪くしてカメラをいじくり始めた。

こうなるとしばらく士は根に持つだろうが、少なくともこれからの話し合いに水を差す

ようなことはされないだろうと、心から謝りながらも障害が一つ減ったことを内心喜んだ。

翔太郎たちからすれば、一緒に来た仲間の一人をよくもそこまでボロクソに言えたものだ

半分感心していたのだが、夏海もユウスケもその本心など知る由もなかったが。

とにかく士がいない子扱いされた今、ようやく円滑に話を進められる状況が作られたのだ。

「えっと、とにかく私たちは「仮面ライダー」について色々知りたいんです」

「か、仮面ライダーに？　そ、そりやまたどうして？」

「翔太郎、声の上擦ってるよ？」

「んっんん！ それで、訳を聞かせてくれるかい、お嬢さん？」

「その、信じてもらえないかもしれないんですが」

夏海の語った「仮面ライダー」という単語に動揺を浮かべた翔太郎を怪訝に思いながらも、

彼女はそのまま自分たちの本来の素性についてを明かそうと、再び口を開いた。が、しかし、そこから彼女は言葉を発する機会を失ってしまう。

「失礼する、鳴海探偵事務所の皆さん」

応接室も兼ねている探偵事務所の玄関に、スーツ姿の男がいきなり現れたのだ。扉もノックをせず入ってきたその人物に、誰もが警戒心を露わにして問いかける。

「誰だ、アンタ？」

「あのー、申し訳ないんですけどー、今依頼のお話中でしてー」

「依頼なら、私も同じだ。いや、こちらの方がおそらく優先度が高い」

唐突な登場からそのまま、そのスーツの男の話と歩みは止まる事はなかった。ずかずかと探偵事務所内に入り込み、座り込んでいる翔太郎たちに視線を向けて、またしてもいきなり話を切り出し始めた。

「私からの依頼だ。もちろん、君たちを仮面ライダーと知つての事だが」

「ッ!?」

スーツの男の言葉に、翔太郎とフィリップの二人が同時に反応する。

男の話と相まって、流石にこの場でその反応が何を意味するかを理解できないほどの無能はここにはいない。だからこそ驚いていた。探偵が、仮面ライダーだと知って。

夏海やユウスケの驚愕とは別の驚きによって硬直していた翔太郎とフィリップは、潜り抜けてきた場数が違うと言うべきか、すぐに立て直して冷静に男を見つめる。

「アンタ、何者だ?」

「少なくとも一般人ではないね。君は、誰なんだい?」

「……………私は、私の名前は、羽田睦はたむつ 永久ながひさ。依頼があつてここに来た」

「質問に答えてないぜ。アンタは、一体何者なんだ」

羽田睦を名乗るその男の答えに、翔太郎は先程以上に低く重い言葉で聞いた。ただす。ついさつきまでの明るくおちやらけたような彼はいない。そこにいたのは、探偵だった。

風都唯一にして”準”最高の探偵の言葉に、羽田睦は重苦し気に言葉を重ねた。

「私は、〈ガイアメモリ〉の関係者だ。だから、君たちに頼みがある」

「なんだと?」

「……………今は話を聞こう、翔太郎」

「そうかよ。分かったぜ、相棒。んで、羽田睦さん。ご依頼は?」

羽田睦の口から漏れた、ガイアメモリという言葉によって翔太郎たちはその全身をこれでもかと言わんばかりに硬直させていた。理由が分からない夏海たちにとつては

何が何だかさっぱりであるが、当人たちからしてみれば、とても重要そうであったのだ。

未だにいじけている土同様に無言となった夏海たちをよそに、羽田睦は言葉を紡いだ。

翔太郎によつて促された彼の言葉は、この場にいる誰もの想定を遥かに超えていた。

「『U』のメモリを、究極のメモリを探してほしい」

E p, 27 『Uを探せ / 一年半前の悪夢』

風の吹く街、風都。

その街の波止場近くに建つ、古びたビリヤード場のその二階にある探偵事務所で、誰もが予想だにしなかった依頼が、不穏な気配をまとりつかせながら舞い込んだ。鳴海探偵事務所の面々、左 翔太郎とフィリップ、所長の鳴海亜樹子の三人と、ある目的のためにこの探偵事務所を訪れていた、門矢 士、ユウスケ、夏海の三人。そして彼ら六人の目の前で依頼を口にした、羽田睦 永久というスーツ姿の男。まさにその場の誰もが、ソレを口にした羽田睦自身でさえ、驚愕に震えていた。

「待ちな、羽田睦さん。その、究極のメモリつてのは何なんだ？」

しかしそこは場数の違いからか、室内でも帽子を着飾る男、翔太郎がいち早く回復し、

いきなり現れて話を持ち込んだ羽田睦に対して、依頼の内容を再度尋ねる。問い返された本人は、至って真面目そうな顔つきを保ったまま、同じ句を告ぐ。

「私が探しているのは、『ULTIMATE』、アルティメット〈究極〉の記憶を宿すガイアメモリだ」

「なんだと？」

「アルティメット……興味深い」

冷静に告げられる話を聞いて、翔太郎とフィリップの顔つきが文字通りに変わる。

それは彼らが、この風都という街を心から愛し、街を穢す悪を心から憎んでいる証でもあった。

探偵コンビの横では、亜樹子も先程までのおちやらけた雰囲気を潜め、街に潜んでいる悪意の

象徴とも呼べるガイアメモリ関連の依頼が来たことに対して、硬い表情を浮かべていた。

しかし、こと異世界から来たばかりの士たちには何のことだか分からない。

この風都と呼ばれる街がどうやら、彼らの中にある東京都と酷似した都市であるということ

以外は、まるで何も分かっていない。ガイアメモリも、この世界の仮面ライダーについても。

ただ、意識を失っていた士が何故か、この世界のライダーは探偵をしているという情報を知っていたため、こうして風都で一番と名高い探偵事務所に足を運んだだけなのだ。

自分たちとの話し合いに水を差された士は、先の除け者扱いによつて募り続けていた苛立ちを

最高潮にまで到達させてしまい、感情の昂りの赴くままに羽田睦へと抗議を投げかけた。

「おいサラリーマン、今は俺たちが先客だ。順番を守るくらい、マナーとして当然だろ」

「ちよ、ちよつと士!」

「士君!」

「黙つてろ。いいか、俺たちが先に話していて、アンタが後から来た。OK?」

愛用のカメラを左手にしっかりと持ちながら、士はやたらオーバーに話を強調してこ

じらせる。

どうしてこうも大人げないんだと喚きたくなる気持ちを抑え、夏海とユウスケは溜息を漏らす。

士から暗に「俺らが先だ、お前は黙つとけ」と釘を刺された羽田睦は、ゆつくりと口を開いた。

「そう、だな。私が間違っていた。いくら急を要するといっても、順番は守るべきだった」

そう言ってから羽田睦は、鳴海探偵事務所の扉を開けて出ていこうとする。

しかし、あそこまで話を持ち出されて今更帰られては困ると、探偵の二人は引き留める。

加えてそこから罪悪感を感じた夏海とユウスケの二人も加わり、どうにか男を思い留まらせた。

だが、面白くないのは士だ。全員が羽田睦を引き留めたのもそうだが、まさかあんなにあつさり

自分の言い放った無茶ぶりに等しい話を受け入れ、認められるとは思ってもみなかった

た。

器の大きさが違うことを自覚させられて、士はまたしても不機嫌レベルを増大させる。

士がまたカメラいじりを始めようとしたところで、翔太郎から追及の音がかけられた。

「どういうつもりだ？　ガイアメモリが関係してんだから、順番なんて言ってられないんだぞ」

「俺たちはそのガイアメモリとやらの事を知らない」

「何だと？」

「ガイアメモリなんてものが無かった世界から来たんでな」

「…………ガイアメモリの、無い世界？」

翔太郎からの追及を不愛想に突き放して語る士の言葉に、探偵コンビが反応を示す。特に冷静沈着な青年に思えたフィリップが、好き放題に伸びた髪の隙間から鋭い視線を浴びせる。

対して二人分が増えた視線を一身に受ける士は、応える義理はないとばかりに無言を

貫く。

場が先程とは別の意味での静寂に包まれようとした瞬間、立っていた羽田睦が問いを投げかけた。

「さっきもそうだったが、君は一体何者なんだ？」

浮かび上がった疑問を言葉にしただけのつもりだった男だが、この相手にだけは違う意味を持つ。

もはや定型句と化したその言葉を鼓膜に焼き付けた士は、これまた決められた台詞を辿り告げる。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

士たち三人が鳴海探偵事務所を訪れてから、もうすぐ一時間が経過しようとしていた。

本来なら、仮面ライダーについての話を聞くだけで済んだはずなのだが、予想外の事態が

重ねて起こったために、これほどの時間を費やすことになってしまったのだ。

そこから彼らは、探偵や羽田睦たちを信じさせるために、自分たちのことを語り尽くした。

自分たちが異世界の住人であったこと、異世界を守る仮面ライダーであること、異世界を巡り力を集める旅をしていること、そして旅先の世界で起こる滅びの現象のこと。

当然最初は彼らも信じようとしなかったが、そこはユウスケが体内からアークルという

クウガに変身するための超古代のベルトを呼び起こすのを見せて、強引に信じさせた。

「つはく。しかしまあ、異世界なんてものが本当にあるとはな……」

「異世界にもいるんや、仮面ライダー」

「ガイアメモリ以外にも、様々な脅威が世界を蝕んでいるんだね」

事の成り行き上、その場にいた羽田睦にも異世界の事を話してしまったのだが、彼は思いの外良心的かつ柔軟な人柄のようで、士たちの話も肯定的に受け止めてくれた。

三者三様の反応を見せている最中、士たち異世界側の視線は全て、もう一人の探偵へ向けられる。

「異なる世界と書いて異世界。古くからあの世とこの世と言ったように別次元の存在や世界を

肯定している文献や資料はいくつもあつた。しかしそれらを確定的なものへと至らせるものは

何一つ得られた形跡は全くない。それでも異世界や異次元といった、隔絶された異なる場所の

存在に関しては否定できるものではなく、現にこうして未知の力や現象を発現させた特異例が

目の前に存在している。異なる常識、異なる理論、異なる概念、異なる文化、ゾクゾクするね!!」

たった一人、事務所の狭い室内を行ったり来たりしながら声を荒げるのは、フィリッブだった。

それまではずぐに熱くなる翔太郎を抑える、ブレーキのような役割を果たしていたの

に、

今は完全に立場が逆転している。いや、翔太郎をもつてしても止められない分、より質が悪い。

身内の恥とも言うべき姿をあまり見せたくないようで、「放っておいた方がいい」と呟いた

翔太郎の言葉に、士たちは人は見かけによらないものだとしみじみと実感しつつ従った。

しばらくしてからフィリップが大人しくなり、改めてこの場にいる七人での会談が始まる。

しかし会話を始める前に、翔太郎がどうしても聞きたいことがあると前置きを語った。

「羽田睦さん、もう一度俺の質問に答えてくれ。アンタは一体何者だ？」

「……………質問の意図がよく分からないんだが」

「とぼけるなよ。一般市民が、究極のガイアメモリの搜索依頼なんかするはずねえ。

それに言ってたよな、『ガイアメモリの関係者』だって。アレどういう意味だ？」

「……………羽田睦 永久。君は、『ミュージアム』の人間だったんじゃないのかな？」

復活したフィリップもそこへ加わり、翔太郎と共に羽田睦の追及に拍車をかける。彼らの語った、『ミュージアム』という言葉の意味が分からない士たちが疑問符を浮かべると、

傍らで静観していた亜樹子がやたらと大きな声を出来る限り小さくして、教えてくれた。

「ミュージアムってのは、この風都にガイアメモリをばらまいてた組織のことよ」

「悪の組織、ってヤツですか？」

「うん、大体そんな感じ。それで、そいつらには『財団X』ってスポンサーがいて、

裏で取引をしてガイアメモリの実験や量産を、この街で行っていたの」

「街丸ごと実験場に………なんて奴らだ！」

見知らぬ世界にも悪の組織の影があることを知り、その非道な行いを聞いたユウスケは怒り、

夏海も直情的なユウスケほどではないにしろ、少なくとも良い印象は抱けなかった。

そして、この羽田睦という男がそんな組織の一員なのかもしれないと思うと、どうし

ても

懐疑的な視線を向けざるを得なくなる。だがその視線に、スーツの男は気付いていた。

探偵コンビの投げかけた質問に対して、羽田睦は数秒黙った後、ゆつくりと語り出した。

「私はこの街が好きだ。この街で生まれ育ったものは皆、そう思っていることだろう。そして、そんな美しく優しい街を裏から汚していくガイアメモリを、許してはおけない」

「それは、罪の意識からか？ ミュージアムがあつた頃に自分がした、罪の懺悔か？」
「…………ミュージアムはもうない。君たち仮面ライダーの活躍によって、悪は倒された。」

しかしそのミュージアムの遺した悪の芽は、未だにこの街を根深く蝕んでいるんだ。

断ち切らなければならない。今はまだ小さな芽が、大きな破壊の花を咲かせない内に」

「後悔しているのかい？」

「そうとも、言えるかな」

羽田睦の語った話に、探偵コンビは顔を見合わせてうなずき合う。

そしてフィリップは手にした本を音を立てて閉じ、翔太郎は帽子を深く被り直した。

「なら、請け負わせてもらうぜ、その依頼。街の涙を拭うのは、俺たちの仕事だ」

「街にまだガイアメモリが流通しているのは、ミュージアムの残滓があるからだ。」

その禍根ごと、全てを叩いて潰すしかない。そして、それが出来るのは僕らだけさ」

「ああ。行くぜ、相棒」

「ああ。行こう、相棒」

依頼を承諾する旨を伝えた二人に、羽田睦は表情を明るくして感謝の言葉を述べる。

そこからは依頼をするにあたっての手続きの話し合いに入ったが、ふと気付いたように

顔を上げた彼が、士たち三人を見つめて不思議そうに尋ねた。

「そういえば君たちは、私より先に依頼をしに来ていたんじゃないかな？」

その、いいのかい？　ガイアメモリ捜索が長引いたら、君たちの方の依頼が

「あ、それなら大丈夫です！　私たちは依頼をしに来たというより、その」

「仮面ライダーを探したくて、それで色々あったんで」

「……………ああ、なるほど。私が彼らの正体をしゃべってしまったから」

納得したように首を何度か縦に振る羽田睦に、夏海とユウスケは苦笑を向ける。

そして今更正体がバレたことに気付いた翔太郎は、男にしては甲高い悲鳴を上げた。

フリーリップはそれを楽しそうに見つめ、隠すべき秘密を露見させた相棒をたしなめる。

「迂闊だったね、翔太郎」

「ああ……………まさかハードボイルドなこの俺が、こんな初歩的なミスをやらかすとは」

「何がハードボイルドだ。その女子中学生が言っていたみたいな半熟野郎だろ」

「誰がハードボイルドだ!!」

「誰が女子中学生や!!」

「まあまあ二人とも」

途中で士が暴言を放り込んだものの、相棒の仲介によつて何とか事なきを得た。

そこから士たちは、改めて探偵事務所の間々と羽田睦を加えて話し合いをしたいと考え、まずはこの世界について知らなければならぬ情報のことを話題に挙げた。

最初に欲したのは、この世界の仮面ライダーについて。

これは目の前にいる探偵コンビがそうであると割れたため、話題は次に移った。

続いて彼らが望んだことは、先程から羽田睦や翔太郎たちが口にした、あるものについて。

「ガイアメモリってのは、そもそも何なんだ？」

ハッキリとものを言えない夏海やユウスケの代わりに、士がバツサリと切り伏せる。

この世界特有の力であろうガイアメモリについて、士たちが持つ情報は無いに等しい。

知らないことを知ろうとするのは当然だし、それがこの世界で与えられていない”役割に

関係することがあるかもしれない。だからこそ、その情報を得るのは急務でもあった。

異世界から来たということは信じたものの、だからと言ってわざわざこの世界の力を教えてしまってもよいのだろうかと思案する探偵コンビだったが、その二人の懸念を差し置いて、手持無沙汰となった羽田睦が士たちにガイアメモリについて語り出した。

「ガイアメモリというのは、ミュージアムが財団Xの資金援助を受けて大量生産した、地球の記憶とも言わべき固定化されたエネルギーを内包させた、悪魔の兵器だよ」
「へ、兵器、ですか？」

「ああ。大きめのUSBメモリのような形で、その上値段も非常にリーズナブルだね。最安値でも一本5〜7万円で購入できるし、存在を知らなければ怪しまれもしない。」

日常生活の中で確認されても気付かれない、文字通りに悪魔の作った兵器なのさ」
「最安値って、まさか、お金で買うんですか?!」

「そうだ。ミュージアムの売人たちは、この街の一般市民相手にメモリを売りさばく。メモリごとに能力が違うから、強い物は高値で、弱かったり特殊だったりする物は安価で売られている。もちろんそれは、ミュージアムの人体実験も兼ねているんだ」

説明の冒頭を聞いただけで絶句した夏海とユウスケの問いに、羽田睦は淡々と答えた。

そしてまだ序の口だとばかりに、この街の知られざる裏側の事情を続けて話す。

「ガイアメモリには、二つの種類がある。原性のメモリと純性のメモリの二つだ」

「原性と純性、ですか？」

「そうだ。一般的にミュージアムが取り扱い、風都に流通しているのは原性の方で、

これらは非常に強い中毒性と依存性を有している。簡単に言えば、麻薬と同じだ」

「麻薬?!」

「一度使えばその力に心酔し、のめり込んで、ついにはメモリに精神を支配される。

使えば使うほどにメモリとの結合が深まり、自分の意志では止められなくなつて

暴走状態に陥ることもよくあった。そして使い続ければ、最後には使用者が、死ぬ」

「まさに、悪魔に魂を売り渡して得られる力、ってわけか」

絞られるようにしてでた土の声が、鳴海探偵事務所の中に小さく響き渡る。

探偵コンビと亜樹子はガイアメモリを熟知しているため、言いえて妙なその例えを

否定することも肯定することもできず、ただ黙って羽田睦の次の言葉を待ちわびた。計六人の期待に応えるように、スーツの男が一呼吸の後に原性の特性を語る。

「原性メモリを使うためには、疑似挿入口と呼ばれる生体コネクタをメモリ使用者の身体に、特殊なレーザーメスによる処置による処置で付着させなくちゃいけない。

コレはメモリを購入したその場で行われるから、ほとんどの場合がそうなる」

「生体コネクタ？」

「このコネクタを使用しない限り、ガイアメモリは人体と適合することはない。

あ、いや、絶対ではないんだ。ただ、その方が使用者との適合率が上がるという理由で

そういう処置を施しているだけだね。ただ、やはりメモリ内部の毒素はそのまま残る」

「ソレを使うと、どうなっちゃうんですか？」

「……………『ドーパント』と呼ばれる、怪物になる。地球の記憶の一部をその身に宿した、

醜悪で邪悪で最悪な、異形の怪人へと姿を変えてしまう。どこの誰でも、自由にね」

この世界におけるライダーの敵、怪人の名がドーパントと呼ばれていることを、士たち三人は瞬時に頭に叩き込み、次いで語られる羽田睦の解説に耳を傾ける。

「地球の記憶というのは、地球が経験してきた現象や歴史の事だと思ってくれればい

い。
 例えば、〈炎の記憶〉のメモリなら炎の力を持つ怪人に、〈水の記憶〉のメモリなら水の力を持つ怪人へとその姿を変えることが出来る。夢の超人になれると銘打つ

て、
 何も知らない訳ありな市民を騙し、より高品質なメモリを作るための生体データを
 取るための実験材料にする。かつて、ミュージアムが行っていたことだ」

「なんて酷い!!」

「人を、そんなことのために………」

例によって義憤に駆られる夏海とユウスケの二人だったが、彼女らの言葉に反応を示した羽田睦が、着ていたスーツの襟を右手で正しつつ、表情を暗くして話を続けた。

「実は、さつきも軽く触れたけど、原性メモリは生体コネクタ無しでの直接挿入、

いわゆる直挿しをすることもできる。ただ、これはメモリを扱う上ではなるべくしてはならない危険な方法なんだ。毒素の事もそうだけど、地球の記憶によって人体を丸ごと変質させるエネルギーの余剰分を、直挿しでは処理できなくなる。

コネクタを通せば問題ないが、直挿しで使うと、後遺症が残る可能性が高いんだ」

「後遺症、ですか」

「……………そこにいる探偵のお二人なら、きつと分かるはずだ」

それまで無言のままに、羽田睦のガイアメモリ講座を聞いていた自分たちへと話題を振られた探偵コンビは一瞬戸惑ったものの、思い当たることがあったのか、顔を伏せた。

士たちは知らないことだが、かつてこの風都では、まだ成人になっっていないような子どもを対象にしたガイアメモリの実験が行われたことがあり、そういった中で、ガイアメモリをコネクタ無しで直挿しした結果引き起こされた、悲しい事件があった。

翔太郎の行きつけの床屋の娘が、同級生の友達グループでガイアメモリを遊び感覚で使い回していたことを探偵として突き止め、彼女らの若さからの葛藤と向き合った。事件は仮面ライダーである二人と、そしてもう一人の風都を愛する男の尽力によって

解決することができたのだが、その代償は大きかった。街の風を愛した男は消され、ガイアメモリを直挿して使っていた中学生たちは、その後遺症に苦しめられた。彼らが使ったのは〈鳥の記憶〉のメモリで、コネクタを有していた床屋の娘以外の男子中学生二人と女子中学生一人は、体の一部が怪物化したままになつてしまったのだ。

幸い回復には向かつているものの、まだ幼い彼らの心と体には、一生消えない傷が深々と刻まれることとなり、当時の探偵二人は事件解決後も怒りと切なさに揺れた。その時のことを思い出した翔太郎とフィリップは、互いに怒りの感情を再燃させ、今もなお街に蔓延っているガイアメモリに対する正義感を、その心に募らせる。

そんな様子を見せられた夏海とユウスケは、改めて彼ら二人が仮面ライダーである事を

認識し、街の平和を守るために身を犠牲にして戦ってきたのだと、尊敬の念を抱いた。そこまでの話を聞いていた士は、まだ話は終わってないだろと不愛想に告げ、続けさせる。

「それで、純性のメモリってのは？」

「純性のメモリは、原性メモリにあつた毒素を限りなく取り除いたガイアメモリだ」

「じゃあ、身体にいいガイアメモリってことですか？」

「身体にいいメモリがあるかどうかは置いておくが、まあ人体にさほど影響はない。

この純性のメモリはコネクタの代わりに、専用のスロットを介さなければ使用できない

弱点があるものの、使用者の安全を確保する作りになっている。原性の改良版だね」

「だったらどうして、そっちを使わないんですか？」

「もつともな疑問だが、この純性メモリはミュージアムでは試験的に作られていた

数本しか存在しないんだ。他にも何本か開発はされたいが、それらのメモリの開発に

携わっていた人物が途中で音信不通になってしまって、以降の生産はされていない

「じゃあ、もしかしてそのメモリを持ってるのって」

「……………俺たちだ」

ユウスケの予想を肯定するように、翔太郎が壁に背を預けたままの姿勢で呟く。

そのまま彼は黒いジャケットの内ポケットをまさぐり、手のひら大の何かを取り出

す。

彼の動きに合わせるように、座っていたフィリップも懐から同じ大きさの物を手にした。

「コイツが俺たちの使う純性のメモリ……………ドライバーを使って変身できる」

「しかし原性メモリと比べると威力はこちらが劣る。毒素の有無が関係しているようだ」

翔太郎が黒塗りの『J』のメモリを、フィリップが若葉色の『C』のメモリを見せて、

あまり時間を置かずに再び懐へと戻す。士はそれらに、とてつもない力が宿っている

と直感で理解し、その力に関する事がこの世界ですべきことなのだと独自に決めつける。

粗方の解説は済んだと最後に締めくくり、羽田睦の即席ガイアメモリ講座の幕が下り

とりあえず知りたいことも知れた士たちは、最後に席を立とうとしたスーツの男へと

とある提案を口にした。

「なあ、そのガイアメモリ探したが、俺たちも手伝ってやるよ」

「え？」

「はあ!!」

「士!!」

「士君!!」

提案を持ち出された羽田睦はおろか、連れの二人や翔太郎までもが驚きに声を荒げた。

もちろん当の士はまるで動じることはなかったが、それでも声が予想以上に響いたように、

持ち前のクールな顔つきをわずかに歪めて、横の二人に小さく「うるさいぞ」と囁く。しかし、ここで黙っていられないのが翔太郎だ。

彼は自分たちを頼って来る依頼人を放っておけないし、ましてや自分たちが誇りを持つ

仕事の邪魔をされるなど腹立たしいことこの上ないと思っている。つまり今回の士

の

提案は、翔太郎にとってではまさにその邪魔立てにあたる行為になるわけなのだ。

「おいアンタ、さつきからずつと、なーんか癪に障る奴だと思つてたら、

いきなり何言いだすんだ。人の商売の邪魔しやがつて、ああ？ おお？」

「ヤクザの下つ端みたいだね、翔太郎」

「ハッ！ 俺がヤクザならコイツはチンピラだぜ。ホラ、素人はとつとと帰んな！」

「三流が生意気言いやがつて。どうせ探偵つつつても、犬猫探しが関の山だろ」

「んなツ!! お前、どうしてそれを!!」

「後ろの執務机の上に、犬やら猫やらの張り紙が散らばつてんぞ」

フィリップの的確な突込みも意味を成さず、翔太郎と土が激しくぶつかり合う。

かっこよく決めたと確信した翔太郎だったが、その相手の方が一枚上手だったよう
で、

普段からやる気が出ずに整理を怠つた迷子の搜索依頼の山を包み隠さず見られてしまつた。

あれだけ啖呵を切つたのにこの有様では格好はつかない。恥ずかしさに顔を真っ赤

にした

翔太郎は、こんなことになってしまったそもそも元凶に怒鳴るようにあたりちらす。

「オイ亜樹子オ！ お前がこんなモン請け負うからこんなことになるんだろが!!」

「はあ!! あたしが悪いって言うの!! 信じられへんわ!!」

「ハードボイルド探偵が、街中駆けずり回って迷子の犬猫捜すわけないだろ!!」

「何がハードボイルドよ!! あたしがいなきやこの事務所潰れてたのよ!!」

「昔の話を掘り返すんじゃないやねえよ!! 今は関係ないだろうが!!」

「おおありよ!!」

およそダンディズムを掲げる探偵がするとは思えない仕事ばかりを、勝手に請け負う所長の立場にいる亜樹子に愚痴を吐露するも、かえって言い争いの熱は増していく。とうとう頬のつねり合いにまで発展した二人を、フィリップ以下四名は無言で見つめる。

依頼人の前で私情をこじらせるなよ、と脱力しつつ呟く士の代わりに、ユウスケが喧噪の中でも我関せずといった態度で本を読みふける青年に助け舟を求める。

「ね、ねえ。あの二人、どうにかした方が良くない？」

「……………いつもの事さ。あと一分もしない内に、アキちゃんのスリッパで決着^{カタ}が着くよ」

そう言つて本から視線を外さないフィリップに、今度はユウスケが脱力する番となつた。

そして彼の予告通り、27秒後に、亜樹子の突っ込みスリッパが高らかに名乗りを上げた。

士たちが鳴海探偵事務所を訪れてから、三時間ほど経過した現在。

落ち着きを取り戻した彼らは相談し、その結果から二手に分かれて搜索を開始した。

風都の東側を翔太郎と士、そして羽田睦の男三人組が担当し、

反対の西側をフィリップをはじめ、夏海、ユウスケ、亜樹子の四人が担当となった。

もちろん最初は全員で固まって搜索しようと平和的に検討していたのだが、またして

も

両陣営の問題児である士と翔太郎がいがみ合いを始め、どちらが探偵として優れてい

るかを

ハッキリさせようという結論に至り、二人は互いを睨み付けながら事務所を出て行った。

その後、羽田睦がフォローに行くと言い出し、彼らの後を追いかけて行った形になり、残された四名は仕方なく、残ったメンバー同士で仲良くやろうということに収まった。

しかし場を混乱させる厄介な男がいないだけで、案外会話というのははかどるものらしく、

先程の場では話す機会がなかった四人はそれぞれ、互いに互いの話で盛り上がり始めた。

その結果、気軽に名前呼び合う仲になり、こうして行動を共にすることとなった。

「はあく、風が気持ちいいですねえ」

「ホントだよ。俺、この街の風気に入っちゃったかも」

そんな四人は現在、風都の中でも広大なスペースを誇る自然公園を訪れていた。

依頼であるガイアメモリ捜索もしていたのだが、そもそもの情報量が少なすぎたため

に

だ。 搜索が難航し、搜索初心者の二人を気遣って、どこかで休もうと亜樹子が提案したのだ。

風都でもこの公園は有名で、噴水や小さなレジャー施設まで完備されていて、休日は親子連れやカップルなど、人の姿が絶えない観光スポットと化すこともあるほどだ。屋根のある休憩所で息をつく夏海とユウスケは、ふと晴れやかな空を見上げてみる。常に風が街中を吹き抜けていることもあってか、雲が青空の中を全力疾走しているように

見えるほどに風が駆け巡り、ベンチに腰を下ろす四人の髪や肌に触れて去っていった。

しばらく無心で空を見上げていると、視界の端に何やら、鈍色の塊がぼやけて見える。アレは何だろうと気になった二人は視線を動かして、謎の物体へとその視線を向けた。

「アレ、なんですか？」

「んー？ ああ、アレは風都タワーだよ。今は修復途中だけだ」

「風都タワー？ 東京タワーみたいなものかな」

遅れて亜樹子とフィリップが向けた視線の先には、巨大な建造物がそびえ立っていた。

銀色の巨大なタワーだったであろうその建物は、今は半ばで無くなってしまっている。

亜樹子の言った「修復途中」という言葉に引っかけかりを覚えた夏海は、その理由を尋ねた。

「修復って、あんなに大規模なものなんですか？」

「ううん、違うよ。アレは、前にあそこで起きた事件の影響で壊れたの」

「事件？」

「風都タワー占拠事件。今から一年半前の事さ」

尋ねられた亜樹子の代わりに、フィリップが重苦し気に答え、かつての事件を語った。

と
現在から一年と半年ほど前の話、風都のシンボルでもあり、街中を流れる風の終着点

しても機能していた風都タワーを、武装したテロリスト集団が侵入して占拠した。

その日は運悪く、風都タワー完成30周年を記念した花火大会のセレモニーがタワー内部で

催されており、多くの市民や企画スタッフ、警備員らが悪い意味で忘れられない夏を経験した。

タワーを占拠したのは、世界各地で活動が報告されていた不死の傭兵部隊『NEVE R』で、

彼らは財団Xがミュージアムから受け取っていた、次世代型ガイアメモリの輸送へりを襲撃。

街中に散らばったガイアメモリを使い、市民を文字通りの地獄の底へと駆り立てていった。

さらには風都タワー内に巨大なビーム兵器を搭載させ、その中に仕組まれた特殊な酵素を人体に

作用させることで自分たちと同じ、不死身の人間へと作り替えようと画策していたのだ。

これに気付いた二人の探偵と一人の警察官が、仮面の英雄である仮面ライダーに変身し、

街に振り撒かれんとしていた脅威を、数々の奇跡をその身に受けて排撃することに成功した。

彼らが見上げている風都タワーは、その時の戦いで受けた市民の心の傷を表している。

一連の事件が終結した際、翔太郎は市民と同じく心に傷を負ったフィリップにそう論じた。

あの事件以来、それまでより一層ガイアメモリ犯罪に対して怒りと悲しみを沸き立たせるように

なり、そこから数か月後に彼ら仮面の英雄はミュージアムの壊滅をその手で実行したのだ。

「……………あの時は、翔太郎に助けられたよ」

当時を懐かしむように語るフィリップ。その横顔を、ユウスケは羨ましそうに眺める。

離れていても互いを信頼し合い、時に背中を預け、時に互いの背負っているものを共に背負う。

そんな二人の探偵の姿を幻視し、自分も士とそういう関係なのかなと少々疑問を浮かべた。

フィリップの話の聞き終えた三人は、絶え間なく吹き続ける優しい風に身を委ねる。このまま意識を手放して惰眠を貪れたら。そう考えたら、本当にそうなつてしまいうだと

亜樹子や夏海は注意するも、やはり一度脳裏に浮かんだ悪魔の囁きには抗えそうになかった。

ズルズルと意識を引きずられ、このままでは気持ちのいい昼寝に時間を費やしてしまうと

分かっているても、二人の女性の中に生まれた欲望には敵わず、徐々に瞼が下がっていく。

「ん？」

その時だった。

同じく昼下がりの惰眠に意識を強奪されかけていたユウスケの、クウガとしての超常的な

第六感とも言うべき何か、彼に身に危険が差し迫っていることを伝えてきた。

慌てて周囲を警戒すると、風に乗って何かか聞こえてくる。微かだが、それは悲鳴だった。

何か危険なことが起こっていると察知したユウスケは、その場の三人に大声で警告する。

「みんな、何か様子が変だ！」

切迫した彼の声に驚き、眠りかかっていた二人と読書中だったフィリップの視線がぶつかる。

そうしている間にも風は遠くからの危険を運び込み、それがやがて鮮明になりつつあった。

聞こえてくる悲鳴。

何かが激しくぶつかり合う音。

日常ではありえない爆発音。

やがてそれらは喧噪と言って差し支えないほど大きくなり、彼らの視界に飛び込んできた。

「アレは、まさか!!」

最初にソレに対して反応を示したのは、フィリップだった。

広い自然公園の片隅にある、駐車場。そこから公園へと延びる道沿いにある芸術的アーチ。

それらの中を人々が悲鳴を上げながら逃げまどい、その向こうから異変の元凶が現れる。

『ヒヤツハハハー!!』

『ウガアアアア!!』

爆発音や破砕音をBGMにして、およそ人とは思えない異形が、嘲笑と共にやって来た。

全身を寒冷地に降り積もる雪のような白に覆われた、黒い外皮との対照性コントラストが不気味に映える異形。

セメントで構築されたような筋骨隆々の肉体に、左手首から先を鉄球に変えた巨体を

持つ異形。

耳障りな狂声を張り上げる白と、左手の鉄球で視界内の物を粉碎しながら吠える巨体。

あまりにも特徴的な特性を持つ二体の異形が、何故かフィリップ達の前で暴れている。

夏海とユウスケは初めて見るドーパントに驚いているが、その青年は彼女らとはまた別の意味での驚愕に身を震わせていた。

「アレは、^{アイスエイジ}氷河の記憶」に^{バイオレンス}暴虐の記憶」！」

人々を安寧から恐怖の渦へと突き落とした二体の名を、使われているメモリの名を叫ぶ。

あまりの驚きに迂闊な行動をとったことを今更ながら後悔するフィリップだったが、彼の声に気付いた二体が立ち止まり、くるりと声のした方向へと身体を向けて再度進行する。

二体のドーパントが向かっているのは、フィリップ達四人を標的と定めたからだろう。

当然そのことに恐怖する夏海と亜樹子だが、フィリップはあくまでも冷静だった。けれどそれは表面上だけであって、彼の内心はとある出来事を思い起こさせていた。

（どうしてあの二体が!! しかもこの組み合わせは、まるで一年半前のあの日と同じ!!）

脳裏によぎる嫌な予感を振り払い、とにかく目の前の脅威に対処しようと敵を見据える。

しかしここで重大なミスに気付いた。フィリップは今、ドーパントとは戦えない状態なのだ。

「しまった、翔太郎!!」

そう、彼らは二人で一人に変身する仮面ライダー。そして、ベルトの所有者は翔太郎のみ。

フィリップはその特殊な生まれの影響で、ベルトを共有することでしか効果を発揮できない。

つまり、翔太郎が腰にベルトを付けない限り、フィリップは自分の意志で変身できない。

「夏海ちゃん、亜樹子さん！ 俺の後ろに下がって!!」

行動を起こせないフィリップの代わりに、ユウスケが女性二人を後ろに隠して構えを取る。

直後に彼の腰にはアークルが装着され、全身を流れる超古代のエネルギーを集束させて、

ユウスケ自身の覚悟をもってその力が、彼の肉体を超常的な力で変異させる。

だがフィリップにはそれができない。このままでは、亜樹子や二人を守れない。

彼は自分の事をこれまで、”悪魔”だと比喻してきたが、ここで初めて神に祈った。かくして優しい悪魔の願いは、街を巡る風に聞き届けられる。

不意に腰に熱を帯びた感触を受け、フィリップが視線を下へ向けると、ベルトが装着されていた。

ここまでタイミングがいいと笑うしかないとはかりに、フィリップは相棒へと声をかける。

「まったく、最高の演出だよ」

『あん？　なんか言ったか？』

「何でもない。それより、緊急事態だ」

『コツチもだ、いっちょ頼むぜ相棒！』

「……………仕方ない、強硬手段だ」

『はあ？　オイちよつと待てフィリップ！』

装着されたベルトを介して意思の疎通を行える彼らは、次に何をするかを伝え合う。

当然翔太郎がそのことに難色を示すが、実行するフィリップは止む無しとばかりに動き出す。

ベルトを装着した彼は、右手を開いて肩と同じ高さにまで上げてから、前へ突き出す。

すると数秒も経たぬうちに、どこからかやって来た何かが、彼に右の手のひらに収まり、

それを待つていたと言わんばかりに左手で上から押さえ、機構を動かして形状を変化させる。

手にしたソレはまるで、恐竜の白骨化した頭部を模したような、巨大なUSBメモリ

だった。

右手にしつかりと持ったソレを、フィリップは人差し指を動かしてボタンを押す。

【FANG】

獣が吠えたようなノイズが混じった電子音声が響き、それを青年は逆さに持ち直し、自らの腰に装着されたバックルにある二つのスロットの、右側にそれを装填した。

待機中の充填音が鳴り続ける中、左側の空いているスロットに突如として、黒いメモリが

装填され、それをフィリップが左手でしつかりと押し込むようにして準備を完了させる。

雄叫びを上げて突っ込んでくる異形を見据え、『彼ら』はその覚悟を告げた。

『変身!!』

【FANG / JOKER】

右側のスロットに装填されたメモリの上部分をつかみ、フィリップはそれを押し開

く。

二つのスロットはさながら、英単語の『W』を表すように両側へと開かれていき、恐ろしい竜のような咆哮の直後に、強調されたブラックサウンドを響き渡らせた。

フィリップの全身を小さな白と黒の破片が覆い、それが晴れると、仮面の戦士が立っていた。

太古の昔に絶滅してもなお褪せない鋭さを保つが如き白磁の右半身に、あらゆる逆境を乗り越えて自らが望む勝利を約束する漆黒の左半身。

万物を切り裂くであろう恐ろしき竜の爪に守られた、紅蓮の双眸。

現れ立つは、〈牙の記憶〉と〈切札の記憶〉を複合させた、仮面の英雄。

その名も、〔仮面ライダーW^{ダブル} ファング/ジョーカー〕

突然現れた戦士を前に、二体の異形は足を止めて警戒心を露わにする。

その背に街の人々の希望と涙を背負い、牙と切札の戦士はその言葉を口にする。

『さあ、お前の罪を数えろ!!』

E P, 28 『Fの共闘 / 過去の来襲』

風都が誇る自然あふれる公園内で、予期せぬ事態が発生した。

平日ではあるものの穏やかな昼下がりということもあって、多くの家族連れやご年配の方々が

街中を流れる風を感じに訪れていたのだが、そんな人々の安寧は突如として打ち砕かれた。

春先の風が若葉を運ぶ中に現れたのは、凍てつく冷気をまとう異形に灰色に隆起した巨体の異形。

その二体は自身の内包する”地球の記憶”による能力で、平和だった場所を瞬く間に荒らし回り、

平穏を享受していた罪なき人々に、涙を流させていた。

そして、その場所には、その涙を流させることを最も嫌う仮面の英雄がいた。

「ガアッ!!」

『グウウウ!!』

左手首から先が巨大な鉄球になっている灰色の異形、バイオレンス・ドーパントの巨体が

大きくよろめき呻き声をあげる。凡人にはできないそれを成し得たのは、白黒半身の戦士。

この街の罪を数えさせる仮面の英雄、『仮面ライダーW ファンング/ジョーカー』だった。

頭部のアンテナや両肩部、両腕部に鋭い意匠を見せる彼は、猛然とバイオレンスを攻める。

さながら野獣の如き雄叫びとともにWが、未だ怯んでいる灰色の巨体へと駆け出していき、

彼我の距離がゼロになる直前でその両足は疾走を止めて大地を蹴り、キックを浴びせた。

防御を取る暇もなく繰り出された攻撃に、バイオレンスは再び呻き声をあげて転がる。

しかし今度は再び距離を開ける愚を犯さず、内部で鎖と繋がっている左手の鉄球を放ち、

追撃を与えようと接近していたWをけん制し、その隙に立ち上がり、体勢を立て直した。

バイオレンスの放った鉄球を横転して躲したWは、本体へと戻ろうとする鉄球よりも早く

移動を開始して、まだ伸びたままになっている鎖を掴んで引っ張り、バイオレンスの本体を

無理やり自分のいる地点へと動かす。そしてその場で跳躍、よろけながらこちらへやって来た

巨体をその驚異のジャンプで飛び越えると同時に、バイオレンスの背面へ両足蹴りを繰り出した。

「ガアウ!!」

『グオオ!』

引っ張られる力に加えて、背面ドロップキックによって更なる運動エネルギーを与え

られた結果、

自分本体へと戻ってくる鉄球を躲すことができずに正面からぶつかり、大きなダメージを受ける。

〈暴虐の記憶〉によって超人化（もとい怪人化）しているとはいえ、アスファルトや車体などを

容易く粉碎する巨大な鉄球をその身に受けて無事でいられるはずもなく、襲いくる激痛に悶えた。

苦痛に身をよじる怪人の背後では、連撃を重ねたWがまたしても追撃に移ろうとしていた。

隙だらけのバイオレンスの背面に回っている白黒半身の戦士は、自身の腰にあるバツクルへと手を

伸ばして、白骨化した恐竜の頭部を思わせる部分にあるレバーへと右手を置き、一度押し込んだ。

〔ARM FANG〕

太古の昔に絶滅した竜たちを彷彿とさせるノイズ混じりの咆哮の直後、Wの姿に変化

が生じる。

彼の〈フアングメモリ牙の記憶〉の力を宿す右半身、その右腕の尖っている部分が一瞬だけ震え、

次の瞬間には刃渡り20cmはあるう白磁の曲刀が現れた。正確には、彼の右腕から、生えていた。

ソレが右腕にあることを確かめたWは、全身を震わせながら声を荒げ、猛然と駆け出していく。

「ウガアアツ!! ガウツ!! ガアアツ!!」

『ゴアアアア!!』

飢えた獣が獲物を仕留める姿を彷彿とさせる仕草で飛び掛かったWは、凄まじい連撃を浴びせる。

右腕から生える曲刀を振りかざし、およそ理性ある人としてではなく、内に眠る野生に身を任せた

戦闘スタイルで斬りつけた。分厚く硬い灰色の巨体をもともしない攻撃は、手も足も出せずに

一方的な攻撃を受け続けていたバイオレンスに恐怖を植え付けるが、Wはその手を緩

めはしない。

右腕を振り抜いて鋭い一閃を放ち、続けざまに一步踏み込んでから右腕を外側へと薙ぎ払う。

肩の方へと弓なりに曲がっている曲刀は、バイオレンスの強靱な肉体すら容易に切り裂き続け、

以降も繰り出され続ける連撃の度に深く鋭い切り傷を刻みこんでいった。

『オイよせフィリップ！ 落ち着け!!』

「ガアアアア!!」

『生まれ相棒!! 今更ファングの凶暴性なんかに呑まれんな!!』

「ガウウツ
——う、くっ……………ああ、また迷惑をかけたみたいだね」

『やつと俺の声が聞こえたか。つたく、クールになれよ、相棒?』

バイオレンス以上に暴力的な戦闘を行っているフィリップに、変身して彼の精神内にいる相棒、

つまり翔太郎が平静を保つように訴えかけ、しばらくしてその効果が表れた。

いつもはすぐに熱くなる翔太郎を止めるのがフィリップの役目だが、時折こうしてその立場が

逆転することがあり、そういう時は大抵翔太郎が苦勞するはめになったりする。

今回も同様だったが、それ以上に彼は変身して戦っている相棒が豹変した理由が気になつていた。

『なんだつてお前、克服したはずのファングの凶暴性にまた負けちまつたんだ？』

「……………ごめんよ、翔太郎。ただ、少し思い出してしまつたんだ」

『思い出した？ 何を？』

「今から一年と半年前の、あの事件だよ」

「わずかに声を震わせてフィリップが答えたのは、彼らの手で解決された」とある事件のこと。

悪夢の始まりを告げた当時の状況を思い出した翔太郎も、感慨深そうに精神内で首肯する。

『……………確かに、アイスエイジとバイオレンスの組み合わせは、あの時と同じだな』

「だから、多分その時を思い出したことによるストレスが原因だと思う」

『そうか………とにかく、今は余計なこと考えずに、街の涙を拭うことが先決だ!』
 「そうだね。ありがとう相棒、君のおかげで正気に戻れた」

自身の暴走を引き留めてくれたことに感謝を述べて、フィリップは改めてバイオレンスへと

向き直り、客観的かつ冷静な思考で現状の分析を開始し、戦闘行動を再開させる。

彼が現在使っている^{フレンジメモリ}へ牙の記憶には、本来の効果ともう一つの効果が備わっている。

本来の効果とは、その名の通りに牙を生成し、その鋭さを武器と呼べるまでに硬質化すること。

そしてもう一つの効果は、牙をもつ生物が元々宿している、闘争本能と生存本能の極端な刺激。

人は進化の過程で牙という優れた武器を自ら排し、代わりに知性という変幻自在の武器を得た。

しかしその内側には、原初の記憶ともいえるべき野生の本能が眠っており、進化の代償として

捨てたはずの牙を取り戻させ、今度こそ捨てる必要がないほどに洗練するという願い

がある。

生物としてより強者となるため、生物としてより生き永らえる為、最強の武器をその身に宿す。

牙をもつ他の生物に蹂躪された太古の時代の人々が共通して抱いた、そんな願いの副産物。

それこそがフィリップを守るために他の全てを本能のまま引き裂く、〈ファンゲメモリ牙の記憶〉の力。

この力を初めて使つて以来、フィリップは暴走を引き起こすことを恐れて〈ファンゲメモリ牙の記憶〉を自分から

遠ざけていた。しかしこのメモリは彼を保護するためにある人物が制作したワンオフ一点物で、独立した

プログラムによつて稼働する高性能なメモリとなり、常に傍らで彼を危機から救つてきた。

やがて自分の力と向き合う決心をした彼は、相棒を命の危機から救うために覚悟を決めて、

再び力を使い暴走を引き起こすも、翔太郎の必死の説得もあつてどうにか制御を可能にした。

力の制御を会得した頃と似た状況だと思いついていたフィリップは、微かに微笑む。

「この力は僕一人のためにあるんじゃない。この街の誰かを救うためにある」

『分かっているじゃねえか、相棒。さあ、仕切り直しだ！』

「ああ、行こう」

改めて最高の相棒だと実感した二人は、ダメージから復帰して突進してくるバイオレンスを

その紅蓮の双眸に収めて、今度は野生の本能に吞まれることなく人としての理性に則って戦う。

猪突猛進という言葉を体現してくる灰色の巨体を前に、Wはバツクルのレバーへと右手を置き、

先ほどとは違って今度は二回連続で押し込み、〈ファングメモリ牙の記憶〉の更なる力を呼び起こした。

【SHOULDER FANG】

レバー1回分の時より若干ノイズが酷くなった咆哮が響き、またも彼の右半身に変化が生じる。

右腕より上の、右肩の刺々しい意匠が震えた直後、先程展開していた「アームファング」を

そのまま小さくしたような曲刀が右肩部から生え出し、それを白磁の右手が素早く掴み取った。

右手に握った「シオルダーファング」を、Wは間髪入れずに迫りくるバイオレンスへ投じる。

すると弓なりの形状が加えられた回転と空気抵抗に作用して、まるでブーメランのような軌道を

描いてバイオレンスを側面から切り裂き、不意を打つ攻撃によってその突進を中断させた。

『グバアアア!!』

「まだまだ行くよ」

『ああ、かましてやれ!』

小曲刀を投擲したWは迷うことなく走り出し、こちらの接近に気付いて鉄球を射出しようとする

バイオレンスの意図を察しながらも、放たれた弓矢の如く一直線に向かっていく。

急速に迫ってくる白黒半身の戦士の、次の行動を警戒したバイオレンスはわずかに思考を巡らせ、

真正面に向けて鉄球を放つのではなく、少し横へずらして横薙ぎに振るうように鉄球を射出した。

これならば鉄球のみを避けても、連なつて動く鎖にぶつかつて少なからず行動を阻害させられると

考えた上での攻撃だったが、バイオレンス自身は間違いなく完璧な対策だと思つていた。

しかし、Wの頭脳であるフィリップには、それすらも計算の内であった。

鎖とその延長線上にある鉄球の二種類の攻撃を見たWは、さながら棒高跳びの選手を思わせる

跳び方で跳躍し、走ってきた勢いも合わせて空中で二回ほど体を横向きに回転させた。

思つてもみなかった回避にたじろぐバイオレンスだったが、本当に驚くのはここから

だった。

どこからか風を切り裂きながら何か接近する音が聞こえたと知覚した直後、射出した鉄球と

それを繋ぐ鎖に衝撃が迸り、水平に振るわれるはずだったそれらは斜め下の地面へ急降下した。

自身の左手から先に起きた出来事を、灰色の異形は、そのやたら小さな双眸で視認していた。

彼の攻撃を妨害したのは、つい先ほどWが投じた白磁のブーメランのような小さな曲刀だった。

バイオレンスの肉体を切り裂いていた小曲刀は、まるで攻撃のタイミングに合わせるように

灰色の巨体をグルグルと旋回し続けて、射出した鎖が伸びきる瞬間にそれを斬りつけたのだ。

その事実を悟ったバイオレンスの双眸が次に収めたのは、振り降ろされゆくWの白い右足。

「『はあああつ !!』」

裏拳の要領で繰り出された横向きの踵落としによって、バイオレンスの頭部が揺さぶられる。

勢いの乗った重い一撃で後方へ倒れる灰色の巨体を、滑らかに着地したWが冷静に見つめて、

何事も無かったように立ち上がって回転しながら戻ってきた小曲刀を同じ色の右手で受け取る。

荒々しい野獣の如き猛攻と、計算し尽くされて洗練された無駄のない連撃によって、既にバイオレンスには立ち上がる体力も立ち向かう気力も、微塵も残されてはいなかった。

伸びきってたわんだ鎖をジャラジャラと掻き鳴らし、深刻なダメージを負った肉体を痙攣させて、

またしても襲い来るであろう白と黒の仮面の戦士の攻撃を恐れる。

だがバイオレンスの恐怖からくる心配は、杞憂に終わる。

「翔太郎、止めだ」

『ああ、メモリブレイクだ』

Wが次に繰り出そうとしているのは、追撃ではなく、終撃だった。

バックルの〈ファンクメモリ牙の記憶〉側にあるレバーを、今度は3回連続で押し込んで力を引き出す。

2回の時よりもさらに酷くなったノイズ混じりの咆哮が、相手に恐怖を刻み付けるように響き、

白磁の右半身と漆黒の左半身を、湧き上がる本能を具現させた青白い炎が包み込んでいく。

【FANG / MAXIMUM DRIVE】

マキシマムドライブ
極限発動を電子音声が宣言し、それと同時にWが青白い炎に包まれた体をゆっくり屈ませる。

体から一歩分だけ前に押し出した右足の側面に、まとった炎が固形化された大曲刀を生成させ、

これから繰り出される一撃の鋭さと強さを無言のままに物語る。

屈ませた両膝を瞬時に伸ばして跳び上がり、中空で巨大な牙を生やした右足を横薙ぎ

に振るう。

そのままでまるまると届かない攻撃だったが、全身にまとう青白い炎がWの体の背後に集まり出し、

推進機関さながらの推進力を生み出し、生じた勢いで全身を反時計回りに回転させつつ落下する。

〈フアングスメリ牙の記憶〉の力が敵に刻み付けるのは、その頭文字を冠する『F』の深い傷跡。

『フアングストライザー!!』

落下しつっつ回転するWは、その突き出した右足の牙で落下地点にいたバイオレンスを切り刻む。

圧倒的なまでの力の奔流に競り合うことなく押し負けた灰色の異形は、内部に蓄積されてきた

エネルギーの全てを振動させられて、内側から膨れ上がるそれに耐え切れず爆発四散した。

『グオオオオオオッ!!!!』

巨体に似合った野太い断末魔と共に、
〈暴虐の記憶〉^{バイオレンスメモリ}は粉々に打ち砕かれた。

白と黒のWが勝利を収める五分ほど前から、同じ場所でもう一つの戦いは始まっていた。

バイオレンス・ドーパントと共に街に涙を流させた白い異形、アイスエイジ・ドーパント。

そしてその驚異の凍結能力と対峙する、赤い装甲と金の角を持つ、仮面ライダークウガ。

両者の戦闘は、すぐそばで行われているもう一組のそれとは、真逆の結果を表していた。

『ヒーツハハーツ!!』

「ぐ………クソ！ コイツ、氷を操れるのか!」

現状を見る限り、優位に立っているのは明らかに、アイスエイジの方だった。

クウガの方かというと、赤いはずの彼の装甲の何箇所かは、真っ白に氷結しきつてい

て、

肩で息をするように激しく上下させていることから、苦戦を強いられているように見える。

外見上装甲に見えるソレも、クウガの超古代の霊石の力によつて変質した肉体に過ぎない。

つまり彼はアイスエイジの放つ氷結の効果を直に受けているに等しいため、両者を比較しても

疲弊しきつて見えるのは当然のことであつた。

白い異形と赤い戦士が戦闘を始めてから、両者の戦闘中の立場が逆転したことはなく、

常に氷結能力を自由自在に操つて戦うアイスエイジの方が、優勢のままだった。

しかし、それだけでクウガが戦う事を止めるはずがなく、抗う事を諦めるはずがない。

「ハア……ハア………そ、そうだ！ アレを使つて！」

懸命に逆転の糸口を探していたクウガは、何もかも拓けた公園内に落ちていたソレを凝視する。

彼の視線の先にあった物は、何の変哲もない単なる木の棒だった。だが、それで充分でもある。

「行くぞー！ 超変身!!」

凍ってしまった部分を庇いつつ器用に転がり、クウガは目的のソレを手にとって高らかに叫ぶ。

彼の意思を受けたベルト————アークルが使用者のイメージを靈石に伝播させて能力を使用、

物質の構造を変異させるその力によって、手にしていた木の棒を専用のドラゴンロッドに変えた。

そしてアークルはさらに、変異させた武器を使うのに最も適した肉体へとクウガそのものを変え、

赤い鎧から一転して青い軽鎧に、鎧と同じ赤だった双眸も変化して青に姿形を変化させる。

ドラゴンフォームに変わったクウガは、手にしたドラゴンロッドをアイスエイジへ向けた。

「うおりゃあああ!!」

武器を得て精神的に余裕が生まれたのか、防戦一方だったクウガが逆に打って出る。範囲リチの広さを生かした攻撃は素人臭い棒術ではあったものの、それなりの戦果を挙げた。

徒手空拳のみだった赤いマイティフォームとは違い、直接手で触れない利点を生かした攻撃は

少なくともアイスエイジに通用しており、クウガはここぞとばかりに素早い連撃を叩き込む。

突き出し、打ち払い、薙ぎ払い、体全体を回転させて勢いをつけて突き込む。

二つの腕だけでは捌ききれない手数タマの攻撃に、アイスエイジは狂った笑いを止めて悲鳴を上げる。

だがクウガは追撃の手を緩めず、流れる水をいなすような動作でドラゴンロッドを振るい続けた。

「せっ！ はっ！ どりゃあ!!」

『ウギツ!! ヒギヤアツ!!』

こちらの攻撃が通用することに勝機を見出し、クウガは絶え間なく攻撃を浴びせ続けるが、

しばらくしてから手にしているロッドの先端から、氷にヒビが入ったような音が聞こえてきた。

その音に気付いてふと手を止めたクウガは、自身が手にしていたものの変化に驚く。

「そんな! ロッドの先が、凍りついてる……!」

彼がその青い双眸で見つめるのは、真っ白に氷結しきったドラゴンロッドの先端部分。

しかも異常事態に気付かず振るい続けていたためか、一部が壊れて深刻な被害を受けている。

これ以上使い続けていたら、武器は完全に破壊されていただろう。いや、最悪の場合ロッドから

冷気が伝ってきてクウガの両腕までも凍らせていたかもしれない。そう考えて彼は

身震いした。

『ウヒャーッヒャヒャー!!』

「コイツ、最初からこうする気だったのか！」

意外と知恵が回るな、などと変なところで冷静なクウガは内心で愚痴をこぼす。

しかし現状はピンチであることに変わりはなく、彼に打つ手がないことも事実だった。

彼の持つ他の二つの形態、ペガサスとタイタンに変身したとしても、勝ち目は薄いと分析する。

タイタンは攻撃と防御に特化した形態ではあるが、如何に強靱でも冷気への耐性など無ければ、

専用武器であるタイタンソードも冷却能力による自己崩壊を起こさない特性を有していない。

ペガサスの射撃ならば有効だろうと考えたクウガだったが、彼がペガサスフォーム時に持つ

専用武器のペガサスポウガンの弾丸は、矢ではなく空気弾。凝結させられては勝ち目

がない。

どうしようもない絶望感がクウガの心の内に流れ込み、それは時と共に膨れ上がる。自分一人では勝つどころか勝機の一片すらも見出せない現状に、仮面の下で歯噛みした。

『ヒヒッ！ ヒヤーツハツハツハー!!』

「クソ、どうすればいいんだ!!」

う。
ジリジリと近付いてくる強敵を前にして、クウガはどうしようもない無力感を味わう。

マイティの拳でも、ドラゴンの棒術でも、ペガサスの射撃でも、タイタンの斬撃でも、きつと迫りくる白い異形に勝つことはできないだろう。彼は内心で敗北を認めていた。

武器としての役目を終えたロッドは力なく公園の芝生に落下し、クウガは白い異形を見つめる。

やられる。もうだめだ。

(夏海ちゃん、守れなくてゴメン……………済まない、士！)

他者に素顔を見せないための仮面の下で、彼は最後まで自分以外の誰かを思い続けていた。

自分の後ろにいるであろう、戦う術を持たない少女を守り切れなかった、力不足の悲嘆。

悔。この街のどこかにいるはずの、異世界から来て今日まで共に歩み続けた、仲間への懺

やがてクウガの全身に影が差し、手の届く距離にまでアイスエイジが迫っていた。

『ヒヤツハハハーツ!!』

クウガがこれから襲い来るだろう攻撃に身を強張らせる。

だが、この街には英雄がいた。

【SHOULDER FANG】

ノイズ混じりの咆哮と共に異形を切り裂く、白磁と漆黒の仮面の英雄が。

「小野寺ユウスケ、伏せてくれ！」

『当たってケガしても知らねえぞ！』

白と青との戦いとも呼べぬ一方的な戦闘の中へ、突如割り込んできた白黒半身の戦士は、

右肩に再び生成させた小曲刀を掴んで投擲し、見事にソレをアイスエイジへと直撃させた。

悲鳴を上げて斬撃の痛みに悶える異形目もくれず、Wはすぐさまクウガへと駆け寄る。

「無事かい？ 小野寺ユウスケ」

「あ、は、ハイ。何とか」

『危なかったな。つかアンタ、最初に見た時と色とか変わってねえか？』

駆け寄ってきた仲間の声に安堵の溜め息を漏らし、クウガは持ち前の明るさを取り戻す。

逆にWは戦闘前にチラリと見た彼の姿が微妙に変わっていることに気付き、疑問を抱いたが、

視界の端でヨロヨロとアイスエイジが体勢を立て直したのを捉えて、瞬時に意識を向ける。

突然の奇襲を受けたアイスエイジは怒りに震え、さながらヤマアラシのように背中から無数に

生やした細長いトゲ状の針に力を込めて、追尾ミサイルを思わせる攻撃を放ってきた。

「くっ、数が多過ぎる！」

「俺もやります！」

迫る無数の針を前にして、二人の戦士は勇気を奮い立たせて立ち向かう。

Wは投じた小曲刀を再び手にして投げ飛ばし、寸前に立てた計算通りの軌道を描かせて針を斬り、

クウガは壊れかけのロッドを拾い、体の前に突き出して回転させて飛んでくる針を撃墜した。

無論射出された針にも触れたものを氷結させる力があり、クウガのロッドは今度こそ砕け散る。

全ての針攻撃をしのいだ二人のライダーは、次はこちらの番だと攻撃を仕掛ける。

「アイスエイジの氷結はかなり厄介だ。でも、それはあくまで触れた場合」
『シヨルダーフアングなら、凍っちまう前に相手から離れるから問題ねえ』

自慢げにそう語ったWは、戻ってきた小曲刀を再び手にしてからアイスエイジに投げつける。

弧を描きながら白い異形の全身を切り刻むその牙は、確かに氷結の影響を受けつけておらず、

直接触れられない相手にダメージを与える手段としては、現状最有力な方法となった。

やがてアイスエイジの全身に切り傷をつけた小曲刀がWの元に戻り、同時に異形が崩れ落ちる。

「どうやら先程までWが戦っていたバイオレンスとは違い、あまりタフなタイプではないらしい。」

『チャンスだ、一気に決めるぜ!』

「分かっている。メモリブレイクだ」

「お、俺だって!」

芝生の上に倒れこんだ異形を見やり、好機と踏んだ二人

三人は

必殺の構えを取る。

クウガは再び肉体を変質させて赤いマイティフォームに戻り、両手を開いて腰を落とし、

そこから屈めたままの姿勢で半歩分前に突き出した右足へと、超古代の力を集束させる。

横に並んだWは再びバックルのレバーに右手を置き、三回連続で右手を下へ押し込んだ。

【FANG / MAXIMUM DRIVE】

ノイズが奔る大咆哮の後、Wの白黒半身の体が青白い炎に覆われ、右足に牙が生成される。

そしてクウガの右足の裏側、大地を踏みしめる部分からわずかに炎が噴き出ししていた。

両者ともに万全となった瞬間、示し合わせることもなく、同じタイミングで動き出す。クウガが前方へ疾走し、Wが中空へと跳躍する。

疾走から一転、赤い戦士は軽い跳躍の後に勢いに任せて空中で一回転し、跳躍から数秒、白黒半身の戦士は右足を横薙ぎに振るいつつ落下していく。

赤と青白。二つの異なる炎をそれぞれまとった戦士が、決意を秘めた一撃を繰り出す。

「うおりやあああああ!!」

『フアングストライザー!!』

雷光をまとった赤銅の炎と、恐ろしき竜の頭部を象った青白い炎が、異形を焼き焦がした。

『ヒギヤアアアアアアア!!』

狂ったように笑っていた異形に似つかわしい断末魔と共に、
〈アイスエイジメモリ氷河の記憶〉は砕かれ
た。

昼下がりの公園に現れた二体の異形。メモリを砕いたことにより、その素顔が暴かれた。

『どうなってるんだ、コレ』

「……………一年半前と、まるで同じだ」

白磁と漆黒の仮面の下で、フィリップと彼の精神内の翔太郎が見たのは、見知った二人組。

他人には真似できない様な独特のファッションに、爆発したかのようなパーマ頭の男と、

明らかに季節感を間違えているとしか思えない、サンタのコスチュームを着た男の二人。

そう、メモリの怪人として暴れていたのは、ウオッチャマンとサンタちゃんだったのだ。

「これは偶然じゃない。間違いなく、仕組まれている」

『ああ。ここまでピツタシだと、逆に笑えるくらい不自然だな』

白黒半身の戦士の体から二人分の声が聞こえてくるものの、気になったユウスケは、マイティフォームに戻っても回復しきれない凍傷部分を押さえながら尋ねる。

「それって、どういうことですか？」

「今言った通り、これは明らかに仕組まれた必然なんだ。一年半前に起きた事件の始まりとなった、ドーパントが街中に突如として出現しただした、あの時と同じ！」

『あの時も、アイスエイジとバイオレンスのメモリが、この二人と引き合っていた。』

二人とも自分からガイアメモリに手を出すような人間じゃないって、俺たちは知ってる』

「誰かが裏で糸を引いている可能性が出てきたね、翔太郎」
『ああ』

二人だけで話が進められたようにも感じたものの、会話の中の言葉を繋ぎ合わせた結果、

ユウスケにも今の状況がおかしいということが理解でき、話についていけた。とにかく何をすべきかをこの世界の二人に聞こうと口を開きかけたクウガだったが、それより数瞬早く、Wの左半身がけたたましい叫び声を発した。

『あああああああああッ!!』

「うわっ!!」

「……いきなりどうしたんだい、翔太郎」

『ヤベエ、俺の方にもドーパントがいたの忘れてた!』

「ええ!!」

「翔太郎、急いで戻るんだ! 君の他のメモリが奪われたら!」

『分かってる! ああクソ、フィリップ!』

Wの左半身、翔太郎が入り込んでいる黒い左側のボディが忙しなく動き、逆に反対の白い

右半身は落ち着き払っていて、慌てることなくバックルに手をかけて機構を動かした。

変身する時に左右に開いたスロットを元の状態に戻すと、肉体を覆っていた装甲が白と黒の

細やかな破片となって街の風と共に散り散りになって飛んでいった。

それでもベルトは装着しているため、翔太郎とフィリップの精神はまだ繋がっているため、

彼らは互いの状況と情報を共有し合う。

「君の方で変身して、早く街の現状を把握しないと！」

『分かっている！ よし、ベルトもメモリもちゃんとある！』

「急ごう、翔太郎」

『ああ、分かって

あん？』

「どうしたんだい、翔太郎」

現在街のどこかに捨て置かれている翔太郎の肉体に本人の意識が無事に帰還したよう
うで、

ベルトを介して通じている意識を利用して、フィリップは翔太郎の現状の把握に努め
る。

ところが、急がなければマズイ状況であると判断したばかりなのに、元に戻った相棒
の

様子がおかしいことに気付き、フィリップは最悪を想定しつつ尋ねた。
だが、翔太郎から帰ってきた返事は、彼の予想だにしないものだった。

『……………戦ってる』

「なんだって?」

『戦ってるだよ、ドーパント二体と』

「誰が?」

要領を得ない相棒からの言葉に焦りを募らせるが、次の返事にフィリップは驚愕す
る。



『仮面ライダーが』

E p, 29 『Jは見た / 仕組まれた戦い』

フィリップとユウスケが、アイスエイジとバイオレンスの二体を倒して変身を解除する前。

正確には、彼らが変身して仮面ライダーとなる十分ほど前にまで、時間をさかのぼる。風都タワーが見える自然公園にユウスケ達四人が到着した頃、もう一つの組みになっている

三人の男もまた、同じように風の都の象徴である鋼色のシンボルを見つめていた。

「アレが、風都タワーね……………」

「オイ、写真なんか撮ってる場合じゃねえだろ。観光気分ならとつとと帰んな」

「なんだ、知らないのか？ こういう時に撮る写真つてのは、後々何か証拠となるような

物を映し立てることだってあるんだぜ？ 勘だけで街中駆け回る二流探偵とは違う

んだよ」

「ンだと？」

「まあまあ二人とも、今は協力してメモリを探すのが最優先だ」

街の中を気ままに流れる風を導く巨大風車を、首からぶら下げた愛用のカメラで映す士と、

その一見能天気に見える行動を諫めようとして切り返され、早くもヒートアップした翔太郎。

そしてそんな二人を一步下がった位置から見つめ、仲裁を行おうとしている羽田睦の三人は、

探偵事務所を出てから様々な場所を練り歩き、現在は風都の海の入り口である湾岸エリアへと

足を運んでいた。

人の多い場所での聞き込みは、最初から想定した通りに期待できる情報は得られず空振り。

ならばと仕方ないと溜息と共に呟いた翔太郎が二人を連れてやって来たのが、ここだった。

この湾岸エリアの倉庫街と呼ばれる場所は、風都内のストリートギャングや若い不良たちの

溜まり場となっている節があり、かつてその影響からか、ガイアメモリの力に憑りつかれた

若者たちが『ミュージアムを継ぐもの / EXE』を名乗ってメモリ収集を行って

いたという過去が

ある。今回翔太郎がここを訪れたのも、そういう裏に通ずる道から情報を得るためだった。

士は自分たちが街の探索で訪れた波止場の近くだと脳内マップに記憶しつつ、前方を歩く

翔太郎と自分たちの後ろからついてくる羽田睦の二人に、黙ってついていくしかなかった。

道を挟んで建ち並ぶ巨大な倉庫の扉を開け、中に誰かいないかと探る翔太郎たちだったが、

湾岸エリアの倉庫街探索を始めて十分も経つ頃、その顔が驚愕に染められた。

「な、んだありや!!」

「あれは………?」

「ドーパント!」

五つ目の倉庫の扉を押し開けて中を覗いた彼らの視界に、あつてはならない異形が映り込む。

その姿を目視した翔太郎と羽田睦は驚きと共に焦りも同時に浮かべるが、士だけは理解できずに

大して驚くこともないまま平静を保ち続ける。しかし、扉を開けた音で相手方に勘付かれた。

「ヤベェ!」

翔太郎の鬼気迫った表情と声に押され、羽田睦と士はほとんど同時に背後へ身体を投げ打つ。

すると直後に覗き込んでいた倉庫内で大爆発が起こり、窓ガラスやトタンの外壁などが次々と

四散していき、まるで見てはならないものを見たことを後悔させるように、倉庫の中

にいた

二体の異形が、ゆっくりと三人のいる方へと歩みだしていた。

この街では確かにガイアメモリが流通し、その力に溺れた者が異形となつて暴れ回る
ことなど、

よくあることではないにしろ、珍しいことではない。だから、翔太郎もこの手の出来
事には

慣れつこのはずだった。ところが、迫りくる異形の外見を目視してから、彼の鼓動が
徐々に、

そして不規則に急上昇し始めていた。そう、恐怖と驚愕による、感情の暴走によつて。

「嘘だろ……………【青いナスカ】に、【ウエザー】だと……………」

限界までその双眸を見開いてあえぐ翔太郎の視線の先で、二体の異形が立ち止まる。

同時に歩みを止めた二体の左側は、さながら全身を群青色に染め上げた忍と騎士のハ
イブリッド。

黒一色の中に、古代の神秘を連想させる地上絵の紋様を描く仮面ベルソナを顔の前方部に装着
し、

青から先端にかけて橙色に変わっているマフラーのような布を、首から背部へと垂らしている。

胴体や両肩部、手腕から両脚に至るまでのあらゆる場所に、金や黒の意匠で古の時代から地上に

刻まれた幾何学的な絵画が描かれており、その重厚な色合いが醒めるような青とよく映える。

街を揺蕩う風を一身に受けて佇む青の異形の名は、ナスカ・ドール・バントの記憶

左側の潮気が混じった街風を浴びる青とは対照的に、右側の異形はさながら重なった雷神と風神。

全体的な印象はさながら、日本に古くから言い伝わる、かみよ神代の世界に生ける調停者の風貌で、

肉体の半分以上を占める色は、空に漂いながら形を変える雲の白と、深く恐ろしい雷雲の黒。

そこに腕や腰に収まるベルトのような部位には、轟く雷鳴の如き黄金の色が激しく輝いている。

そして異形の肉体の随所に見られる、三日月や太陽、電雷に群雲を象徴するような掘り込み。

世界を覆いつくし、神とさえ呼ばれた事象を関する異形の名は、ウエザー・ドールパント〈天候の記憶〉
 どちらもこの街の英雄とは浅からぬ因縁を持つていた異形であるが故に、その片割れ
 である

翔太郎は少なからずシヨックを受けていた。当然、ガイアメモリを使って街の住人が
 怪人へと

変貌を遂げたこともそうだが、それ以上にその二つのメモリが、今になって自分の前
 に現れた

運命からの皮肉に、苛立ちを覚えていた。

「なんだってこの二つのメモリが……クソ、どうなつてんだー！」

「アレはやはり、ナ地上絵スの記憶カのメモリに、ウエ天候ザの記憶の……」

「これがこの世界の怪人、ドールパントか」

目の前にある現実には舌打ちする翔太郎と、淡々と事実として認める羽田睦。そんな二
 人とはまるで

違つた目線で世界の現象を観察する土。それぞれ異なる反応を示したものの、結果と
 して眼前にて

立ち尽くしている二体の異形を前にして、逃げ出そうなどと考えることは一瞬たりとなかった。

このままでは埒が明かないと理解した翔太郎は、すかさず懐から取り出した物を腰にあてがう。

「何が何だかさっぱりだが……とにかく今はやるしかねえ」

「みたいだな。手え貸すぜ、この世界の仮面ライダー」

「あん？ ハッ、好きにしな」

抜群のファックションの中に唯一メカチックな部品が混ざり、それが新たにベルトへと変わる。

それを見て、戦う意思を汲み取った士もまた、懐からデイクイドライバーを出して装着した。

二体の異形に立ち向かうように並んだ二人は、それぞれが変身するためのツールを手に取り、

お互いの工程を踏むための作業に入ろうとするが、ここで片方に問題が発生した。

「あん？　なんか言ったか？」

「は？」

「コツチもだ、いっちょ頼むぜ相棒！」

「いきなり何言ってるんだ」

「はあ？　オイちよつと待ってフィリップ！」

士の右側にいた翔太郎が突然独り言を発し始め、訳も分からないままに慌てだす。

いきなりの態度の急変ぶりにたじろぐ士だったが、彼ら二人の背後にいた羽田睦が物陰に隠れ

ながらも、こちらに聞こえるような声量で現状の解説を語る。

「士さん！　彼は、仮面ライダーWは二人で一人に変身する特殊なライダーなんです

！　そのもう一人とは、腰にあるベルトによって意識を共有することが可能になるの

で、

今はその相棒であるフィリップという少年と心の中で会話しているんだと思いま

す！」

「二人で一人、だと？ そんな無茶苦茶な奴がいるのか」

この際後ろの男が、何故そのような事を知っているのかという疑問はにおいておこうと決めた士は、

自分が言った「二人で一人が無茶苦茶」という言葉に何かを感じ、とある世界を思い出した。

その世界の仮面ライダーは、一人の普通の人間に四体の個性的過ぎる異形たちが代わる代わるに

へばり付き、荒くれ者から嘘つき釣り師、相撲空手家に踊るトリガーハッピーにまで性格と戦法を

豹変させていた。苦い記憶を掘り起こして嫌な気分になりながら、士は再び翔太郎を見つめる。

「はあ………仕方ねえ。アンタ、通りすがりの仮面ライダーだって言ってたよな？」
「ああ、それがどうした」

つばの広い帽子を右手でかぶり直しながら、翔太郎は自身の左にいる士へと向き直つ

て語る。

「いいか、仮面ライダーって名前は、この街では希望の象徴。そして願いの証でもある。

アンタにはそんなつもり無くてもよ、俺たちはそういう覚悟と義務を背負って戦うんだ。

「この街に生きる人たちがつけてくれた、仮面ライダーの名前に恥じないようにな」

「……………それがお前らの、戦う理由」

「そうだ。だからお前もその名をこの街で名乗るんなら、通りすがらねえで街を守れ。

こうしている今にも街に涙を流させようとする奴から、逃げ出さねえで必死に抗え！」

「それが、それがお前の信じる仮面ライダー、か」

「そうさ。それで、今相棒がピンチなんだ。この場はアンタに頼めるか？」

迫真の表情で、『仮面ライダーの流儀』を語り尽くした翔太郎は、一転して士に願いを求めた。

彼の口ぶりから先程羽田睦が言っていたように、二人で一人の仮面ライダーへと変身

するために

相棒であるフィリップの元へと向かわねばならないのだろうと考え、士は無言で首肯する。

肯定の意を受け取った翔太郎はニヒルな笑みを浮かべた後、上着の内ポケットから取り出した

漆黒のガイアメモリを右手に収め、起動するためのボタンを人差し指で軽く弾いた。

【JOKER】

「変身！」

右手のガイアメモリを起動し、電子音声のアナウンスが響いた直後にそれをベルトのバックルの

左側へと装填し、左手で帽子を押さえたままで仮面の英雄に姿を変える決意を口にした。

すると突然、翔太郎の体が揺れ始め、あたかも自我を喪失したかのように倒れこんでしまった。

慌てて駆け寄って声をかけようとする士だったが、流石にそこまでは時間が許してく

れなかつた。

『フツ……ハアツ!!』

『フハハハハツ!!』

「チツ、二対一か。面倒くさそうだがやるしかないな、変身!!」

【KAMEN RIDE DECAD E】

静止状態から一転、果敢に攻めかかってくる二体の異形を視界に捉えた士は、倒れた翔太郎を

どうにかすることを一旦諦めて後退し、見慣れた仮面の戦士のカードをバックルに装着する。

直後に電子音声が読み込んだ情報をガイドして反映、九つの分身が一つに合わさってから色が

加わり、その無機質な双眸にライトグリーン之光を宿してデイクイドという戦士に変身した。

突然現れた仮面の戦士に狼狽することもなく、青と白の異形は距離を詰めて攻撃を仕掛ける。

「ほ、本当にお前も……：仮面ライダー、だったのか」

「オイお前、早く逃げないと、安全は保証できないぜ！」

「あ、ああ」

しかしデイケイドの方は、戦闘行動よりも人命の保護を優先しなければならず、自身の背後に

隠れている羽田睦の存在を思い出し、この場からすぐに立ち去るように手短な警告を発する。

デイケイドの姿に驚愕を示した彼だったが、自分の安全を考えて即座に立ち上がって逃げた。

倉庫街から道なりに逃げる羽田睦の背を眺めてから、デイケイドは異形たちに対面する。

「さて、これで心置きなくやれそうだな」

『ハアツ!!』

『フンツ!!』

唯一の不安要素を追い払ったデイケイドは、後は心配いらなるとばかりに軽口を叩き出し、

それを受け取ったナスカとウエザーは、まるで彼の言葉に反抗するかのような反応を見せる。

ナスカは空間から長剣を召喚して駆け出し、ウエザーは右手に何かを溜める仕草のままそこに

立ち止まって動かない。二体の行動を即座に分析したデイケイドは、接近するナスカに挑む。

『セアツ!!』

「うおっ!」

『ダアツ!!』

「危なっ………近接型か」

手にした長剣を振りかざし、右に左にと剣先を滑らせて攻撃するナスカに対し、デイケイドは

それらを紙一重で回避し続けて、相手が接近戦に強いタイプであると割り出した。

いくら相手が実力未知数の敵であっても、デイケイドである自分には決して勝てるわけがない。

そう信じて疑わないデイケイドだったが、次の瞬間には彼の視界からナスカがいなくなっていた。

「なに？ どこに消えたん

ぐあっ!？」

突然消えたように見えたナスカが、今度は逆に急に目の前に現れて剣を振り下ろしていった。

長剣による鋭い斬撃を浴びたデイケイドは、胸部に奔る痛みには仮面の下の顔を歪ませつつ、

自分が明らかに油断していたことを実感して齒噛みする。そして、改めて敵を観察した。

「コイツ、高速で、ぐっ！ 移動してる、ガハッ!!」

『ハアツ!!』

「クソ……………やあつ!!」

『ハッ!』

そしてデイケイドは、それまでの無数の死闘からくる経験則で、ナスカが瞬時に視界内から

消えるトリックを暴き出した。それは、透明化でも瞬間移動でもなく、一時的な高速移動。

ただしナスカの加速はデイケイドが今体験している通り、目で追えるような速度ではなく、

闇雲に拳を振るってもかすることすら叶わずに距離を置かれ、また高速で接近される。

異常な速度でのヒットアンドアウェイに身体を踊らされて、デイケイドは苛立つ。しかしそこへさらに、立ち止まって右手をゆっくり動かしていたウエザーが動いた。

『ハッハッハ、フンッ!!』

「な

うがあああアアアッ!!」

ウエザーが右手を天高く突き出した直後、倉庫街の上空に濁った黒色の暗雲がたちこめて、

そこから幾重もの束になった赤い稲妻が迸り、その雲の真下にいたデイケイドを襲った。

予想だにしなかった雷撃を受けて、あまりのダメージ量に思わず膝を地につけた戦士は、

未だに中空に漂い続けている雷雲を一睨みしてから、忌々しげにウエザーを見据える。

「ハア……ハア……ウエザー、なるほど。天候を自在に操作できるってわけか」

『フハハハハハッ!!』

『フン……ハアッ!!』

「それでそつちのお前は、ナスだっけ？ ハエみたいにブンブンと鬱陶しい奴だな」

ひとしきり赤雷の雨を浴びせたウエザーと、その反対側からデイケイドを挟み込むように

近付いてくるナスカに、色褪せた返り血の如きマゼンタカラーの戦士は悪態を吐く。

しかし今度は彼の言葉に反応するような素振りはなく、ただ目の前にいる傷を負った戦士を

圧倒的有利な状況下で屠ることだけを考えているような二体は、徐々に彼我の距離を縮める。

だが、こんな程度でデイケイドが負けを認めるはずもない。

「高速移動、か。だったらどつちが早いか試してみようぜ？」

素早く立ち上がったデイケイドは、左腰にあるライドブツカーからエンジン音を響かせつつ

カードを取り出し、その裏面に書かれた仮面ライダークレストの紋章を見せつけてからバツクルに装填した。

【KAMEN RIDE KABUTO】

聞き慣れた電子音声がデイケイドの鼓膜を揺ると同時に、彼の姿も変化していく。全身を太めのラインが刻まれたような外観の、黒いスーツが包み込み肉体を覆い、

カブトムシの強固な外殻を連想させる、独特なフォルムをした紅蓮の装甲をその身にまとう。

青いコンパウンドアイを二つに裂き、複眼状の双眸へと変化させていきながら、さながら昆虫の王を彷彿とさせる形状の角が、蒼天を貫くが如く直立して機械音を鳴らす。

二体の異形の前に姿を現したのは、最高最速の世界を往く、【仮面ライダーカブト】だった。

「青いナスとかいうの、まずはお前からだ」

『フツ…………セアアツ!!』

「付き合つてやるぜ！ もつとも、こつちの世界じゃ一秒未満だがな！」

【ATTACK RIDE CLOCK UP】

カブトの姿にカメンライドしたディケイドは、両手をパンパンと合わせて打ち鳴らして、

もう一度ライドブッカーから別のカードを取り出して再びバックルへと装填した。途端に電子音声が鳴り響き、そこに記されていた情報を忠実に彼へと反映させる。

直後、世界に流れていた時間は、急速に遅れ始めた。

否、この世界に流れる時間が、カプト一人に追い抜かれ、抜き去られたのだ。

たったの一秒が凄まじく引き伸ばされた、クロックアップの世界に到達したカプトは、

全てが静止して見えるほどの速度の中で、懸命に足を動かすナスカを鼻で笑う。

「たかだか高速移動できるだけのお前に、世界を置き去りにできる俺には勝てない」

万物の流れを逸脱した速度で語るカプトは、ブッカーソードを逆手持ちで構えて、変身した場所から一息に飛び出し、ゆったりと動くナスカと交錯するその瞬間に、無数と呼ぶことすら億劫になるほどの斬撃を刻みつけて、駆け抜ける。

直後、彼が世界そのものを追い抜く時間が、終わりを告げた。

【CLOCK OVER】

『グアアアアツ!!』

電子音声の変わらない声のトーンを掻き消すように、ナスカの断末魔が響き渡り、

紅蓮の爆炎を上げたと同時にドーパントの肉体から、（地上絵の記憶）が排出されて砕けた。

ウエザーの視点から見れば、今のカプトとナスカの攻防は一秒すら経過しておらず、カードを装填したカプトの姿が揺らいだように見えた瞬間、ナスカが爆散させられていた。

目の前で起きたことが理解の範疇に無く、ウエザーは動揺して天候操作の右手を下ろす。

そしてそれをしかと見ていたカプトは、逆手に持ったブッカーソードを元の状態に戻し、

そこからブッカーガンへと機構を変形させて右手に持ち、隙だらけの身体に銃弾の雨を降らせる。

「さっきのお返しだ。雷と違って、いくらでも撃てるがな」
『グオオオオッ!!』

次々と発射されていくマゼンタ色の銃弾は、一発のミスもなく的確にウエザーの身体を穿つ。

意趣返しとばかりに引き金を引きながら語るカブトの言葉など、耳には届いていないだろう。

やがて容赦ない暴風雨ならぬ暴弾雨を浴びたウエザーは、力なくその両膝を地面に落
下させ、

エネルギー弾特有の粒子煙を全身から立ちのぼらせて、情けない格好で空を見上げ
る。

相手が沈黙したところで、普通は気を緩ませる。だが、生憎相手は、普通ではなかつ
た。

【FINAL ATTACK RIDE KA, KA, KA, KABUTO】
「寝てな」

黄金色に輝くカードをバックルへ装填し、金色の輪を展開する。

電子音声のアナウンスが終わると同時にカブトが駆け出し、右足に青白い雷鳴が迸り
出す。

直感的にマズイと悟ったのか、倒れたウエザーが両手を広げて膨大な量の風をかき集
め始め、

やがて巨大な突風へと育ったソレを、前方から突っ込んでくるカブトへと投じた。

『ハアアツ!!』

「無駄な足掻きだ」

〔ATTACK RIDE ILLUSION〕

大自然の猛威が迫る中でも、カブトは冷静にカードを取り出し、バックルへと装填する。

使用したカードは「アタックライド イリユージョン」、その効果は自身の分身を作り出すこと。

カードがめくられるようにカブトの身体が歪み、そこから新たに四人のカブトが現れた。

突然敵が増えたことに驚愕の声を禁じえなかったウエザーは、突風のコントロールをほんの少し

だけが手放し、それが原因で収束性を失った風はみるみる内に静まり、街の風へと溶ける。

それでも召喚したばかりの四人のうち、三人は殺傷性の残っていた風にその身を引き

裂かれて

消えてしまったのだが、残った最後の一人と共に駆けるカブトは、同時に中空へ跳躍した。

前方へ駆ける力と上方へと跳ねる力、二つの力が合わさり、繰り出された蹴りの威力を高める。

「やあああああああ!!」

二人のカブトが落下しつつ同時に放った、空中回し蹴りライダーキックが炸裂し、ウエザーの肉体に直撃し、

世界を覆い尽くすほどの事象を掌握する〈天候ウエザーの記憶メモリ〉は、その爆炎に消えた。

二体の異形、ナスカ・ドーパントとウエザー・ドーパントとの戦闘を無事に終えたカブトは、バックルの機構を動かして元のデイケイドの姿へと瞬時に巻き戻る。ところが、背後に気配を感じたデイケイドが振り返る。

「お前は、探偵の。もう起きて大丈夫なのか？」

「……………今のは」

身を翻したデイケイドの視線の先にいたのは、十分ほど前までは記憶に留めていたはずの、

倒れた翔太郎だった。いきなり意識を失ったことに関して珍しくデイケイドが心配を

示したものの、そんなものに構うことなく、翔太郎は呆然と仮面の戦士を見つめている。

どうしたのかと尋ねたくなったデイケイドだが、流星に今回はピンときた。

「ああ、アイツらか。俺が全部倒しといた。なんだ、とつといてほしかったのか？」

「……………メモリブレイクは、マキシマムじゃなきゃ、不可能なはず」

「なにをブツクサ言ってるんだ。さっさとあのオッサン見つけてメモリ探さず」

「……………違うライダーに変身、世界を破壊、世界のルールを破壊……………」

「どうした？」

今日覚めて状況が把握できていない翔太郎が、ドーパント二体を相手に自分が勝利を

納めた事実が信じられないのだろうと考え、特に問題はないと判断したデイケイドは、

本来の目的であるメモリ搜索とその依頼人を探し直そうと、変身を解きかけた。だが、それら全てが誤りであったと気付くのは、この直後だった。

「まさかお前が、お前が【世界の破壊者】なのか?！」

「なっ

——お前、どこでその名前を——」

翔太郎の口から発せられたのは、デイケイドにとっては懐かしくも忌々しい異名。

自分の世界を見つけようと世界を巡る度に、あらゆる世界から弾かれる要因にして原因。

その名を口にされた直後から、翔太郎の目が明らかに変わるのをデイケイドは感じた。

今の彼のような目を、何度も見てきた。そう、それは、自分を敵と認識した者の目。急変する状況に困惑するデイケイドをよそに、翔太郎がその顔に憤怒を浮かべて動き出す。

「お前らが来る前に、鳴滝つて名乗る男が現れて俺たちに言ったんだ。

『もうすぐこの世界にもデイケイドがやって来る。世界の破壊者である奴の行くところ、

赴く世界は全て破壊し尽くされ、最後には奴以外の何者も残りはしない』つてな！」

「鳴滝だと?!」

「どうやら心当たりはあるみたいだな……行くぜ、フィリップ！」

続いて翔太郎から語られた言葉に、今度はデイケイドが怒りを示す番になった。

鳴滝という男は、かつてデイケイドの旅の先々で待ちかまえ、赴く先の世界で彼の敵を

作り出してぶつけさせ、どうにかして彼の旅をそこで終わらせようと目論む謎の男だった。

しかし巡り直す羽目になった【剣の世界】でも【カブトの世界】でも、鳴滝の介入を思わせる

状況に陥ることはなかったというのに、何故新しい世界で鳴滝の罠が待ち受けていたのか。

浮かび上がる疑問に答えを見出すより早く、翔太郎が行動を終えていた。

『変身!!』

【CYCLONE / JOKER】

いつの間にかバックルに二本のガイアメモリを装填していた彼は、スロットを左右に展開し、

メモリの起動音と同じ電子音声を発させた後、両方の人差し指と中指を立てて腕を広げる。

すると彼の周囲に突然風が巻き起こり始め、それがどこからか緑と黒の小さな破片らしき物を

運んできて、彼の肉体にまわりついて徐々に全身を覆う装甲へとその姿を変えた。

突風ともそよ風とも取れる独特なメロディと、強調されたブラックサウンドが鳴り響く。

あらゆる束縛をもともせず流れゆく、一陣の風の如きライトグリーンの右半身に、

あらゆる逆境を乗り越えて、自らが望む勝利をその手に掴むヘビーブラックの左半身。

そこに現れ立つのは、〈疾風の記憶〉と〈切札の記憶〉を複合させた仮面の英雄。

その名も、【仮面ライダーW サイクロン／ジョーカー】

急に変身してみせた戦士を前に、混乱に陥っていたデイケイドもようやく我を取り戻し、

先程戦ったナスカのように風にたなびくマフラーを見つめながら、ブツカーガンを構える。

それに対して、街の中を流れる風を身に受けた英雄は、怒りを紅蓮の双眸に宿しながら、

その背に街の人々の希望と涙を背負い、左手を銃のように形作ってデイケイドへ突き立てた。

『さあ、お前の罪を数えろ!!』

E P, 30 『恐怖するC / 暴かれる謎』

風の吹き抜ける街、風都の片隅にある湾岸エリアにて、人知れず戦いが巻き起こっていた。

片や、異なる世界から現れ、様々なライダーの力を使う仮面ライダーディケイド。

片や、この街の人々から希望を託された緑と黒の英雄、仮面ライダーW（ダブル）。

誰も使っていない倉庫街の通路で、マゼンタの戦士と緑と黒の二色の戦士がぶつかり合う。

だがもしも、この状況を見ている第三者がいたなら、明らかな優劣の差を見せつけられて

いたに違いない。それほどまでに、両者の戦闘に関してのスキルとセンスは差が開いていた。

しかし、いかなる逆境においてもその身を砕いて戦うのが、仮面の英雄なのだ。

「ウオラアツ!!」

「チツ!」

その言葉を裏付けるように、緑の右半身と黒の左半身の戦士Wが、鮮やかなステップを刻みつつ

両脚から蹴りの応酬を放ち、ブツカーガンでの射撃を行おうとしていたデイケイドを怯ませる。

そこからさらに、黒い左半身から飛び出す拳や、緑の右半身から振るわれる右脚など、変化を

持たせた柔軟な攻撃の数々が、次第にデイケイドの身体を後退させていき、ペースを奪っていく。

Wが現在使用しているガイアメモリは、サイクロンメモリ〈疾風の記憶〉とジョーカーメモリ〈切札の記憶〉の二種類。

右半身のサイクロンは文字通りに、疾風をその身にまとう事や突風を巻き起こすなど、風という

概念に作用する力を持っていて、それを身体の動きに同調させる事で攻撃の威力や繰り出す速度を

通常の数倍にする効果がある。そして左半身のジョーカーは、逆境を乗り越えるため

の勝負強さ、

つまりあらゆる面での自己強化能力が備わっており、パンチやキックなどの身体能力に加えて、

本来ならばここぞという時の判断力や精神力などにも作用する効果を有している。

この二つの能力が相乗することによって、デイケイドの反応速度を超える攻撃を連続で繰り返す

ことが可能になっている。そして勿論だが、攻撃を受けている当人はその事実を知る由もない。

身体を独楽のように回転させながら蹴りを放ち、前進していくことでさらに追加で交互に脚を

振るわせて遠心力を得た蹴撃をデイケイドに浴びせ、七度目の右の回し蹴りで大きく突き飛ばす。

予想以上の速さで叩き付けられたダメージに、地面を数回転するもすぐに体勢を立て直して、

片膝について肩を震わせたデイケイドは、腰にマウントしていたライドブッカーに手をかける。

「スイカ模様が、調子に乗るな」

「誰がスイカ模様だどこの野郎！」

『落ちていて翔太郎。もし【世界の破壊者】が彼なら、異世界の力は未知の脅威になる』

戦っている相手への皮肉を忘れない士と、挑発に踊らされる翔太郎にそれをなだめる
フリーリップ。

三者三様の反応を示す中、デイケイドは取り出したカードをバツクルへと装填して機
構を動かし、

カードに刻まれている情報を読み取らせて、その内容を自身の体へと反映させた。

【KAMEN RIDE BLADE】

カードの装填とともに立ち上がったデイケイドの身体は、瞬きの間ほどの刹那で変貌
を遂げる。

返り血の如きマゼンタカラーの装甲は、地球上での最高硬度を誇る美しき白金の聖騎
士の鎧に。

黒一色であった腹直筋に似た部分は、本来の変身者が適合したスートであるスパード

の紋印に。

淡くも強さを感じさせるライトグリーン双眸は、溢れ出る正義を宿したような紅蓮の複眼に。

デイケイドが立っていた場所に現れたのは、仮面ライダー^{ブレイド}剣だった。

カメンライドでブレイドにライドして、いつものように両手をパンパンと音を立てて打ち払い、

いきなり外見が完全に別物となったことに驚愕するWへ、助走無しの全力疾走で詰め寄る。

見た目からは想像もつかない速度で接近するブレイドを、脅威と認定したWの右側である

ファイリツプは、ボディである翔太郎から右半身の意識を奪ってブレイドに攻撃を仕掛けた。

『はあッ!』

「甘いな。やあッ!!」

街に流れる風をサイクロンの力で収束させた蹴りは、白金色の騎士装甲の前には効果

は無く、

むしろ肉弾戦特化であるせいで接近しすぎたWに、ブレイドは渾身の左ストレートをぶつける。

正面から攻撃を防がれて、そのうえでカウンターを受けたWは、三步ほどよろけて後退するが、

当然そんな隙をブレイドにライドしたデイケイドが見逃すはずもなく、次の攻撃に移った。

微妙な距離が開いたために、瞬時の迎撃が来ないと悟ったデイケイドはすぐさま、腰にある

ライドブッカーから新たに一枚のカードを取り出して、バツクルへ装填。効果を発動した。

【ATTACK RIDE BEAT】

『翔太郎、何か来る!』

「やられる前にやりやいいだけだ!」

ブレイドにライドするということは、ブレイドが使う能力を思うがままに使用できる

という事

なのだが、そんな事をWが知っているはずもなく、ましてどのような力であるのかすらも把握

してはいない。この場合、翔太郎が早口で語った言葉は、決して間違っているわけではない。

間違っていたのは、「世界の破壊者」とまで呼ばれた男に、迂闊にも近づいたことだろう。

右半身のサイクロンが風を集め、それを微量の補助として瞬間的な行動をカバーさせた跳躍で

距離を詰めたWは、さっきのお返しとばかりに漆黒の左拳を握り締め、着地と同時に繰り出す。

呆然と突っ立っているだけのブレイドに不信感を抱いたものの、押し切れると思った翔太郎。

ところが、彼らの拳が白金の装甲へ辿り着くより一瞬早く、ライドブツカーから切り替えた

ブツカーソードのカード収納部が、漆黒の左拳の行く手を遮り、攻撃を不発にせしめた。

『バカな……今の一瞬で、正確に拳を受け止めるなんて』

「止めただけで終わるとでも思ったのか？」

「何————ぐあぁッ!!」

相棒の一撃が防がれたことに精神内で驚くフィリップに、デイケイドが吐き捨てるように

言葉を発し、その一言の意味を翔太郎が察するよりも早く、Wの身体が大きくのけぞった。

左肩から右脇腹に至るまでの長い切り傷から、金属同士がぶつかり合った証の火花が散り、

派手な閃光をぶちまけたと同時に、両者の鼓膜を不快げな高周の音波が無作法に揺らす。

Wを襲った謎の一撃の正体は、ブレイドが右手に握るブッカーソードの振動にあつた。

彼が先程使用したカードは、本来はカテゴリー3と呼ばれるスペードの3『ビート』で、

ブレイドの世界ではパンチ力の底上げという効力を持ったカードである。

だがディケイドはそれが正確には、パンチ力アップではなく、振動による対物理性能向上

であるとしていた。そのため、そのカードの力を拳ではなく剣の刃部分に集中させて、

高周波で振動する凶器へと昇華させ、ほぼゼロ距離でそれをWへと振り下ろしたのだ。

毎秒数十〜数百という数で振動する刃が、上昇した威力によって振るわれたらどうなるのか。

その結果は、今のWの受けたダメージが雄弁に物語っている。

飛び散る火花を返り血のように浴びながら、それでもブレイドは前進しつつWを斬り続ける。

左から真横へ振るい、返す刀で再び左肩から右脇腹までを削ぎ、深く踏み込んで一閃を放ち、

自身の左肩をぶつけるような姿勢になったブレイドは、そこから右脚を大きく蹴り上げた。

上半身を蹴りによって強制的にのけぞらされたWに、止めの一撃として剣で四回斬り

つける。

「ぐああああああッ!!」

『ぐっ………翔太郎!』

胴体を装甲ごと”X”の文字のように斬られたWは、そのまま無人の倉庫へと吹き飛ばされて、

長年使われていなかったからか、やけに量のある埃や塵をかぶって辺りを転げ回った。

そんなWを追って、ビートの効力が切れたブツカーソードを携えたブレイドが、倉庫の中へ

躊躇することなど微塵もなく侵入し、倒れているWの前で新たなカードを取り出してみせる。

【ATTACK RIDE TACKLE】

「はああ………」

『翔太郎、距離を取るんだ!』

「あ、ああー！」

次なるカードの発動を終えたブレイドは、ブッカーソードを不可解な姿勢で構え、そのことに

警戒心を助長させられたフリリップが、傷ついている相棒に危険を伝えてその場を離れさせた。

ところが、サイクロンの風で後方へ大きく跳んだWが次に見たのは、自身の着地地点のすぐ

目の前まで迫っている、白金の鎧を持つ戦士の姿だった。

「がはッ！！」

Wの両脚が地面につくよりも早く、ブレイドの左肩がその身体をさらに後方へ吹き飛ばす。

ろくな受け身も取る間があるはずもなく、Wは倉庫のさらに奥へとその身を沈められた。

ブレイドが新たに使用したカードは、スペードの4『タックル』のカードなのだが、

これに関しては説明のしようがない。文字通り、タツクルの速度や力を補助するだけだ。

瞬間的な短距離移動にも使えないこともないが、そういうことにはあまり使われな

い。
だが今回はそんな癖のあるカードも、落下中の敵の追撃という大役を任せてもらえ

た。
今の一撃を受けた相手が、二度目の落下地点から中々這い上がってこないのを見て、もう終わりか、と内心でガツカリしたように溜息をつき、ブレイドは背中を見せる。

【HEAT / JOKER】

しかし、そんなブレイドの背後から、急激な熱風が拳という形となって襲い掛かった。

「ヴオラアツ!!」

「ぐあッ!」

右半身を、緑ではなく赤色に染めたWが、燃え盛る火炎をまとった右の拳を振り抜き、

無防備な背中を晒していたブレイドへと突き刺し、そのまま豪快に押し込んでいく。色が変わっただけではない。

彼の半身が変わるとは、つまりその性質も変化するということなのだ。

「どーしたア！ そんな、モンかよ!!」

「チツ！ はあツ！」

「うおツ………野郎、やりやがったな？ お返しだ、オラもう一丁！」

先程とは打って変わって攻勢になったWは、右手の灼熱を漆黒の左拳にも火を灯すようにして、熱量を増した二つの拳によってブレイドを豪快に殴り飛ばしていく。

そして、それまでのツケと言わんばかりの勢いで、アツパー気味の右拳が炸裂した。新たに切り替えられた右半身の赤は、〈炎熱の記憶〉^{ヒートメモリ}によるもの。

フィリップ側であるソウルメモリ、つまり精神側のメモリに位置するこの赤いメモリは、

炎だけでなく熱に関する地球の記憶を内包している。その応用性はまさに、可燃性の物には

見境無く燃え広がっていつてしまう炎の如し。または、万物全てに伝播する熱のよう

に、

このメモリの力はWの戦力増強に大いに貢献している。

分かりやすい例を挙げるなら、今のように炎を身体にまとわせることが可能になると。

サイクロンの収束のような効果ではあるが、その攻撃性能の差は比べるまでもないだろう。

拳に、脚に、全身に、彼の肉体を包む〈炎熱の記憶〉が燃え盛る炎と熱を供給し続ける。

言うなれば、攻撃することに特化したWの一形態であろうか。

「……………炎、か。コッチは雷電サンダーだから相性は、まずまずつてところか？」

しかし、（今はブレイドだが）ディケイドも並大抵の存在ではない。

今の一撃でWの特性が変化したことと、その性能を把握した彼は、このまま先程のよう
うな

攻撃を浴び続ければ先に自分が倒れる事になるだろうと、冷静に判断していた。

そして再びライドブッカーからカードを取り出し、バックルに装填。効果を発動させ

る。

【ATTACK RIDE METAL】

「メタルだと？ 野郎、俺たちにケンカ売ってんのか！」

『まだ見せてもない手を、知られているとは思えない。まずありえないよ』

「んなこと言っただってよお」

『ヒートジョーカーの攻撃性能なら、あの姿の防御を間違いなく突破できる。』

サイクロンでの戦闘と今の数回の攻撃で、計算は完了した。いけるよ、翔太郎』

「……………ああ。信じるぜ、相棒！」

W
バックルから発せられる電子音を聞き、自身が持つとあるガイアメモリを連想した

だったが、右半身に居る相棒によって落ち着きを取り戻し、再度両拳に炎を点火した。戦意を見せるWを前にしても、ブレイドはまるで動じることなくその場で立ち尽くして、

何かをする素振りを一向に見せない。いや、何かをする必要がないと言うのが正解か。

不動の構えを見せるブレイドが、余裕をかましているのだと曲解したWは駆け出して、

己の二つの拳につけた炎を揺さぶりながら、彼我の距離が数歩までに達したところで跳躍。

落下のエネルギーを加えた左拳を振りかざし、勢いそのままにブレイドへと拳を突き出す。

だが、Wの拳も炎も、ブレイドの不動の構えを解くことは出来なかった。

「なに?!!」

『そんな馬鹿な! ああの装甲の強度の計算は完璧なはず……………』

「だから言っただろ、甘いつてな。やあッ!!」

「二度も食らうか!!」

まるで分厚い鋼鉄製の彫像を殴りつけたような感触に、Wは互いに違った意味で驚愕し、

その隙を突こうと仁王立ちの状態から右拳を振るおうとしたブレイドは、寸でのところ

我に返った翔太郎によってその一撃を阻まれる。そうした互いに、膠着状態に陥った。Wの攻撃が効かなかったのもまた、ブレイドの持つ能力の一つ、スピードの7『メタル』に

よる硬質化が理由である。こちらもほぼタックルと同じ、一時的にブレイドの装甲をさらに

上回る超高硬度の金属分子構造に変化させることで、全身を金属に変える力がある。タックルと同じなのは、効果と名前が直結しているのと、発動時間が短いことだけだが、

実力差の拮抗している者同士の戦闘において言えば、その刹那で勝敗が決まるのだ。元来の強度を遥かにしのぐ頑強さを得たブレイドの拳と、それまでとは比べ物にならない

攻撃性能を炎としてまとったWの拳が、さながら真剣の鏝迫り合いのようにぶつかり合う。

押しでは押され、押されては押しを繰り返す両者だったが、それも数秒だけの間だった。

『あの防御力、厄介だね。翔太郎、ここはヒートと一番相性の良いアレでいこう』

「ああ、アレだな。分かったぜ」

「何が来ても同じだが、そっちがその気なら俺も遊んでやるぜ」

一つの肉体の中にいる二人が意思を疎通させ、それを聞いた悪魔もまた不敵な笑みで返す。

そこから出し惜しみをしないようにと、両者ともにキツチリ五回分拳を振るい抜いてから、

少し距離を取り、Wは新たな鋼色のメモリを、ブレイドは赤い戦士のカードを手にした。

【HEAT / METAL】

【KAMEN RIDE KUUGA】

熱く滾るようなヒートロツクなメロディと、重厚な鋼鉄の如きアイアンサウンドが響き渡り、

それらとほぼ同時に、デイケイドにとっては聞き慣れた電子音声、バックルから鳴り響く。

一瞬の時間が過ぎればそこには、赤い右半身と鋼色の左半身となったWと、赤い装甲に金色の二本角を輝かせた、超古代の文字をその身に刻んだ戦士クウガがいた。

「あれは……確か、フィリップの方に居た、ユウスケって奴の」

『ああ。小野寺ユウスケの変身した姿に、酷似し過ぎている』

「俺をあんなのと一緒にするな」

ポツリと漏らした呟きを聞いたクウガ（ディケイドだが）は、頭の中に思い浮かべたもう一人の

クウガと自分を同列に見てもらっては困ると言い放ち、そのまま距離を詰めようと駆け出す。

対するWもまた、別の場所で同じ姿を見たことで困惑したものの、相手がこちらに向かって

接近してきていることを視認して、迎え撃つように変身時に背中に転送されてきた物体を右手で

掴み取り、身体の前方向へと持ってきて振り回した。そう、その物体は、細長い円柱状

であつた。

メタルシャフトと呼ばれる、Wが左半身をメタルに換装した際に用いる主力武器がソレだ。

細長い鈍色の鉄パイプのようだが、シャフトの中央にはメモリを装填するスロットがある。

それを出現させたのは他でもない、今のWの左側、〈^{メタル}闘士の^{メモリ}記憶〉による効果だ。

メタルと言うだけあつて、誰もが鋼鉄を思い浮かべるであろうこのガイアメモリではあるが、

それはあながち間違つてはいない。このメモリには、勿論鋼鉄に関する記憶も内包されては

いるため、その効果も併用されていると言え言えるので、違うというわけではない。では何故、鋼鉄ではなく闘士なのか。

これは、鋼鉄を扱えるようになった人間が、真つ先に敵を倒す道具を作り出したと言う起源に

基づいているのだろうと推測されている。古来より人間は、同種族と戦う事で進化と発展の鍵を

手に入れ、それをより効率的に相手を倒すことのために使うように知能を発達させて

いった。

このことから、鋼鉄製の物を扱って戦う人間を『闘士』と呼ぶようになり、このメモリ内にも

そういった記憶が内包されるようになったのだろう。

鍛え上げられた鋼の記憶と、その鋼を使って敵対者と戦う闘士の記憶。

絶妙かつ密接に混じり合った記憶は、メタルという共通の言語から同時に引き出されてしまい、

一本のメモリにその記憶を集約しているとすれば、〈^{メタル}闘士の^{メモリ}記憶〉の特性は成り立つ。そんな特性がある故か、このメモリは現在右半身にあるヒートの力と、非常に相性が良い。

ヒートの効力によって、メタルに内包された闘士の中の闘争心に文字通りに火がつけられ、

メモリ同士の相乗以上の効果を発揮することが可能になっている。それが、ヒートメタルだ。

「せりゃッ！ はッ！ そらよッ！」

炎熱をまとわせたシャフトを、歴戦によつて磨き上げられた棒術にそつて振るつていき、

付与されている灼熱も手伝つてか、近接戦特化型のクウガをまるで寄せ付けない戦いを始める。

自分の身体を主軸として、Wは右端と左端に灯る炎を、まるで自身の手のように滑らかに動かし、

どうにかして懐に潜り込んで攻撃を与えたいクウガの挙動を、一手たりとも許さず先に潰す。

右端でクウガの左肩を打ち、次いで左端を水平方向に振るつて頭部を固める腕を弾いて解き、

自然な動作で右端を引き戻してから一気に突き出して、クウガの腹部へと熱い炎をぶつける。

これを何度も何度も浴びせ、クウガの生体鎧からは焦げたような臭いと煙が立ち昇り始めた。

これを好機と見たWは、一気に畳みかけようとシャフトを振るい、クウガに突っ込む。

「キッツイの、喰らいな!!」

激しい口調で発したセリフに合わせた、その一撃が振り下ろされる直前に、クウガが動いた。

〔FOAM RIDE KUUGA DRAGON〕

いつの間にか手にしていたカードをバツクルに装填し、機構を動かして情報を反映させる。

するとクウガの赤い生体鎧が、ほんの一瞬の間に変形をはじめ、目が醒めるような青に変わり、

近接戦特化型のマイティフォームから俊敏性と脚力に特化したドラゴンフォームになった。

目の前に居た相手の外見が変化したことに驚く暇もなく、Wはシャフトと振り下ろしている。

迫りくる攻撃を前にしても、青に染まったクウガは動じることなく、一点を見据えていた。

「せやあッー！」

そして高熱と炎をまとったシャフトがクウガを捉える直前、青い戦士が跳躍でそれを
躲し、

慌てて向き直ろうとしているWの背後に着地して、死角から組み付いて両腕をホール
ドする。

いきなり戦法を変えてきた事についていけず、振りほどこうと必死にもがくWだった
が、

身体を揺する動きを逆に利用されてしまい、脚を掛けられて体勢を崩されると投げ飛
ばされた。

重力に従って落下したWは、すぐにあることに気付く。

「野郎、俺たちのシャフトを！」

『迂闊だったね、翔太郎。まさか武器を奪われるなんて』

起き上がろうとして気付いた違和感。その正体が、彼ら二人の前に居る戦士が、持つ
ていた。

これまで幾度となく街を泣かせる悪党を懲らしめてきた、メタル専用の主要武器である

メタルシャフトが、青い鎧で身軽に動くクウガによって強奪せしめられてしまったのだ。

翔太郎としては、これが悔しくないわけがない。

「それは俺たちの武器だ、返せ泥棒!!」

「心配するな、すぐに俺のになる」

「何だと?」

「こういうことだ」

即座に食って掛かったWの言葉に、クウガもまた鼻に突くような態度の皮肉で出迎える。

しかし実際、クウガの言う通りの結果となった。クウガの持つ物質の材質を変えてしまおう

能力、モーフイングパワーによって、メタルシャフトはクウガ専用のドラゴンロッドへと

変貌を遂げたのだ。目の前でクウガ本来の戦闘方法を垣間見せられたWは、啞然とする。

「好き放題やってくれたな、今度はこっちの番だ」

「ハッ！ 人のモン盗っておいていい気になるな！」

『翔太郎、冷静になりたまえ。状況は依然、こちらが不利だ』

「メタルの武器が取られたんなら、トリガーでいけばいい。だろ？」

『……………君は本当に安直だね。でも、それしか手は無さそうだ』

ドラゴンロッドを構えてみせるクウガに、負け惜しみにも聞こえる声がWの左から漏れるが、

逆に右からは状況を的確に判断する声も聞こえてくる。要するに、場面は膠着していた。

眼前のクウガに武器を奪われた二人は、Wの換装で最も瞬間火力の高いメモリを使う相談を

した結果、その使用が現状で打てる最高の一手であると認め、バックルへと手をかける。

それを見たクウガもまた、次は何が来るのかと振りかかる未知への脅威に警戒心を見せた。

ところが、この均衡は唐突に破られる事となる。

「うわあああああああッ!!」

「!?!?!」

互いを睨み合っていた三人だったが、どこからか聞こえてきた悲鳴に視線を彷徨わせ、

自分たちのいる無人の倉庫のすぐ近くからと分かると、同時に同じ場所へと駆け出した。

両者は戦いの途中ではあったのだが、中身は人間を守るために戦う仮面ライダーである。

人間が悲鳴を上げている以上、それはその悲鳴の主が何らかの危機に陥っているという事に

間違いはない。仮面ライダーの名を背負う事とは、人のために命を賭して生きる事なのだ。

そのためであれば、たとえ敵だったとしても一時的には見逃すし、手を取り合うこともある。

特にWは、自分たちの敵であったはずの人物と共闘した過去があったため、より顕著であった。

メモリの換装を中止し、ロッドを構えを解いて悲鳴の発生源へ向かった二人の戦士は、

自分たちのいた倉庫から見て右隣にある大きめの廃倉庫へと辿り着き、脚を踏み入れる。

そこで彼らを待ち受けていたのは、悲鳴を上げた人物と、悲鳴を上げさせた戦士。

「うあ……………ああ……………」

「……………」

呻き声をあげて苦しんでいるのは、翔太郎と土が二十分ほど前まで一緒に居た人物。

鳴海探偵事務所へと依頼をしに来たスーツの男、羽田睦 永久であった。

彼はただ苦しんでいるのではなく、首を絞められている。地に脚はつかず、片手で

軽々と

持ち上げられている彼は、助かろうと必死にあがいているものの、さほど効果は無い。そして、羽田睦を片手で締め上げているのは、見たこともない戦士だった。

その全身は、Wとは違って一色に染まっている。配色は、夕陽を飲み込む始夜の如き紫紺。

頭部にある双眸は深い緑を湛えていて、目尻の上部分が長く、下部分が短く伸びている。

Wの額にある文字通りのアンテナは、左側が極端に短いVのような造形になっている、

まだ完全なる闇に覆い尽くされる前の空に瞬く、星屑のような淡い銅色が紫紺に映える。

極めつけは戦士の腰部にある、スロットが右側一つしかない特徴的なドライバー。

今もなお続く気道の圧迫を止めさせようと、Wと青いクウガはまたも同時に駆け出した。

「羽田睦さん！」

全速力で大地を蹴るWの左側、翔太郎が自分たちに街を救う依頼をしてきた男の名を

呼び、

もう一人のライダーであるクウガは、無言で羽田睦の首を絞める謎の戦士に跳びかかる。

しかし、来るのが遅すぎた。

「ぐうう、があつ、あ

「羽田睦さん！ 羽田睦さん!!」

「……………」

強化されたドラゴンの脚力と俊敏性を活かした奇襲を、謎の戦士は空いている左手で軽く

受け止めてしまい、驚愕に目を見張るクウガを突き出した左脚の蹴りで大きく吹き飛ばす。

依頼人を救おうとWが入れ替わるように接近したが、その直前に固いものを手折るような

聞き慣れない音が倉庫に鳴り渡り、それと同時に羽田睦の必死の抵抗が音もなく消えた。

現場を間近で見ているWは、気付いた。今日の前で、依頼人が首の骨を折られたのだと。

また、依頼人を救えなかったのだと。

糸が切れた人形のように力なく倒れた羽田睦を、謎の戦士は一瞥しただけで興味を無くし、

悲しみと怒りに燃えるWとやられたままでは治まらないデイケイドの前から姿を消した。

「……………羽田睦さん」

「……………何者だ、アイツは」

後に残されたのは、物言わぬ亡骸と成り果てた男と、それを救えなかった仮面の戦士たち。

動かなくなってしまった羽田睦だったソレを、Wは悲しみを以て、デイケイドは疑念を

抱いて見つめる。それでも彼らの心には、人を救えなかった悔恨の思いだけが刻まれた。

依頼者である羽田睦が殺され、小競り合いをする気分では無くなった両者は、フィリップから事情を聞かされて合流しに来た四人とともに、探偵事務所へと戻った。

先程まではいがみ合っていた両陣営も、今はただ、現実の重苦しさを受け止められず、無為に時間と距離を作つて気を紛らわせようと、静かに息を潜め合つた。

午後四時を過ぎてから十五分後、探偵事務所ではなく、亜樹子のケータイが鳴る。

「はい、もしもし………え？ あ、ハイ。そうですけど

えええええつ

!!」

最初は沈んだ声で受け答えしていた亜樹子だったが、すぐにそれは悲鳴に変わった。

「りゅ、りゅ、竜君が重傷で、意識不明で、集中治療室う!!」

「なに?」

いかにも慌てふためくような状態を体现して、亜樹子は荒ぶる。

そんな彼女の言葉を聞いた翔太郎とフィリップは、互いに視線を交錯させて、すぐに確かめに行つてこいと荒つぽい口調で言つて、亜樹子を事務所から送り出した。

「いつたい、何がどうなつてんだ……」

「さあな。ただ、あの羽田睦つてのが殺されたのには、理由があるはずだ」

「……………今回ばかりは賛成するぜ、世界の破壊者さんよお」

「その呼び方は好きじゃない」

「ああそうかい」

多少勢いは削がれているものの、やはりまだ険悪な雰囲気解け切れていない二人を交互に見やり、ストッパーである亜樹子が消えたことを密かに悔やむ夏海とユウスケ。

なだめようとしても効果がない相手だと分かっているため、なまじ下手な事は言えない。

そう考えた結果として無言だった二人は、ここでもう一人無言のままの人物に救いを求めて声をかける。

「ね、ねえフィリップ君。どうしたらいいのかな？」

「……………おかしい」

「え？」

ところが、帰ってきたのは予想していたものとはまるで正反対の確定文。顎に指をそえるポーズを取り、本を開いた彼はそのまま士に視線を向けて語った。

「門矢 士。君が言うように、羽田睦 永久が殺されることになったのは理由がある。

しかも、僕ら以外にロストドライバーで仮面ライダーに変身できる、第三者によって」

「相棒、頼めるか？」

「分かった。『検索』してみよう」

二人の探偵の瞳に光が灯され、その表情には真剣味と生き生きとしたものが入り混じる。

いきなり動き出した二人に、何がどうしたのかと尋ねたい気持ちに駆られた夏海たち

だったが、相手の真面目を通り越したような表情を見て、自然と口が閉ざされてしまった。

閉じたばかりの本を再び閉じて、両手を一度顔の手前でクロスさせたフィリップは、そのままゆつくりと、滑らかな動作で交差させた手を下から掬い上げるように広げる。

一瞬だけ彼の髪が逆立ち、その後は瞳が閉ざされ、姿勢を保ったまま無言に陥った。フィリップが不可解な行動を取り始めて数分後、ようやく彼が目を開いた。何やら微妙な表情の彼に、待ち侘びたとばかりに翔太郎が声をかける。

「ご苦労さん。で、何か分かったか？」

「……………ああ、一応は」

「一応？ どういう意味だ？」

は、
歯切れの悪い返事をしたフィリップに、ようやくどこかおかしいと気付いた翔太郎

彼の曖昧な言葉の意味を問い直し、それを受けたフィリップは逡巡した後、口を開く。

「今、『地球の本棚』^{ほし}で、ある人物について検索してきた」

「ある人物だと?」

「……………羽田睦 永久さ」

「なにか、あつたんですか?」

士たち三人にはフィリップの口にした、『地球の本棚』の方が気になったりしたのだが、

より重要そうな単語が直後に飛び出てきたため、質問するのをぐつと堪えた。

一番早く堪えられた夏海が、他の三人を代表してフィリップに尋ねる。

わずかな沈黙の末、似つかわしくない厳かな雰囲気で、彼は語った。

「羽田睦 永久という男は、最初から存在しない」

E p, 31 『目覚めるL / テロ事件再び』

羽田睦 永久という男は、最初から存在しない

フィリップが口にしたその一言は、緊迫したこの場面にいる者をさらに困惑させた。最初にその言葉を聞いて反応を見せたのは、フィリップの相棒であり、依頼人を目の前で失った

左 翔太郎であつた。彼は常に意識しているハードボイルドの仕草も忘れて、食つてかかる。

「オイ、そりやどういうことだよ相棒！ 羽田睦さんが最初から、存在しないって」「順を追つて話そう。まずは落ち着くんだ、翔太郎」

頭に血と熱が昇る翔太郎とは裏腹に、どこまでも冷静であるフィリップが相棒の興奮をたしなめ、

ひとまず自分の話をキチンと聞いてもらえるように、相棒が椅子に座り直してから話を再開した。

「僕は最初に、門矢 士の言ったように羽田睦 永久が殺される理由を探ることから始めてみた。

と言つても、君たちには何のことだか分からないだろうから、僕の力を掻い摘んで説明しよう」

およそこの場における最年少の人間が放つものとは思えない雰囲気をもとい、フィリップは話の

根幹になるであろう『自分自身の存在』について、若干の躊躇の後に語り始める。

「僕はただの人間ではなく、地球というデータベースによって構築されたデータの塊なんだ。

幼い頃に、僕の父が発掘した遺跡の井戸……地球の記憶の中枢ともいえる場所にあるクセスでできる

ポイントへ誤って落下した僕は、わずか三歳でこの世を去り、データ人間として

蘇った」

「データ人間……………」

「だから僕は、このメモリに自分の意識を再データ化してインプットし、翔太郎の持つベルトの

スロットへと転送することが出来る。WがWとして成り立つのは、僕がデータの存在だからさ。

さて、そして地球という膨大なデータの貯蔵庫によって構築された僕は、この世界で唯一、

地球そのものへのアクセス権を有することが出来た。無限のデータベースを個人で閲覧できる」

「それが、さっき言った、『地球の本棚』ってヤツ？」

「正解だ、小野寺 ユウスケ。地球が今この瞬間にも記憶、記録しているあらゆる事象や現象を

リアルタイムで僕は閲覧し、その知識を蓄えることが出来る。人型のデータバンクという認識で

構わない。とにかく、僕は今地球の本棚を使って、羽田睦 永久という一人の記録を調べた」

地球の本棚の解説

フィリップの壮絶な過去からの贈り物ともいえるこの能力の、簡単な解説をしよう。ほとんどの事はフィリップ自身が語っていたが、ここではその補足という形で詳細を示す。

まず、彼の能力である地球の本棚とは、地球そのものという無限のデータベースのことであり、

彼はそこへアクセスし、内部にある途方もないデータを全て閲覧することが出来る稀有な存在だ。

地球がこの時にも記憶・記録し続けている「地球上にある全て」には、当然ながら一個人という

限定的な情報も含まれているため、それら全てを彼は誰に咎められることなく網羅してしまえる。

良く言えば、地球上に存在する全てを解明できる稀代の天才。

悪く言えば、地球上に存在する全てを丸裸にする最悪の合鍵。

誰よりもこの世界を詳しく知ることが出来る、まさに『地球ほしの申し子』と呼ぶに相応

しい彼が

保有することを許された究極にして最強の能力。それがこの、『地球の本棚』である。

「———という具合に、僕は彼の事を検索してみたんだが………どうかした？」

「いい、いや、別に………」

それまで淡々と語っていたフィリップの表情が、そこで初めて曇り模様を見せた。

彼の対面に座っていた夏海とユウスケの二人が、そろって引きつった笑みを浮かべたからだ。

彼女らがそのような反応を見せた理由までは、言うまでもないだろう。この場でそれが分からない

人物がいるとすれば、世界を知ろうと思えばいつでも知れたが故に無知であり続けたデータ人間

こと、フィリップその人だけだ。そして今、絶賛その通りの状況となっている。

引き気味に苦笑いを浮かべ合う二人を横目で見つつ、話の続きを待っている二人の気配を敏感に

感じ取ったフィリップは、クセつきの強い前髪を指でいじりながら、話の続きを語りだす。

「話を続けるけど、僕は羽田睦 永久という一個人に絞って検索をかけてみた。

ところが、その検索には一冊も引つかからなかったんだ。これが意味するところは
「一つ」

「……………羽田睦 永久という人間が、そもそもどこにもいやしない」

「そういう事だ。まあ今まで僕らが経験してきたことからくる推測だけど、可能性としては

偽名という手もある。ただこの場合は、他の角度から検索をかければつながるはず
なんだが。

ソレすらも無かったとなると、やはり羽田睦 永久という人間自体の存在が無い方が理に適う」

「……………じゃあ、アイツは誰なんだ？」

「だから、それを今調べてたんだろうが!!」

「調べても分からなかったんだろ、だったらどうしようもないだろうが」

「あアん!!」

話の途中だというのに、またも衝突を始める士と翔太郎を各陣営の常識人たちがなだめる。

両者ともに睨み合いながらも息を落ち着かせ、話を継続できる状態に戻ったのを確認してから、

フィリップは三度目になる中断からの再開を始めた。

「とにかく、現状はとても不安定だ。僕らに依頼を持ち掛けてきた羽田睦、永久という人間が

そもそも存在していなかったという事実と、彼が僕らに探させようとしていたメモリの行方。

このどちらも彼や、あの謎の仮面ライダーの思惑が介在しているとしたら、非常に危険だ」

「……………フィリップ、あの紫の野郎のメモリ、見えたか？」

「済まない。羽田睦、永久の方にばかり目がいつてしまつて」

「だよな……………あんな状況でもそんなとこまで見れるわけないもんなあ」

「あのオツサンとライダーが、敵同士なのかもな」

「憶測だけれど、今のところは有力な線ではある。門矢 士、君の意見も可能性としてはあるよ」

疑うという事に際限は無いとばかりに、どんどん後ろ暗い方向へと思考を沈めていく三人を、

直接その場に居合わせていなかった二人、夏海とユウスケがどうするべきかと視線を泳がせる。

ただ、フィリップの話から二人も、羽田睦 永久という男への印象がガラリと変わったのには

間違いはない。誰しも皆、殺された彼の不可解さに囚われて、不信感を募らせていった。

既に時刻は午後の五時に到達しようとしていた頃、事態は急展開を迎えることとなる。

それまで一つの謎という深みにはまっていた五人のいる事務所に、新たな人物がやって来たのだ。

そしてここに来た二人の男が、停滞していたフィリップたちに予期せぬ風雲急を告げる。

「オイ翔太郎！ なあオイ、心気臭えツラしてる場合か？ 街がエライことになってんだ！」

「探偵エ！ い、いつも出しやばつてくるんだから、こういう時も、で、出番だよな！」

「なんだよ突然、刃ジンさんにマツキーじゃねえか」

「……………刃野じんの刑事に真倉まくら刑事、今は亜樹ちゃんがいらないから依頼は無理ですが」

鳴海探偵事務所の扉を壊さんばかりの勢いで突入してきたのは、風都警察署の刑事コ
ンビの二人。

髪をオールバックにキメて、常にツボ押し器を片方の手に携帯している冴えない中年
と、

パリッとしたスーツを着こなし、まだ青臭さの抜けない印象を抱かせる映えない若手
である。

今にも「ややこしやく」と言つて舞い出しそうな中年が、翔太郎と古い付き合いの刃
野幹夫で、

自尊心はあるのに下手に人が良すぎて空回りする若手が、翔太郎を毛嫌いしている真
倉俊という。

彼らは風都警察署の刑事であるが、その所属は「超常犯罪捜査課」という、聞き慣れない部署。

何を隠そうその部署は、殺人でも麻薬でもなく、ガイアメモリとドーパント犯罪に対してのみ

捜査活動を許可された、選りすぐりの敏腕エリートが集う場所。と言えば聞こえはいののだが、

実際は彼ら二人と同部署の課長である「仮面ライダーアクセル」こと照井 竜の三人しかない。

尤もらしい理由を挙げるなら、超常犯罪捜査課を立ち上げた照井から声をかけられたから、だ。

設立当時は、ドーパントという未知の怪物と渡り合う覚悟が風都署には無く、街外から派遣された

照井に全権を押し付けて自分たちは物見遊山を決め込もうとしていたので、刃野と真倉の二人は

そのあたりをモロに受けることとなったのだ。見方を変えれば被害者に等しい人物である。

何かと事件現場での協力や衝突など、接点が多いためにお互い持ちつ持たれつでやつ

ていたが、

これまでの比ではない慌てぶりで転びながら突入してきた二人に、翔太郎が話しかける。

「一体何がどうしたんだ？ あ、まさか街にドーパントが現れたってんならもう」

「なんでオメエがドーパントのこと知ってた？ ま、まあいいや、それもそうなんだが、

違うんだよ翔太郎！ お前、テレビ見たか？ 見てない？ お前まさかテレビ見えないのか？！」

「探偵く！！ どうなっちゃってるんだよこの街はくく！！」

「だあーもおー！！ 一旦落ち着けて！ で、刃さん、テレビがどうしたって？」

「だあからオメエ、テレビ見たかって！ 見てないんだったら早くつけろ！」

「んな事言つたって、ウチにはテレビなんか……………あ、ガジェットなら」

しきりに「テレビを見ろ」と喚く二人をなだめつつ、翔太郎はテレビの代わりに普段ケータイの

代わりに連絡手段として使用しているメモリガジェットの、液晶画面をビデオ中継

モードへと

切り替える。それをこの場の全員にも見えるよう、部屋の中央のテーブルにソレを置いた。

ガジェットのライブ機能で代用して映し出された画面を見て、翔太郎とフィリップは驚愕する。

「な、こ、コレ」

幾つもの感情がねじ曲がったことを示す表情を浮かべる二人の前で、その放映が始まった。

小さな液晶画面に映ったのは、風都市民であれば誰もが知っている街のシンボルの最奥部。

そして、そこに設置された幾本ものコードが接続された椅子のような物体と、並び立つ異形たち。

その悪い意味で見覚えがあり過ぎる異形の並ぶ中心に、紫紺の仮面をつけた戦士が立っていた。

『風都市民諸君に告げる』

四体の異形を従えるように並立させているその仮面の戦士は、不遜な態度で次の句を述べた。

『我が名は、ラスト。〔仮面ライダーラスト〕』

右手の親指のみを突き立てて、自分自身へと向けて証明とし、話を続ける。

『ガイアメモリに命運を握られた、哀れなる箱庭の住人たちを、解放する者だ』

あらかじめ用意していたかのような言葉の後に、異形たちが己の肉体の鼓動を見せつける。

赤い身体を持つ者は、その指先から燃える火の球を浮かび上がらせ、
 青い身体を持つ者は、その右肘から先に延びる砲塔を正面に構える。
 黄の身体を持つ者は、その両腕の代わりに生えた触手を波打たせて、
 銀の身体を持つ者は、その鋼鉄の如き全身に力を込めて肉を震わす。

ずらりと並んだ異形たちを映したカメラは、再び中央の仮面の戦士の前へと戻った。

『この最新型ガイアメモリと、巨大光線兵器〔エクストリームビッカー〕を我々は有している。もはやいかなる武力であろうとも、干渉することはできないだろう』

紫紺の仮面に二つ並ぶ深緑の双眸が見上げたソレが、照明の輝きのもとに照らし出され、

大きな椅子に見えていたものが巨大な光線兵器であることが、観衆の目に晒される。それは奇しくも、一年半前に起きた悪夢を、全く同じ形で辿っているように思えた。そこからさらに、仮面の戦士の演説は続く。

『この風都タワーを拠点に、我々は、風都を自由の楽園へと変える』

両手を大きく広げて見せた戦士の姿はまさに、世のしがらみから解放された者として見えてもおかしくはないだろう。この光景に、一年半前の悪しき前例が無かつたらだ

が。それまで饒舌に演説を語っていた紫紺の戦士が、「ところで」と前置きを述べて話を

える。

『あと二つ……この街に、我々が望むガイアメモリが残されているのだ』

左手の指を二本だけ立てた状態でカメラの前に突き出し、それを下に向けて往復させる。

その動作はきつと、「この街に」というアクションで、言葉を強調させているのだろう。やけにプロじみた演技を見せる仮面の戦士が、前置きと現状を語ったうえで本題に入った。

『その二本のメモリ、もし見つけたのなら、風都タワーまで持参していただきたい。

それが我々の求めているものであれば………該当者に十、いや百億ほど贈呈しよう』

およそ一個人や五人程度の団体が提示するには、あまりにも荒唐無稽な金額が提示され、

コレを見ている”正常な”風都市民は誰もが、彼らの望むメモリを探し当てること

を、

そしてその見返りとして渡される賞金の使い道を夢見始め、各々の目を曇らせていく。

さながら、一年半前に街を地獄へと変えようとした、白い悪魔の再来であった。映像を見ている者の反応を心得ているように、仮面の戦士は締めくくる。

『諸君らの健闘を祈る
——以上だ』

その簡潔な言葉を最後に、映像は途切れた。

それまで沈黙を貫いていた翔太郎とフィリップが黙って立ち上がり、片や帽子掛けから勝負用の

ツバが広めの帽子を手に取り、片や開いていた本を閉じて帽子掛けを模した扉へ向かって動いた。

何も言わずにいた二人が取った行動に対して、刑事二人はただただ困惑して喚き散らすばかりで

あつたが、異世界側の三人
 特にライダーの士とユウスケはその
 行動を理解していた。

「行く気だな？」

「……………それ以外に、何かあるかよ」

ぶつきらぼうに呟かれた士の一言に、寡黙に身なりを整えていた翔太郎が抑圧した声で返答する。

明らかに、自分自身の内側からあふれそうになる感情を、どうにかして抑え込んでいるという

感じの声色であったものの、士はそれを無視すると、置いていたカメラを手に取って

軽く告げた。

「俺も行く」

「……何だと？」

「聞こえなかったのか？ 俺も行ってやるって言ってるんだ」

振り返って鋭い視線を叩きつけてくる翔太郎に、気付いてる素振りすらなく士は淡々と続ける。

「アイツはお前一人……お前ら二人だけじゃ倒せない。だから、俺も行って手伝ってやる」

「どういう意味だ」

「言葉通りだ」

口数少なく言い放たれる言葉によつて、互いのまとう雰囲気は段々と険悪なものになつていく。

これから共闘しようという者同士が抱えるべきではない悪感情を、敏感に察知したユ

ウスケが

両者の間に割って入り、持ち前の人の警戒心を削がせる万人受けする笑顔で話をまとめる。

「つ、士の物言いはともかく！ 翔太郎さん、俺も一緒に行ってもいいですか？」

「お前まで……」

「じ、自分たちの仕事に誇りを抱いているのは分かります！ 俺がいた世界でも、責任感に

厚い人がいましたから……でも、だからこそ、俺もそんな人の力になってあげたいんです！」

「わ、私からもお願いします！ 士君とユウスケを、連れて行ってあげてください！」

ユウスケの「誰かの笑顔を守りたい」という純真無垢なる訴えに揺らぐ翔太郎を見た直後、

すかさず夏海も傍観者の立場から身を乗り出して、士とユウスケの動向を強く願っていた。

そこからさらに二人は、勢いよく頭を下げてもう一度「お願いします！」と口をそろ

える。

人の情と可愛い（もしくは綺麗な）女性に対して無条件に甘くなる半熟野郎は、ハーフボイルドこうなる。

もうどうにもできなくなる。必死の懇願をする二人を前に、ほんの少しの葛藤をしてから

とうとう諦めたように深い溜息を吐き、帽子のツバを指ですくつてから渋々承諾した。

「分かったよ。アンタらがそこまで言うんなら、俺に止める権利はねえ。だろ、相棒？」

「ああ。それに今回ばかりは、人手は多い方がいい。照井 竜の容態も気になるしね」

「そっか、照井の奴……………クソ、何がどうなってんだよ!!」

「それを確かめるために、行くんだろ？」

の様子を見に行かせた亜樹子からも未だ連絡は無く、ただただ自分たちの置かれた状況

の不可解さに苛立つ翔太郎に、土が何でもないような口ぶりですべきことだけを述べ

る。

数時間前まで戦いを繰り返していた相手に核心を突かれ、翔太郎はまた少し不機嫌になりながらも、士の言葉の正しさをキチンと理解できたために何も言えず鼻を鳴らした。

こうして、争っていた両者が手を組み、病院に搬送されたという照井の容態を確認した後、

謎の仮面ライダーとおぼしき一団が占領した風都タワーに乗り込むという作戦が決まった。

明朝、午前八時を少し回った頃、鳴海探偵事務所から三台のバイクが飛び出していった。

この事務所にいる仮面ライダーが乗りこなす緑と黒の、ハードボイルダー。世界の破壊者である彼がこよなく愛するマゼンタの、マシンドイケイダー。異世界からやって来て誰かの笑顔を守ろうとする赤の、ビートチエイサー。

正義の心を燃料とする彼らの愛車（二輪）たちは、風都を包む不穏な空気を裂くような

勢いで、街のシンボルであり中心部に位置する巨大なタワーへと一路邁進していく。

寡黙にエンジンを吹かす三人。本当ならば、ここにはもう一人の戦士が加わるはずだったのだ。

この街を脅かす悪を決して許さない不屈の男、この街にいる二人の英雄、その真紅の戦士が。

だがこの場に彼の姿はない。昨夜容態を見に行った亜樹子から連絡が入り、意識不明の重体で

依然予断を許さない状態であると涙声で聞かされたため、三人は彼抜きでの行動を決意した。

不安はある。照井 竜という人間の強さと、不死身とさえも謳われるその不屈の闘志を知る

翔太郎とフィリップからすれば、彼一人がいらないだけで、かなり心細い感じを感ぜられる。

しかし、二人は一人として戦うが、決して独りではない。新たに戦列に加わる仲間が来た。

少々危惧する点はあるのだが、その戦闘能力に至っては自分たちWを寄せ付けられないほどのものが

あることは、実戦を経て体験済みである。もう一人の戦士は、底抜けに明るく好感が

持てる。

照井はきつと目を覚ます。そしてもし彼がこの事件を知れば、必ず傷だらけの身体で駆けつける。

何より心強い事ではあるが、そんな事をさせていいはずが無い。仲間をこれ以上、無理に戦いへ

巻き込もうなどとは思えないし思わない。だから、ここにいる三人だけで、決着をつけてやる。

忌まわしき一年半前の悪夢を模倣する、仮面ライダーラストを名乗る謎の人物との決着を。

三人のバイク集団で先頭にいる翔太郎は、そんな思いと共にバイクのグリップを強く握る。

人知れず誰よりも優しい決意に心を燃やしていると、バイクのミラーに赤いランプが映った。

やけにチカチカする赤と、白黒ツートンカラーのあの車体は、間違いなく警察のパトカーだ。

そう思つて横へ顔を向けた翔太郎は、並走してきたパトカーから顔を出す顔なじみに驚く。

「刃さん！ マツキー！ 何だつてこんなとこに？」

「オイ翔太郎！ お前、仮面ライダーと友達なんだろう！！ 助けてくれよ今大変なんだ

！！」

「探偵！！ 俺たちは暴徒化した市民をタワーから遠ざけるから、早く仮面ライダーを呼べえ！！」

刃野刑事と真倉刑事の二人は、狭い車体の窓から這いずるように身を出して、口々に叫ぶ。

一応翔太郎たちは、自身が仮面ライダーであることを秘匿して暮らしている。

”仮面ライダーはこの街の英雄”というスタンスを貫くため、敢えて正体を隠しているのだ。

無論、ドーパント絡みでの依頼の際に、依頼人やその周囲の人間に変身したところを目撃

されたりすることなど多々あるのだが、その場合は依頼人からの謝礼金を一割削る代わりに、

箱口令（つまりは他言無用）を要求している。これによって、彼らの秘密は守られて

いた。

今いる二人の刑事もまた、翔太郎やフィリップ、上司の照井が仮面ライダーだとは知らない。

だから翔太郎はかつて、苦し紛れに自身と仮面ライダーは友人だという設定を口にしてしまい、

『風都一騙されやすい男』（彼と懇意な者曰く、騙され上手）な刃野がソレを鵜呑みにしたのだ。

そんな大恩ある刑事からの要請に首を傾げていると、パトカー内の無線に新たな一報が届いた。

『風都市内、湾岸エリアと風都スタジアム付近にて、武装集団の一員と酷似したドーパント出現。』

警察署各員に通達。至急応援を急行させ、市民の安全の確保とドーパントの侵略を阻止せよ』

無線越しに伝わった話を聞いて、翔太郎はどうしようもなく焦るが、ふと背後を振り返る。

普段の彼は独りで、かつての自分も一人で困難に立ち向かっていたが、今はもう違う。共に謎の集団の脅威を阻もうとする同志がいる。いくら気に食わなくとも、実力は折り紙付きだ。

ヘルメット越しに視線を送った翔太郎、そして彼の無言のメッセージは、頷きによって返った。

湾岸エリアにはマシンデイクイダーを駆る土が、風都スタジアムには（自然公園と場所が近いため）

ビートチエイサーを駆るユウスケが、それぞれ車体を左右に動かして方向を変えて向かっていく。

そんな二人の小さくなる背中を見つめた翔太郎は、感謝の意を心中で述べると自身も前を見据え、

その先にそびえ立つ鋼色の巨塔へとハードボイルダーを駆って猛進していった。

「おい、俺たちも行くぞ」

「了解です！」

非力ながらも街の平和を守ろうと闘志を燃やす、二人の刑事コンビもまた、別の現場

へ急行した。

風都市内、湾岸エリア

既に近隣区域の住民の避難を完了した警察は、着実に迫りくる鋼色の怪人と交戦していた。

ところが、その強靱な肉体に弾丸は通じず、金属音を奏でてデタラメに跳ね返るばかりで、

戦果を挙げることなく徐々に追い込まれていた。

『ハツハツハツハ！ ウラア！！』

濁った赤い隻眼を宿すその怪人は、溢れ出る力を発散させるが如く拳を振るい、万物を砕く。

バリケードにしていたパトカーが破壊されて炎上する。これで、五台目が炎の中に消えた。

人ならざる者の脅威に竦み、警官隊は誰もが恐怖に震えて意味も無く弾丸を放ち続け

ていく。

無論ソレに効果は見られず、ひしゃげた鉛玉がアスファルトの地面に無作為に転がるだけ。

もう駄目だと怯え切った表情で泣き喚く警官たちの横合いを、一台のバイクが駆け抜ける。

『ウゴアツ!!』

突然現れたマゼンタの突進に反応しきれず、分厚い前輪に胸部を強打された怪人は吹き飛ばす。

何が起きたのかと警官隊が唾然とする中、乗ってきた愛車から華麗に降りた男はひとりごちる。

「……………世界を救ってやるってのなら、まずは街の一つでも救わねえとな」

『ギギギギ……………ウルアアアアアアッ!!』

「それに、写真が撮れなくっても、この街の風は案外気に入ってたんだ」

『ウオオオオオオッ!!』

「変身」

【KAMEN RIDE DECADE】

五人の警察官が手も足も出せなかった怪人と、一対一で向き合っていた青年の姿が変わる。

どこからともなく現れた人物は、瞬く間に灰色の装甲に覆われ、直後に色彩が加えられた。

その全身を染め上げるのは、幾多の戦場で浴び、色褪せた返り血の如きマゼンタカラーの装甲。

淡く、それでいて決して弱くはない光を宿した、混沌を見据えるライドグリーン双眸。

左肩から胸部へと斜めに貫いていった十字架のような、白と黒が絶妙に映えるライオン。

両腕と両脚を包む装甲の、その内側にある、返り血の如きマゼンタとは対照的な純白。街の涙を拭う二色のハンカチも、街の悪を許さない正義の真紅も、ここにはいない。しかし、悪を許さず、正義を燃やす仮面の戦士ならば、仮面の英雄ならば、いる。

「さて、片付けるか」

そう呟いたデイケイドは、〈闘士メタル・ドールの記憶パンド〉に臆することなく対峙した。

風都市内、風都スタジアム前

ここでも警官隊が、迫りくるドーパントを相手に意味のない抵抗を続けていた。否、意味が無いというのはあくまで、損害を与えたかどうかの視点での話だが、この場に於いてその事実を目を向ける者は一人としていない。皆一様に、必死だった。

自分たちが暮らす街を、自分たちが愛する街を、絶対に守って見せる。

絶対的な力の差に怯えながらも、それでも銃を握って抗戦の意思を捨てない彼らの顔には、

暴虐という名の悪を振りかざす怪人たちから、守るべきものを守る使命感が刻まれていた。

『フッフ………アハッ♪』

しかし、それでもやはり現実是不変ならない。人間と怪物では、その力の差があり過ぎる。

指先に火球を生み出した女性的シルエットの赤い怪人は、軽い口づけとともに指に宿した

その灼熱の弾丸を、全身を火傷やすすだらけにしながらも健気に立ち向かう凡人たちへ

向けて、実に楽しそうに放った。

「――変身!!」

確実に肉を焦がし骨を焼き尽くすはずだったその焔は、バイクと共に現れた戦士に阻まれる。

赤く強靱な鎧に身を包み、黒い外皮にて四肢を覆った、誰も知らない仮面の戦士。

光を浴びて輝くその二本角や、肩部や腕部、脚部にある装飾の金色が、正義の赤を照らす。

超古代の力をその身に宿した、完全無欠にて正真正銘の仮面の英雄が、バイクを降り

た。

「皆さん、あとは俺に任せてください！」

背後でただただ呆然とする警官隊に一声かけ、クウガは再び正面にいる怪人を見据える。

攻撃を邪魔された相手は苛立っているようだが、彼は悪戯に命を、笑顔を奪う行為を許さない。

「来い！ 俺が相手だ!!」

自らの意思を叫んだクウガは、（ヒート・ドールバント）〈炎熱の記憶〉に怒りを向けて対峙した。

風都タワー前

今回の事件の主犯である人物を倒すため、タワーへと向かっていた翔太郎だったが、鈍色の巨塔へ続く道の途中であろうことかバイクを降り、ヘルメットを取って前方を睨む。

そこには、彼が、彼らが倒すべき悪てきがいた。

『待ちわびたぞ、仮面ライダーWの左側』

「テメエ……ラスト!!」

『仮面ライダーラストだ、間違えるな』

「ふざけんな!」

紫紺の装甲に覆われた謎の戦士、ラストが仁王立ちで、仮面ライダーの到着を待つていた。

翔太郎の言葉を冷静に訂正するものの、その翔太郎が激昂して声を震わせて叫んだ。

「仮面ライダーって名前は、風都のみんなが付けてくれた名前なんだ。

テメエみてえな偽物が、『大道 克己』を真似するふざけた奴に名乗る資格はねえ

!!」

る。一年半前に起きた悲しい悪夢に散った、一人の男の名を語った翔太郎が誇りを告げる。

ところが、その名を口にした途端に、ラストのまとう雰囲気、余裕から殺意に変貌した。

『貴様こそ……貴様こそ！ あの人の名を口にする資格など、あつていいはずがない!!』

「この俺を救ってくれた恩人を、その仲間を、無残にも殺しつくした貴様らには!!」
「何だと?」

『………時間の無駄だ、言っても分かるまい。さあ、来い。過去の仮面ライダー。風都が自由の楽園という名の地獄に変わる時、俺の復讐は果たされる!!』

殺気をばらまくラストの言葉を聞き、この街にとつて放っておけない敵であることを改めて確認した翔太郎は、好き放題言ってくれる目の前の悪に対して、覚悟を決める。

「覚悟しろ………。テメエは、俺たちが止める!!」

『やって見ろ! お前たちに、本当の終焉^{ラスト}をくれてやる!!』

互いに互いを睨みつけ、翔太郎はドライバーを装着して事務所に残った相棒と意識を

繋げ、

彼の意識と共に転送されてきた若草色のメモリを右側に装填し、自身の黒いメモリを挿す。

「『変身!!』」

バックルのメモリスロットが左右に展開し、緑と黒の小さな破片が風都の風に乱れ舞い、

やがてそれらが翔太郎の体に収束されていき、右半身が緑の、左半身が黒の装甲に覆われる。

突風ともそよ風ともとれる独特なメロディと、強調されたブラックサウンドが鳴り響く。

あらゆる束縛をもともせず流れゆく、一陣の風の如きライトグリーンの右半身に、

あらゆる逆境を乗り越えて、自らが望む勝利をその手に掴むヘビーブラックの左半身。

そこに現れ立ったのは、〈疾風の記憶〉と〈切札の記憶〉を複合させた仮面の英雄。

今、正義を冠する仮面ライダーWと、悪をかざす仮面ライダーラストが対峙する。

E p, 3 2 『Rの覚悟 / 風都防衛戦』

風都市内、湾岸エリア

左 翔太郎と共に占拠された風都タワーへ向かう途中、街の各所にドーパントが出現したという

報告を受けた士とユウスケの二人は、それぞれ二手に分かれて怪人の暴動を食い止めに向かった。

そしてこの湾岸エリアでは士が既に、〈メタルドーパント闘志の記憶〉と戦闘を開始していた。

『ウオオラアアアアアアアアッ!!』

「チッ! 鋼鉄のくせして、なんて身のこなしだ」

当初は風都警察署から派遣された警官隊が、街を守るために奮闘していたのだが、地球の記憶を

その身にまとつて暴れ回る怪物に常人が敵うはずもなく、ただ怯えながら銃を乱射することしか

出来なかつた。しかし今、彼らは銃を撃つのを止めて、新たに現れた仮面の英雄の姿を見ている。

この風都に暮らしていて、仮面ライダーの評判を知らない者はいない。

二人いるらしいことと外見以外の情報は無いが、それでも風都市民ならば仮面ライダーの事を

ある程度は知っていて当然のはずなのに、警官隊の全員が目の前で戦う戦士を知らないのだ。

口々に、「緑と黒の半分だつて聞いてたぞ」とか「真っ赤に輝く大剣を持った奴」だとか、

自分たちの知る英雄像を語り上げるも、眼前の戦士と思しき情報は一つも上がらなかつた。

それを不思議に思いながらも、警官隊はみな、その戦士と怪人の一騎打ちを恐る恐る窺っている。

そんな事など露知らず、仮面の戦士デイケイドとメモリの怪人メタルは、拳を振るい合っていた。

『ハツハツハーツ！ ウルア!!』

朝日の光を反射して煌めく銀色の全身を軋ませながら、硬質化された拳を振り抜くメタル。

”メタル”という一言から同時に抽出された鋼鉄の力と合わせて、その力は自動車を砕くほどだが、

それを全身の筋肉を使って勢いよく振り抜いたりなどしたら、どうなるか言うまでもない。

が、しかし。この場にいる常人は離れた場所で震える警官隊だけで、そこに立つ戦士は違う。

「ぐああ！ く、野郎……………お返した、はあ!!」

金属が硬いものと衝突した際に鳴る特有の音を響かせながらも、拳を仮面に受けた

デイケイドは

一歩どころか数センチほども退くことなく、逆に拳を腕ごと弾いた反動で鋭い蹴りを叩き込む。

異世界を渡る仮面ライダーの装甲はやはり硬く、全身金属のようなメタルの身体を歪ませるに

至ったものの、それでも余裕そうな笑みを漏らす敵に再び、達人の域に達した蹴りを喰らわせた。

まさに、一進一退といえる卓越した近距離戦により、互いの装甲を傷つけ火花を散らせている。

「……………クソ、やっぱ硬いな。頑丈過ぎだろ、その身体」

だが、意外にもこの状況で劣勢を感じていたのは、デイケイドの方だった。

先ほどから互いに一歩も引かない肉弾戦肉弾戦を繰り返しているものの、確実に相手にダメージが通って

いるのかどうかと聞かれたら、頷ける自信がデイケイドには無い。それほど、敵は硬いのだ。

拳をぶつけても蹴りを入れても、攻撃された側である相手の硬度が高過ぎてこちらが痛いほど。

逆に相手からの攻撃は、それが拳であっても蹴りであっても、こちらの装甲を容易に上回る硬度で

あるため、確実なガードか回避をしない限り、手酷いダメージが装甲を突き抜けてきてしまう。

このまま戦闘を長引かせれば面倒になる。そう考えたデイケイドは、ある策を思いついた。

「……………賭けて、みるか」

誰に言うでもなくそう呟いた彼は、腰のライドブツカーから一枚のカードを取り出してバツクルに

装填後、機構を動かしてその情報を読み取り自身の肉体に反映。別の姿へと変身を遂げる。

【KAMEN RIDE KABUTO】

デイケイドのバツクルから電子音声が鳴り響き、新たな姿に変わったことを平淡に宣言する。

その全身を、太めのラインが刻まれたような外観の、黒いスーツが包み込んで肉体を覆い、

カプトムシの強固な外殻を連想させる、独特なフォルムの紅蓮の装甲が日輪を受け光り輝く。

青いコンパウンドアイを下から上へ二つに裂き、複眼状の双眸へと変化させていきながら、

さながら昆虫の王を彷彿とさせる形状の角が、蒼天を貫くが如く直立し、機械音を鳴らす。

風都の風を受けてそこに立ち上がったのは、最高最速の世界を往く仮面ライダーカプト。

両手をパンパンと埃を払うように打ち鳴らした彼は、そのまま一枚のカードを取り出し、

ベルトのバツクルへと装填しようとしたのだが、そこであることに気付いてそれを止めた。

（そうか………クロックアップを使つたとしても、ヤツにダメージを与えられねえのか）

世界の総てを置き去りにできる速度を手に入れ、誰も追いつけない速さの世界を往く力を

手にしても、全身が鋼で構築しているような防御力を持つ相手には、攻撃自体が通らない。

速度をどれだけ上げても、どれだけ手数を増やしても、あの防御を突破できる力が無いなら、

焼け石に水にもならないだろうと悟り、カブトは手にしていたカードの使用を断念する。

唸り声をあげながら突っ走ってくるメタルの拳を回避しつつ、どうにか現状を打開する方法を

見つけ出さなくてはと焦るが、速さと防御の事を考えていた彼の頭脳が、考え方を切り替えた。

(速さじゃ防御は貫けない……………なら、防御で防御は破れるよな?)

そう思い立ったカブトは、メタルの大振りの右拳をいなしてから背中を蹴り飛ばして距離を置き、

鋼の怪人が向き直ってくる前にライドブツカーから新たなカードを取り出し、それを発動させる。

「攻撃が最大の防御なら、防御は最大の攻撃ってな」

【FORM RIDE KABUTO MASKED】

先程とは少しだけ違った電子音声の後には、まるで異なる姿となったカブトが立っていた。

不純物を一切含まない聖水の如き青のコンパウンドアイに、頭部を覆い隠す銀色の強化外殻装。

蛹を連想させるほどに丸く太い肩部アーマーに、制作した『ZECT』のロゴの入った円形パーツ。

ワゴン車のフロント部のように、前方へ突き出たチェストボディと、同じく銀色の各

アーマー。

打って変わってガツシリとした構造の鎧をまとうのは、マスクドフォームの仮面ライダーカブト。

絶対的な『速さ』を求めたライダーフォーム。それとは真逆のコンセプトで設計されたこの姿は、

完全無比なる防御の力と圧倒無類を誇る攻撃の力を宿す、まさに堅牢な殻に身を覆う蛹そのもの。

重厚な鎧を着込んだカブトは、ギシギシと全身の鋼を唸らせるメタルに、人差し指を折り立てた。

「さあ、地球の記憶の結晶と、人間の科学の結晶………どつちが上かかたいハッキリさせるか」

好戦的過ぎる態度で豪語したカブトは、全身を包む硬さと重さを新たな武器とし、打って出る。

それに対してメタルもまた、相手からの挑発を受けて拳をわなわなと震わせて距離を詰め始めた。

そこからはまさに、小細工無しの真つ向勝負だと言わんばかりに、互いの拳がぶつかり合う。

右の拳が鋼を殴り、左の拳で鋼に殴られ。右足が鋼を蹴り、左足で鋼に蹴られ。

左の手が銀鎧を叩き、右の手で銀鎧に叩かれ。左膝が銀鎧を打ち、右膝で銀鎧に打たれ。

怯む様子もないまま完全なるゼロ距離攻撃での猛襲を繰り返し、その都度火花と音が舞い響く。

怪人の拳がゴギャンと音を鳴らしてカブトを殴れば、同じ音を鳴らしてカブトが怪人に反撃する。

もはや警官隊の誰かが、隙を見て援護射撃をしようなどと思わせないほどの領域で、殴り合う。

火花が散り、金属同士がぶつかる音が響き、戦士たちの雄叫びが街の風と共に周囲に伝播する。

ディケイドが新たに考えたこの策は、実に単純明快な思考の元に導き出されたものだった。

いわゆる『攻撃は最大の防御』という考え方は、攻撃を受ける前に敵に攻撃することによって、

自らに傷をつけられる前に倒してしまおうという、至極短絡的なノーガード戦法である。

しかし実際、この戦い方に明確な間違いはない。敵から攻撃を受けなければ、敗けることはない。

果敢に攻め立て続けることで、自らを攻めさせる時間も隙も与えないというのは、確かに有効だ。

だが、その攻撃が相手の防御を崩せなければ、その方程式は成り立たない。

如何に優秀で殺傷能力の高い矛を持っていても、敵の盾がそれを阻むのなら、勝てるはずがない。

敵の防御の方がこちらの攻撃よりも優れていたのなら、その攻撃は通じていないも同然である。

では、自身がその絶大の防御力を手にしたらどうなるか。答えは当然、勝つことはできない。

あらゆる攻撃をも弾く防御力を得ても、敵を倒せる攻撃力が無いのならばこれも意味がなく、

攻撃と防御の立ち位置が入れ替わっただけで、結局また振出しに戻ることもなってしまう。

けれどディケイドはそこで、別の考え方を編み出した。

敵の攻撃を寄せ付けぬほどの硬度を誇る盾を得たうえで、どのようにすれば敵を倒せるのか。

答えは――攻撃を弾けるほど頑丈な盾で、直接相手を殴ればいい。

攻撃を超えた防御を持つ敵には、同じレベルの防御の力を武器としてぶつければ通じ

る。
それこそがディケイドが考えた策、『攻撃は最大の防御ならぬ、防御は最大の攻撃』だ。
防御の力が本当に盾のようなものであれば、この方程式も成り立ち難かつただろうが、

ここにおける防御とは、敵の攻撃を受けてもびくともしない頑丈かつ堅牢なボディを指す。

よって、この馬鹿げた方程式が奇跡的に成り立ってしまうのだ。

「やあッ!!」

『ウルアア!!』

もう何度目になるかも分からぬほどの拳の打ち合いで、一際大きく耳障りな音が響いた。

メキヤツ

すると、衝突した拳と拳の間から、そして全身を覆っている強固な鎧から、嫌な音が漏れる。

本来曲がるはずのないものが、凄まじい力によつて強引に捻じ曲げられる、そんな音が。

(……………金属疲労、か? まあこれだけ派手にやり合えば、疲労の速度も度合いも早まるか)

その音に目ざとく気が付いたカブトは、競り合いになっていた拳を引つ込めると同時に蹴りを

メタルの胴体へ叩きこみ、一旦距離を置こうと三步ほど後方へ下がり、自分の状態を確かめる。

変身直後には全身をほぼ完璧に覆っていた強外殻装甲も、そのほとんどに大きな亀裂が入り、

特に敵の攻撃を多く受けた胴体部辺りは幾つか欠けていた部分もあり、近接戦の壮絶さが窺えた。

そんな自分を冷静に見つめた後で、その視線をゆったりと体勢を整えているメタルへ向ける。

どうやらあちらも、体のあちこちにヒビが入っているようで、最初より動きがぎこちない。

これを好機だと捉えたカプトは、確実に敵を倒すために構えを取り、拳に力をこめる。それを見たメタルも同様に、右の指を順番に内側へ折りたたみながら鋼鉄の握り拳をつくった。

『ウオオラアアアアアアアッ!!』

盛大な雄叫びと共に拳を振り上げて突っ込んでくるメタルを前に、カプトはただ構え

続ける。

駆け足で距離を詰めるメタルは、五秒もしないうちに自身の拳の射程圏内にカブトを収めた。

しかしそれは同時に、カブトの拳の射程圏内にメタルもまた侵入したということにならない。

疾走し、振り上げた拳をその身に乘った速度と共に打ち出すメタル。

それに対し、その場に留まって相手の一撃を見極めんとするカブト。

一秒にも満たない刹那に、ポロポロになった両者の拳は、打ち合わずにすり抜けていく。

(狙いはやはり)

クロスカウンターか！)

それまでは接触させて侵入を拒んでいた拳を、あえて受ける覚悟で自身の一撃を放つという

このクロスカウンターという状況に際して、どういいうわけかカブトは拳の進撃を半ばで止める。

カブトの左拳はメタルの右頬にはまるで届かず、突き出された右肘の辺りで動かなく

なった。

だが、メタルの拳は動いたままで、そのままカブトの左頬に向けてなおも突き進む。そしてその鋼の鉄槌がカブトの仮面を捉えようとした直前で、その動きが不可解に止まった。

否、メタルの拳は、止められていた。

「やはりそうくると思ってたぜ」

『アア!!』

「この間合いまでくれば充分だ。速さも硬さも関係なく、この一発を当てられる！」

『ウ、ガアアツ!!』

ブルブルと震えるメタルの拳は、カブトが突き出していた左手が右肘を掴み取ったことで、

そこから先へと伸びなくなっていたのだ。前へ進まない拳には、何の威力も恐怖もない。

そうして状況が拮抗しているうちに、いつの間にか手にしていたカードがバツクルへ装填され、

空けられていた右手によって機構を動かされて情報を読み取り、その効果の発動が開始された。

【FINAL ATTACK RIDE kA, KA, KA, KABUTO】

最終攻撃の名の下に、バツクルからは三つの黄金の輪が、カブトの紋章を中心に展開されて、

その輝きが霧散していくと同時に、カブトの全身を覆っていた強外殻装甲が一斉に弾け飛ぶ。

四方八方へと飛び散っていく銀色の鎧を至近距離で浴び、さしものメタルもようやく怯む。

だが、そのメタルの右腕はカブトがガツチリ捕まえていて、逃げようにも逃げられない。

よろけたメタルの目の前で、再びカブトが蛹を突き破って赤い角を蒼天を貫くように立てる。

ライダーフォームへと舞い戻った彼の右足には既に、高速圧縮されたエネルギーが充填されて

勝利の余韻に浸ることもなく、淡々と現在の状況を確認したデイケイドは、いちいちこうして

ドーパントと当たっていくよりも、それを支配下に置くラストを倒してしまえば万事解決だろうと

考え、乗ってきたマシンデイケイダーのアクセルを吹かして一路、風都タワーへと発進した。

風都市内、風都スタジアム前

火炎と高熱を自在に操る怪人、〈炎熱の記憶〉ヒートドールバントは今、目の前の存在に怯えていた。

彼女に相對しているのは、その背の後ろに火傷だらけになっても街の平和を守ろうと奮闘した

警官隊を庇い、周囲で燃え広がっている灼熱の赤を受けてより一層照り輝く赤をまとった、

仮面の英雄クウガである。

しかしヒートは、ただクウガを恐れているのではない。

ここに現れてから既に十分ほどは経過しているが、ヒートはまるでダメージを負っていない。

それどころか、むしろクウガの方がこちらの放つ火炎球によって深く大きな傷を負っている。

なのに、倒れない。

何度も火炎で焼いたし、何度も熱で炙ったし、何度も高温で殴ったし、何度も高熱で蹴り抜いた。

それでも、クウガは倒れない。いや、倒れたとしてもすぐに起き上がりまた向かってくるのだ。

何をしても立ち上がってくる底知れぬ不屈さに、ヒートは恐怖から微かに身震いまでしていた。

「……………ハア……………ハア」

今だって、放った火球を左肩に喰らって鎧が焼け焦げ、もんどりうって悲鳴を上げていたのに、

それもしばらくしたら悲鳴を嘯み殺しながら立ち上がり、こちらを真つ直ぐ見据えて拳を握る。

その異常としか言い様のない耐久力と忍耐力に、ヒートは恐怖を感じずにはいられなかった。

「ハア……う、くっ！」

一方のクウガは、逆に焦燥を募らせていた。

彼は今、守る戦いを強いられている。自身の背の後ろには、怪人に対して抵抗もままならない

弱者たる警官隊が、火傷を負って動けずに固まっているのだ。そんな状態でドーパンと戦う、

それが難しくないわけがない。守ることと戦うことの両方を遂行する難しさに、クウガは焦る。

ここで自分が戦わなければ、後ろにいる人たちが殺されてしまう。

人の笑顔が、奪われてしまう。

誰かの笑顔を守るために戦う彼は、誰かの笑顔を奪わせないために、退くことは許さ

れない。

それでもヒートは、クウガの何度やられても起き上がる不屈さに怯え、先程から一向に接近を

せずに、十数メートルほどの距離から火球を射出するだけという、単調な攻撃法を選んでいた。

『クウウ………ヤッ！ ハアッ!!』

「く、あつ！」

それでも、遠距離戦をすることができない状態のクウガは、必死に火球を避けるしかなかった。

火が燃え広がっているスタジアム前の広場を、横に後ろにと転がって何とか回避し続けるも、

それもあまり長くは続かず、痺れを切らしたヒートの巨大火球を避けきれずに左足が被弾する。

いくら超古代の力で肉体を変質させているといっても、痛いものは痛いし、熱いものは熱い。

肉が焼き焦がされていく激痛を、歯を食いしばって耐えるクウガは、そこである物を見つけた。

「こ、コレって

——ガイアメモリ、だよな？」

火炎弾を避け続けていたクウガは、広場の片隅にあるアーチのたもとに落ちていた物体を

素早く手に取り、その形状が翔太郎たちに見せてもらったガイアメモリと一致していると気付く。

こんなところに、無造作に置いてあるはずがない。では、コレはいったい何だ？

戦闘行動中の影響で頭の回転が常時の数倍に跳ね上がった彼は、手にしたメモリを裏返す。

表側に貼られていたラベルには、何やら幾つもの機会が合体したような『U』の文字があつた。

「U?…Uってどこかで……………あ!!」

つい最近聞いたばかりの一文字を見て、その物体がガイアメモリである証明を得る。

「Uのメモリ……アルティメット、か」

昨日死んでしまったという翔太郎たちの依頼人が、搜索してほしいと言っていたメモリを

偶然にも発見してしまったクウガは、その右手に持ったメモリのボタンを押してしまった。

事前に聞かされていたような機械音声が響くと予想していた彼は、更なる驚愕に陥る。

【UNLIMITED】

「え？ アンリミテッド？」

聞こえてきた音声が、予想とはまるで違ったことに驚き、もう一度ボタンを押したのだが、

帰ってくるのは平淡で機械的な同じ音声。よく聞いてみても、アルティメットではな

かった。

【アンリミテッド】、直訳してしまえば【無制限】

明らかにこの存在がおかしい事には、流星のクウガでも気付いた。けれど現状、彼一人では

何もすることができない。敵に勝つことも、人々を守ることも、メモリの真実を追うことも。

どうにかしてこの事を伝えるために、生き延びなくてはならないと思考を瞬時に切り替えた

クウガは、懐にしまおうとしたメモリをもう一度見た瞬間に、あることを思い出した。それはこのメモリを、Uのメモリを探してくれと頼んできた彼が語った、メモリの特殊性の話。

（使用すればするほど人の心を蝕んでいく、麻薬と似た危険な兵器！）

羽田睦の生前の話を思い出したクウガは、その話と手にしたメモリの能力を予想して、

この状況をどうにか打破できるかも知れない策を、策と呼べそうにない賭けを思いつ

いた。

今自分が手にしているメモリは、アンリミテッド。つまりは、無制限の記憶である。それがもし、使用者に文字通りの無制限の力を与える能力を持つていたとしたら、どうか。

そしてその力が、既にメモリによって怪人となった相手にも、通用するのかどうか。失敗したら、それこそ無制限の力をも取り込んでしまい、今以上に手が付けられなくなる。

そうなったらもう、自分どころか後ろの警官隊、それどころか士達にまで被害が及ぶかも

しれない。しかし賭けに勝ち、無制限の力が溢れ出て敵がそれを制御できずに暴走したら。

(そうなれば俺にも、勝機はある!!)

自らが勝つために、自らが守りたいものを守るために、クウガは一か八かの賭けに出た。

右手に〈無制限の記憶〉アンリミテッドメモリを握りしめて、しばらく様子を見ていたヒートへめがけて一

直線に、

火球が飛んでこようが火炎を放射されようがお構いなし、とばかりにがむしやらに駆ける。

それまでは攻撃を避けようとしていたクウガが、いきなり攻勢に転じたことで動揺を隠せない

ヒートは、避ける気が微塵も感じられない愚直な突進を見て、かえって恐怖が助長された。

『クッ！ ハア!!』

アレだけ一方的に攻撃を受けても立ち上がる奴が、今度はただ愚直に突き進んでくる。

それを見て思うのは、回避を諦めたバカの特攻か、もしくは形勢逆転を告げる破城槌か。

どちらにせよ、たまらなく恐ろしく感じるのは、変わらないだろう。

効率も燃費も考えずにドンドン炎を放ち、ガンガン熱を上げていくも、まともに当たらない。

わずかな恐怖で手元がおぼつかないことに、ヒート自身が気付いていなかったのだが、

そうして灼熱と猛火の短距離走が終わりに差し掛かり、クウガはそこから一気に跳躍した。

地面から足を離れた以上、ロクな回避はできないはずだと残り少ない平常心が語り掛け、

ヒートは空中に居るクウガへ向けて、今自分が出せる最大火力の炎弾を指先に生み出す。

ところが、それを射出しようと振りかぶった直後、彼女の視界はクウガの右膝に覆われた。

「おりやああああああ!!」

『ウグエ!!』

ただの跳躍ではなかった。クウガが行ったのは、上方ではなく前方へと飛び出す跳躍だった。

その結果、前へ向かっていくエネルギーを加えられた右膝蹴りが、攻撃のチャンスだ

効果を十全に發揮し、文字通りにヒートの能力を無制限に発動させ続ける暴走状態へ陥らせた。

自分自身でも制御できなくなった炎熱は、自身の耐熱性能すらも凌駕する超温にまで達して、

その肉体を内側からじわじわと完全燃焼させていき、まさに生き地獄を味合わせていた。

自分すらも焼いてしまう劫火に苦しむヒートに、クウガは一瞬手を差し伸べかける。あまりにも、あまりにも彼女が苦しみもがく姿が可哀想に思えて、見ていられなかった。

しかし、それでも無制限の力は衰えることなく、さらに炎の勢いを激しくさせていく。

『ア、アア』

そしてとうとう、ヒートの肉体が臨界点を突き破り、溶岩のように溶けて流れ始めた。人型をしていたモノが、グチャグチャに融解していく様子を目の当たりにした警官隊は皆、

誰もが等しくその光景に耐え切れなくなり、胃の中にあつたものを胃液ごと吐き戻し

ていく。

そんな中、誰かを守るために誰かを倒す使命を果たしたクウガが、それを目撃する。

『……………ヒド……………ヨ、カ……………ミ……………』

下半身がもうほとんど溶けて原形を留めていないソレが、手を空に伸ばして眩く姿を。

それはまるでどこかに、誰かに対して伸ばしていた手のように思えて、クウガは静かに俯く。

やがて何かを求めるように虚空を彷徨っていた指が溶け、腕と共にドロドロに溶けて落ちた。

何も言えないまま、何も言わないまま、ヒートメモリ〈炎熱の記憶〉は音もなく溶解した。

「クソ!!」

何ともいたたまれない気持ちで心を支配し、クウガは向ける先のない怒りを言葉にして吐く。

今の惨状を生み出したのは、紛れもなく自分だ。しかし、こんな酷い事が起きたのは何故か。

それはこの街を、街の笑顔を奪おうとしてメモリを悪用している者が、いるからに違いない。

「絶対に、許さない……………ッ!!」

クウガは今、激しい怒りに燃えている。

今の彼は、この街を守る正義でもなければ、この街に害をなす悪でもない。

彼はただ、そこにある笑顔を守りたいがために、涙を流して痛む拳を振るうのだ。

最後にそう吐き捨てたクウガは、風都タワーに在るであろう諸悪の根源に対する怒りを胸に、

乗ってきたビートトチェイサーのアクセルを踏み抜き、全速力で風の吹く街を駆け抜けていった。

E P, 33 『Nを継いだ者 / 忍び寄る終焉』

。デイクイドとクウガが、それぞれの敵であるメタルとヒートを打ち倒し、ラストというライダーが

待つ場所であり本来の目的地でもある、風都タワーへとバイクに乗って一路向かっている頃。

風都タワーへと続くその道の途中では既に、緑と黒の戦士が紫紺の戦士と戦闘を開始していた。

「ウオラアツ!!」

『ふんッ!!』

否、それは単なる戦闘などではなく、もはや激闘といって差し支えないほどのものである。

右が緑で左が黒のWが、サイクロンとジョーカーの二つの特性を活かした近接戦で、拳や蹴りの

乱打を放てば、ラストはそれら全てを的確かつ迅速に防ぎ、返すようにカウンターを繰り出す。

一進一退、着かず離れずの大接戦を続けていた二人のライダーだが、少しずつではあるが両者の

均衡が徐々に、傾き始めていった。顕著ではないほどの差が、Wをわずかに追い詰めていく。

『はあッ!!』

「うおっとー!」

蹴りを中心に攻撃を続けていたWに、右足の蹴打を弾いたラストがステップを織り込んで接近し、

徒手空拳の間合いに踏み込んだ瞬間、大きく開かれた右手での掌底がWの左肩部を若干かすった。

しかし接近されているという事は、自身も敵に接近しているのと同義。攻撃によつて

右腕を前に

伸ばし切っているラストの体勢は、胸部から腰元、つまり胴体がガラ空きになっているため、

絶好のチャンスであることは疑いようもない。それを見逃さず、Wは渾身の左膝蹴りを打ち込む。

「せりゃ!!」

ジョーカー側の左膝が見事に直撃し、ラストの腹部の装甲と触れている実感をWに与えてくる。

だが、ここで翔太郎は、ある違和感を覚えた。本来ならば、感じられるはずの無い感覚に戸惑う。

彼の左膝は確かに、隙だらけのラストの胴部へと打ち込まれており、ダメージとなっているはず

なのだが、どうにも妙に思えてならない。攻撃を受けた際に見られる反応が、感じられないのだ。

『翔太郎！ 危ない!!』

「なに

ぐッ!!」

『戦いの最中によそ見とは……………舐めるな!!』

翔太郎が感じた違和感に対しての疑問。その一瞬の思考の停滞が一欠片の隙となり、ラストの

左腕を覆う装甲と装甲の細い溝から噴き出る紫紺の靄もやが、戦士の左腕をどんどん包み込む。それにいち早く気付いて警告したフィリップだが、ほんの数秒の差で遅かった。

ラストの紫紺の靄がかかった左手が、Wの左胸部へと触れた瞬間、腰のドライバーに装填されている漆黒のメモリが不自然なスパークを発し、それが黒い左半身へ伝播する。

「何しやがった!! ぐ、クソ！ なんだこのバチバチ!!」

『まさか……………翔太郎、バランスが一気に崩れた！ 早く別のメモリに変えるんだ!!』

「あ、ああ。分かったぜ相棒」

【METAL】

【CYCLONE / METAL】

急激な変化に驚く翔太郎に代わって、状況の把握に努めたフィリップが即座に指示を飛ばし、

訳が分からないままに信頼する相棒の言葉に従って、鋼色のメモリと漆黒のメモリを交換した。

〈疾風の記憶〉と〈闘士の記憶〉を複合させた姿へと変化したWは、目の前で悠然とたえずむ

紫紺の戦士を見つめる。けれど、翔太郎もフィリップも、互いに異なる疑問を抱いていた。

(さつきまでの攻撃、まるで効いてないみたいにピンピンしてやがる……………どうなってるんだ?)

(おかしい。あんな急激に左右のバランスが崩れるなんて……………ヤツのメモリの能力か?)

翔太郎は先ほどの攻防の最中で、フィリップはつい先ほどの異常な事態で、それぞれ感じた

不可解な違和感を頭に浮かべ、肉体と精神を結合させているために互いがソレを把握する。

二人が二人の感じた感覚を共有し、それについて熟慮し始めた時、ガイアメモリについて詳しい

フィリップは、ある仮説にたどり着く。そしてそれは、状況を鑑みてより説得力を増していく。

その思考による動揺を目敏く察知したラストは、両手から靄を発生させつつ笑いながら語る。

『さつきまでの威勢はどうした？ まさかもう疲れたとは言わないよな？』

「へっ、誰が言うかよそんなこと！」

『それは何よりだ。だがそれはそれとして、右側の方は気づき始めた頃かな？』

『なっ!!』

『図星らしいな。ならば答えを教えてやろう。俺の持つこの、ラストのメモリの力を!!』

驚愕によって右目を赤く明滅させるWをよそに、ラストは両手からあふれ出る紫紺の靄を

どんどん放出させ、それを大きく横薙ぎに振り払った。だが、何の変化も見られない。ラストが何をしたのかと敵を注意深く観察するフリリップだったが、今回は彼よりも先に

翔太郎の方が、場に現れた変化に気付き、動揺を見せることとなった。

「風が、風が止んだ……………」

『……………本当だ。風が止んでいる』

「バカな！ ここは風都の風が収束される、風都タワーの近くなんだぞ！」

『理論上は止むはずがないのに……………』

『この程度で驚かれては困るな』

風都という街の構造を熟知している二人だからこそ、その驚きは並大抵ではなかった。そんなWを鼻で笑うような台詞を吐いてから、ラストは本線道の植え込みに根を張つ

た

細身の街路樹へ、霧に包まれた右手を伸ばして触れた。直後、著しい変化が現れる。

「なっ!!」

『木が、枯れていく……………』

『枯れるのとは、少し違う。メモリの力で今、この木は【終わって】いるのだ』

そう語っている合間にも、街路樹は若々しい緑を失っていき、ついにはポロポロと音を立てて崩れ落ちていき、その木片ですらも粉微塵となり、風都の風に消えていく。目の前で起きた現実に理解が及ばない翔太郎はただ、驚きに目を剥くばかりだが、ここにきてフィリップがついに、ラストのメモリの力とその特性を理解しえた。

仮面ライダーラスト。彼がその手中に収めているものこそ、〈ラスト終焉の記憶メモリ〉である。終わることを表す終焉、その言葉を関するこのメモリは、地球上の万物万象あらゆる【終わり】を発現し、迎えさせることができる能力を有している。

この世の全てには終わりがあるが、それは決して“死ぬ”や“消える”と同義ではなく、それでいて地上における物質非物質限らずに共通する絶対の概念なのだ。

ラストが木に触れた瞬間、その時に木という物質は「終わり」を迎えさせられ、地上に存在することはできなくなった。故に枯れ、朽ち、散って、消えていった。

敵からの攻撃を受ける際に能力が発動すれば、攻撃によるダメージやその効果などが発揮されるよりも先に、それ自体が「終わり」を迎えることとなり、無効化される。先ほどのWの蹴りによる攻撃も、その能力が使用されていたことで効果が発揮されず、

一切のダメージを受けていなかった。これが、翔太郎が感じていた違和感の正体だ。

『風も、火も、殴打も、銃撃も、何もかも！』

触れた瞬間に全てを「終わらせる」この力を以て、復讐を果たす!!』

ラストの使うメモリの効果が如何に恐ろしいか、それを身を以て体験させられた翔太郎と

フィリップは、復讐せんと襲い掛かってくる紫紺の戦士に対して、一挙手分行動が遅れた。

そのわずかな間にも、ラストはすさまじい勢いでこちらへと向かってきている。

とにかく、現段階では打つ手がないことを悟り、フィリップは固まってしまったまま

の

相棒へ、回避に専念するようにと旨を伝えた。

『うかつに触られたらどうなるか、僕にも分からない。あの能力は危険だ』

「あ、ああ。だな」

『ヤツに触れないようにする方法は、ただ一つ』

「野郎を近づけさせなきやいいんだろ！」

【LUNA】

【TRIGGER】

回避の旨を伝えたフィリップは、それと同時に緑色の右腕で黄金色に輝くメモリを取り出し、

片や翔太郎もまた、全く同じタイミングで、漆黒の左腕で群青色のメモリを取り出した。

その二つのメモリの起動ボタンを押し、メモリ内部に抽出されている記憶の名を、電子音声か

その場にいる三人に等しく告げる。彼らを取り出したのは、Wが有する七つのメモリ

の二つ。

疾風のサイクロン、切札のジョーカー。

炎熱のヒート、鋼と闘士のメタル。

フィリップのためだけに作られた、牙と本能のファンク。

そして今、彼らが腰のドライバーの機構を動かし、換装したそのメモリこそが最後の二本。

一度中央に寄せたスロット部分を掴み、再び左右にWの文字を作るように展開させた。

【LUNA / TRIGGER】

Wを中心に光が生じ、そこに黄金色の破片と群青色の破片が群がり、徐々に全身を覆って、

最終的にそれらはこれまでと同じようにWを守護する装甲となった。左が青、右が黄金の。

儚さと神々しさが合わさる幻想的なメロディと、弦をかき鳴らすシユートサウンドが響き渡る。

崇められし威光と讃えられし神秘で守られた、輝ける月輪の如きライトゴルドの右半身に、

正確無比な射撃と見敵必滅の火力を引き出す、機械仕掛けの如きターコイズブルーの左半身。

新たに顕現したのは、〈幻想の記憶〉^{ルナメモリ}と〈射手の記憶〉^{トリガーメモリ}を複合させた、仮面の英雄。

【仮面ライダーW ルナ／トリガー】

彼らが保持するメモリの中で、唯一と喋っていい遠距離武器を使用できる姿となったWは、

変身と同時に左胸部に転送されてきたメカチックな銃、【トリガーマグナム】をその手に取る。

黄の右腕で銃口を向け、空いた左腕を胸に添えつつ、Wは迫りくるラストへ引き金を引いた。

動作が正常に作動して、引き金を引き絞ることで銃口から発射された弾丸は、真正面から

向かってくるラストへめがけて直進
 せずに軌道を変え、左肩
 部へ着弾した。

『ぐっ……そうか、ソレが〈射手の記憶〉の力か!!』

「トリガーだけじゃねえ」

『このWの真髄は、〈幻想の記憶〉にこそある』

思わぬ方向から射撃を受けたラストは進軍を止め、銃口を向けているWを睨みつける。

だが、青の左半身がラストの言葉を一部だけ否定し、黄の右半身がその補足を行った。

Wが言ったように、先ほどの物理原則上ありえない角度で曲がる現象は引き金ではなく、

むしろ弾道が不規則に変わる神秘にこそあるのだ。

〈射手の記憶〉は、メタルと同じような、複合性のあるメモリである。

トリガーという言葉では、文字通りに引き金の付く物、つまり銃火器（あるいはボウガンなど）が

想起されることだろう。実際、このガイアメモリは確かに、地球が記録してきた遠距離武器の

記憶が抽出されている。しかし、それだけではこのメモリはただのガラクタに成り下

がるのだ。

これは良く考えれば誰にでも分かることであり、至極当たり前のことでもある。

答えは簡単。『如何な優れた遠距離武器とて、それを放つ者がいない』のならガラクタだ。

古代の弓も然り、ボウガンも然り、小銃も拳銃もミサイルも、引き金を引く者がいなければ、

それはただの”物”でしかない。何の脅威にも成りえない、ただそこにあるだけの”物”となる。

そう考えると、引き金を持つ物と同時に、引き金を引く者が同じ記憶として抽出されても

別段おかしな話ではない。いや、そうでなくては、使うことなどできなかつたのだから。

しかし、これで分かる通り、〈トリガー射手のメモリ記憶〉には特別な能力などありはしない。

このメモリが持つ能力は、射撃の武器と射撃のスキルを与えるだけで、放った弾丸を不規則に

曲げたり、弾道を狂わせてありえない方向から着弾させたりなど、そんな芸当は不可能である。

だが実際、それが現実に起きている。そしてそれを可能にさせたのは、もう一つのメモリだ。

〈幻想の記憶〉こそが、この理論上は不可能な芸当を可能にした力の根源である。

こちらはサイクロンやヒートと同じ類のメモリだが、あの二本以上に汎用性に富んだメモリで、

先に解説したトリガーとの相性が最も良いとされるメモリでもある。その力はまさに、神秘。

人と呼ばれる知性体は、古来より様々な物質や現象に”神秘的な何かを感じずにはいられぬ

種族であると同時に、それらを畏れながらも崇め、奉るという行為を絶えず繰り返してきた。

特にそれらは、人の手の及ばない現象や事象にこそ、強い傾向がみられるものである。例えば火、例えば水、例えば風、例えば土

あるいは、光。

夜という暗闇と獐猛な野生生物が支配する残酷な時間を知る人間たちは、いつしかそれらを

克服するために、火を光源として使用するようになり、闇を払拭する光を、畏れ敬い崇めた。

人間の目では見通すことのできない夜闇を照らし、昼ならば世界の全てを明るみに出すほどの

光が、手の届かぬ空の彼方で燦然と輝いている。手の届かぬ強きものに、人は頭を垂れた。

今日まで地球が記録してきた人類史に於いて、“光”とはまさに、人間を救う“神秘”の象徴

であり、決して手の届かぬ、届いてはならぬほどの御力をかざす“幻想”の御業の顕現なのだ。

人々が崇め、敬い、尊び、讃えてきた“光”という形無き“神秘”は、人々を癒す月の光のようで

あるとして、ガイアメモリにより記憶として抽出された。実際にそんな力など無いとしても、

人類の過去が、歴史が、未来永劫まで語り継いでいくのだろう。あるかどうか分からない、その“幻想”を。

森羅万象の理に囚われることのないルナの力と、正確無比な人類の知恵たるトリガーの力が

合わさることで、通常ではありえない角度や軌道から、確実に敵を捉える弾丸を放てる。

その事を完璧に理解しているWは、怯んだ状態のラストへ向けて、容赦なく引き金を絞った。

タタン、タタンと続けざまに放たれていく常識破りの銃撃は、全てのを外れることなく着弾し、

終焉の能力によって守られているラストの全身から硝煙を上げさせる。

「クソ！ フィリッパ、コイツ弾が当たってもビクともしねえ！」

『あの霧のようなものが、おそらく敵の能力を発動している状態を示している』

「なら、どうすりゃいい!!」

『とにかく、あの霧をどうにかする方法を考えないと……………』

『そんな時間を、俺が与えると思うのか!!』

「『!!』」

攻撃の一切が通じていないと実感し、なおも対策を立てようとするWではあるが、目の前で

多角的射撃を何度も受けているのに、よろけることすらしない相手を見てみると、勝機が

本にあるのかと疑ってしまう。特に、理論的に考えすぎるフィリップなどはそう
だ。

物理的な手段で靄を突破する方法を模索するも、どの方法も終焉の能力をかいくぐつ
て

ラスト本体へダメージを与えられるかどうか、決定的な算段を立てられないでいた。
そんなフィリップが最後に考え付くのは、Wにおける、最強最後のメモリの使用。

二人を文字通りに一人にするあのメモリならばあるいは、と思考を構築して可能性を
広げていく右半身だが、わずかに思考の海に溺れていたことが、逆に仇となった。

『はあッ!!』

「うっ

ガハッ!!」

『翔太郎!!』

右半身が可能性の模索に没頭する中、左半身は肉薄してくる紫紺の戦士を迎撃しよう
と、

トリガーマグナムの引き金を引き絞り続けていたのだが、それも長くは持たなかった。

予測不能な弾道による射撃を、あるいは弾き、あるいは躲し、あるいは無力化してWへ

接近していったラストは、とうとうその青と黄の二色に分かれた首筋を右手で捉える。

ただの人間とはいえ、成人男性である羽田睦を片手で持ち上げ、首の骨をへし折ったほどの膂力を誇る腕に掴まれたWは、苦しげな声を上げながら、徐々に体が浮いていく。

五秒も経たぬ内に爪先がアスファルトを離れ、水を求める魚のように足場を欲してもがくものの、それをラストが許すはずもなく、抗えば抗うほど高度は上昇していった。

完全に地面への帰路を立たれたWは、トリガーマグナムのグリップ部で拘束する右腕を

殴打するも、苦し紛れの抵抗にすらならず、噴き出した紫紺の靄で掻き消されていく。

「ぐっ……か、ああッ！」

『翔太ろ——く、なんだ?! 意識が……』

『さあ始まったぞ、終焉が。お前たちを待っている、向こうで呼んでいるぞ!』

『だんだん、翔太郎とのリンクが……とぎれ……』

『言い忘れていたが、〈終焉^{ラスト}の記憶^{メモリ}〉は特別製でな。困ったことに、能力を発動して
る

時は、誤って生きているものに触れてしまった場合、それすらも【終わらせて】しま
う』

『なん、だっ……て……?!』

『そう、【終わる】のさ。生命ですらも終焉へ誘う、この力はまさに無敵だ!!』

もつとも、この力はあの人のものとは違って、永遠ではないがな……』

て
どこか遠くを見るような物言いとともに、ギリギリと音を立ててWの首根を締め上げ

いくラストは、少しずつ抵抗しなくなり、動きが鈍くなっている敵を見て勝利を確信
した。

生命を終わらせることができると言ったのは、嘘ではない。

しかし、風や弾丸などとは違い、生命あるものを終わらせるには少々時間がかかる。成人男性程度ならば、少なくとも9秒程度は触れ続けていなくてはならないほどに。だからあの時、本当なら時間をかけてやろうとしたのに、Wと異世界から来たライダーの

妨害を受けたせいで、即座に殺さなくてはならなくなった。あの男の、首の骨を折つて。

昨日は計画通りにはいかなかったが、今回は確実に9秒以上触れてから止めを刺す。そう考えながら、首筋を締め上げる右手にもっと力を加えていくラストと、

紫紺の戦士とは対照的に、もはや右手の銃を取りこぼすほど力を無くしたWの二人。

『確か、こう言っていたな』

「さあ、お前の罪を数えろ!!」

目の前で存在を終焉へと墮とされていく仮面の英雄に、同じ仮面の下で笑みを浮かべ、

完全なる勝利を得るために彼は、右腕を覆っている靄の濃度を、さらに増大させた。

Wの首が掴まれてから実に、7秒が経過した直後だった。

一発の銃声が、ラストとWの間に響いたのは。

『ぐあああツ!! な、なんだ?!』

唐突に訪れた痛覚への刺激に耐えられず、その衝撃も相まってWからあつさりと手を放してしまったラストは、自身の右腕を包む終焉の靄があることを確認した。

この靄がある限り、ありとあらゆる現象事象は「終わり」を迎えることとなるはず。なのに今、右腕には痛みが迸った。何故だ、いったい何故。何が起きたのだ。

あまりの出来事に混乱しつつも、銃弾の飛来してきた方向へとその双眸を向ける。

『な……………お前は、まさか!!』

驚愕に仮面の下で目を睜ったラストと同時に、終焉から解放されたWはもう既にメモリの力とライダーとしての装甲がほとんど「終わらされて」いたために、

変身が解除されてしまっていた。細やかな破片が街の風に流される中、路面へと倒れ伏した翔太郎は、朦朧として薄れていく意識の中で、何が起こったのかわからうと

顔をゆつくりと上げて、視線をさまよわせた。ぼやけた視界の中で、彼は、見た。

その全身を染め上げているのは、ジョーカーメモリー〈切札の記憶〉と似て非なる、純黒の装甲。

その人柄を表すような、自己主張が少なく厳かだが、いぶし銀に輝く頑強な六つの胸骨。

そのにじみ出る風格を醸し出すのは、首元を一巻きして包み隠す、薄汚れた白マフラー。

その腰に装着されているのは、Wとは異なり、ラストと同一の、ロストドライバー。そして、翔太郎が途絶えかけた意識で最後に見たのは、いつも見ている彼の帽子。

翔太郎が目標に掲げている男が語った、『男の生き様、ハードボイルドの象徴』であり、『男の目の冷たさと、優しさを隠す』のが役目であった、誇り高き白地の帽子。

それを仮面の上から頭部にかぶせ、軽く、けれど確かに左手を添えたその出で立ち。

忘れるはずがない。忘れられるはずがない。

翔太郎にとって、ここにはいないフィリップにとって、この風都という街にとって。

その寡黙にたたずむ戦士は、二人としない本物の英雄なのだから。

「……………おや……………つ……………さん……………」

声になっていたかも分からぬその言葉を最後に、翔太郎の意識は黒く塗り潰された。瞳を閉じた翔太郎の姿を、肩越しに見つめた純黒の戦士はただ、無言で彼を見る。

『ありえない……………お前は、お前はもう、死んでいるはずだ!!』

黙して語らぬ戦士を目撃したラストは、自身の知る情報ではここに居るはずのない事を、

その根拠を取り乱しながら大声で叫ぶが、それを前にしてもなお、戦士は沈黙を貫く。何が起きているのか、それについて考えることを放棄したラストは、両腕から大量の

靄を

放出させて、現れてから微動だにしない戦士に向かつて瞬時に間合いを詰める。

『いいはずがない！　ここでもう一度、死んでおけ!!』

紫紺の靄をまとわせた腕を振るい、身じろぎ一つしない戦士へとそれを叩き込もうとしたその瞬間、無言に徹していた戦士が動きを見せたと同時に、ラストが吹き飛んだ。

『ぐおおおおッ!!』

喰らった側も驚くほどに、華麗かつ的確にヒットした右の回し蹴りによって、

ラストが詰め寄っていた距離がスタートした時以上に広がり、紫紺の靄が滞留する。

万象を終焉に誘う靄を受け、その中心に居てもなお、戦士は一言も発さない。

白い帽子に再び左手をやり、深めにかぶり直した戦士は、右手に持った黒一色の銃を左手へと持ち替え、軽くなったその右手をゆつくりと、立ち上がったラストへ向けた。

『何故だ、何故お前がここに居る』

鳴海荘吉イイ!!!!』

雄叫びを上げるラストへ向けられた右手、その人差し指が、紫紺の戦士を指し示す。

それはまるで、断罪の開始を告げる晩鐘。

罪を犯した者へと告げられた、言外の宣告。

その顔を覆っている仮面は、感情を消して定めに徹する、鬪體の如く。

その頭頂部から額へと奔る黒い線は、迸る稲妻のように描かれた” S ”の一文
字。

その空虚な双眸からは、骸となりてなお消えぬ、信念が言葉も無く放たれる。

〈骸骨スカルメモリの記憶〉の適合者にして、覚醒にまで到達した男。

愛する者を守るため、愛した街を守るため、死して不滅の『覚悟』を持つ男。

風の止まない街、風都を守り続けてきた、たった一人の孤独な英雄。

その名は、【仮面ライダースカル】

E P, 34 『Sが守るもの / 風都が愛した男』

テロリストの陰謀と策略によって、市民のほとんどが暴徒と化した風都の中心部。

街を流れる風が集う地点にそびえ立つ、風都タワーの眼下にて、本来ならばありえるはずのない

戦いが、今まさに起ころうとしていた。

紫紺の装甲と靄に覆われた大逆の戦士ラストと、純黒の装甲に帽子をかぶせた髑髏の戦士スカル。

この街に突如現れたテロリストの首魁と、街を愛したが故に命を落としたはずの私立探偵。

決して出会うはずのない二人が出会い、それぞれの思いを胸に、戦いの火蓋を切って落とした。

『貴様が生きているはずがない！ 貴様は、ミュージアムとの抗争で死んだはずだ!!』
「……………」

この街に現存する仮面ライダーは、先ほど倒したばかりのWと、今は病院で意識不明となっている

アクセルの二名しかいないと知っているラストは、目の前に立つスカルの存在を頑なに認めない。

彼が言っていたように、スカルの変身者である鳴海荘吉は、翔太郎とフィリップが出会うよりも

以前に街を守っていた『影の英雄』であり、愛するすべてを守ろうと散った、哀しき戦士だった。

その最期は、翔太郎とフィリップが初めて運命を共にする大きなきっかけにもなったのだが、

流星にラストはそこまで知らない。彼が知っているのは、スカルがいるはずがない事実のみ。

故に彼は、自身の両腕から大量の靄を噴出させながら、接近戦に持ち込もうと駆け出した。

『薄気味の悪い亡霊が!! この忌まわしき風の中に消えろおおっ!!』

猛然と距離を詰めるラストの戦闘意欲はすさまじく、この場に普通の人間がいたのなら、確実に

意識を飲み込まれていただろうほどの気迫に満ちていた。だが、それでもスカルには届かない。

左手で鷲掴むように大振りの攻撃を繰り出すも、左手を帽子に添えながら半身だけ躲すという

余裕を見せるスカル。それならとラストはアッパー気味の右手を打ち出したが、帽子を持った手で

容易く弾かれてしまい、逆にその弾く勢いを利用した右足の中段蹴りを喰らって、再び後方へと

吹き飛ばされていく。スカルはそのまま、左手に掴んだ帽子を髑髏の仮面の上へ深く被せる。

『がハッッッ!!』

こんな事は、有り得ない。

能力によって起こりうるはずのない”痛み”に苦しみながら、起き上がろうとする彼は絶句した。

ラストの扱うメモリの能力によって、彼の前では万物万象一切合切が『終わり』となるはずなの

だが、スカルの攻撃にはそれが当てはまることがない。拳も蹴りも、総てラストに届いている。

そして何より、スカルの攻撃は洗練された動きもさることながら、その一撃が余りにも重い。

動き自体には、さして目立ったものは無いはずなのだが、受けた際の衝撃は形容し難いほどに

大きいと、ラストは実際に身を以て感じている。だが、その仕組みが全く理解できないでいた。

【仮面ライダースカル】彼が使うメモリの名は、^{スカル}骸骨の^{メモリ}記憶である。

仮面の形状やその名前から、スカルと言えば髑髏というイメージが一般的なはずなの

だが、

地球が経験し、蓄積し、内包した記憶を抽出した時に、何故か骸骨というワードもろとも

引き出された。これは単に、このメモリを製作した時期と状況が悪かった為と思われるが。

〈骸骨スカルの記憶メモリ〉は、使用者の骨格を基準に、肉体性能を極限まで高める能力を有している。つまり、体捌きこそ達人クラスの腕である者が使用すれば、まさしく鬼に金棒状態となるのだ。

例えば素人がこの力を使ったとしても、一挙手一投足がかすただけで、コンクリート程度の

もろい建造物など、紙吹雪に変えてしまうことも可能なほど、肉体の限界を超越することになる。

それこそが、人体の基盤である『骨格』を内包する、〈骸骨スカルの記憶メモリ〉の力なのだ。

全てのメモリの力を把握しているわけではないため、スカルの一撃の重さが異常であること

理由に見当もつかないラストは、周辺の街路樹に触れ、己の力が変わらないことを確

かめる。

『馬鹿な、能力は正常に発動している。だが何故だ、スカルには何故効かない!!』

朽ちて消えていく樹木の成れの果てを見てから、鬪體の戦士が木と同じ運命を辿らないことが

不自然極まりなく、また不愉快であると理解したラストは思わず声を上ずらせて叫んだ。

『貴様は何なんだ!! 既に終死わんつているとでも言うのか!!』

存在するはずのない相手と戦っているからか、絶対であることを疑わなかった能力が通用しない

相手を恐れたからか、どちらにせよラストは、冷静さをかなぐり捨てずにはいられなかった。

しかしそれは、相対している敵からすれば、完全な隙でしかない。

「……………」

『ぐおオツ!!』

棒立ち状態になっていたラストに向けて、スカルはただ寡黙なままで、その右拳を振るい抜く。

〈スカルの記憶メモリ〉の能力によって、極限にまで向上された拳を勢いを載せて振るったりすれば、

ましてその人物が、私立探偵とは思えぬほどの戦闘スキルを体得していれば、結果は見えている。

無論、罨かと疑うレベルでの隙を見出したスカルには、たったの一撃で攻撃を中断するような

中途半端な優しさなどありはしない。彼の私立探偵としての一面、何事も徹底すべきを拳が語る。

ストレートを決めた拳を戻しつつ、左拳をフックで右脇腹に打ち込み、そのまま一歩踏み込んで

重心を前へ向けたスカルは、右手でラストの頭部をガツチリと掴んで、そこに左膝を叩き込んだ。

横に下にと体を揺さぶる衝撃でよろめく紫紺の戦士は、もはやガードを固めるという戦法上の

基本すらも守れておらず、あらゆる意味でガラ空きになっているボディを、スカルは攻め立てる。

左中段蹴り、右脇腹に直撃。反転して右蹴り抜き、下腹部に直撃。

そこから重心移動しての左ブロー、右肩部を強打。続けて右のアッパー、顎を強打。

踵が浮くほどの一撃で完全なる無防備を晒す腹部へ、軽い跳躍の後に右足での蹴り飛ばし。

総てがクリティカルヒットした結果、ラストは受け身すら取ることを許されずに崩れ落ちた。

紫紺の配色と、同じ色合いをした靄のせいで分かりにくいのが、装甲の至る部分が半壊状態であり、

スカルから受けた攻撃が如何に痛烈であったのかを、血の代わりに噴き出す靄が物語る。

『ガハッ！ ぐ、ゲホッ……………この、私が、こんな無様を!!』

「……………」

『おのれ、スカル……!! やはり本物の鳴海荘吉か!!』

ガクガクと体を震わせながら言葉を吐き出すラストを、スカルは変わらず無言で見つめる。

そのままスカルは、腰のベルトにホルスターのようにしてとめておいた銃器、スカルマグナムを

右手に持たせてから、左手でドライバーのメモリを取り外し、マグナムのスロットへ装填しようと

作業を始めた。やるからには徹底的に。敵が完全に倒れるまで、手を休めないのが男の鉄則。
ハードボイルド

最後の一撃でメモリブレイクを行うため、マキシマムドライブ 極限発動を使用しようとしていたスカルだったが、

彼には何故か効果が見られないラストの靄が、辺り一面を覆い尽くすほどの量でたちこめていく。

『まさか、撤退を余儀なくされるとはな……………』

「……………」

『私の計画には無いイレギュラーを相手にする必要は無い。私の相手は、”今”の英雄だ。』

貴様のように、過去の中で消えゆく定めを良しとしない亡霊は、草葉の陰で泣いている!!』

容赦なく止めを刺そうとしていたスカルを前に、ラストは負け惜しみのようなセリフを吐き捨て、

目視を妨害する意味で噴出させた紫紺の靄に紛れていった。煙にも似た靄が街の風で流された

あとには、もう戦士の姿はどこにもなく、スカルは無言でメモリを腰のスロットへと戻した。

成すべきことは終わったと、右手に構えていたスカルマグナムを下ろそうとした直後、

視界の端で倒れていた翔太郎のそばに、何者かが近づくのを見たスカルは、再び銃口を向ける。

寡黙なままに銃口を向けられた人物は、三十代前半のハンサム風な若い男性であった。

謎の男は、自分に銃が向けられていることなど意に介さないまま、足元で気を失ったまま

倒れている翔太郎を見下ろしながら、何やらぼそぼそと呟き始める。

「他企業との提携目的の出張だったが、テロリストが色々としてくれたおかげで無駄に足に

なるところだったよ。まあおかげで、こうしていいデータ収集の機会に恵まれたけどね」

「……………」

「ふふ、『レジエンドライダー・ガシヤット』完成の為のデータ、いただくとしよう」
寡黙な相手に話しかけ続けるのにも飽きたのか、それともただ相手するのが面倒になったのか、

男は懐から、やけに明るいピンクやグリーンが目立つ、蛍光色が強めのカラーリングをした

バックルを取り出して、腰に装着。ベルトとなったソレに手をやってから、スーツの内ポケット

あたりから、さらに手のひらよりも大きな、小型の短剣のような物体を取り出した。西洋のサーベルを平たくし、コンパクトなサイズに変更したような見た目のソレには、

ボタン式のトリガーがあり、男は薄気味の悪い笑みを浮かべながら、トリガーを押し込んだ。

【M^マi^イg^{ゲイ}h^{エイ}t^{テイ}y A^アc^クt^クi^イo^オn X^{エックス} !!】

ハイテンションなアナウンスの直後、男の背後にゲームの開始画面のような映像が浮かび、

そこから無数のサイバーティックなエフェクトが飛び交い、周囲には巨大なコインが配置された。

流石に状況が呑み込めないのか、ここにきて初めて困惑したような態度をみせるスカルに対し、

謎の男は薬指を支えにして右手に持つソレを、腰のバックルにある溝へ向け、縦に差し込む。

【ガシャット!!】

【レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム!!】

【アイム ア カメンライダー!!】

男が工程を終えた瞬間に、彼を囲むサークルが出現し、円の軌道上を回転していた数枚の

パネルの内の一枚を手で触れて選択。セレクトそこに描かれていた姿が、男の全身と重なり合った。

しかし、その全体像が浮かび上がるよりも早く、男はバツクルのレバーを横に引き倒す。

【ガチャーン!! レベル・アアップ!!】

【マイティジャンプ! マイティキック! マイティ・アクション・X!!】

うるさく感じられる電子音声のアナウンスが終わると、そこには仮面の戦士が立っていた。

その全身を包むのは、時折禍々しい紫のラインを奔らせる、闇色の強化スーツ。

装甲やスーツは、ほぼ完全に黒系統に統一された配色であるのに対し、腰に装着したベルトの

バツクルや、ゲーム機のコントローラーを模したデザインの胸部装甲は、強めの蛍光色。

背中には何故か、自身の頭部を巨大化させたような形状の装甲を背負っている。

ゴーグルに収まったような見た目の双眸は、コミカルな外観に反して、赫く輝く。

本来なら、この世界にいるはずのない戦士〔仮面ライダーゲーム L v. 2〕が現れた。

「さて、まずは『仮面ライダーW』のレジエンドライダー・ガシャットのデータだ」

突如として現れたゲムムは、どこからか取り出した白磁のガシャットを右手に持ち、警戒を露にしているスカルをよそに、それを倒れ伏している翔太郎の体に突き刺した。

「!!」

「これでよし、と。次は君の番だ。その強さ、私の求める最高の世界ゲームにきつと役立つ

！」

突き刺したガシヤットに何かの流れ込むのを確認したゲナムは、ソレを抜き払って再び懐へしまい込んだかと思うと、別のガシヤットを手にして、スカルへと向き直る。

「さあ、ゲームスタート戦闘開始だ！」

己の理想に燃えるゲナムとスカルが、今ここに対峙した。

「ん？ アレは、士か！ おーい、士あー！」
「ユウスケか」

一方、それぞれ自らが相手取ったドーパントとの対決を終えた二人、士とユウスケは当初の目的地であった風都タワーに向けて急行していたところ、運よく合流を果たし

ていた。

既に変身を解除していながらも、ヘルメット越しでの再会を意に介している暇などなく、二人はそろったことでやる気をみなぎらせ一路、風の吹く街の中心部へ向かっていく。

ところが、二人を追うような形で、巨大な『八輪』駆動の何かが迫って来た。

「つ、土あ！ 何か来た!!」

「アレで砲塔でもついてりや、戦車みたいだな」

「怖いこと言うなよ!」

「門矢 士に小野寺 ユウスケ! 無事だったのか!」

「え……その声、まさかフィリップ君!」

二人の乗るバイクに追従する形でやって来ていたのは、二人組の探偵の片割れであり、

決戦前に鳴海探偵事務所で別れたはずの青年、フィリップであった。

彼がなぜここに、そしてこの巨大な乗り物に乗っている理由は。そのような疑問を

抱く中で、フィリップは普段の冷静さとはかけ離れた慌てぶり、二人に声をかける。

「翔太郎がやられた！ ラストに！」

「翔太郎さんが!! そんな！」

「……………急ぐぞ」

「分かっている！」

明らかに冷静さを欠いているフィリップの言葉に、士は内心で使い物になるかどうかと

懸念したものの、それをおくびにも出さずに低く呟き、バイクのエンジンをさらに吹かす。

三人の戦士を載せた二輪車二台と巨大貨物装甲車は、風都タワーへの道を突き進んでいく。

「馬鹿な、こんな、事がー！」

「……………」

士たちが合流し、風都タワーへと再集結しようとしていた同時刻、目的地へ通じる道路にて、

異なる黒さを持つ二人の戦士が、迫りくる決着の時を無言のままに感じていた。

時間にして五分ほどだろうか。両者は激しい接近戦を繰り広げ、それが収束へ向かっている。

現状に於いて不利なのは、ゲンムであった。

ゲーム機のコントローラーを模したデザインの胸部装甲には、変身に使用したガシヤットでの

活動限界、つまるところHPゲージが表示されている。分かりやすく言えば、残りの体力だ。

当初は右端から左端まで埋まっていたゲージも、今では残り二割をきってしまったている。

それほどまでに両者の実力の差は、決定的であったのだろう。

「レジェンドライダー・ガシヤットのデータは、もう手に入っている。長居は無用、か」
全身の装甲の隙間から、バチバチとスパークを瞬かせながらも立ち上がったゲム
は、

いつの間にか右手に装着していた武器のようなものから、散弾系の銃撃を一带にばら
撒いた。

地面にぶつかった銃弾の全てが硝煙や着弾時の猛煙、さらには火花までをも散らせた
結果、

それが良い目くらましとなったのか、スカルが再び視線を向けた先には、誰もいな
かった。

今度こそ銃を下ろすことが出来たスカルは、うつ伏せに倒れている翔太郎を抱き起し
て、

硬いアスファルトの上ではなく、もう少しマシな場所を見つけて、そこへ仰向けに置
いた。

そして彼は周囲を注意深く見回し、誰もいないことを確認してから、ドライバーのス
ロットに

装填しているメモリを取り出してから機構を動かし、自らの変身を解除する。

全身を覆う装甲や強化スーツが、細やかな破片になって街の風と共に流れていく様を見届けた

彼は、変身解除時に頭から離れていた帽子を、左手で押し付けて深く被せた。

先ほどの戦士の姿とは打って変わって、純白に近い系統の白を基調とした上下スーツを華麗に

着こなす、熟年の男の一面となった彼は、意識の無い翔太郎の手に、あるものを握らせる。

彼はしっかりと手渡したことを確認すると、目覚めを待つことなく、どこかへと歩き出す。

「……………ここで倒れるような男には、帽子は被れねえよ」

肩越しに、誰に語るでもなく告げたその男は、誰にも知られないまま、街の風の中に消えた。

E p, 35 『Eの為に / ただ独りの英雄』

「翔太郎！ しっかりしてくれ、翔太郎！」

風都の中心に位置する風都タワーの近くまでやって来たフィリップと士とユウスケは、道路脇で

人目から隠されるようにして倒れていた翔太郎を発見し、大慌てで彼の元へと駆け寄る。

Wの秘密兵器とも言える八輪駆動の装甲車、リボルギヤリーから飛び降りたフィリップは、

相棒の無事を確かめるべく脈や呼吸の有無を確認して、命に別条がないことを知って安堵した。

ユウスケも同様に、仲間である翔太郎が生きていたことに息を漏らし、彼に痛手を負

わせた相手、

恐らくは首謀者であろうあの仮面ライダーラストに対して、さらなる怒りの炎をたぎらせる。

しかし彼ら二人とは逆に、士は一人だけ冷静な態度を崩さず、周囲の状況を分析していた。

「街路樹が三本も、根元から丸ごと無くなってる。コンクリも一部だけ剥ぎ取られたみたい

無くなってるし、いったいここで何が起きたんだ？ コイツはラストって奴の力なのか？」

「……………それについてなんだけど、門矢 士」

「ん？ どうした、ファイリッブ？」

翔太郎が倒れていた道の端から見ても、戦いの後と思われる痕跡は惨状の一言に尽きる勢いで、

士が見たとおりに道沿いに植樹されていた街路樹は何本かが消え、道路も一部が欠けていた。

あまりに不自然なその光景を訝しむ士に、翔太郎の生存を確認して冷静さを取り戻すことが

できたフィリップが話しかける。顔を向けずに返事をした士に、癖毛の少年は細々と語りだす。

「これはあくまで仮説だけど、あのラストと彼の能力。対峙してみて、気付いたことがある」

「ほう？」

「ラストの使うメモリには、こちらの力を終わらせる……つまり、ほとんど無効化してしまう

能力が宿っている。僕ら二人のガイアメモリの力だけでは、どうあっても勝ち目が無かった」

「攻撃そのものを終わりにさせる、ってことか。面倒だな」

「ああ。けど、そこが妙だ」

「なに？」

「……………ここからが僕の立てた仮説だ。ラストの終焉の能力は、僕の中にある地球の本棚の

データベースには載っていないかった。そもそも、〈終焉の記憶〉自体、地球が今もお

記憶を記録し続けている以上、存在することが不可解だ。地球が終わりを迎えない限りね」

フィリップの打ち出した仮説の前置きの部分で、ユウスケは脱落したが、士は理解した。

「なるほどな。確かに、あるはずのない物があるのは妙な話だ」

「それもそうだけど、本当に妙なのはあのラスト自身のことだよ」

「どういう事だ？」

「………物質を悉く終わらせ、存在を終焉へと帰す能力。何故彼に扱う事が出来る？」

「え？ えーと、どういう事なの？」

「お前は黙ってるユウスケ。けど、言われてみれば確かにな」

「そうだ。何もかもを終わらせる力なら、自身の存在すら終わるはずだ」

そう言い切ったフィリップは、困惑するユウスケを無視して思案する士の横顔を見つ

める。

視線を受けた士自身もまた、見られていることを分かっているながらも考えることを止めない。

フィリップが言う仮説とは、万物を終わらせる能力自体が使用者に効果を発揮しないことのこと。

矛盾についてを述べている。木やコンクリなどの物質を触れただけで終わらせられるのなら、

最も近くに存在する物質、つまり使用者自身の肉体が何故終わりを迎えないのか、という事だ。

仮面ライダーWであるフィリップは、サイクロンメモリを使えば風を、ヒートメモリを使えば

炎熱をまとう事が出来るのだが、それでも風による攻撃や火炎攻撃が効かないわけではない。

物理的な損傷が皆無になることなどありえない以上、それは当然ラストにも当てはまるはずだ。

そう考えての仮説だったのだが、士はしばらく考え込んだ後に表情を変え、いつも通りの不遜な

態度になつてフィリップの仮説を退ける。

「いくら考えても分からない事は、考えるだけ無駄だ。倒せないわけじゃないだろう？」

それに、終わりにさせる能力が効かないものなんて、もう終わつてるもの以外にあるか？」

「……………門矢 士、今なんて？」

「だから、考えるだけ無駄だって」

「もつと後だ!!」

「……………終わりにする能力が効かないってどこか？」

「そうだ、その通りだよ。終わらせられないものは、既に終わっているもの……………」

何でも無いように呟いた士の言葉に、勢いよく食いついたフィリップがまたしても長考状態に

陥つてしまったため、事の張本人はため息をつき、手持無沙汰なユウスケは一先ず目覚めない

翔太郎を安全な場所へと運ぼうとした。その時、目覚めない彼の手に握られたものに

気付く。

「コレ、ガイアメモリ？ しかもこの色、サイクロンとジョーカー？」

「何だって!!」

「あ、えと、フィリップ君。コレって君たちの持つてるやつと一緒だよな？」

「……………確かにサイクロンとジョーカーだが、どうして翔太郎が？」

意識が戻っていないはずの翔太郎の左手には、何故か二本の色鮮やかなメモリが収まっていた。

ユウスケが取り上げたそれらを見たフィリップは、長考状態から一瞬で現実へと舞い戻り、

自分たちがよく使用する適合率の高いメモリと同一であると確かめ、また思考の海へ飛び込む。

目まぐるしい情報の波をかき分けながら、フィリップは現状を少しずつ解明し始める。

まず、翔太郎の手に握られていた二本のガイアメモリ、サイクロンとジョーカーについて。

これらの存在は、恐らくテロリストであるラストたちが探していると言う”未発見の二本”だと

推測できる。一年半前を思わせる犯行予告の映像の中で、ラストが探していると言っていた。

しかし、どうして翔太郎がそれらを持っているのか。フィリップにはそれが分からなかった。

ドライバーを介して意識を共有できる二人にとって、情報交換など以心伝心どころではなく、

こうして有力な情報を得ることが出来たのなら、自分も把握していなければおかしいのだ。

けれど、フィリップはユウスケが気付くまで、翔太郎の持っていたガイアメモリの存在は

知りもしなかった。翔太郎が意図的に隠すことなど有り得ないため、変身が強制解除された

あとで、何者かが翔太郎の手に握らせた可能性が極めて高い。でも誰が、何のために。

(……………とにかく、僕らのメモリがラストの攻撃によって使用不能にされた以上、

戦力になるメモリが手に入ったのは幸運だ。しかも、僕らと適合率の高いこの二本が)

いくら考えても答えを見出せなくなったフィリップは、考えに考えを積み重ねても現状を

変えられないと思いを打ち切り、手に入れた二本のメモリを懐にしまい、タワーを見上げる。

「……………翔太郎は、僕がいなくなった後もこの街を、たった一人で守り続けていた。

街を守る仮面の英雄に、なろうとしていた。なら今度は、僕がこの街を守る番だ」

決意を新たに固めた彼は、倒れたまま目を開けない相棒の役目を受け継ぎ、闘志を燃やす。

だが彼をこのままにしておくことも出来ないし、ユウスケと士に助力を求めて持ち上げ、

意識のない彼が目覚めることを祈り、安全と思われるリボルギャリーの中へ運び込んだ。

「翔太郎、君の勇気を、僕に分けてくれ」

そつと仰向けに置いた翔太郎の上着の内ポケットから、こつそりとあるものを拝借した。フィリップは、外でタワーを睨みつけて待っている二人と合流し、三人で並び立つた。

「終わらせるんだ。あの日の僕と、今の僕は違う！」

「俺もやるよ、フィリップ君！」

「ま、乗り掛かった舟だ。さっさと終わらせて、俺の役目も見つけないとな」

決意と、怒り。二つの燃え盛る感情を胸にした三人の戦士は、風都タワーへと突入した。

れた

三人が風都タワー内部へと突入する少し前、タワー最奥部に鎮座する光線兵器の置か

制御ルームへと続く廊下にて、息も絶え絶えに苦しみながら歩く、紫紺の戦士がいた。

『ハア……ハア……ぐ、クソ！ 亡^{スカル}霊め、よくも俺の邪魔を！』

深緑の複眼から憎しみを滾らせるラストは、先の戦闘によってスカルから受けたダメージに

苦痛の声を上げながらも、壁に手をつきながらゆつくりと進み、目的の部屋に辿り着く。

よろけながら部屋の扉を開け放ち、転がりながらも部屋の中心に無言ながらも厳かな雰囲気

漂わせている切り札、光線兵器エクストリームビッカーが順調に作動しているのを確認して

怨嗟がこもった嘲笑を浮かべる。

『だがこれで！ ようやく俺は！ あの人たちの無念を晴らす事が出来る!!』

狂ったように笑い声をあげるラストの背後に、残った配下である二体のドーパントが

現れ、

彼からの次なる指令が下されるのを待ちわびる。黄の異形は体をくねらせ、青の異形はただ

寡黙に立ち尽くすのみだったが、佇まいから感じられる気概だけは真に迫っていた。彼らの用意と戦意が万全であることを感じたラストは、振り向きざまに腕を振るって告げる。

『行け。Wは無視して、残る二人のイレギュラー闖入者を血祭りに上げろ!!』

ラストから下された命令に従い、黄色と青の異形はそれぞれ目標を決めて部屋から去った。

指示通りに動く二体の背を見送った後、紫紺の戦士はそびえ立つ切り札の前に傳く。

『ついにここまで来た

十三年越しの復讐が

!!』

「こーら、そんなに急いだら危ないわよ。お父さんならすぐに会えるから」

無数の人混みがごった返す中、少し離れた場所から朗らかな母親の声が聞こえてくる。

いつもよりも若干間延びしたこの声は、きつと父親に会えることを喜んでいるからだろうか。

ああ、いつぶりだろうか。この夢を見るのは。

これは私の人生を、生きる意味を変えた運命の日の記憶。

生まれ故郷である風都という街に、AからZまでの26もの運命が、舞い降りた日でもある。

そして奇しくもこの日は、街のシンボルの風都タワーで、セレモニーが開かれる日だった。

私の母親はいたって普通の専業主婦で、父親は風都タワーに勤める誠実な男だ。

当時の私は、日頃忙しくて帰ってくるのが少ない父親に会えるのを、楽しみにしていた。

母親も同じ思いだったのだろう。タワーで行われるセレモニーが開始するより一時間も早くに、

三十周年記念花火大会特集の会場へ、私を連れて行ったのだから。

夫婦円満、絵に描いたような幸せな家庭であった。

広いホールエリアの特設会場に着いた私と母は、既に取材の準備を始めていた報道陣や他の

観客たちの間をすり抜けて、取りあえず腰を下ろせる場所を探して一息つこうとした。

実際、風都タワーはエレベーターやエスカレーターで上ると言っても、全長が高いために

苦労を強いられるわけだ。まだ9歳、小学校3年生程度の私の体力では長続きなどするはずも

なく、一心地つける場所に到着したことにより、父に会うための早起きも相まってしまい、

睡眠欲が沸き起こりその場で眠ってしまう。その時母は、父を探してくると言つて少しの間、

私から離れていったとおぼろげな記憶の中で覚えている。まあ、ここまでは些末な話だ。

幼かった私の運命を変える出来事は、この後にやってくる。

「死神のパーティータイムだ！」

一発の銃声が響き、歓喜と高揚で笑顔が溢れていた会場を、一瞬で混乱へと叩き落す。大勢の悲鳴と絶叫がタワーで反響し、私はあまりの騒音によつて軽い眠りから目覚めた。

目を開けてみると、つい先ほどまでいたはずの観客たちがどこにもおらず、そればかりか

マスコットのふうとくんの頭部が転がっている始末。私は、言い知れぬ恐怖に身震いした。

いなくなった母を探そうにも、風都タワーは街の観光スポットであつたため、非常に広い。

いくら幼いとはいえ、ここから離れば母とも会えなくなってしまう可能性は考慮出来た。

その時私は、母ではなく父に頼ることを閃き、父が勤めていた従業員の部屋へ駆け出した。

子供用の内部マップも備わっていたおかげで、私は目的地へと辿り着く事は出来たのだが、

肝心の父の姿はどこにも見当たらず、そればかりか大人の姿は一人としてなかった。流石にこれは異常事態であることに気付いた私は、すぐにこのタワーから出ようとする。

「ああ、こんなところにカワイイ坊やがいるなんて！」

しかし、目の前の部屋へと続く道の奥から、背筋が凍るほど不気味な男の声が響いてきた。

普段の私なら、見知らぬ大人と言えども助力を乞うこともしただろう。だが、しなかつた。

何故なら声の主は、外見からして普通ではなく、黒い鞭を右手で振るっていたのだから。

ら。

「震えちやつて、カワイイのねえ。だいじょうぶ、オネエさんが守つてア・ゲ・ル♡」
そう言いながら歩み寄つて来たのは、やはり男であつた。いかも、かなりの偉丈夫である。

言動からして女のようにではあつたものの、当時の私は生のオカマというものを知らなかつた。

ので、目の前まで接近してきた謎の男の言葉にただ、震えて身を縮ませるしかなかつたのだ。

ゴツゴツとした男の左手と手をつないだ私は、案内されるがままにタワーの中心部へと連行

されていき、本来なら関係者以外に立ち入りが禁じられた最奥部へ続く扉を共にくぐる。

初めて訪れたその部屋の中には、見たことも無い巨大な装置と、玉座のような腰掛
けが

堂々とそこに鎮座していた。幼い私にとって、それが何かなど分かるはずもなかつた

が。

「オイ京水遅えぞ何してた！　って、なんだその子供は!!」

「うふふ、私と克己ちゃんの隠し子なのよお♡」

「うわ、オッサンマジキモ。子供にまで手え出すとか」

「アンタは黙ってなさい！　私の方が色々とおつきいんだからね!!」

「……………どう見ても逃げ遅れ」

巨大な装置を前にして圧倒されていると、私をここへ連れてきた女言葉の鞭を持った男が、

最初から部屋にいた仲間らしき人たちと騒がしくし始めた。見る限り、男が三人、女が二人。

約一名分からないものは区別不能として、私はこちらを凝視してくる強面の男を見つめる。

ボサボサの髪に、青のメッシュを入れた鋭い目つきの男。どうやら、彼らのリーダーらしい。

一人の女性を除いた他の五人は皆、同じような服装に身を包み、独特な雰囲気醸し

ている。

その中でやはり、黒髪青メツシユの男だけはさらに別格の、恐ろしい気配をにじませていた。

母親とはぐれ、父親の行方も知れぬ状況で、見知らぬ大人の中へ放り込まれた幼い私

が
恐怖を感じないはずもなく、自分の置かれている状況など顧みずに思わず泣きそうになる。

むしろ、今までよく泣きださなかったものだと思いが、とにかく私は泣きかけた。

すると突然、青メツシユの男が私の前へと歩み寄り、磨いていたナイフの切っ先を向ける。

「泣くなボウズ。泣いてるだけじゃ、何も守れない。何もかも、失っていくだけだ。

お前が大切に思っているものも、過去も未来も、今日という日も、全てな」

冷酷な表情で見下ろして語る男に、私は先程とは別の恐怖に駆られ、泣くのを必死に止める。

あのまま聞き分けもなく泣きわめいていたら、眼前のナイフは私に突き刺さっていただろう。

死を予感させる男の態度と行動とは裏腹に、私は彼の言葉を、理解できなくとも心に刻んだ。

理由など分らない。恐ろしげな男からの威圧が、幼い子供心には大きいものだったからか、

あるいは、そう。もしかしたら当時の幼い私でも、彼の真意の一端を理解出来たのだろうか。

目の端からこぼれる涙を拭き取り、頑張つて泣くのを我慢する私の前に、人影が降り立つ。

「ちよつと克己！　いくら何でも、子供相手に酷くない？」

「そうよ克己ちゃん！　この子は私が引き取つて、大事に育てるから！」

揃いの黒い服を着た若い女性と、先程の女言葉の男の二人が、私を庇うようにリ―ダーの

男と真つ向から対峙していた。彼女らの背中しか見えなかったが、勇ましさを背に感

じた。

そんな二人の言葉など意にも介さず、肩を掴んで私の前から無理やりどかせた青メツシユの

男は、再び恐怖の感情によつて顔を歪めて怯える私に近付き、頭に手を置いて語りかける。

「自分が大切だと思ふものくらい、自分の力だけで守り切つてみせろ。

いつまでも誰かに守つてもらえる気であると、いつか本当に何もかも失くしちまうぞ」

「……………克己」

「克己ちゃん……………」

「この俺のように。そして、俺たちのようにな」

最後に頭を強く揺らしてから、青メツシユの男は私から離れ、またナイフを磨き始めた。

ただ、この時はもう既に、私の中から彼への恐怖は薄れていた。否、無いも同然となつた。

彼が私の頭から手を放す際に、見てしまったからだろう。悲しげに揺らぐ、彼の瞳を。きつとこの時、この瞬間、私の中で彼が『憧れの存在』となったのだ。

「さて、そろそろ時間だ」

何か芽生え始めたのを自覚する間に、男たちはいそいそと何かの機材の準備を始める。

先程、報道陣がいた場所にあつた機材と同じに見えたため、きつとTV関係の機械なのだ。

推測した私は、部屋の隅にいるのも居心地が悪かったので、彼らの手伝いを願ひ出た。大人六人と子供一人が準備を終え、緊張した面持ちになつた黒服の彼らを見やる。すると青メツシユの男が全員に何やら指示を出して、横並びになるように仕向けた。全員が整列したのを見計らうと、彼は私を連れて機材のそばへ寄せ、指示を出してきた。

「このボタンを押せ。そしたら、そこで黙つて俺たちのやることを見ていろ」

部屋に入って来たばかりの頃よりは、多少傾けやすくなった首を縦に振り、列に男が戻った

瞬間を見計らって、言われた通りにボタンを押す。すると、風都中のTVに中継が入った。

放送開始のブザーが鳴り始めた時、横列の中央にいた青メツシユの男が、姿を変える。

その全身はまさに、他の一切が付着することを許されない、永劫の美たる白磁に染まり、

太腿と腕に一カ所、胸部を包むようにして一カ所、黒色の奇妙なスロットがズラリと並ぶ。

無数のスロットと同じ色合いをした、死を呼ぶ神が己が身を隠す外套の如き漆黒のマントに、

そこからわずかにはみ出た両腕は、指先から肘にかけて覚めるような青色の炎が奔っている。

さながら無限を表現するような、∞の形をかたどっている陽黄色に輝く複眼状の双眸と、

さながら永ENDLESS久を体现するような、純白の王冠にすら思える横向きに倒した鋭いEの

フレーム。

残滓に蒼白い炎が散る中で、漆黒のマントを左手で颯爽と振り仰いだ、その姿こそ。

「俺の名は、【仮面ライダーエターナル】」

エターナル
永遠こそ、私が初めて出会った【英雄^{仮面ライダー}】だった。

彼らは風都中に、街を救ってきた英雄に宣戦布告をした後、私を逃がしてくれた。

最初こそ人質に取られるものかと思っていたが、仮面ライダーに変身した青メツシユの男、

『大道 克己』という人は、そういう事をするのは主義に反すると言ってくれたおかげだ。

正面入り口は警官隊で封鎖されていたため、物資搬入口から『プロフェツサー・マリ
ア』と

他の仲間たちから呼ばれていた女性の手ずから、私は風都タワーより脱出することが出来た。

一人だけ白いドレスを着ていた熟年の女性だったが、とても優しく温かく、良い人

だった。

マリアさんも、そして克己さん以外の仲間も全員、小さな機械のようなもので怪物の姿に

変身するのを見たけれど、その性格までもが変わっているわけではないと知り、安心できた。

視線は鋭く、近寄りがたい雰囲気の人たちだったけれど、幼い私を想って逃がしたのだ。

黒髪の女性レイカさんは、真っ赤に燃える怪物ヒートに。

筋肉質の大男ゴウゾウさんは、銀色に輝く怪物メタルに。

細身で無口なケンさんは、右手が銃の青い怪物トリガーに。

女言葉なキヨウスイさんは、手が無い黄色い怪物ルナに。

優しくかったマリアさんは、風を操る緑の怪物サイクロンに。

みんな、みんないい人たちだった。怖くても、温かくて。私を生かしてくれた良い人だった。

しかし、私が生まれた街は、そんな彼らを『悪』として、殺した。

風都タワーからさほど離れていない場所で警察に保護された私は、ほどなく両親と面会。

検査を受けて、念のための入院で一晩を明かして、改めて自分が生きていたことに驚く。

それと同時に、自分が生きていられたのは、彼らが助けてくれたからだと理解していた。

だから私は両親に、彼らにお礼が言いたいと言ったのだが、予想していた返答は裏切られる。

「あの人たちはね、テロリスト………悪い人たちだったのよ」

「ああ。でも、大丈夫だぞ。仮面ライダーが、悪い人をやつつけたんだ」

両親の安堵した声色と裏腹に、私の心は一瞬で蒼褪め、冷め切った。

彼らは今、なんと言ったのか。あの人たちが、私を助けてくれた彼らが、悪い人？ 彼らは今、なんと言ったのか。あの人たちを、噂の仮面ライダーが、やつつけた？

い、その後も両親は、昨日の出来事の中で私が生きていたことが何よりの幸運だとのたま

私の中で今も褪せることなく輝き続ける純白の英雄は、街と人々に悪魔だと蔑まれ、私の中で今も許すことなく憎み続けている偽の英雄は、街と人々に英雄と讃えられ。何度も何度も、彼らは悪などではないと反論したが、彼らが街に及ぼしたとされる被害の爪痕を引き合いに出されると言い返す事が出来なくなり、悔しさに涙を飲んだ。

あの日から私は、私の中にいる英雄を穢した偽りの英雄と、それを擁護する街を憎み、優しくて温かかった彼らを殺して平和を語る偽善者を恨み、それが暮らす街を蔑んだ。

「仮面ライダーは、たった一人だけだ……………エターナルだけが、仮面ライダーだ!!」

幼かった私の心にとって、憧れの存在であり、私を救ってくれた彼らをけなして安寧を

貪る街の人々など、もはや人間としてみる気概すらも無くなり、全てが疎ましくなつた。

しかし、力など無かった頃の私は、知る由もなかった。

この絶望から数年後、入社した企業の影とされる謎の資金援助団体『財団X』と呼ばれる

存在とのつながりを持ち、そしてこの絶望への復讐を果たす力を得ることが出来るなど。

全身に奔っていた戦いのダメージによる痛みも引き、ラストは眼前の兵器を見上げる。

彼が幼かった頃に見たものとは少し違うが、それでも当時と変わらぬ威圧感と神々しさを

兼ね備えたような外観を前にして、彼はこれから為そうとする復讐に意識を向けなおす。

英雄の存在を知り、その英雄を街そのものと偽物に奪われ絶望した幼少期。

英雄の誤解を解き、どうにか改善を図ろうとして見向きもされなかった青年期。

英雄の死を憂い、本物を『悪』と、偽物を『善』としてきた腐った街を憎む現在。

全ては、この日の為だけに。

『俺が終わらせる、この街の全てを!! 欲に駆られ、加担しておきながら偽物に救いを求め、

あの人たち、俺の英雄を見殺しにしたこの腐りきった街の全て!! 俺が終わらせる

!!』

怒りに燃え、憎しみに吠え、狂気に叫ぶ仮面の戦士は、その覚悟と怨念に身を委ねる。

E p, 36 『Tの狙撃 / カウントダウン・ナウ』

鳴海探偵事務所を発ってから優に一時間以上が経過した現在、ラストの強襲によって深刻な

ダメージを受けた翔太郎を安全な場所に置いて、士とユウスケ、フィリップの三人。彼ら是一路、今回の事件の主犯が待っているタワー最奥部へと両足を忙しく動かしていた。

正面から堂々と侵入したにも関わらず、相手からは迎撃はおろかその気配すら感じられない

ことに薄気味悪さすら感じた士だったが、逆に好都合だと内心で呟き、幾層もの階段を疾走する。

独尊ならぬ独走で背を見せている彼を、フィリップとユウスケもまた、必死に追いかけていた。

タワーに侵入する直前にフィリップから聞いた話では、犯行声明の動画で見せつけら

れた兵器、

エクストリームビッカーとやらがある場所は、一年半前の事件で用いられた超大型光線兵器の

設置されていた部屋と同じらしい。その情報を得た士は事前に伝えられた内部構造、つまりは

マップを頭の中で冷静に思い返し、自分達の現在位置と目的地への道筋と最短距離を説明する。

「このまま階段を二つ上がって、そこから伸びた通路を右。直進して左折して、また直進だ」

「え？　えーと、階段を上がって、通路を右で左折して直進………ん？」

「小野寺　ユウスケ。僕と門矢　士の後についてくればいい」

「え、あ、おう！」

自身の記憶以外はあらゆる方面で優秀な士とは対照的に、間抜けさが目立って仕方ない彼は、

階段を並走する爽やかな青年に見事に言い包められ、釈然としないまま首を縦に振り

切った。

そうしている間にも三人は迅速に駆け抜けていき、目標の部屋のある階層にまで到達した。

あともう一息だと意気込むユウスケに無言の首肯で応えた士だったが、次の瞬間には彼の体は

重力に逆らうかのように空中へと浮き上がり、その高度を徐々に上へと高めていく。何事かと目を瞠った二人は、床から足を完全に離してなおも上昇を続ける土の下腹部辺りに、

金属のような硬い光沢を放ちながらも柔軟に巻きついている、黄金色の太い縄を見つけた。

否、それは縄などではない。士よりもさらに上へ視線を向けて、その正体に気付く。

『イツシヨニタノシミマシヨオー!!』

やたらと全身をくねらせながら濁声だみこえで言葉を介する、黄金色のドーパントの姿があった。

肩から先にあるはずの腕が無い特殊な外観から、フィリップは上の階から士を連れ去

ろうとする

怪物の正体とそのメモリにすぐ辿り着いたが、対策を立てる間もないまま、しなる鞭のような

形状の触手で捕らえた土とともに姿をくらませる。後を追うため、残された二人は踏み出す。

ところが、その一步目を踏み出した直後、ユウスケは何かを感じてふと足を止めた。

自分でも訳が分からないが、これ以上先に進めば良くないことが起こると直感的に察知した

ユウスケは、連れ去られていった土を助けようと前だけ見て歩を進めようとするフィリップに

気付き、嫌な予感を拭えないままに意識を自分の内側に向ける。彼の中に宿る、古代の力に。

(何か分かんないけど、何かヤバい！ 変身!!)

募る焦燥感に駆られた彼は、内側から浮き出てきたアークルに手を添え、簡略化した工程を

経て超古代の戦士であるクウガへと変身。その行動に驚くフィリップを勢いよく突き飛ばす。

「危ない!!」

後の事などまるで考えずにフィリップを突き飛ばしたクウガだったが、彼らがつい先ほどまで

立っていた場所に目視できない速度で何かが到達したのを確認し、仮面の下で冷や汗を流した。

超古代の戦士となった自分が、感覚の鋭敏化をしていないとはいえ目視不可能な速度の攻撃。

加えて咄嗟の事だっただけに不確かだが、行動を起こす寸前に鼓膜に響いてきた乾いた破裂音。

この二つの要素を加えて思考を巡らせたクウガは、答えに辿り着くと同時にはるか遠方を睨む。

真紅の双眸の延長線上には、左手を添えた右腕を構えてこちらを凝視している青い怪物がいた。

「アレは、ドーパントか！」

「小野寺 ユウスケ、いったい何を……………」

「来ちゃダメだ！ タワー展望フロアの屋外、その窓枠が見えるところから狙撃されてる！」

短く要点だけを凝縮した警告の言葉を聞き、フィリップもクウガと同じ方向へ視線を向ける。

しかし変身もせずに生身のままでいれば如何に危険かを察した彼は、この状況を打破しうる

対抗策をこの場で使うべきかと逡巡しゅんじゆんしていると、その背に庇い立つ戦士が肩越しに見やる。

その視線を受け、戦う決意を固めたフィリップに向けて、クウガは再び端的に言葉を駆った。

「フィリップ君！ ここは俺に任せて、君は先に行け！」

「けど、相手はドーパントだ。君が如何に異世界の戦士と言えど」

「分かってるさ、力の差くらい。だからこそ、ここで君は先を急ぐべきだ！」

「あまりに不合理だ！」

「いいから行けつて!!」

仮面の下にその素顔を隠したクウガの言葉は、どんな時でも単純で端的で、それ故に明快だ。

自分をその背中一つで庇いながら、成すべきことをせよと彼は力強く語りかけてきている。

ここでクウガの言葉通りに動けば、青いドーパント—— トリガー

ドーパントからの

一方的な遠距離攻撃に苦しめられ、最終的にはクウガの持ち味を生かせず死ぬかもしれない。

先日戦ったアイスエイジとの戦闘でクウガの戦闘力を把握しているからこそ、フィリップは

それ以上の実力を誇るであろうトリガーとの戦いを、彼一人に任せるわけにはいかなかった。

自分も残って戦うべきだと結論を出したフィリップだったが、クウガはそれを良しと

しない。

「ここは俺が食い止めるから！ 君は、この街の仮面ライダーなんだろう！！ だったら！！」

「小野寺 ユウスケ……………」

「街のヒーローなんだろう？ さあ、早く！！」

これ以上は無いとばかりに、クウガは睨みつけていた相手のいる場所へと駆けだしていき、

向こうの狙撃の標的を無防備なフィリップから自分へと移し替えさせて時間を稼ぐ。

その行動の一つ一つが、自分を守るためのものであると理解したフィリップは、彼の決意を

無駄には出来ないと腹を括って、踵を返してタワー最奥部である目的地へ足を再稼働させた。

「……………うまくやってくれよ、フィリップ君！」

信じて送り出した戦友の背中を横目で見送りつつ、クウガはタワーの支柱や設置されている

案内板やオブジェなどで身を隠しながら、着実にトリガーとの距離を詰める作戦を決行する。

全身を覆い隠せる場所に逃げ込んだクウガは深く息を吐き、自分の状況を改めて確認した。

「相手は多分一人で、フィリップ君から聞いた話から考えても、トリガーのメモリを使う

う
ドーパントとみて間違いない。狙撃、かあ。ここに拳銃でもあったら良かったのに
……………」

フィリップを庇いながら相手を観察していた彼は、その外見的特徴とタワーに攻め入る前に

聞いていた相手の情報をもとにして、こちらを狙撃している敵の戦法に大まかな予測を立てる。

全身を染め上げるのは空や海のような天然の青ではなく、緻密な設計で組まれた人工

物の蒼。

頭部だけがやけに楕円を形作るようにして細長く伸び、目と思しき単眼には狙撃手にとっては

かかすことのできないスコープの模様が奔り、無言かつ無表情な佇まいから殺気を振り撒く。

そして最大の特徴は、右肘から先には人間としてはありえない、重火器の砲塔部分があった。

クウガを狙撃している敵は、情報と条件から考えて、トリガードーパントで間違いない。

「一番怖いのは銃の威力だけど、接近できれば俺に分がある！」

聞かされていた能力と現状を加味して、遠距離戦では勝ち目など万に一つもあるはずもなく、

逆に近接戦闘に持ち込めれば自分の勝利できる確率は高まると考え、作戦を立て終える。

思い立ったが即行動を体現する彼は、策を講じたと同時に隠れていた場所から即座に

飛び出し、

狙撃されないために一目散にフロアを駆け抜けて、非常用の階段を駆け上がって屋外へ出た。

風都の全体を駆け巡って収束してきた風が流れるそこには、こちらに銃口を向けたまま一切の

震えも起こさずに戦意を立ち昇らせている敵が待ち構えている。彼我の距離は約25メートル。

攻撃手段である四肢の射程範囲内とは程遠い現在位置を把握しつつ、クウガはこじ開けた扉の

陰から飛び出していき、標的が物陰から抜けて姿を晒す事に驚くトリガーに肉薄していった。

「こつちから仕掛ける！」

『……………ゲームスタート』

遮蔽物が一切ない屋外でのアンフェアマッチのゴングが、音など鳴らさずに戦いの火蓋を切る。

持ち前の身体能力を持って果敢に前進するクウガは、トリガーの右腕である銃に最大の警戒を

向けており、その銃口が自分の視線と交錯した瞬間、体をわずかにずらして射線上から離脱した。

遠距離戦では勝負にもならないと分かっている彼は、とにかく相手の攻撃は避けねばならないと

言い聞かせるように心の中で反芻させ、攻撃を放つ銃口だけに意識の大半を割いて動いている。

その方針が功を奏したのか、クウガの動きは自然とジグザグと多角的なものとなり、銃身を右に

左にと忙しく動かさなくてはならないトリガーは、徐々に戦士が接近してくることに焦りだす。

『……………エリアチエンジ』

撃たなければ攻撃できないが、やみくもに銃をぶつ放したところでそれは射撃とは呼べない。

それを理解しているトリガーは、遮蔽物が無いこの屋外での戦闘にクウガを誘い出したのだが、

相手の性能が予想よりも高いことを誤算と考え、別区画の窓に射撃で穴を開けて飛び込んだ。

距離を詰めていたのあと一歩で取り逃がしたクウガは、確実に倒そうと青い異形の後を追う。

勢いよく突っ込んだことで一人分の通路ができた窓から落ち、赤い戦士も新たな戦闘区域へと

誘われる。そこで待ち構えていたトリガーが右腕の銃を構え、第二ラウンドの鐘を狙撃した。

「うっ！ くそ、これじゃ、近付けない！」

『……………』

素早いながらも的確に急所や死角を狙撃してくる相手から辛くも逃げ延び、すぐ近くにあった

タワーの案内板へと背を預けたクウガは、緩みなくこちらを見据えるトリガーに溜め

息を吐く。

現状、彼に打開策は無かった。屋外での戦闘であれば、遮蔽物無しのデメリットがあれども、

その分だけ広くスペースを取りながら移動ができたため、徐々に距離を詰める事が出来た。

しかし、この場には射撃から身を守る遮蔽物が大量にあるが、それはクウガの移動できる範囲が

恐ろしいほどに制限されている。難易度があるとすれば、今の方がはるかに上であろう。

どうにかしなければとあれこれ考え始めたクウガだが、結局作戦と呼べる作戦など考えつかず、

最終的にはやはり自分でできる事をなどのたまう。ただ実際、この場ではそうせざるをえない。

身を隠しながらの前進など不可能に近い。とくれば、知能指数が低いクウガに取れる戦法は一つ。

「こんな距離！ 突っ切るしかない!!」

回避行動の一切を切り捨てた、文字通りに読んで字の如く、捨て身の特攻と呼ばれるもののみ。

先程のような細かい回避が取れない環境では、受けるしかないと覚悟を決めたクウガはただ、

こちらに銃口を向けて接近してくる自分に震え一つ起こさない敵に、殴りかかっていった。

最短距離で迫り来るクウガに向けて銃を構えるトリガー。一射、二射と続けざまに弾を放つ。

そのどちらも真紅の装甲に着弾したものの、貫通するまでには至らず装甲の表面を抉っただけに

留まったものの、肉体を変質させたものであるために痛覚があり、電気信号は忠実に送られる。

受けた銃撃に仮面の下の顔を苦悶で歪めるクウガだが、それでも彼の疾走は少しもブレない。

むしろ、これ以上のダメージを負いたくないとばかりに速度を上げて急接近してくるクウガへ、

さらに追加で弾丸をくれてやったのだが、喉奥からかすれた唸りを上げるだけで足は止まらない。

「うおおおおおおおッツ!!」

突貫という言葉が相応しい短距離走破で、自身の徒手空拳が届き得る射程範囲ギリギリへと

滑り込んだクウガは、受けた銃撃の痛みに歯を食いしばりつつ、握りしめた拳を二度振るう。

走ってきたことで勢いも上乗せされた拳だったが、それらは目標へ当たらずに空を薙いだ。

手ごたえが無いことに驚くよりも先に、クウガは拳を振り切る勢いを利用して体を反らし、

重心の移動をコンマの世界下で完遂して、右背面からひねりを加えた蹴りを突き出した。

しかし、それすらも手ごたえを伝えることなく空振り、トリガーは再び銃を構えてみせる。

「なんて身のこなしだ！」

外見からは想像もつかないほど軽快な身のこなしで、クウガの攻撃は悉く躲かれており、

せつかく近接戦闘にまで引きずり出しておいて避けられた事で、彼は柔らに翻弄され始める。

真紅の装甲から鮮血を垂らしているクウガは、想定外の回避能力によつて近接格闘攻撃を

封じられたも同然である事実には気が付き、それだけはいけないと悟り、がむしやらに攻撃へ移る。

「はあつ！ せい！ どおりやあああああああ！！」

『……………』

闇雲な攻撃などではダメージを与えられないことは、いくらクウガとはいえ分かっていた。

しかし、現状を打開するためにはとにかく攻め続けるしかない、彼の直感が告げていた。

右拳を正拳突きの際で鋭く繰り出せば、銃を支えていた左手で赤子をあやすように捻られ、

逆に蹴りを叩き込もうとすれば、それまで狙撃のためだけに使用していた右腕の砲身で殴る。

ボディをがら空きにしたクウガを射抜くべく、蹴りを弾いた右腕の銃をすぐさま構え直す。

どこまでも冷静沈着で恐ろしくなるほどにクレバーな彼は、油断なくクウガへ銃を向ける。

「……………強いな」

そんなトリガーにどうやって一撃を当ててやろうかと無い頭を捻って絞っているクウガは、

こちらを見据えたまま発砲もせず、ただじつと待っているトリガーに違和感を見出した。

そうして知らず知らずのうちに膠着状態に陥っていた二人だったが、ふいにトリガーがその

右腕を真上へ向けて持ち上げ、攻めさせようとする誘いかと疑うクウガを無視して射撃する。

何も無いはずの空間へ向けて合計で七発撃ちこんだトリガーは、右腕を下して見つめてくる。

いったいどうしたのかと思ったクウガは、敵が何を撃ったのかが気になり、真上を仰いだ。

途端、彼は信じられない光景に目を剥かされることとなった。

「なっ

?!」

クウガの頭上に影が差し、その上空から飛来してきているのは、この区画の上半分を固定

する役目であるいくつかのポールであった。トリガーはそれらでクウガを押し潰すようだ。

ポールと天井とを繋ぎ留めているはずの金具を、先程の射撃で目視することも無いま

まに

撃ちぬいて、あまつさえそれらで相手を押し潰そうなどと考えるものは一人しかいない。

考えつくこと自体も驚くべきことだが、最も驚愕に値するのはそれを成しえたその技量である。

驚く間も与えられないまま落下するボールの餌食になったことで、身動きの一切を封じられた

クウガは、またしてもしくじってしまったと反省し、後悔し、情けなさを仮面の下で悔やんだ。

「くそ、くそくそ、クソツ!!」

どうにか脱出せねばとボールをどかそうと試みるも、一本一本の重量がハンパではない。

加えて、クウガ自体を包み込むように落下しつつも他のボールと絶妙に噛み合っているのだ。

生半可な技量程度では実行不可能な攻撃を前にして、クウガは今度こそ自身の終わりを

を悟る。

先日のアイスエイジ戦でも、自分は助けようと戦っても結局は助けられただけであつたし、

今回もフィリップをすぐに向かわせようと敵を引き受けたが、まさに手も足も出なかつた。

その事実が、自分の弱さを物語る。

「うあああああああッ!!」

仮面で隠された顔を苦悶に歪ませたクウガは焦りのみを募らせていったが、全て徒勞に終わる。

脱出すらも容易でない事を理解しているトリガーは、落下したポールの下敷きになつて

いるクウガのそばへと悠々とした態度で近付き、眉間部分に右腕の銃口をゆっくり押しつけた。

さらに確実性を重んじたトリガーは、左手で銃身を支えて一発で仮面に守られた頭部

撃ち抜かんとし、抵抗しようと暴れるクウガに蹴りを入れて大人しくさせて銃口を突きつける。

またしても敗れるのか。

以前も今回も、時間稼ぎにすらもならないような足手まといの無様を晒したクウガは、悔しさの

あまりに肩を怒らせて上下させ、内出血を起こしそうなほど握りしめた拳でポールを殴った。

しかし、それで現実が変えられるわけではなく、銃口を押し付けられる感覚が強まっただけ。

どうにかして脱出せねばと、最後までみつともなく足掻きに足掻いたクウガは顔を上げた。

そして、そこで目撃する。

「え？」

けたたましいバイクのエンジンに似た音が聞こえた直後、トリガーがどこかへ吹き飛

ばされた。

「……………な、何が」

状況が呑み込めないクウガは、ポールに身動きを制限されながらも可能な動きで周囲を探り、

ふっ飛ばされていったトリガーから自分を庇うようにして仁王立つ、紅蓮の戦士を見た。

「……………寝ている場合ではないと体に鞭を打って来てみれば、懐かしい顔と鉢合わせたものだ」

無然とした口調と物言いに耳を傾けるクウガだったが、次の瞬間には自身の上に重たげに

のしかかっていたポールの数々が姿を消し、驚きのあまりに立ち上がった彼は戦士の右手に

握られていた長剣を見やる。それこそが、自分の上にあつたポールを払った逸品であ

ると。

瓦礫の中から音を立てて起き上がったトリガーに視線を戻すと、紅蓮の戦士が手に持った

剣の切っ先をクウガに向けて、底冷えするような声色でこちらを一切見ることなく告げた。

「地獄から何度蘇ろうと、俺は負けん」

ここから先は俺の領域、手を出すな。

そう言いたげな雰囲気を背中越しに醸す彼に何も言えず、押し黙ってしまうクウガ。戦闘体勢に移行しなおしたトリガーを相手取る意思を見せ、背中にバイクのホイールを

背負った紅蓮の戦士が今、専用武器であるエンジンブレードを唸らせて声高に叫んだ。

「さあ……………振り切るぜ!!」

今ここに、不死身の男【仮面ライダーアクセル】が立ち上がった。

E P, 37 『戦慄のD / 最終局面』

本来ならば、ここにいるはずのない『風都』のもう一人の英雄の姿に、クウガは驚きを隠せない。

アクセルの正体は、この風都の警察署でガイアメモリ（ドーパント）専門の部署に席を置いている

刑事である、照井 竜であり、その彼は現在、都内の病院で意識不明の重体と聞いているのだ。

そんな人物がこの場にいるはずがないと頭では考えるものの、目の前の現実は変わりはない。

完全にターゲットをクウガから唐突に現れた紅蓮の戦士へと移行したトリガーと、自分の眼前に

仁王立ちしている戦士の背を見つめるクウガ。思わぬ援軍が、確かにクウガの窮地を

救ったのだ。

状況がまるで呑み込めず、慌てふためいているクウガに対し、背を向けたままアクセルは告げる。

「こいつは俺に任せろ」

たつたの一言だけしか彼は語らなかつたが、そこに込められた気迫たるや、相対しているトリガー

だけでなく味方であるはずのクウガにすら、有無を言わせぬ迫力となつて重くのしかかつた。

クウガからすれば彼は頼もしい援軍であるが、アクセルからすればクウガなど知りもしない他人。

信用など欠片もあるはずがなく、それ以前に真紅の戦士が自分の味方なのかも怪しい状況である。

居ても邪魔になる謎の人物と共闘するより、この場にいってもらわない方がやりやすいだけかも

しれないが、とにかくアクセルはクウガを助け、今も油断なく銃口を向ける敵から逃

がそうと

していることは確かだった。それが分かっているからこそ、クウガもそれ以上は何も言えない。

ただ、独りだけで、しかも満身創痍であることが間違いない彼だけを戦わせるより、自分と共に

戦えば確実に勝利できるのではないかとも考えたが、アクセルにとっては要らぬ心配でしかない。

それを裏付けるように、彼は未だに動こうとしないクウガに向けて、今度は顔を向けて語った。

「お前の力が本当に必要なのは、こいつにじゃない」

その言葉を聞いたクウガは、アクセルが自分を味方として認識していることを知ると同時に、

全くの他人であるはずなのに、まるで自分の力がどれほどのものか確信している物言いに

啞然とする。突如現れた紅蓮の戦士は、もう語る事はないとばかりに今度こそ背中を

向ける。

クウガは彼の背に手を伸ばそうとするが、彼の言葉を反芻し意を決する。

この場に自分が留まったところで、またもトリガーを相手に苦戦を強いられることだろう。

そればかりか、最悪アクセルの足を引つ張る形で共倒れとなってしまう可能性も、少なくない。

そして何より、彼が語ったほんの一言二言は、何よりもクウガである自分を鼓舞してくれた。

ならばもう、迷うことはない。

ここは、彼に任せるべきだ。

「あ、あの、ありがとうございます!!」

わずか一分にも満たない邂逅であったが、もはやこの頼もしい唯一人の援軍を疑いはない。

信じるのが何よりも得意なクウガは、自分の為に敵の相手を買って出たアクセルに感謝の意を

示してから、トリガーとは逆方向へ、フィリップが向かったであろうタワー最奥部へ向かった。

『……………!!』

クウガとアクセルが協力関係になったところで、トリガーは己の任務である足止めを放棄する

わけにはいかない。己に背を向けて走り去っていく真紅の戦士の後頭部に、彼は照準を合わせて

一瞬の躊躇もなく引き金を引く。刹那、彼の右腕である銃が火を噴き、弾丸が射出されていく。

トリガーが思い描いた通りの軌道を正確になぞっていくソレは、しかしアクセルの剣に阻まれた。

音には劣るものの、それに近い速度で放たれた弾丸を目視して切り捨てる紅蓮の戦士の腕に

恐れを抱いたのも数瞬。気を持ち直したトリガーは、今度こそと第二射を撃つべく銃を構える。

「何処を見ている」

【JET】

だが、新たに装填された弾丸は目的を果たすことが出来ず、トリガーは突然の一撃に面食らう。

何が起きたのかと自身のモノアイに備わっているスコープ越しに、アクセルを観察した彼は、

紅蓮の戦士の持つ大剣の切っ先がこちらを向いていることに気づいた。

アクセルが自身の得物であるエンジンブレードの力を十二分に発揮するためのガイアメモリ、

〈エンジンメモリ機関部の記憶〉の持つ三つの特性。その内の一つを、アクセルは発動させていたのだ。

【JET】とは、即ち一時的に爆発的な加速を行う記憶が抽出された力で、その効果も同じ。

エンジンブレードの剣先から、爆発的に加速させた斬撃を銃弾のように射出するとう用途で、

アクセルがよく使用する力である。剣先から放つ他にも、剣を振るって幅を広げた斬撃を飛ばす

ということも可能なので、爆発的な速度を剣に付与させる能力、という認識で問題は無いだろう。

残る能力は「STEAM」と「ELECTRIC」の二つ。

前者はその名から分かるように、過剰稼働によつて蓄積された熱を排熱する際に発生する蒸気を、

広範囲に、あるいは一点に集中して放出させることのできる力であり、想像以上の熱量を誇る。

そして後者は、あらゆる機関部に共通する「電気駆動」という観点から、一定量の電気を放電、

もしくは剣にまとわせて斬撃に電気を付与させる力を持つ。どちらも非常に強力な力なのだ。

超高速で放たれた斬撃の弾丸を受けたトリガーは、これによりクウガを背後から狙撃する事を

遮られたのだと知覚すると、まず優先して排除すべき対象をアクセルであると再認識した。

燃え盛る烈火の如き紅蓮の装甲を持つ戦士を、スコープ越しに忌々しげな視線を叩きつける

トリガーに、剣先を下げて最初の姿勢に戻ったアクセルが呆れたように細々と呟く。

「また、お前の相手をすることになるとはな………」

その言葉を吐き捨てるように呟いたアクセルは、直後トリガーへ向けて距離を詰めようと疾走。

いきなりのことに少し動揺したトリガーだったが、敵が接近戦をメインに戦うスタイルである

ことを、まるで前にも戦った事があるように理解していた為、即座に銃を構えて狙撃を開始する。

ズガン、ズガンと立て続けに正確無比なる射撃を繰り出すが、それらはアクセルが右手一本で

振るったエンジンプレードの刃によって一切が阻まれ、わずかな足止めすら役立たなかった。

それでも今度は剣を届かせにくい右足首や脇腹、肩部などを重点的に狙って撃ち込む

ものの、

アクセルの脚部にあるホイールによる回転が、変則的な回避を生み出し、攻撃を無効化する。

『……………』

遠距離からの射撃は、距離が開いている分だけ対応がしやすくなり、防がれてしまう。となれば、相手が接近してきていることを利用し、絶対に回避も防御も出来ぬ間合いにまで

誘い込んでの一撃を見舞うのみと考え、トリガーは戦法を真逆にシフトさせて待ち構える。

狙撃手からの射撃が止んだことに疑問を抱いたアクセルは、すぐに相手が考えていることを

思い付き、このまま無策で突っ込んでいけば接近戦を始める前に撃ち抜かれると容易に悟った。

しかし自身が持つ遠距離攻撃は、先程クウガを狙撃から守るべく使用して相手に見せている。

であれば、どうすれば敵の攻撃をかいくぐってこちらの一撃を届かせることができるのか。

アクセルは、その答えを見出した。

「はあっ!!」

それまで剣を片手に全力疾走をしていたアクセルが、空いていた左手をおもむろに自身の腰へ、

アクセルメモリをスロットインしているドライバー、そのグリップ部分へと伸ばして挿んだ。

そのまま勢いよく左手を外側へ振り抜き、ドライバーからバツクルだけを引き剥がした。

従来のWや他のドライバーでは不可能なこの構造は、アクセルという戦士の開発コンセプト自体に

明確な違いがある為に生まれたもの。そしてその機能を発揮すべく、右手に持っていた大剣を

トリガーに向けて正確な狙いなどつけずに投擲。空いた右手でもバツクルのグリップ

プを掴み握る。

アクセルの取ったこの行動の意味を、トリガーは知る由もなかった。

そして直後に起きた出来事についても、彼は予想だにしていなかった。

『!?!』

それまで人の形をしていたものが、バイクへと変形して向かってくるなど、誰が想像できようか。

「むんツ!!」

『ツツ?!』

いきなりそれまでの半分程度の高さになって、二つのホイールを巧みに操り突貫してくる

バイクモードのアクセルに今度は驚きを隠せず、対応に遅れたトリガーは前輪に跳ね飛ばされる。

そればかりか、そのままアクセルはトリガーをどんどん押し出し、ついには今いる階

層の窓から

青い異形もろとも突き破って飛び出した。当然、両者ともに空を飛ぶすべなど有して
いない。

成す術も無く諸共落下していった彼らは（アクセルは途中で人型に戻った）、砕け散つ
た硝子片を

雨のように浴びつつも、風都タワーの正面ゲート手前にある白いテーブルや椅子を粉
砕する。

転がって衝撃を和らげたものの、破壊しつくされた市民の憩いの場で二人、戦いの第
二幕を

自ら切って落とした。

「屋内だと俺には少々動き辛くてな。ここなら、気兼ねなく動ける」

『……………!!』

「さあ、振り切るぜ!!」

立ち上がったアクセルは、一緒に落下してアスファルトに中程まで突き刺さっていた
大剣を

力任せに引き抜き、自身を鼓舞するために言い放つセリフを叫び、剣を振り上げ飛び掛かる。

アクセルは刑事という職務に就いている関係上、剣道なども本格的に指導を受けている。

しかし彼はそもそも他人に強制されることを嫌う傾向があり、他人の決めた型などにはまること

などありはしない。故に、今まさにエンジンブレードを振るう彼の太刀筋は、独学のものである。

右手に握った大剣を、その想像しがたい重量と破壊力を活かすべく大きく振るい、右斜め上から

左斜め下へと剣の軌道を滑らせる。無論そこで攻撃は止まらず、続けて大振りの斬撃を繰り出す。

「はあッ!! せい、ふん!!」

『グ、ク……………!!』

最後に繰り出した上段からの一太刀は、如何にトリガーと言えども避けられる間合い

ではなく、

止むを得ずに自身の右腕で防御するも、圧倒的破壊力と重量を併せ持つ紅蓮の大剣は止まらない。

ただでさえ凄まじい重量の剣を受けているのに、それが上から力を加えられているとなれば、

全身がソレを扱えるようにすべくデザインされたアクセルとは違う、トリガーが崩れるは必定。

受けた一撃のあまりの重さに、トリガーは左膝を折って地につけてしまう。

「でやああ!!」

無論、そのような歴然たる隙をこの男が見逃すはずはなく、さらなる追撃を叩きこむ。膝を折ったトリガーに剣で上から押し込めつつ、支えとなる右腕へ左膝による一撃をかまし、

体勢を崩したところへ脚部ホイールを急回転させて、時計回りでエンジンブレードを振るう。

『ガアアアアッ!!』

きつちり三回転分の斬撃を浴びせられ、力なくヨロヨロとふらつきながら後退するトリガー。

火花を散らせたことで若干の熱を帯びた剣を振るうアクセルは、それでも銃口をこちらへ向けて

応戦の意志を見せる相手に、いつぞやの戦いでもこんな場面があつたことを思い出す。

すると、常に無口で寡黙だったトリガーがここで、その沈黙を破った。

『タイム、リミット……………カウント10』^{テン}

右腕の銃身をエンジンブレードに斬りつけられた左腕で支えた狙撃手は、このままでは自分が

競り負けることを悟つたのか、自身に残されたエネルギーを一度に放つべくチャージを開始。

青白いエネルギーの余波が周囲の空気を震わせ、銃身に同色の稲妻のような光が迸つ

ている。

最後の力を収束させ始めたトリガーを前にしても、アクセルは動じず、あるものを取り出した。

全身を紅蓮に染める彼が掴んでいるソレは、燃え盛るような紅蓮とは正反対の、醒めるような蒼。

「タイムリミットまでのカウントを数えるのは、お前じゃない俺だ!!」

声高にそう叫んだアクセルは、再び装着していたバツクルから〈加速アクセルメモリの記憶〉を排出音とともに

引き抜き、掴んでいた蒼いソレに手を添え、上半分をグルリと回転させてメモリへと変貌させた。

彼が新たに取り出したのは、アクセルが誇る切り札であり、最強最高最速の力。その名を、〈挑戦トライアルメモリの記憶〉という。

「全て、振り切るぜ!!」

【TRIAL】

信号機を取りつけたような少々大きめのメモリを、アクセルはバックルのスロットへ装填し、

ドライバーの右側にあるハンドルを右手でつかみ、バイクのエンジンを噴かすようにひねる。

ヴォン、ヴォンとけたたましいエンジン音が響いた直後、レースやモトクロスなどで耳にする

カウントダウンの音が刻まれ、三拍の後に一際高い音となり、アクセルの姿に変化をもたらず。

燃え盛る紅蓮の如き装甲は、瞬きほどの刹那に黄金色に染まり、そして霧散して消えていく。

代わりに彼の全身を覆い尽くしたのは、極々薄いながらも体にフィットした純蒼色の軽装甲。

肩の突出した重装甲も、丸みを帯びたタイヤのホイールに似せた、可動性重視のものとなり、

今の彼を染め上げているような蒼のモノアイは、今や沸き起こる闘志を煌々と燃やす琥珀色に

なつて鋭い輝きを放っている。それまでそこにいたアクセルとは、全く変わった姿の彼がいた。

これこそが、アクセルの奥の手であり切り札たる姿、「アクセル トライアル」

絶大な防御力と攻撃力を堅牢な鎧で得ていた彼は、スマートな軽装甲で凜と佇んでいたが、

差し込んだばかりのメモリを再びスロットから引き抜き、メモリの形を元に戻してしまふ。

アクセルトライアルは右手に持ったソレの、ちょうど親指にあたる部分に備わっているボタンを

押し込み、ストップウォッチのように電子数字を浮かべ出したのを確認して空高く放り投げた。

アクセルはその特殊な開発コンセプトによる都合で、Wのような外付けのマキシマムスロットを

持ち合わせておらず、変身に使用するボディスロットにそのまま組み込んでいたのだ。

しかしこのトリアルメモリは、それ自体がマキシマムを発動させるシステムを搭載している

ため、スロットに入れ込む必要がない。その特殊な極限発動マキシマムドラッグを繰り返し出すべく、彼は動いた。

「

トリアルメモリは、アクセルの加速限界に「挑戦」させるという性質上のメリットにより、

通常の数倍の速度を獲得できるようになる代物である。しかし、それ故のデメリットもある。

加速の限界値に「挑戦」させるこの力は、文字通りの”制限時間”を設定しておかなければ、

使用者にいつまでも「挑戦」をさせ続けてしまう。その先に待つのは、死以外には何も無い。

このメモリを開発した者はそれを分かっているからこそ、アクセルにこのメモリを与えたのだ。

トライアルメモリの使用上限は、わずか十秒。それを過ぎれば使用者の肉体に負荷がかかり、

強制的に変身を解除させられる。それどころか、最悪命にまで関わるレベルの重傷を負う。

だが彼はこのメモリを見事に使いこなしていた。宙を舞うメモリが落下するまで、残り八秒。

『!?!』

マキシマムを発動してから一秒しか経過していない。しかし既にアクセルトライアルはもう、

自身の射程圏内にトリガーを捉えていた。否、残像すら生み出す速度で、急速接近していた。

トリガーが蒼い残像にスコープ越しの視線を向けている頃には、アクセルトライアルの拳が

空気をうならせながら、同じような色合いをした異形の左頬を捉えて振り抜かれている。

恐ろしく速い衝撃に顔を揺さぶられたとトリガーが気付いた時、蒼い残像が自身の目の前で、

その足を振り上げて振り下ろすという次なる残像を生み出していた。

『!?!?!?』

何が起こっているのか分からない。気が付けば視界が歪み、体は激痛を訴えているのだ。

トリガーの目の前には、足と手を四本にも五本にも増やしているように見える蒼い戦士が、

風を強引に動かしている唸り声をあげていた。しかし、トリガーはもう体を動かさなかった。

アクセルトライアルは、右脚や左脚の蹴りを何度も何度も何度も何度も何度も、何度も何度も、

それこそ残像に残像が追い付かなくなっているほどの速度で、連続して異形に叩き込

んでいる。

早く、速く、迅い蹴りがトリガーの胴や肩、顔から手足に至るまでのあらゆる場所に突き刺さる。

もう相手には自分がどうなっているのかすら知覚不能な速度で、一秒間数十発という恐ろしい

速度の暴風雨をぶち込んでいた。そこからさらに数秒、彼の頭上にメモリが落下してくる。

最後の最後に特大の右回し蹴りを繰り出したアクセルトリアルは、トリガーに背中を向けて

落下してきたメモリをタイミングよく右手で掴み取り、制限時間超過寸前にボタンを押した。

【TRIAL / MAXIMUM DRIVE】

トリアルの極限発動を宣告する電子音声が響き、アクセルトリアルは厳かに眩く。

「カウントは10も必要ない……ゲームセットまでのカウントは、9.8で充分だ」

そう言い放ったアクセルトライアルの背後では、先程まで叩きこまれていた無数の蹴りによる

ダメージがようやく現在の時間に追いつき、さながら“T”字に浮かび上がるソレが薄れていく。

そして、最後に残された蹴りの猛襲の残滓が完全に消えた直後、トリガーは爆散した。

「言ったはずだ、屋内だと動き辛いとな。遮蔽物のない空間なら、銃弾以上の速度で動ける

俺に勝機があつた。あの時の俺とは違う……この街を、悪夢を甦らせようとす
る悪から守る」

四散した〈トリガーマモリ射手の記憶〉と爆炎の残り火を見やり、新たに決意を燃やすアクセル。

「やはり、絶望がお前のゴールのようだな」

E P, 38 『集結するG / 風の都の守り人』

風都タワー東側の展望台エリアにて、傷だらけの重体の身でありながら駆け付けたアクセルの活躍

により、超高度な狙撃能力を有するトリガー・ドーパントは撃破された。

ここで、アクセルが切り札であるトリアルを使用して勝負を決めようとする数分前へと遡る。

その頃、黄金色に輝くドーパントのしなる腕に抱かれた士は、タワー西側にある第二展望台へと

連れ去られていた。まるでターザンがするように、謎のドーパントはゴム製の鞭のよ

うに伸縮が

自在の腕を巧みに操り、タワーの外部にある落下を防ぐ為のフェンスを伝って空を

舞っている。

敵に体の自由を封じられているというだけでも危機的状況であることに変わりはないのだが、

時折黄金色のドーパントが漏らす、「オイシソウダワア」や「イイカラダシテルウ」などの

独特の片言が、只事では済まされないと尋常ならざる危機感を土に抱かせた。

(このままじゃヤバイ……くそ、変身できれば)

アナコンダに巻き付かれたような状態の士は、思うように腕や指先を動かすことが出来ない。

どうにかして懐からテイケイドに変身するドライバーを取り出し、装着しなくてはと考えは

するものの、身じろぎ一つも苦勞する今の体勢ではどうしようもなく、成す術が無かった。

それでも機会を逃さぬよう、敵の動向を窺うべく抵抗を少しだけ緩めたその時。

「いた！　そこだあッ！」

『セツキヨクテキイイ!?』』

下の階層の窓辺から赤い鎧の戦士クウガが跳び上がり、勢いそのままにドーパントへぶつかり

諸共に転倒する。その拍子に拘束が緩み、隙を見逃さなかった土が転がりつつ脱出した。

拘束から解き放たれた土はすぐさまドライバーを腰に装着し、見慣れたカードを右手に持って

表裏を切り替え、立ち上がろうと膝を着いた瞬間にベルトのバックルへと装填。機構を動かす。

「変身!!」

【KAMEN RIDE DECADE】

瞬間、土の周囲に異なる九つの仮面ライダークレストの紋章が浮かび上がり、それらが人型の影となつて土の

体と重なり強固な装甲と化す。直後に、仮面に長方形の板が突き刺さり、全身を染め上げる。

色褪せた返り血の如きマゼンタのボディに、淡く輝くライトグリーンの双眸が、門矢士という

人間を世界の破壊者デイケイドへと作り変えた。完全なる戦闘態勢を整えた戦士がゆるりと立つ。

もはや癪となった両手を打ち鳴らす仕草を交えつつ、デイケイドは起き上がる異形と対峙する。

前に戦ったナスカやウエザー、メタルのドーパントたちとは明らかに違う、人間離れた外見。

試験管の底をひっくり返して被せたような黒い頭部に、肩から頭頂部へ向かって伸びる黒い角、

生物的とは言い難い、人工的な色合いをした黄金色の肉体に、伸縮自在の触手染みたる両腕。

その怪腕をしなせながら体全体をくねくねと揺らして迫る姿は、異様の一言に尽きる。

文字通りに飛び入り参戦してきた赤い戦士と肩を並べる、マゼンタカラーの戦士の二

人と相対した

不気味なドーパントは、腕を回しながら鞭のように床に叩きつけて先程と同様の奇声を発した。

『イケメン、デ、ツヨイ……キラ、イジヤナイ、ワア
イワ!!』
キライジヤナ

会話の為の問いかけというより、言語の羅列といった方が当てはまるような意味不明な台詞を

どこにあるか分からない口から発しつつ、全身をぶるぶると揺すりながら異形が距離を詰める。

これまでとは毛色が違うタイプの敵に怯えるクウガを横目に、デイケイドは腰のライドブツカーを

ガンモードへと変形させ、不規則に動く標的に向けて正確無比な牽制射撃を連続で放つ。

ところが、デイケイドの射撃の全てが『ヌル〜ヌル〜♪』という無性に神経を逆撫でする擬音と

ともに躲され、それに動揺した隙に接近を許してしまい、高速でしなる金の両腕に三度打たれた。

見た目以上の威力があるのか、吹き飛ばされたデイケイドは展望台の上を無様に転がっていく。

その拍子に手から離れ落ちたブッカーガンを持ち上げたクウガは、すぐさま霊石アマダムの力を

解放し、ペガサスへと超変身。緑のクウガに与えられた超感覚を研ぎ澄ませ、異形を撃ち抜く。

クウガが姿を変えたことで手にしたブッカーガンも専用のペガサスポウガンへと変形しており、

凝縮した空気に封印の力を上乗せされた必中の魔弾は、変わらずドーパントの胸部に直撃した。

『アア……ヤッタワネエエ!!』

あらゆる不浄を封じ込めるクウガの弾丸を受けたドーパントは、軟体動物を彷彿とさせるような

ぐにやりとした動きで体勢を立て直し、狙いをデイケイドから武器を持つクウガへと移す。

『トツゲキイイ〜!!』

人型の腕が無い為に上半身を丸ごと揺さぶるようなフォームで、何故かまともな人型の脚部は

少女漫画の女の子が似合いそうな内股の走り方になって、開いたクウガとの距離を詰める。

しかし敵の接近を許すはずもないクウガは、再び超感覚を発揮し敵の動きを先読みした射撃で

黄金色に輝くドーパントの肉体に、新たな銃創を幾つも刻み付けた。

緑のクウガ、射撃に特化したペガサスへと変わったクウガがドーパントの気を引いている間に

痛みをこらえて立ち上がったデイケイドは、もたもたしてられない眩き、カードを手に取る。

変身した時と同じシークエンスでカードをバックルに装填、機構がそれを読み取り反

映させた。

【KAMEN RIDE KABUTO】

色褪せた返り血の如きマゼンタの装甲は、カブトムシを連想させる強固な紅蓮の装甲へ換装され、

淡く輝くライトグリーンの双眸も、青い複眼状のものへ変わり、蒼天を貫く紅い角が直立する。

ディケイドのその姿は、神速の世界で唯一人、天の道を往く最高速の戦士カブトへ変貌を遂げた。

ドーパントの攻撃を受けた瞬間、ライドブツカーから抜き取っていたのだろうか。彼の手には

カブトの紋章が刻まれたカードがもう一枚収まっており、躊躇うことなくそれを追加で使用する。

【ATTACK RIDE CLOCK UP】

使用したのは「アタックライド・クロックアップ」、世界に流れる時間そのものを置き去りに、

時の流れのさらに先にある時間軸へと押し上げるその力は、カプト以外の全てが活動を停止する。

正確に言えば、止まっているのと変わらないほどの遅さになっている、と言うべきなのだが、

そんな事をわざわざ相手に教える男ではない。神速を超える速さで、異形を一方的に打ちのめす。

滞留する世界の中であっても、カプト以外の存在は通常的时间軸で戦っている。数百万の一という

途方もない遅さで放たれる援護射撃を眺めるカプトは、クウガの持つ弩銃をあつさり取り上げた。

「返せ、俺のだ」

言葉すら伝わらない速度の世界で悪態をついたカプトは、手にした瞬間に元の形に戻ったブツカー

ガンをライドブツカーへ変え、新たにカードを取り出し、今度はブツカーソードへ変形させる。

砲塔が斜め上を向き、そこへ沿うように刀身が伸びたブツカーソードを左手に持ち直してから、

モードチェンジする際に抜き取っていたカードをバックルへ押し込み、その力を発現させた。

【ATTACK RIDE SLASH】

新たに発動させたカードの効果により、刀身が淡く発光したかに見えた次の瞬間。スラリと伸びた

刀身がまばらにぼやけだし、やがてそれらは薄いマゼンタに輝く分裂した無数の刀身と化する。

先程使ったクロックアップの効果もうすぐ切れることを体感時間で計算していたカブトは、

彼にとつては残り僅かの時間内で右手に持ち替えた剣を振るい、無尽蔵の斬撃を刻み込んだ。

【CLOCK OVER】

神速の時間が現実時間に追いつかれたアナウンスがその場の全員に行き届いたと鼓膜が知覚した

その時、カブトとは違い現実時間にいたままの黄金色の異形は金切り声を上げて無様に横転する。

ペガサスフォームの固有能力である超感覚で何が起きたかを理解できたクウガは、自分たち二人を

苦しめていた異形の優位性そのものと言える両腕が細切れにされているのを見て、確信に至った。

「いきなりボウガンが無くなったと思ったら敵は倒れてるし、メチャクチャだよホント」

「勝手に人の物盗っておいでよく言うぜ。助けてやったんだ、感謝くらいしたらどうだ？」

「俺のセリフだよそれ！」

形勢が一気に逆転したのを肌で感じたためか、風都があと数時間で壊滅してしまうか否かの

瀬戸際にもかかわらず、今までの旅の中で交してきたのと同じ軽口を叩き合う赤と緑の戦士二人。

とはいえ、これまで幾度も修羅場や死闘を生き抜いてきた猛者でもある二人は、黄金色に輝く

ドーパントが完全に倒れてはいない事に勘付いていた。戦士たちの複眼状の双眸が一箇所へ向く。

視線の先には両腕を細切れに切断されてもなお転げ回り、奇怪な片言を発する異形の姿が。

『キレチャッタア~~~~ン!!』

地団太を踏みながら、人間であれば肘がある辺りから先が無くなっている両腕をまじまじと見て

右往左往しているドーパントを見やり、真面目に戦うのが馬鹿らしく思えてきた戦士

たち。

念の為にいつでも対応できるよう、奇声を発する異形を視界の片隅に置きながら、カブトへと

ライドしたデイケイドは正面からクウガへと向き直り、別れたはずの彼がここにいる理由を問う。

「だいたいお前、なんで来たんだよ。ファイリッブと一緒に光線兵器のあるタワーの中
枢に向かう

手筈だっただろうが。まさかそのファイリッブに『邪魔だから来るな』とか言われた
か?」

「うるさいな! それに、俺が駆け付けなかったら負けてただろ、士?」

自分が敵に攫われる前、風都タワーの最奥部に鎮座する巨大光線兵器の起動を阻止す
ることを

第一目標として動き出したことを再確認したつもりだったが、自信満々なクウガの返
答に黙する。

クウガの答えた通り、いくら拉致染みた奇襲とはいえ、それを回避なり迎撃なりを出

来ずにただ

捕らえられた事実が、デイケイドから反論の余地を奪う。結果、子供じみた言い訳が口をついた。

「お前の力なんかなくても、別に」

普段の傲岸不遜振りは鳴りを潜めた言い方に気付いたクウガは、素直になれない不器用な奴め、

と内心で苦笑を浮かべつつも歩み寄り、頼れる相棒の普段とは違う紅蓮色の肩装甲を軽く小突く。

「ほらほら、とにかく今は言い争ってる場合じゃないだろ」

「お前に言われなくても分かってる」

「なあ、こういう時こそ助け合うべきだろ？ 仮面ライダーは」

「……………」

気心の知れた仲間の言葉に、その言葉が真に【デイケイド】という存在がこれまで巡っ

てきた

あらゆる世界から認められなかった事実を無視し、己自身が仲間である信頼の累積を見た。

どんな世界に辿り着いても、「門矢 士」は「世界の破壊者」でしかない現実、存在意義を全て

飲み込んだうえでユウスケの言葉に、珍しく士は何も言い返せずに黙り込んでしまった。

今まで見たことのない相方の反応に戸惑っているクウガの視界の端で、身悶えていた黄金色の

異形がヌルリと立ち上がり、いつの間にか再生していた両腕を振り回し、叫び声を上げた。

『オツシャルトオリダワア~~~~ツ!!』

ひと際大きく体を揺すった後、勢いをつけて（何故か両腕を振り回したまま）かなりの速度で

突貫してくるその姿は、獲物を射程に収めた狩人か。あるいはハイテンションな

両性類ニューカマーか。

一目見て分かる人間離れた上半身と人間に沿った下半身。アンバランスな構造のそれらは今、

少女漫画によくある「トーストを啜えて走る女子高生」と不気味なまでにマッチングしている。

場面に相応しくない奇妙な片言、触手染みた両腕という出で立ち、掴み所が一切ない霧囲気。

これら全てが目前の異形と相まって一層の不気味さを醸し出している。ともすれば狂気寸前だ。

そんな相手であっても冷静さを失わない戦士たちは、斬り飛ばしたはずの両腕が完璧に再生

されているのを見て、事前にフィリップから聞いていた特徴のメモリと一致すると気付いた。

「煌びやかなボディに伸縮自在の肉体、加えて再生能力となると」

「フィリップ君が言ってた、〈幻想ルナの記憶メモリ〉のドーパントじゃないか？」

「ルナ・ドーパントってことか。話の通りだとすると厄介だ、とつとと片付けるぞ」

過去の人類が抱いた神秘への情景が抽出されたメモリであるルナの再生能力は、どちらかと

言うところ再生ではなく増殖や分裂の方が正しいのだが、腕が元に戻る現象には違いない。

地球が記録している記憶から生み出される力の幅広さを知らないデイケイドたちに、フィリップや翔太郎は敵の大まかなメモリの能力を伝えていた。

眼前にいるルナ・ドーパントは触手状の腕が変幻自在に動くだけではなく、神秘の具現化と

して下級のドーパント（ショッカー戦闘員のような量産型）である〈仮面舞踏会の記憶〉を

無数に召喚する力も有する。例えば一体一体が非力でも、数を揃えられては足止めを食らう。

時間をかけるほどに不利になる今の状況下では、その能力を使われることは避けたかった。

迫りくる敵が如何に常識離れた走法で来ようとも、その程度で冷静さを失うような脆い

精神構造はしていない。多少の辟易があることは否定しようにもしきれないのだが。

『ブツツトビイイイ〜ツツ!!』

多少、いや、かなり堪えている二人は警戒しながらもやりきれない心情を溜息と共に溢し、

カブトへのライドを解除したデイケイドと赤いマイテイへと戻ったクウガは呼吸を合わせる。

デイケイドはライドブツカーから一枚の黄金に輝くカードを取り出してバツクルへ装填、

クウガは腰を落として両手を大きく開き、そこから右足を後ろへ下げつつ力を収束させた。

【FINAL ATTACK RIDE DE, DE, DE, DECADE】

「やあああああッ!!」

「どおおりやあああッ!!」

ドタドタと内股気味に突貫してくる相手との間合いを完璧に捉え、二人の戦士は同時に跳躍。

九つの次元の壁を潜り抜けるデイケイドと、空中で一回転を加えて蹴撃を放つクウガの双方の

必殺たるライダーキックは、目標違わずルナ・ドーパントの胸部中央へ吸い寄せられていった。

瞬間的な多重次元の跳躍による爆発的な運動エネルギーと、悪しき存在を封殺せしめる超古代の

エネルギーが混ざり合い、ルナの体内で圧縮と膨張を繰り返したソレが臨界点を突破する。

波のように押し寄せる苦痛の中、一瞬の膨張の後に残ったのは閃光と爆音、そして断末魔。

『アアアア………ス・テ・キイイイイイイ〜ツ!!』

いやに艶やかな悲鳴が残響と化し、〈幻想の記憶〉^{ルナメモリ}は爆炎の中へと消えていった。

デイケイドとクウガの二人がルナ・ドーパントを撃破する直前にまで、時は遡る。

士がルナ・ドーパントに連れ去られ、その隙を狙ってきたトリガー・ドーパントにクウガが

果敢に立ち向かっていった数分後。フィリップは独りで風都タワーを迷う事なく走破していった。

今回起きた大規模事件の全てが、一年半前にこの街を襲った悪夢をなぞる様にして何者かが計画

したものであると結論付けていたフィリップ。今この場にはない相棒の分も、彼はひた走る。

当時の痛々しい面影も随所に残しているタワー内部を疾風の如く駆け抜けたフィリップは、

ついに放送された映像と一致する場所、つまりタワー最奥部にある光線兵器の部屋へ辿り着いた。

かつてのテロ事件の際、フィリップはテロの実行犯の首魁だった男、大道克己の母親と自分の

失われた記憶の中の母を重ねてしまい、騙された挙句敵の手中に収まるという大失態

を犯した。

結果、データ人間というべき彼の演算能力を光線兵器に流用しようとしていた大道克己の思惑を

望まない形で叶えそうになった。あの時は自暴自棄になった自分を相棒が助けに来てくれたが、

今回はその逆の構造になっている。街を守る仮面の英雄としての矜持を胸に、部屋の扉を開いた。

「やはりここにいたか、ラスト」

開かれた扉の先には、風都の住人全員に被害を及ぼす光線兵器『エクストリームビツカー』の

砲台にあたるパーツや機器類があり、それを背にして淡緑の双眸と紫紺の靄纏う戦士が仁王立つ。

この街に26もの運命をばら撒き混沌を運んだ白磁の戦士、仮面ライダーエターナルを崇拜する男。

Lの一字を斜めに傾かせた不揃いのアンテナが目立つ、仮面ライダーの名を騙る宵

闇の狂信者。

『来たか、過去の仮面ライダー。偽りの英雄、屑共を庇護する悪辣な偽善者めが』

現れたフィリップに向かって、己が内に湧く憎しみを隠そうともせず口にするラスト。

その口ぶりもさることながら、装甲が軋むほど握りしめられた拳の震えが、心境を物語っている。

怒りに猛るラストに対して、フィリップは臆する事なく真正面から向かい合い、言葉を返した。

「君が何故僕らを憎んでいるのか。そして何故、かつてこの風都を震撼させた事件を準備する

ような犯行に及んだのか。此処に至るまでの間、どれだけ考えても答えを出せなかった」

『はっ。地球の本棚を持つ貴様ですら分からんか、どんな気分だ？』

人差し指を立て、いかにも考察している風体を見せるフィリップに、ラストはデータ人間として

フィリップが体内に有する地球のデータベースの存在を引き合いに出すが、努めて無視される。

代わりに向けられたやや刺々しい視線を受け、ラストは不機嫌そうに鼻を鳴らし声を荒げた。

『何故か、何故かだど？ それは貴様らが、真の英雄を殺したからだ!! あの人を、本当の英雄を

貴様らと醜く薄汚れたこの街そのものが、殺したからだよ!! 誰も彼もお前ら偽者を崇めてな!!』

「……君の語る『真の英雄』が、大道克己であるなら。それは正しくもあり、間違いでもある」

『……なんだと?』

自らが語る言葉を薪にして燃え盛る炎の如き苛烈さで攻め立てるラストだが、フィリップは逆に

そよ風を受けて靡く木のように柔く、冷静過ぎる応対と肯定でも否定でもない言動に首を傾げた。

憤怒の中に突如放り込まれた一瞬の困惑を逃さず、フィリップは大道克己を狂信というレベルで

崇拜する眼前のラストに、今は亡きその男が何を成し、何故闘ったのかを重々しく語り出す。

かつてガイアメモリをばら撒いていた組織『ミュージアム』への資金援助を行っていた、とある

秘密結社があった。その名は『財団X』といい、過去にそこから派遣されたエージェントの内の

幾人かと仮面ライダーたちは死闘を繰り広げたこともあったが、それは別の話。

財団Xは言わば死の商人。世界全土に手を伸ばし、あらゆる技術を軍事兵器に転用させることで

戦争の需要と供給を陰からコントロールしていた。そんな財団Xが過去に資金提供を打ち切つて

兵器運用を凍結させた『NEVER』と同様、超能力を人為的に生み出して作り上げた超人工作兵士

こと『クオークス』というプロジェクトがあった。

サイコキネシス、パiroキネシス、サイコメトリー
念動力、発火能力、思念読視などの超能力を代表する様々な力を人工的に植え付けられた多くの

人間の中の一人の少女が、テロ事件の傷跡深い一年前の風都に現れ、探偵コンビに真相を語った。

少女の名はミーナ。大道克己が風都を襲う悪魔へと成り果てる前に、命を救った孤独な少女。

世界中から集められ、実験台として肉体や尊厳を弄ばれていたクオークスの少女ミーナと克己の

出会いは、戦場のド真ん中である。共に財団Xからの資金提供を打ち切られたモノ同士での闘いは

不毛と断じた克己だったが、彼に救われて今日まで共にいた個性派揃いのNEVERたちにとって、

彼がクオークスの実験に憤っていることなどお見通しであった。

彼女らクオークスを日の当たる世界へ解放する為、大道克己とその仲間たちはクオークスを収容

している『箱庭』^{ビレッジ}と呼ばれる施設へ潜入するも、新入りのレイカ共々捕らわれる。

辛くも単身脱出した克己は、レイカを研究施設へ置き去りにしてきたこと、そして命じられるまま

関係ない戦場で駒にされるクオークスの諦観に憤り、『過去が消えるなら明日が欲しい』と一喝。

（死体に細胞活性酵素を投与して疑似的に蘇るNEVERは、徐々に細胞が劣化していく影響で記憶の

一部が少しずつ失われていく。克己は、過去^{おもいで}の忘却を恐れてもなお明日^{みらい}を望んでいた）

克己の慟哭に近い言葉がクオークスの胸を打ち、『箱庭』からの解放を実現すべく蜂起を決行。

その際、『箱庭』の管理者として君臨していた財団のエージェント^{アイズ・メモリ}〈眼球の記憶〉のドーパントと

彼の様子を見に来ていた別のエージェントと接触。克己は持ち込まれていた新型ガ

イアメモリと

ドライバーを奪取し、驚異の適合率90パーセント超えを果たして「仮面ライダーエターナル」に

覚醒した。仲間たちにクオークス脱出の援護を任せ、克己は英雄として人々を守り施設を破壊。

ところが、助け出したはずのクオークスがアイズ・ドーパントによって皆殺しにされてしまう。

管理者であるエージェントは、反乱や脱走を見越してクオークスの脳内にチップを埋め込んで

いたようで、『箱庭』から一定距離まで離れるとチップのプログラムが脳回路を焼き切ったのだ。

次々倒れていくクオークスの苦痛に歪む表情と助けを呼ぶ声に、克己は自身の行動が救いではなく

彼らの死期を早めただけの行為であり、自分は彼らを死に誘っただけの『死神』だったと涙する。

手を伸ばし、彼の名を呼び瞳を閉ざしたミーナを抱き、絶望に沈んだ克己は涙を拭き嘲笑った。

「負けたよドクター。俺としたことが一瞬忘れちまつてたぜ。人は皆、悪魔だということだ!!」

守ろうとした人々を守れず、己の言葉に従い明日を求めた彼らの明日を奪ったという事実が、

NEVERと化したことで人間性を失いかけていた克己の、欠片ほどの優しさを奪い去ってしまう。

「お前の『箱庭』より面白い所なんぞ、もう本当の地獄しかあるまい。先に逝って遊んでこい!!!」

彼をわずかながらに英雄たらしめていた人の性は消え去り、適合率が100パーセントへ到達。

完全適合者となった彼はアイズ・ドーパントに止めを刺し、事の発端であるガイアメモリを、

それらを人に浸透させている風都という街そのものを憎み、報復としてのテロ行為を決意した。

彼らが起こしたテロ事件は、背負った憎しみだけが増長し続けた事で、『風都を死者の生きる

地獄の楽園に変える』などという歪み切った救済思想を生み出してしまった結果だっ

たのだ。

「……………これが、奇跡的に一命を取り留めたミーナが僕らに語ってくれた、真相だ」

一つひとつの出来事を丁寧に紐解いていったフィリップの話を、無言のまま聞いてたラスト。

きつく握りしめられていた拳は既に緩み、余程衝撃的だったのか、左手で顔を押しさえよろめく。

『財団Xが……………!! 奴等、そんな事、一言も……………』

狼狽する様子を隠す事すら考え付かないほど思考が乱れているラストは、フィリップを前に

業が していることを忘れ、つい口を滑らせてしまう。それを聞き逃すような人間に探偵家

務まるはずがなく、しつかり聞いていたフィリップは小さく「キーワードは揃った」と

眩く。

そして相手の混乱が治まるまで待つような隙を作る相棒とは違い、堅実な彼は畳みかけた。

「彼も、大道克己もまた、誰かを守ろうと戦った一人の仮面ライダーだったんだ。

やり方を間違えてしまっただけで、心を持たない生まれながらの悪魔なんかじゃなかった！

この街に涙を流させ、仮面ライダーの名を穢す悪がいる限り、大道克己の生き様を貶す君が

いる限り、僕たちは戦う！
それが風都の全てを愛し守ろうとした、鳴海荘吉と左翔太郎の！」

普段の非力で儂げな雰囲気を漂わせる彼からは想像もつかないほどの覇気に満ち充ちた言葉を

宣言代わりに叩き付ける。懐から倒れた相棒から拝借してきた
ストドライバーを

腰に押し当てベルトにして装着、さらに相棒の手に握られていた二本のメモリの内、

口

自分と最も

適合率の高い若草色のメモリを右手に持ち、彼の挙動を見て我に返ったラストに向け咆哮した。

「そして僕の

仮面ライダーの流儀だ!!」

【CYCLONE】

彼は^{サイクロンメモリ}疾風の記憶の起動トリガーを押し込み、そのまま右側片方のスロットしか存在しない

専用のドライバーへと装填し、機構を動かして地球が内包する疾風の記憶を余さずその身に宿す。

あらゆる束縛をもともせず流れゆく、一陣の風の如きライトグリーンが全身を包み込み、

突風ともそよ風とも取れる独特なメロディの後、室内でありながら風が吹きマフラーが棚引く。

普段は二人で一人の仮面の英雄だが、ロストドライバーを用いることで単独での変身が可能と

なり、メモリが単一な分、相棒への負荷を気にせず全力全開でメモリの力を引き出せるのだ。

『な、なんだその姿は……サイクロンメモリでの単独変身だ?!』

突如として広いとは言いがたい室内に吹き込んだ風に驚くラストだが、若草色の外装データの

破片と共に風が舞い上がった先に立つ全身緑一色の戦士の姿に、驚きを超えた驚愕を見せる。

彼が収集したデータにあるWは、六本のメモリで九つの形態の基本フォームに加えて更に、

フアングとその上をいく究極のWを体現するエクストリームのみ。唯一、左翔太郎が単独で

変身する姿は「仮面ライダージョーカー」であり、厳密にはWと呼べる存在でないと思われる。

三度目となるラストの狼狽する姿を真紅の双眸に収めた新緑の戦士は、粛々と言葉を紡ぐ。

「此処へ来るまでに傷つき倒れた相棒に代わって、僕が君の悪意を止めてみせる」

左手を口元へ運び、拳銃を模したように人差し指と親指だけを立てた右手をゆつくり持ち上げる。

視線と平行になる位置へ到達した人差し指が指し示すのは、染み着いた怨嗟の如き紫紺の戦士。

そこから一度右手を少しだけ下げ、間を置いてからスナップを聞かせ、角度を変えて上げ直す。

これまで幾度となく共に見て、共に繰り返してきた、見様見真似の男の信条ハードボイルドを貫いた。

「今こそ名乗ろう。僕は、風都の涙を拭うハンカチ
サイクロン！」
—— 仮面ライダー

真紅の眼光が真っ直ぐにラストを射抜き、彼はこの街を泣かせる犯罪者に最終通告を言い渡す。

「さあ、お前の罪を数えろ!!」